

逆行したナルトの物語 完結

アーク1

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

完結しました！

七代目火影として木の葉の為に頑張っていたナルト。

しかし、その生涯は唐突に終わりを告げる。

ナルトの魂が燃え尽きるその刹那、六道仙人の協力により九喇嘛はナルトの魂を過去へと送る。

pixivに投稿していた物を、少し修正したものです。

ブクマ2000突破の記念にこっちの方にも投稿をしてみようかと思えます。

目次

『プロローグ編』ナルトの最後	1
目覚め	6
闇の中を歩く	10
告白 照らされた道	14
三代目火影との会談	20
相談	26
アカデミー卒業	31
第七班	36
サバイバル演習 前編	42
サバイバル演習 後編	46
誓い	52
『波の国編』波の国へ	55
襲撃	59
対決！鬼人再不斬	65
白との邂逅	71
ナルトとイナリ	77
密談	82
戦闘開始	88
ナルト参戦	93
決着	99
帰還	107
『中忍試験編』警告	114
不協和音	120
砂漠の我愛羅	124

計画	130
行動開始	136
中忍試験… 始まる	142
第一の試験	149
第二の試験開始	154
ナルトVS大蛇丸	161
独白	167
サスケとサクラの戦い	171
第二の試験突破	180
第三の試験 予選開始	186
ナルトVSキバ	191
ヒナタVSネジ	198
第三の試験 予選終了	206
暗躍	211
『木の葉崩し編』自来也	218
本選開始	226
ナルトVSネジ 前編	232
ナルトVSネジ 後編	237
開幕	243
乱入	248
穢土転生	255
ナルトとミナト 前編	260
ナルトとミナト 後編	266
六道仙人再び…	275
ヒナタ	280

それぞれの戦い	286
変わる歴史……	295
ヒナタVSテマリ	302
人柱力VS人柱力	307
終結	314
『新たな歴史編』式典	320
宣言	325
緊急会議	331
父と娘と	335
それぞれの決意	342
自来也からの頼み	348
イタチとサスケ	354
うちはイタチ	360
人柱力会議	368
綱手	374
賭け	379
五代目火影誕生	383
木の葉に戻った綱手姫	389
日向の屋敷にて……	396
暴走	403
強さとは……	408
さよなら木の葉 前編	415
さよなら木の葉 後編 (H31.4.5加筆修正)	420
合流	428
急展 (H31.4.5加筆修正)	433

暁のアジトへ…	438
救出作戦！	442
ナルト一行VS暁	447
暁壊滅	453
木の葉の現状	459
ナルトの元へ	464
補佐就任	472
予期せぬ再会	479
忍連合誕生	486
兄弟	493
予兆	501
クーデター	506
束の間の平穏	515
開戦	521
アイツは俺が…	527
彼女からのメッセージ	534
自来也VS大蛇丸	539
ダンゾウの切り札	545
黒ゼツの策謀	551
破滅の魔獣	558
ナルトを止めろ！ 前編	566
ナルトを止めろ！ 後編	570
魂の融合	577
二人のヒナタ	582
想いを力に…	589

世界を越える絆

594

未来へ

604

逆行したナルトの物語 完

610

『プロローグ編』ナルトの最後

ゴオオオオオオ

目の前の建物が炎に包まれる様を、ナルトは呆然と見つめていた。その日、ナルトが一日の激務を終えて帰宅した時…。そこで目にしたのは最愛の妻と娘が床で倒れている姿だった。

「ヒナター・ヒマワリ…。一体どうしたんだってばよ…。」

ナルトは急いで二人の側に駆け寄ると、二人の安否を確認する。

ヒマワリは既に息を引き取っていた。

「ヒマワリ…。クソツ、誰がこんなことを…。」

「ナルト…。く…。ん…。」

ナルトの声に、意識を戻したのか、ヒナタが息も絶え絶えに、ナルトを呼ぶ。

「ヒナタ。良かった。一体何があったんだってばよ。」

ヒナタは、返事をする力も無い様子で、目線を食卓の方に向けた。そこには、食べ掛けの夕飯の残りが残り、毒を盛られたのだと気付いた。

「ヒナタ、待っててくれ。今、サクラちゃんを呼んで来るってばよ。」

ナルトが立ち上がりかけたその瞬間…

ドオオオオオオオン

近くから、耳をつんざく大きな音がしたと思った瞬間、ナルトはとつもない衝撃を受けて吹き飛ばされた。

一瞬、意識を飛ばしたナルト。

そして、目を覚ましナルトが目にした光景は、自分の家が燃え、朽ちていく所だった。

「ヒナタ…。ヒナタはどこだってばよ…。」

毒で動けなかったヒナタ。まだ息をしていたのだ。早く探さないと死んでしまう。

ナルトが必死に周囲を探そうとした時、自身の背中から腹部にかけて衝撃を受けた。

「えっ?」

見ると、自分の腹から鋭利な刃物が飛び出していた。

後ろから刺されたのか…。ナルトは他人事のように考える。

「ちっ…。あの爆発でもまだ生きてやがったのか。化け狐め。九尾の回復力ってやつか。」

「ああ…。だが、それもここまでだ。」

男たちの会話から、この一連の出来事の犯人だと確信したナルト。

「お前らか…。これを…。やったのは…。」

「ああ。そうとも。」

男の一人は、平然と答える。

「なんで…。こんな事を…。したんだってばよ。」

ナルトは、いつもより痛みを強く感じる事を自覚しながら、なんとか男たちに理由を聞く。

「そんなの決まっているだろ。復讐だ。俺たちの家族は九尾に殺された。それでも俺たちは、死んでいった家族の為に必死に生きてきた。だが、その九尾のバケモノが火影になり、俺たちの上に立った。一体それはなんの冗談だ…。こんなバカげた話があるか！」

「俺たちは、お前に復讐する権利があるのさ。」

「そのために…。そのためにヒナタや…。ヒマワリを…。巻き込んだってのかよ…。」

「そうとも。これでわかったろ。家族を殺される痛みが…。憎しみを終わらせる？ふぎけるな！…。こんな理不尽な世界で生きて、人を憎む気持ちまで奪われてたまるか。」

「……………」

ナルトは何も言えなかった。

自分は、憎しみの連鎖を断ちたかった。

長門と約束した世界を作るため、歯をくいしばって自分の憎しみを昇華した。

少しでも里の人たちが笑顔でいられるようにと、ようやく手に入れた自分の家族との時間を犠牲にして頑張ってきたつもりだ。

だが、ナルトの思いは一番理解してほしい木の葉の里の人たちに理解されなかった。

家族を失った悲しみ、里の人々に理解されなかった哀しみ…ナルトは、憎しみは感じなかった。

ただ、大きな喪失感だけがそこにあった。

「この刃物には、尾獣の力を遮断する特殊な術がかけてある。もうすぐお前は死ぬ。」

そうか… どうりで、いつもより痛いわけだ。

どこか他人事のようにナルトはその言葉を聞きながら、全身の力が抜けたナルトは、倒れた。

「化け狐め。ようやく倒れたか。」

「おい、行くぞ。」

去り際に、ナルトを一瞥し男たちはその場を離れた。

「ヒナタ… ヒマワリ… 俺のせいで… すまねえ…。」

ナルトは、独り言のように呟いた。

そして…

「ボルト。お前だけでも幸せになってくれればよ… 不甲斐ない父ちゃん… ゴメンな。」

任務のため、この場にいないが為に助かった息子を思い、その言葉を最後にナルトは、息を引き取った。

… ト… ルト… ナルト…

その時、

九喇嘛は必死にナルトに声をかけていた。

ナルトが刃物で刺された瞬間、ナルトとの間にあったチャクラの繋がりが途絶えた。

いくら呼び掛けても反応はない。

尾獣の力を遮断する術によるものだった。

今の九喇嘛には、ナルトが死に近づいていく所を見ている事しか出来なかった。

犯人の言葉を聞いた時には、自分が原因だと知って、例えば操られていたとしても… 否… 操られたからこそ、そんな不甲斐ない自分を責めた。

そして…

ナルトは息を引き取った。

「ナルト… ワシは… ワシはこんな結末認めんぞ…。こんな…
こんな世界… 絶対に認めん。」

「待て、九喇嘛。」

九喇嘛が憎悪に飲まれる寸前、九喇嘛に声をかけた人物がいた。

「じじい…」

それは、ナルトに六道の力を授けた六道仙人。ナルトの精神世界に残されたその残留思念だった。

「ナルトを助けたければ、ワシの話を聞け。ナルトは今、生命活動を停止した。本来なら輪廻天生の術を使えば甦らせることができるのじゃが…。ここからナルトの身体に干渉する事ができん。おそらく、あの刃物に仕掛けられた術のせいじゃろう。」

「能書きはいい。早く方法を教えろ。じじい。」

「良いか？… ナルトの身体エネルギーはゼロとなったが、精神エネルギーはまだ残っており。だから、ワシがナルトの思念を呼び寄せさせる。お前はナルトの思念を乗せたチャクラとお前自身に時渡りの術を使い、過去に戻るのじゃ。」

「そう言うことか。」

九喇嘛は、六道仙人の意図を理解した。

「これから、時渡りの術の印を教える。」

「ああ。」

「ナルトはワシの後継者じゃからな。ワシとて、こんな結末は望んでおらん。」

六道仙人は笑いながら九喇嘛に答えた。

「ただし、本来時渡りの術は肉体ごと転移する術じゃ。チャクラのみを過去に送った例は無い。できればナルトが襲撃される前に戻したい所だが、調整ができません。どれくらい過去に戻るかはワシにも検討がつかん。」

「ああ。ワシはナルトを助けられればそれで良い。ナルトを殺したこ

の世界にも興味はない。」

「そうか… 九喇嘛よ。ナルトを頼んだぞ？」

「じじい。ありがとよ。」

「達者でな。」

そうして、ナルトと九喇嘛は時を渡るのであった。

目覚め

…ト…ルト…ナルト…

「いい加減起きろ。ナルト。授業中だぞ。」

「はっ!？」

イルカの大声に、ナルトは目を覚ました。

「イ…ル…カ…先生…」

ナルトは目の前のイルカを見て驚愕する。

(俺は確か… 死んだはず。なんで生きてるんだってばよ… それにイルカ先生がすげえ若くなってる。一体何がどうなってるんだってばよ…)

ナルトは状況を確認しようと辺りを見回す。

(ここは… 忍者アカデミー? それに… サスケやサクラちゃん… シカマル… 皆子供の姿だってばよ… まさか… 幻術か? それとも時を…)

「!？」

(ヒナタ…)

ヒナタを見つけたナルトは、自分が見たヒナタの最後の姿を思い出した。毒を受けて動けないヒナタ… そして…

「クソツ… 一体何が、どうなってるんだってばよ…」

思わずナルトは叫んでいた。

「ナルト? どうした…」

そんなナルトの様子にイルカは、心配して声をかけた。

「…:…:… いや… なんでも無いってばよ…」

一瞬口をつぐんだナルト… だが直ぐに何でもないと言って笑った。

「そうか… だったら、居眠りの罰として廊下に立っただけでいいからか。」

「ええ… そりゃねえってばよ…」

「「「アハハハハハハ」」」

いつもと違うナルトの様子に、訝しんでいた生徒たちだったが、二

人の会話が普段通りになると、落ち着きを取り戻し、いつものようにナルトの様子を笑うのだった。

たった一人を除いて…

(…ナルト君?)

一方、廊下に出たナルトは幻術返しを試していた。

しかしその効果は無く、現状を知っている可能性が一番高いと思われる自身の相棒の九喇嘛に話を聞くため、自らの精神世界に意識を向けていた。

「ようやく来たかナルト。」

「九喇嘛。これは一体どうなってるんだってばよ? って言うかなんでお前、また封印されてるんだ?」

そこには、巨大な檻に封じられた九喇嘛がいた。

「お前も薄々は気づいてるんだろ?」

「… やっぱり… ここは過去なんだな?」

九喇嘛の言葉に、ナルトは現状を理解した。

「詳しい話は後でしてやる。とりあえず、ワシをここから出してくれないから出せねえってばよ。」

「良いからやってみろ。」
ナルトは九喇嘛の指示に従い、封印の解除を試みる。

すると…

九喇嘛を封じていた檻の鍵が開いていき、やがて扉が開いた。

「どう言うことだってばよ…」

「まあ、落ち着け。ちゃんと説明してやる。」

九喇嘛はそう言うと言話始めた。

「まず、お前も察してるだろうが、ここは過去の世界だ。あの時、お前の生命活動は停止した。その時だ、お前の精神世界に六道のじじいの残留思念が出てきやがった… それから…」

九喇嘛に経緯を聞いたナルトは、九喇嘛に礼を告げる。

「そうか…六道のじいちゃんが…それに九喇嘛も…俺の為に…サンキューな。」

「勘違いするんじゃないよ。ワシがあんな結末に納得できなかっただけだ。お前の為じゃねえよ。」

相変わらず素直じゃない九喇嘛の返答に苦笑するナルト。

「それから、封印の鍵の方だがな、大したことはねえ。鍵が渡された時、お前のチャクラに記憶されていたのさ。そもそも封印術自体チャクラによる封印なんだ。その封印を解く鍵とてチャクラによって形作られておる。今のお前は未来のお前のチャクラと、この時代のお前が融合した状態なんだ。当然鍵も持っているって事だな。」

「よくわかんねえけど、今の俺は八卦封印の鍵を持つってことなんだな?」

「…………… まあ… そうだな… (ワシの説明が役に立ってねえな…) それと、未来のお前のチャクラが追加されてる分、お前のチャクラ量も増えとるぞ?」

「そうなのか?」

「お前の方は精神エネルギーのみだがな。ワシに至っては、この時代の半身分が加わって単純に1.5倍に増えてるな。」

「そりゃあ凄えな。なんにしても強さは必要だからな。そう言えば、結局今は正確にはいつ頃なんだってばよ?」

「言っただろ?この時代のお前と融合していると。落ち着いて自分で考えてみる?」

「…………… どうやら、あと一月で卒業試験になるみたいだつてばよ。つてことは、俺がミズキに唆されて禁術の巻物を盗む事件が起る前だな。」

「話は終わりだ。それでナルト… お前はこれからどうする?」

九喇嘛は説明を終えると、真剣な表情をしてナルトにこれからの事を聞いた。

「あいつらに復讐するってんなら付き合うぞ?」

「… そんな気はねえつてばよ…」

「ふんっ… 相変わらずお人好しなヤツだ。だったらどうする?また

火影を目指すのか？」

「火影…か…」

ナルトは九喇嘛の言葉を受けて考える。

「いや…火影を目指さねえ。今になって思うんだ。俺が火影を目指したのは、ただ皆に認められたかったからだっただって…その為の手段として火影を目指した。」

「その過程で里の皆に認められて、ずっと欲しかった家族も得られなかった…火影になってからは、家族との時間も満足に取れなかった…里の為に頑張ってきたけど…結局、里の人間に裏切られて…俺は…火影になるべきじゃなかったんだってばよ。」

「じゃあ、どうするんだ？復讐はしねえ。火影にもならねえ。だったらお前はこれから何をするんだ？」

「…少し…考えさせてくれってばよ…なにしろ、俺ってば、火影になるために頑張ってきて、火影になってからは里の為に頑張ってきた。それ以外の生き方を知らないんだってばよ…」

「ふんっ。だったら一週間時間をやる。それで決める。」

「ああ。わかったってばよ。」

九喇嘛と約束したナルトは、精神世界から出て、現実へと戻るのがあった。

闇の中を歩く

現実世界へと意識を向けたナルト。

(俺は… 一体これから何を目指したら良いんだってばよ…)
九喇嘛に言われた事を考えるも、まるで答えは出なかった。
そうこうしている内に授業が終わったようで、教室からイルカが出てきた。

「ナルト。もう入って良いぞ?」
「……………」

イルカが声をかけるが、ナルトは気づく様子もなく、自分の考えに没頭していた。

その表情は、いつものナルトからは考えられないほどに暗く、辛そうだった。

「ナルト!」
「えっ?」

イルカはもう一度大声でナルトを呼ぶ。

その声に、ようやく気付いたナルトはイルカを見た。

「ナルト… お前、やっぱり変だぞ? 体調が悪いんじゃないのか?」

イルカが心配そうに声をかける。

「そ… そんなこと無いってばよ?」

ナルトは慌てて否定した。だが、自分の悩みに没頭する余りにイルカが近づいてくるのにさえ気付けなかった事に、反省していた。

「ナルト… 今日はまだ帰れ。」

イルカはナルトを心配してそう告げる。

「だ、大丈夫だってばよ。」

「良いから。な?」

イルカの強引な勧めにより、ナルトは早退することになった。

そして…

ナルトは今、里の中を歩いていた。

そこでの出来事はナルトの傷ついた心を更に打ちのめすものだった。

「ちっ……」

ナルトを見て露骨に舌打ちをする男。

「やだ……例の子よ?」

「学校さぼったのかしら……やっぱりろくでもないわね。」

「三代目様も、なんであの子を野放しにしておくのかしら?」

ナルトを見て、陰口を言い合う主婦たち。

……

里のほとんどの大人がナルトを汚物を見るような目で見ていた。

(ハハッ…… わかつていた事だけ…… これはキツいってばよ。昔の俺ってば、よくこんな環境に耐えられたな……)

(いや…… そうじゃねえ…… 知らなかったから…… この環境が当たり前だったから…… か……)

(多分、この状況を作ったのは、この里の上役たちなんだろうな……)
(三代目のじいちゃんの考えじゃないんだろうけど…… おそらくダンゾウ辺りの提案なんだろうな……)

(里を第一に考えたとき、俺を英雄として扱うよりも、憎しみの対象にすることで、木の葉が空中分解しないようにしたって所か…… 憎むべき対象がいた方が纏めやすいのは確かだからな……)

(三代目のじいちゃんが、俺を気にかけるのも、じいちゃんの性格もあるんだろうけど、それ以上に罪滅ぼしの面が強いんだろうな……。あの時、禁術の巻物を簡単に盗めたのも…… きつと…… そうでなきや、下忍にもなっていないガキが、あんな簡単に火影室に忍び込んで、ましてや禁術の巻物なんて重要な物を盗めるハズ無いってばよ。)

(…… 火影として、里のため…… その考えはわかる…… それでも……) ナルトは、この状況が起こした未来の結末を思い浮かべた。

ヒナタが、ヒマワリが死んだ時の光景……

(三代目…… 俺はあんたを恨むってばよ……)

浮かない表情のまま、ナルトはこの時代の自分の家に帰宅した。

「ただいま。」

『おかえりなさい。』

『パパ…… おかえり〜』

『父ちゃん、聞いてくれればさ。今日、任務で…』
玄関を開けたナルト…

つい、今までの… 平和なうずまき家の幻を見てしまう。
ナルトは苦笑して、中に入った。

そこは、ごちやごちやと床一面をゴミが散乱していた。

誰もいない薄暗い部屋…

『父ちゃんが、ガキの頃は火影のじいちゃんはもうこの世に居なかったって言うじゃん。そしたら、親子のこの楽しい状況も知らずに済んでたんじゃねえのかな…』

(いつだったか… ヒマワリの誕生日に影分身を使った時、ボルトがそう言っていたってヒナタが言っていた…)

「ボルト… お前の言う通りだってばよ… 知らなかったから耐えられた。一人は寂しいし… 辛えし… 痛えつてばよ…」

ナルトは泣かなかった… ただ胸を強く押さえてジツとその場に蹲るのだった。

その後、なんとなく部屋にいることに嫌気がさしたナルトは、目的も無く外を歩いていた。

そして、いつの間にか自分が昔修行をよくしていた川原に辿り着いていた。

「ここは… 俺つてば、なんでここに来たんだってばよ…」

(もしかしたら… この時代の自分がここに来させたのかもな…)

ナルトはふっと手裏剣術の修行に使う丸太を見上げた。

そして、おもむろに手裏剣ホルダーから数枚の手裏剣を取り出すと投擲した。

あるものは弧を描き、あるものは真っ直ぐ、

ナルトが投擲した手裏剣は、寸分違わず狙いの場所へと突き刺さる。

「ハハッ… 昔の俺はこんなことも満足に出来なかったんだよな…」

ナルトが独り言のように呟く。

その時…

「凄…」

林の方から、小さな呟く声が聞こえた。

「誰だ。」

ナルトは声のした方へ向かう。

そこにいたのは……

「ヒナタ……」

この時代のヒナタだった。

告白 照らされた道

ヒナタは、ナルトの様子がおかしいことに気付いていた。

ナルトはイルカの指示で先に帰ることになった。

それでも、ナルトを心配したヒナタは学校が終わるとナルトを探して町を駆ける。

ナルトの家に寄ってみたが、ナルトがいる気配は無い…

辺りが夕暮れ時に差し掛かった頃、もしかしたらという思いで、ナルトがよく修行をする川原に向かった。

そこにナルトはいた。

ヒナタは声をかけようかどうか迷う。

それは、自分が毎日見てきたナルトと、今、自分が見ているナルトの雰囲気がるで違っていたからだ。

今まで自分が見てきたナルトは、落ちこぼれと言われて、周りから白い目で見られて…それでもその状況を変えようと、がむしやらに努力していた。

自分はその姿に憧れ、またそんなナルトを見ていると勇気が出た。

日向家で…落ちこぼれと言われている自分…

ナルトを見ていると、そんな自分でも変わるんじゃないか…そんな気がした。

でも、今のナルトは迷子になって途方に暮れた幼子の様な…まるで今にも泣き出しそうな表情を浮かべている。

そのナルトは、おもむろに手裏剣ホルダーから数枚の手裏剣を取り出すと、丸太に向かって投擲した。

その軌道やスピードはとてつもなく、アカデミーで一番のうちはサスケの手裏剣術を遥かに上回る様に見えた。

「凄い…」

思わず感想を口にしてしまうヒナタ。

「誰だ！」

ナルトはその声に反応し、一瞬でヒナタの元に辿り着く。

「ヒナタ…」

ヒナタを見つけたナルト。

(そう言えば、よく俺の修行を見てたって言ってたっけ…。それにしても…。下忍にもなっていない子供の気配にも気付かないなんて…) 自分が、あまりにも腑抜けていると改めて思い、気を引き締めると、ヒナタに声をかける。

「俺に何か用でもあるのか？」

「えっと…。あの…。その…」

突然目の前にナルトが現れた事で緊張したヒナタは、なかなか言葉を出すことが出来ない。

(そう言えば、昔のヒナタってこんな感じだったってばよ…。懐かしいな…)。

ナルトはヒナタの様子に、思わず小さな笑みを浮かべた。

一方、ヒナタは時間が経って落ち着いて来た。

いつものナルトなら、あたふたして結局何も言い出せない自分に呆れて帰ってしまうのに、今日はジツと待ってくれている。

その事で余裕が出来たヒナタは、自分の思考を纏めると話始めた。

「あの…。今日のナルト君…。いつもと様子が違ったから、心配で…」

「……………そっか。」

ヒナタの言葉を聞いたナルトは、この時代に逆行して以来、初めて心の中に暖かい物を感じた。

この時代にも自分を気にかけて、心配してくれる人がいた。

それがヒナタだったことが何よりも嬉しかった。

「それで…。ナルト君…。その…。何かあったのかな？」

ナルトは、一瞬話すべきか迷った。

信じて貰えるような話では無いし、何よりもヒナタにとっては自分が不幸になる未来の話になる。

ナルトは、少しの間悩み…。しかし決断した。

「俺の話…。聞いてくれっか。ヒナタ。」

「うん。」

それは…『うずまきナルト』と言う人間の生涯だった…。
生まれてすぐ、里の為に九尾を封印され、ナルトは九尾として里の
大人達から迫害を受けてきた。

そんな里の者たちに認めてもらいたくて、小さな頃から火影を目指
した。

やがて少年は成長し、周りの者たちもナルトを認め始める。
やがて少年は里を救い、世界を救うほどの忍へと成長した。
ずっと夢だった火影になり、憧れていた家族も手に入れた。

火影になってからは里の為に働き続けた。
そして…

うずまきナルトは、里の人間に殺された。

妻であるヒナタや娘のヒマワリを道連れに…

「それ… 本当の話… なんだよね？ナルト君…」

「… ああ。」

ヒナタはナルトの話を真剣に聞いていた。

未来から来たと言う話には当然驚いた。

その話の中で自分がナルトと一緒になれたと聞いて嬉しかった。

ナルトが火影になれたと聞いて誇らしかった。

だが、その結末を聞いたヒナタは… 泣いていた。

なんて悲しい物語なのだろう…

ナルトがどれだけ努力をしてきたか… この時代のナルトを見続
けてきたヒナタには手に取るように理解できた。

だが、悲しむヒナタにナルトは、驚く言葉を口にする。

「だから、もう… 俺には近づかない方が良いつてばよ。」

「えっ!?!… ど、どうして?」

ヒナタは、突然告げられたナルトの言葉に驚き、固まった。

「言つたら? 未来でヒナタは俺と一緒になつたせいで殺されたつて。
だから、このまま俺の近くにいればきつと… だから… サヨナラ
だつてばよ。」

ナルトは、そう言って離れようとした。

ヒナタはそんなナルトの表情を見て思った。

今のナルトを一人にしてはいけない。

「ナルト君！」

ヒナタはナルトを抱き締めた。

「は、離してくれればよ。」

「嫌…ナルト君を一人になんて絶対にさせない。」

ヒナタは強い口調でナルトに告げる。

「ナルト君…気づいてないでしょ？ナルト君、泣いてるよ？」

「えっ？」

ナルトは、自分の頬に手を当てる…

触れた手は、涙で濡れていた…

「ナルト君が私を心配してくれるのは嬉しいよ？でも、私だってナル

ト君が心配だよ。だって…私は…ナルト君が大好きだから…」

ヒナタの姿に…未来のヒナタがダブって見えた。

「辛かったよね、ナルト君…泣いて良いんだよ？」

「あっ…ううあ…うああああああああっ」

ナルトは泣いた。ヒナタにしがみついて…大声で…子供のよ

うに…

それからしばらくして、辺りはすっかり暗くなっていた。

「ハハッ…良い年した大人が、子供に泣きつくなんてな…はずか

しいってばよ…」

ナルトは落ち着きを取り戻していた。

「ねえ…ナルト君…」

「うん？」

「ナルト君は、これからどうするの？」

ナルトが落ち着くまで、ずっとナルトを抱き締めていたヒナタは、

顔を紅くしながら、ナルトにこれからの事を尋ねた。

「…九喇嘛にも聞かれたんだけど…何も思い付かねえんだってば

よ。俺は前世で火影になるために頑張って、火影になってからは火影

として頑張ってた。でも、俺はもう…火影を目指したいとは思え

ないんだってばよ…だけど…俺から火影を取ったら、なくんにも

無かったんだ。だから…正直どうしたら良いか…」

ナルトは今の気持ちを正直に告げる。

「ねえ…ナルト君。ナルト君は、前世で後悔したこととかは無かったの？」

「そりゃあ、あつたさ。助けられなかった人…救いたかった人…そして何より…家族を守れなかったこと…」

ナルトはヒナタやヒマワリの最後を思い出していた。

その思いを聞いたヒナタは一つの提案をする。

「ねえナルト君。だったら、今回は家族の為に生きてみようよ。ナルト君が一番守りたい物を守るように…」

「家族の為？」

「そう。わ、私も協力するから…」

そう言ったヒナタの顔は真つ赤に染まっていた。

「ハハツ…ハハハハハハハハ…」

「や、やっぱりおかしいかな？」

「いや。おかしくなんか無いってばよ…ただ…こんな簡単な事にも気づけなかった自分が笑えただけだ…そうか…そうだな…俺は守りたい…今度こそ。俺の家族を。」

ヒナタの提案を聞いたナルトは、吹っ切れたように清々しい表情をして自分の思いを口にした。

「ヒナタも協力してくれるか？」

「もちろんだよ？」

「じゃあ、ヒナタ…俺たちが大きくなったら…結婚してくれ。」

「はい…はい？」

思わず返事をしてから、ヒナタは何を言われたのか気づいて固まってしまう。

「ヒナタ…俺はもう一度…ヒナタと家族になりたい。だから…結婚してくれ。」

もう一度、ナルトは真剣な表情でヒナタにプロポーズした。

「えっと…その…ほんとに…私なんかで…良いの？」

「ヒナタが良いんだ。」

「…はい。ふつつかものですが…よろしくお願いします。」

「ありがとう。ヒナタ。愛してるってばよ。」

ヒナタの返事を聞いて、嬉しくなったナルトはヒナタを抱き締めて口づけをした。

「な、な、な、なナルトくん……い、いま……私……きゆう〜」

「ひ、ヒナタ？しっかりしろってばよ〜」

ナルトの口づけを受けたヒナタはあまりの嬉しさに気絶してしまった。

もともと上がり症なのを、ナルトを元気付けるために、無理して気を保っていたのだ……

ナルトのプロポーズと口づけで限界を超えてしまったのだった。

その様子をナルトの中から見ていた九喇嘛。

「ふん……一週間もいらなかったな。」

独り言のように呟いた。

ありがとう……ヒナタ。お前のお陰で、俺が目指すべき目標が出来たよ。

この生は家族の為に……

ナルトは、改めて自分の今生の目的を胸に決意した。

例え、逆行して人生をやり直しても……目標が変わっても……

真っ直ぐ……自分の言葉は曲げねえ。それが俺の忍道だってばよ。

三代目火影との会談

ヒナタが気を失い、介抱するナルト。

しかしナルトは突然、ある場所に向かって話しかけた。

「いるんだろ？イルカ先生。出てきて良いってばよ。」

「……………お前……………いつから気づいてたんだ？」

ナルトの声かけに、罰の悪そうな表情を浮かべながらイルカが姿を現した。

実はイルカもまた、ナルトの様子を心配して探していたのだ。

ようやくナルトを見つけたイルカだったが、先にヒナタとの会話が始まってしまい、何となく出にくくなってしまった為、そのまま隠れていたのだ。

ナルトの話聞いたイルカ……………そしてその前世の凄絶な人生に胸を痛めていた。

「最初からだってばよ。まあ、イルカ先生に関しては信用してるから、特に何もせずにそのまま話を聞いてもらったんだけどな……………」

「流石は、未来の火影ってところか。」

イルカはナルトの言葉に驚きながらも、やはりさっきの話は事実なんだと再確認した。

「ナルト……………すまなかった……………」

イルカは頭を下げた。

「なんで、イルカ先生が謝るんだってばよ？」

「俺は……………ナルトが苦しんでいるのを知っていて助けられなかった……………だから……………」

「イルカ先生のせいじゃないってばよ……………それに言ったろ？俺はイルカ先生を信用してるって……………」

「なんで……………俺を信用してくれるんだ？」

「イルカ先生はさ、俺を『うずまきナルト』として見てくれた初めての里の大人なんだってばよ。前世で……………俺の行動が少しづつ認めてもらえる様になった。でも、俺が認めて貰えるような行動を起こす前から、俺を認めてくれたのはイルカ先生だけなんだってばよ。」

「ナルト……」

「イルカ先生は、俺が最も憧れる忍だ。だから俺はイルカ先生を信用するってばよ。」

イルカはナルトの言葉に、不覚にも泣きそうになっていた。

「ありがとな……ナルト。」

「それはこっちの台詞だつてばよ。イルカ先生が認めてくれたから、諦めずに頑張れたんだからな。」

そう言つてナルトは笑顔を向けた。

その笑顔を見たイルカは、真剣な表情をして話す。

「ナルト……もし、お前がこれからどんな決断を下すのか……俺にはわからない。もしかしたら木の葉を敵に回すのかもしれない。それでも俺は、例え敵に回るのだとしても、お前の決断を応援するよ。こんな事しか言えないけど……」

「ありがとな……先生。」

「良いんだ。」

「イルカ先生。ヒナタの事頼めるかな？」

「それは良いけど……どこに行くんだ？」

「三代目のじいちゃんの所だつてばよ……」

ヒナタをイルカに託したナルトは、一人火影室へ向かうのだった。

「じいちゃん……いるんだろ？入るってばよ。」

ナルトはノックもせず火影室へと入っていった。

「おお……ナルトか。こんな遅くにどうかしたのか？」

そこに三代目火影……猿飛ヒルゼンはいた。

「白々しい真似は止めようぜ？じいちゃん……。覗いてたんだろ？全部。あの水晶玉で……」

「……目的は……お前を迫害してきた里へのフォローをしなかったワシへの復讐かの？」

全てを察しているナルトに、苦々しくそう口にするヒルゼン。

「そんな事しねえって……。」

自分への復讐に来たのかと問うヒルゼンに呆れながら否定の言葉を告げるナルト。

「ならば、何をしに来たのじゃ?」

「もちろん、これからの事を話しに来たんだってばよ……。つとその前に、暗部は下がらせてくれねえか? 一応、機密の話もあるかも知れねえし。」

「ふむ……。わかった。お前たち下がってよいぞ?」

ヒルゼンは少し考えたのち、部屋に待機していた暗部に手で合図をして下がらせる。

「それで……。今後の話とはなんじゃ?」

ヒルゼンは、ナルトを警戒しながら話の続きを促す。

「そんなに警戒しなくても、じいちゃんに何かするつもりはねえってばよ。まあ……。後ろめたい事があるから仕方ないんだろうけどな……。」

「それで?」

「俺が未来から逆行したのは聞いてたよな? その結末も。」

「…………… ああ。」

ヒルゼンは目を伏せながら、肯定する。

「じいちゃんは、俺の事が怖いんだろ?」

はつきりと告げるナルト。

「…………… そうじゃな……。尾獣の力と言うのは、嫌と言うほど理解しておる。お前が九尾と和解し、その力を存分に使えるなら、木の葉にとって、これほどの脅威も無かろうて……。」

そんなナルトに、ヒルゼンも素直に頷いた。

「まあ……。その気になれば、この里を壊滅させるのは簡単だってばよ?」

ヒルゼンは、里を壊滅させるのを簡単だと話すナルトに心底恐怖した。

「今の所、木の葉に復讐する気は無いって言っても、信じられないだろ? だから……。ビジネスをしよう。じいちゃん。いや……。三代目火影。」

「ビジネス……。じゃと?」

ナルトの提案が理解できず、聞き返すヒルゼン。

「俺の言葉を信用できないのは、木の葉が俺に対して行ってきた事が原因だろ？復讐されても仕方ないと考える程度には、俺にして来た仕打ちに後ろめたさを持つてる…」

「だから、代価を用意するんだってばよ。俺の条件を飲んでいる間は、俺は里に手を出さない。」

「…なるほどの…そう言う事か。」

ようやくナルトの提案の意味を理解したヒルゼン。

確かに、ただ口で約束するよりも、お互いが納得するビジネスとしての契約の方が安心度は格段に違う。

「上手く考えてあるな。これはお前が考えたのか？」

「まさか… 九喇嘛… 九尾の案だってばよ。」

「なんと… お前は自分の中の尾獣と会話できるのか。」

「俺にとって九喇嘛は、相棒で、仲間… 戦友だってばよ。」

ヒルゼンは驚愕していた。九尾とは憎しみの塊であった。

その九尾と信頼関係を結べるとは思っていなかったのだ。

「さて… 三代目… 条件の擦り合わせをしようってばよ。」

「ああ… わかった。じゃが、その前に…」

ヒルゼンが目配せをすると、隠れていた残りの暗部が襲いかかった。

ヒルゼンは全ての暗部を下がらせてはいなかった。

万が一に備えて数名を残していたのだった。

「スマンの。お前を生かしておいては里の脅威となりそうなのでな。ここで死んでくれ… (ミナトよ… スマン。)」

ヒルゼンは、苦しそうな顔でナルトに謝罪する。

ヒルゼンはもともと、ナルトの事を気にかけていた。憎いわけでもない。

だが火影として、個人の感情で動く訳には行かなかった。

里の未来のために、ヒルゼンはナルトを始末する事にした。

責めて苦しまぬように… そう願いながら、暗部に隠れて指示を出していたのだ。

「謝る必要は無いってばよ?三代目。」

ヒルゼンが罪悪感に苛まれていると、不意に声が聞こえた。

暗部四人に囲まれ、襲撃されたハズのナルトの声…

見ると、ナルトを取り囲んでいた暗部4名の全員の腹部にチャクラが物質化したような腕が生えていた。

4名とも、一瞬で絶命していた。ナルトに傷一つ付けることも出来ずに。

「な…なんと…」

「化かし合いは、俺の勝ちだな?暗部が全員下がってないのなんて、わかってた。俺は…個人ならともかく、二度と木の葉を信用する気はねえってばよ。」

「うっ…。」

ナルトの言葉に反論出来ないヒルゼン。

「さて…三代目。これは契約前の出来事だから見逃すけど…貸しだってばよ?」

ナルトは、木の葉に貸しを作る為にあえて、暗部を見逃していたのだった。

それから、契約はナルト主導で行われていった。

ナルトを襲撃したヒルゼンには条件を変更する立場も無く、一方的に突きつけられていった。

その内容は、

- 1、木の葉はナルトに対して、賠償金10億を支払うこと。
 - 2、今後、ナルトが必要と判断した願いを三度まで聞き入れる事。
 - 3、未来の事を聞かないこと。又、ナルトが未来から来たことを周りに話さないこと。ただし、ナルトが必要と判断した内容を聞くことは許可する。
 - 4、ナルトの家の監視を解くこと。
 - 5、ナルト本人、日向ヒナタ、海野イルカ、一楽の親子、そして現在の同期及びマイトガイの班のメンバーに手を出さないこと。
- もしこれらの条件が守れない場合、契約は破棄されたものとする。
- 「ああ、それから…俺から木の葉に対して何かする気はねえけど、も

し木の葉の里の人間が俺や…俺の大事な人たちに何かしたら、躊躇する気はねえってばよ？その所を理解しといてくれ。無駄に死人を出したく無ければな。」

去り際に、ナルトはそう言うと言いつつ火影室を退室していった。

火影室には、死体となった暗部四名とヒルゼンだけが残されていた。

「ワシらは…とてつもない怪物を育ててしまったのかも知れんな…ミナトよ…スマン…」

去り際に見せたナルトの冷たい眼差しを思い出し、ヒルゼンは疲れきった声で呟くのだった。

相談

ヒルゼンとの会談からの帰り道。

「これで、少しは暮らしやすくなると良いんだけどな。」

『ナルト。話は変わるが、目的が出来たのは良い…。しかし、具体的にどうするか決めているのか?』

九喇麻の問いかけに、

「まだ、何も決めてないってばよ。明日、俺の相談役に相談してみるつもりだ。」

『…!?:… 話すのか?』

「そのつもりだ。アイツは心配無いつてばよ。」

『そうだな。アイツなら大丈夫だろう。』

ナルトの言葉に、九喇麻も同意した。

・
・
・

翌日、ナルトは忍者アカデミーに登校していた。

「よお。ナルト。体調は大丈夫なのか?」

登校してきたナルトを見たシカマルがいかにもやる気の無さそうな顔で挨拶をしてくる。

「ああ。大丈夫だってばよ。」

「お前が体調不良なんて珍しいな。今日は雨にでもなるんじゃないかねえか?…しかし、今日も一日面倒くせえなあ。俺も体調不良で休みたいぜ。」

「ハハッ。そうだな。」

「…ナルト? やっぱ、お前ちよつと変だぞ?」

ナルトと会話をしていたシカマルは、いつもと様子の違うナルトに違和感を感じた。

「シカマル…その事なんだけど、ちよつと相談したい事があるんだってばよ。放課後、時間取れねえかな?」

「はあっ？お前が俺にか？」

ナルトの意外な頼みに、シカマルは一瞬思考を停止した。

これまでナルトと一緒に授業中居眠りをしたり、怒られたりしたことはあるが、相談を持ちかけられた事など一度も無かったのだ。

「ああ。頼むってばよ。」

真剣な表情のナルトに、面倒くさいと思いつつも、シカマルは了承するのだった。

ナルトとシカマルが教室に入ると、チョウジやシノが、ナルトを心配して声をかける。

「大丈夫だってばよ。」

ナルトは、軽く挨拶を交わすと、既に登校していたヒナタの方を見て、軽く微笑むと周りに気付かれない程度に挨拶をする。

ヒナタは、直ぐに気付いて挨拶を返すが、昨日の事を思い出したのか、顔を赤くしてうつむいてしまった。

(あちやく、今のヒナタに、プロポーズは刺激が強すぎたってばよ……) その様子を見たナルトは少しだけ反省した。

……ほんの少しだけ……

それから、放課後になるまでの間、ナルトは無難に過ごしていた。

言動が落ち着いて、イタズラもしなくなつた事から、多少不信を抱く者もいたが、座学は居眠りをしていたり、いつもと同じような行動も取っていたため、然程騒がれたりはしなかった。

実技に関しては、手を抜いており、気づかれる事も無かった。

そして放課後……

ナルトはシカマルに全てを話した。

逆行のこと、前世での出来事、そして、今生での目的を。

「なるほどな……話はわかった。」

「そんな簡単に信じるのか？」

「別に信じた訳じゃねえよ。ただ、否定するにしろ肯定するにしろ、判断材料が少なええからな。その話が事実と想定して続きを促してるだけだ。それで？そんな話をして俺に相談したい事ってのはなんなんだ？」

(やっぱり、シカマルは頭良いつてばよ...))

ナルトは、シカマルの洞察力に内心舌を巻きつつ本題を口にする。「実はな、今の俺の状況で、俺が家族を持った時に、一番守るのに適した方法を考えて欲しいんだつてばよ。」

「そんなの考えるより、まずは、将来の相手を見つuckerの方が先なんじやねえか？」

シカマルは呆れた様に言ったが...

「いや。相手はもういるつてばよ。もうプロポーズも済ませた。」

「へっ？」

ナルトの爆弾発言に、完全に固まるシカマルだった。

少しして、再起動を果たしたシカマル...

「ま、まあ。話はわかった... だが、結局正確な情報が無けりやあ、策なんて練れないからな。お前が目指す方向性だけ提示する。一つは、前世のお前のように、里の人たちに認めて貰うことだ。それから、もう一つは... 里を抜ける事だな。正直、全ての人間が誰か一人を認めるなんてあり得ないからな。そして、お前が憎悪されているのは、過去にあった、九尾の事件が原因だ。お前自身が木の葉を離れば、この問題はクリアされた様なものだからな。」

「なるほどな... 里抜け... か。」

「ただし、円満に里を抜けられなければ、追っ手を掛けられて逆に危険は増すことになる。話を聞く限り、人柱力つてのは里の切り札みてえなもんだろ？ そんな簡単に手放すとは思えねえな。」

「.....」

ナルトは、しばしの間考える。

そして、何かを決意すると、

「サンキューな。シカマル。参考になったつてばよ。やっぱりお前は、俺の最高の相談役だつてばよ。」

そう言つて、笑うと礼を言つて帰つていった。

「あいつ... 本当にわかつてんのか？」

その後ろ姿を眺めながら、本当に里抜けをするのではないかと、少し不安になるシカマルだった。

翌日、ナルトは普通に登校していた。

その姿にホツとするシカマル。

「昨日の話…まさかマジに考えている訳じゃねえよな？」

シカマルは確認の意味を込めて、ナルトに聞いた。

「え？マジだつてばよ。」

「お前…」

ナルトの言葉に絶句するシカマル。

「大丈夫だつてばよ。考えがあるから…まあ、どっちにしても直ぐにどうこうつて訳じゃねえしな。」

「本当に大丈夫か？」

「ああ。」

そんなやり取りのあと…

ナルトはこの日も無難に過ごし、帰りにヒナタに声をかけた。

「ヒナタ。もう少しで卒業試験だろ？それまで俺と修行しないか？」

「え？あの…その…良いのかな？私なんか一緒に修行して。」

「ああ…ちよつと話したいこともあるしな。」

「う。うん。」

修行の約束をしたヒナタは、内心かなり嬉しかった。

そして、いつもの川原にて…

柔拳を使うヒナタの為に組手をメインにした修行を行うナルトたち。

「ハア…ハア…ハア…」

息を切らせながら、へたりこむヒナタ。

「凄いね…ナルト君…白眼を使って攻撃してるのに、当てるところか、触ることも出来ないなんて…」

「そりゃあ、戦いの経験が違うからな。逆に、今のヒナタと良い勝負なんてしてたら俺が落ち込むつてばよ。」

「プツ…アハハハハハ。」

ヒナタは楽しかった。修行でこんなに楽しいと思った事は無かった。

ずっと… この時が続けば良いのに…

ヒナタは、そう願っていたが空が暗くなり始め、修行はお開きとなった。

「ヒナタ… 帰る前に… 相談があるんだってばよ。」

帰り際、ナルトは真剣な表情でヒナタを呼び止めた。

「どうしたの？ナルト君。」

ナルトは意を決して、ヒナタに問いかける。

「ヒナタ… もし俺が、木の葉を離れるとしたら… 一緒に着いてきてくれるか？」

「え？勿論だよ。」

ヒナタはあっさりと答えた。

「え？いや、一時的に言うんじゃない、里を抜けるって意味だつてばよ？勿論、今すぐについて訳じゃ無いけど…」

勘違いしているのかと考えたナルトは、もう一度問いかけた。

だが、ヒナタは笑いながら、

「私の答えは変わらないよ。ナルト君のいるところが、私の居場所だから。」

ナルトはその笑顔を眩しいと思った。

「ありがとう。」

「君に会えて良かった」

アカデミー卒業

それから、一月が経った。

その間、ヒナタはナルトとの修行により、着実に腕を上げていた。しかし、ある夜…

「うずまきナルトと修行をしているそうだな。あんな落ちこぼれと修行をしたところで得る物など無い。そんな時間があるなら、早めに家に戻り、家で稽古をきなさい。」

ヒアシより呼び出されたヒナタは、ヒアシから、そんな事を言われた。

実は、ナルトとの修行を妹のハナビが目撃しており、父であるヒアシに報告していたのだ。

「うずまきナルトと言う少年の事は知っている。アカデミーで何度も卒業試験に落ち、問題ばかり起こす、典型的な落ちこぼれだそうじゃないか。」

「そんな人間と修行をしたところで成長などできはしない。自重しなさい。」

その言葉を聞いたヒナタは、自分の中で、何かが切れたのを感じた。「お話はそれだけですか？失礼します。」

ヒナタは、ヒアシに答える事なく席を立った。「待ちなさい。ヒナタ。ヒナタ！…お前には失望した。」

去り際に、ヒアシの言葉が聞こえたが、ヒナタは何も感じなかった。(失望したのは私です…)

ヒナタに落ちこぼれと言うレッテルを貼り、ヒナタ自身を…その成長を見ようとしないうヒアシに、ナルトを化け物として…ナルト自身を見ない里の大人達が重なって見えたのだ。

(ナルト君…私はこの里に未練なんて無いよ。貴方のいる場所が、私の居場所です。)

日向家での出来事から、更に時間が経ち、

現在、ナルトは卒業試験に挑んでいた。

「分身の術！」

ナルトの掛け声に術が発動する。

煙が晴れ、そこにあつたのは……ナルトを模した謎の物体だった。

イルカは驚きながら、ナルトに失格を告げる。

同僚のミズキが取り成すが、結果が覆ることは無かった。

「ナルト。一体何があつたんだ？」

試験が終わった後、イルカは分身の術を失敗したナルトを問い詰める。

「ん？ああ、試験の事か。実はこのあと……ちよつと厄介な事件が起きるんだつてばよ。ここで俺が落ちないと、犯人がどう動くかわからないんでな。わざと落ちたんだつてばよ。」

「厄介な事件？」

イルカの問いに、ナルトは前世であつた出来事をかいつまんで話した。

「そんな……ミズキが？」

同僚の犯行に、驚きを隠せないイルカ。

「まあ、俺にとつては思い出深い事件なんだけどな……とりあえず、今回は俺に任せてくれつてばよ。」

ナルトはそう言うと、去つていった。

イルカは、その後ろ姿をじつと見つめながら、何かを考えていた。

その後、予定通りミズキがナルトに接触し禁術の巻物を盗むように唆した。

ナルトは、了承したフリをして偽物の巻物（三代目に事情を話して用意した）を持参すると、ミズキに合流する。

ミズキは、本性を現してナルトに迫つた。

「ミズキ、悪いが……までだつてばよ。」

ナルトもこの世界に来て初めて、少しだけ力を出して応戦する。

この時、ナルトに誤算があつた。

一つは、命がけの戦闘を久しく行つていなかったこと。

一つは、この世界に来て、自身の子供の身体に、まだ馴染んでいなかったこと。

一つは、ミズキと言う忍を嘗めすぎたこと… 戦闘訓練のつもりで、影分身やチャクラモード、仙人モードを使わないつもりで戦った。

結果、ミズキの予想を超える拳がミズキを襲うが、急所を狙ったつもりが、自分の間合いやリーチが自分の感覚と違い、体勢が微妙にズレてしまい、ミズキにガードされてしまう。

しかも、予想よりもナルトが強いと感じたミズキは、迷わず煙玉を投げて目眩ましをすると、気配を消して逃げ出した。

「クソツ… ミスったってばよ。」

慌てて辺りを見回すも、ミズキは巻物を持って逃走していた。

『バカ野郎… 何やってやがる。』

九喇嘛の叱咤がとぶ。

「スマン。油断した…」

ナルトは仙人モードを使い、ミズキのチャクラを探す。

「見つけたってばよ… って… マズイ… イルカ先生がミズキと接触してるってばよ。」

ミズキのチャクラを捕捉したナルト。しかし、そこにはナルトがよく知る人物のチャクラも一緒に感知していた。

ナルトから、今回の話を聞いていたイルカは、ミズキの後をつけていたのだ。

すぐに、その場へ向かうナルト。

「イルカ… あんな化け狐の言うことを真に受けるのか？俺は、あの化け物から巻物を取り返したただけだ。俺を信じてくれ。」

ナルトが現場に着いたとき、ミズキは手傷を負ったイルカと対峙しながら、イルカを説得していた。

「ふざけるな。アイツは… ナルトは化け物なんかじゃない。ナルトは誰よりも人の苦しみや痛みを理解している。里の大人達に白い目で見られ続けて… それでも木の葉の里への復讐を考えるんじゃない、火影を目指して、皆に認めて貰うことを選んだ。アイツは… この里の誰よりも強くて立派な… 忍だ。」

「もう… 良いってばよ… イルカ先生。わかってるから…」

その時、間にナルトが割って入った。

怪我をしたイルカを庇うように、ミズキとの間に立つナルト。

その後ろ姿を見ながら、イルカはあまりの悔しさに涙を流した。

(俺にもっと力があれば… アイツを助けてやれるのに…)

ナルトの前世の話を聞いたイルカは、その悲しい生涯に、ナルトを支えてやりたい… そう考えていた。

今回の話も、ナルトから聞いたイルカは少しでもナルトの助けになればと考え、ミズキを尾行したのだ。

しかし、実際は返り討ちに会い、負傷した挙げ句、あろうことかナルトに庇われてしまう。

そんな自分の弱さが悔しかった。

「イルカ先生… 俺はイルカ先生を尊敬してる…。例えば、戦闘能力が弱くても、俺はイルカ先生の心の強さにずっと救われてきた。九尾に両親を殺されて… 里の皆が俺を九尾の化け物として見る中で、俺を『うずまきナルト』として初めて見てくれた…。憎しみに捕らわれる事なく、俺を俺として見てくれたイルカ先生がいたから、全てを憎まずにいられたんだ。イルカ先生は、俺が憧れ尊敬する、強い忍だつてばよ。」

「だから… ここは俺に任せてくれ…」

ナルトの決意の籠った言葉に、頷くイルカ。

「はっ… お涙頂戴の師弟ごっこは終わりか？ 下忍にもなっていないガキに、何が出来る。」

ミズキの軽口には答えずナルトは印を結ぶ。

そして…

『多重影分身の術』

そこに、数えきれない数の分身をしたナルトがいた。

「な、な、な、な、な…」

あまりの状況に、言葉が出ないミズキ。

「…イルカ先生が受けた傷の礼はきっちり受けて貰うってばよ。ミズキ。」

実態を持った影分身の猛攻に成すすべもなくミズキはボロボロに

された挙げ句、拘束されるのだった。

「イルカ先生。大丈夫か？」

「ああ。すまないな。結局助けられちゃった。」

「言ったろ？イルカ先生はそのままが良いってだよ。」

ナルトの言葉に、イルカは自分の額当てを外すと、ナルトに差し出した。

「俺には、こんなこと位しかしてやれない。でも、こんな俺でもお前は尊敬してくれるって言ってくれた。だから俺は、俺にできる事でお前を支える事にするよ。」

「……………」

ナルトは、無言でイルカの額当てを受けとると、自分の額に巻いた。

「卒業……おめでとう。」

イルカが祝いの言葉を口にする。

「ありがとう。イルカ先生。」

ナルトは、アカデミーを卒業した。

第七班

ナルトはアカデミーを卒業した。

その後、前世の時と同じように木の葉丸との邂逅を果たした。

今生において、火影を目指していないナルトだったが、肉親が火影であるために、寂しさを感じている木の葉丸に、ボルトの姿を重ねたナルトは、少しアドバイスを送る事にした。

「木の葉丸： お前は勘違いしてるってばよ。」

「勘違いって： なんだコレ。」

「ある人が言ってた： 『火影になった人間が認められるんじゃない。皆に認められた人間が火影になるんだ』ってな：」
「……………」

「今のお前を、里の皆が見た時、皆はお前を認めてくれると思うか？」

「それは：」

「だったら： どうしたら良いか： わかるな？」

「でも： じじいに滅茶苦茶怒られるぞコレ。」

ナルトの説得に、しかし木の葉丸はなかなか一步を踏み出す事ができない。

木の葉丸の様子を見たナルトは、木の葉丸の頭に手を置くと：

「良いじゃねえか。怒るつてのは相手の事をそれだけ思ってるからだってばよ。心配すんな： 俺も一緒に謝ってやるから。自慢じゃねえが、俺ってばよくイタズラをして怒られ慣れてるからな。」

「あ： うん！」

そう言って笑ったナルトに、木の葉丸は笑顔で頷いた。

そして、木の葉丸を連れてヒルゼンの元に向かったナルトは、一緒に謝る。

水晶玉でナルトを監視出来なくなってしまったヒルゼンは、当初こそ怒りに震えていたが、素直に謝りに来た木の葉丸の成長： それを促したのがナルトだと理解すると、複雑そうな顔をしつつ、許すのだった。

こうして、前世とは違った形で木の葉丸に慕われる様になるナル

ト…

そしてとうとう、班分けの日がやってくる。

「第七班、うずまきナルト、春野サクラ、うちはサスケ。」

（…今更だけど、この班分けには意味があったんだな…俺たちの班は人柱力の俺と、うちはの生き残りであるサスケ…監視対象を集めたって事か…カカシ先生は担当上忍ってだけじゃなくて、俺たちの監視役も兼ねてるんだな…サクラちゃんには悪いけど…多分サクラちゃんは余りなんだろうなあ…）

ナルトがそんな事を考えている間に、各班の担当上忍が自分の担当の班を迎えに来て、次々と退出していった。

ヒナタも紅と共に出ていく。

出ていく際にナルトと視線を交わすヒナタ。

（ヒナタは強いってばよ。自信を持って行け。）

ナルトは視線に思いを乗せて一つ頷くのだった。

それからしばらく経つが、一向に第七班の担当上忍は現れなかった。

「ねえ…なんで私たちの担当はいつまで経っても来ないわけ？」

サクラがしびれを切らせて、怒鳴り出した。

（うゝむ…今更だけど、遅刻魔のカカシ先生が良く六代目選ばれたってばよ。重要な会談で遅刻なんてしたらどうするつもりだったんだろ？）

サクラの怒りのボルテージとは対照的に、ナルトもサスケも落ち着いていった。

「ねえ、ナルト…あんた最近おかしくない？」

ナルトもサスケも冷静なため、サクラのテンションは急激に下がっていった。

そして、落ちついたサクラは、ナルトを見るとせつかくだからと、ここ最近感じていた違和感を聞くことにした。

「ん？おかしいって…なんの事だってばよ？」

「いや、最近妙に落ち着いてる感じがするし、イタズラもしなくなったり、サスケ君につつかかってもいかなくなったし、何よりも…私に

言い寄って来なくなったじゃない。」

サスケもこの話には興味があり、気にしないフリをしながら、聞き耳を立てる。

(うゝむ…この頃のサクラちゃんは俺の事を嫌ってたし、俺の事…関心がないと思ってたんだけど…意外と見てたんだな…)

ナルトは、どう説明するか少し考える…

そして…

「そうだな…きつと…俺にとって何よりも大事だと…そう思える物を見つけたからだってばよ。」

結局、曖昧に…しかし、今の自分の心境を話すのだった。

「それって…どう言うこと?」

サクラには理解出来なかった。

サスケも理解は出来なかったが、ナルトが本当の事を言っている事だけは感じられた。

ナルトが何かを口にしようとする、扉が開き、

「やあ、待たせたかな?」

カカシが軽い調子で入ってきた。

カカシは、三人を見回すと、

「うーん…お前たちの第一印象は…ま、普通だ。」

(前の第一印象は『嫌い』だったってばよ…)

『お前がガキみてえなイタズラ仕掛けたからだろ?』

(そう言えば、そんなこともあったな…ハハハハハ…)

九喇嘛のツツコミを笑って誤魔化すナルトだった。

場所を移して、自己紹介を行うことになった。

カカシは名前以外の情報は出さなかったが…

「じゃ、今度はお前だ。まずはお前。」

そう言っってナルトを見るカカシ。

「名前は、うずまきナルト。好きなものは、俺を認めてくれる人と、一楽のラーメン。嫌いなものは、俺と…俺の大事な人たちに危害を加える奴ら。将来の夢は…家族を持って、その家族を幸せにする事

だってばよ。」

「は？あんたの夢って火影になることじゃ無かったの？いつつもバカみたいに言ってたじゃない。」

ナルトの言葉に、サクラが疑問を口にする。

「ようやく、身の程を弁えたってことだろ？それにしても…随分とちっぽけな夢だな。まだ火影になると言ってた時の方がマシだったぜ？」

サスケは、ナルトの現状を少なからず知っている為、その夢に少しだけ共感していた。しかし、何故かとてもない不快感を感じたサスケは、憎まれ口を叩く。

「そうか？例えちっぽけな夢でも…俺にとっては大事な事だってばよ…そう…とても大切な事だ。」

カカシは、ナルトの言葉を聞きながら、強烈な違和感を感じていた。ナルトの言葉には、大切な人を失った経験のある人間特有の重味を感じた。

だが、ナルトには大切な人間はいない。生まれてすぐに、両親を失い、里の大人からは白い目を向けられて育ったナルト。

ごく限られた大人は、ナルトを等身大で見ていたが、それもナルトにここまで思わせる人物とは言えない。

唯一、海野イルカがそれに該当するかも知れないが、イルカは健在である。

(少し、探りを入れた方が良いかな、こりや。)

ナルトに対し、情報を集める事を決めたカカシは、続いてサクラに自己紹介を要求する。

サクラの自己紹介は、とても忍と言えるようなものではなかった…

呆れの混じった瞳をサクラに向けるカカシ。

(うーん…サクラちゃんは、ちょっと気楽過ぎるってばよ。少し怖い思いをさせておかないと、この先、危険かも知れないな…)

サクラの様子に、今後を心配したナルトは、サバイバル演習の時に、

少し痛い目を見てもらおうと決めた。

そして、最後にサスケの番となる。

「名はうちはサスケ。嫌いな物はたくさんあるが、好きなものは無い。それから……夢なんて言葉で終わらせる気は無いが……野望はある。一族の復興と……ある男を必ず……殺すことだ。」

「今のお前には無理だつてばよ。」

サスケの言葉を聞いたナルトは、サスケの言葉を真っ向から否定した。

「なんだと!?俺にアイツが殺せねえつてののか?」

サスケにとつて、一族の仇を取ることは何よりも優先することだった。

それを否定されたサスケは、例え実力的にとるに足らないと思っ
ているナルトの言葉とはいえ、無視することは出来なかった。

ナルトの胸ぐらを掴み、殺意の混じった目を向けるサスケ。

「そっちじゃ無えつてばよ。」

だが、ナルトはまるで動じる事はなく、冷静に告げた。

「まあ、その男を殺すのも今は無理なんだろうけどな……だから大人しく下忍になったんだろうし……けど……俺が無理だと言ったのはもう一つの方だつてばよ。」

「なに?」

「お前……俺の夢を聞いた時、笑つたろ?」

「それがどうした……くだらねえ夢じゃねえか。」

「家族を幸せにしたい。その夢を笑うヤツが、どうやって一族を復興するつもりだつてばよ……」

「そ、それは……」

ナルトの言葉に思わず詰まるサスケ。

「はつきり言つてやろうか?今のお前は復讐しか頭に無い。一族の復興なんて、今のお前は考えちゃいないんだつてばよ。」

ナルトは断言した。

「違う。」

「違わねえ。」

激昂しナルトを睨むサスケ。

しかし、ナルトは意に返さずあくまでも冷静にその瞳を受け流した。

サクラはいつもと逆の構図をハラハラしながら、見守る。

二人の対峙を見ながらカカシは一つため息を付くと、

「ま、落ち着きなつてサスケ。ナルトも『今の』お前にはつて、言つてただろ？」

そう言つてサスケを宥めた。

「くっ…」

サスケは、イラつきながらもナルトの胸ぐらから手を離す。

「さて、それじゃ自己紹介も終わった事だし、早速任務を行うぞ？」

サスケが落ち着くと、カカシは『サバイバル演習』についての説明をするのだった。

サバイバル演習 前編

次の日…

「やー、諸君。おはよう！」

悪びれもせず、遅刻してくるカカシ。

「おっそーい！」

そんなカカシをサクラの怒鳴り声が迎える。

サスケは我関せず。

ナルトも諦めている為、何も言わない。

「……………」

リアクションの薄い二人に苦笑いを浮かべるカカシだった。

その後、カカシは時計を取り出すと、タイマーを操作する。

「よし、12時セットOK！」

「さて、演習内容だが…ここに鈴が二つある。これを俺から昼までに奪い取ることが課題だ。もし、昼までに俺から鈴を奪えなかったヤツは昼めし抜き。目の前の丸太に縛り付けた上に、目の前で俺が弁当食うから。」

「!？」

先日、今日の任務はキツくなるから朝ご飯は抜いた方が良いとカカシに説明されていた為、サスケとサクラは思わず冷や汗を掻いた。

むろん、この事を知っていたナルトはしっかりと食べて来ていたが…

「鈴は、一人一つで良い。二つしかないから必然的に一人は丸太行きになる。それから…鈴を取れなかったヤツは任務失敗ってことで失格だ。つまりこの中で最低でも一人は学校へ戻ってもらうことになるわけだ。」

「手裏剣を使っても良いぞ？俺を殺すつもりで来ないと取れないからな。」

カカシの説明は終わった。

サクラはカカシに手裏剣を向けると言う言葉に戸惑っていた。

「先生…確認だつてばよ？俺『たち』が、先生から鈴を奪えば良いん

だな？」

「ん？…ま、そうだな。お前『たち』が、俺から鈴を奪えれば合格だ。」
「？」

ナルトの確認の言葉とカカシの返答に疑問を抱くサスケ。

「じゃ、よいスタートで始めるぞ。『よいスタート』」

だが、深く考える前に演習が始まってしまった為、仕方なく場所を移動した。

それから…

ナルトも含め、基本通り姿を隠すサスケたち。

しかし、サスケ、サクラは史実通りにカカシにやられてしまう。

そして…

「後はナルト…お前だけだ。」

ナルトはそのタイミングを見計らった様に姿を現した。

「わかってるってばよ…」

「…は始める前に聞いておきたい事がある。お前は本当に『うずまきナルト』か？」

カカシはナルトを見ながら質問する。

「どういう意味だってばよ？」

「一応、俺たち担当上忍は受け持つ班員のアカデミーでの様子や成績、情報なんかを得ている。それによると、成績は断トツのドベ、授業中は居眠りばかり、イタズラ好きで、周りを巻き込んでバカやっては、イルカ教諭に呼び出されていた。集中力も無く卒業試験に三度も落ちる典型的な落ちこぼれ。だがミズキの事件の解決に協力したことで、その功績によりおこぼれで卒業できた…と。」

（改めて聞くと…俺ってば…ものすごく問題児だったなあ。ポルトなんて可愛いもんだ…イルカ先生…苦労かけてゴメンってばよ…）

カカシの言葉に、軽く落ち込むナルト。

「さて、その情報と昨日の様子から今日の演習の様子を見て考えると…どうにも違和感を覚えるんだよね。これが…」

「さて、ナルト…もう一度質問するぞ？…お前は本当に『うずまき

ナルト』か?」

鋭い目付きでもう一度同じ質問をするカカシ。

その質問は、ナルトにとって想定されたものだった。

今の自分はこの頃の本来の自分とは違う…

精神的にも実力的にも…

だから、あらかじめ九喇嘛と相談し用意していた返答をする。

「ああ…間違ひなく俺は『うずまきナルト』本人だってばよ?」

「だったら、この情報の食い違ひはどういう事なのかな?」

「三代目からは、何も聞いてないのか?」

「いや、特には聞いてないな。精々が…」

「俺が九尾を封印された子供だって事くらい…か?」

「……………ああ。」

カカシに先んじて、それを口にするナルト。

九尾を封印された子供…それは里にとってタブーにも似た存在…カカシは、後ろめたさを感じながら頷く。

「カカシ先生…カカシ先生なら、俺が里でどんな扱いを受けてきたか…知ってるんじゃないのか?」

「……………ああ。」

直接見た事は無いが、カカシもある程度想像が付いた。

「じゃあ、逆にこっちからも質問だ…そんな俺がかなりの戦闘能力を持っていてと里に知られたら…どうなると思うってばよ?」

「それは…」

「今まで俺を蔑んできた里の連中は、復讐を恐れて徒党を組んでの襲撃か、暗殺か、はたまた俺を追い出すのか…」

「つまり、学校では意図的に落ちこぼれを演じていた…と?」

「アカデミーの卒業試験を三度も落ちる落ちこぼれ…これだけ噂が広まれば取り合えず暫くは安泰だってばよ。小隊で、多少本気を出したところで、事実を知るのは小隊員と、三代目のじいちゃんのみだしな。」

「そう言う事か…」

カカシはようやく、合点がいった。

「それでナルト…：これだけは確認しておきたい。お前は木の葉の里の『敵』か？」

カカシは殺気を飛ばしながら聞いた。

「火影のじいちゃんにも言ったんだけどな。俺から木の葉に何かをやる気はねえってばよ。木の葉が俺や、俺の大事な人たちに敵対するなら話は別だけどな。」

「そうか…：」

しかし、ナルトはその殺気を受け流し、あろうことか苦笑しながら答えた。

サバイバル演習 後編

「そんなことより、演習を続けたいんだけど…。時間もそう無いし。」
カカシと対峙するナルトは、軽い口調で言った。

「ああ、お前の本気とやらを見極めさせてもらおうか。」

カカシは、気持ちを切り替えるとナルトに相對した。

「カカシ先生相手なら…。丁度良い戦闘訓練になりそうだってばよ。
頼むからあつさり負けないでくれってばよ?」

「言ってくれるじゃないの…。例えアカデミーで三味線を引いていた
と言っても、所詮はアカデミーを卒業したばかりの見習いに変わりは
ない。大人をなめてもらっちゃあ、困るな。」

この時、カカシが想定していたナルトの実力はサスケと同程度かや
や上…。位だった。

「別になめちやいなってばよ。だから…」

そこで一度言葉を切るナルト…。そして…

「少しだけ本気を出すってばよ。」

全身を九喇嘛のチャクラに包まれるナルト。

この時代に来て、初めて戦闘で九尾チャクラモードとなった。

「なっ!?…。ナルト…。その姿は…。」

ナルトの変化に驚くカカシ。ただ見た目が変わった訳ではないの
はすぐに、理解できた。

「俺は、自分の腹の中の九尾…。九喇嘛と和解している。この姿は九
喇嘛のチャクラと共鳴した姿だってばよ?」

「九尾と和解!?そんなことが…。」

「さて…。この状態の俺が、カカシ先生とどれくらい渡り合えるか…
試させて貰うってばよ。」

「なっ!?」

その言葉と同時にナルトの姿が消えた…。カカシがそう思った時
にはナルトはカカシの懐に飛び込んでいた…

「くっ!」

慌てて距離を取ろうとするカカシ。

だが、ナルトはそれを許さず攻撃を繰り返す。的確に、カカシに攻撃を加えていくナルト。

カカシは防戦一方となる。

ミズキの時の失敗を糧に、あれから自分の影分身を相手に組手を繰り返してきたナルトは、自分の力、体格、スピードなど、戦闘能力を完全に把握していた。

そして…

「あ…」

『チリーン』

「カカシ先生… いくらなんでもこれは無いんじゃないか？」

あっさり、カカシから鈴を奪うことに成功してしまうナルト。

「無茶言わないでくれる？ あんなスピードに付いていけないわけ無いでしょ…」

カカシが言い訳を口にする。

『この頃のカカシの小僧は腑抜けていたからな。お前が想定しているのは、オビトとの決戦辺りのカカシだろ？ 全盛期のカカシと比べてるからそう思っちゃもうんだろ。』

「なるほど…」

九喇嘛の言葉に、納得するナルト。

「それにしても… 油断しすぎには変わりないってばよ。この世界には、カカシ先生より強いやつなんて、いくらでもいるんだし、もうちよつと気を引き締めて欲しいってばよ。」

「…………… 面目ない。」

油断はその通りなので、謝るしかないカカシだった。

「それで… どうするってばよ？ この演習の趣旨とは違うんだらうけど、鈴を取れちまったんだし… 残りをあの二人と協力して取った方が良いのかな？」

ナルトの言葉に、少し考えたカカシだったが、

「ん、いや、お前はそのまま丸太に行ってくれ。それに、答えを知ってるお前が二人を誘導したら、あの二人の資質を見られないからな。」
そう言っつてナルトに指示を出した。

「了解…。」

チャクラモードを解いて、丸太に向かうナルト。

「末恐ろしいねえ… 全く…。」

その後ろ姿を見送りながら、ナルトの強さを思い出して、冷や汗を流すカカシだった。

それから数十分… 時計のアラームがなり、演習が終了した。

開始場所に集まった一同。

そしてカカシは、結果を伝える。

「さて、演習の結果だが… まずはうずまきナルト… 合格だ。」

「えっ?。」

「はっ?。」

ナルトの合格を、信じられない表情で見つめるサスケとサクラ。

その二人に鈴を見せるナルト。

(どうなってやがる… この俺が… 触るのがやっとだったってのに… 一体どうやって…)

サスケは、ナルトが見せた鈴を呆然としながら見ていた。

「それから、他の二人についてだが…。」

カカシの続きの言葉を口にする。

「ま、お前たちもアカデミーに、戻る必要は無いな。」

カカシの言葉に、サスケは満更でもない顔をした。

サクラも合格だと喜ぶ。

しかし、カカシの言葉には続きがあった。

「ああ… お前たち二人… 忍者をやめろ。」

「どういう意味だ。」

サスケは激昂して怒鳴り出す。

「お前らは忍者になる資格もないガキだって事だよ。」

その言葉に、サスケがカカシに掴みかかろうとした。

だが、あっさりと組伏せられる。

「だからガキだってんだ。お前ら忍者をなめてんのか? 何のために班ごとにチームを分けて演習やってると思ってる。」

「実を言うと、ナルトは鈴が取れなくとも合格にしていた。この演習

の意味を理解していたからだ。」

「ど、どういうことですか？」

サクラが、カカシの言葉を聞き返す。

「サクラちゃん。俺が始めに確認しただろ？…。」俺『たち』が鈴を奪えば良い”つて。この演習は、もともとチームワークを見るためのものなんだ。鈴の数を減らし、あえて争わせる状況を作る。それでもチームのために動けるかどうか…。それを見るのが、この演習の目的なんだつてばよ。」

「あんた…。気付いていたなら、どうして私たちに説明しないのよ。」ナルトの説明を聞いたサクラは、何故教えなかったのかと怒り出す。

「言った所で、アカデミーでドベだった俺の言うことに、耳を傾ける気があったのか？サクラちゃんは…。」

「それは…。」

ナルトの言葉に、思わず詰まってしまうサクラ。

「俺が出来るのは、二人へのヒントのためにカカシ先生に確認することくらいだったんだつてばよ。」

「先生…。確認だつてばよ？俺たちが先生から鈴を奪えば良いんだな？…」

「ん？…。ま、そうだな。お前たちが俺から鈴を奪えれば合格だ！サスケは、あの時の会話を思い出していた。」

「任務は班で行う。確かに忍者にとって、卓越した個人技能は必要だが、それ以上に重要視されるのはチームワークだ。」

カカシの説明は続いた。

「チームワークを乱す個人プレイは、仲間を危機に陥れ、殺すことになる。例えばだ…。」

そう言つてカカシはクナイを取りだし、サスケの首に当てると、

「サクラ。ナルトを殺せ。でないとサスケが死ぬ事になる。」

「そんな!？」

その言葉に固まるサクラ。

「悪いけど、サクラちゃんに殺されてやるわけにはいかないんだ…。」

だから… 抵抗させて貰うってばよ。」

強烈な殺気をサクラにぶつけて構えるナルト。

「ひっ!？」

サクラは、その殺気に腰を抜かしてしまう。

「ナルト… ちょっとやりすぎだ… まあ、こう言う事態になりかねないって事だな。」

「わりいってばよ。」

実は、サクラの軽すぎる態度に危機感を抱いたナルトは、この機会を利用して、サクラに緊張感を与えようと考えていたのだった。

その後、慰霊碑の話をしたカカシは、

「お前らに、もう一度だけチャンスやる。ただし、昼からはもっと過酷な鈴取り合戦だ。それから、ペナルティとして、お前ら二人は飯抜きな。ナルトは監視をしろ。もし、二人に食わせたなら、お前も失格にするから。」

そう言っ姿を消すカカシ。

「二人とも、もうカカシ先生はいなくなつたし、さつさと弁当食べるってばよ。」

「そんなことしたら、せつかく合格したのにあんたまで失格になつちやうわよ?」

「…。」

「良いんだってばよ。カカシ先生も言ってたろ?これから、俺たちはこの班で任務を行っていくんだって。それから別に俺に参加するなって言われてもいないし、午後からの演習… 俺も参加するつもりだ。三人で協力すれば、残りの鈴も奪えるってばよ。」

「… ナルト… 今まで私はあんたをバカにして来たのに… ゴメン… ナルト。ありがとう。」

「… スマン」

二人はナルトに感謝しつつ、弁当を食べ始めた。

その時、カカシが三人に向かい突進して来た。

そして…

「お前ら。合格。」

カカシはにっこりと、笑い三人に合格を告げるのだった。

誓い

「サバイバル演習を終えたナルトは、一人……木の葉の街中を歩いていた。」

相変わらず、ナルトを見る木の葉の人々の目は冷たく、憎悪や嫌悪に揺れていた。

それらの視線を意に返すこと無く、歩き続けるナルト。

そして、町外れに辿り着くと、ふいに立ち止まる。

そして……

「さっきから俺の後を付けてるみたいだけど…… なにか用でもあるのか？ カカシ先生……」

その言葉に、姿を現すカカシ。

実は、カカシは演習を終え、解散した後ナルトを尾行していたのだ。「俺の気配を捉えるとはね…… 本当に恐ろしいガキだよ。お前さんは……」

「で？ 用事は？」

ナルトはカカシに向き合うと、単刀直入に用件を聞いた。

「なに、そう大した用事じゃないよ。演習中じゃ、時間をとって話す事も出来なかったからな。もう少しお前さんと話がしたかったんだ。後を付けていたのは…… ま、里の連中のお前に対する扱いを、この目で見ておきたくてね……」

「それで？ 直接見た感想はどうだったってばよ。」

カカシはその言葉に肩を落としながら、

「正直…… すまないといしか言えない。お前が迫害を受けていると言う情報は知っていた。だが…… 実際に目の当たりにして、ここまで酷いとは思っていなかったよ…… 本当にスマン…… ナルト。」

ナルトに謝罪した。

「…… 別にカカシ先生のせいじゃ無えよ…… 謝る必要は無いつてばよ。」

カカシの謝罪に、それは不要であると告げるナルト。

「はつきり言って…… なぜお前が木の葉を憎まないでいられたの

か…俺には不思議で仕方がないよ。」

カカシは、自分の疑問を口にする。

「憎んでたつてばよ…自分はいらぬ存在なんだと思った事もある…でも、そんな運命に逆らいたいと、火影を目指した。火影になれば、皆に認めて貰えると思つたから…」

ナルトは、昔の自分を思い出しながら、トツトツと語る。

「でも、火影になつたからと言って、里の全ての人が認めてくれる訳じゃ無いんだつてばよ…だから今は…今の俺は…木の葉に対して何も感じていないんだつてばよ。憎しみは無い…でも愛着も無い。」

「ナルト…お前…」

カカシはナルトと改めて話して理解した。

ナルトは木の葉の里に失望しているのだと。

怒りも、憎しみも通り越し…ただ諦めてしまっているのだと。

「ナルト…お前は木の葉の敵か？」

カカシは自然と、演習でした質問をもう一度問いかけていた…それほど、木の葉の里に対する思いを口にするナルトの目は空虚だった。

「またその質問か？まあ、俺の力を知っていれば復讐されないか心配で恐ろしいんだろうけどな…」

同じ質問をするカカシに苦笑するナルト。

だが、その感情は理解できた。だから、答える。

「一つだけ言つて置く。俺がその気になれば、木の葉を消し飛ばすのは簡単な事なんだつてばよ。」

「何？」

ナルトの言葉に驚くカカシ。

「演習の時に言つたよな？俺は九尾の力を自在に操れる。当然、戦略級の力があるに決まってるつてばよ？」

「昼間のあの姿が全力じゃなかったのか？」

「少しだけ本気を出すとは言つたけど、あれが全力だなんて一言も言つてないつてばよ…本気と全力は違う。カカシ先生だつて、昼間

のあれが全力じゃないんだろ？」

カカシはその言葉に戦慄を覚えた。

演習の時の状態でさえ、自分を超えているかもしれないと感じていた。それに、左目の存在にも気付いている様な言動にも驚いていた。

(これじゃあ、例え左目の写輪眼を使ったとしても…)

「今の所、木の葉と敵対する気はねえってばよ。」

カカシが自分に恐れと不安を感じている事を察したナルトは、改めて自分に木の葉と敵対する気が無いことを告げる。

しかし…

「俺は、自分が守りたいと思う存在を決めてる。だから、守りたい人を守る為にこの力を使うってばよ。」

「もし、俺が木の葉に敵対するとしたら、木の葉がソイツに手を出した時だってばよ。その時は…どんな手を使っても…必ず木の葉を消し飛ばす…」

その言葉を口にしたナルトの表情は、カカシをしてゾツとするほどの怒りの表情だった。

もしその存在に手を出せば、間違いなく木の葉は跡形もなく消されるだろう… そう確信するほどに…

だが、逆にその存在に手を出さえしなければ、ナルトからは、何もする気は無いという事も確信できた。

「ちなみに、その大切な人って言うのは…誰なのかな？」

カカシは、その存在だけは何かあっても守ろうと考えた。木の葉のために。

その質問に、ニツと笑うナルトは、やがて口を開く。

『日向ヒナタ』… だってばよ。」

(俺は必ずヒナタと一緒にいる。そして…今度こそヒナタを…これから生まれてくるボルトやヒマワリを幸せにするってばよ)

ヒナタの名前を口にしたナルトは、改めて今の自分の夢を実現して見せると心に誓ったのだった。

『波の国編』波の国へ

ナルト達が第七班として活動するようになってから、それなりの日にちが経過した…

ナルトにどれほど規格外の力があつたとしても、アカデミーを卒業したばかりの下忍である事に代わりはなく、第七班として、見習いが受けるような任務をこなしていた。

この期間ナルトは、任務を終えるとヒナタと日が暮れるまで修行を行い、帰宅すると言うサイクルで生活していた。

修行と言っても、基本的にヒナタへの指導がメインになるのだが…

流石に木の葉丸に螺旋丸を教えていた時とは違い、上忍になるためにかなり勉強をした今は、普通に言葉で教える事は出来ていた。

ましてや、ナルトが行う修行は三忍の一人、自来也に教えられた修行でもある。ヒナタもまた、着実に力を上げていった。

それから、さらにしばらく経つたある日、今日の任務の報告の為に火影室に集まる第七班。

無事に任務達成の報告をすると…

「さて… カカシ隊、第七班の次の任務は… と… ん、老中様のぼっちゃんの子守りに、隣町までのおつかい… 芋掘りの手伝いか…」

ヒルゼンが次の任務候補を告げる。

そこに、

「おい… もつと歯応えのある任務は無いのか？ 雑用をするために俺は忍者になった訳じゃ無いんだぞ？」

とうとう、サスケの我慢が限界に達した。

本来であれば、ここで駄々をこねるのはナルトであるハズなのだが、精神的に大人のナルトがそんなことをするハズもない。

サバイバル演習で、ナルトだけが鈴を取れたと言う事実にも、それ以来ナルトを意識しているサスケは、これまでの任務のナルトの動きや言動を見て、アカデミーにいた時のナルトとは別人だと答えを出して

いた。

勿論、ナルトの本当の実力まで見抜けていた訳では無いが、それでもナルトにライバル意識を持ち、ナルトを超えなければ、兄を殺せるだけの力も得られない。

そう考え、焦りを覚えていたため、雑用ばかりの任務に嫌気がさしていた。

(俺は強くならなきゃならないんだ。ナルトよりも、カカシよりも…そしてイタチよりも。)

「サスケ。お前はまだ、ペーパーの新米だろうが。誰でも初めは簡単な任務から場数を踏んで繰り上がっていくんだ。」

イルカが、サスケを嗜める。

そんなサスケに…いや第七班の下忍たちに向けて、任務の重要性について説明を始めるヒルゼン。

だが、それを聞いてもサスケの焦りは変わらない。

「俺は、強くならなきゃならねえんだ。」

いつになく、強い口調で声を張り上げるサスケに、ヒルゼンはため息を一つ付くと、

「わかった。お前がそこまで言うのなら、Cランクの任務をやってもらう…ある人物の護衛だ。」

そして、火影室に入室してきた護衛を頼んだ依頼人。

「なんだあ？超ガキばっかじゃねーかよ。」

そう言っに入ってきた依頼人は、ナルトを見ると、

「特に、その一番ちっこいアホ面…お前…それ本当に忍者か？」
そう言っつてバカにする…そう…ナルトにとっては懐かしい人物…タズナであった。

「ちよつとナルト。あんな事を言われて腹が立たないの？」

サクラはタズナのあまりの言動に、少しだけ腹を立てていた。

第七班としてナルトと一緒に任務をこなしていくうちに、サクラのナルトに対する評価はかなり上がっていたのだ。

そのナルトがバカにされる様な事を言われた為、サクラは怒っていた。

しかし…

「別に良いってばよ。見た目がどうかなんて、忍者には関係ないしな。依頼人はあのおっちゃんの方で、俺たちはあくまで仕事を受ける側なんだってばよ。依頼人が任務を託すのに不安を感じるってんなら、それは仕方がないってばよ。」

「ほう…」

タズナは、ナルトの言いように感心していた。

バカにされたことを怒る事もなく、淡々と自分のすべき事を理解している。

それに、自分の力に自信があるからこそ、他人の評価を気にしていないのだと、感じられた。

「いや… 超すまんかった。お前たちに依頼を頼みたい。」

タズナは、ナルトの評価を改めると、依頼内容について説明を始めた。

その内容は、まずはタズナを国に送り届け、そこからはタズナが橋を作り終えるまでの間の護衛と言う事だった。

移動は翌日と言う事になり、その日は解散となった。

「そっか… ナルト君、任務で里の外に行くことになったんだね。私たちはまだ、そんな任務は請け負った事無いよ。」

「大丈夫だってばよ。そんなに長い間って訳じゃねえから。それよりも、ヒナタに渡しておきたいものがあるんだってばよ。俺の手を握ってくれるか?」

「え?う… うん。」

ナルトの言葉に少し顔を紅くしながら、ナルトの手を握るヒナタ。すると、ヒナタの全身をチャクラの塊が覆った。

「ナルト君… これ…」

自分の体を覆うチャクラを、驚きながら見つめるヒナタ。

「そのチャクラが、ヒナタを守ってくれてるってばよ。少しするとその全身を覆ってるチャクラは見えなくなるけど、ヒナタの体の中に宿り続けている。一月位は持つハズだってばよ。俺がいない間、気を付けてくれってばよ?」

「うん… ねえ… ナルト君。明日、出掛ける前にナルト君の家に行って良いかな?」

突然、そう言い出したヒナタ。

「え? ああ構わないってばよ?」

「じゃあ、約束ね?」

そう言つて、ヒナタは帰っていった。

次の日…

「ナルト君。おはよう。」

約束通り、ヒナタはナルトの家を訪ねて来た。

「ああ、ヒナタ。おはよう。」

「あのね? ナルト君… これ作ってきたんだ。昨日のお礼。」

そう言つて、ヒナタは手作りのお弁当をナルトに差し出した。

「食べてくれるかな?」

少し上目使いで、自信無さげに聞くヒナタ。

「勿論だつてばよ。スツゲー嬉しい。ありがとなヒナタ。」

ナルトは本当に嬉しそうにヒナタにお礼を言った。

「あ、あのね。ナルト君。もう一つ… あげたいものがあるの…」

ヒナタは真つ赤な顔をしながら、ナルトに告げる。

「うん? なんだつてばよ?」

そう言つて、ヒナタを見ると…

ヒナタが顔を近づけて来て… ナルトにキスをした。

「その… 行つてらっしゃい。」

一瞬、何をされたのか解らなかつたナルト…

まさか、この時期のヒナタがこんな積極的に何かをするとは思つてもいなかつた。

(ハハッ… やられたつてばよ…)

してやられたナルトだったが、照れながらも嬉しそうに笑うと、

「それじゃ… 行つてきます!」

ヒナタに返事を返して出発した。

ちなみに… その日のヒナタは、一日中テンションが上がりっぱなしだったそう…

襲撃

木の葉の里を出発してしばらく…

一同は、現在昼食を取っていた。

「うわ… ナルト。随分と豪華なお弁当ね…」

ナルトの弁当を、見たサクラが驚きの声をあげる。

「ああ… 愛妻弁当ってやつだったよ。」

「愛妻弁当って… あんた意味わかって言ってるの？」

満面の笑みで答えるナルトに、少し引いてしまうサクラ。

（愛妻弁当って… どうせ親が作ったんでしょ？あ… でもナルトって親がいないのよね… じゃあ、自分で作った？いや、いつもカツプ麺ばかりって言ってたし… じゃあ本当に誰か女の子が？いやいや、それは無いわよね… ナルトに惚れるような女の子なんているわけ無いし…）

これまでの任務でナルトの評価を改めたが、それでもナルトが、モテると思っていないサクラだった。

「……………」

その一幕を見ながら、カカシはその弁当を作った人間にアタリを付けていた。そして…

（ナルトがいないからって、変にヒナタにちよっかい出したりしないかね… うちの上層部… 特にダンゾウの一派は… もしナルトの逆鱗に触れたら木の葉は滅亡だ… 火影様がちゃんと止められていたら良いんだけど…）

あり得る想像に、肝を冷やしていた。

「……………」

サスケはナルトの幸せそうな笑みを複雑な表情で見ている。

少し前までは、自分と似ている… そう考えていたナルトが、まるで別人に思えてならない。

その感情が、寂しさから来るものか、嫉妬から来るものか、それとも怒りから来るものか… 今のサスケには理解できなかった。

昼食的一幕からさらに時間が経ち、ナルトたちは一路、タズナの国

である波の国へ向けて、歩を進めていた。

その道すがら、サクラが波の国に忍がいるのかと今カカシに聞いた。

カカシの説明で波の国には忍がないが、他の国には忍がいると知るサクラ。今回の任務で他国の忍と戦闘にならないか不安になる。

「ま、安心しろ。Cランクの任務で忍者対決なんてしやしないよ。」

カカシはサクラを安心させるように、話した。

タズナは、その言葉に少し後ろめたそうな顔をした。

一同がそんなやり取りをしている中、ナルトはと言うと… 九喇嘛と会話をしていた。

『ナルト… お前、今回の任務… どう動くつもりだ?』

「どうって?」

『例の二人の事をどうするのかって事を言つとるんだ。』

「ああ… 再不斬と白の事か…」

九喇嘛の言っている意味を、ようやく理解できたナルト…

ナルトは少し考えたあと…

「そう… だな… 俺は… 成り行きに任せようと思う…」

『そりやどう言う意味だ?』

「確かに、あの二人は助けられるなら助けてやりたい… そう思う。でも… 今の俺にはそんな余裕は無いんだってばよ。手を差し伸べる機会は作るつもりだ。でも、その手を掴む気がないヤツまで救う気はないんだってばよ。」

『要するに、救われたいと二人が望めば助けるってことか?』

「そう言うことだな… 今の俺に… 全てを救うなんて気なんて無いんだってばよ。俺が救いたい… 守りたい人… そこには明確に優先順位があるって事だ。」

『ふんっ。(結局、救おうと行動はするんじゃないやねえか)』

未来に… 世界に絶望し、一見、冷たく変わってしまったように見えるナルト。それでもナルトの本質は変わっていない。九喇嘛は、そう感じるのだった。

それから、さらに少し歩いていると、ふいに水溜まりが見えた。

それを見たナルトは…

(確か…霧隠れの中忍だつてカカシ先生言つてたな。でも…雨も降つてないのに水溜まりつて…霧隠れの忍はバカなんじゃねえか?)

『お前に言われたらおしまいだな。それに昔のお前は気付いてもいなかったじゃねえか。』

(うるせえぞ。九喇嘛。自分がバカなのは、俺自身がよく知つてるつてばよ。それに昔は昔だつてばよ。)

九喇嘛とのやり取りをしながらも、カカシに視線を向けるナルト。当然カカシも気付いていた。

(敵の目的が知りたい…少し泳がせとけ。)

(了解)

目で会話をする両者。

その時、水溜まりから二人の忍が現れ、カカシを襲つた。

襲撃者はカカシを鎖で拘束すると、鉤爪の様な武器を使い、カカシをバラバラにしてしまう。

「二匹目…」

目の前でバラバラにされるカカシを見て、一瞬固まるサクラ。

だが、すぐに思い直して、タズナのガードに入る。

(カカシ先生がこんな簡単にやられるハズない。)

サクラの様子に、頷くナルト。

(やっぱ…演習の時に、強めの殺気を浴びせておいて正解だつたつてばよ。不測の事態でも、冷静に考えられてる。)

「二匹目…」

襲撃者は次にナルトをターゲットにする。

ナルトを背後から襲撃する忍たち。

その攻撃をナルトは間一髪(といった感じに装つて)かわした。そこにサスケが割つて入り忍たちに攻撃を加える。

忍たちは、全員殺すのは難しいと考えたのか二手に別れた。

一方はナルトに。

もう一方はタズナと、それを守るサクラに向かった。

(私がタズナさんを守らないと...))

サクラはタズナを守るために前に出てクナイを構える。

敵の忍がサクラに攻撃を加える数瞬間に...

「やらせるか!」

サスケが間に割って入った。

だが、さらにその前で攻撃を止めるものがいた。

変わり身で攻撃をかわしていたカカシであった。

カカシは、忍の攻撃をあつさり止めるとそのまま敵を拘束してしまふ。

サスケがもう一人の方を見ると、既に倒されていた。

(カカシがやったのか?それとも...))

サスケが考えていると、カカシがタズナに質問をしていた。

「タズナさん。こいつらのターゲットは、間違いなくあなただった。我々は、あなたが忍に狙われているなんて話は聞いていない。依頼内容は、ギャングや武装集団からの護衛だったはず。これだとBランク以上の任務になる。何か訳ありみたいですが... 依頼で嘘を持ち込まれては困ります。これだと、我々の任務外つてことになりますよ?」

「この任務、私たちにはまだ早いわ。やめましょう。」

カカシの説明に、便乗するように中止を促すサクラ。

「んー... こりゃ荷が重いな。」

「フン... 帰りたいきや帰れ。俺は任務を続行するぞ。」

カカシが中断を決めようとしたときに、サスケが宣言した。

(命がけの戦闘... 俺はこういう任務を待ってたんだ。実戦ほど、自分の戦闘能力を上げる手段は無い。)

サスケの宣言に、どうしたものかと悩むカカシ。

そんなカカシに、タズナが声をかけた。

タズナは本当の依頼内容を話す。その内容は、間違いなくBランク以上のものであった。

「しかし、わかりませんね。相手は忍すら使う危険な人物。なぜそれを隠して依頼されたのですか?」

カカシの当然の疑問に対し、

「波の国は超貧しい国じゃ。大名ですら金をもっていない。もちろんワシらもそんな金はない。高額なBランク依頼をするような…」

タズナは暗い顔で言った後に、続けて、

「まあ、おまえらがこの任務をやめれば、ワシは確実に殺されるじやろう… なーに、お前らが気にすることじゃない。ワシが死んでも10歳になる孫が一日中泣くだけじゃ。あ、それにワシの娘も木の葉の忍を恨んで一生寂しく生きていくだけじゃ。いや、なにお前たちのせいじゃない。」

そう言って笑った。

そのあまりの言動に、げんなりするカカシ。

「カカシ先生… ひとまずこの任務… 継続しようってばよ。」

その話を聞いてから、ナルトも任務を継続するようにカカシに話した。

それを見たタズナは「勝った」そう思った。

だが、ナルトは一言タズナに告げる。

「タズナのおっちゃん。」

「なんじゃ？」

「俺たちが任務を継続する… それは良いってばよ。でも…」

「あんたが、依頼内容を隠してた事で俺たちが死んでたら… あんたはどうしてたんだ？」

「そ、それは…」

「もし、嘘をついたまま俺たちが死んだら、例えば橋が完成したとしても、あんたはその橋を誇れるのか？」

「……………」

「あんたに、帰りを待つ家族がいるように、俺たちにだって帰りを待つ仲間や、家族がいるってばよ… その所… 少しで良いから考えて欲しいんだ…」

「… そう… じゃったな… 正直… 超スマンかった…」

ナルトの言葉を聞いたタズナは、土下座をしてナルトたちに謝罪した。

「タズナのおっちゃん。顔を上げてくれ…」

「ワシを許してくれるのか？」

「ああ… それに言ったってばよ？ 任務続行だって… 良いだろ？ 先生？」

「ま… 仕方ないかな…」

「ハア… わかったわよ。」

ナルトの宣言に、同意する二人を見て改めてタズナは頭を下げるのだった。

対決！鬼人再不斬

ナルトたちは、無事波の国に到着した。

そこからタズナの家を目指し、歩みを進めていると……
ふいにナルトが手裏剣を構え、森に向かって投げた。

その手裏剣に刺さり、絶命しているウサギ。

「こら、ナルト。なんてことするのよ。」

それを見たサクラが、ナルトを叱る。

だが、カカシはそのウサギが変わり身のために用意されたウサギだと理解していた。

その時、何かに気付いたカカシが大声で叫んだ。

「全員伏せろ！」

その言葉に反応したナルトは、サクラを庇いながら伏せる。

サスケもまた、タズナを引き倒しつつ伏せた。

頭の上を何かが通りすぎる。

それは巨大な剣であった。

木に当たり、深々と刺さった巨剣の上、そこに一人の忍が立っている。

カカシはその忍に見覚えがあった。

「へー……こりやこりや……霧隠れの抜け忍……桃地再不斬君じゃないですか。」

『早速お出ましたな……どうする？ナルト……』

九喇嘛はナルトにどうするか尋ねるも、

「……とりあえず様子を見るってばよ。」

様子見を告げるナルト。

「邪魔だ……お前ら……下がっている。こいつは……さっきのやつらとは桁が違う。」

緊張したカカシの声が辺りに響く。

「写輪眼のカカシと見受ける……悪いが……じじいを渡してもらおうか？」

再不斬はカカシに言い放つ。

カカシはそれには答えず、ナルトたちに指示を出す。

「卍の陣だ。タズナさんを守れ。お前たちは戦いに加わるな。それがここでのチームワークだ。」

そして指示を終えたカカシは、

「再不斬… まずは… 俺と戦え。」

そう言つて、左目の額当てを上げるのだった。

「ほー… 噂に聞く写輪眼を早速見れるとは… 光栄だね。俺様が霧隠れの暗殺部隊にいた頃、携帯していた手配書にお前の情報が載っていたぜ？千以上の術をコピーした男… コピー忍者のカカシ…」

「さて… 俺はこのじじいを殺さなきゃならねえんだが… その為にはカカシ… お前を倒さなきゃならねえようだ。」

そう言つて、再不斬は湖に移動すると水の上に立ちチャクラを練る。

『忍法… 霧隠れの術』

再不斬の術が発動し、辺りを霧が包み込んだ。

霧は、どんどん濃くなつていき、ほとんど何も見えない状態になる。

「まずは、俺を消しに来るだろうが… 桃地再不斬… こいつは無音殺人術の達人として知られた男だ… お前たちも気を抜くな。」

カカシは、サスケたちに指示をする。

すると、辺りから強烈な殺気が漂う。

カカシは、より集中しつつ構えた。

ナルトは、特に反応を示さず。

サクラは、演習の時にナルトから受けた殺気のおかげか、多少耐性が出来ていて、少し緊張する程度で構える。

しかし、サスケはその強烈な殺気に冷や汗を流し、体を震わせる。

「サスケ… 安心しろ。お前たちは俺が死んでも守つてやる。」

カカシは、そんなサスケを安心させるように声をかけると、振り向いて、

「俺の仲間は、絶対殺させやしないよ。」

そう言つて笑いかけた。

—それはどうかな… —

それと同時に、卍の陣で固まっていたナルトたちの間から、再不斬が姿を見せる。

「終わりだ…」

再不斬がタズナごと、ナルトたちを斬り殺そうとした、その瞬間…カカシが間に入り、クナイで再不斬を刺す。

さらにカカシは、タズナ、サクラ、サスケを突飛ばして距離を取らせた。

ナルトは自分で飛び距離を取る。

だが、カカシが刺した再不斬は、再不斬の作った水分身であった。カカシの背後に再不斬が現れ、カカシを真つ二つに斬り裂いた。

しかしそのカカシもまた、カカシが再不斬の水分身をコピーした偽物であった。

カカシは、再不斬の後ろに立ち、クナイを首に当てると、

「終わりだ！」

静かに再不斬に告げた。

だが、それもまた再不斬の水分身で作った偽物…

二人の戦いは続き、湖に蹴り飛ばされたカカシは、再不斬の『水牢の術』により、囚われてしまう。

「くっ… しまった。」

カカシは、自身の失態を悔やむ。

「さてと… カカシ… お前との決着は後回しだ。まずは、あいつらを片付けさせてもらおうぜ？」

再不斬はそう言うと、水分身の術を使い分身を作り出した。

分身の再不斬がナルトたちを見る。

身構えるサスケとサクラ。

そしてナルトは…

「ハア…」

溜め息をひとつ付くと、カカシに向かって声をかけた。

「カカシ先生… あんなにかっこ良く出ていったのに… いくらなんでも、これは無いんじゃない？ 演習の時にも言ったってばよ。カカシ先生は油断をし過ぎだって。」

「ハハハ… 面目無い…」

カカシは、ナルトのツツコミを笑って誤魔化した。

二人の会話を聞いていた再不斬は、違和感を覚えた。

(どういうことだ？こんな状況だつてのに、カカシのヤツは少しも焦っている様子がない…。それに、あのガキ…。戦闘中だつてのにまるで緊張している様子がねえ。)

「…少し、仕掛けて見るか…」

今までの戦闘で、ナルトに別段目立った行動は見られなかった。しかし、どうにも気になった再不斬。

分身体にナルトを攻撃させる。

「ナルトオ…」

「キヤアアア…」

瞬時に自分達の前に現れた再不斬の分身体は、その巨大な人斬り包丁を一気にナルト目掛けて降り下ろした。

だが、その攻撃はナルトの横に外れていた。

「え？ハズレたの？」

サクラは、わざと外したのかと不思議に思いながらも、ナルトが助かったことに安堵した。

「違う…。ナルトが…。あの攻撃をかわしたんだ…」

だが、サスケには見えていた。再不斬が人斬り包丁を降り下ろす瞬間、ほんの少し…。ナルトが横に移動したのを…

ナルトは最小の動きで再不斬の攻撃をかわしたのだと…

だが、ただ見えていたのと動けるのではまるで違う。

サスケは、自分があの攻撃をかわせるとは到底思えなかった…

(クソ…。どうなってる。演習の時と良い、なんでナルトのヤツがこんなに強いんだ…)

「さてと…。それじゃあ少しだけ…。反撃するつてばよ。」

ナルトは一言呟くと、九尾のチャクラを纏った。

「な？なんだアレは…」

「え？何？ナルトのヤツ…。どうなってるの？」

初めて九尾チャクラモードを見たサスケとサクラは、その姿に驚愕

する。

「はっ！」

ナルトが目の中の再不斬の分身を殴ると、あっさりと水に戻ってしまった。

「なんだ…あのガキは…」

その様子を見た再不斬もまた驚いていた。

「言ってなかったけど…あの子…『うずまきナルト』は俺より強いよ？」

カカシが再不斬に話し掛けた。

その瞬間、ナルトが再不斬の目の前に現れた。再不斬をして、まるで動きが見えなかった。

「くっ」

ナルトは、軽く再不斬を殴り付ける。

再不斬はその衝撃で後方に吹き飛んだ…それと同時に水牢の術も解ける。

「助かったよ…ナルト。」

「俺が助けるのは、ここまでだってばよ？後は、カカシ先生に任せる。」
礼を言うカカシに、助けるのはここまでだと告げるナルト。

「え？最後までやってくれないの？」

カカシはこのまま選手交代だと思っていたが、

「まずは…俺が相手だ…」

「俺の仲間は、絶対殺させやしないよ…」

「……………」

これまでのカカシの言動を真似するナルト。

「カカシ先生…あんなだけ格好いいこと言っただから、最後までいビシッと決めてくれてやってばよ。」

「ハア…わかった…わかりましたよ…俺がやれば良いんでしょ？」

溜め息をひとつ付くと、再不斬に向き直った。

「カカシ…そいつは一体何者だ？」

ナルトの強さやチャクラを纏うと言う、聞いた事もない術を使うナ

ルトに、再不斬は聞かずにはいられなかった。

「俺は…うずまきナルトだ。それ以外の何者でもねえつてばよ…」

それに答えたのはカカシでは無く、ナルト。

「敢えて言うなら…俺は…九尾の人柱力だ…」

「人柱力…だと?…そうか…お前が…」

「ナルト…それは機密事項だ。」

「俺に、そんな命令は出てないつてばよ?」

カカシがナルトを嗜めるが、ナルトは笑って答えた。

「それよりも、カカシ先生…再不斬を任せたってばよ?」

その言葉に、カカシは再不斬の方に意識を集中した。

ナルトが気になる再不斬だったが、カカシとて油断できる相手ではない。再不斬もまたカカシに集中した。

その後の展開は、ナルトが知る通りのものとなった。

写輪眼に翻弄される再不斬。

そして…

「お前には、未来が見えるのか?」

「ああ…お前は…死ぬ。」

カカシが無情に、それを告げたその刹那…

再不斬の首に千本手裏剣が突き刺さった。

白との邂逅

再不斬の首に千本手裏剣が突き刺さった。

それを放った人物……お面を被った子供が姿を表す。

カカシは再不斬の脈を計り、確かに心臓が止まっていることを確認した。

(白……)

ナルトはその人物を見て、少しだけ感傷に浸っていた。

恐らく、自分にとつての忍の原点は彼と、再不斬の不器用なまでの生き様……そしてその最後……それに反発したいと、心から願った事が始まりだったと思う。

ナルトが感傷に浸っている間に白とカカシのやり取りは終わり、白は再不斬を連れて姿を消した。

戦闘は終わった。

カカシは額当てで左目を隠すと、一つ溜め息を付く。

「ぎ……俺たちもタズナさんを家まで連れていかなきゃならない。元気良く行くぞー。」

その掛け声と共にカカシは倒れた。

写輪眼の使い過ぎによるものだった。

「ハア……カカシ先生……締まらないってばよ……」

ナルトは、呆れながら一つ溜め息を着いた。

(さて……白はアレに気付くかな?)

ナルトはこの戦いで、あることを仕掛けていた。白達を救おうとするナルトの手を取るか……その一つ目の試しだった。

しかしそれに白が気付けずに、このまま敵対したとしても仕方がないと覚悟もしていた……

一方その頃……

白は、ナルト達から離れた場所で、再不斬の蘇生を行おうとしている

た。

再不斬の口布を切ろうと、クナイを近づける白の手を、再不斬が掴んだ。

「良い……自分でやる。」

再不斬は、自力で蘇生していた。

「一週間程度は痺れて動けませんよ？……でも再不斬さんならじきに動けるようになりますかね？」

「次……大丈夫ですか？」

「次なら……写輪眼を見切れる。だが問題は……」

再不斬は、先の戦いでカカシの攻略についてある程度予測を立てていた。しかし……

「あの少年……ですネ？」

そう……問題はもう一人……カカシをして自分より強者であると断言させた少年……その少年の実力は把握できていない……

「うずまきナルト……とか言ったな……」

「彼は……何者なのですか？」

「ヤツは……人柱力……尾獣と呼ばれる意思を持つ巨大なチャクラの塊……それを体に封印されたものだ。」

「なるほど……それでアレほどのチャクラを……」

再不斬の説明を聞いて、あのチャクラの衣を纏ったナルトの姿を思い出す白。

寒気がするほど強大なチャクラだった。

自分は、彼と正面から戦って勝てるだろうか……

自問自答する白……

「木の葉は過去、人柱力の封印が解かれて、尾獣が暴れまわったことがあるそうだ……そんなものを内に抱えて、ヤツはどんな生き方をしてきたのだろうか……」

再不斬は独り言のように呟いた……

「……………」

白はその言葉に想像する……

人は弱い……自分より強いもの……得体のしれないもの……嫉妬

し、或いは恐怖してそれを排除しようとする。

自分の父が母を殺したように…。そして父が自分を殺そうとしたように…。

(あの子も…きつと…)

ナルトの境遇に思いを巡らしていた白は、再不斬の口布…。その間に何か挟まっている事に気付いた。

「再不斬さん…。ちよつと失礼します。」

白はそれを取り出す。

(手紙?)

「白…。なんだそりゃ?」

「再不斬さんの口布…。に挟まってたんですけど…。」

その内容を見た白は、冷や汗を感じた。

差出人はうずまきナルト…。

そして、その宛先は…。自分だった。

(僕と再不斬さんの関係に気付いていた? いや、そもそも、なぜ僕の名前を…)

「白…。何が書いてある…。」

『白へ…。話したいことがある。六日後、指定の場所まで来てほしい。うずまきナルト。』

「な…。どういうことだ…。あいつはお前を知っているのか?」

その内容に、驚く再不斬。

(考えられるのは白とナルトが知り合いだった…。もしくは、既に自分達の情報が出回っていたか…。いや…。それはあり得ない…。もしそうなら、カカシがあの時見逃すハズが無い。)

「そんなハズはありません…。僕は彼とは初対面のハズです。」

白は、驚きながらも答える。

「だったら、一体これはなんなんだ…。」

「……………わかりません。」

再不斬は、冷静になるため軽く息をはく。そして…

「……………わかった。一先ずそれは良い。それで…。どうするんだ?」

「え？」

「ヤツに… うずまきナルトに会いに行くのか？」

手紙の内容… それについてどうするかを白に尋ねる。

「僕は… 話してみたいです… 彼と…」

「… 好きにしな。」

再不斬は、そう言うど力を抜いた。

まだ回復には時間がかかる。

ナルトに対する対策も思い付かない。ナルトは再不斬との戦い、あきらかに手を抜いていた。

現状、勝てる要素が見つからない。

ならば、直接白が会うことで、少しでも情報を得られれば… そう考えていた。

・

・

・

一方、ナルト達は、倒れたカカシを運び、なんとかタズナの家までたどり着いていた。

「大丈夫かい？先生。」

タズナの娘、ツナミが寝込んだカカシに声をかける。

「いや… 一週間程、動けないんです。」

カカシの返答に、

「なあによ。写輪眼って凄いけど、体にそんなに負担がかかるんじゃないよ。」

サクラが、カカシの様子に呆れていた。

「そう言えば、凄いつて言えばナルト… あんた一体なんなの？」

サクラが再不斬との戦闘を思い出して、ナルトに聞いた。

「なについて？」

「おかしいじゃない。アカデミーでドベだったあんたが、なんであんなに強いんだよ。」

サクラの追及は続く。

「そうだ。演習の時から、おかしいとは思っていたが、お前アカデミー

では落ちこぼれを演じてやがったのか？それに、あのチャクラを纏った姿・・・アレはなんだ？」

サスケも、ずっと疑問に思っていたことを聞く。

サスケは、演習の時から不審に思っていた。

なぜ、ナルトだけが鈴を取れたのか。

なぜ、ナルトは演習の目的に気付けたのか？

アカデミーでのナルトからは考えられなかったのだ。

それからの任務では目立った動きこそしていなかったが、それでもアカデミーの頃のナルトなら、自分が活躍しようとして躍起になり、足を引っ張る位はしていたハズなのだ。

二人の注目を集めたナルトは・・・

ちらりとカカシを見ると、

「まあ、アカデミーでの話はサスケの言う通りだつてばよ？」

「落ちこぼれを演じてたつてこと？なんでそんなこと・・・」

サクラがその言葉に疑問を持つ。

「そうする必要があった。俺が言えるのはここまでだつてばよ？」

「どういう事よ？」

サクラは理解できない。ナルトの境遇を知らないが故に。

だが、サスケは気付いた。ナルトの境遇を知るが故に。理由は知らないが、ナルトは里の大人達に迫害を受けていた。理由は知ら

ないが、そんなナルトが力を持つと知られたら・・・恐らく里の者達は大勢でナルトの排斥に動くだろう。

「そうか・・・ならそれは良い。だが・・・あの力はなんだ？あんな術・・・見たことも聞いた事もない。」

サスケは更に迫及する。

「それは・・・話して良いの？カカシ先生。」

「ダメ。言ったでしょ？機密事項だつて。」

しかしカカシがそれを止める。

「そんな。」

「ちっ。」

「それよりも・・・さつきからどうにも引っ掛かっている事があるんだよ

ね…」

「引っ掛かるって？なにが？」

サクラが聞くが、それには答えずカカシは考えに没頭する。

「いやね…あの再不斬…仮面の少年…死体の処理…そうか…俺とされたことが…完全にしてやられた…恐らく…再不斬は生きている。」

カカシは仮説から、再不斬生存説を導きだした。

ナルトとイナリ

再不斬が生きていると告げるカカシ。

「ど、どういう事よ。カカシ先生。再不斬が死んだの、ちゃんと確認したじゃない。」

驚くサクラは、カカシに詰め寄る。

「確かに確認はした……が、あれはおそらく……仮死状態にただけだろう。」

カカシは、再不斬が生きている根拠を説明する。

「超……考えすぎじゃないのか？ 追い忍は、抜け忍を狩るもんじゃろ？」

タズナは、考えすぎではないか？と問いかける。しかしカカシはそれを否定する……

「いや……クサイと当たりをつけたのなら、出遅れる前に準備をしておく。それも忍の鉄則。どのみち、ガトーの手下に更に強力な忍がないとも限らん。」

「先生……出遅れる前に準備って何をするの？ 先生、当分動けないのに……」

サクラは当然の疑問をぶつけた。

「……お前達に修行を課す。」

その言葉に驚くサクラ

「修行つたって、私たちが今ちよつと修行をしたところで、たかが知れてるわよ？ 第一、カカシ先生とナルトがいれば、あの再不斬つてヤツも問題なく倒せるんでしょ？」

「……………」

サクラの言葉にイラつくサスケ。

ナルトが落ちこぼれを演じていた……

そこは良い。だが、その本当の實力は自分を遥かに超えるものだった……

見下していたハズのナルト……

（だが、アイツは本当は俺を歯牙にもかけていない……こんな屈辱的

な事があるか… 俺は木の葉のエリート… 俺は一族なんだぞ…
そして、俺はヤツを殺す位の力を付けなきゃならないってのに…
「ブン… ならお前は隠れて震えてればいい… カカシ… 修行は俺
だけで良い。」

「サ… サスケ君？いくらなんでもそんな言い方…」

サスケの苛立った声に困惑するサクラ。

「… まあ、サスケの言い方はともかく、サクラちゃんも修行をしておいた方が良くってばよ。再不斬が生きてるってことは、あのお面のヤツも再不斬の仲間。それに、ガトーにまだ戦力が無いとも限らない。俺も、サスケも、サクラちゃんも、戦闘の機会がいつ回ってくるか解らないからな。」

「…………… そうよね…」

ナルトの言葉を理解したサクラは…

(サスケ君… 私を心配して… あえて突き放すよ

うな言い方をしたのね…)

先程の、サスケの言葉を自分の都合の良いように解釈していた。

「ま… ナルトの言う通りかな… それに、この先、忍者として任務をこなしていけば、嫌でも戦闘力は必要になってくる。修行をしておいて損は無いはずだ。」

カカシが補足のように付け足した。

「無駄だよ… そんなことしたって…」

その時、タズナの孫、イナリが部屋に入ってきた。

「ガトーに歯向かって、勝てるわけないんだ…」

何もかも諦めたような目をしたイナリ…

ナルトは事情を知っている… それでも、反論せずにはいられなかった。

「なら… お前はタズナのおっちゃんややってる事も無駄だつて言うのか？この国の為に… いや、お前の未来のために命がけで橋を作ってるタズナのおっちゃんを見て何も感じないのか？」
「……………」

イナリは、何も言わずに部屋へと逃げ帰ってしまった。

「すまんのう… あの子は父親をガトーに殺されておるんじや。」
タズナは、イナリの事情を話した。

「少し… イナリと話してくるってばよ…」

ナルトはそう言うと、イナリの部屋に向かった。

イナリは部屋の中で、父の写真を片手に泣いていた。

「よお… 泣き虫。入るってばよ？」

ナルトは軽口を叩きながら、部屋に入る。

「な… なんの用だよ。」

泣き虫呼ばわりされたイナリは袖口で涙を拭くと、ナルトに憎まれ口を叩く。

「なに、ちよつと… お前と話してみたくなつてな。父ちゃんの事… タズナのおつちちゃんに聞いたつてばよ。」

「それが… なんなんだよ…」

「お前を置いて… 死んだ父ちゃんが… 憎いか？」

「な… そんなハズ無いだろ？」

「そうだよな？泣いてるくらいだし、悲しいんだよな。」

「当たり前じゃないか。」

イナリは、大声で怒鳴った。自分は父の死をこれほど悲しんでいるのに… 目の前のコイツは何を言っているのか… そう、思った。

「けど… その割には、お前… 父ちゃんのことバカにしてるよな？」

「ど、どういう事だよ。」

「お前の父ちゃんは… ガトーに逆らつて殺された… これは合つてるよな？」

「… そうさ。だから言つたんだ。ガトーに逆らうなんて無駄だつて。殺されるだけだつて。」

イナリの言葉に、ナルトは問う。

「つまり… お前の父ちゃんは、ガトーに逆らつて… 無駄死にしたつて事だな？」

「え？」

「お前の父ちゃんは、お前が言う無駄な事をして死んだつて… そう言つたんだつてばよ？」

「ち…違う。」

「お前が言っただんだぞ？」

「違う…父ちゃんは…父ちゃんは僕とこの町の人たちを守ろうとしたんだ！」

イナリの心からの叫びに、ナルトは微笑むと、イナリの頭に手を置いた。

「わかってるじゃねえか。」

「え？」

突然、優しくなったナルトの声に、驚くイナリ。

「イナリ…お前の父ちゃんは、決して無駄死にしたわけじゃねえ。お前を守ることが出来た。お前の母ちゃんも、じいちゃんも、お前を見守る人たちに、後を託す事も出来た。少なくとも俺は…お前の父ちゃんを…カイザって人を尊敬するってだよ。」

(俺には守れなかった…そして俺の父ちゃんに至っては…)

「兄ちゃん…」

「だから、お前も憧れたんだろ？カイザって人に…」

「でも、結局ガトーに殺されたんだ…父ちゃんは…」

「イナリ…父ちゃんの死を無駄にするかどうか…それはお前次第だっただけだよ。」

「え？」

「お前の父ちゃんが…命を賭けて守ったお前が、自分の行動で証明するしか無いんだ。お前の父ちゃんが命を賭けて残すのに相応しい男だっただけだよ。」

ナルトの真剣な言葉…だが、イナリは体を震わせると…

「でも…僕…怖いんだ…ガトーが…死ぬのが怖いんだ…」

「そんなの、誰だってそうさ…俺だって死ぬのは怖え…」

「ナルト兄ちゃんも？」

「ああ…でも…それ以上に怖いのは…自分の大切な人を失う事だっただけよ。このままガトーを放置しておけば、おそらくタズナのおっちゃんも、お前の母ちゃんも…殺されるだろう…近い内に…」

「そんな…!？」

ナルトの言葉に動揺を隠せないイナリ…

「僕は…どうしたら良いの？ガトーと戦う力なんて無い。でも母ちゃんや、じいちゃんを死なせたくなんて無い。」

イナリは泣きながらナルトに訴えた。

「イナリ…俺に…依頼してみないか？金は…そうだな…いつか、お前が大きくなった時に後払いで良い。」

ナルトは意外な提案をする。

「何を？」

「お前は…どうして欲しい？」

その言葉にイナリは考える。

自分達を逃がして欲しい。自分達を守って欲しい。

幾つもの願いがあった…

だが、イナリが求めたのは…

「ガトーを…ガトーコーポレーションを…倒して…僕には戦う力が無いから…だから…」

イナリは絞り出すように、それを口にした。

「イナリ…その依頼…このうずまきナルトが引き受けたつてばよ…今からは俺が…お前の戦う力だ。」

ナルトはイナリの依頼に力強く、そう答えるのだった。

密談

翌日…

修行のため、森に来ていたナルトたち。

「さて、お前たちの修行内容を発表するぞ。それは…」

「それは？」

サクラが緊張した声で反復する。

「木登り…だ」

「木登り？ そんなことやって修行になるの？」

サクラは疑わしい目でカカシを見る。

「まあ、話は最後まで聞け。ただの木登りじゃない。手を使わずに登る。」

「??どうやって？」

ますます疑わしい目をするサクラ。

そこでカカシはナルトを見る。

「ナルト… 実演よろしく。」

「え？そこはカカシ先生が自分で見せる所なんじゃないか？」

自分に、話がまわって来ると思っていなかったナルトは思わず聞き返す。

「ナルト… 俺の状況を見てくれない？まだ松葉杖付いてるんだよ？そこら辺わかって欲しいなく先生…」

「ハア… 仕方ないってばよ…」

ナルトは一つ溜め息を付くと、足にチャクラを集め、登り始めた。

その様子を、唾然として見つめるサスケとサクラ。

ナルトが木の上に登りきったのを確認したカカシ。

「と、まあ、あんな感じだ。」

そうして、カカシはこの修行について説明を始めた。

「ナルト… もう良いぞ？お前は… タズナさんの護衛を頼む。」

「つて。俺ってば、この為だけに着いてきたの？」

「え？そうだけど…」

「ハア… サスケ、サクラちゃん、修行頑張つてな。」

肩を落として、帰るナルトであった。

程なくして、修行は始まった。

カカシにとつて意外だったのは、サクラがすぐに出来るようになったことだろう。

(なんだと!?!: : クソ: : 俺はサクラにも劣るって言うのか: : ふぎけるなっ!?!)

サクラの成功を見たサスケは、苛立ちと焦りを混ぜたような、形相をしていた。

「: : : : : (マズいな: : あれは)」

サクラを残して、サスケに助言させる事を考えていたカカシだったが、今のサスケに、それは悪手だと判断し、自分が残って助言をすることにした。

(本当なら自分達で試行錯誤して会得して欲しかったんだけどな: : : 今のサスケはサクラの言うことなんて聞かないだろうし: : :)

(木の葉のエリート: : : うちの生き残り: : : か)

そのプライドと、復讐の為に強くならなければならないと言う強迫観念にも似た焦りが、サスケの成長を妨げていた。

(ハア: : : なんとも: : : 難しいねえ: : : コイツは: : : ミナト先生もこんな事を思ってたのかな: : : 俺たちを教えていたとき: : :)

少しだけ、ミナトの苦労を理解したカカシであった。

カカシの指導により、本来よりも早く: : : 三日程で木登りを成功させることが出来たサスケ。

その為、以降はローテーションを組んでタズナの護衛を行うこととなった。

そして、六日目: : :

ナルトは、白に充てた手紙で指定した場所に来ていた。

そこに、白が姿を現す。

「よお: : : 待ってたぜ? 白: : : 」

「: : : !?!」

白は面を被っていないかった。それでも、ナルトは自分を「白」だと認識していた。

(やはり… 僕を知っているのか… でも何故この子が僕を知っている？この子は… 一体…)

警戒する白に、苦笑するナルト。

「そう、身構えなくなたって良いってばよ。別にここでお前をどうこうする気はねえからよ。」

笑いながら、そう言ったナルト。

「そうですか… 正直… 僕は君を信用できないのですが… 話は聞かせて頂きます。」

「ちよつと傷付くつてばよ…」

「自業自得でしょう？君は正直、正体不明過ぎる。君の強さ… それに、何故僕の事を知っていたのか？何故、知りながら僕たちを逃がしたのか…」

「それは、これから話す内容でわかるってばよ。」

白の言葉に、まずは話を聞くように諭すナルト。

そして、ナルトは語り始めた。

未来から来たこと、自身の生涯… そして白と再不斬の最後。

その話は白にとって衝撃的な話だった。

俄には信じがたい… しかし、自分の事を知っていた理由はこれで説明がつく。

それにナルトがあれば強い理由も…

そして、何よりもナルトの言葉に、体験してきた者にしか出せない『重み』を感じていた。

「白… お前の事情も、前世で聞いた。お前にとって再不斬がどれほど大事なヤツなのかも…」

「……………」

「その上で聞きたい。お前は… このままで良いのか？」

ナルトの問いに対し、白は、

「僕は、再不斬さんの道具です。再不斬さんが望むことが、僕の望むこと。」

そう言った。

「そいつは… 違うってばよ。」

だが、ナルトはそれを否定した。

「違います。」

間髪入れずに反論する白。

「まあ、聞けて。前世で、お前が死んだ時な、再不斬を問い詰めたんだ。本当に、白を道具としてしか見ていなかったのだった。」

「白はこんなに再不斬の事が好きだったのに、何も感じていないってのが許せなくてさ…。再不斬自身、カカシ先生に追い詰められていて、もうほとんど戦いは終わってたからな…。」

「……………」

「再不斬は泣いていたってばよ。お前を道具と思い込もうとして…でもやっぱり再不斬も忍である前に人間だった。お前の死を悲しんでいたんだってばよ。」

「再不斬さんが… 僕のために…。」

ナルトの話を信じられないと言った表情で聞く白。

「白… 俺はさ… 未来から逆行して、またチャンスをもらった。そして、前世とは違う夢を持つてるんだってばよ。」

「夢… ですか…。」

「ああ… 俺の愛した女性ともう一度家族を作って… 家族を幸せにすることだ…。」

「フフ… 良い夢ですね…。」

白は微笑んだ… 良い夢だ… 本当に… 出来るなら… 自分もそうしたい…

「その為に… 俺たちが憂い無く過ごせる居場所を作りたんだってばよ…。」

「居場所…。」

「俺や白みたいに… 他に居場所が無い奴等を集めてさ、皆で互いの居場所になれるような… そんな所をな…。」

夢を語ったナルト… そしてナルトは続ける。

「白… もし、明日の戦いで生き残れたらさ… 俺に協力する気はねえか？」

「え？」

一瞬、何を言われたのかわからなかった白。
やがて、理解すると、

「正気ですか？僕は敵ですよ？」

逆に問い返していた。

「それは、雇い主が敵対してるからだろ？俺たちが敵対してるのは状況に過ぎないってばよ。」

「……………」

「それで、どうだ？白……」

なおも、問い続けるナルト……

白は、悩み……そして……

「君の夢は、わかりました。それは僕たちのような人間にとって素晴らしいものだと思います。ですが……それにはとてつもない力が必要になります。世界にそれを認めさせるだけの力が……」

「ああ、そうだろうな。」

「僕たちに見せてください。君の夢に懸けるに値する力が、君にあることを。明日の戦い……僕は本気で君を殺しにかかります。だから見せてください。貴方の力を。」

白は、そう答えた。

「ああ……わかった。見せてやる。俺と……九喇嘛の力をな。」

ナルトは、力強く頷いた。

ナルトと別れた白は、再不斬にナルトとの会話を報告していた。

「スママセン。再不斬さんの意向も聞かずに決めてしまつて。」

白は、再不斬に謝っていた。

道具である自分が、再不斬を無視してナルトの提案を受けてしまったのだ……

本当なら捨てられてもおかしくない程の罪だ……

白は、そう考えていた。

だが、再不斬は、それには答えず、情報について考えていた。

そして、

「白、まあ今回の事は大目に見てやる。たまには、お前の判断に乗ってやるのも一興かもしれん。だが……」

「それも、明日……お前の言う通り、うずまきナルト……ヤツが俺たちが懸けるに値する男か試してからだ……それにカカシの野郎に借りを返さなきゃならねえしな……」

再不斬は、白に乗ることにした。

「はい。」

「とは言え、負けるつもりもねえ。ヤツの夢とやら……叩き潰してやるぜ。」

再不斬は、不敵に笑うのだった。

戦闘開始

白との密談から翌日：：

「さて：：俺の体調も完全に戻った。そして、再不斬が生きているなら：：おそらく今日辺り仕掛けてくるだろう：：」

カカシはそう予測した。

そして、それは正しい。今日がこの波の国の任務においての山場であり、決着の日でもある。

「カカシ先生、俺は少しの間別で動きたいんだけど：：良いかな？」

そんな中、出発前にナルトが切り出した。

「ん？何か考えがあるのか？」

「ああ、もし俺がガトーだったら、再不斬を泳がせて本命にしつつ、失敗したときの為にイナリかツナミさんか：：はわからないけど人質にするんじゃないかって思うんだってばよ。」

「再不斬の襲撃は陽動にも使えるし、別動隊がここを襲撃する可能性もあるんじゃないか？」

「：：：：：」

カカシは、ナルトの言ったことについて考える。

（ナルトの推測は、確かにあり得るものだが：：再不斬とあのお面の少年を相手にするのに、ナルトの戦力が抜けるのは痛すぎる。）

「カカシ先生：：何も問題無さそうなら、影分身を置いてすぐに駆けつけるってばよ。」

ナルトは、カカシが何を考えて悩んでいるのか想像が出来たため補足した。

実際、前世の世界に置いて、ツナミを狙った刺客は来ていたのだ。その刺客たちは、然程強くはない者達だった為問題は無かったが、この世界も同じとは限らない。

故に、分身では無く自分が護衛に付く必要があった。

（白達には悪いけど、少しの間カカシ先生達の相手をしてもらうってばよ。）

「わかった。だが俺たちの任務はあくまでもタズナさんの護衛だ。何

も問題が無ければ、すぐにこっちに来てもらうぞ?」

「わかってるってばよ。」

ナルトと別れたカカシ達は、建設中の大橋に到着した。

「な、なんだあ、これは。」

そこに、タズナの大工仲間が何人も倒れていた。

「どうした、いったい何があったんじや。」

急いで仲間の元に駆け寄ったタズナは、何があったのか聞くが…

「ば、化け物…」

聞いた仲間はそれだけ言うどと氣を失ってしまった。

(やはり…)

それを見たカカシは原因を予測していた。

そして…

急に辺りを霧が立ちこめた。

(やっぱり生きてやがったな… 早速おでましか…)

「来るぞ。」

カカシの言葉に身構える一同。

「ねえ、カカシ先生… これってあいつの霧隠れの術よね。」

「ああ…」

サクラの確認の言葉に頷くカカシ。

そこに、再不斬… してお面を付けた白が姿を現す。

「よお… カカシ… 借りを返しに来たぜ?」

再不斬は、カカシ達を見ると一人足りないことにすぐ気付いた。

「あのナルトってガキはどうした… ヤツにも借りを返さなきゃならねえんだが… 臆したって訳でも無いだろ?」

ナルト不在の理由を訪ねる再不斬。

今回の戦い… 半分はナルトを叩き潰すことを目的としているからだ。

「ナルトはガトーの別動隊を警戒してタズナさんの家族を護衛してるよ… 何も問題無ければその内こっちに来るさ…」

カカシは素直に応じた。それはナルトと言う強力な増援を気にさせることで、再不斬たちの集中力を削ぎたいといった狙いがあったか

らだ。

「フン… まあ、ガトーのヤツは俺達を信用なんぞしてないだろうからな… それくらいやるかもしれん…」

いかにもガトーがやりそうだと、再不斬も同意する。

「だったら… ヤツが来るまでにお前らを皆殺しにして、ヤツを絶望させてやることで、借りを返すしよう…」

その発言とともに、再不斬の水分身が、カカシ達を襲った。

・

・

一方その頃、ナルトはツナミに辺りを見回って来ると言っ外に出ている。

仙人モードになり、周囲を警戒する。

「!?」

そして程なく、二人の刺客の気配を捉える。

その二人は、前世の時と同じだった。

「さて… どうすつか…」

(あいつらを倒すのは簡単だけど… イナリの見せ場を取るのもな… 少し様子を見るってばよ。)

様子見を決めたナルト…

二人の刺客は、タズナの家に侵入すると、ツナミを連れて行くことにした。イナリを守るため、自分の命をかけて人質をかって出るツナミ。

(母ちゃん… ごめんよ… 僕は… ガキで弱いから… 母ちゃんは守れないよ… それに死にたくないんだ… 僕… 怖いんだ…)

泣きながら震えてうずくまるイナリ… その時、ナルトの声が聞こえてきた。

『俺だって死ぬのは怖い…』

それは、ナルトと初めてあった時に交わした言葉だ。

『でも… それ以上に怖いのは、自分の大切な人を失う事だってだよ。』

(そうだ…死ぬのは怖い…でも…母ちゃんが死ぬのは…もつと…怖い…)

『イナリ、俺が…お前の戦う力だ。』

(ナルト兄ちゃんは、辺りを見回るって言ってた。きっと近くにいる。だからそれまでは…僕が…時間を稼ぐんだ。)

「待てえ…か、母ちゃんから離れろ。」

勇気を振り絞り、刺客たちに突進するイナリ。

二人の刺客は、イナリを手に持った刀で切り裂こうとした。

「イナリ!?!…」

思わず目を覆ってしまうツナミ。

だが、イナリの悲鳴も、切り裂かれるような音も一向に聞こえては来なかった。

恐る恐る、目を開けるツナミ…そこには…

刺客達の刀をチャクラの腕で止めたナルトが立っていた。

「イナリ…よく…頑張ったな。」

「ナルト兄ちゃん!」

ナルトの姿を見たイナリは、ナルトの背中にカイザを重ねた。

自分が憧れたヒーローの姿…

「お前が、あいつらを引き付けてくれたお陰で母ちゃんも救えたってばよ。お前が母ちゃんを救ったんだ。」

見ると、ツナミはナルトの影分身が既に保護していた。

「クソ…なんなんだこれは。」

刀を掴まれている刺客たちは、なんとかその腕から抜こうとするが、びくともしない。

それどころか…

ビキッ

少しずつ刀身にヒビが入っていき…やがて…

バリッ

耳触りの悪い音を立てて、刀身が砕け散ってしまった。

「な、なんなんだよ…お前は…」

得物を失った刺客達は、ナルトの力に恐れを抱く。

「イナリに雇われた忍さ… それよりも… お前達にいつまでも構っている訳にもいかないんでな… そろそろ終わらせてもらおうつてばよ。」

そう言ったナルトは、チャクラの腕を操作すると大きく振りかぶる。

「おい… 何をするんだ？やめてくれよ… な？」

「お、俺たちは命令されただけなんだ。許してくれよ。二度と悪さをしないと誓うから。」

二人の刺客は往生際悪く、言い訳を言つて許しを請うた。

「悪いが、お前らみたいなのを信用する気は無えつてばよ。」

ナルトは、二人を無視すると森の方へと投げ飛ばした。

投げ飛ばした… と言つても、尾獣の力で投げ飛ばされたのだ。そのスピードは容易に二人の意識を奪い、さらに森の木々に身体を激突させ、そのまま二度と目を醒ますことは無かった。

二人が死んだ事を仙人モードのチャクラ探知で確認したナルトは、「さて、ここはもう大丈夫だろう。ここはお前に任せるつてばよ。」

「ナルト兄ちゃん… うん。」

ナルトが、自分を認めてくれた。その事実が堪らなく嬉しい…

イナリは、高揚感を感じながら、大きく頷いた。

「イナリ… お前の依頼は必ず果たす。」

最後に、イナリに約束したナルトは、

「じゃ… 行ってくるつてばよ。」

そう言つて橋を指すのだった。

ナルト参戦

再不斬の水分身が、カカシ達を襲う。

(見える…)

だが、サスケは冷静に再不斬の分身達の動きを把握していた。

「やれ… サスケ。」

カカシの言葉に、動いたサスケはあつという間に、再不斬の水分身達を片付けてしまった。

「ほお… 水分身を見切ったか… あの黒髪の小僧… この短期間に随分と成長したみたいだな。」

「ええ… いくら水分身がオリジナルの10分の1程度の力しか無いとは言え、ああも簡単に片付けるなんて…」

「ライバル出現だな。白…」

「フフ… そうですね… 彼の話聞いていなければ、素直にそう思えたかも知れませんか…」

だが、再不斬たちはサスケの動きに軽く驚きこそしたが、動揺する心配すら無かった。

ナルトの話聞き、これまでのガトーの言動などからガトーが裏切るの間違い無いだろうと確信した二人にとって、この戦いは既に茶番劇に成り下がっていた。

唯一、ナルトの力を試すという目的があるが、それもナルトがいない今、この戦いは前座の様なものだ。

最も、カカシ達は全力で来るため、気を引き締める必要はあるのだが…

そんな二人の心境を知らないカカシ達…

「どうやら、俺の予感的中しちゃったみたいね… あのお面ちゃん… どう見たって再不斬の仲間でしょ…」

カカシの言葉を聞いたサスケ…

「アイツは俺がやる。下手な芝居しやがって… 俺はああいうスカしたガキが一番嫌いだ…」

再不斬の水分身を見切り、自信を持ったサスケが自ら白の相手を志

願した。

一方再不斬の方と言うと、

「さて… 先手は打った… 行け。」

そう言つて白をけしかける。

白の動きにすぐさま対応するサスケ。

二人は千本とクナイでつば競り合いを行う。

その動きに、カカシはサスケに白を任せることを決めた。

「君を殺したくは無いのですが… 引き下がって… もらえはしないのでしようね…」

「アホ言え…」

白の言葉を否定するサスケ。

「仕方ありませんね…」

白はそう言つと、自由な片手を使い印を結ぶ。

「片手の印だと？あんなの見たことが無い。」

それを見て驚くカカシ。

『秘術 千殺水翔！』

水分身が倒されて生まれた水溜まり…

それらが複数の氷の棘となり、サスケを刺し殺そうと殺到する。

それを、足に集めたチャクラを使い上空にジャンプして回避するサスケ。

そのまま上空から手裏剣を投げる。

避ける白の動きを予測して、後ろをとるサスケ。

なんとか対応する白だったが、サスケの蹴りを受けて、後方に吹き飛ばす。

「どうやら、スピードは俺の方が上みたいだな。」

「ふむ… 白をスピードで負かす… か… こいつは予想以上だったな…」

だが、それを見ても再不斬に焦りの色は見られなかった。

「白… このままじゃ返り討ちだぞ？お前が戦いたいのはあの、ナルトってガキの方だろ？このままじゃ… 前座で終わりだぜ？」

「ふぎけるな… 誰が前座だと？今の戦いを見て、なぜそう言える？」

負け惜しみのつもりか？」

再不斬の言葉に白よりも先に反応し、思わず怒鳴るサスケ。

再不斬の言葉・・・それはサスケにとって容認出来る言葉では無かった。

（目の前の俺を無視してナルトと戦いたいだど？ふざけるな・・・戦ってるのは俺だ。今の一連の動きで押していたのも俺だ。ナルトじゃねえ・・・）

苛立つサスケに対し、白は静かだった。

「ハア・・・仕方ないですね。ナルト君が来るまでは、温存しておきたかったのですが・・・」

白は、そう呟くと印を結ぶ。

『秘術 魔鏡氷晶！』

術の発動と同時に、サスケを囲むように氷で出来た鏡が何枚も現れた。

そして、その全てに白の姿が写し出される。

「今から、僕の本当のスピードをお見せしましょう・・・」

「いかん！」

それを見たカカシは助けに入ろうとするが、再不斬が先回りして止める。

「お前の相手は俺だろ？迂闊に動けば、そっちの二人を殺るぞ？」

「クソ・・・」

再不斬が前にいるため、フォローに回れないカカシ。

「ぐあああつ」

サスケの悲鳴が辺りに響く。

サスケは、囲まれた鏡から縦横無尽に移動する白の攻撃に翻弄されていた。

「タズナさん・・・ごめん・・・少しだけ・・・ここを離れるね？」

サスケの悲鳴を聞いたサクラは、サスケを援護するため、動いた。クナイを氷の鏡に、向かって投擲するサクラ。

しかし、その攻撃は鏡から姿を半分だけ出した白の手によって、無造作に止められてしまう。

「そんな…」

サクラが絶望しかけたその時…

その半分鏡から出ていた白の面に向かって、手裏剣が投げられる。
「うっ！」

手裏剣に当たり、鏡から弾き出される白…

「え？誰が攻撃したの？」

サクラは、手裏剣を投げた人物を探す。

カカシは、再不斬から目をそらせなため、違う。

タズナは、そもそも忍者ではない…

だとしたら…

「サクラちゃん…遅れて、すまなかったってばよ。」

「ナルト！」

白に手裏剣を投げたのはナルトだった。

「来たか…」

ナルトの姿を見付けて、ニヤリと笑う再不斬。

「全く…遅刻も良い所ですね。」

手裏剣を受けた白だったが、面に当たったため、無傷で立ち上がる。

いや…ナルトはわざと面に当てたのだと理解していた。

「待たせたってばよ。さあて…暴れるぜ？」

ナルトは、不敵な笑みを浮かべて、全員に宣言するのだった。

しかし…

「手を出すな…ナルト…こいつは…俺が倒す。」

「あら？」

サスケは、ナルトの手助けを拒否する。

気合いを入れて参戦しようとしていた為に、思わず転けそうになるナルト。

「ナルト君が来た以上、貴方と戦う意味も無いのですが…」

白は、別にサスケが憎い訳でも無いし、戦う理由も無いため、それを否定する。

「ふざけるな…今、戦ってるのは俺だろ…俺は…うちはサスケだ…うちはを…嘗めるな!!!」

その言葉と共に、サスケの両目に変化が起こる。

白や再不斬に相手にされない悔しさ…ナルトにだけ集まる注目…その嫉妬が、写輪眼を開眼させた。

その目を見たナルトは…

「だったら… やってみるってばよ？サスケ…」

サスケを見守ることにした。

「な、何言ってる！ナルト。サスケにはまだ無理だ。助けに行け。」

ナルトの言葉に慌てて指示するカカシ。

「そうよ… ナルト… サスケ君の悔しさもわかるけど… 死んだら何にもならないじゃない…」

「サクラ… 余計な事を言うな…」

サクラの説得を大声で止めるサスケ。

「サスケ君…」

サスケの苛立った声に、戸惑うサクラ。

（サスケ君… 何を焦ってるの？私たちはまだ下忍… 急いで強くならなくたっていいじゃない。）

「サクラちゃん… 今、俺が助けに入ったら、サスケはサクラちゃんを一生恨むってばよ…」

「でも…」

「大丈夫だつてばよ。本当に危なくなったら、止めに入るから…（それに… 勝ち目ゼロって訳でも無いしな）」

サスケが写輪眼を開眼した今なら、白が止めを躊躇っている内に、動きを把握できれば、勝ち目も多少はある… ナルトはそう考えていた。

「折角、助けてもらえるって言うのに… それを拒否するなんて… あなたは死にたいんですか？」

「言つたら？お前は俺が倒すって…」

「ふう… 仕方ないですね…」

再び、鏡に入る白。

そして、全方位からの攻撃を再開する。

だが、先程と違いサスケは少しずつ、白の動きを見切り始めていた。

(なぜ、急に…!?アレは写輪眼!… そう言えば『うちは』と名乗っていましたね。)

サスケの目が写輪眼になっている事に気付いた白。

「完全に対応される前に…。」

白は、サスケの足を狙った。

まだ、完全に白の動きに対応しきれていないサスケは、その攻撃により足を動かす事が難しくなってしまう。

こうなってしまうと、例え写輪眼で白の動きを追える様になっても、どうにも出来ない。

「クソ…。」

鏡の隙間から、それを見てとったナルトは…

「ここまでか…。」

そう呟いた…

「終わりです。」

サスケに向けて千本が放たれる。

「畜生… 俺は… アイツを兄貴を殺さなきゃならないんだ。こんな所で…。」

サスケはなんとか千本を避けようと試みるが、間に合わない… 写輪眼を開眼した目は、無情にも自分に向かってくる千本をくつきりと把握していた…

思わずサスケが目を瞑る。

だが… いつまで経っても衝撃は来なかった。

サスケは目を開ける。

すると… 隣にナルトが立っていた。

チャクラの衣を纏ったナルトは、自身とサスケの周りを狐の顔をした巨大なチャクラの壁で包み込み、千本を防いでいた。

「サスケ… 選手交代だつてばよ。」

ナルトは、サスケに言い放った。

決着

「サスケ… 選手交代だつてばよ。」

狐の頭を模したチャクラの壁を展開しながら、ナルトはサスケに言い放った。

「ふ… ふぎけるな… 俺はまだ、負けてねえ…」

ナルトの言葉にサスケは反発した。

「負けだつてばよ…」

だが、ナルトは取り合おうとはしない。

さっきの白の攻撃で、ナルトが助けに入らなければ、サスケは死んでいたのだ。

今さら、口で何を言おうとサスケの完敗だった。

「ぐっ… うおおおお。」

何とか立ち上がろうと試みるサスケ…

しかし、足に突き刺さった複数の千本による痛みにも、なかなか立ち上がれない。

「サスケ… この勝負は既に着いてるつてばよ… お前の… 負けだ…」

「俺は… 俺はまだ… 負けっ (ガッ) !?」

サスケが言い終わるより前に、サスケは意識を失った。

ナルトが強制的に気絶させたのだった。

(サスケ… 悪いけど… お前を死なせたくは無いんだつてばよ…

例え… お前に恨まれる事になつてもな…)

「ナルト君… 良いんですか?」

その様子を見守っていた白は遠慮がちに聞いた。

「自分の負けを認められない状態で、このまま俺たちの戦いに参加したら、余計な事をしそうだったからな…」

「そうですか… でも、彼が意識を無くしている以上、僕は彼を狙いますよ?」

白は当然、弱点となる所を狙うと告げた。

「別に構わないつてばよ? お前の攻撃力じゃ、この壁は突破出来ない

「からな…。」

「言ってくれますね… だったら… 試させて貰います。」

白は宣言すると、再び魔鏡氷晶の中に入る。

全方位から、千本手裏剣がナルトたち目掛けて殺到する。

しかし、その攻撃はナルトが作った狐の頭の壁に全て弾かれてしま
う…

「くっ… だったら…」

千本では突破出来ないと判断した白は、

『秘術 千殺水翔！』

術を使い、突破を試みる。しかし…

その攻撃も、まるで効いている様子は見られなかった…

「…………… 確かに、かなり固いみたいですね… ですが…」

白は、この技の弱点を推測した。

「そんな膨大なチャクラをいつまでも維持できるハズがありません… その壁が崩れるときを狙わせて貰います。」

だが、それは白の常識から考え出された予測に過ぎない…

「確かに、人間のチャクラでこの壁を維持しようとするなら、例え上忍クラスでも数分で力尽きるってばよ？ だけど…」

「これは、九喇嘛… 尾獣のチャクラを使ってる… そう簡単に崩れるとは思わない方が良いつてばよ？ それに…」

ナルトは、白の推測した弱点を否定すると、更に一度切つてから…
「こっちから攻撃しないとも言ってないってばよ？」

そう言うと、狐の頭が突如、巨大化し始めた。

「これは!? まさか！」

すぐにナルトの意図に気付いた白。

ナルトは巨大化させた狐の頭の圧力で、魔鏡氷晶を内側から破壊し
ようとしているのだ。

「くっ！」

白は、なんとか術を維持しようと試みる。

しかし…

「ダメだ… この力… 押さえきれない…」

バアン…

一瞬にして、全ての鏡が破壊されてしまった…

その勢いで、吹き飛ばされる白。

ナルトは、その隙に影分身を一体作り、サスケをサクラの元に運んだ。

「サスケ君！」

「大丈夫。気絶してるだけだってばよ。」

「サスケ君…良かった…ナルト…本当にありがとう。」

素直にお礼を言うサクラ。

「サクラちゃん…ここは任せたってばよ？」

ナルトの真剣な表情に、頷くサクラ。

その場をサクラに託すと、分身を解くナルト。

そして、白に近づくと、

「気は済んだか？白…」

ナルトは、特に気負った様子も無く、静かに問いかけた…

「くっ…まだです…」

白は、術がダメならと…肉弾戦を敢行する。

白の戦闘術は、再不斬によって仕込まれたもの…当然白とて自信はあった。

しかし…白は知らない…ナルトが一番得意としているのが近接戦闘であると言う事を。

ナルトは、ニヤリと笑うと、

「来いってばよ！」

白の攻撃を受けて立つのだった。

・
・
・

一方、カカシと再不斬の戦いも佳境に差し掛かっていた。

(!?このチャクラ…ナルトが参戦したか…フウ…ヒヤヒヤさせてくれるね…全く…サスケも無事みたいだな…)

「ナルトが、参戦した以上…向こうは安心だな…再不斬…俺た

ちも、そろそろ決着を付けないか？お前の流儀には反するだろうが……楽しむのは止めにして、次で白黒付けるってのはどうだ？」

カカシは、巻物を取り出すと、再不斬に切りつけられて出血した場所に触れる。そして巻物に自分の血を塗り付けた。

「フン……面白い……この状況でお前に何が出来るのか……見せてもらおう。」

再不斬は自信に満ちた声で、カカシの提案に乗った。

霧で、視界をゼロにし、カカシの写輪眼を封じると共に、自分の有利な状況を作り出したが故の自信だった。

事実、カカシは先程から再不斬に防戦一方な上、何度も斬り付けられて出血している。

カカシは印を結ぶと、術を発動した。

『忍法 口寄せ！土遁追牙の術』

カカシの術により召喚された忍犬が、再不斬についたカカシの血の臭いで再不斬の場所を探知……再不斬に襲いかかる。

カカシの写輪眼を警戒し、目を瞑り、音を頼りにカカシと戦っていた再不斬は、その攻撃を躲すことが出来ず、拘束されてしまった。

カカシは、再不斬に止めを刺すために、自身の最強の技、『雷切』を発動した。

その攻撃が、再不斬を貫こうとした……その瞬間……

「な……い……」

カカシにとって予想外の出来事が起こった。

・
・
・
視点は再び戻り、ナルトと白の戦い……

白は、近接戦を仕掛けて、何度もナルトに向かって攻撃を繰り返す。しかし、仙人モードと九尾チャクラモードを同時に発動した今のナルトには、まるで攻撃が当たらなかった。

逆にナルトの攻撃は、何度も自分にヒットしている。

それでも、白が立っているのはナルトが手加減しているからに他な

らない。

白は、ナルトと自分の力に大人と子供程の差を感じた。

(いや… それ以上かも知れませんね…)

「まだ、やるのか?白…。」

再び、問いかけるナルト。

「… そうですね… 君の力は十分に分かりました… 僕の…」

白が、自らの敗北を告げようとしたその時、再不斬が、カカシに止めを刺されようとする所を見ってしまう。

「再不斬さん!」

急いで再不斬を助けようとする白…

(僕の体を盾にしても…)

「動くな… 白…。」

だが、白がその場所に向かう事は出来なかった。

ナルトが立ち塞がっていたからだ。

「ナルト君… 退いてください。」

白が大声で退くように言うが、

「大丈夫だ… カカシ先生は、俺の影分身が止めた。」

「え?」

見ると、カカシの雷切が再不斬に当たる直前、カカシの腕をナルトの分身が横から掴んでいた。

「どういうつもりだ… ナルト。」

カカシはナルトを問い質した。

もう少しで再不斬を仕留められたのだから当然だろう。

「悪いけど先生… 時間切れだつてばよ…。」

「なに?」

ナルトの言っている意味がわからず、思わず聞き返してしまうカカシ。

その問いに、ナルトは湖の方を指差すと、

「向こうから、かなりの人数の気配を感じる。それも一般人じゃない気配だつてばよ。」

「!？」

言われてカカシも気付いた。

船が近付いてきていた。その船の上にはガトーと、ガトーが雇った傭兵たちが大勢乗っていた。

「増援か！」

カカシは戦慄した……

再不斬との戦いで、カカシ自身かなりの消耗をしている。

この上、あの人数を相手にする余力は無かった。

「いや……違うな……」

だが、それを否定したのは、意外にも再不斬だった。

「ガトーの野郎は、俺達ごと襲撃する気なのさ。」

「なに？」

再不斬の言葉に思わず聞き返すカカシ。

「どうも、あの野郎とは相性が悪かったが……俺達に払う報酬が惜しくなったって所か？ どうせ抜け忍の俺達を庇うやつらもないしな……」

「その通り……よく解っているじゃないか？ 再不斬。」

再不斬の言葉を肯定したのは、上陸したガトーだった。

「正規の忍を里から雇えば、やたらと金がかかる上に、裏切れば面倒だ……そこで後々処理しやすいお前たちのような抜け忍を雇ったのだ……他流忍者同士の殺し合いで弱った所を、数でもろとも攻め殺す……金のかからん良い手だろ？」

ガトーは自らの計画を自慢気に語った。

「それにしても……ボロボロだなあ再不斬……唯一の作戦ミスはお前だ……再不斬……霧隠れの鬼人が聞いて呆れるわ……私から言わせりゃ、お前はただの……かわいい小鬼ちゃんって所だなあ……」

（ナルトの話通りか……しかし……知っていても胸糞悪いぜ……こいつは……）

「カカシ……すまないな……戦いはここまでだ……俺にタズナを襲う理由が無くなった以上……お前と戦う理由も無くなった。」

「ああ。」

カカシとしても、この人数を相手にするには、再不斬たちの戦力は

有難かった。

「小鬼ちゃんかどうか… 試して見るか？」

再不斬の背後に鬼の形をした気が立ち込める。

「ひっ！お前たち。きつさと片付けろ。」

再不斬の気に恐れを抱いたガトーは、部下たちに指示を出した。

その時、ガトーの足元にボーガンの矢が突き刺さった。

「ナルト兄ちゃん… 応援に来たよ。」

その矢を放ったのはイナリだった。

イナリは、町の人達を奮い立たせ、増援に駆け付けたのだった。

その姿を見たナルトは、笑った。

そして…

「再不斬… 悪いけど、ガトーは俺がやるってばよ…」

「なに？」

「依頼なんだ… イナリから俺に… ガトーと… ガトーコーポレー

ションを倒してくれってな…」

ナルトは、再不斬を制止すると、自分が戦うと告げる…

「…………… フン… ならやってみな？」

白を倒したのは理解したが、結局この戦いでナルトの力を見ていな

い再不斬は、この機会に見極めようとした。

「やれるのか？ナルト。」

カカシは少し心配そうに問いかける。

「ああ、問題ないってばよ。」

「わかった。」

カカシも引き下がった。

ナルトは、イナリに向き直る。そして…

「イナリ… お前の依頼… 今、果たすってばよ…」

高らかに宣言したのだった。

「ガキのクセに生意気な… お前たち… 殺ってしまえ！」

ガトーは、ナルトをターゲットに変更した。

『多重影分身の術』

ナルトは、同数の影分身を作る…

数的な優位が一気に無くなってしまったガトー陣営…
更に一人一人の戦闘能力は、ナルトの分身体よりも遥かに劣っていた。

あつと言う間に制圧されてしまったガトーと部下たち。

「ナルト兄ちゃん… すげえー。」

イナリは英雄を見る目でナルトを見ていた。

「さて… イナリの依頼を果たすつてばよ… まずは… 会社だ…」
だが、依頼はまだ果たされていない。

「え？」

ナルトの本体は、混戦の最中戦線を離れていた。

その理由は…

「行くぞ？ 九喇嘛…」

『良いんだな？』

ナルトは尾獣化した。尾獣化を見られないように、一人離れたのだった。

そして、尾獣玉を作ると、ガトーの屋敷目掛けて撃ち出した。

ナルトは、この一週間の間タズナの護衛とは別に、影分身を使ってガトーの屋敷を探し当てていたのだった。

ドオオオオオオオオオオンンン！！！！

ガトーの屋敷には、会社の重要書類や金などが多く保管されていた…

それらが跡形も無く吹き飛んだのだ…

「な、なな、なな、な、」

ガトーは、爆発が起こった方角に何かがあるか察して、顔を蒼白に染めていた。

ガトーコーポレーションは終わった…

「次は… お前の番だつてばよ？」
放心しているガトーに、分身ナルトが冷たい目をして告げるのだった。

帰還

「次は… お前の番だつてばよ?」

分身ナルトは、冷めた目をしてガトーに告げると右手にクナイを持ち、ガトーの首に当てた。

「ヒッ!」

自らの屋敷が破壊され、放心していたガトーだったが、その冷たい感触によつて、現実に引き戻される。

「や、止めてくれ… 殺さないで… 金をやる… あの小僧が依頼主だと言うなら、私が小僧の倍… いや10倍出そう… だから…」

「お前はさつき、再不斬を裏切つたばかりだろう?」

「そ… それは…」

金で助命を求めるガトーだったが、再不斬を裏切つた事実を指摘されて、何も言えなくなつてしまう。

「もう良いか? だつたら… これで終わりだつてばよ!」

ナルトがガトーに止めを刺そうとクナイを動かした、その瞬間…

「ナルト兄ちゃん、止めてえ!」

大声でイナリが、ナルトの動きを制止した。

イナリは、ナルトがガトーの部下たちを相手に無双する姿を見て、まるで英雄を見ているように興奮していた。

しかし、完勝しガトーを拘束した後のナルトの表情を見て、その考えは一変する… 今のナルトは怖い… そう思った。

直後に大きな爆発音が響き、ナルトの言動から、ガトーの屋敷を破壊したのだと知った。

『ガトーと、ガトーコーポレーションを倒して…』

自分は、ナルトにそう依頼した。

その内の一つ、ガトーコーポレーションを終わらせたナルトは次にガトーを殺そうと動く。

ナルトの目は、完全に凍りついていた。

イナリは、思わず叫んでいた。

「何で、止めるんだつてばよ? イナリ… こいつはお前のじいちゃん

や母ちゃんのを命を狙い、町の人達を苦しめ、お前から父ちゃんを奪った… 死んで当然のヤツだってばよ？」

「それでも… (僕はナルト兄ちゃんに、こんな顔をして欲しくないんだ… だから)もう良いんだ… ガトーを拘束した所で依頼は達成したって事にするよ。だから… そんな冷たい目をしないでよ。いつもの兄ちゃんに戻って。」

「イナリ…」

分身ナルトは、イナリの叫びに苦笑すると、クナイを下げ、消えてしまう。

そして、

ポン…

イナリの頭に手が添えられる。

思わず振り向くイナリ… その手の主は、ナルトの本体だった。

ナルトは尾獣玉を撃つてすぐ、尾獣化を解き、戻ってきていたのだ。

「イナリ… お前は強えな。大事な人が殺されてるのに、そいつを助けようなんて… 並の男には出来ないってばよ。」

ナルトは、イナリをよく知る笑みを浮かべて、イナリを称賛した。

「違うんだ… 僕は… ただ… (ナルト兄ちゃんに笑っていて欲しかっただけなんだ。)」

二人がそんなやり取りを行っている時、なんとか命が助かったガトーは…

(クソ… バカにしやがって… 私を怒らせたこと… 必ず後悔させてやる…)

船に向かって、一人逃げようとしていた。

「どこに行くんだ？ガトー…」

だが、その進路を塞ぐものがいた。

「ヒッ！ぎ… 再不斬…」

「ナルトがお前を見逃しても… お前が俺達を裏切った事実は変わらねえ。忍を裏切ったらどうなるか… 教えてやる。」

自らが小鬼と揶揄した男… その形相は小鬼なんてものでは決し

て無かった…

「死ね…」

ガトーはあっさりど、その命を終わらせたのだった。

「ナルト兄ちゃん… ガトーが…」

それを見たイナリは、恐怖に震えた。

「気にすんな。お前のせいじゃ無い。あれは自分の行動の結果だ。全ての人が、イナリみたいに強い訳じゃ無えんだってばよ。」

ナルトは悲しそうに、そう話すのだった。

「再不斬さん…」

ガトーを殺した再不斬に、白が近寄ってくる。

「無事だったみたいだな。」

「ええ… はつきり言つて、僕ではナルト君の相手にもならなかったですよ。ずっと手加減されましたから…」

「そこまでか…」

ナルトの力は、どうやら自分が想像しているよりも、遥かに上のようだ…

（あの爆発の時に感じた巨大なチャクラ… あれもヤツの力の一端… か…）

そこまで考えた再不斬は、

「白… 俺はヤツの提案に乗ってみようと思う。ガトーのヤツも始末しちまったしな… お前はどうする？」

白に問いかける。

「僕は、再不斬さんの道具です。もちろん、一緒に行きますよ。」

白は、当然の事のように答えるのだった。

一方、ナルトに気絶させられたサスケは、ちょうど目を覚ました所だった。

「サスケ君！気が付いたのね。良かった。」

サクラが、声をかけるなり、

「俺は… 痛っ」

一瞬、自分がなぜここにいるのか理解できなかつたサスケ… だが全身の痛みが、記憶を呼び覚ます。

「そうか…俺は…（負けた…のか…あのお面野郎に…そしてナルトに…）」

「ちくしょおおおおお…」

サスケは、悔し涙を浮かべていた。

こんなハズでは無かった…アカデミーを卒業し、順調に力を付けて、イタチを殺す…そんなビジョンがサスケにはあった。

しかし、現実はそのような甘いものではなかった…ナルトに…白に負けた事実が強くサスケを苦しめる。

「サスケ君…」

サクラは、どうやって声をかけたら良いのかわからなかった。

どんな慰めの言葉も、今のサスケには効果が無い…そう思えた。

「ま、お前はまだ忍になったばかりだ。まだまだ伸びる。ナルトが気になるのはわかる。同期だからな…だが、今敵わないからと言って、この先もそうとは限らんだろう？今回の戦いでも、強くなった実感はあったろ？その悩みはお前にはまだ早すぎる。」

「カカシ…そう…だな…」

カカシの言葉に少しでも気持ち切り替えられたサスケは、未だ暗い表情ながらも頷いた。

そして再不斬たちは…

「世話になったな。ナルト…」

「ナルト君、本当にありがとうございました。」

ナルトに挨拶に来ていた。

「行くのか？」

「ああ…俺達は雇われていたとは言え、ガトーの一味だったからな。ここにはいられないさ。」

「そうか…」

「それと…お前の提案だが…受けてやる。」

「本当か！」

再不斬の言葉に喜ぶナルト。

「ええ…君の力は十分見せて貰いました。僕達は、君の夢に賭けてみようと思います。」

「落ち着いたら連絡をする。」

「本当にありがとうございませす。」

二人はそう言うのと、姿を消すのだった。

こうして、波の国の事件は幕を閉じた。

その後、またも写輪眼の反動で倒れたカカシの回復を待ち、とうとう木の葉に帰ることになった。

挨拶を交わすカカシとタズナ。

そしてナルトも……

「ナルト兄ちゃん……行っちゃうの?」

イナリは、寂しそうに言った。

「ああ。俺にも帰りを待っていてくれる人がいるからな。それに、またいつか……会えるってばよ。」

「本当?」

「もちろん。じいちゃんの後を継いで大工になるんだろ? そうだな……今回の依頼の報酬……まだ考えてなかったな。よし、じゃあお前が一人前の大工になったら、お前に家を作って貰うかな。」

ナルトはイナリを励まそうと、そんな提案をした。

「うん! その時は、任せて。橋作りだけじゃなくて、家作りも勉強するから。約束だよ。」

その提案を聞いて元気になるイナリ。

「イナリ……お前の行動は町の人達に勇気を取り戻した。きっとそれは、この町をまた賑やかにする。お前は父ちゃんと同じ……この町の英雄だってばよ。」

「ナルト兄ちゃん……」

ナルトの言葉に、嬉しさのあまり、涙を浮かべるイナリ。

「僕……きつと立派な大工になるから……だから……」

「ああ。さよならは言わないってばよ。またな。イナリ。」

「うん。きつとまた。元気だね。ナルト兄ちゃん。」

そうして、ナルト達は木の葉へと帰っていった。

イナリは、この時の約束を果たすため、努力を重ね、後に波の国一番の名工と呼ばれることになるが、それは別の話である。

「それはそうとナルト…勝手に依頼を受けた罰は受けてもらうから…」

「げっ！」

帰還の途中、良い笑顔でカカシはナルトに宣告した。

その罰により、全員の荷物を背負って帰るハメになるナルトだった。

「あ、木の葉の門が見えてきたわよ。」

初めての他国での長期任務…やはりサクラもひさしぶりの故郷に嬉しそうな声を上げた。

「ふう…大変な任務だったな…」

ほっと一息付くカカシ。

「……………」

無言のサスケ。

そしてナルトは、門の前に待っていた人物を見て、駆け出していた。門で待っていたのは、ヒナタだった。

ヒナタは、ナルトから貰った九尾のチャクラを覚え、ナルトが木の葉の近くまで来ていることを察したのだった。

「ナルト君。おかえりなさい。」

「ただいま。ヒナタ。」

ナルトは、ヒナタの笑顔での出迎えに、やはり自分の帰るべき場所はヒナタの所だと再確認した。

「え？何あれ？」

「？」

二人の様子を見たサクラとサスケは、驚いていた。

「あ…付き合ってるらしいよ？あの二人。」

カカシがさらっと真実を告げる。

「ええええええええええええええええええええええええ！」

サクラは驚愕して叫ぶのだった。

解散したあと、サクラの追及をかわしつつ、二人きりになったナルトとヒナタ。

「久しぶりだね。ナルト君。」

「本当にな。そうだ… ヒナタ、弁当ありがとうな。美味しかったよ。」

「本当?」

「もちろんだつてばよ。」

「少し不安だったんだ… ナルト君の口に合わなかったらどうしようって。」

「そんなことあるわけ無いつてばよ。すつげえ旨かったつてばよ。」

「本当!?じゃあ、また作ってくるね?」

「ああ。楽しみにしてるつてばよ。」

「……………」

会話が途切れる。

ナルトは、ヒナタの手を握る。

そして…

「ヒナタ… 会いたかったつてばよ。」

「うん。私も… 会いたかった… とつても…」

「ナルト君… 本当に無事で良かった… 改めて、おかえりなさい。」

「心配かけたな。ただいま… ヒナタ。」

二人はお互いに見つめ合うと、唇を重ねた。

『中忍試験編』警告

ナルト達が、波の国から帰還した日の夜…

「これは… 本当の事なんじゃない？」

三代目火影ヒルゼンは、カカシから波の国での任務報告を受けていた。

「はい。私が直接この目で見たものです。間違いありません。」

ヒルゼンは、カカシから貰った報告書に目を通すと、そのあまりの内容に、思わず聞き返してしまった。

そもそも、今回の任務はCランクの任務であり、他里の忍と戦闘になるとは考えていなかった。

それが、蓋を開けてみれば他里の忍どころか、『桃地再不斬』と言う大物が出てきた上、裏の世界でもかなり有名なガトーコーポレーションと全面的に対決するハメになるとは、誰が予想出来ただろうか…

もし、担当したのがカカシ班では無く他の新人たちの班や、中忍の小隊にやらせていたら、返り討ちにあっていた可能性がかなり高い。戦闘の方の報告において、それは理解出来た。

木の葉において、トップクラスの戦闘能力を持つカカシ。そのカカシと再不斬はほぼ互角だったと言う。

最初の遭遇戦では、一度は敗北しかけた。

それを救出したのがナルトであり、再不斬をして強者と語る白と言う少年を退けたのもナルトだと言う。

さらに、何らかの手段でガトーの屋敷を一瞬で破壊したと報告書にあった…

「お前は、ガトーの屋敷が破壊されたところを見てはおらんのか？」

「はい。どうもナルトは戦闘中に影分身を残して本体は離脱していたようで、何をしたかまでは…」

「そうか…」

おそらく、ナルトにとっては切り札に近いものなのかも知れない…

ヒルゼンはそう考えた。

—まあ…その気になれば、この里を壊滅させるのは簡単だつてばよ？—

思い出されるのは、ナルトがあの際に言った言葉。

ガトーの屋敷程の規模を破壊する力を使つてもなお、ナルトはまるで消耗した様子は無かつたと言う。

この規模の術を連発出きるのか、或いはかなり加減して発動させたのか…

どちらにしても、木の葉を壊滅させる事が出来ると言う言葉がハツタリでは無い事がわかつた。

ヒルゼンは、頭を抱えた。

なぜならナルト達が、任務で波の国に出ている間に、木の葉の里で
ある事件があつたからだ。

日向ヒナタが、ある者たちの手によって誘拐されかけたのだ。

もともと、ナルトの扱いについて、木の葉の上層部でも意見は分かれていた。

ナルトが出した条件を守らせるために、ナルトに許可をとつて上層部には、ナルトの事情と力を伝えてあつた。

その結果、ハツタリだと笑う者や、恐怖におののき、条件を守ろうと考える者、ナルトの暗殺を提案する者など様々な意見があつた。

中でも鷹派で知られるダンゾウは、ナルトが手を出すなど言つて挙げた人物を人質にとり、ナルトをコントロールすることを提案した。

「それほどの力があると言うなら有効に使うべきだろう？他里を侵略するチャンスだ。木の葉の発展の為、また里の脅威を取り除く為にも必要な事だ。」

ヒルゼンは反対したが、ダンゾウは聞く耳を持たず、自らの戦力である根を使い、ヒナタを誘拐しようとしたのだ。

その計画は、ヒナタ自身の抵抗で失敗に終わったらしいが…

「もしこの事がナルトに知られたら…」

ナルトがいけないときの出来事であるし、もし追及された場合は犯人は他里の忍だと言えば良い。

そう考えていたが、何故か胸騒ぎを感じていた。

そして、その不安は現実のものとなる。

ナルトは、既にヒナタ自身から聞いていたのだ。

「誘拐?」

「うん。以前にもあったし、多分...他の里の人たちだと思うけど、その時ね、ナルト君から貰ったチャクラが私を守ってくれたんだよ。本当にありがとう。」

「.....」

ヒナタのお礼の言葉に、しかしナルトは、難しい顔をしていた。

「ヒナタ、少し手を握っても良いか?」

「え?う、うん。」

ヒナタは顔を赤くしながら頷いた。

ヒナタの手を握るとナルトは、目をつぶり深く集中する。

そして渡した九喇嘛のチャクラを感じると声をかけた。

ヒナタに渡したチャクラには、時間制限こそあれ、九喇嘛の意識があった。

ちょうど影分身に近い状態だろうか。

ヒナタの中の九喇嘛から話を聞いたナルト。

その犯人の目星も付いた。その黒幕も...

ナルトは、その日の深夜、行動を開始する。

木の葉の里から少し離れた山に登ったナルト。

「いるな...」

ナルトは、仙人モードでダンゾウのチャクラを探知した。現在は自分の屋敷にいるようだ。

「ヒナタに手を出した報いを受けて貰うてばよ。」

ナルトは、尾獣化する。そして...

尾獣玉をダンゾウの屋敷に向かって放った。

その数瞬間、ヒルゼンは突然現れた巨大なチャクラを感じ、飛び起きた。

「なんじゃ...この巨大なチャクラは...」

禍々しさこそ感じないが、まるで九尾と対峙したときのような、人ではその底を測れない程の膨大なチャクラだった。

そして、その直後爆音が辺りに響いた。
ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオン…
急いで、火影室に向かうヒルゼン。

緊急時には、火影室に情報が集まるからだ。

火影室の扉を開けるヒルゼン。

そこには既にナルトがいた。

「待ってたつてばよ。三代目。」

「ナルト… そうか… さっきのはやはりお主か…」

ヒルゼンは、一人納得していた。

「契約違反だな。三代目…」

だが、ナルトはそんなことお構い無しに、話を続けた。

「…………… なんのことじゃ？」

「ヒナタの誘拐…」

「あれは…」

「他里の忍じゃなく、この里の根に所属するやつらの仕業だつてばよ？」

ヒルゼンの言い訳を、先回りして真実を告げるナルト。

「… 証拠はあるのかの？」

「三代目は知らないだろうが、ヒナタには九喇嘛のチャクラを渡して
いたんだつてばよ。その九喇嘛から直接聞いた。証拠は無いが…
別に構わないだろ？ それとも木の葉は俺と戦争がしたいのか？」

「そ、そんなつもりはない。」

ナルトの言葉を慌てて否定するヒルゼン。

ナルトと正面をきつて戦う… 数の力でいつかはナルトを倒せる
かもしれないが、おそらくそうなつてしまつては、木の葉は壊滅状態
に陥る可能性があつた。

「三代目… 別に契約を守る気が無いならそれは構わないつてばよ？
もともと、木の葉が俺を警戒するのを軽くしてやろうとしての提案だ
しな。」

「いや、契約はそのまま継続して欲しい。下の者にも徹底させる。
じゃから頼む。」

ヒルゼンは、恥も外聞もなくナルトに頼み込んだ。

「ハア… わかったってばよ。今回の警告だ。犠牲者は出たが、まあ首謀者だし問題ないだろ？」

「首謀者？まさか!？」

「三代目… 末端が好き勝手しちまうのは、わからないでも無い。情報が制限されてるからな。でも、自分に限りなく近い人物すら好き勝手させるのは組織の長としてどうなんだってばよ？」

「……………」

ナルトの指摘に、何も言えないヒルゼン。

「まあ、これで少しはやり易くなるだろ？じいちゃんの負担は増えるだろうけど… 期待するってばよ？」

そう言うと、ナルトは消えてしまった。

どうやら影分身だったらしい。

それからしばらくした後、ダンゾウの屋敷が跡形もなく破壊されたと言う報告が上がった。

原因は不明だそうで、突然爆発したらしい。

里は大混乱になり、今は中忍以上の忍が総出で沈静化を試みているそうだ。

そんな中、ダンゾウが屋敷にいたことが判明。遺体こそ見つからなかったが、ダンゾウの死亡が確定であるとの話だった。

「ダンゾウ…」

ヒルゼンは、ダンゾウの訃報に密かに涙した。

その強引な手法を危険視され、他者からは理解されなかったダンゾウ。

幼い頃からの自分のライバルであり、未だ火影になることも諦めていないようだったが、その行動は全て木の葉のためであることを、ヒルゼンは知っていた。

だが、悲しんでばかりもいられない。

ヒルゼンは気持ちを切り替えると、改めて上層部を招集。

ナルトとの契約を守るよう徹底した。

今回ばかりは、火影として強行するつもりだったが、反対意見は出

なかった。

皆、ダンゾウの二の舞は避けたいのだろう。

直に中忍試験もある。今回は木の葉で開催されるため、これ以上の混乱は避けたいと言う事情もあった。

ナルトの警告は、木の葉の上層部を畏怖させるのに十分な成果を上げたのだった。

不協和音

ダンゾウの屋敷が破壊されるという事件から、数カ月が経過した。あれ以来、ナルトやその周辺はいたって平和に過ごしている。

ナルトの一日は、任務がある日は朝起きて、カカシが待ち合わせの場所に来るのを班で待ち、任務をこなした後はヒナタと修行をして、ヒナタの手作りの弁当を貰って帰り、弁当を食べてから入浴、就寝：：任務が無い日は、木の葉丸達の相手をしたり、ヒナタと出掛けたりした後、修行、以下同じと言ったサイクルを繰り返していた。

そして、今日も任務をこなして帰路に就いていた。

その道すがら、カカシは空を飛ぶ鳥を見ると、解散を告げた。

「なら、帰るぜ？」

サスケはその言葉でさっさと踵を返してしまう。

それを見たサクラは、サスケに声をかけた。

「ねえ、サスケ君。待ってえ。これから私と二人でチームワークを深めるっていうのは……」

「うるさい。」

サクラが、言い終わる前にサスケはサクラを拒否する。

「俺に構う暇があったら、術の一つでも練習するんだな。はつきり言って、お前は足手まといだ。」

（俺は強くならなきゃいけないんだ。外には俺より強いやつがゴロゴロいやがるつてのに、こんな任務ばかりちんたらと……いや、それ以前にナルトにすら追い付けてねえ。クソ……なんで、あいつがあそこまで強いんだ……）

サスケの様子を見たカカシは、サスケの焦りが手に取るようになった。

もともと、名門の『うちは』の出。アカデミーでは常にトップの成績を出していたサスケはプライドが高すぎるのだ。

もちろん、自身より強い存在がいることは認めているが、同年代ではほとんどいないと自負していたに違いない。

それが、アカデミーを卒業した途端、ナルト、白と同年代に負け続

けている…

波の国の戦いで、不完全ながら写輪眼を開眼し成長はしているのだが、いかんせん比べる相手がナルトでは、分が悪すぎた。

自分ですら戦闘能力ではナルトには勝てそうに無いのだ。今のサスケでは相手になるハズがない。

(…なんて言った所でサスケには慰めにもならないか… ましてやサスケの目標も遥かな高みにいる存在なんだし…)

一方、サスケに拒否された挙げ句、足手まといとまで言われたサクラは、落ち込んでいた。

「そう… だよ… 私… いつも良い所なしだもんね… ハハ… ゴメンナサイ…」

サクラは、泣きそうだった。

好きな人に辛辣に当たられる事ほど堪えるものも無い。

「サスケ… 今のは流石に言い過ぎだってばよ。」

見かねたナルトが制止に入る。

「フン… ちよつと俺より強いからってリーダー気取りかよ？」

だが、サスケは聞く耳を持たないばかりか、ナルトにまで当たる始末だった。

「はあ？なんでそうなるんだってばよ？」

ナルトが思わず聞き返すが、サスケ自身八つ当たりと理解しているため、ばつが悪そうな顔をして、瞬身の術を使い消えてしまった。

「サクラちゃん。サスケの言うことは気にしなくて良いってばよ。ちよつと虫の居所が悪かったただけだってばよ。」

ナルトの慰めの言葉に、

「私… サスケ君に… 嫌われ… ちゃったの… か… な…」

サクラは、涙を流しながら呟いた。

「ナルト… サクラの事は任せるね！」

カカシはさらつとその場を後にした。

集合時間に遅れないためだろう… きつと…

「ああ… ずりいぞカカシ先生…」

最もナルトはそう受け取らなかったが。

未だ泣き続けるサクラに、ナルトは一つ嘆息すると、ある提案をした。

「サクラちゃん。もしその気があるんだったら、俺たちと修行してみるか？」

「え？」

その提案に驚いてナルトを見るサクラ。

「俺は任務の後、毎日ヒナタと修行をしてるんだってばよ。それに加わる気はないか？」

「で、でも……」

「サスケの言い方はともかく、サクラちゃんが実力不足なのは、間違っていないってばよ？それはサクラちゃんも自覚してるんだろ？」

「……………うん。」

それは、サクラ自身理解していた。どの任務でも、いつも良いところが無かった。

ナルトと……それに対抗しようとするサスケの二人がいれば事足りていたのだ。

「今のサスケは強くなりたいてって焦りから、サクラちゃんを気にする余裕が無いんだと思う。少なくとも、サクラちゃん自身が強くなってサスケに一目置かれる位でないと、話にならないってばよ。」

「私に……できるかな？」

不安そうに呟くサクラ。

だがナルトは、それには答えず逆に聞き返した。

「だったら……サスケの事は諦めるのか？」

その問いにサクラは、

「私……私は……諦めたくない。」

サクラの答えに、ナルトは頷くと、

「だったら、まずはやってみることだってばよ。やらないで後悔するのが一番ダメだからな。」

そう言ってニツコリと笑った。

サクラを伴い、ヒナタとの待ち合わせ場所に向かうナルト。

その後ろを、付ける者達がいた。

「ハア：： 木の葉丸、モエギにウドンも：： 何か用か？」

「流石俺の憧れた男。一発で見破るなんてやるなあコレ：：。」

（そんな真四角で適度な穴が空いてる岩で擬態してたら忍者じゃなくてもわかるってばよ：：。）

「それで？ 用事はなんだってばよ？」

ナルトが改めて理由を聞く。

「今日はエビス先生が休みだから、またナルト兄ちゃんとヒナタ姉ちゃんの修行を見学したいんだコレ。」

木の葉丸は、エビスの個人指導が休みの日は、決まってナルト達の修行を見学していた。

正直三人が見たところで、何をやっているか理解は出来ないだろうが、少なくとも体術に関しては見とり稽古として役にたっていた。

「あんまし構ってやれねえぞ？ 今日のもう一人修行に参加するから。」

ナルトはそう言ってサクラを紹介する。

「なんか：： 怖そうな姉ちゃんだなコレ：：。」

「ヒナタ姉ちゃんの方が優しそうだよね：：。」

「なんですってえ！」

コソコソ話す木の葉丸とウドンの言葉に、落ち込んでいたハズのサクラがキレて追い回す。

「ギャアアアアアアアアアア」

その時、逃げる木の葉丸が誰かの体に当たった。

「痛えじゃん：：。」

砂漠の我愛羅

「痛えじゃん。クソガキ。」

木の葉丸がぶつかつた人物… 砂隠れの下忍カンクロウだった。カンクロウは、木の葉丸の胸ぐらを掴み持ち上げた。

「やめときなつて。後でどやされるよ?」

カンクロウの隣にいた同じく砂隠れの下忍… テマリがカンクロウを嗜める。

「ごめんなさい。私がふざけて…」

サクラが代わりに謝るが、カンクロウは特に反応することなく、そのまま木の葉丸を持ち上げている。

「うるせーのが来る前に、ちよつと遊んでみたいじゃん?」

カンクロウは、ナルトとサクラを見て木の葉のレベルを見ようと考え挑発していた。

「く… 苦しい… コレ…」

木の葉丸は苦しそうに呻いている。

その様子に心配そうにモエギとウドンが木の葉丸の名前を呼んだ。

「ハア…」

ナルトは一つ溜め息を付くと、カンクロウに向かって歩き出した。それを見たカンクロウは、チャクラ糸を使いナルトを転ばせようとする。

「なっ!」

だが、チャクラ糸は全く動かなかつた。

まるで大岩に付けているかのような感触に戸惑うカンクロウ。

ブチッ

それ所か、チャクラ糸は途中で切れてしまった。

ナルトが何かをした様子は無い… だが…

カンクロウは警戒した。

自分に気付けなかつただけで、何かしたのは間違いなく、目の前の人物だと。

そう… 既にナルトはカンクロウの目の前にいた。

(何をしてくる…)

カンクロウが身構えていると…

「うちの里の子供がすまなかつた。その子も反省しているハズだ。もういいんじゃないかねえか？」

ナルトが謝った事に拍子抜けするカンクロウは、

「あ、ああ。」

思わず木の葉丸を放してしまう。

その隙にナルト達の後ろに隠れる木の葉丸。

だが、このまま終わるのはばつが悪いと感じたカンクロウは、

「おい、俺は金髪のがキ… てめえみたいに小利口にしてるがキが一番嫌いじゃん。」

そう言つて背負っていたものを取りだそうとした。

「おい。カラスまで使う気かよ。」

流星にそれは不味いとテマリが止めに入る。

「カンクロウ、やめろ。」

だが、それより先に止める者がいた。

「里の面汚しめ…」

三人目の砂隠れの下忍… 我愛羅だった。

我愛羅の姿を見たナルトは、少しだけ前世の我愛羅を思い出していた。

自分と同じような境遇にあり、一度は敵対したが、その後は誰よりもお互いの価値観を共有できた。

さらに自分が火影となった後も、火影と風影… 対等な立場であり、いつまでも友であった。

自分が死んだ時、我愛羅は悲しんだだろうか…

それとも、今の俺のように全てに認められる事などあり得ないと諦めてしまったのだろうか…

(我愛羅… すまない…)

ナルトはかつての友に謝る事しか出来なかつた。

「喧嘩で己を見失うとは呆れ果てる… 何のために木の葉くんだりまで来たと思っているんだ…」

木の上に逆さで立ちながら我愛羅はカンクロウを詰る。
言い訳をするカンクロウ。

「黙れ… 殺すぞ…」

だが、我愛羅はその言い訳を聞くことなく、一言で黙らせる。

木の上から消えた我愛羅はナルトの達の前に現れた。

「君たち悪かったな。」

謝罪する我愛羅。

その言葉にナルトは行動を起こす。

「それなら、ちよつと頼みたい事があるんだってばよ。」

ナルトには、どうしてもやっておきたい事があったのだ。

ナルトは九喇嘛との会話を思い出していた。

『ナルト… お前、今回は尾獣達をどうするのか決めているのか？』

「もちろん、助けるってばよ。出来れば、暁に人柱力が殺される前になんとかしたい所なんだけど…」

『全員は… 無理だな。既に何人かは狩られているだろう。』

「…………… そうか。」

『それで？ 助けた後はどうするんだ？』

ナルトは九喇嘛の質問に、自分の夢… 構想を語った。

「もちろん、他の人柱力や人柱力を失った尾獣の意思は尊重するつもりだ。多分… ビーのおっちゃんも協力はしてくれないと思うし…」

『ナルト… ワシに一つ考えがある。お前の目的を達成するには、他の人柱力や尾獣と早い段階で意志疎通を図る必要があるだろう？』

『そこでだ… まずは他の人柱力と接触する。』

「俺と… 拳を合わせてくれないか？」

ナルトは自分の拳を出して、そう言った。
「？」

ナルトの意図を読めず、頭の中で疑問符を浮かべる我愛羅。

「迷惑をかけたのはこちらだからな……君がそれで良いと言うなら構わん。」

しかし、何ができるわけでも無いと思い直した我愛羅は、腕を動かす。

「我愛羅、止めろ。きっとなんか仕掛けてくるつもりじゃん。」

「そうだよ。罠かもしれないし……」

カンクロウとテマリが制止する。しかし……

「黙れ……」

それを再び黙らせる我愛羅。

我愛羅自身、ナルトに興味があった。

カンクロウの糸を封じたナルトは、自分の獲物に相応しいのではないか……そう感じていた。

二人の拳が合わさった、その時……

辺りの景色が変わった。

いや、景色が無くなり周り全てが漆黒に包まれた。

「なんだ……一体どうなっている？」

我愛羅は警戒を最大限にして、辺りを探る。

「そんなに警戒しなくても何もしないってばよ。」

そんな我愛羅に冷静に諭すように声をかけた人物がいた。

我愛羅は、その人物が誰なのかわからなかった。

先程、拳を合わせた人物に似ている……だが、目の前の人物は少年ではない。大人の男であった。

それは精神世界でのナルトの姿。前世のナルトの最後の姿であった。

「お前は誰だ？さっきのヤツの仲間か？それに、ここはどこだ？」

当然、そんなことなど知らない我愛羅は、目の前の人物が、この現象を起こした犯人だと認識しているため、警戒を緩めることはない。

「そんなに一辺に質問するなつてばよ。ちゃんと説明してやるから。」

ナルトは苦笑しながら、話し掛けた。

「良いだろう…。だが、少しでもおかしな事をすれば…。お前を殺すぞ?。」

「殺されてやる訳にはいかないが…。まずは話を聞いてくれてサンキューな。我愛羅。」

「何故俺の名前を知っている?。」

ナルトはそれには答えず、自己紹介から始めた。

「そうだな…。まずは俺の事だが…。俺は、うずまきナルト。さつきお前と拳を合わせたヤツと同一人物だってばよ。」

「つまり、さつきの姿は変化の術で化けていたと言うことか?。」

「いや…。そうじゃねえ。あれは今の俺の姿だ。」

「何を言っている?。」

聞けば聞くほど謎が増える我愛羅に、

「うーん…。なんて説明したら納得できるか…。」

『ナルト…。ここは精神世界だ。お前の記憶を見せてやった方が説明が早い。だいたい口下手なお前がヒナタを納得させられただけでも奇跡なんだ。』

上手く説明出来ず、悩むナルトの後ろにいた九喇嘛が、声をかけた。

「うるせえぞ。九喇嘛。」

軽口を叩き合う二人。だが、我愛羅はそれ所ではなかった。

(なんだ…。この化け物は…。これじゃまるで…。俺の…)

その時、自分の後ろから強烈な気配を感じた…

思わず振り向く我愛羅。

「お前は…。」

そこにいたのは…。自らの内に封印された化け物…。『守鶴』がいた…。

『ようやく俺を認識したか…。全く…。』

守鶴は、呆れたように我愛羅を見る。だがそこに、今まで我愛羅の意識を支配しようとしていた憎しみの心が感じられない。

『それにしても…。遅えぞ。もつと早く接触しろよナルト。それとクソキツネも。』

「え？守鶴… お前ってば… 俺の事がわかるのか？」

守鶴の言い様に驚くナルト。

『ああ… 六道のじじいが、お前をここに送るとき、一緒に俺たちの記憶の一部を転写して送ったのさ。俺たちは元々はチャクラの集合体だからな。じじいには簡単だったんだろう。』

「そっか… 六道の大じいちゃんが…」

ナルトはハゴロモに心から感謝した。

きつとハゴロモは、この世界でもナルトは尾獣達を助けると、わかっていたのだろう。

だから、ナルトを知っている尾獣達の記憶をこの世界に一緒に送ったのだ。

『って訳で、お前の記憶を見せるより俺の記憶を我愛羅には見せる。なんせ、ずっと一緒にいたからな。それでほとんどはわかるだろう…』

「わかった。お前に任せるってばよ。」

守鶴の提案に、ナルトは頷いた。

「んじや、我愛羅。まずは守鶴の記憶を見てもらうってばよ。」

「あ、ああ…」

我愛羅は、理解できない現状に頷く事しか出来なかった。

計画

少年がいた・・・

その少年は、生まれながらに化け物を体の内に封印されていた・・・
その力を制御出来ずに苦しんでいたが、誰も少年の苦しみを理解し
ようとはしなかった・・・

それどころか少年を嫌い、恐れ、憎む者達ばかりだった・・・

それは、実の父も同じ・・・

そんな中、一人だけ少年を理解してくれる人がいた・・・

少年は、その人といる時だけ安心できた・・・

だが、その安息も唐突に終わりを告げる・・・

ある日、少年は一人の忍びに襲われた・・・

少年は、その忍を返り討ちにした・・・

その少年は、自分が殺した人物が、唯一自分を理解してくれていた
ハズの人であつた事を知つた・・・

そして、それをけしかけたのが、自分の父であることも・・・

少年は、他人を見限つた・・・

唯一、自分だけを愛せば良いと考えるようになった・・・

少年は、強さを求めた・・・

自らの身に、化け物を宿す自分は、強さこそが存在理由であると考え
えたから・・・

それからの少年は、強者を殺すことを生き甲斐にしていた。強者を
殺すときのみに、自分の生を実感できた・・・

少年は、ますます孤独になった・・・

だが、少年は別に気にならなかった・・・

他人にどう思われても構わなかった・・・

そう思い込んでいたから・・・

そんな少年は、ある任務の折、一人の少年と出会つた・・・

その少年は、敵であつた・・・

その少年は、自分と同じであつた・・・

その少年は、自分と違う生き方をしていた・・・

その少年は、自分に勝った…
何故この少年はこれほど強いのか…

少年はわからなかった。
だから、少年は聞いた。

その少年は答えた。

「自分を認めてくれた大切な仲間だから…」

少年は、他人… いや… 自分の大切な人を守る為に戦っていた。

少年は、その生き方を羨ましいと感じた。

出来る事なら、自分もこの少年のように…

それから少年は、変わった。

少しずつ、里の人々も少年を認めるようになった。

やがて少年は青年となり、風影となった。

そして、自分に違う生き方があることを教えてくれた友と世界を救った。

友もまた火影となった。

青年は、その友と時には助け、時には助けられ互いの里をより良い所にしようと懸命に働いた。

青年は、家族を得て、里の者達に慕われ、幸せだった。

ある日、青年の友が死んだ…

うずまきナルトが殺された…

守鶴は、ハゴロモの意思により記憶の一部を過去に送った。

「これがお前の… いや… 俺が歩んで来た記憶か…」

我愛羅は、静かに呟いた。

『そうだ…』

守鶴は肯定する。

「お前は未来から… 時を渡って来たのだな？ナルト…」

我愛羅はナルトを見ると、そう言った。

今見たものは、幻術では無いと自分の魂が理解していた。

そして目の前の尾獣達も…

「ああ…」

ナルトもまた、静かに肯定する。

「そうか… 結局俺たちは… どれだけの偉業を遂げても、認められぬ者なのかもしれないな…」

ナルトの最後を知った我愛羅は、悲しそうに呟く。

火影となり、忍の世界を救ったナルトですら、同じ木の葉の者に裏切られた…

だったら… 自分達は、何を目指したら良いのか…

「そんなことは無いさ… ほとんどの里の人達は俺も我愛羅も受け入れてくれていたってばよ… ただ… 全ての人に認めて貰うことは… できないのかも知れないな…」

「なら、俺たちは、どうしたら良かったんだ？」

ナルトの言葉に思わず聞いてしまう我愛羅。

「俺は… もう火影を目指す気はないってばよ… ただ… 今は別の夢に向かって動いてる。」

「夢だど？それはなんだ？」

「俺はさ… 俺たちのような人柱力や、差別なんかで居場所のない奴等を受け入れる事ができる… 新しい里を作りたいんだってばよ。」

ナルトは、自分の夢を語った。

「つまり、自分達だけの世界を造ると言うことか？それでは昔の俺と変わらないぞ？」

我愛羅の言葉に首を振るナルト。

「昔のお前は自分しかいなかっただろ？俺が目指すのは、俺たちを認めてくれる人達で作った里だ。そこは俺たちだけが存在するわけじゃない… お互いを認め合って、助け合ってさ… そんな人達が暮らす場所にしてえんだ…」

「俺たちや… 里の住人を認めてくれるなら、別に人柱力である必要は無いし、ぶつちやけ忍である必要もない。もちろん、あまり大きくなると守れなくなるし、制限はかけるつもりだけだな…」

我愛羅は黙って話を聞いていた。

「まあ、この考えは、そもそも俺が家族を今度こそ幸せにしたいって目標を得たからこそ考えたんだけどな…」

ナルトは最後にそう言って苦笑した。

「我愛羅…俺の目指す夢を聞いてもらった訳だけど、お前に聞きたい。俺の夢を手伝ってくれないか？」

ナルトは、我愛羅の目を見ると問いかけた。

「……………」

「もちろん、強制はしないってばよ。我愛羅なら今回だって頑張れば風影になれるだろうし…。それは前世のお前が証明してみせたからな。」

ナルトはそう言って話を閉じると、我愛羅の答えを待つ。

我愛羅は一度目を閉じる…

そして、目を開けるとナルトの目を見て口を開いた。

「ナルト…お前は一つ勘違いしている…」

「？」

「俺は、お前が知る未来の俺では無い…。この世界の我愛羅だ。」

「……………」

「お前が知る未来の俺は、この時こんな会話をしてはいないだろう？」

「ああ…」

「俺は、風影など目指したいとは思わん。」

我愛羅は未来の自分と今の自分は、別人だと断言しながらも、未来の自分が何故風影を目指したのかを理解していた。

他の人に認められたい…。もちろんそれもあるだろう。

ナルトを見て、未来の自分はナルトの様に生きたいと願っていたはずだから…

しかし、最も大きな理由はそれではない。

未来の自分が風影を目指したのは、何よりもナルトが火影を目指していたからだ。

ナルトと対等でありたい。

自分のために泣いてくれた友と…

それが未来の自分が風影を目指した理由なのだ。

今回、ナルトは火影を目指す気はないと言う。

ならば、自分が風影を目指す理由も無かった。

「俺に協力してくれるって事で良いのか？」

ナルトの確認に頷く我愛羅。

「それで…俺は、この後どう動いたら良いんだ？」

我愛羅の問いに、これからの計画について話すナルト。

具体的な策はシカマルが用意してくれた。

シカマルは、ナルトの相談を受けた後、自分の手でナルトの状況を調べていた。

ナルトの現状は、話で聞くよりも、遥かに酷いものだった。

シカマルは、自分の安易な提案でナルトが、この里を去る事を決めてしまった事を後悔しつつも、協力することに決めた。

自分は流石に木の葉を捨てる気は無いが、せめてナルトが穩便に里を抜けられる様にと策を考えたのだった。

「取り合えず、我愛羅は今回は予定通りに動いてくれて良いってばよ？」

「つまり、このまま木の葉崩しに参加すると言うことか？」

「ああ…俺は、それを全力で止めるってばよ。」

ナルトの挑発するような言葉に、

「手加減はせんぞ？」

そう言つて、軽く笑うのだった。

それから、九喇嘛の助言により守鶴から一部のチャクラをもらったナルト。

『これで、この世界のワシの半身を取り戻す事が出来れば、恐らく既に魔像に取り込まれてしまった尾獣に干渉できるハズだ。それを介して全ての人柱力と会話ができるようになる。あの尾獣空間のような。』

九喇嘛は、この世界に逆行した事でチャクラの量が増大していた。もともとチャクラの塊である尾獣が自身の全てを過去の自分と同化させたのだ。

その結果、本来、出来ないことも出来る可能性があった。

魔像に干渉することは、本来出来ない。

あの尾獣空間は、あくまで取り込まれていた孫悟空を通して、他の尾獣と直接触れる事により、入ることが出来た。

だが、今回はナルトに他の尾獣の力を宿し、この世界の残りの半身を取り戻す事が出来れば、恐らくその場から魔像に干渉し、尾獣空間に入ることが出来る。

九喇嘛はそう確信していた。

「半身つてことは、第四次忍界大戦で四代目が大蛇丸に穢土転生されるまで待たないといけないのか・・・でも、それじゃあ他の人柱力を救えないつてばよ？」

その頃には、既に残っていた人柱力は自分とビーのみであった。

我愛羅は既に尾獣を抜かれていたし、他の人柱力は既に死亡していた。

『いや・・・おそろくだが・・・この後起こる木の葉崩しで、大蛇丸は穢土転生を使う。一瞬だがワシの半身のチャクラをあの時に感知した。』

ナルトの疑問に、九喇嘛が答えた。

「そういやあ、あの時初代と二代目を相手に三代目のじいちゃんは戦ったって戦闘記録があつたつてばよ。」

上忍になるために、イルカとカカシに詰め込まれた勉強・・・

その中には、忍として必要な知識の他、過去の戦術や戦略、そして幾つかの戦闘記録等も当然含まれていた。

中でも、木の葉崩しと言う事件に際し、三代目が大蛇丸を押さえた時の戦いは目撃者も多く、詳細に記録が残っていた。

「確か、じいちゃんは穢土転生の三体目の召喚をなんとか阻止したらしいけど・・・つまりその三体目が・・・」

『ああ・・・四代目火影・・・波風ミナトだな。』

九喇嘛は断言するのだった。

行動開始

『四代目火影……波風ミナトだな。』
「……………」

九喇嘛が出した名前に考え込むナルト……
「?……どうした?ナルト」

急に黙り込んでしまったナルトを不審に思った我愛羅は声をかけた。

「あ……いや……なんでも無えつてばよ……ただ、どうやって接触したものかと考えてたんだつてばよ。」

慌てて返事をするナルト

「そうか……」

我愛羅は特に疑問は持たず、納得した。

『……………』

九喇嘛はその様子を何かを言う訳でも無く、黙って見ていた。

「ああ……確か、あの戦いは音隠れの忍の結界術で他の忍は入れなかったらしい……」

「どうにかなるのか?」

「多分……な……」

「だが、そうなる俺の方の対応はどうする?他の忍に任せるのか?」
ナルトが大蛇丸の方に行くとなると、自分の方の対処は出来ないのではないかと、我愛羅は思った。

「そっちは影分身をやって時間を稼がせるつもりだ。」

「分身なんかで、俺の相手が務まるのか?」

流石にムツと来た我愛羅は、そう言うが、

ナルトは不敵に笑うと、

「我愛羅、確かにお前は強え。今のお前でも、並の上忍クラスの戦闘力はあるだろうな……それでも、俺は火影クラス……分身でも今のお前に遅れは取らねえつてばよ。」

未来では風影にまで登り詰めた我愛羅も、それは未来での話。

現時点での戦闘力の差は分身程度のハンデでは埋められるもので

は無い。

ナルトはそう言っているのだ。

「だが、憎しみから解放された守鶴と協力して当たれば…」

『今のお前じゃ、まだ、俺様の力を制御することは出来ねえよ。』

我愛羅の案を守鶴は否定した。

『お前がナルトの様に尾獣化しようとするれば、俺様のチャクラを意識を飲み込まれて二度と戻れなくなるぞ？俺様の力を使いたいなら今まで通り狸寝入りの術を使うんだな。』

「そうか…」

気落ちする我愛羅。

『まあ、尾獣チャクラを利用した砂の獣人化は今までよりも安定して使えるだろうよ。少なくとも破壊衝動には支配されることはねえハズだ。』

そんな我愛羅をフォローしようと、守鶴は、メリットも告げた。

「そうか… 守鶴… よろしく頼む。」

我愛羅は、守鶴が自分を慰めようとしてくれたのを理解して、嬉しそうにそう言った。

『ふん…』

守鶴は返事はしなかったが、少し嬉しそうに尻尾を振っていた。

「ツンデレだってばよ…」

『ツンデレだな…』

そんな守鶴を生暖かい目で見つめるナルトと九喇嘛。

『うるせえぞ… 特にクソギツネ… てめえに言われたか無えんだよ。』

『なんだと… やるのか？アホダヌキ。』

睨み合う二匹の尾獣。

「ふ… ふはははははははははは…」

それを見た我愛羅は思わず笑ってしまった。

「我愛羅？」

「尾獣も意思を持ち、時には怒り、時には喧嘩もする… 俺たちと同じだったんだな…」

「ああ… 九喇嘛も… 守鶴も… 決して化け物なんかじゃ無え。もし、九喇嘛達が化け物になったのなら… それはきつと… 俺たち人間がそうさせたんだ…」

ナルトは、悲しそうに言った。

「改めて… 俺も協力するぞ。ナルト。共に俺たちの安息の場所を作ろう。」

「よろしく頼むってばよ。我愛羅。」

その宣言と同時に、現実世界に戻ってきた両者。

「我愛羅… 大丈夫かい？」

「こいつに何かされたじゃん？」

心配そうにテマリとカンクロウが声をかけてきた。

ナルトと拳を合わせた瞬間、我愛羅が黙り込んでしまったのだから無理もないだろう。

「ああ… 大丈夫だ。すまない… 心配をかけたな。」

「え？ あ… いや… 何も無いなら良いんだ。」

(やつば、なんかされたじゃん?)

今までに無く素直な我愛羅に戸惑う二人。

「二人とも、もう時間が無い… そろそろ行こう。」

そんな二人を促す我愛羅。

その目は、二人が今まで見たことが無いほど穏やかだった。

「あ、ああ…」

「わ、わかったじゃん…」

未だ、我愛羅の変貌に付いていけない二人は、頷くことしか出来なかった。

「そう言えば、名前を聞いていなかったな？」

現実世界では、名乗り合っていないことに気付いた我愛羅はナルトに訪ねる。

「うずまきナルトだ…」

「俺は、我愛羅だ。ナルト… 次にお前と相見えるのを楽しみにしていよう。」

「ああ。」

(やっぱ、我愛羅の様子が変じゃん?)

(まあ、特に害は無い... と言うか安定してるみたいだし、取り敢えず様子を見た方が良さそうだ。)

後ろでヒソヒソ話すテマリ達。

そんな二人を連れて我愛羅は去っていった。

「ねえ... ナルト... あんたなんで、あんなことしたの?」

ナルトが突然、拳を合わせて欲しいと頼んだ事を疑問に思ったサクラが聞くが、

「うん? まあ、ちょっとな... そんなことより、早く行かないとヒナタが待ちくたびれちゃうってばよ。修行の時間も無くなるし。」

ナルトは、適当にはぐらかして待ち合わせの場所へと歩いていってしまった。

仕方なく付いていくサクラと木の葉丸たち。

待ち合わせの修行場に着いたナルト達を、先に着いて待っていたヒナタが出迎えた。

とてつもない冷気をもった目で...

「ねえ... ナルト君... なんでサクラさんが一緒にいるのかな?」

笑顔で質問するヒナタ。

そう... 顔は笑っていた... しかし目が怒っていた...

(こ、怖いってばよ...)

その圧力はナルトをして恐怖させるものだった。

木の葉丸たちなど、泡を吹いて気絶している...

(ナルト... あんたヒナタにちゃんと理由言ったの?)

サクラが小さな声で聞いてくる。

(え? いや急だったし、言う時間なんて無かったってばよ。)

(あんた、影分身使えるんだから先に行かせて事情説明しとけば良かったじゃない。)

(いや、そこまでしなくても...)

サクラはヒナタの気持ちがあんなとなくわかった。

ヒナタにとっては二人きりで修行する時間は、デートのようなものなのだ。

きつと、毎日楽しみにしていたはずだ。

そこに、他の女の子を連れてナルトがやって来れば、怒りもするだろう。

(大人びている様に見えるナルトだけど、恋愛関係は子供レベルね……)

サクラは思った……

「ナルト…… あんたちよつと、そこで正座してなさい。」

「え?なんで?」

「いいから、やりなさい。」

「……はい。」

二人の女の子の圧力に屈したナルトは、その場で正座した。

その隙に、サクラはヒナタを伴い離れると事情を説明した。

サクラがナルトに恋愛感情を持っていないと、はつきり告げた事で安心したヒナタ。

「ふふ…… でもヒナタは、本当にナルトの事が好きなのね。」

サクラに嫉妬するヒナタを可愛いと思ったサクラは、思わずヒナタをからかう。

「え?その…… うん…… 大好きだよ……」

顔を真っ赤にしながらも、しっかりと肯定するヒナタに、サクラも顔が赤くなってしまった。

「さて…… 時間もあまり無いし、修行しましょうか。」

「うん。」

正座しているナルトを許して修行を始める三人。

初日のサクラには、取り合えず体術の訓練をさせた。

どのみち、もうすぐ中忍試験が始まるため、新しい術を習得する時間はないのだ。

そうして、その日は解散となった。

木の葉丸達が気が付いた時には修行が終わっており、悔しがっていた事を記しておく……

それから六日後……

カカシに呼び出された第七班の三人は、相も変わらず遅刻している

カカシを待っていた。

そんな折り、サスケがサクラに声をかけた。

「サクラ… その… この間は悪かったな…」

「どうやら、時間が経って冷静になってから言い過ぎたと思ったようだ。」

「ううん… サスケ君の言う通りだと思うから。」

首を振ってサスケを許すサクラ。

「サスケ君… 私も… きつと強くなるからね… 足手纏いなんて言わせないように…」

「あ… ああ…」

強く宣言するサクラに戸惑いながらも頷くサスケだった。

そんな二人をナルトは、微笑ましそうに見ていた。

しばらくして、カカシが待ち合わせに姿を現した。

「いきなりだが、お前達を中忍選抜試験に推薦しちゃったから。」

「そう言って志願書を三人に配るカカシ。」

受け取ったナルトは、

（いよいよだってばよ…）

自分の夢のため、行動を開始する時が来たと胸を踊らせるのだった。

中忍試験… 始まる

カカシから中忍試験の志願書を受け取ったナルト達。

その後、ナルトとサクラは修行の為修行場に向けて、連れ立って歩いていった。

「はあ、明日試験なんて急すぎるわ…。」

「文句を言っても試験日は変わらないってだよ。」

「でも、まだ修行を始めて一週間も経ってないのよ？私… やっていきけるかしら…。」

前回のように、気弱な様子は見せないサクラ。

それは、サスケに認めてもらうと言う明確な目標が出来たからだろう。

「二応、サクラちゃんに課してる修行は即効性が高いから、多少は実力も上がってるってだよ。」

ナルトは、我愛羅との出会いからすぐに中忍選抜試験が始まる事を知っていた。

だからサクラや、ヒナタにはそれからの修行は水面歩行の業によるチャクラコントロールの修行をメインに、コントロールしたチャクラを使った体の動かし方等を教えていた。

もともとチャクラコントロールの得意なサクラ、柔拳でチャクラをコントロールしながら戦うヒナタには、この修行は効果的だった。

一気にレベルアップ… とは行かないが、それでも全体的な向上は見られた。

「それは、わかってるけど… でもせめて後一ヶ月あればなあ…。」

自分でも、それなりに強くなっている実感はサクラも感じていたが、それでも時間が足りない事は不安だった。

「まあ、明日は試験だから今日は軽めに終わらせようってだよ。」

「ええ… ますます不安なんだけど…。」

段々落ち込んでいくサクラ。

そんなサクラを見かねたナルトは、

「サクラちゃん… サクラちゃんは確かに戦闘面は俺やサスケよりも

下だろう…。でも、頭脳面では飛び抜けて高いってばよ。もし、座学系の試験ならサクラちゃんが頼りだってばよ？」

そう言っただけで慰める。

「そっか…。そうよね。その時は任せて頂戴。」

サクラは、復活も早かった…

そして、ヒナタと合流したナルト達はお互いに中忍試験の予想や対策について話し合い、軽めの修行を終えて解散となった。

サクラを見送った後、ナルトとヒナタは、今後の計画について話していた。

ヒナタはナルトの計画を事前に聞かされていたのだ。

「ナルト君…。いよいよだね。」

「…。ああ。」

「ナルト君？」

歯切れの悪い返事をするナルトに、ヒナタが名前を呼んだ。

「ヒナタ…。本当に良いんだな？このまま俺に付いてきて…」

珍しく不安そうなナルト…

このままナルトに付いていくと言うことは、ヒナタに日向家を捨てると言っているようなものだ…

ヒナタの顔を見た時、本当にこれで良いのか…。ナルトは急に不安になったのだった。

だが、そんなナルトにヒナタは気負った様子もなく静かに微笑む。

「今更だよ。ナルト君…。ナルト君のいるところが、私の居場所だよ。」

「…。ありがとな…。ヒナタ…。そしてゴメン…」

迷いもなく即答するヒナタに、ナルトはそれしか言うことが出来なかった。

翌日…

指定された場所に集合した第七班。

そこにはナルト達の他、中忍試験に挑む下忍が集まっていた。

そんな中、301の教室の前で歴史通り、騒ぎが起こっていた。

ロック・リー、テンテンが扉の前に立っていた下忍二人に殴られる。

リーばかりか、女の子のテンテンまで容赦なく殴る二人を非難する他の受験者。

だが、二人は悪びれもせず、

「中忍試験は難関だ。かくいう俺たちも三期連続で合格を逃している。この試験を受験したばかりに忍を辞めていく者……再起不能になった者……俺たちは何度も目にした……どっちみち受からない者を、ここでフルイにかけて何が悪い？」

そう言い放った。

だが、その言葉に動じず前に進む者がいた。

「正論だな……だが……俺は、通して貰おう。」

サスケであった。

「そして、この幻術でできた結界をとつと解いて貰おうか？俺は、三階に用があるんでな。」

「？何言ってるんだ……アイツ。」

サスケの言葉を理解できない多くの受験者達。

「ほう……気づいたのか……キサマ。」

だが、扉の前の下忍たちは、サスケに感心していた。

展開していた幻術を解く。

しかし……

「だが……見破っただけじゃ……ねえ!？」

結界を解くと同時にサスケに攻撃する下忍。

迎撃しようと蹴りを放つサスケ。

だが、二人の攻撃は第三者の乱入により、止められてしまう。

そう……二人の間に高速で割って入ったリーの腕によって……

「おい、リー。約束が違うじゃないか。下手に注目されて警戒されたくないと言ったのはお前だぞ？」

そのリーを、同じ班の日向ネジが嗜める。

「だって……」

そう言っつてサクラを見るリー。

リーは、サクラに近寄ると自己紹介を始める。そして……

「僕とお付き合ひしましょう。死ぬまであなたを守りますから……」

熱烈な告白をした。

「絶体イヤ。あんた濃ゆい…」

速攻で拒否するサクラ。

(うーむ… 会っていきなり告白って… ゲジマユってば改めて見ると… スゲーな…)

ナルトは、妙な事に感心していた。

そんな中、サスケに興味を抱いたネジがサスケの名前を聞くが、お互いに憎まれ口を叩き、結局名乗り合うことなくその場を別れる。

そんな二つの班を、騒ぎを起こした下忍二人が隠れて見ていた。

「あれが、カカシとガイの秘蔵っ子ってガキたちか… まあ、取り合えず志願書提出は通過ってところだな。」

「ああ…」

二人は下忍に扮した試験官だったのだ。

「今年の受験生は楽しめそうだな。」

そう言って姿を消す二人。

一方、301の教室に向かうナルト達は、ネジ達と別れたリーに呼び止められていた。

「目付きの悪い君… ちょっと待ってくれ。今ここで… 僕と勝負しませんか？」

そして、お互い同意の上で軽い手合わせが始まった。

リーの体術に、翻弄されるサスケ。

だが、ナルトの評価は違っていた。

(へえ… サスケのヤツ… 体術が上達してるってばよ。)

写輪眼を使ってなお、リーに翻弄されるサスケだが、ナルトが知るこの時点のサスケに比べ、リーの動きに少しだけ付いていっていた。

それは、サスケの修行の賜物。

波の国で、白に殺されかけたサスケ。

目では攻撃を見切れていたのに、足を負傷してかわすことが出来なかった。

その時に、写輪眼の弱点について理解していたのだ。

それから、写輪眼を体に慣らしながら、ひたすら体術の修行を行っ

ていたサスケ。

しかし… 確かに体術は向上していた… だが所詮は独学の付け焼き刃…

指導者を仰がず、一人での修行では限界があった。

むしろ、それでも向上しているのは、サスケの天性の才能故であるう。

戦いは佳境に差し掛かる。

サスケを蹴りで跳ね上げ、後ろを取ったリー。

「知っていますか？強いヤツには天才型と努力型がいます。君の写輪眼がうちの血を引く天才型なら、僕は、ただひたすら体術だけを極めた努力型です。」

「言ってみれば、君の写輪眼と僕の究極の体術は最悪の相性… そして、この技で証明しましょう。努力が天才を上回る事を…」

リーが技に入ろうとした、その瞬間…

リーの腕に巻き付けられた包帯… 技の為にほどかれたその一部に風車が刺さった。

「そこまでだ、リー。」

突然現れた亀がリーを叱る。

「くっ…」

サスケはなんとか姿勢を正すと、着地した。

写輪眼の弱点を知っていたサスケの動揺は少ない。

リーを叱っていた亀だったが、その上にとってもなく濃い男が現れた。

その男こそ、リー達の班の担当上忍『マイト・ガイ』その人である。「まったく青春してるな、お前ら。」

相も変わらずの、熱血テンション劇を繰り広げるガイとリー。

一通り終わると、ナルト達にガイが気付いた。

「君たち、カカシ先生は元気かい？」

「カカシを知ってるのか？」

突然話を振られて驚きながらも、なんとか返すサスケ。

「知ってるも何も…」

ガイはそこまで言うのと、目の前から姿を消した。そして次の瞬間にはサスケ達の後ろから…

「人は僕らの事を『永遠のライバル』と呼ぶよ…」

そう声をかけた。

「!?!」

ガイの動き… その初動すらまるでわからなかったサスケとサクラは思わず固まる。

(相変わらず目立つのが好きだってばよ… ゲキマユ先生…)

ナルトは、特に驚きもせずガイを見ていた。

「(この子は…)…」

自分の動きを目で追っていた…

ナルトを驚きの目で見えるガイ。

だが、すぐにもとのテンションに戻り、

「50勝49敗… カカシより強いよ… 俺は…」

(カカシより上だど? ちくしょうハツタリじゃねえ…)

ガイの動きを追えなかったサスケは、少なくともその言葉が偽りではないと感じた。

その後、リーやガイと別れたナルト達。

サスケはまだシヨックから立ち直れていない。

「ビビってるのか? サスケ…」

「!?!」

「ちよつとナルト…」

(身体が震えている… それは恐怖から?)

違う…)

「フン… 面白くなってきたじゃないか…」

強いヤツと戦える… それは強くなりたいサスケにとって、この上もなくありがたい環境だった。

「いくぞ。ナルト、サクラ。」

サスケは率先して先頭を歩く。

301の教室の前でカカシが待っていた。

三人ともいることを確認したカカシ。

「お前らは俺の自慢のチームだ。さあ行つて来い。」
カカシはそう言って三人を送り出すのだった…

第一の試験

教室の扉を開けたナルト達…

そこには、既に中忍試験の受験者達が集まっていた。

殺気とはまた違う… 独特の雰囲気飲まれそうになるサクラ。

と、その時…

「サスケ君、遅い。」

サスケに、同期の一人… 山中いのが抱きついてきた。

「サスケ君から離れる、いのぶた！」

いのとの言い合いで、サクラはいつもの調子を取り戻した。

いのの登場と共に、ナルトの同期のメンバーも集まってくる。

ヒナタは、ナルトを見て静かに微笑んでいた。

そんなヒナタを見たナルトは、目で返事だけをすると軽く頷く。

ほとんどのメンバーは、そんなやり取りに目を向ける事はなかった。

が、唯一人… シカマルだけは複雑そうな顔をして、二人を見ていた。

この中忍試験… その間に起こる木の葉崩し… それをきっかけ

にシカマルがナルトに授けた策が実行される。

それはナルトの夢に繋がるのかも知れないが、人柱力を失うことにな

る里にとつては大打撃である。

なによりも、ナルトとの別れを意味する…

今からでも説得すべきか…

そんなシカマルの心情を理解してか、ナルトはシカマルに近づくと

肩に手を置いた。

シカマルはナルトの目を見ると、苦笑する。

説得は無理だと、納得してしまったのだ。

それほど、ナルトの目は揺るぎのない強い目をしていた。

そんなやり取りの中、キバがナルト達を挑発してくる。

「俺達は、相当修行したからな。お前らにや負けねーぜ。」

「……………」

だが、サスケはもとより、サクラも… それどころか、挑発に乗ることを期待していたナルトすら反応を返さない。

「つて、無視かよ…。」

思わず、ツッコんでしまうキバ。

「いや… それだけ自信をつけてるんだ。相当頑張ったんだろう？期待してるってばよ？」

「あ？あ、ああ…。」

ナルトの予想外の言葉に、思わず頷いてしまうキバ。

(こいつ… こんな落ち着いたキャラだったか?)

ナルトの様子に違和感を感じるキバ。

後になつてから、上から目線で語られていることに気付いて憤慨する事になるのだが…

そんな同期で騒ぐナルト達を、見兼ねた一人の忍が接触してきた。

薬師カブトである。カブトは中忍試験の心構えや、態度、情報をナルト達に教える。

「ここに集まった受験者達は、各国から選りすぐられた下忍のトップエリート達なんだ。そんなに甘いもんじゃ無いですよ？」

最後にカブトは、そう言つて締めた。

静まり返るナルトの同期たち…

「おい、ナルト… お前やつぱり変だぞ？」

キバが真つ先に口を開く。

だが、それはカブトの言葉によるものではなかった。

「変つて何が？」

ナルトが聞くと、

「お前、いつもだったたら、こんな風に沈黙が訪れると真つ先に騒ぎ出してたろ。例えば、受験生達に大声で名乗った挙げ句に、てめーらにやあ、負けねーぞ！とかつて言ったりして。」

「うっ…!？」

ドンピシャだった…

キバの台詞は正に、前世のナルトが確かにこの試験で言ったもの…

今のナルトにとっては、黒歴史に近い…

「そうよ、アカデミー卒業間近から、急に大人しくなった気はしてたけ

ど、今日はいつにもまして冷静……と言うかちよつと大人っぽくて、カツコい……じゃない……とにかく変よ。」

いのもキバの言葉に便乗する。

周りを見れば、シノやチョウジ……事情を知らない者も同意見の様だ。

(案外……こいつらはこんなに昔から俺の事をしつかりと見てくれていたんだな……)

ナルトは、自分の同期達が自分の事を、これほど見てくれていた事に嬉しくなった。

(この事に、最初から気付いてさえいれば……前世でも、俺は火影なんて目指す必要はなかったのかも知れねえな……)

「ぶ……あはははははははははは……」

ナルトはなんだか可笑しくて大声で笑ってしまった。

「おい、笑うんじゃねえ。」

キバはムキになって騒ぐ。

「いや……別にキバを笑った訳じゃ無えつてばよ。」

ようやく笑いが治まったナルトは、キバを宥めると、

「ありがとな、キバ。俺を心配してくれて……」

ナルトはそう言つて、屈託なく笑った。

その純粋な笑みを見たキバを含む同期たちは、思わず赤面してしまう。

こんな無防備な笑顔を、向けられる事などそうは無い……

(やつぱり、ナルトのヤツ……変わったわ……チエツクしところかしら……)

いのは、ナルトに少しやられた様だ……

その後、音忍によるカブトへの襲撃があり、そして……

「静かにしやがれ、どぐされヤローどもが！」

第一の試験が始まった。

試験官、森乃イビキによる筆記試験。

因みに、ナルトとヒナタは隣の席である。

「よろしくな、ヒナタ。」

「うん。」

軽く挨拶をかわす二人。

ナルトも、今回は余裕があった。

ナルトは、上忍になるためにイルカから無理矢理詰め込まれた知識がある。

それなりに自信があった。

流星に、前世のように無回答で突破する気は無い。

(とは言え… 保険はかけとかねえとな…)

ナルトは、この中忍試験の第一の試験が筆記試験だと知っていたため、予め影分身を変化させて小さな虫になり、サクラの答案を見れるように、細工をしていた。

影分身が体験したものは、オリジナルに還元されると言う、影分身の特性を使ったカンニングだ。

万が一、自力で解けなかった時の為に用意した。

そして…

(あつぶねー… 本当に分からないのが何問もあったってばよ… そういやあ… あの地獄の勉強から何年も経ってるもんな… 覚えてないのもあるか… ハハハ…)

ナルトが冷や汗を流す中、最後の問題が始まった。

イビキは、問題を出す前に受験者に条件を出した。

最後の問題を受けて間違った場合は、二度と中忍試験を受けられないと。

それが嫌なら辞退しろと忠告するイビキに、一人… また一人と受験者が辞退していく。

(それにしても… こうして別の視点でイビキの試験を見ると… スゲー嫌らしい試験だってばよ。)

ナルトは、下忍としてでは無く試験官としての視点で今回の試験を考えていた。

流星に尋問、拷問のスペシャリストと呼ばれるだけあって、人の心理を付いた嫌らしい試験だ。

ナルトはそう考えていた。

そして、規定の時間が過ぎた。

イビキはこの問題のネタばらしを始める。

「受けるを選んだ君たちは、難解な第10問の正解者だと言っている。これから出会う困難にも立ち向かって行けるだろう。入口は突破した。中忍試験。第一の試験は終了だ。君達の健闘を祈る。」

最後にイビキは、合格した受験者達を讃える言葉を口にする。同時に、窓を割って乱入して来た者がいた。

みたらしアッコ。第二の試験の試験官である。

（……………そう言えば、この頃はアッコは痩せてたんだよなあ…………）
アッコの空気の読めない派手な登場に周りが固まる中、ナルトは全く別の事を考えていた。

「57人！イビキ。19チームも残したの？」

イビキから残りの受験者数を聞いたアッコが、驚く。

それでも、ナルトの前世の時よりも少ない。それはナルトの言葉が無かったからだろう。

「今回の第一の試験。甘かったのね！フン。まあ、いいわ。次の第二の試験で半分以下にしてやるわよ。」

アッコは、合格した受験者達に向かってサディスティックな笑みを浮かべて言い放った。

第二の試験開始

第二の試験の担当試験官『みたらしアニコ』の先導のもと、第一の試験をクリアした受験者達は、第44演習場…通称「死の森」にやって来た。

第二試験の内容について、アニコが説明を始める。

それは、巻物の奪い合い…

それぞれのチームには、「天の書」「地の書」のどちらかが配布され、それらを奪い合い、両方の書を揃えて中央の塔まで行くというもの…

また、この試験以降は死ぬこともあるため同意書にサインを求められた。

今回はナルトが騒いでいないため、アニコがクナイを投げる等のイベントも無く、淡々と話が進んでいく。

そして…

「これより…中忍選抜、第二の試験…開始。」

アニコの開始の合図とともに、各々の入口から一斉に受験者達が行動を開始する。

それぞれが死の森に入ってしまったらしくすると、あちらこちらからの悲鳴が木霊した。

それは、受験者達の悲鳴…同じ受験者に襲われた者…

逆に振り返りに会った者…

或いは、死の森に生息する猛獣などに襲われた者…

受験者たちは、早くも第二の試験の洗礼を受けていた。

そして、ナルト達の所にも襲撃者が現れる。

隙を窺う雨隠れの忍。

だが、なかなか隙を見せないナルト達に業を煮やした襲撃者は、正面から巻物を奪おうと襲ってきた。

ナルト達を、所詮はアカデミーを卒業したばかりの新人…と侮っていた事もある。

サスケの迎撃により、襲撃者の撃退に成功した。

だが、敵の気配は他にもあつた。

サスケはナルト達に目配りをする、

「一旦、三人がバラバラになった場合、例えそれが、仲間であっても信用するな。敵が変化の術で化けて、こちらの油断を誘う可能性がある。」

「念のため、合言葉を決めておく。いいか……合言葉が違った場合は、どんな姿形でも敵とみなせ。」

そう言つて合言葉を二人に教える。

「よく聞け……言うのは一度きりだ。」

忍歌『忍機』と、問う。その答えはこうだ……

”大勢の敵の騒ぎは忍よし、静かな方に隠れ家もなし、忍には時を知る……”

”……”

「ナルト……あんたね……」

「一回だけだと言つたら……巻物は俺が持つ……」

三人が少しの間話し合ひをしていると、突然暴風が三人を襲う。

その風に吹き飛ばされ、バラバラにされるナルト達。

暴風が止んだ後、サスケは茂みに隠れて、敵の次の動きを待った。

そこに、サクラが合流する。

サスケの合言葉に、サクラは左手を胸に当てながら、淀み無く答える

サスケは、その「答え」にサクラを本人と認めた。

しばらくすると、ナルトが合流してくる。

「痛え……おい、みんな。大丈夫か？」

笑いながら近づいてくるナルト。

「ナルト、ちよい待ちなさい。合言葉……」

そのナルトにサクラが合言葉を聞く。

「分かつてるって……『大勢の敵の騒ぎは忍よし、静かな方に隠れ家もなし、忍には時を知ることこそ大事なれ、敵のつかれと油断すると……』」

ナルトもまた、淀み無く答える。

その答えを聞いた時、サスケはナルトに向かって躊躇無くクナイを投擲する。

「うわあ！」

そのクナイをかわすナルト。

「ちっ… 今度は俺の攻撃を避けるほどのヤツか…」

敵の強さに、警戒心を強めるサスケ。

サクラもまた、油断無く構えていた。

「よく… わかったわね…」

二人の様子に、騙すのは無理だと判断した襲撃者は、変化の術を解く。

音隠れの忍の襲撃者は、サスケになぜニセモノとわかったのか尋ねた。

「この状況は、演習場に入る前から想定していた。」

サスケは、演習場に入る前の待機時間の会話を思い出していた。

「サスケ… この試験は、チームの人間以外は全てが敵だつてばよ。」

「ああ…」

「もし、なんらかの方法で俺たちがバラバラになった場合、本人と確認するための合図を考えておいた方が良いつてばよ。」

「合言葉でも考える？」

ナルトの話しを聞いたサクラは、ナルトに提案した。

「いや… 合言葉は… 俺が覚えられる自信が無えつてばよ…」

「え？ナルト… あんた、頭が悪いのは演技じゃ無かったの？」

「ハハハ… 面目ないつてばよ。」

ナルトは、自分が勉強が得意でないことを笑って誤魔化しつつも認めめた。

「だから、合言葉はなんでも良いんだ。重要なのは、それじゃなく… 『左手を胸に当てること』これをしながらその時決めた合言葉を覚えられる範囲で答える。それをもって合図にしようと思うんだ。」

サスケは、ナルトの提案に頷いた。

上手くすれば、これを逆手にとって敵を嵌める事が出来るかもしれない… そう考えた。

そして、その時は訪れる。

敵が、地面で自分達の会話を聞いていることに気付いたサスケは、わざと合言葉を教えた。

それを得意気に、何もせずにそらんじた者はニセモノ…。つまりはそういう事だった。

「お前の合言葉は正解だが…。足りてなかったのさ…。」

サスケの言葉に、何となく理由を察した襲撃者。

「なるほど…。つかれも油断もないってわけね…。思った以上に楽しめそうね…。」

だが、襲撃者は特に気落ちする様子は無く、むしろ楽しそうに答えた。

一方、同じく風に吹き飛ばされたナルト…

吹き飛ばされた場所で巨大な蛇に襲われるが一瞬で片付けると仙人モードになり、サスケ達を捕捉していた。

「さて…。サスケもサクラちゃんも、前の世界でのこの時点より、実力は高いけど…。流石に大蛇丸相手じゃ荷が重いつてばよ。」

ナルトは急ぎ、サスケ達の元へ向かった。

そしてサスケ達はと言うと…

音隠れの忍に扮した大蛇丸と対峙していた。

「私たちの『地の書』欲しいでしょ？君たちは『天の書』だものね？」

サスケ達の班が何の巻物を所持しているか把握している大蛇丸は、そうやって地の書を見せびらかした後、地の書を丸飲みした。

そして…

「さあ…。始めようじゃない…。巻物の奪い合いを…。『命懸けで…』」

その瞬間、大蛇丸からとてつもない殺気が放たれた。

一瞬で自分の死をイメージさせられたサスケは、そのあまりに濃密な殺気に思わず吐いてしまう。

サスケは、サクラの無事を確かめる…

すると、サクラもまた先程の殺気に身体を震わせていた。しかし、サスケより軽症のようで両の足で立ち、クナイを構えて大蛇丸をにら

んでいた。

(どう言うことだ?)

自分は金縛りにあったかのように動けなくなっていると言うのに……なぜサクラは立っていられるのか……

こんな状況だと言うのに、恐怖よりも疑問がサスケの頭を支配していた。

(へえ……私の殺気に耐えられるなんてね……この子もちよつと興味深いわね……)

大蛇丸もまた、サクラの様子に興味を抱いた。

そしてサクラは……ナルトとの修行を思い出していた。

中忍試験が始まる前の日……

軽く修行をした後、ナルトが話し始めた。

「ヒナタ……サクラちゃん……明日の中忍試験は、かなり大変な物になると思う。おそらく死人も出るような試験になるハズだつてばよ……」

「そ……そんなに?」

ナルトの言葉に少し怖じ気付くサクラ。

「じゃあ、止めとくか?サクラちゃん。」

ナルトの挑発に、首を振って否定するサクラ。

その言葉を満足そうに聞くナルト。

ナルトは、話を続ける。

「まあ、そんな試験だ……おそらく中には殺しを主な目的とした忍も来てるだろう。だから……」

「だから?」

「最後に、二人には俺の殺気に耐える修行をしてもらうつてばよ。」

「それは、必要なことなの?ナルト君……」

ヒナタがナルトに聞き返す。

「中忍試験で必ず必要か……それはわからない……でも……こういう

事態はいつ起きるかわからねえ…。本気の殺意には相手の身体を硬直させたり、戦意を挫いたり、判断を鈍らせたり…。相手にいろんな影響を及ぼす…。それは、そのまま自分の死を意味するようなものだ…。これに耐えるには慣れて貰うしか無いんだってばよ…。」

ヒナタとサクラは神妙に頷いた。これまでの任務や演習で心当たりがあつたからだ。

「ただ…。明日の試験を考えて、やるのは1度きりだ…。それ以上は明日に差し支えるだろうしな。じゃ…。始めるってばよ。」

その言葉の後、ナルトから放たれた殺気に、サクラもヒナタも腰を抜かしてしまった。

サクラに至っては、あまりの恐怖に涙を流し、失禁までしていた。すぐに殺気を収めるナルト。

二人に謝り近付くと、二人とも我先にとナルトにすがり着いた。

殺気を放って、二人を威圧したのはナルトのだが、ナルトは既に殺気を収めていた。

とにかく二人とも何か、すがり付くものが欲しかったのだ。

それほど恐ろしかった。

「怖がらせてゴメンな…。でも、きつと二人にとってこの経験は役に立つときが来るから…。」

ナルトは、もう一度謝ってから、二人が落ち着くまでそのまま好きなようにさせていた。

落ち着いた後に、サクラに殴られるだろうな…。と、戦慄していたが…。

・
・
・

サクラは、その時のナルトの言葉が痛いほど理解できた。

サスケですら、嘔吐し地面にへたり込んでいるのだ…。

おそらく、何も知らずに自分が受けていたら、昨日と同じ事になつていたはずだ。

そんな状況で襲われたら、ひとたまりも無い。

こうしてまだ立っていられるのも、ナルトの殺気を経験していたからだ。

そして、サクラの様子に奮起したサスケもまた、身体にカツを入れてヨロヨロと立ち上がる。

サクラに負けている訳にはいかない…

サスケのプライドが、大蛇丸の殺気による恐怖をかろうじて上回ったのだ。

「ふふ… 私の殺気に耐えて立ち上がった事は、評価するわ… でも… 立ち上がっただけじゃ… ね…」

大蛇丸はサクラを無視し、立ち上がったサスケに攻撃を加えた。

「ぐっ…」

まだ、先程のショックから抜けきれていないサスケの動きは鈍い。

大蛇丸の攻撃に為す術無く吹き飛ばされるサスケ。

更に大蛇丸が攻撃をしようと、サスケを追いかける。

その時…

サスケと大蛇丸の間に、手裏剣が刺さった。

「悪いな… サスケ… 合言葉は… 忘れちゃったぜ…」

二人の間に手裏剣を投げた人物… ナルトは、左手を胸に当てながら、そう言って笑った。

ナルトVS大蛇丸

「悪いな… サスケ。合言葉は… 忘れちゃったぜ…」

ナルトは、そう言いながら状況を整理していた。
相手は間違いなく大蛇丸。

対してサクラ、サスケ両者とも目立った傷は無い。

「二人とも… 大丈夫か？」

「うん… ナルト… ありがとう。」

サクラはナルトが来たことで安心した。

これまでの任務でもナルトが来れば、大丈夫と言う信頼があった。
一方サスケはと言うと、サクラの様には余裕が無かった。なんとか立ち上がる事は出来たが、先程の殺気によるシヨックはまだ残っており、冷静に考える事が出来なくなっていたのだ。

（ダメだ… このままじゃ三人とも殺される… あの殺気は、カカシより遥かに上だった。コイツは間違いなく腕もカカシより…）

サスケはこの場を見逃してもらうため、

「巻物ならお前にやる。頼む… これを持って、引いてくれ。」

そう言って巻物を差し出す。

「なるほど… センスが良い… ”獲物”が”捕食者”に期待できるのは、他のエサで自分自身を見逃して貰うことだけですものね。」

相手の言葉を了承と受け取ったサスケは、巻物を相手に向かって投げた。

だが、その巻物は途中で別の人物にキャッチされてしまう。

「ナルト… 余計な事をするな！」

恐怖と不安から、巻物を渡す邪魔をしたナルトに向かって声を荒げるサスケ。

だが、ナルトはあくまで冷静に答える。

「サスケ… 落ち着け。アイツに巻物をやったからって、アイツは俺たちを見逃すことなんてしないってばよ。」

ナルトの言葉に可笑しそうに笑った大蛇丸。

「この場にいるって事は、あの大蛇を倒してきたのね… ナルト

君……」

「そして……正解よ？巻物なんて、殺してから奪えば良いんだもの……」

その瞬間、大蛇丸からまたも凄絶な殺気が放たれる。

先程受けたばかりなため、多少の耐性は着いていたが、それでも身体の震えは止まらない。

そんなサスケにナルトは、

「サスケ……大丈夫だってばよ。俺の仲間は、絶対に殺させたりなんかしねえ。」

ハツとするサスケ。

その言葉は、波の国で再不斬の殺気に怯えるサスケに向かってカカシが言った言葉と同様だった。

(情けねえ……俺はあれから何も成長してねえってのか？)

「フン……お前に守って貰うほど俺は落ちぶれちゃいねえ。」

サスケは、気合を入れるとナルトに反発するように言い放つ。

不思議と身体の震えは止まっていた。

サスケの様子を見たナルトは、口角を上げると、

「ああ……だけど……サスケは巻物とサクラちゃんを頼むってばよ。俺もコイツ相手に巻物を死守しながら戦うのは厳しいからな……」

サスケにそう頼んだ。

「ちっ……わかった。ナルト……負けるなよ？」

サスケは、ナルトに頼られたのが少し嬉しかった。絶対に口にはしないが……結局、舌打ちをしながらもナルトを激励する。

「当たり前だってばよ。」

二人のやり取りを大蛇丸は興味深そうに見ていた。

自分の殺気に耐える所か、まるで堪えた様子の無いナルト……

そのナルトへの反骨心からか、怯えから立ち直ったサスケ。

(特に、このナルト君……この子は少し妙ね……カブトからの資料によると典型的な落ちこぼれって話だったけど……この状況で落ち着きすぎだわ……)

「作戦会議は終わったかしら？」

(とりあえず、一当てして様子を見ましようか… 元々の目的はサスケ君の方だしね…)

「ああ… 待っててくれたのか？ そいつはサンキューだってばよ。まあそういう訳で… お前の相手は俺だってばよ。」

大蛇丸の言葉に、ナルトはそう返すと九尾仙人モードになる。

「な…!？」

その姿… いやその内包する強大なチャクラに驚く大蛇丸。

(これは一体… これは九尾のチャクラ？… いえ… あり得ないわ。九尾は憎しみの塊。こんな風に安定して纏うなんて出来るはずが無い… それに、仙人化もしている？ 自然エネルギーも混じっている気がするわ…)

「来ないのか？ なら… こっちから行くってばよ。」

ナルトの言葉を聞いた大蛇丸。

驚きはあったが警戒を怠っていたわけではない。

だと言うのに、ナルトの姿を見失ってしまった。

ナルトを捕捉したときには、ナルトは既に大蛇丸の目の前にいた。

「おらあつー！」

ナルトの掛け声と共に、渾身の拳が大蛇丸にヒットする。

「ぐはっ…！」

予想外の出来事に受け身も取れずに吹き飛ぶ大蛇丸。

何本もの木に激突し、ようやく制止した。

「ぐっ… なんて力… それに速さも… あの子は一体…！」

「考えている暇は無いつてばよっ！」

「くっ…！」

すぐ目の前にナルトがいた。

その声に反応し、一瞬で印を結び、術を発動した大蛇丸… その反応の速さは流石としか言いようが無い。

大蛇丸の発動した術を食らい、粉塵に包まれるナルト。

だが… 咄嗟に放った術ではチャクラの練り込みが足りない…

大蛇丸としても不本意な威力の術であった。

故に…

「この程度の術じゃ… このチャクラの衣の突破は無理だつてばよ？」

粉塵が晴れた時… そこには無傷のナルトが立っていた…

大蛇丸は、その結果を予想しており立て続けに術を連発する。

ナルトは、それを防ぎ… 或いは避けてチャクラの腕を飛ばして反撃する。

「ハア… ハア… ハア…」

戦いは、ナルトがやや優勢だった。

大蛇丸は次第に防戦一方になっていき、息を切らせる。

「凄え… ナルトのヤツ… こんなに強いヤツだったのか…」

「うん… ナルトが強いのは知ってたけど… まさかここまで強いなんて思わなかったわ…」

ナルトの本気の戦いを初めて目の当たりにするサスケとサクラは、あまりのレベルの違いにそんな感想しか出て来なかった。

ずっとナルトに劣等感を抱いていたサスケをして、素直に感心するしかなかったのだ。

二人の見守る中、ナルトと大蛇丸は、一旦距離を取る。

「ここまでだな…」

「ハア… ハア… ハア…」

二人は、戦いを止めると話し始めた。

「ナルト君… 提案があるのだけど…」

「聞くつてばよ？」

「ここで、退かせてもらえないかしら…」

そう言うと、飲み込んでいた地の書を取り出した大蛇丸は、

「これをあげるわ？それで今回は手打ちってことにして欲しいのよ…」

地の書をナルトに向かって放る大蛇丸。

飲み込んでいたハズのそれは、しかし汚れも無く綺麗なままだった。

「ナルト!?聞くな。コイツはここで始末した方が良い。何をするかわからないぞ！」

サスケが大蛇丸の提案を拒否するようナルトに大声で叫んだ。

「そうよ… はつきり言って、ソイツは異常よ？今のうちに倒しておいた方が良いわ。」

サクラもサスケに同意見だった。

しかし…

「良いつてばよ… 今回は見逃しておく。」

ナルトは了承した。

「な？」

「どうして？」

驚く二人。

「ふふ… まだ試験は始まったばかり。お互いここで消耗し過ぎる訳にはいかないものね…」

大蛇丸は理解していた。一見、優勢に見えるナルトだが、実はナルトも限界に近い事を…

ナルトがこの時代に逆行してきて数カ月… 身体に慣れるように修行は続けていたが、本当に全力で戦うのは今回が初めてだった。

結果、ナルトの身体はその動きに付いていけずあちこちが悲鳴をあげていた。

それは九尾の回復力を以てしても、回復出来ない程に…

「さっさと行くつてばよ…」

ナルトは大蛇丸に動く様促す。

「わかってるわ… でも… 置き土産残さないと… ね…」

大蛇丸はそう言うと、首を伸ばしてサスケに迫る。

大蛇丸の歯がサスケの首に突き立てられ… る事は無かった。

ナルトが伸ばしたチャクラの腕が、大蛇丸の頭を押さえていたのだ。

「約束は… 守って貰うつてばよ？」

ナルトは油断していなかった。

(サスケに呪印を施させるわけにはいかねえつてばよ…)

「…………… 仕方ないわね… ナルト君… この借りはまたいざれ…」

ナルトが大蛇丸の頭を放すと、大蛇丸はすぐに元に戻し残念そうに
咳いて姿を消した。

大蛇丸の気配が遠ざかったのを確認したナルトは力を抜くと、
「二人とも、無事で良かったってばよ。」

サスケとサクラに笑いかけ、そのまま意識を失うのだった。

独白

大蛇丸を撃退したナルトは、無理に全力を使った反動で意識を失った。

サスケとサクラは、ナルトが倒れる姿を初めて目の当たりにした為驚くが、直ぐに気持ちを切り替えるとサスケがナルトを背負い隠れる場所を探すため、移動を開始した。

移動先で、巨大な木の根…。その間に隠れられそうな空間を見つけた為、そこで休憩する二人。

ナルトを背中から下ろし、下に寝かしたサスケ。

「……………」

しばし、無言になるサスケとサクラ…

と、サクラが口を開いた。

「ナルト…大丈夫かな？サスケ君…」

「今のところ、目立った外傷はない…。気を失っているだけのようにだ…」

ナルトの容態を軽く診断するサスケ。

「そうなんだ…。良かった…」

少し安心するサクラ。サクラは続けて話します…

「私…勘違いしてた…。アカデミーを卒業して…第七班に入つて、本当のナルトを知った気になってた…」

「……………」

サスケはサクラの独白を黙って聞いていた。

「本当のナルトは、強くて…。私たちとは違う人種なんだって…。どんな状況でも笑って切り抜けて…。絶対に負けないんだって…。勝手にそう思ってた…」

「でも…。ナルトだって、倒れることもあるし、負けることだってあるのかも知れない…。私…。ナルトに頼りすぎてたんだって…。今のナルトを見て、ようやくわかった…」

サスケはサクラの言葉に、ちらつとナルトを見る。

そして、サスケが口を開いた。

「俺も… ナルトに甘えていたのかも知れねえな…」

「サスケ君？」

「前にも言ったよな？俺には殺したいヤツがいるって…」

サスケは自分の事情をサクラに話した…

「そんな事って…」

サスケの独白に呆然とするサクラ。

「じゃあ… サスケ君が殺したい相手って…」

「ああ… 俺の兄… 『うちはイタチ』だ…」

サクラはなんと声をかけたら良いかわからなかった。

一族の全てを兄に殺され、兄に復讐する為に生きる弟… こんな悲劇があるだろうか…

「俺は、それ以来一人だった… 誰も俺の気持ちなんて理解できやしない… ただイタチを殺す… それだけを考えていた…」

その言葉を聞いたサクラは、アカデミーにいた頃のことを思い出していた… アカデミー時代、サスケは多くの女の子にモテていた… でもその誰に対してもサスケが振り向くことは無かった…

当たり前だ… サスケは他人を拒否していたのだから…

「そんな中でも、たった一人だけ… 気になるヤツがいた… ソイツはアカデミーで、実力も無い癖に俺に絡んできては返り討ちにあつていた… 騒がしくて、ウストラトンカチで… だが… 俺と同じ目をしていた…」

「サスケ君… それって…」

サスケが誰の事を言っているのか、サクラにはわかった。

「ナルトだ… アイツが親も兄弟もない… 一人なのは知ってるだろ？」

「う… うん。」

「それだけじゃねえ… アイツは、木の葉の大人から疎まれ、蔑まれて生きていた…」

「え？それって… ナルトがイタズラしてたから… とかじゃ無いのよね？」

サクラは、突然のサスケの言葉に驚きの声を挙げた。

「理由はわからねえ…。けどアイツがアカデミーで演技をしていたとしたら、それは木の葉の大人の原因なんだろうな…。アイツがあれば強いとなれば…。復讐を怖れて何をするかわからないからな…。」

「そんな…」

サクラは木の葉の里が好きだった。両親も、時には口やかましかったり逆に構いすぎだったりで、鬱陶しいこともあるが、基本的には好きだと言えるだろう。

そんな自分の好きな人達が、ナルトを疎んでいる所なんて想像出来なかった…。いや…。想像したくなかった。

だが、サスケが嘘を付いているとも思えない…。

「ただ…。例え演技だったとしても、あの孤独な目は演技じゃない…。それだけは確信できる…。」

サスケの独白は続く。

「アカデミーを卒業してから、ナルトの本当の実力を目の当たりにして、焦りを感じてた。ナルトは本当は俺の事なんて、路傍の石としてしか見てないんじゃないか？ナルトにさえ勝てない俺が、イタチに勝てるのか？そんな焦りが不安となつてずっと付きまとっていた…。」

「……………」

サクラもサスケが何かに焦っているのは感じていた。その理由がこんなに重い物だとは、想像していなかったが…。

「ナルトは、俺たちよりも大人だ…。年齢とかじゃなくて、精神的に…。な…。俺が焦って周りに当たり散らそうが、笑って仲裁に入ってくれる…。俺が危ない時は、アイツがフォローしてくれる…。いつの間にか、そう考えるようになっていた。」

「ナルトが倒れた時、俺はナルトに甘えていたと痛感した…。ナルトだって苦しんでた…。俺は、それを知っていたのに…。」

「サスケ君！」

サクラは、サスケに抱きついた。

サスケは自己嫌悪に陥り、自分を責め続けている。

自分の甘えがナルトを苦しめたのではないか…。

サクラはなんとかサスケを慰めたかった。

「サスケ君：：まだ挽回できるわ？サスケ君も、私も：：ナルトに甘えてた：：でも気付いたなら、直せば良い：：そうでしょ？」

「サクラ：：」

「私たちは、同じ第七班の班員だもの。カカシ先生も言ってたじゃない。チームワークが何よりも大事だって。今、ナルトは私たちを守つたために倒れてる：：だったら今度は私たちがナルトを守りましょう。それがチームって事なんだから：：」

サクラの言葉に、サスケは顔を上げた。

「そう：：だな：：俺たちにも：：まだ出来る事はある。すまない：：サクラ：：俺は自信を失いかけてたみたいだ。」

サスケは、ナルトと大蛇丸の戦闘を見て自信を失っていた。

だからこれほど素直に、自分の心を表に出したのだろう。

だが、サクラの言葉で今の自分にも、出来る事がある。そう気付かされた。

「サクラはナルトを頼む。辺りの警戒は俺がやる。」

サスケの力強い指示に、サクラは満足そうに頷いた。

サスケとサクラの戦い

隠れて休憩しているサスケ達……

そんなサスケ達を見付けた者達がいた……

「ふふ……見付けた……」

それは、試験会場で騒ぎを起こした音の下忍達の班だった。

「大蛇丸様の命令通りに、夜明けと同時にやるよ？あくまでもターゲットはうちはサスケだ。」

リーダー格のドスが確認する。

三人はサスケの力を測るために、中忍試験に大蛇丸が送り出した者たちだった。

「邪魔するようなら、他の二人も殺して良いんだよな？」

ザクが楽しそうに話す。

「もちろん。」

ドスも、即答して頷く。

一方、サスケ達の方は……

相変わらず目を覚まさないナルト……

長期戦になると考えたサスケは交代で休む様にサクラに指示した。

今はサスケが休み、サクラが見張りをしながらナルトを看ている。

「あ……もう、夜明け……」

木々の間から差し込む光に、夜が明けた事を知るサクラ。

と、その時後ろから物音がした。

クナイを取りだし構えるサクラ。

一気に振り向くと、そこには小さなリスがいた。

「何よ……あんまり驚かささないで……」

ホッとすするサクラ。

リスがサクラに近づいてきた。

と、その時……リスにクナイが投げつけられた。

驚き、逃げていくリス。

「サスケ君。どうして？」

クナイを投げたのはサスケだった。

「あのリスには、起爆札が仕掛けられていた。あのまま近寄せたなら……死んでいたぞ？」

「そんな……」

サスケは、とある方向に首を向けると、

「出て来いよ……俺に下手な小細工は無駄だ……」

鋭い声を発して、言い放つ。

すると……

「ふ……流石にあの方が気にかけるだけありますね……」

ドス、ザク、キンの三人が姿を現した。

「音忍……昨日あったヤツの仲間か……」

「!?」

サスケの言葉に、ドスはサスケ達が既に大蛇丸と接触していると理解して驚く。

(どう言うことだ？僕たちにサスケ暗殺を命じておきながら……)

大蛇丸の真意を凶りかねるドス……

(とは言え、任務を受けた以上はやるしかないですね……)

「二人だけですか？もう一人はどうしました？」

「お前らに話す理由は無えな。」

ナルトが出て来ないのは、既に大蛇丸に殺られているのか、或いは怪我を負ったか……

「どちらにしても、二人で僕たち三人を相手にする気ですか？」

「当たり前だ……」

「あんた達なんて、私とサスケ君がいれば十分よ。」

二人の啖呵に、苛つくザク。

「上等だ。やれるものならやってみな。」

その一言で、突っ込んでいく。

キン、ドスもそれに続く。

「サクラ……お前は向こうのくのくの一をやれ。他の二人は俺が押さええる。」

「サスケ君……わかった。」

二人を一人で押さえられるのか？

… そんな野暮なことは聞かない… 聞いても意味がない。

今は、自分のやれることをやる。サスケが二人を押さええている間に、自分が1秒でも早く、敵のくの一を倒してサスケに合流すれば、二対二だ。

(ナルトは私たちが守る… 行くわよサクラ…)

サクラは、自分に気合いを入れると、自身の足にチャクラを貯めると一気に加速した。

「速い！」

その速度に驚くキン。

サクラは、ナルトとの修行を思い出していた。

「ハア… ハア… ハア…」

サクラは、ナルトから課せられた体術の修行にへバツて座り込んでいた。

「ねえ、ナルト… なんで体術の修行ばかりしなきゃなんないの？ こんなのより、術の修行をして欲しいんだけど… ほら、影分身… アレ、教えてよ。」

サクラは、体術の修行ばかりさせられて不満を感じたのかナルトに食ってかかる。

「影分身は、サクラちゃんには向いて無いつてばよ。アレは自分のチャクラを等分しちゃうから、もともとチャクラの量が少ない人がやると、弱い分身しか作れないし、すぐに消えちゃうんだつてばよ。ましてや、多重影分身なんて使ったら…」

「使ったら…？」

「使ったヤツは一気にチャクラを使い果たして、良くて気を失う… 悪いと… 死ぬつてばよ…」

その話に、思わずゾツとするサクラ。

「も、もうちよつと軽めの術は無いの？」

及び腰になりながら、サクラがなおも訊ねる。

「俺は、あまり使える術は多くないんだつてばよ。だから術を教えるのは無理だ。でも体術なら教えてあげられるし、体術は多くの場面で使えるから、覚えておいて損は無いつてばよ。」

「でも、体術なんて一朝一夕で使いこなせるようになって、ならないわよ。」

「もちろん、体術そのものはそうだってばよ。でも、サクラちゃんの才能があれば、大きな武器になる。」

「私の才能？」

サスケに足手まといと言われた事で、自分の力を信じられないサクラは、才能と言われてもピンと来ない。

「サクラちゃんは、チャクラコントロールがずば抜けて上手いんだってばよ。波の国での木登り…覚えてるだろ？」

サクラは、神妙に頷いた。

「あのとき、サクラちゃんはあつさり登って見せた。多分…今やつてる水面歩行の行も、すぐクリア出来るってばよ。」

ナルトは、未来のサクラから怪力の理由を聞いて知っていた。

「自分も真似てみたが、上手くは使えず結局チャクラモードになったほうが早いと習得を諦めてしまった程だ。」

「もちろん、頭の良さとか…そもそもサクラちゃんは幻術タイプらしいって事もあるんだけど…」

「チャクラコントロールを極めていけば、自然と攻撃力が上がる。打撃の箇所にチャクラを集めれば…」

そう言つてナルトは右の拳にチャクラを込めると近くにあつた岩を砕いてみせた。

もちろん実戦でこれが出る訳ではない。

ナルトでは、チャクラを溜めるのに時間がかかる上、すぐに霧散してしまう。

チャクラを一定量、同じ箇所に留め続けるのは、とてつもなく難易度の高いことなのだ。

まさに、サクラの才能と努力があつて初めて成せる妙技。

「サクラちゃんなら、俺よりも上手く出来るようになるってばよ…」ナルトはそう言つて笑つた。

その言葉を信じて、サクラはチャクラコントロールに時間を費やし、体術も頑張つてきた。

ほんの数日では、体術の向上はあまり見られなかったが……
「しゃーんなろー！」

サクラの拳が、キンの腹部を直撃した。
チャクラコントロールによる怪力……まだまだ荒削りだが実戦で
使えるまでになった事で、一撃の攻撃力は爆発的に上がった。

「ぐはっ……」

一瞬で後方に吹き飛ばされたキンは、大木をなぎ倒して意識を失っ
た。

（ありがとう……ナルト……貴方のおかげで私も……戦える。もう足
手まといなんて呼ばせないから。）

「キンー！」

キンがやられた事で、驚くザク。

「サクラのやつ……やるじゃないか……」

その時、サスケの後ろ……サスケ達が隠れていた所から、巨大な
チャクラが現れた。

「な……なんだ……このチャクラは……」

あまりに巨大なチャクラに、ドスは動揺する。

ナルトが目を覚ましたのだ。

ナルトは精神世界で九喇嘛と会話をしていた。

『ようやく目が醒めたかナルト……』

「俺は……どうなったんだ？」

『お前は……今の全力の力に身体が付いていけずに倒れたのさ……』

「そうか……大蛇丸との戦いで……」

現状を理解したナルト。

『今の子供の身体で、いきなり全力を出すには無茶が過ぎたな……』

「仕方ないってばよ……大蛇丸は手を抜ける程弱くねえし……まさか
全力を出すと、こうなるなんて思ってたからな……」

『まあ、慣れる必要があるだろうな。』

「第三の試験の本戦までには間に合わせたい所だってばよ……」

『ところでナルト……先の事も良いが……』

「？」

『サスケ達が戦闘中だぞ?』

「は?」

一瞬何を言われたのかわからなかったナルトは、思わず間抜けな声を出した。

「そう言うことは、もつと早く言えつてばよ!」

『寝坊したのはお前だろうが。』

九喇嘛に文句を言うが正論で返され閉口してしまう。

「つて... こんな事やってる場合じゃねえつてばよ。」

急いで覚醒したナルトは、サスケ達の所に駆けつける。

「サスケ、サクラちゃん。無事か。」

「ナルト。」

「ナルト... 良かった... 目を覚ましたのね。」

「二人とも、ありがとう。俺を守ってくれたんだな? 後は俺がやるつてばよ。」

状況を察したナルトは、今度は自分の番だと影分身の印を作り、参戦しようとする。

しかし...

「手を出すな... ナルト! これは俺達の戦いだ。」

サスケがナルトの参戦を拒んだ。

「サスケ?」

「そうよ、ナルト。ここは私たちに任せなさい。」

「サクラちゃんまで...」

サスケだけなら、またいつもの焦りから自分が倒したいと思っただけか... と取れるが... サクラまでそれに同意している事に困惑するナルト。

「ナルト... 俺達はお前に守られてばかりのひよっこじゃねえ...」

「私たちは、同じ第七班の班員... 同じ立場の仲間よ? 貴方が私たちを守ってくれたように、私たちだって貴方を守って見せる。」

「見ていろ... 俺達は...」

「私たちは...」

「お前(貴方)と同じ... 忍だ(よ)!」

サスケとサクラの言葉を聞いたナルトは、一瞬きよんとした…。
だが、それも一瞬…

ナルトは、フツと笑うと…

「わかった…二人に任せるってばよ…」

ナルトは、サスケ達に任せる事にした。

サスケはニヤリと笑う。

「待たせたな…」

ドスとザクはナルトから放たれたチャクラに金縛りにあつたように動けなくなっていた。

だが、ナルトが力を抜いた事で動けるようになる…

「いいんですか？あの人が参戦すれば貴方達の勝利は確実だと言うのに…」

「お前らには、俺達で十分だ…最初に言っただろ？」

「ふざけるなあ…」

堪え性の無いザクがサスケに飛びかかる。

サスケはすぐに印を結ぶと、

『火遁 豪火球の術』

「ちいっ」

自らに近づく火球を掌の空気砲で消し飛ばすザク。

「なるほど…そう言う攻撃か…」

それを見てザクの攻撃手段を分析するサスケ。

「ザク…二人で攻めます。」

ドスは、一対一では荷が重いと冷静に考えて連携を促す。

だが、サスケは写輪眼を出してドスの攻撃を見極める。

「お前の技は一度見た。紙一重でかわすつもりはない。」

と、そこにサクラが合流する。

「サスケ君。」

「サクラ…お前はあのツンツン頭の方をやれ。掌から空気の砲撃をしてくるから、それだけ注意しろ。」

「わかったわ。」

サスケが自分の力を当てにしてくれている。

サクラはそれが堪らなく嬉しかった。

「ちい…。」

「ザク… 一旦距離をとります。」

「そんな暇は与えるか… 『火遁 鳳仙火の術！』」

複数の炎がドスとザクの退路を塞ぐ。

サクラがその隙にザクに接近していた。

「はあああつ。」

ザクは右腕でサクラの拳をガードする。

しかし…。

「ギツ」

防いだにも関わらず、その威力はザクの腕の骨を粉碎し、ザクの身体ごと後方に吹き飛ばす。

「後はお前だけだな…。」

残るドスにサスケが告げる。

「なるほど… 君たちは強い… 僕たちでは到底倒せない…。」

そう言いながら、ドスは地の書を差し出した。

「これは、手打ち料… 虫が良すぎる様ですが、僕たちにも、確かめなきやならない事ができました… その代わり約束しましょう… 今回の試験で次に君たちと戦う機会があるのなら、その時は逃げも隠れもしない…。」

ドスは、仲間の二人を背負うと離れていった…。

追わなかったのは、サスケもサクラも消耗していたからだ…。

サスケは、昨日からの連戦…。

サクラは、まだ馴れないチャクラコントロールによる戦闘で…。

「二人とも… 随分腕を上げたな… 正直驚いたってばよ…。」

ナルトは二人に近づきながら、二人の戦いを称賛した。

「フン… 当たり前だ… いつまでもお前に守られてばかりでたまるかよ。」

サスケが憎まれ口を叩く。

だが、その声音は少し嬉しそうだった。

「そうよ、ナルト。私たちが戦えるんだから… あんた一人が無

理する必要は無いんだからね！私たちだって、あんたと同じ『第七班』
なんだから・・・」

二人の言葉に笑みを浮かべるナルト。

「ありがとな・・・」

ナルトはそう言いながら、どこか複雑そうな顔をしていた。

だが、ナルトから称賛を受けて、はしやぐ二人はその顔を見ることが
はなかった・・・

第七班・・・ナルトは、いずれそこから抜けなくてはいけない事に、
少しだけ寂しさを感じるのだった。

第二の試験突破

音の襲撃者を撃退したサスケ達…

そのサスケ達を見つめる目があった。

「うちは… サスケか… なかなかやるじゃないか…」

ガイ班のネジが、先程の戦闘に対して評価する。

「あの動き… 僕とやった時より強くなってる… たった一日で… 恐ろしい才能です。」

リーは、たった一日で腕を上げたサスケの才能に戦慄していた。

「もう一人の女の子も、かなりの強さね…」

「サクラさんです。」「ハイハイ…」

「… サクラって子も、かなり強いわね。正直、接近戦じゃ勝てそうにないわ。」

テンテンは、同じくの一としてサクラに注目していた。

体術そのものはややテンテンの方に分があるが、攻撃力に差がありすぎた。

こちらが何回か攻撃を当てたとしても、サクラを倒すことはできないだろう。

逆にこちらがサクラの攻撃を一度でも食らえば、敗北は必至…

「さすがに、ガイ先生のライバルであるカカシ先生が担当しているチームですね。」

相変わらず暑苦しいテンションで、サスケ達を称賛するリー。

「しかし… うずまきナルトは、戦わなかったな…」

ネジが言った。

「そうですね。ガイ先生が注意しろと仰っていましたから、見ておきたかったのですが…」

・
・
・

試験会場に入る前、リーはガイに呼び止められていた。

「リー。ちょっと待て。」

「どうされました？ガイ先生。」

「うむ… さっきのカカシのチームの事で、話しておきたい事があつてな…」

「と、言いますと？」

「うむ… お前が相手をした少年とは別に、もう一人金髪の少年がいただろう。」

「はい。確か… うずまきナルト君ですね。」

「流石はリー。前以て敵の情報を得ておくとは…」

歯を光らせてリーを称賛するガイだったが、すぐに真顔に戻ると、
「その、うずまきナルト君の事だが… 彼には、気を付けた方がいい…」

そう言つて、リーに忠告した。

「どういう意味でしょうか…」

ガイの真意を図りかねるリーは、率直に尋ねる。

「さつき、俺は彼らの後ろに移動して、彼らを驚かせただろう？」

「はい。相変わらず神業のような抜き足でした。僕では、どうやって移動したのかもわかりませんでした。流石はガイ先生です。」

ガイの動きを思い返して称賛するリー。

「そう誉めるな… ハツハツハ… つと時間がないから、本題に入ろう。俺のスピードは、上忍クラスでもそうそう見切れない。もちろん下忍ではお前はおろか、白眼を持つネジでも、まだ見切れるスピードではない。それはわかるな？」

「はい。」

「さつき… 俺は、それなりに本気で動いた。彼らを驚かせようとしてな… しかし… あの金髪の子… ナルト君だけは、最初から俺の動きを目で追っていた…」

ガイの言葉に、驚くリー。

「ま、まさか… ガイ先生の動きを把握していた… と？」

「間違いない。俺が彼らの後ろをとった時、俺は彼と目が合った… もしかすると、彼は相当の実力を持つかもしれん… 注意しろ。リー。」

「了解しました。」

ガイの忠告に素直に頷くリー。

「そろそろ時間だな。この忠告をネジ達にも伝えておいてくれ。」

「はい。ガイ先生。ありがとうございます。」

第二の試験が始まった時、リーはガイとのやり取りをネジ達に伝えた。

実演混じりに…

・
・
・

その実演に引きながらも、ガイの動きを追えたと言うナルトに興味を持ったネジ達は、第七班と音の忍達の戦いを偶然見つけ、観察していたのだった。

「ガイ先生の言うことを疑う気は無いが… あのうずまきナルト… リーは、どう思う？」

「戦っているところを見てみないと何とも言えませんが、ガイ先生が警戒するようにわざわざ伝えに来たんですから、強いのでしょうか…」

リーは、ガイの言ったことを疑うという事をしない。

「お前に聞いた俺がバカだったよ…」

それを思い出したネジは、呆れるように嘆息した。

「まあ、ナルト君はともかく他の二人も侮れない強さなのは確かね…。この試験の目的は彼らと戦う事じゃないだし、出きるだけ彼らと戦うのは避けた方が無難だわ。」

テンテンの提案に頷く二人…

ネジ達は、その場を後にした。

一方もう一組、その戦いを見ていたチームがいた。

シカマル達のチームである。

その戦い… シカマル達は手を出せないでいた。

明らかに戦闘レベルが自分達よりも高い…

もちろん、やり方によつては勝ち目が無いわけでは無いが、少なくとも正面から戦っては勝機は無さそうだった。

そんな折り、シカマルは、突然辺りを支配するほど強大なチャクラを感じた。

いのは、サスケの戦いに夢中… チョウジも気付いている様子は無かったが、シカマルは気付いた。

(あれは… ナルトか？これが尾獣の力か… とんでもねえな… ありや、俺の影真似じや一秒も押さえられねえ…)

戦いは、サスケ達の勝利だった。

(ナルトは参戦せず… か… サスケもサクラもかなり強え… こりやあ、さつさと退散しといた方が良いな…)

シカマルは、方針を決めるといこの達を説得し、すぐにその場を離れた…

そして、音の忍達を撃退したナルト達は…

「二人とも、大丈夫か？」

「ああ、問題ない。」

「私も、大丈夫よ？」

ナルトの質問に、異常が無い事を伝える二人。

「そうか。でも、昨日から二人は見張りをやってくれてたんだろ？取り敢えず、しばらく俺が見張りをやっておくから、休んで来るってだよ。」

「必要ない。このまま中央の塔を目指す方が良いだろう。」

「そうね。巻物は二種類… と予備も手に入ったんだし、さつさとゴールしちゃいましょう？」

二人の提案を、ナルトは拒否する。

「いや、多分中央の塔付近には、他の班の待ち伏せが待ってるってだよ。」

「え？」

サクラが思わず聞き返す。

「この試験… クリアの条件は巻物を二種類手に入れて中央の塔で開くこと… つまり、中央の塔に入ろうとする班は、既に巻物を二種類手に入れてるやつらって事になるってだよ。」

「そうか… やみくもに他のチームを襲撃しても、そのチームが運良

く別の種類の巻物を所持してるとは限らない。でもゴールに向かうチームは両方持つているわけだから…」

ナルトの言わんとしたことをすぐに理解するサクラ。

「そいつらを狙えば、必ず二種類手に入るって訳か…」

サスケがサクラの言葉を引き継ぐ。

「後は、巻物を失っているやつらが、一発逆転を狙って…とかな。どっちにしても、ゴール付近では戦闘があると思っただ方が良いつてだよ。だから今の内に休憩して、万全の状態にしておくんだ。その間は、俺が見張りをしておくつてばよ。」

ナルトの話に納得したサスケとサクラは、仕方なく休むことにした。

それから数時間後、それなりに回復したサスケ達は移動を開始した。

そして、中央の塔付近…そこで案の定待ち伏せを受ける。

その相手は、最初に襲撃してきた雨隠れの忍のいるチームだった。雨隠れの忍達は幻術を巧みに使い、ナルト達を消耗させようと試みる。

だが、サスケの写輪眼に看破され、あっさりと倒されてしまう。

その後、特に何事もなく中央の塔に辿り着くナルト達。

「ふう…初日の音忍みたいなのが、また出てこなくて良かったわ…」

ホッと一息つくサクラ。

三人は、指定された場所に向かうと、巻物を開く。

巻物には口寄せの術式が施されていた。

すぐに巻物を放るサスケとサクラ。

口寄せにより呼び出されたのは、イルカであった。

イルカは、第二の試験合格と、中忍の心構えを三人に説く。

イルカは、火影からそれを受験者に伝える伝令役であったのだ。

(ナルト…もうすぐお前とはお別れなんだな…)

だが、イルカは知っている。もうすぐナルトが里を抜ける事を…

ナルトは里の大人の中で唯一…イルカにだけは伝えていた。

自分が出した答えを……自分の居場所を作る……その為にこの里を出ていくと言うことを……

「ナルト……俺は、お前の答えを否定しない。例え、それが木の葉と敵対する道だったとしても……俺は、お前を応援するよ。」

イルカは、その時に自分の思いをナルトに伝えた。

そして、もしナルトが木の葉の敵となるならば、その時は自分も木の葉の忍として、ナルトと全力で戦うと誓った。

最後にナルトは、ありがとうと言って手を差し出した。

イルカは、泣きながらその手を掴んだ。

（ナルト……お前の道はお前の物だ……俺がとやかく言う事じゃない……でも今は……せめてお前を近くで見守らせてくれ。）

そのために、イルカは、伝令役を引き受けたのだ。

イルカは、三人を改めて見回すと、

「三人とも……改めて、第二の試験突破おめでとう。」

そう言って三人を祝福した。

第三の試験 予選開始

第二の試験を通過した受験者達は、火影であるヒルゼンに中忍試験の意義について説明されていた。

その後、ヒルゼンの言葉を引き継いだ試験官の『月光ハヤテ』から、第三の試験の為の予選を行う事が告げられる。

第二の試験を通過したのは、ナルト達を含め7チーム…21名。

第一の試験では、ナルトの前世の時よりも通過した人数は少なかったが、第二の試験の通過人数は結局同じであったのは、やはりそれらのチームには巻物を揃えるだけの実力があつたと言う証だろう。

しかし、その人数を第三の試験に進ませる訳にはいかなかった。

第三の試験は、他国の権力者や上層部が観客として訪れるため、日程の都合上、それほど長時間行うわけにはいかないのだ。

ハヤテはそれを説明した後、すぐに予選を開始することを宣言した。

それを聞いたカブトは棄権する。

その場に集った上忍や中忍の中に、大蛇丸（変装）を見つけたカブトは、自分の任務は終了と判断して棄権したのだった。

結局棄権したのは、カブトのみ。

残った20名で一对一の個人戦を行うことになる。

一度勝てば決勝へ…ルールはほとんどなく、どちらか一方が死ぬか戦闘不能になる…あるいは降参するまで…だが、ハヤテの判断で止めに入ることはある。

そして、早速一回戦の対戦カードが決定する。

サスケvsヨロイ

二人が試合場に移動する間に、他の人間は観客席へと移動した。

ここからは班ではなく個人戦になるため、ナルトは第七班から離れ、ヒナタの元へと向かった。

ヒナタも同じく八班から離れてナルトの元へ向かう。

「ヒナタ…無事で良かったってばよ…」

ヒナタの無事を確かめて、ホッと一息吐くナルト。

「お、大袈裟だよ。ナルト君… 前の私も、第二の試験は突破してたんでしょ？」

「確かにそうだけど… この世界は厳密には俺の前の世界とは違ってますよ。だから、やっぱり心配なんだ…」

「ナルト君… ありがとう…」

ヒナタは、ナルトが自分を心配してくれるのが嬉しかった。

しかし… あまりにも自分を気に掛けすぎている… それが少し心配だった…

「ナルト君… 私を心配してくれるのは、とても嬉しいよ？でも、少しは私を信頼して欲しいな？」

「え？」

ナルトは、突然のヒナタの言葉に困惑する。

いつだって、ナルトはヒナタを信頼しているつもりだった。

だから、ヒナタに信頼して欲しいと言われるのが不思議だったのだ。

「ナルト君、言ってくれたよね？今の私は、ナルト君の前世の… この時期の私よりも、随分強くなってるって…」

ナルトは頷いた。それは事実だからだ。

忍としての腕も… 精神的な強さも…

今のヒナタは、自分が知る前世の記憶… その世界でのこの時のヒナタを間違いなく超えていた。

「ナルト君… 私は、ただ貴方に守ってもらうだけのお姫様なんて、望んでないよ？私は、貴方と共に… 隣を一緒に歩いていける… 貴方が苦しいときには支えてあげられる存在になりたいの…」

「今の私は、確かに実力ではナルト君に敵わないから、頼りにならないかもしれない… でも、せめて足手まといにならないように頑張るから… もっと私を信頼して？」

ヒナタは、強い瞳でナルトに訴えた。

「……………」

その言葉を聞いたナルトは、自分がいかに、ヒナタを傷つけていたかを知った。

今のヒナタは実力的に言って、まだまだ未熟であるし、発展途上だ。だから、心配してしまうのも仕方ないだろう…

それでも、心配し過ぎると言うことは、ヒナタの実力を信用していないということ…

ヒナタはこれまで、必死にナルトの為に強くなろうと努力していた…

(俺は、それを知っていたはずなのにな…)

「ごめん… ヒナタ。確かにヒナタの言う通りだつてばよ。」

「ナルト君… うん。」

ナルトは自分の非を認め、謝罪する。

それをヒナタは笑って許した。

二人のやり取りを見ているものはいない。

何故なら、既にサスケの試合が始まっており、その試合に皆釘付けだからだ。

サスケの相手はヨロイ。

呪印の施されていないサスケの動きは軽快だった。

ヨロイも、なんとかサスケに触れてチャクラを吸いとりとうとするが、最初の接触の折に一度チャクラを吸いとる攻撃をしたことから、サスケはそれを警戒している。

ヨロイはサスケに触れることすらできず、自分のみダメージを受けていった。

「そろそろ、終わりにする…」

サスケは視界の端に、リーを捉えると、試しにリーの動きを真似た。自分がやられた下からの突き上げの蹴り…

そこからは、サスケのオリジナルの体術…

『獅子連弾』

結局、ヨロイはほとんどその本領を發揮することなくサスケに倒されたのだった。

第二試合

ザクvsシノ

展開は、ナルトの前世の時と変わり無いため、省略。

何故なら、コミックかアニメを見た方が早いからだ。作者より。

俺の出番・・・（byシノ）

第三試合

ツルギvsカンクロウ

同上

第四試合

サクラvsいの

サクラの力を侮っていた、いの・・・

ファーストコンタクトで、ダメージを負うことになったのは防戦を強いられる。

だが、いのは根性で堪え忍ぶ。

その時、勝ちを急いだサクラは、渾身の一撃を空振りさせてしまう。チャクラを使い過ぎて目に見えて動きが鈍ってしまうサクラ。

いのは、勝機と感じ、心転身の術を使用。

しかし、内なるサクラに追い出されてしまう。

結局泥仕合を演じ、ナルトの前世の記憶そのままにダブルノックダウンとなってしまった。

第五試合

テンテンvsテマリ

シノ戦と同じ。

ただし、投げられたテンテンをキャッチしたのはナルトだった。

テマリはわざと、ナルトに向かって投げたのだ。

それは、挑発・・・

ナルトに出会って我愛羅は変わった。

自分達を兄姉と、見てくれるようになった。

何があつたかは、詳しくはわからない。

だが、そのきっかけを作ったナルトが気になったの行動だった。

「よつと・・・」

微動だにせずに受け止めるナルト

「ナイスキャッチ！」

テマリは笑いながら言う。だが、ナルトは挑発に乗るようなことは

無かった。

変わりにリーが、テンテンの体をまるでボールのように投げたテマリにキレて攻撃を仕掛ける。

自分の考えた展開と違う状況に、興が削がれたテマリはリーをいなすと、すぐに観客席へと戻った。

「全く…：いたずらが過ぎるってばよ…：」

テマリの行動に、独り言を呟くナルト。

「本当だよね…：ところでナルト君…：いつまで、その人を抱いているのかな？」

ナルトの言葉に同意しつつ、恐ろしい迫力を以って訊ねるヒナタ。テンテンをずっとお姫様抱っこしていた事を思い出したナルトは、冷や汗をダラダラと流しながら、慌ててガイのもとに送り届けるのだった。

第六試合

シカマルvsキン

コミック参照…：

第七試合

ナルトvsキバ

いよいよナルトの出番となる。

「ナルト君…：頑張ってね？」

「ああ…：行ってくるってばよ。」

ヒナタの応援を受け、ナルトは試合場へと向かった。

ナルトVSキバ

ナルトの試合が始まる…

試験場にかかるナルトと、対戦相手のキバ。

「第七回戦 うずまきナルトvs犬塚キバ」

試験官のハヤテが、対戦者の名前を読み上げる。

「うひゃっほう！もう勝ったも同然だぜ、赤丸。」

キバは対戦相手がナルトであることに浮かれていた。

アカデミーでのナルトしか知らないキバは、残った受験者の中で、ナルトなら勝てるかと密かにこの組み合わせを望んでいたのだ。

音の忍たち、そして砂の忍達は正直実力では敵わないと感じていたし、日向ネジも同じく…

同じ班のヒナタとは戦いにくい…何より、同じ班にいるとわかるが、今のヒナタはアカデミーにいたときとは比べ物にならないほど強くなっている。

その成長速度は、自分を遥かに超えていた…

残るはチョウジだが、こちらもまだ戦い易いが、あれで木の葉の名門の出…

ナルトに比べれば、厄介だと思っていた。

故にキバは、はしやぎまくっていた。

「」「かわいいそうに…」「」

そんなキバを一部の者達は同情して見ていた。

もちろん、ナルトの本当の実力を知る者達…

その中には、大蛇丸も含まれていたりする。

キバがはしやげばはしやぐほどに、その姿が涙を誘う…

大蛇丸ですら、そう思ってしまう辺り、そのピエロっぷりは同情を禁じ得ない…

「よっしゃく、やるぞ赤丸。」

キバは、赤丸に気合いを入れて声をかける。

「クウーン…」

だが、赤丸は明らかに戦闘を嫌がっていた。

人よりも勘が鋭い上に、忍犬として育てられてきた赤丸は相手の強さを測ることに長けていた。

どう考えても、自分達の敵う相手ではない。

赤丸はそれをキバに伝えようとして、キバに目で訴えかける。

「赤丸：：ナルトと戦うなって言ってるのか？」

その思いは通じた…

「お前は優しいな：： そうだな俺たち二人がかりで戦うのは、ちーつと卑怯かも知れねえな：： わかった。ナルトとは俺一人で戦うぜ。」
様に思えたが、全く伝わっていなかった様だ…

二人がかりですら、相手にならないというのに：： 相棒は何を言っているのだろうか…

赤丸は思った。

「いや：： 犬塚家は忍犬を使ってこそその忍だろ？遠慮なく使ってくれて良いってばよ：：」

ナルトは、キバにそう言うが…

「何を言ってるんだ。ナルト：： お前相手に、赤丸と二人がかりで戦ったら：： イジメになっちまうだろうが：： 安心しろ：： すぐに終わらせてやるから：：」

キバは、悦に入っているようだ…

「そ、そうか？まあ、お前がそう言うなら構わないけど… いつでも、赤丸を使っても良いからな？」

ナルトは若干引きながらも、なんとかそれだけは口にした。

「あの子：： ちよつと面白いわね：： (欲しくは無いけど…)」

キバの様子に、大蛇丸は独り言のように呟いた…

「あく、ゴホツ：： もう良いですかね：：」

ハヤテは、放っておけばいつまでも喋っていきそうなキバを止めるために、声をかける。

「おう：： 俺は、いつでも良いぜ。」

キバは、即答する。

続いてハヤテはナルトに顔を向ける。

「……………」

ナルトは、特に話すことは無くただ頷く。

「それでは第七回戦……はじめて下さい。」

ハヤテの試合開始の合図と共に、キバが真っ先に動く。

『擬獣忍法 四脚の術！』

「行くぜ……下手に動くなよ？ナルト。キレイに一撃で気絶させてやるからよ。」

キバは全身にチャクラを行き渡らせ、四つ足の姿勢を取ると、真っ直ぐにナルトに突っ込んだ。

キバなりに、ナルトの身を案じていたようだ……

「はれっ？」

だが、必勝のその攻撃はナルトに当たることは無く、勢い余ったキバは、壁に激突してしまった。

「いててて……おい、ナルト……動くなつて言つたら……」

「いや、これ一応試合だつてばよ？」

ナルトに文句を言うキバに、呆れながらも答えるナルト。

「良いから、今度こそ動くなよ！」

「だから、これ試合……」

一気に突っ込むキバ……

今度は、勢いがつきすぎないように気を付けながら、ナルトの背後を取る。

「これで、終わりだ……」

キバが今度こそ必勝の一撃をナルトに加えようと攻撃をする。

しかし、その攻撃もナルトに当たることはなかった……

「この……こつちか？……今度は……こつち？……クソツ……なんで当たらねえんだ……」

キバはムキになって攻撃を仕掛けるが、まるで当たる様子はない。

「な……なんなの……あのナルトの動き……」

キバの担当上忍の紅は、ナルトの動きを見て驚いていた。

自分が担当をしているだけに、今のキバの動きの速さが下忍のレベルを超えていることを紅は知っていた。

また、ナルトのアカデミーでの成績を知るだけに、ナルトではキバ

に勝てない……そう踏んでいたのだ。

しかし、ナルトは、キバの攻撃を避け続けている……

最初の攻撃にしても、ナルトはキバの動きを捉えただけでなく、一歩下がることでキバの攻撃を最小限の動きでかわしてみせた。

それは、キバの動きを完全に見切っている証拠……

最小の動きで、最大の効果を上げる……

お互いの実力が、遠く隔絶していて初めて成せる技である。

「どういうことだ……こりゃ……カカシのやつ……一体……なにをしやがった……成長なんて……生易しいレベルの変化じゃないぞ……コイツは……」

同じく、ナルトの同期を預かる担当上忍のアスマも、驚愕していた。

ナルトの動きは、もはや中忍すら軽く追い越し上忍……その中でもトップクラスのレベルと言つていい程だった。

とても、中忍試験に出るようなレベルではない……

「フツ……流石に相手にならん……」

我愛羅は、その試合を観ると軽く笑った……

「我愛羅……あいつは一体何者なんだ？」

ナルトの強さに危機感を募らせたテマリは、我愛羅に訪ねた。

これからの任務の障害になる可能性があったからだ……

「あいつは俺の友であり、目標であり、ライバルだ。」

我愛羅は言い切った。

テマリたちには理解できないだろうが、こんな自分を見捨てずに側に居続けてくれた兄妹なのだ……

二人には嘘を吐きたくなかった……

「友……か……このあとの任務で、私たちは木の葉の敵になるだろう……あいつと戦えるのかい？我愛羅……」

「当然だ……言つたら？あいつは俺のライバルだと……」

こちらもまた、言い切る我愛羅。

既にナルトと戦うことを約束しているのだ……嘘ではない。

「そうかい……まあ、我愛羅がそう言うなら……信じるよ……」

テマリの言葉に、我愛羅は軽く笑うのだった。

「これが… うずまきナルトか… 確かにガイ先生が気を付けろと言
うだけの事はあるな…」

一方、ようやくナルトの戦いを見ることが出来たガイ班。

ネジは、あらかじめガイからの忠告があっただけに驚きは少ない。
「そうですね… ナルト君の様子を見る限り、まだまだ本気は出して
いないようですし…」

リーも、ネジに同意した。

「だが、あの程度の動きなら俺でも出来る… 警戒するほどでも無い
かもな…」

ネジは、しかしナルトが、例え本気を出しても自分よりは下だと決
めつけていた為、警戒心は薄い。

「そうでしょうか… ガイ先生が言うくらいですから、僕は警戒した
方が良いと思いますが…」

「まあ、お前は警戒しておいた方が良いかもな？」
「ムツ？」

リーの言葉を否定はしないネジ…

しかしその言い様は、リーは自分よりも下だからナルトにも警戒す
るべきだ… そう言っている様に聞こえた…

いや… 実際、そう思っているのだろう…

流星に、少し頭に来るリー。

「まあまあ… ねえ、リー？あの子が私を助けてくれたのよね？」

リーを、宥めつつ話題を変えようと、テンテンが尋ねた。

「ハイ。砂のテマリ… さんでしたか… 彼女に投げられたテンテン
をナルト君がキャッチしましたね。」

「そう… じゃあ… あの子を応援しようかしら… (後で声をかけ
てみようかな?)」

テンテンが、少し不純な事を考えたその時…

ピッキーン…

「あれ？なんだろ… なんか急に寒気が…」

(視線を感じる… そう… これはネジの白眼で捉えられた時と同じ
感じ… でも、込められたのは殺気なんて生易しいものじゃない…)

テンテンが視線の出所に目をやると…
ヒナタが笑って手を小さく振った。

「ナルト君に手を出したら… どうなるかわかりませんかよ？ センパイ」

何故だかわからないが、目だけで何を言っているのかわかったテンテンは、冷や汗を流しながら首を振って否定した。

「滅相もない… そんなことはしないから… 許してくださいー
目で語りかけたテンテンは、ようやくその圧力から解放される。

「… 怖かった…」

思わず泣きそうになるテンテンだった。

一方、ナルト達の戦いは、変化が訪れていた。

どんな攻撃をしても、まるでナルトに当たらない事に焦れたキバがようやく赤丸に参戦を促す。

「どうやら、俺はお前を過小評価していたみたいだな… ナルト…
お前を本気で戦うに値する男だと認めてやる…」

「…「本気になっても無理だと思う。」」

周りの人間は思った… がアカデミー時代のナルトのイメージが抜けないキバにはわからない。

ナルトも成長しているのだろう。だが、それでも自分の方が上だ。

キバは、専用の兵糧丸を取り出すと自分と赤丸の口に入れた。

赤丸は体毛が赤く変化する。

『獣人分身』

赤丸がキバと同じ姿に変化する。

逆にキバは、目が獣のようになっていた。

二人で、四脚の術を使い、ナルトに迫るキバと赤丸。

しかし、それでも状況は変わらなかった…

二人… いや一人と一匹だが… がかりでも、ナルトに攻撃が掠り
もしない…

「くそ… これでも当たらねえ… だったら…」

キバは、賭けに出ることにした。

『獣人体術奥義… 牙通牙…』

身体ごと回転させて、とてつもない速さで突っ込み、牙、爪で相手を切り刻む…。今のキバが出せる最高の攻撃力を持つ技だ。それも、獣人分身をしている今、二方向から攻撃できるそれを避けるのは至難の技だ…。

それでも…

「攻撃が直線的過ぎるってばよ…。」

ナルトには、通用しなかった。

攻撃をいくら続けてもナルトには当たらず…

スタミナには自信があつたキバも流石に疲れて来ていた…

「はあ… はあ… はあ…。」

「キバ… お前は強い…。この先もつと強くなれるってばよ…。ただ… 俺は、もっと… 強い…。」

ナルトが静かに言った。

そして、初めてナルトから動く。

フツとナルトが消えた…

「なに!？」

キバには、ナルトの動きが捉えられなかったのだ…

「終わりだ…。」

後ろからナルトの声がする…

キバが振り向こうとした瞬間、首に衝撃が走りキバの意識は、闇の中へと沈んだ。

「勝者… うずまきナルト…。」

ハヤテが勝利者を宣言した。

倒れたキバを心配そうに見つめる赤丸。

「心配するな赤丸…。一時間もすれば目を醒ますってばよ。」

そんな赤丸にナルトが声をかける。

ナルトはキバを背負うと、赤丸の頭を撫でて一緒に試合場を後にするのだった。

ヒナタVSネジ

会場は騒然としていた…

当然だ…今、ナルトが試合で見せた動きは、とても下忍が出来るようなものではない…

それどころか、この場に集った上忍や中忍の中で、一体どれだけの人数がナルトの動きを捉えられたのか…

特に、ナルトのアカデミーでの成績を知る人間の驚きは顕著だった。

もはや、成長うんぬんで誤魔化せるレベルではない。

「カカシ…ナルトのヤツ…あいつは一体なんだ…」

「そうよ…あれは本当にナルトなの？アカデミーでは、万年ドベだったのよ？」

カカシ同様、ナルトと同期のメンバーを預かるアスマと紅は、試験中にもかかわらず、直接カカシに尋ねた。

「ん？まあ、その…なんだ…一応火影様から守秘義務を課せられてるから詳しくは話せないんだが…ナルトのアカデミーでの成績は、わざと取っていたみたいよ？」

「わざと？」

「なんで、そんな事をしたんだ？」

ナルトが力を隠す理由がわからない…

「そこから先は、こんな所では言えんな…」

カカシは、周りに人がいるため迂闊に話せないと告げた。

「……………後で教えろよ？」

「火影様の許可が降りたらね…」

なおも言い募るアスマに、カカシは上から許可が降りればと条件を付けた。

一方ナルトは、周りの反応にも我関せずと言った感じで、ゆっくりとヒナタの元に戻った。

「お、お帰りなさい。ナルト君…怪我とかしてない？」

ヒナタは、思わず『お帰り』と言う言葉を使ったが、まるで夫婦み

「ただいと妄想してしまい、真っ赤になってしまった。」

「ただいま… ああ… 大丈夫だってばよ… それにキバも大した怪我はないから心配ねえからな？」

「そんなヒナタを可愛いと感じながらも、ナルトはヒナタに合わせて『ただいま』と言つてから、笑つて問題無いことを告げる。」

しかし、次の瞬間には真剣な顔になった。

「ヒナタ… 俺の事よりも、次は多分… ヒナタの番だってばよ… そして… 相手はおそらく…」

「ネジ兄さん… なんだよね？」

「…………… ああ……………」

ナルトから、この試験での事を聞いていたヒナタ… 自分がネジによつて殺されかけた事も、当然聞いていた。

その後、かなりの期間入院生活を送る事になった事も…

「ナルト君… 私は… 戦うよ？」

「……………」

「ナルト君が心配するのはわかる… でも、私は確かめたいの… 私がナルト君に着いていくのに相応しいのかを…」

「ヒナタ… 俺は…」

ヒナタの決意に、ナルトは何も言えない…

正直、資格なんて無くたって、自分の側にさえ居てくれればナルトはそれで構わなかった。

だけど、それはヒナタを人形扱いしているのと同じ…

ヒナタが、自分の意思で着いてきてくれなければ意味がなかった…

もちろん、心配はある。

だが、それを口にすることは出来ない…

「自分を信頼して欲しい」

ヒナタからの頼みだ… 自分がそれを蔑ろにするわけにはいかな…

だからナルトは…

「わかった。でも約束してくれ… 無茶だけはしないって…」

そう言うしかなかった。

「うん… 私たちには予定があるからね… 大怪我するまで戦うつもりは無いよ?」

ヒナタはニッコリと笑ってナルトを安心させようとした。

「わかった… 気を付けてな…」

「うん。」

ナルトの言葉に頷くヒナタ。

「ふん… 随分と気楽なものだな… ヒナタ様…」

そんな二人の様子を見たネジは嘲笑した。

その時、次の対戦カードが発表される。

第八試合…

ヒナタvsネジ

「行ってくるね!」

ヒナタはナルトの目を見て、言った。

「気負いのない、真っ直ぐな瞳だった。」

「ヒナタ… 頑張れよ。」

ナルトは、せめて笑って送り出す事にした。

「うん。」

(ありがとう… ナルト君… 私を信じてくれて…)

そうして、試合場へと向かった。

ネジと相対するヒナタ…

「まさか、貴方とやり合う事になるとはね… ヒナタ様…」

ネジは、ヒナタを見下している。

嘲笑混じりに、そう言ったネジ。

「それでは、試合を始めてください。」

ハヤテの合図がかかる。

「試合をやり合う前に、ヒナタ様… ひとつ… 忠告しておく…」

だが、ネジは動くことは無くヒナタに話し始めた。

「貴方は、忍には向いていない… 棄権しろ…」

断言するネジは、続ける。

「貴方は優しすぎる… 調和を望み、葛藤を避け、他人の考えに合わせ

ることに抵抗がない…。しかも、自分に自信が無い…。いつも劣等感を感じている…。だから、下忍のままで良いと思っていた…。」

ネジの言葉を静かに聞いているヒナタ。

(ネジ兄さんの言う通り…。ナルト君に出会わなければ…。きっとそのまま変わることなく、言った通りの自分になっていただろう…。でも…)

ネジの言葉は続く…

「しかし、中忍試験は三人で無ければ登録できない。同チームのキバ達の誘いを断れず、この試合を嫌々受験しているのが事実だ…。違うか?」

そんなネジの言葉…。ヒナタはネジを真っ直ぐ見ると、

「言いたい事は、それだけですか?ネジ兄さん…。だったら、その問いは的外れです。私は…。私の意思でここにいます。」

ネジの問いに、はつきりと否定の言葉を口にするヒナタ。

「虚勢だな…。今までこの白眼で、あらゆるものを見通してきた…。だから分かる。貴方は強がっているだけだ。本心ではこの場から逃げ去りたいと考えている。」

ネジは、そう言う和白眼を発動した。

ヒナタを威圧するためだ…

「ネジ兄さん…。貴方は何も見通せてなんていない…。貴方は、ただ決めつけているだけ…。私は、私自身の力を試すためにここに立っています…。(ナルト君と、一緒にいるために…)」

ネジの目を真っ直ぐ見返すヒナタに、ネジは、困惑していた…

今までのヒナタなら、自分が白眼を発動しただけで、怯え、震えていた。

だが、目の前のヒナタはどうだ…

自然体で…。怯える所か笑っている…

強がっている様子も見られない…

(どうなっている…。これが本当に…。あのヒナタ様なのか?)

「棄権しないんだな?どうなっても知らんぞ…」

ネジの最終忠告にも意思を変える様子の無いヒナタに、ようやく、構えを取るネジ。

「ネジ兄さん…：勝負です。」

ヒナタも白眼を発動させると構えを取った…：

同時に動き出す両者…：

柔拳による攻防を繰り返す。

最初に攻撃を当てたのはヒナタだった。

「なにっ！」

ヒナタの攻撃は正確さ、速さ、威力、全てにおいてネジの予想を大きく上回っていたのだ。

その力に驚いた一瞬の隙を突かれ、攻撃を受けてしまったネジ。

「くっ…！」

予定では、わざと攻撃を受けている間に、点穴を突いてヒナタを絶望させるつもりだった…：

所詮はこの程度だと…：

以前のヒナタの実力なら、充分可能な力の差があったはずなのだ…：

例えば、ヒナタがアカデミーを卒業して、実力を上げたとしても、甘えた考えのヒナタの事だ…：むしろ自分との差は広がっている…：そう考えていた…：

それが、わざと受けるのではなく、素で受けてしまった上、かなりのダメージを負ってしまった…：

自身のように、点穴を突くことはまだ出来ないようだが、それでもヒナタの実力が予想を遥かに超えて上がっていることがわかった…：

(一体、何があった…：)

ネジが、ヒナタの成長に思考を巡らせたその時…：

「考えている暇なんて無いですよ？ネジ兄さん…！」

ヒナタは、更なる追撃を仕掛けてきた。

「ちっ…！」

慌てて迎撃をしようとするネジだったが、始動が一瞬遅れてしまった為に、防戦に追い込まれる。

(攻撃が鋭い… 点穴を突く隙がない…)

その苛烈な攻撃に冷や汗を流すネジ…

もはや、認めるしか無かった…

ヒナタは、強い…

自分は思い違いをしていたと…

「あのネジが… 追い込まれてる…」

一方、その様子を驚きの目で見っていたのはリー…

これまで、どんな時でも余裕の表情を崩すことがなかったネジ…

そのネジが表情を崩し、追い込まれる姿を見た事が無かった…

と、そこでヒナタの攻撃が止んだ…

「？」

思わずネジも動きを止めてしまう。

「やっぱりネジ兄さんは凄いね… 殆ど独学なのに… そこまで強く

なるなんて… 今の私じゃ… まだ勝てそうにないよ…」

「えー、ゴホツ… それは棄権を宣言すると言う事ですか？」

ハヤテが念のために、尋ねる。

「はい。日向ヒナタは棄権します。」

自ら棄権を宣言するヒナタ。

「えー、日向ヒナタ… 棄権により日向ネジの勝利。」

その宣言を受け、ネジの勝利を告げるハヤテ…

だが、納得いかないのはネジ…

確かに、あのまま戦っていれば、いずれ攻守が逆転して自分が勝っ

ていた…

あくまでも防戦に追い込まれたのは、ネジの油断が原因だった。

スピード、技のキレ、スタミナ… 全てにおいてネジの方が一枚上

手だ。

それでも、ヒナタもまた余力を残していた事は事実…

不完全燃焼に終わった宗家との戦いに納得出来るハズがなかった。

「なんなんだ… ヒナタ様… あなたは一体なんのために戦った？ 俺

を見返す為だったんじゃないのか！」

ネジが、叫ぶ。

「ごめんなさい… ネジ兄さん… 私は別にネジ兄さんに勝つことが目的じゃなかったの… 私はただ… 確かめたかった… 私がちゃんと強くなってるって… (自信を持ってあの人の隣に立つために…)」

ヒナタはナルトの顔を見て言った。

「くっ… そんなこと… 認められるかあ!」

ネジはまるで自分を当て馬のように扱われた事に怒りを感じて、ヒナタを攻撃しようとする。

だが、その攻撃はヒナタに届くことは無かった…

一瞬でネジとヒナタの間に移動したナルトが、ネジの腕を掴んでいったのだ。

「貴様あ…」

「ネジ… もう試合は終わったってばよ… ここでヒナタを攻撃したら失格になるぞ?」

ナルトが忠告する。ハヤテも頷くが、

「うるさい… こんな決着認められるか!」

激昂して、ネジが叫ぶ。

「まあ、そうだよな… ならこうしよう… ヒナタの代わりに… 俺がお前と戦ってやるってばよ…」

「なに?」

ナルトの提案に驚き、幾分冷静さを取り戻すネジ。

「お互い本戦に出場が決まったんだ… そこでヒナタの代わりに俺がお前と戦うって言うてるんだってばよ。」

「ふん… お前がか…」

「不服か?」

「良いだろう… お前に免じて今回は退いてやる… だが… 本戦で俺と当たった時… 覚悟しておくんだな…」

ネジはそう言うのと、試合場から出ていった。

ナルトも、ヒナタを伴い試合場を後にする。

観客席へと向かう間に話をする二人。

「ナルト君… ゴメンね?」

「いや…無事で良かったってばよ。」

ヒナタの無事にホツとするナルト。

「ナルト君…」

そんなナルトをヒナタは呼んだ。

「うん？」

聞き返すナルトに、

「私は、いつまでもナルト君と一緒にだよ？今度は自信を持って言えるから…」

ヒナタは、そう言っただけで微笑んだ。

第三の試験 予選終了

第九試合

我愛羅VSロック・リー

リーと相對する我愛羅は、ナルトから頼まれた事を思い出していた。

「そうだ、我愛羅……お前に頼んでおきたいことがあったんだってだよ。」

精神世界で、ナルトからおおよその話を聞いた我愛羅に、ナルトが突然言い出した。

「頼みだど？……なんだ？それは……言っておくが、いくらお前の頼みでも任務の放棄は出来んぞ？」

「いや……そんなんじや無くて……第三の試験……その予選の相手についてなんだってだよ。」

「確か……ロック・リーとか言うやつだったな……」

守鶴から見せられた映像を思い出す我愛羅。

「ソイツがどうかしたのか？」

「ああ……」

ナルトは少し言いにくそうにしながらも、頼みを口にした。

「出来れば、リーが八門遁甲を発動する前に決着を着けて欲しいんだってだよ……」

「なぜだ？」

理由が分からず、説明を求める我愛羅。

「あの技は、使い手の身体を酷使する……いわば禁じ手みたいな技なんだ。最後の八門を使えば使用者は死ぬ……でも、その前の段階でもそれに耐えられるだけの肉体が無ければ、当然身体を壊し、場合によつては……再起不能になるんだってだよ……」

「……………」

「今のリーは、五門まで開けるみたいだけど… それを使える事と、使いこなせる事はイコールじゃない。実際、前世でのリーは、お前との試合の後、二度と忍として立つことは出来ないと宣告されていたらしいからな。」

「だが、リーは第四次忍界大戦にも参加していたし、その後も現役として戦っていたぞ？」

守鶴の見せた記憶ではそうだった。

「それは、その後に綱手のばあちゃんが火影になるのを了承して、木の葉に戻ってくれたからだってよ… 綱手のばあちゃんは、忍界で最も医療忍術を極めた医療忍術のスペシャリストだ… でも… この今回、俺達の計画が実行された場合… もしかしたら綱手のばあちゃんは、火影の就任要請を断る可能性があるんだよな。」

ナルトは思い出す。初めて会ったときの綱手は、『火影になるヤツはクソだ』と言って頑なに断っていた事を…

そんな綱手が火影になる事を了承したのは、他ならぬナルトが、自身の可能性を示して見せたからだ。

ひた向きに努力を続け、結果を出したナルトが綱手を変えた…

昔、七代目の就任祝いの席で、酔った綱手が口にしていた事だった…

今回、自分はその場にいないかもしれない…

もちろん、他の誰かが綱手を説得できる可能性はあるが、万が一を考えれば、リーの為にも八門遁甲を使わせる訳にはいかなかった…

「わかった… 他ならぬお前の頼みだ… 確約は出来んが、なんとかその前に決着を着けよう…」

「頼むな？ 我愛羅… (悪いな… ゲジマユ…)」

我愛羅が、思い出していたのはほんの数瞬…

そして…

「では、第九回戦… 始めてください。」

ハヤテの合図で試合が始まった。

『木の葉旋風！』

試合開始と同時にリーが仕掛ける。

だが、その強力な蹴りは、我愛羅の砂により止められていた。

驚くリーだが、それも一瞬。

連続で攻撃を仕掛け、砂の盾の穴を探す…

だがどれだけ速く動いても、あらゆる方向から攻撃を仕掛けても、

まるで攻撃が当たる様子は無かった。

体力の消耗により、息を切らし始めるリー。

そこに、ガイから指示が入った。

「リー、外せー！」

「で、でもガイ先生… それは、大切な人を複数名守る場合の時じゃなければダメだって…」

「構わーん！俺が許す。」

ガイの許可により、リーは足に巻いていた重りを外した。

その重さは、想像を絶する程だった。

「よーし！これでもっと速く動けるぞー！」

重りを外したリーは、確かに速かった。

力カシですら、速いと感じる程に…

当然、下忍では見切れるのは、ネジとナルト位のものだろう。

サスケは写輪眼のおかげで見えることは出来ているが、自分がその動きに対応出来るかと言えば、今は無理だと考えるしかなかった…

実際、重りを外す前のリーに負けているのだ…

少なくとも、今の自分では勝負にならないだろう…

それを認められる位には、今のサスケは精神的に成長していた。

リーに相對する我愛羅は、当然リーの動きを把握出来てはいない…

砂のガードも間に合わず、リーの攻撃が我愛羅にヒットする… ハズだった…

「な!？」

重りを外し、さらに速くなった攻撃にも、我愛羅のオートガードは

対応していた。

驚くりー。

確かにリーへの攻撃するスピードは、我愛羅の砂のオートガードの守りの早さを超えていた……

だが、実際にガードされている……

それは、我愛羅の砂のオートガード能力に守鶴が協力していたからだ。

リーの攻撃が当たる間際、守鶴は我愛羅の砂に力を与えた。

その力により、砂は今までよりも速く集まり、より正確に、より強固に我愛羅を守った。

「流石だな……守鶴よ……」

我愛羅は、守鶴が力を貸してくれた事に直ぐに気付く。

『ケツ……俺様に地味な役を押し付けやがって……』

「そう言うな……お前のお陰で、砂の制御力も上がっているし、チャクラの心配も無い。本当に助かっている。」

『お前が感謝なんて、気持ち悪い……そんなことよりも、さつさと俺様の力を使いこなせる様になるんだな。俺様の力を制御出来れば、磁遁忍術も使えるようになる。戦いの幅も広がるはずだ。』

「ああ……だが今は……」

『さつさと、この試合を終わらすぜ。』

「そんな……」

砂の攻撃で吹っ飛ばはれたリーは、そのまま壁に激突した。

なおも、立ち上がることもがくりーだが、両手足を砂で拘束されてしまう。

「くっ」

もがくりーだが、砂の拘束はなかなか外れない。

それを見たハヤテは、試合続行不可能と判断し、我愛羅の勝利を宣言した。

実際には、八門遁甲……リーの現在の限界である五門まで開けば、その拘束を引き剥がすのは容易だ。そのまま試合の続行は可能だったのだが、その前の試合内容があまりにも一方的であったため、ハヤ

テは通常よりも早く、判断してしまつたのだつた。

我愛羅は、ナルトに目を向けると、互いに頷き合つた。

(これで良いのだろうか？ナルト)

(ありがとな… 我愛羅…)

一方、全力を尽くすことも出来ずに負けたリーは、酷く落ち込んでいた。

ガイが、リーを慰める。

その慰め方に、周りは引いていたが…

そして最後の試合となる。

第10試合

チョウジvsドス

原作と変わり無いため、割愛。

全ての試合が消化された。

ヒルゼンから、第三の試験本戦について説明されるナルト達。

さらにくじ引きがなされ、ナルトはいきなりネジと当たることになつた。

本戦は一ヶ月後と、話があり解散となる。

解散後、ナルトはヒナタを送つていた。

「ナルト君… もうすぐだね…」

「ああ… あと一月… もうすぐだ…」

何が… とは言わない… 二人とも分かっている事だ。

少しの間、無言になる二人…

「私はナルト君と一緒だよ？」

「俺はヒナタを守るってばよ！」

お互い同時に口に出し、そして… 互いに笑つた。

「ヒナタ… 俺はヒナタを愛してる。」

「私も… ナルト君が大好きです。」

二人はお互いに見つめ合うと、どちらからともなく口づけを交わした。

暗躍

ヒナタを送り、一人家路を歩くナルト…

と、そこに三人の忍が立ち塞がる。

「何の用だつてばよ？」

ナルトが用件を尋ねる。

「化けキツネめ… どうとう正体を現したな？」

「中忍試験の戦いを見せてもらった…」

「ずっと落ちこぼれを演じ… 一体何を企んでいる。」

三人の忍は額当てをしておらず、顔をマフラー等で覆っている為、周りから見ればどこの忍かは不明だ…

「なるほど… 木の葉の連中か… じいちゃん… 三代目は、この事を知ってるのか？」

ナルトのことを『化けキツネ』と呼ぶのは、木の葉の忍に限られている。

特定は容易だった…

「ふん… 許可など後から得れば良い…」

「化けキツネ等を容認する三代目様が奇特なのだ。三代目様は尊敬に値するが、これだけは昔から納得いかなかった。」

「お前は、中忍試験の帰りに、他里の忍の襲撃を受けて死ぬ… それで終わりだ…」

木の葉の忍達は、各々勝手な事を言つて、自分を正当化している。

ナルトは一つため息を吐くと、思考を切り換えた…

「まあ… アイツに会うのに手土産が出来たと思えば良いか…」

その日… 木の葉の忍から三名が行方不明となった。

それから、少し時間が経つて…

火影室…

「よーじいちゃん…」

「な、なんじゃ… ナルトか！ 驚かすでない…」

突然ナルトが訪ねてきて驚くヒルゼン。

「まあ、あんまし駆け引きなんてしたくねえから、単刀直入に言うつて

ばよ？今日、中忍試験の帰りに三人の忍の襲撃を受けた。俺を『化けキツネ』って呼んでたから、まず間違いないく木の葉の忍だつてばよ。」
「なっ… なんじゃと！」

ナルトの言葉に驚くヒルゼン。

「やつぱり、そいつらの独断だつたみてえだな…」

「もちろんじゃ、ワシはそんな指示は出しておらん。」

全力で否定するヒルゼン。

「まあ、それなら今回の事は大目に見とくつてばよ？ただ、そいつら身分とか解るような物を持ってなかったからな… 死体はこつちで処理しといたから、行方不明扱いになると思う… そつちの方は頼むな？一応、遺留品の一部は返しておくけど…」

そう言つて、忍達の所持品の一部をヒルゼンに渡すナルト。

「そうか… 出来れば遺体も返して欲しいのじゃが…」

「いや、もう始末しちまつたから無理だつてばよ？」

なんとか遺体も返して欲しいと頼むヒルゼンだが、そもそも契約を違反しているのは木の葉の方。

ナルトに強く出られない為、既に始末してしまったと言われてはどうしようも無かった。

「わかった。とりあえず、そちらの方はなんとかしておこう…」

「サンキュー、じいちゃん。じゃ、よろしく頼むつてばよ。」

そう言つたナルトは、次の瞬間には消えていた。

どうやら、影分身だつたようだ…

「ふう… 困つたのお… 恐らく中忍試験でのナルトの力を見てしまった試験官の誰かが独断で動いたのじゃろうが… なんとかナルトの印象を変えねば、今後も同じような事件が起こりかねん… そうなれば、犠牲者も増えるじゃろうし… 何よりも、ナルトが木の葉を見限つてしまふかも知れん… それだけは何としても阻止せねば…」

人柱力とは、休戦時には他里からの侵略に対する抑止力であり、戦時中には最大の戦略兵器でもある。

人柱力が抜けると言うことは、里にとって大きな打撃であつた。

それだけは何としても防がなければならぬと、ヒルゼンは対策を考える。

しかし、ヒルゼンは知らない…

ナルトは当の昔に、木の葉を見限っていることを…

今さら何を言ったところで、ナルトの考えは変わらない…

木の葉がナルトにしてきた仕打ちは、そこまでナルトに決意させていた事を…

一方、本体のナルトはと言うと、仙人モードを使い、ある人間のチャクラを探していた。

「見つけた…」

ナルトは目当てのチャクラを見つけると、その人間の元へと向かった。

・

場所は変わって、木の葉のとある一角…

そこでは、大蛇丸がカブトと話をしていた。

「カブト…『うずまきナルト』君の情報を、もう一度教えてくれないかしら？」

「ナルト君ですか？」

何故、ナルトの事を聞くのか、疑問を持つカブトだが、言われた通り情報を伝える。

「ナルト君は、アカデミーで典型的な落ちこぼれだったようです。現在の班員と同じ年齢ですが、アカデミーには三期早く入学しています。」

「授業態度は悪く、イタズラ好きで、お調子者…卒業試験には三回連続で落ちてますが…今期は、ミズキの事件を『海野イルカ』と共同で解決。その功により卒業できたようです。」

「アカデミー時代の成績は、座学はダントツのビリ。忍術も不得意。体術はそこそこと言った感じですかね。総合では万年ドベ…卒業後は、別段変わった任務はこなしていません…ほとんどがDランク

と… Cランクを一つこなしています。」

「これがナルト君の情報になります。ナルト君がどうかされたのですか？」

ナルトの情報を伝えたカブトだったが、何故大蛇丸がナルトを気にするのか理解できず、逆に大蛇丸に聞き返した。

「そうね… その子… 私より強いわよ？」

「はっ？」

大蛇丸が言った言葉を、一瞬理解できなかったカブトは、思わず間の抜けた声をあげてしまう。

「第二の試験で、彼と戦う機会があったのよ… まあ、サスケ君と同じ班だから当然なんだけど… 見事に返り討ちにあったわ… お陰でサスケ君に呪印を施せなかったし…」

「まさか！」

今度はしっかりと理解した。だが、驚きの方が勝る。

伝説の三忍の一人… 大蛇丸より強いアカデミーを卒業したばかりの下忍… まるで、冗談のような存在だ…

『うちはイタチ』のように、大蛇丸をして勝てないと言わしめる存在がいることは理解するが、それとしてその才能を持ち、多くの戦闘を経験したからこそ、大蛇丸より強くなれたのだ…

イタチがナルト位の時から、大蛇丸を超える程の力があつたとは、到底思えない。

「カブト… 貴方はもう一度、ナルト君について調べ直して頂戴… あれは、この後の計画の邪魔になるかもしれないわ…」

「わかりました…」

大蛇丸の指示を受けたカブトは、早速ナルトを調べるためにその場を後にした。

一人になった大蛇丸…

その時、自分の後ろに気配を感じた…

「あら… 今、ちょうど貴方の話をしていた所よ？… ナルト君…」
「流石だな… 気配は消してたつもりだったけど…」

ナルトが、探していたのは大蛇丸だった…

「ふふ… 嘘おっしやいな… あれだけ強い気配を放っていたら、バカでも気付くわよ…」

「まあ、良いってばよ。それより、用件に入らせてもらえっか？」

ナルトは、そこには言及せずさっさと、本題に入った。

「良いでしょう…」

大蛇丸は警戒をしながらも、ナルトの話を聞くことにした。

「つとその前に、まずは土産があるんだってばよ… 受け取ってくれ。」

そう言つてナルトが差し出した物に困惑する大蛇丸。

「これは？」

「これから、お前が行おうとしてる計画に必要なだろ？」

ナルトが大蛇丸に差し出したのは、ナルトを襲撃した三人の忍たちだった。どうやら気を失っているようだ。

「… ふふっ… そういう事… ナルト君… 貴方は時を逆行したのね？」

たったそれだけの事で、大蛇丸はナルトの事情を理解した。

「どうして、そう思うんだってばよ…」

「まず、貴方の戦闘力… あれは、異常だわ… どれだけ才能があつても、経験が無ければ成長は無い… でも、貴方の動きはかなり戦闘経験のある忍の動き… とてもアカデミーを卒業したばかりのルーキーが出来るものではないわ… そして、私のこれからの計画を知っていた… まあ、うちの里か、もしくは砂に裏切り者がいれば別だけど… 決定的なのは、あなたは私が穢土転生をしようとしている事を知っていた事ね。何を召喚するつもりなのかもね… このお土産は、そのための器に使えということなのでしょう？」

「それに、時を渡る術は、幻とは言え時空間忍術の一種として記されているのだからね…」

大蛇丸は、そう言つて笑う。

「当たり前だ。俺は今から20年以上先の世界から、魂だけ戻ってきた存在だってばよ。」

大蛇丸の推測を肯定するナルト。

「それで？何をしに私の所に来たのかしら？わざわざ手土産まで用意して・・・」

大蛇丸の問いに、ナルトは薄く笑う。

「ちよつと提案があつてな・・・」

「提案？どんな提案かしら・・・」

ナルトの言葉に動じる事なく、大蛇丸は先を促す。

「木の葉崩しは、結局中途半端に終わるってばよ・・・三代目のじいちゃんは命を落とすが、じいちゃんの命をかけた死鬼封尽で、おまえは腕を封じられて術の行使が出来なくなる・・・」

それを聞いた大蛇丸は、実に嫌そうな顔をした。大蛇丸にとって、術とは忍である自分の存在意義そのもの。それが使えなくなると言われれば、当然だろう。

「だから、木の葉崩しは止めろと言うつもりかしら？」

「いや・・・実は木の葉崩しの時、お前は四代目の召喚に失敗してるみたいなんだが・・・俺は四代目に用があつてな・・・俺の参戦の許可と、四代目の召喚を頼みたいんだってばよ・・・」

「四代目・・・貴方のお父様ね・・・何故、私は失敗したのかしら・・・」

ナルトの話を聞いた大蛇丸は、失敗した理由を考える。

すると、ナルトが大蛇丸にあるものを投げて寄越した。

それは、うずまき一族の能面堂にあつた死神の面。

ナルトは契約の条件にある、ナルトの願いを三回のみ聞くとと言う条件を使い、うずまき一族の能面堂一帯の土地を貰っていた。

「これは？」

ナルトの寄越した面の意味が解らない大蛇丸・・・

「死鬼封尽に封印された者を解放するのに必要なものだってばよ。」

その言葉で、四代目の魂が死鬼封尽により、死神に封印されていることを知る大蛇丸。

ナルトは、穢土転生については、それなりに詳しくかった。

死んだ人間を自分の手駒として操り、しかも、召喚された人間は無限のチャクラと再生能力を持った兵器となる。

そんな非道で恐ろしい術を放置しておく訳にはいかなかった為、力

ブトを木の葉で受け入れる条件として、穢土転生の詳細な情報を得ていた。

「なるほどね…貴方は四代目に用があるから、穢土転生を使える私に接触したって訳ね…」

ナルトの目的を知った大蛇丸は、薄ら笑いを浮かべた。

「でも、私が素直に貴方の言うことを聞くと思う？」

大蛇丸は、ナルトを挑発する。

「お前は、必ず四代目を呼ぼうとするってばよ…」

だが、その挑発に乗ることはなく断言するナルト。

「あら…どうしてかしら？」

「俺が、木の葉崩しの結末を言ったからな…」

「……………」

「お前は、木の葉崩しという事件を起こすことが、目的じゃない…誰もしたことがないこと、予測できないことがしたいだけだつてばよ…」

「俺から結果を聞いてしまったお前は、同じ事をしたいとは、到底考えない…持てる戦力を増やし、改変を図る…違うか？」

ナルトはそう問いかけた。

「フフ…私の事も良く調べている事…正解よ…術を封じられるのも、もちろん嫌だけれど…それよりも、結果がわかってる事をするのは、なによりも苦痛で仕方がないわ…良いでしょう。貴方の提案に乗ってあげるわ。」

大蛇丸は、ナルトの提案に乗ることにした。

自らの楽しみのため、その場にナルトが参戦すること、四代目を召喚することを了承した。

「この三体の遺体と、死神の面、そして情報の対価としては十分だしね…貴方と言うイレギュラーが、どんな改変を起こすことになるのか…楽しませてもらいましょうか…」

二人はお互いに笑い、そして別れた。

ナルトがこの世界に来て数カ月…

ナルトの前世の歴史から、世界は大きく変わろうとしていた…

『木の葉崩し編』 自来也

中忍試験の予選を突破して数日…

その日… ナルトはとある温泉街を歩いていた。

修行はヒナタやサクラとの修行時間以外にも行っている。しかしナルトの課題は全力戦闘に身体を慣らすこと…

一朝一夕でどうにかなるものでもない為、九喇嘛からも、無茶をしないようクギを刺されていた。

そのため、どのくらいの力までなら身体が保つのか… その辺を見極める事を当面の目標にしていた。

ちなみに、サスケは今回もカカシが連れていった。

おそらく、千鳥習得の為に特訓しているのだろう。

ふと、足を止めるナルト。

「ここは… (エロ仙人に初めてあった…)」

そこは、ナルトが初めて自来也と出会った場所であった。

ナルトは、特に目的があつてここを訪れていた訳ではない。

自然と足が向かっていただけだ。

「エへへへへ…」

そこに、男はいた。男は、女風呂を覗きながらニヤけていた。

ナルトは、男を見ると嘆息する。

そして… 大きく息を吸い込むと…

「覗きだ！覗きがいるってばよおー！」

大声で叫んだ。

「「「キヤアアアアア」」」

「ち、違う… ワシは取材をしとっただけで…」

男は言い訳をするが、当然受け入れられる事はない。

色んな物が投げられてきて、仕方なくその場を退散することにした。

「坊主… 何て事をしてくれるのかのお… お陰で取材が台無しだ。」

ナルトに文句を言う男。

「覗きなんてしてる方が悪いってばよ… エロ仙人…」

「取材だと言つとるのに…」

信じてもらえない男は、ナルトの言葉に一瞬驚いたが、直ぐに大袈裟に落ち込んだ様子を見せた。

だが、ナルトの様子を見た男は、気を取り直して、ナルトに声をかける。

「ところで坊主…」

「ん？なんだったてばよ。」

「お主…なんで泣いておるのかのお…」

「え？」

男の指摘に、ナルトは、自分の頬を擦る…。そこは涙で濡れていた。ナルトは、別に泣いているつもりは無かった。

普段通り、話しているつもりだった。

男の… 自来也の元気な姿を見て、自来也と会話をしている内に、自然と涙が出てきていたのだ。

「ハハ…なんだろうな…これ…止まらないってばよ…ハハハハハッ…」

ナルトにとつて、自来也と言う人間は特別な存在だった。

イルカやカカシのように、ナルトを指導したものは他にもいたが、ナルトに師匠は誰かと聞かれれば、間違いなく自来也を挙げるだろう。

そして、自来也はナルトが生きてきた中で初めて、親の温もりをくれた人でもあった。

自来也と出会い、綱手の搜索や、その後の自来也と修行した3年間は、厳しくもあったがナルトにとっては宝物のような時間だった。

自来也と言う人物は、前世のナルトにとつて、尊敬すべき師であり、目指すべき忍であり、そして…父であった。

「坊主…ホントに大丈夫かのお？」

「ハハ…わりい…本当になんでも無いってばよ…」

未だ涙を止めることはできず、ただ大丈夫だと繰り返すナルトに自来也は近付くと、

「そうか…なら今は何も聞かん…取り敢えず思い切り泣くと良い

のお・・・」

そう言つて、ナルトの頭を抱き寄せた。

「!?..... くっ..... うう..... うああああああ.....」

その温もりに、遠き昔..... 自来也との日々を思い出したナルトは、我慢できず大声で泣いた.....

それから少しして、ナルトが落ち着いた頃.....

「もう、大丈夫かのお.....」

「ああ..... 思い切り泣いて、スッキリしたつてばよ。」

ナルトは、照れながら答える。

それを聞いた自来也は、少し表情を引き締めると、

「さて、それなら坊主..... お前さんに聞きたいことがある。」

そう切り出した。

「なんだつてばよ?」

「ワシの事をどこで聞いたのかのお?」

「..... なんの事だつてばよ?」

自来也の問いに、しらばつくれるナルト。

「惚けても無駄だのお..... お前さん..... ワシの事をなんと呼んだ?

『エロ仙人』..... ワシは名乗った覚えは無いのお..... ましてや仙人等と言つた記憶もない.....」

核心をつく自来也に、ナルトは自嘲した笑いを浮かべると、

「やっぱり、あれはマズかつたつてばよ..... 懐かしさから、つい呼んじまつたけど、失敗したと思つたんだよな.....」

ナルトは演技を止めた。このまま、変に誤解されるのは避けたかつたし、何よりも自来也に嘘を吐きたくなかつた.....

「エロ仙人は、俺の事を少しは知ってるんだろうけど..... 改めて名乗らせて貰うつてばよ。俺はうずまきナルト..... 四代目火影の息子にして、九尾の人柱力.....」

「な!?!」

ナルトが、そこまで事情を理解していると思わなかつた自来也は、大きく動揺した。

「そして未来から魂だけで逆行してきた、自来也の弟子であり、長門の

弟子：… 七代目火影の… うずまきナルトだってばよ…」

だが、更に続けられた言葉に、驚きを超えて固まってしまう。

「ど、どういう事かのお…」

堪らず、事情を尋ねる自来也…

（大蛇丸なら、すぐに察してくれるんだけどなあ… やっぱり、俺の師匠だけあるってばよ…）

そんなことを思い、苦笑しつつもナルトは全てを話した。

自分の前世での出来事を… 自来也との関係や、その死に別れ…

第四次忍界大戦… そして、火影就任から自身の最後…

自来也は、その間茶々を入れることもなく静かに聞いていた。

全ての話を聞いた自来也は、

「そうか… 随分と苦労してみたんだのお… ナルトよ。」

そう言つて、ナルトを労った。

「大事な時に… 側にいてやるのが出来なくてスマンかったのお。」

そして、ナルトに謝罪した後、改めて話し始めた。

「お前さんの事情はわかった。三代目が何を危惧しているのかものお。お前さんの事だ… ワシがお前さんに接触した理由も、察しているんだろおのお…」

「ああ… 三代目に頼まれたんだろ？俺の監視を… 後は暁からの護衛も含めて… か？」

ナルトは、当然の事ながらわかっていた。

七代目火影として働いてきたナルトは、三代目の考えや行動を、なんとなく読むことが出来た。

自分がヒルゼンの立場なら、やはり監視をつけたらう…

例え、自分の意にそぐわなかったとしても…

「流石だのお… 三代目は、お前さんが怖いのだろおのお… これまで木の葉が、お前さんにしてきた仕打ちを考えれば、復讐されても仕方がないからのお…」

自来也は、そう言うのと視線を下げた。

同じ木の葉の者として、ナルトに言い訳をすることも出来なかった。

「それで… お前さんはこれからどうするのかのお？」

だが、これだけは聞いておきたかった…

もし、ナルトが木の葉と敵対する道を選ぶなら、今の自分では無いが、未来の自分の弟子であるナルトを、師として… 止めなければならぬ… そう考えていた。

「それは… いくらエロ仙人でも言えないってばよ…」

だが、ナルトはそれに関しては何も言えないと断る。

「ワシは信用出来んかのお…」

自来也は、そう言うが、

「エロ仙人個人なら信用するってばよ… でも…」

「でも？」

「エロ仙人は、木の葉の伝説の三忍… 火影に最も近い立場の忍だつてばよ… そして、エロ仙人… あんたは木の葉の忍としての立場を捨てられない…」

ナルトは断言した…

自来也は、木の葉を捨ててナルトの味方にはなれないと…

「…………… そう… かもしれんのお…」

自来也は、ナルトの言葉を肯定した。

木の葉の忍として、何十年とやって来た自来也…

その間に、多くのしがらみも出来た。

自来也が、木の葉を抜ければ困る人物が多くいる。

それを考えれば、ナルトの為に木の葉を抜けるなどと軽々しく言えるハズも無かった…

「とは言え、エロ仙人に嘘は吐きたくねえ… だから『言えない』んだってばよ…」

ナルトも当然、自来也の立場は理解している。

味方になつて欲しい等と言うつもりはない。

「ただ… 信じてもらえないかも知れないけど… 別に木の葉に復讐するとか… そんなつもりは一切無いってばよ…」

ただ、そう言うだけだった…

自来也にしてみれば、根拠もない… 信じられないだろう言葉…

「いや… ワシは信じる… お前は、木の葉に復讐などせんとお。だが、自来也は信じると言った。」

「未来のワシがお前を信じて、弟子として取ったのだ… 信じぬ訳にはいかんのお…」

自来也は、そう言つて豪快に笑つた。

ナルトも釣られて笑う。

しばらく二人で笑い合つた。

気が付けば、かなりの時間が経過していた。

もうすぐ、ヒナタ達との待ち合わせの時間だ。

「エロ仙人… そろそろ俺は行くつてばよ…」

名残り惜しいが、今の自分に取つて最も大切な人を待たせる訳には行かない。

ナルトは、そう言つてその場を後にしようとする。

「ナルト、それなら… お前さんに餞別をやろうかのお…」

別れ際、自来也はそう言つたと大きな巻物を取り出した。

「これは… 口寄せの為の契約書…」

ナルトにとつては、懐かしい物だった。

この時代に来て… ガマとの契約は解除されていた…

「良いのか？俺に力を与える事になるつてばよ？」

ナルトは、自来也にそう聞くが、

「ワシはお前を信じると決めたからのお。お前さんが何をするつもりかは知らんが… 戦力は多いに越した事は無いからのお。」

「… ありがとう… エロ仙人…」

「そう思うなら、エロ仙人は止めてくれんかのお… まあ… 良いか… さっさと契約を済ますかのお… やり方はわかるか？」

「ああ…」

ナルトは指を噛んで血を出すと、契約書に名前を書いた。

「どれ、試しに口寄せしてみてくれんかのお…」

自来也のリクエストにナルトは頷く。

「じゃあ、ガマ親分でも…」

「ちよつと待てナルト… ガマ親分つてえのはもしかしてガマ文太の

事かのお…」

ナルトが、何を呼び出そうとしてるのか察した自来也は、慌てて止める。

「ん？そうだってばよ？」

「あのな、ナルト… あの凶体の文太を、ここで呼び出したら大変な事になるだろうのお…」

「あ…」

自来也の指摘に、冷や汗を流すナルト。

温泉街から離れたとは言え、ここは町中… そんな場所で巨大なカエルを召喚したら、とんでもない被害が出る…

「全く… うかつなヤツだのお…」

「ハハハ…」

自来也の言葉に笑って誤魔化すナルト。

普段のナルトなら、そんなミスは犯さない。

だが、自来也が信じてくれた事が嬉しかったのだろう…

ナルトは浮かれていた様だ…

「そうだな… じゃあアイツを呼ぶか…」

ナルトは、呼び出すガマを決めると

改めて指先を噛み血を流す。そして印を結ぶ…

『口寄せの術！』

ナルトの口寄せによって呼ばれたガマ…

「なんじゃ！ガキじゃがな… 用があるならオヤツくれーや。じゃねえと一緒に遊んでやらんで。」

「今は持つてねえけど… 俺と友達にならねえか？」

ナルトはガマ吉を召喚した。

前世で、ナルトと最も縁が深かったガマは、恐らくガマ吉だろう。

ナルトの真剣な表情に何かを感じたガマ吉は、ナルトの友となることを了承した。

その様子を見守っていた自来也は、ふっと笑った。

（やはり、この子なら大丈夫だのお。）

自来也は、改めてナルトを信じることにした。

その後、自来也と別れたナルトは、急ぎヒナタ達の元へと向かったが、結局遅刻して二人に土下座することになるのだが・・・
それでも、その日・・・ナルトから笑顔が絶える事はなかった。

本選開始

それから、一月が経過した。

その間、ナルトはヒナタやサクラの修行を見つつ、自身の限界を探っていた。

その結果……現状では取り敢えず、全力の七割位までなら、なんとか負担に耐えられることが分かった。

それを超える力を使うと、ナルトの身体がそのチャクラに耐えきれず、大蛇丸戦後のように、回復のために倒れてしまう。

当面は、その出力を超えないように、気を付けて戦う必要があった。それでも、火影クラスと互角に戦う力はあるし、チャクラのスタミナに関しては、まず相手より先に無くなる事は無いだろうが……

そして、いよいよ中忍選抜試験……第三の試験の本選が始まる日を迎える。

会場には、すでに多くの観客が集まっていた。

娯楽として見る金持ちから、未来の強者をチェックしようとするもの、依頼を頼むのに相応しいか見極めようとするもの等、木の葉のみならず、他里や他国からの人間も多くいた。

その一番の目当ては、『うちは』最後の生き残りであるサスケなのだ。が……サスケの姿は、本戦に進んだ受験者の中には見られなかった。「おい、ナルト……サスケのヤツはやっぱり……」

姿を現さないサスケの事を聞こうとシカマルがナルトに声をかける。

「ああ、カカシ先生と特訓。本当なら失格になってるところだつてだよ……」

ナルトの前世の話は聞いてはいたが、それでも大事な試験に遅刻するとは……

シカマルは、驚きを隠せなかった……

まさか、自分を超えるマイペースさを持つ人間がいるとは……

流石のシカマルでも、面倒だとは思っても遅刻などしなめと言うのに……

その驚きから復帰すると、もう一つ気になることがあった。

「あれ？俺とやるドスってヤツもいねえじゃねえか…」

シカマルの相手が変わった事は、ナルトも自身に関係が無かったからか覚えていなかった為、シカマルは知らなかった。

ただし、今回の理由はナルトの前世の世界とは異なる。

本来の世界では、この時既にドスを含むドスの班員三人は穢土転生の為の器にされていた。

しかし、今回は違う…

「ああ…ソイツなら…棄権して、キンつてくの一と旅に出たってばよ？」

シカマルの呟きに、ナルトは心当たりがあり、理由を告げた。

ナルトはその時の事を思い出す。

・
・
・

それは、ナルトが修行を終えて帰宅しようとしていた時のこと…

「誰だ！」

気配を感じたナルトは、気配の主に叫んだ。

「…流石ですね…気配は消していたハズなのですが…」

そう言つて出て来た二人の男女…

「お前らは、確か…中忍試験に参加していた音の…」

ナルトはその人物達に見覚えがあった。

「そう言えば名乗ってはいませんでしたね…僕はドス。こつちのくの一はキン…」

「もう一人は、どうしたんだってばよ…」

「……………」

ナルトの言葉に沈黙する二人。

「その事は、後で説明します。今回、僕たちが貴方のところに来た理由から説明させて貰えますか？」

ドスは丁寧な口調で、そう言ってくる。

ナルトは無言で続きを促した。

「実は、今回の中忍試験……僕たちの班には、音の長である大蛇丸様から、ある任務を受けていました。それは『うちはサスケ』君を殺すこと……」

「……………」

「その絶好の機会である第二の試験……しかし、大蛇丸様……いえ……大蛇丸は、僕たちよりも先にサスケ君に接触していました。僕らの力を信用していない……その線も考えられましたが……恐らく僕らは、サスケ君の当て馬に使われたのだと思います。」

「だから、僕は、大蛇丸を見返してやろうと考えた。サスケ君を本戦で殺し、大蛇丸を笑ってやるつもりでした。そのために、本戦でサスケ君と当たる予定の我愛羅君を殺して、僕が代わりにサスケ君と当たるようにしようと考えたのですが……」

「返り討ちにあつたんだろ？はつきり言つて、我愛羅の力は下手な上忍よりも遥かに上だつてばよ……お前らも下忍としてはかなり強えけど……」

「はい……勝負にもならなかつた……」

ナルトの言葉を肯定するドス。

ドスは悔しさに震えていた。結局、自分は捨て駒でしか無いのだと痛感していた……

「僕は、彼を殺そうとしましたが、彼は僕を殺す気が無かつた様で、逃がしてくれました……そして逃げ帰った僕の前に、大蛇丸が現れたんです。」

「あら……生きて戻つて来れたのね……とつくに殺されたんじや無いかと思つてただけど……」

「僕の行動はお見通し……という訳ですか——」

「フフ……貴方の様に察しの良い子は嫌いじゃないのよ……貴方は私の目論見を看破して見せた……その褒美に好きにさせてあげようと思つてね……」

「でも、僕が彼に勝つとは思つていなかった……」

「そうよ？我愛羅君は、砂でもとびきりの戦闘力を持つてるわ……」

貴方では相手にならない…… —

——…。僕を…… 処分なさるのですか？ —

—最初はそのつもりだったのだけどねえ…… このあとの計画で使う予定の術があるのだけど…… それには、器となる肉体が三体必要でね…… 貴方達には、どのみちその器になってもらう予定だったのだけど…… —

—予定外に、器が手に入ってね…… 貴方達を確保する必要が無くなったのよ…… あの子…… うずまきナルト君のお陰でね…… 感謝なさい…… 彼のお陰で生き延びる事ができたのだから…… —

—僕はこれから、どうしたら…… —

—好きにしたら良いわ…… 私の計画を密告しようとするならともかく、貴方はそんな愚は犯さないでしょう？ だったら、このまま私の部下として音の里に残るもよし、抜けても追わないと約束してあげましょう…… —

—何故…… 僕を自由にするのですか？ 僕を殺した方が早いでしょうに…… —

—言ったでしょ？ 察しの良い子は嫌いじゃないの…… それと…… 貴方には興味がないのよ。貴方がどうなろうと、私に不利益をもたささないなら、どうでも良いの…… —

「そう言って、大蛇丸は姿を消しました…… 多分、興味がないと言った言葉が本心だったのだと、僕は思います。」

「それで？」

「僕は班の二人に話して、里を抜ける事にしました。キンは賛成してくれたのですが……」

「そこからは、私が話すわ…… ドス。」

キンが話を引き継ぐ。

「ザクは、大蛇丸を信奉していたわ…… 私たちは、皆、幼少の頃に大蛇丸に拾われたの…… その才能を買われてね……」

「それまであまり良い思いはしてこなかったから、多かれ少なかれ、皆、大蛇丸には感謝していたわ…… ザクは特にその思いが強すぎ

た……ドスの話を聞いても、ザクは頑なに大蛇丸の元に残ることを主張したわ…… 私たちは、そんな彼を止める事が出来なかった……」

ドスもキンも、そのまま大蛇丸の元に残れば、使い潰されて殺される事を理解していた。

それでも、ザクが自身で決めた事だ……

止める事は出来なかった……

「これからどうするんだ？」

ナルトは二人に聞いた。

「わかりません…… 取り敢えず、中忍試験は棄権します。それで旅でもして考えようかと思えます。」

「しばらくは、私もドスと行動を共にするつもり。そこからは私もわからないわ……」

二人は、憑き物が落ちたかのように晴れ晴れとした顔をしていた。

音忍として、失敗が許されない環境で育ったが故に、ずっと緊張して強張った顔になってしまっていたのだろう。

「そっか…… 忍が里のバックアップを受けずに生きていくのは大変だと思う…… それでも、生きてりや、きつとなんとかなるハズだ…… 二人とも頑張れよ？」

ナルトにとって、この二人はまるで接点もない、赤の他人と言って良い。

特に思い入れがあるわけでも無いが、自分の行動をきっかけに、二人が救われたと言う。

それに、自分もまた、里を抜ける予定なのだ、先に里を抜けて生きていく事になる二人を、せめて応援してやりたいと思った。

「では、僕たちはそろそろ発ちます。最後に…… ナルト君…… 貴方と大蛇丸の関係はわかりませんが…… 大蛇丸を信用しすぎないようにしてください。彼は危険です…… この忠告を、助けられた礼とさせていただきます。」

ドスは、そう言って頭を下げた。

「私からも、改めてお礼を言わせてもらおうわ。正直、直接助けられた訳でも無いから実感は無いけど…… こうして大蛇丸から離れる事が出

来たからね。」

二人はそう言つて、木の葉を後にするのだった。

・
・
・

ナルトが物思いに耽つていると、会場が一気に賑やかになる。

いよいよ、本戦が開始されるようだ。

一回戦は、ナルトvs ネジ。

ナルトが視線をネジに向けると、ネジは不敵に笑みを浮かべていた。

二人の戦いが、今始まろうとしていた…

ナルトVSネジ 前編

ナルトとネジは、会場の中央で対峙していた。

白眼で、ナルトを観察しているネジ…

(自分を信じきっている目だ…まるで気負いが無い…)

ナルトの目を見たネジは、そう評価した…

「では、第一回戦…始め!」

試験官のゲンマの合図で、試合が始まる…

「フフ…その方がやりがいがある…本当の現実を知った時…その時の落胆の目が楽しみだ。ヒナタ様に受けた屈辱…約束通り、お前に返そう…」

ネジは、そう言っただけで構えた。

「お得意の白眼による洞察か?はつきり言っただけ、今のお前の曇った眼じゃ、宝の持ち腐れだと思っただけだな…」

ナルトも、構えた。

「曇った眼?何を言っている…俺の白眼は宗家をも超える…」

「白眼の事を言っているんじゃないよ…」

ナルトの言葉が理解できないネジは、

「フン…曇っているかどうか…お前に教えてやる!」

そう言うと、ナルトに向かって走り出した。

もともと、白眼による柔拳を得意とするネジは、戦闘に関しては近接特化型の忍だ。

その手の届く範囲に、近づく必要がある。

そして、ナルトは今や目の前だった。

「…終わりだ!」

ネジから動くとは思っていなかったのか…ナルトは棒立ちだった。

ネジの攻撃が、ナルトに当たる…

「な!」

…と思われたが、その攻撃はナルトの手によって手首を捕まれ、止められていた。

「くっ… 離せ！」

ネジが残った方の手を使い、ナルトの点穴を突こうとする。ナルトは、掴んでいた腕をあつきりと離して距離を取った。

「お前は、その目で全てを見通すと言ってたな？ 今のも見通せたのか？」

ナルトは、ネジを挑発した。

「くっ！」

完全に予想外だった。

確かに、ナルトは強い… それはキバとの戦いでも理解できた。

だが、それでも自分には敵わない… そう考えていた。

「言ったろ？ お前の眼は、曇ってるって…」

「俺の眼のどこが曇ってると言うんだ！」

激昂して、なおもナルトに挑みかかるネジ。

だが、その攻撃は全てナルトによって捌かれてしまう。

「お前は、その眼で色々なものを見てきた。それは確かにソイツの真実の一端ではあったんだろうな… でも…」

ネジの攻撃を捌きながら、ナルトは続ける…

「その眼で見通せるのは、あくまでもソイツの表層に過ぎねえってだよ。だが、お前はその眼で見たことがソイツの全てだと決めつける…」

「そして、お前は人は変われねえと考えて、今のソイツを見ようとしねえ… だからヒナタの心を見誤った… お前のその後ろ向きな考えが、お前の眼を曇らせてるんだってばよ…」

「違う！」

ナルトの言葉を否定するネジは、更に攻撃を苛烈にする。

「違わねえ… ヒナタを見ればわかるだろう？ アイツは日向家で、落ちこぼれなんて言われながらも、必死に努力して、強くなった… そのヒナタに追い詰められたのは他でもねえ… お前だろ… ネジ。」

しかしナルトは、苛烈になる攻撃にも冷静に対処しながら、ネジを諭すように話し続ける。

「くっ！」

ナルトの指摘に、思わず攻撃を止めてしまうネジ。

「お前なんかは… お前なんかは何が解る… 何も知らないクセに… 知ったような口を聞くなあ！」

ナルトの言葉は、ネジの心を容赦無く抉る…

それを否定するために、ネジは吠えた。

『運命は変えられない』… お前の口癖だったよな？」

それはネジの根幹を支える言葉… その言葉を聞いたネジは、幾分落ち着きを取り戻す。

「そうだ… 運命は変えられない… 人はそれぞれ違う… 逆らえない流れの中を生きるしかない… ただ一つ… 誰もが等しく持っている運命は… 『死』だけだ…」

「お前に教えてやる… 日向の… 憎しみの運命を…」

そうして、ネジは語りだした…

宗家と分家の呪われた関係を…

一度前世で聞いているナルトだが、黙って聞くことに徹する。

ただ、ヒアシより後に生まれた…

それだけで、己の父はヒアシの身代わりとなって殺された…

「運命は変えられない… そして、人も… そう簡単に変わりはない… 俺はそれをこの眼で見ってきた。」

ネジは、そう言って断言する。

だが、ナルトはそれを聞いても、特に同情はしなかった…

それどころか…

「運命… か… やっぱりくだらねえってばよ。」

「なに！」

ネジを嘲笑するナルト。

ナルトの言葉に、再び怒りがこみ上げてくるネジ。

「確かに、逆らえない運命ってのはあるのかも知れねえ… けどな… お前の場合は違うってばよ。」

「どういう意味だ…」

「お前は、ただ… 運命って言葉を自分の都合の良いように使ってるだけだって言ってるんだってばよ。」

「なんだとー！」

「お前は、自分には出来ないって諦める事を、運命って言葉を使って正当化してるだけだ…。」

「違うー！」

ナルトの言葉を強い口調で否定するネジ。

「お前は、運命って言葉をおためごかしに使って、ただ逃げてるだけの臆病者だ。」

「違う!!！」

否定するネジに、いつもの余裕は見られなかった…。

「お前に比べたら、落ちこぼれだと言われても、努力を続けて、強くなるうとするヒナタの方がずっと強い… お前は… 諦め癖がついた弱虫だってばよ…。」

「違う!!！」

ナルトの糾弾を聞いていられなくなったネジは、闇雲にナルトを攻撃する。

ナルトの言葉は、ネジの核心に触れていた…。

だが、ネジはそれを認めようとはしない。

認めてしまえば、父の死も… 変えられたかもしれない…。

そう思ってしまうから…。

これまでの生き方を否定されている様で、恐ろしかったから…。

「そんなに、日向のあり方が気に入らないなら、お前が火影になって日向を変えれば良いってばよ…。」

「火影になるものは、あらかじめそうなる運命と決まっている… 誰もがなれる訳じゃない。それは俺とてそうだ… 日向の分家と言う身分ではな…。」

その返答を笑うナルト。

「それ見ろ… 今、お前は運命って言葉で、諦めた… それが今のお前だってばよ…。」

「ぐっ…。」

ナルトの指摘にネジは固まってしまう。

反論のために用いた言葉だったが、意識して使ったわけではな

い…

運命と言う言葉は、ネジの中で、それほど浸透していた…

だが、やはりそれを認めることは出来ない…

ネジは、頭に血が昇りそうになるのを懸命に堪える。

そして…

「だったら…この技を受けきれるか？お前が言うように、運命を変えられると言うなら…見せてみる。」

ネジは、静かに構えた。

『柔拳法… 八卦六四掌…』

ネジは既に、全ての点穴を見れる程に白眼を使いこなしていた。

その力を使い、ナルトを攻撃する。

ナルトは、その攻撃を見て、口の端を上げると、何故か避ける事もせずに、その攻撃を全て喰らってしまった。

「ぐわっ！」

後ろに飛ばされるナルト。

なぜ、避ける素振りすら見せなかったのか…

疑問を感じるネジではあったが、どちらにしても、全ての点穴は閉じた…

「ハア… ハア…これが、現実だ…今やお前はチャクラを練ることも出来ない…お前の敗けだ。」

もう、ナルトに出来ることは無い…ネジは勝ったと確信して、その場を後にしようとする。

その時、ナルトがヨロヨロと立ち上がった。

「何…勝った気になってるんだってばよ…運命を変える所をみたって言ったのは、お前だろ。」

ナルトは笑っていた。

ナルトVSネジ 後編

「何…： 勝った気になってるんだってばよ…： 運命を変える所を見た
いって言ったのは、お前だろ。」

ネジの『柔拳法八卦六四掌』を無防備にくらい、チャクラを封じられたナルト…： ヨロヨロと立ち上がり…： しかしナルトは笑いながらネジに言った。

「強がるな…： もはやお前に勝ち目など無い。」

「見せてやる…： 運命ってヤツに抗い続けて得た俺の力ってやつを…：」

(やるぞ！九喇嘛…：)

『待ちくたびれたぜ！』

「ハアアアアアア！」

ナルトは、チャクラを練ろうとする。

「無駄なことは止める…： 全ての点穴を突かれた今、お前はチャクラを練る事は…： 何?！」

チャクラを練る事は出来ない…： そう断言しようとしたネジだったが、その言葉は途中で止まってしまう。

何故なら、ナルトからチャクラが漏れだしていたからだ。

さらに、八卦六四掌によって受けた傷も塞がっていく。

「バカな…： お前は一体…：」

「俺は…： 生まれた時に、腹の中に九尾を封印された人柱力…： 物心がついた時には、木の葉の大人たちは、ほとんどが俺を化け物として見ていた。俺は、その運命に抗う為に戦い続けて、今では九尾とも和解した…： それが…：」

九尾チャクラモードとなるナルト。

「この姿だつてばよ。」

ナルトは、このために敢えて八卦六四掌を受けた。

ネジの価値観を壊すためには、実際に見せた方が良いと考えたのだ。

「さあて…： お前が言う運命を変える所を…： 見せてやるってば

よ…。」

ナルトは、そう言って走り出した…

「な!?速い…。」

あまりの早さに、ナルトを見失ってしまふネジ。

狭い試験場で、ほとんどの空間を認識するネジの白眼を持つてしても、その姿を捉えることが出来なかった。

「こつちだつてばよー!」

ナルトの攻撃を受けて、吹き飛ぶネジ。

「くつ… 落ち着け… 例えこの眼で捉えられなくても… 向こうも近接戦が得意な忍だ。攻撃が当たる瞬間に感覚を研ぎ澄ませて、回天でいなす。」

ネジは、回天の力でナルトの攻撃にカウンターを当てる事を考えた…

「今度はこつちだつてばよ。」

「今だ… 『回天!』」

まさか、回天でカウンターを合わせるとは思わなかったナルトは、まともに回天を喰らってしまう。

「ぐっ…。」

ナルトは、チャクラの腕を使って地面を掴み、吹き飛ばされそうになるのを止めた。

「流石にやるな… ネジ。だったら…」

『影分身の術!』

影分身の術を使い、四人に分かれたナルトは、ネジを囲むように四方に散った。

「四方から同時に攻撃する気か? 無駄だ… 俺の回天は全方位をガードする絶対防御術だ。」

「誰が同時に攻撃するって言ったんだつてばよ?」

ナルトは、ネジの言葉を否定する。

そして… 四方から、時間差で攻撃を始めた。

チャクラの腕を伸ばし、四方からタイミングをズラして攻撃をする。

全ての攻撃を避けることは出来ず、ネジは回天を使った。だが、ナルトの攻撃は止まらない。

弾かれても、すぐに別のチャクラ腕がネジを攻撃した。しかし、ネジの方はずっと回天を続ける訳にはいかなかった。

チャクラを放出し続け、回り続ける回天はチャクラもスタミナも消耗が激しい……

「くっ……もう……限界だ……」

回天の終息する時を狙われたネジは、とうとうナルトの攻撃を受けてしまった。

体力と、チャクラの消耗……そしてダメージによって倒れるネジ。もはや、勝負は決した……

誰もがそう思ったその時……

ネジが立ち上がった……

「なんで……立ち上がるんだってばよ？お前の敗けは明白だ……お前の言葉を借りるなら……これが運命ってヤツだろ？」

ナルトは、敢えてネジの言葉を借りて尋ねる。

「知るか……」

なぜ立ち上がったのか……ネジ本人にも理解出来なかった。

どう考えても、この状況で自分がナルトに勝つことなど不可能だ……

今までの自分ならそう考えていたはずだ……

「だが……負けたくない……俺は、まだ……戦える……」

もはや、白眼を発動することすら出来ない身で……それでも負けたくなかった。

そんなネジを見たナルトは、ニツと笑った。

「良い眼だってばよ……白眼で何もかも悟った気になってた……この戦いを始める前のお前の眼よりずっと良い……今のお前となら……対等に戦ってやる。」

ナルトは、そう言うのと九尾モードを解除した。

「良いのか？勝つチャンスだっただろうに……」

「言ったろ？今からは対等に戦うって。」

ナルトは、ネジに合わせてチャクラすら使うつもりは無かった。

「行くぞ… ナルト…」

「来い… ネジ。」

お互いが、激突する。その戦いはチャクラを用いず、忍術を用いず、ただただひたすらに、殴り合うだけのものだった。

殴っては殴られ、殴られては殴り返す…

防御もなく、ただただ殴る…

忍の戦いとはとても呼べない、原始的な戦いだった。

だが… お互い、ボロボロになりながらも、二人は楽しそうに笑っていた。

「おおおおおおおおお…」

「はあああああああ…」

そして… 二人の戦いは唐突に終わりを告げた…

もともとのダメージ量… そしてスタミナ… ましてや戦闘経験すらナルトの方が有利だったのだ。

限界を迎えたネジは、ナルトの攻撃により静かに倒れた。

その身体が地面に着く寸前、ナルトがネジを支える…

「試験官？」

ナルトは試験官であるゲンマを見る。

それを見たゲンマは、試合の終わりを告げた。

「勝者… うずまきナルト。」

「二二ワアアアアアア二二二二」

その瞬間… 観客が歓声を上げた。

とても、忍とは呼べない戦いであつたが、その泥臭く… それでいて熱い戦いに観客たちは熱狂した。

しかし、観客席のある一角… そこだけは、全く違う雰囲気醸し出していた…

そこは、木の葉の人間たちが集まる一角… その一角は、周りが熱狂と興奮に包まれる中、逆に、沈黙に包まれていたのだ。

木の葉の人間たちは、初めて目の当たりにしたナルトの本当の力に、畏怖していた…

ナルトは、そんな会場の反応には興味がなかった。
その時、ネジが目を覚ます。

「…俺の…負けか…」

すぐに状況を理解するネジ。

「そうだな…そして…俺の勝ちだつてばよ…」

ナルトは、そう言うのとネジに肩を貸して立ち上がる。

「試合は終わりだ… 医務室までは運ぶつてばよ…」

まだ、足の覚束ないネジは、素直に頷いた。

医務室へ向かう途中…

「ナルト…俺は、今まで日向の憎しみの運命は変えられない…そう思ってきた…でも…お前と戦って、自分の本当の思いに気付いた。俺は、日向を変えたい…ナルト…俺は、火影になれると思うか？」

ネジは、ナルトに今の気持ちを伝え、尋ねた。

「それは…わかんねえつてばよ…」

ナルトは安易になれるとは言わなかった…

「ただ…」

「ただ？」

「初めから諦めてたら…ソイツはきつと何者にもなれやしない…俺から見ても…お前は天才だと思う…目指して努力する価値は、きつとあると思うつてばよ？」

ナルトはそう言つて笑つた。

「ありがとう…」

その言葉に、ネジは綺麗な笑みを浮かべて感謝するのだった。

その後、医務室でヒアシから真相を聞かされたネジは、その話を疑う事もなく受け入れた。

「自分から話しておいてなんだが…信じるのか？ネジ…こんな話を…」

「ええ…今の俺には…父の考えが何となく解ります…父は…宗家を憎んでいましたが…きつと、ヒアシ様を憎んでいたわけでは無かつたのでしょうか…父上は…宗家の替え玉としての人生に

抗ってみせたんですね…。兄であるヒアシ様と…。俺を守ること
で…。」

その言葉を聞いたヒアシは、思わず涙ぐむ。

「お前の成長を…。弟に見せてやりたかったよ…。ネジ…。」

ネジとヒアシの確執は、この時完全に無くなったのだった。

一方、ナルトの方は…

正座をさせられていた…

ヒナタの説教を受けながら…

「ねえ、ナルト君？私がネジ兄さんと試合をするとき、無茶するなって
言ってたよね？」

「はい…。」

「同じことが、自分には当てはまらないのかな？」

「いや…。決してその様な事は無いってばよ？」

「自分の姿を見てくれるかな？」

「……………」

ボロボロだった…。当然だ…。あれだけ殴り合ったのだ…

九尾の回復力を以てしても、まだ治りきってはいなかった。

「何か言うことは無いのかな？」

「ご、ごめんなさい…。」

ナルトが素直に謝った事で、取り敢えずナルトを許すヒナタ。

「ナルト君が無事で良かった…。ナルト君が私を心配してくれるよう
に、私だってナルト君が心配なんだよ？」

「う…。本当にごめんってばよ…。ヒナタ…。」

ヒナタの言葉を聞いたナルトは、もう一度深く謝るのだった。

「うん…。謝ってくれたから許すよ？でも…。次の試合が終わるま
で…。そのまま正座ね？」

「……………」

ヒナタは笑顔で、罰を告げるのだった。

開幕

ナルトVSネジ戦の興奮冷めやらぬ中、次の試合が始まろうとしていた…

シカマルvsテマリ

サスケが姿を現さない為に、急遽次の試合のカードを前倒しでやることになった。

本来なら、ここでサスケは失格になるのだが『うちは』を見たい他里のゲストや観客に配慮した結果である。

一回戦でボルテージが上がっている観客にとって、そのカードは消化試合と言って良い…

誰もが期待しないその戦いに、しかしシカマルは自ら出ていく。

ナルトの前世においては、ナルトに突き飛ばされて、引っ込みが付かなくなったという事情があった…

だが、今回は自分の意思で試合に望む…

それは、ナルトへの餞別…

『計画』を実行するには、サスケvs我愛羅の戦いのタイミングで、木の葉崩しが起こる事が望ましい。

何故なら、ナルトの経験した木の葉崩しはそのタイミングだったからだ…

始動がズレれば… どう進むか把握し辛くなる

…

計画とはそういうものだ…

そのために、サスケが会場に来るまでの時間稼ぎを行う必要があった。

せめて、ナルトが計画を実行し易くなるように…

ナルトの見守る中、シカマルはテマリと戦う。

時間稼ぎを目的としつつも、どこかシカマルは昂揚感を感じていた。

それは、一回戦のネジvsナルトの見せた殴り合い…

忍とは言えない戦いであったが、楽しそうに殴り合うナルトとネジ

を見て、シカマルもどこか心が熱くなっていた。

ナルト達のように殴り合いは出来ないが、自分なりに、力を尽くす…

一回戦とは、うって変わっての頭脳戦…

全く期待していなかったハズの観客は、知らず知らずの内に、その戦いに魅入っていた。

シカマルは、テマリを後一步まで追い詰めた…

結局、ギブアップするシカマルだったが、その戦いに多くの拍手を得る。

(やっぱ…シカマルは凄え…)

その戦いを、改めて見たナルトは素直に感心していた。

前世のこの頃は、シカマルのギブアップを見てバカだと言ったが、こうして改めて見てみると、その戦い方や引き際は見事としか言えなかった。

「ナルト君…行って来て良いよ？」

そんなナルトを見たヒナタが、ナルトに声をかける。

「え？」

「シカマル君に、声をかけたいんでしょう？行ってきなよ？」

ヒナタは、優しく微笑んだ。

「ありがとな…ヒナタ。」

正座から解放されたナルトは、シカマルに声をかけるべく、試合会場に降りていく。

「ちよつとだけ…羨ましいな…シカマル君が…」

そんなナルトの背中を見送りながら、ヒナタは独り言を呟いた。

今の自分は、ナルトの助けにはなれない。

でも、シカマルは違う。実力では今の自分とそう変わらないシカマルだが、その頭脳でナルトを助ける事が出来るのだ…

ナルトの隣に立ち、ナルトを助け…支える事を目標とするヒナタには、シカマルが眩しく見えた。

「凄え戦いだっただよ…シカマル。」

「結局、負けちまったけどな…」

ナルトの称賛に、しかし苦笑を浮かべるシカマル。

「確かに試合には負けただけど…これが小隊同士の戦いならお前の勝ちだつてばよ…中忍試験の主旨を考えれば、充分過ぎる内容だ。」

「そっか…まあ、お前が言うなら…そうなのかもな…それより…」

シカマルが何を言いたいのかは、わかっていた。

「大丈夫だつてばよ…ほら…来た…」

その時、試合場の中央に木の葉が舞う…カカシとサスケが登場した。

サスケの登場に会場は大きく沸いた。

すでに、先程までの戦いは忘れられたかのように、うちはこの戦いに期待する声で埋め尽くされる。

遅刻したサスケだったが、後回しにされて失格になつていない事を聞いたカカシは、ホッと一息吐く。

「サスケ…次の試合の相手…我愛羅は相当強いつてばよ…油断するなよ？」

「ああ…」

ナルトの忠告に頷くサスケ。

サスケは、リーと我愛羅の試合を見ているのだ。

当然、油断などする気は毛頭無かった。

観客席へと向かうナルトとシカマル。

その途中で、我愛羅と出会った。

我愛羅に八百長を持ち掛けていた忍を戦闘不能にしている所に出くわしたのだ。

「あんまし、やり過ぎるなよ？我愛羅。」

苦笑しながら声をかけるナルト。

「なんだ…ナルトか…一回戦は、随分と楽しそうな戦いをしていたな？」

ナルトの軽口に付き合う我愛羅。

「ナルト？もしかして…」

そのやり取りに、何かを感じたシカマル。

「ああ… 我愛羅には計画の事を話してある。協力も取り付けてあるってばよ。」

「そうか… 随分と段取りが良いな…」

「ああ… 九喇嘛の提案でな…」

「成る程な… 納得した…」

ナルトとの会話でシカマルの存在に気付いた我愛羅。

「お前は、奈良シカマルか… さっきの試合は、見事だった… まさかテマリをあそこまで追い詰めるとはな…」

「あ、ああ… サンキュー…」

無条件にシカマルを誉める我愛羅に、どこか居心地悪そうなシカマル。

「その様子だと… お前も計画を知っているようだな。」

「そりゃ、そうさ… この計画の大部分はシカマルが考えてくれた事だっつてばよ…」

ナルトの言葉に、納得する我愛羅。

「そう言えば、未来でお前はナルトの相談役をやっていたのだったな…」

そして、ナルトに向き直ると、

「ナルト… 木の葉崩しのタイミングは、未来と同じタイミングで行う様に試合を進める… しくじるなよ？それと… わかっていると
思うが… 俺は、全力で暴れるぞ？」

そう言っつて我愛羅は不敵に笑った。

「心配すんな… ちゃんと止めてやるってばよ…」

ナルトもニヤリと笑いながら返す。

「じゃあ、後でな。我愛羅… 行こうぜ？シカマル…」

「… ああ…」

ナルトと別れた我愛羅は、サスケと対峙する。

「始め！」

ゲンマの合図と共に、我愛羅 vs サスケの試合が始まった。

歴史通り、体術をメインに戦うサスケ…

だが、それは我愛羅の砂の盾で防がれる。

我愛羅から、仕掛ける事は無かった。

タイムリングを凶つていたのだ…

『そろそろだぜ？我愛羅…』

「ああ…やるか…」

そして我愛羅は砂の球体の中に、完全に身を隠す。

これ幸いと、千鳥を発動するサスケ。

砂の球体を容易く貫く千鳥だったが、ここで歴史との差違が出る。

それは、守鶴が力を貸したことで、前世の時よりも大きい球体を作り出した為であった。

サスケのリーチでは、腕が我愛羅の体に届かなかったのだ。

無傷の我愛羅は、しかし歴史通りに球体から出る。

観客席のナルトと視線が合う我愛羅は、頷いた。

ナルトも頷く。

そこで、木の葉崩しが始まったのだ。

観客席全体に幻術がかけられ、ほとんどの観客は眠ってしまった。

幻術返しをした一部の忍たちだけが、意識を保っていた。

そして、ヒルゼンの所では風影に扮した大蛇丸が動き出す。

大蛇丸の木の葉崩し…

そして、ナルトの計画…

いよいよ歴史を変える事件が幕を開けるのだった…

乱入

観客席に羽が舞う。

(始まったってばよ...))

その瞬間、ほとんどの観客は眠ってしまった...

現在、起きているのは幻術に長けた忍や、上忍クラス... そして仕掛けた側の砂と音の忍だけであった。

ナルトもまた、幻術に対抗すべくチャクラを練る。

『解!』

幻術を解くナルト。

「ふう... 流石にイタチ程強力な幻術じゃなかったみたいだな。俺でも解ける程度だったってばよ... まあ、例え幻術にかかっても、九喇嘛に起こして貰えばいいから俺に幻術は効かねえんだけどな...」

ナルトは独り言を呟くと、隣で幻術にかかって寝ているヒナタを起こす。

『解!』

「あ!... ナルト君?」

一瞬状況が飲み込めず、周りをキョロキョロと見渡すヒナタ...

しかし、周りを見て状況を察したヒナタ。

「そっか... とうとう始まったんだね?」

「ああ... 大蛇丸が動いたってばよ。ここからはかなり危険になる。ヒナタにはまた、九喇嘛のチャクラを渡しておくけど... まずはカカシ先生達と合流するってばよ。」

「わかった。」

ヒナタの了解を得て、九喇嘛のチャクラを渡すナルト。

「シカマルも取り敢えず着いてきてくれ。」

次にシカマルに声をかける。

「ああ。」

今回は、寝たフリはしておらず、すぐに幻術返しを使っていたシカマルもナルトと一緒に動く。

カカシ達の元へと向かうナルト達。

「二人とも、俺から離れるなよ？ここは混乱の真っ只中…音や砂の忍が狙ってくるだろうけど…俺が片付けるから心配は要らないってばよ。」

「うん。」

「わかった。」

と、言ったそばから音の忍数名が襲いかかってきた。

「二人に手は出させねえってばよ！」

ナルトは九尾チャクラを纏いチャクラの腕を使って敵の身体を貫く。

「がはあ…」

一瞬で絶命する音の忍たち…

「行くぞ。」

ナルトは死体には目もくれず、二人の移動を促す。

二人も、余計なことは言わずナルトに無言で頷くと、移動した。

「カカシ先生！」

カカシの姿を見つけるナルト。

カカシはサクラを守りながら、戦っていた。

「ナルトか…流石に無事だったみたいだな。」

「ああ。サクラちゃんも無事で良かったってばよ…」

「ナルト…サスケ君がいないの…それに我愛羅って人も…」

サクラは会場から、サスケの姿が見えなくなっていたのを心配していた。

「ナルト…サクラと…シカマル…それにヒナタもいるのか…ちようどいい…お前たちに任務を伝える…」

「サスケの後を追いつ、合流してサスケを止めろ。そして別命あるまで安全な所で待機！サスケの所までは、このパツクンが案内してくれる。」

カカシは、集まった下忍の四人に任務内容を伝え、忍犬であるパツクンを口寄せする。

「悪いけど、カカシ先生…そつちの任務は俺の影分身で当たるってばよ…それからサスケは、自前で追える。その忍犬は要らねえって

ばよ。」

だが、ナルトは影分身を作り、その任務に条件を付けた。

「何を言ってる！サスケの命がかかってるんだ… 我儘を言うな！」

その言動に苛立ち、いつになく声を荒げるカカシ。

「そうよナルト… サスケ君が心配じゃないの？」

サクラも堪らず反論する。

「別にそんなこと言ってるねえってばよ？そっちの任務は影分身で充分だと言ってるだけだ。」

睨み合うナルトとカカシ…

先に折れたのはカカシだった。

状況は切羽詰まっていたし、我愛羅を追ったサスケに、時間が経つほど追い付くのが難しくなるからだ。

「わかった… だが、パツクン無しでどうやってサスケを追跡する？」

カカシの質問に、分身していたナルトは目を閉じ、暫しの間瞑想する。

次の瞬間、分身ナルトの目には仙人の証である隈取りが浮かんでいた。

「ナルト… お前… その力は…」

その力が仙人の操る自然エネルギーだとすぐに気付いたカカシは、冷や汗を流した。

九尾の力に加え、さらに仙人の力すら扱えるとは思っていなかったのだ。

一体どうやって仙人の力を… 疑問に思うカカシ…

「そんなことはどうでも良いってばよ… 重要なのは、任務遂行に必要な力があるかどうか… それだけだ。この状態の俺は、皆のチャクラを感知できる。もちろんサスケのもな… それに、パツクンを加えると基本小隊の四人を超えちゃうってばよ。」

「わかった… サスケの事は頼んだぞ。ナルト…」

聞きたいことは山ほどあったが、今は非常時だ…

カカシは何も聞かずにナルトの分身を送り出した。

「で… わざわざ残った本体のお前は何をするつもりだ？ナルト…」

そして、残った本体のナルトを問い詰める。

だが、ナルトはそれには答えずヒルゼンと大蛇丸がいる屋根の方を見上げていた。

そこは、既に結界によって遮断され、誰も応援に入れられない状態になっていた。

いや… 例え結界が無くとも影クラスの戦いに割って入れる技量のある暗部はいない… むしろ足枷にしかない…

その時、ナルト… と言うよりも九喇嘛があるものを感知する。

『来るぞ… ナルト！』

「カカシ先生… ここは頼む… 俺は、じいちゃんの援護に入るってばよ。」

ナルトは、カカシの返事を待たずに九尾仙人モードになると、ヒルゼン達の戦いの場へと向かった。

「待て！ナルト… くっ！」

慌てて止めに入るカカシだったが、一瞬で遠くに行ってしまったナルトを止めることは出来なかった。

「カカシ… あの子は一体…」

カカシとナルトの会話から、ナルトの異常性を感じたガイがカカシを問い詰める…

「今は、話してる暇はない… 一つ言えるのは… アイツの戦闘能力は俺たちより上だってことだ…」

「… そうか…」

ガイは特に驚かなかった… なんとなく察していた様だ。

「取り敢えず、ここを切り抜けるのが先だな…」

「ああ…」

カカシとガイは背中合わせに互いを守りつつ、敵を蹴散らしていた。

一方ナルトは、結界の側まで来ていた。

「貴様は… 一体… 何をしに来た！」

そんなナルトに、火影直属の暗部が怒鳴る。

ナルトは、それに答える事無く術を発動した。

『風遁 螺旋手裏剣!』

両手に作り出した螺旋手裏剣… その一つを結界に向かって投げつけるナルト。

「な… なんだこりゃ!」

突然結界に向かって攻撃を受けた左近は、戸惑いの声を上げた。

それもその筈で、この結界は本来内側の自分達を倒さなければ破壊できない。しかし、螺旋手裏剣は、その結界を力尽くで破壊しようとしていた。

ましてや、その術は自分の担当する場所を攻め立てている。

ドガガガガガガガガガガ…

結界にぶつかる螺旋手裏剣…

「ぐっ!なんて… 力だ…!」

予想以上の威力に、思わず意識が遠のく左近…

「左近… てめえ… しっかりしやがれ!ゲスチンヤロー!」

そんな左近を多由也が責める。

「うる… せえ!」

なんとか結界を保つ事に成功した左近…

「な… ん… とか… 凌ぎきつ…!」

だが、ナルトはそのタイミングを見計らったかのように二つ目の螺旋手裏剣を投げる。

二発目の攻撃により、抵抗する間もなく完全に意識を飛ばしてしまふ。

その瞬間、結界に綻びが生じ、ナルトはその隙に飛び込んだ。

「!?」

暗部達も中に入ろうと試みたが、左近の代わりに出てきた右近が結界の維持を行うことにより、完全に結界が崩れる前に、立て直すことに成功した為、中に入ることは叶わなかった。

時間は戻って、ナルトが結界に入る少し前…

ヒルゼンと大蛇丸は対峙していた。

「フン… そう簡単には出られそうにないのお…!」

四方を結界に囲まれ、また結界を作った四人も結界で身を守る姿を見たヒルゼンは、そう呟いた。

「心にもない…。あなたにとつては、足手まといに入つてこられる方がやりにくいでしょう?」

大蛇丸は、ヒルゼンの呟きに答える。

実際、この戦いに入つてこれる様な戦闘力を持った忍は限られてい

る。

同じ三忍の者達…

そして…

(ナルト君は、いつ介入してくるつもりかしら…)

大蛇丸は、ナルトを警戒していた。

対峙から、同時に二人が動き出す…

互いに印を組む。

ヒルゼンは手裏剣を大蛇丸に向かって投げる。

『手裏剣影分身の術!』

ヒルゼンの投げた手裏剣は、その術によつて一気にその数を増や

し、大蛇丸を襲う。

対して、大蛇丸の方は…

『口寄せ 穢土転生!』

「ひとつ…」

大蛇丸の前に出現した『初』の書かれた棺が、手裏剣を止める。

(口寄せを盾に使うとは…。しかも、この死人は…)

大蛇丸が召喚した者に、心当たりがあつたヒルゼン…

「ふたつ!」

二つ目の…『二』と書かれた棺が出現する。

(くっ!三人目はなんと…)

ヒルゼンは、手裏剣を操作して三人目の召喚をなんとしても止めよ

うとする。

と、その時…

ドガガガガガガガガガガ…

結界を外から攻撃する音がした…

「な、なんじゃ!?!」

それに驚き、一瞬動きを止めてしまうヒルゼン…

それを見た大蛇丸は、ニヤリと笑う。

「みっつ!」

『四』と書かれた棺が出現した。

「しまった!!」

自分の失態に気付いたヒルゼン。

と、その時… 結界に入り込んだナルトが、その場に姿を現した。

「…間に合ったってばよ…」

ナルトは、大蛇丸とヒルゼン…

そして、大蛇丸の周りに出現した三つの棺を見て呟くのだった…

穢土転生

「しまったー！」

ヒルゼンは、目の前に現れた三体の棺を見て、思わず声を上げる。次に、乱入者を見ると、

「何をしに来おった、ナルト… お陰で三体目まで召喚を許してしまったわい…！」

乱入者であるナルトに抗議をする。

ヒルゼンからすれば、三体目の召喚はなんとしても阻止しなかった…

だが、そのタイミングをナルトの乱入により逃してしまったのだ。怒るのも当然だろう。

「そんな怒るなってじいちゃん… 援護に来たんだってばよ。」

しかしナルトは、一向に堪えた様子もなく、笑いながら答える。

「援護どころか、足を引つ張つとるわ！」

ナルトは、ヒルゼンの突っ込みを笑って受け流すと、次の瞬間、真剣な顔を作った。

「じいちゃん… 説教は後だつてばよ？… 出るぞ…！」

ナルトの言葉に、確かにその通りだと気持ち切り替えたヒルゼンは、目の前の棺に意識を集中する。

まず二つの棺が開き、召喚された者が姿を見せる。

「ほお… お前か… 年を取ったな… 猿飛…！」

「久しぶりよのお… サル…！」

初代火影… 柱間

二代目火影… 扉間

二人の火影がヒルゼンに気付き、話し掛ける。

「まさか、このような事で御兄弟お二人に再びお会いしようとは… 残念です。覚悟してください… 初代様… 二代目様…！」

ヒルゼンは、険しい顔で柱間たちを睨む。

柱間たちは、直ぐに状況を理解する。

「穢土転生か… 禁術で、ワシらを呼んだのはこの若造か？ 大したヤ

ツよ。」

「だとすると猿飛よ…ワシらは、貴様と戦わねばならぬ…と言うことか。」

大蛇丸は、三人の火影たちの話をいつまでも聞いているつもりはなかった。

「年寄りの寄り合い話はその辺にして、そろそろはじめましょうか…。」

(なにせ…向こうの方も面白そうなものね…)

大蛇丸は、柱間と扉間の頭に術式を仕込んだクナイを埋め込む。

そして、柱間達に生気を吹き込み…

「完成ね。猿飛先生…しばし、先代の人達との遊戯を楽しんで下さい?。」

大蛇丸は、ヒルゼンに背を向けると、もう一つの棺から出てきた人物…

四代目火影…波風ミナトに近づく。

時間は戻って、ミナトが棺より出て来て直ぐの話…

大蛇丸は、まずヒルゼンを止める為に柱間と扉間のコントロールを優先した…

そのため、ミナトはしばらく意識を保っていた。

「ここは…そうか…穢土転生で呼び出されたのか…。」

ミナトもまた、直ぐに自分の置かれた状況を察した。

召喚者を探すと、そこに先代火影であるヒルゼンが、さらに先代の初代、二代目…そして大蛇丸と対峙していた…

どうやら、穢土転生の召喚を行ったのは大蛇丸のようだ…

(まさか、木の葉と敵対しないといけないなんてね…)

ミナトは心の中で、自分の状況に舌打ちする。

と、その時…その場にもう一人…まるで場違いな少年がいることに気付いた。

「君は…。」

聞こうとして、直ぐに気付く…

その少年が纏っているチャクラの衣…

そのチャクラが自分のよく知るチャクラであったことを…

「もしかして…君は…ナルト…かい？」

ミナトの問いを聞いたナルトは、

「その通りだつてばよ？ 四代目火影…波風ミナト…」

ナルトは、あまり友好的とは言えない目をして答えた…

(さて…どうしようかしらね… 四代目の意識を奪うのは簡単なだけど…ナルト君の戦闘力を考えると…わざと四代目の意識を残しておいた方が時間稼ぎになりそうだし…ナルト君がこつちに参戦するのは厄介なのよね…)

大蛇丸は、ミナトをどうするか決めかねていた。

後ろでは、既に柱間、扉間VSヒルゼンの戦いが始まっている。

できるだけ、ナルトの相手は四代目に務めて貰いたいが、どちらの方がナルトの足止めとして相応しいか…

(まあ…このまま四代目の意識は残しておきましょうか…その方が面白そうだしね…)

結局、面白さを優先した大蛇丸は、ミナトの意識を残すことにする。

「さて…私は私で、この戦闘を楽しまないとね…サルトビ先生？」

大蛇丸は、未だ二人の火影を相手に善戦するヒルゼンとの戦いに加わる。

大蛇丸が参戦したことで、ヒルゼンは押され始めた。

一方、ナルトの方は…

「ナルト…オレは君の父親だ。わかるかい？」

ミナトは、ナルトに会えた嬉しさから、なんとか自分が父親であることを伝えようと試みる。

「知ってるつてばよ…」

だが、ナルトの返答は素っ気ない…

「……………やっぱり…オレを恨んでいるんだね…」

ナルトの態度の冷たさ…

ナルトと予期しない再会の嬉しさを忘れていたが、ミナトはナルト

に九尾を封印した。ある意味で、里の生け贄にしたようなものだ……
恨んでいないハズがない……

それを思い出したミナトは、目を伏せて呟く……
そんなミナトの問いに、ナルトはゆっくりと口を開く……

「そう……だな……正直、今の自分の気持ちはわからなかった……あ
んたを恨んでるのか……それとも許してるのか……実際に会ってみ
ないとわからねえ……そう思ってたってばよ……」

「こうして……あんたを直接見て、わかった……どうやら……俺は、あ
んたが憎いみてえだってばよ……」
「……………」

覚悟はしていた……

それでも実の息子に憎いと直接言葉を投げられたミナトは、想像以
上の苦しみを感じた。

「少し……勘違いしてるってばよ？俺が憎いと言ったのは、あんたが
俺を人柱力にしたことだと思ってるねえか？」

ミナトが、何に罪悪感を抱いているのか……なんとなく察したナル
トは、苦笑しながらそれを否定する。

「え？」

予想外の言葉に思わず聞き返すミナト……

「俺があんたを憎む理由は、人柱力にしたことじゃねえってばよ……」

「それなら……一体……」

理由がわからない……ミナトにはどうしても、他に理由が思い当た
らなかった。

「知ってるのか？俺があんたを憎む理由が……」

「ああ……例え憎まれていたとしても……息子の事だ……知りたいに
決まっている。」

ミナトは、ナルトから目を逸らさず、ナルトに返す。

「なら……拳を合わせてくれっか？それで理由がわかるってばよ……」

ナルトは拳を突きだして、ミナトに告げた。

「……………」 わかったよ……ナルト……」

ミナトはナルトを疑うような事はせず、突きだされたナルトの拳

に、自分の拳を合わせた。

(ナルト：… 君が何を考え、何を経験してきたのか：… 何故、オレを恨むのか：… 教えてもらおうよ：…)

その瞬間：… ミナトの意識は、ナルトと共有された精神世界へと旅立つのだった：…

ナルトとミナト 前編

「ここは…」

ミナトは見知らぬ場所に立っていた…

「ここは、俺の精神世界… 尾獣の住む場所だつてばよ…」

ミナトの疑問に答えるように、見知らぬ青年が声を掛けてきた。

「君は… 誰だい？」

ミナトは、自分にとって見知らぬ場所、そして見知らぬ人物に警戒する…

「なんだ… さつき会ったのに忘れちゃったのか？俺は… うずまきナルトだつてばよ…」

その人物は、自らをミナトの息子であるナルトだと名乗った…

「ふざけるのは止めてもらえないかな？さつき会ったナルトは、まだ子供と言つて良い年齢だった。あなたとは別人だ…」

そう… ナルトを名乗る男は、どう見ても子供ではない… 自分と同じ… あるいはそれ以上の年齢に見える。

「まあ、確かに、さつき会った時の身体が子供なのは間違つてねえんだけどな… 本来の俺の姿は… こっちなんだつてばよ…」

「いい加減にしてくれ… オレは息子を騙られて怒らない程、温厚な人間じゃない。あなたは… 何者だ… あの仮面の男の仲間なのか？」

ミナトは、怒っていた…

例え… 息子に親らしい事を何もしてあげられなかったとしても… ミナトはナルトを愛していた。

その息子を騙る目の前の人物を許す気は、とうてい無かった。

だが、そのミナトを諭す者がいた。

『落ち着け… ミナト…』

「九尾？」

自分の後ろに、自分が命を賭けて封印したハズの九尾の半身がいた。

『ソイツの後ろをってみろ…』

九尾の半身に促され、男の後ろに目を向ける。

「な!? 九尾… まさか…」

そこにもまた、九尾がいた…

『ワシを半分に分けて封印したのは、ミナト… お前だろ? ワシの残りの半分を内に宿すのは、お前の他には一人しかおらんだろ?』

確かに、男の後ろの九尾のチャクラには覚えがあった。

そして、その存在感は幻術ではあり得なかった…

「じゃあ… あなたは本当に… でも、だったらさつき会ったナルトの姿は…」

目の前の男が、ナルトだと認めたミナトだったが、ならばさつき拳を合わせた少年のナルトは、なんだったのか…

「まずは、そこから話すか… このままじゃ話どころじゃ無いみたいだしな… 俺は… 未来から魂だけが逆行してきた存在だってばよ…」

ナルトは、自分の状況を話はじめた。

「未来から?」

「未来で… ある事件で俺は殺された… それを九尾… 九喇嘛がこの時代に魂を送ることで助けしてくれたんだってばよ…」

「九尾が?」

驚くミナト。

九尾のチャクラをコントロールしてくれることを期待していた…

だが、まさか九尾が自らナルトを助けようとするほどに親密な関係になれるなど… 想像していなかった…

「未来の俺の体は、既に死んでいたんでな… この時代の俺の魂と同化する事で、なんとか生き延びたんだってばよ…」

「そうか… だから… 本来のナルトは、こっちだと言ったんだね?」

ミナトは先程のナルトの言葉を思い出していた…

「そういう事だつてばよ…」

「それじゃあ、ナルト… 君をナルトと認めた上で… 聞かせてくれないか? 君の事を… オレを恨んでいる理由を…」

ミナトは本題に入った…

そもそも、その為にここに来たのだ。

親として…ナルトの事を知りたかった。

例えばそれが恨みや憎しみと言った負の感情であっても…

「今から、俺の過去をあんたに見せる…まずはそれから話を聞いてもらうってばよ…」

「そんなことが出来るのかい？」

「ここは精神世界だから…外とは時間の流れも違うし…見せたいものを見せることも出来るってばよ…」

「そうか…なら頼むよ…ナルト…」

ナルトの言葉に頷き、ミナトはナルトの過去を見ることに同意する。

「わかった。じゃあ…始めるってばよ…」

『待て、ナルト…』

だが、それを九喇嘛が止めた。

「ん？どうした九喇嘛？」

ナルトが九喇嘛に聞き返す…

『それは、ワシがやる…』

「なんでだ？」

『ワシは、お前が物心つく前から、お前を見てきた…ワシの方がお前の過去には詳しい…それに…お前は頭が悪いから、結構いろんなことを忘れてるだろう？』

「一言余計だつてばよ！…まあ…お前がそう言うなら…頼むってばよ…」

ナルトは、九喇嘛に任せる事にした。

ナルトと九尾のやり取りには、確かに信頼関係を感じた。思わず笑ってしまうミナト…

『ミナト…ワシの近くに来い…』

しかし、ミナトに声をかけた九喇嘛の声は、先程ナルトとやり取りをしていた声とはまるで違う…憎悪に満ちた声をしていた。

「あ…ああ…」

思わず、怯みそうになるのをなんとか堪えるミナトは、九喇嘛の元

まで来た。

『さて… ミナト… お前にはこれから、ナルトの過去を体験してもらおう。』

「え？」

ナルトの過去を見る… そう思っていたミナト…

実際にナルトも見せると言っていた為に、そう考えていたのだが、今、九喇嘛は『体験してもらおう』と言っていた。

「九喇嘛？」

事実… ナルトも驚いた表情で九喇嘛を見ていた…

『お前を憎んでるのはナルトだけじゃねえ… あんな結末になった原因を作ったお前を、ワシは許せん… お前には、ナルトの過去を追体験して、お前の行いの結果を後悔してもらおう…』

九喇嘛は、ナルト以上にミナトを憎んでいた…

なぜ、ナルトがあんな結末を迎えなければならぬ…

なぜ、ミナトはナルトにこれほど過酷な運命を背負わせた…

「一体… ナルトに何があつたつて言うんだ…」

九喇嘛の憎悪は、明らかに自分に向いていた。

九喇嘛がナルトに心を開いているのは、先程のやり取りから理解できた…

ならば、その理由はナルトに起こった不幸が、自分の行いに起因しているからなのだろう…

聞かずにはいられなかったミナト…

『これから、わかる… さあ… しっかりと体験すると良い… お前が息子に背負わせた絶望と… その結末を…』

光がミナトを包む…

次の瞬間…

自分と、クシナが目の前にいた。

巨大な爪に腹を貫かれ、それでも最愛の息子を守った二人。

ミナトは死鬼封尽を使い、九喇嘛を二つに分け、一方を自分に… もう一方をナルトに宿らせ、ナルトに八卦封印を施した。

それから、三代目のチームがナルトを回収する。

しばらくは、問題なく進んだがナルトが自由に町を出歩けるようになる、否が応でも気付いた。

ナルトがほとんどの人間から憎まれている事に…

(これは…ナルトの感情…寂しき…怒り…憎しみ…)

里のほとんどの大人が、ナルトを汚物を見るような目で見る。

(三代目様…何故ですか？何故、ナルトがこんな目で見られなければならぬのですか…)

ミナトは、ナルトを英雄として見て欲しかった…

里のために、その身を使つて九尾を封印した英雄…

それがどうだ…里のほとんどの大人は、ナルトを英雄どころか、九尾そのものだと言わんばかりの憎悪の視線を向ける…

それから、ナルトへの迫害は続く…

(何故、オレをそんな目で見るんだ…止めてくれ…そんな目で僕を見ないでくれ…)

いつしか、ミナトはナルトの過去と意識を共有したような気になっていた…

だが、意識を共有しても、そこから受ける感情は別だった…

ナルトがその目に反発したのとは対照的に、ミナトはその目に膝を折る。

元々、才能があり…周囲の期待を受けて育ってきたミナト…

もちろん、それなりに挫折はしたし、苦勞もした…

戦争で仲間や部下を失った経験もある…

だが、こんな目で見られ続けた経験など無かった…

憎い化け物…そんな目で見る周囲の人間に、ミナトの心はズタズタになる。

見かねた、ヒルゼンはナルトを早めにアカデミーに入れた。

それはせめて、友達を作つて欲しいと言うヒルゼンの親心もあったが、ナルトが里を憎んで暴走するのではないかとの不安から監視をしたかったと言う考えもあった。

だがここでもナルトは、迫害を受けることになる。

親を見て子は育つ。ナルトを迫害する親を見て育った子供は、同じ

ようにナルトを忌避する。

それはイジメと言う行動を以て、再現された。

或いは、嘲笑し… 或いは、罵倒し… 或いは無視する…

子供のイジメは、陰湿だ…

ナルトの心は、日に日に疲弊していった…

(嫌だ… 嫌だ… こんな… なんでこんな目に会わなきゃならないんだ…)

ミナトの心は既に折れかかっていた…

そんなナルトにとって、唯一ヒルゼンという時だけは、救いだっ

た。ヒルゼンは、里の大人で只一人、ナルトをナルトとして見ていた。

ナルトのイタズラを叱ることはあっても、そこに愛情が感じられ

た。ナルトが火影に憧れるようになったのも必然だったのかもしれない。

ナルトにとってヒルゼンは、全ての里の人から尊敬される人物だった。

自分も火影になれば、里の人達が自分を見る目も変わるかもしれない…

そう考えた。

(ナルト… 君は強いな… オレならそんな選択肢は取れなかったかも知れない…)

ナルトが掲げた目標…

それを感じたミナトは、少しだけ救われた。

こんな目にあつて尚、ナルトは里を憎むのではなく、見返そうとしている。

それが、自分の息子だと言うことが誇らしかった。

ナルトの過去は、まだ続く…

その先に何かがあるのか… ミナトはまだ知らない…

ナルトとミナト 後編

それから、しばらく経った。

目指すべき目標を定めたナルトだったが、そこには大きな壁があった。

ナルトは、忍術がとてつもなく苦手だったのだ。

人よりも努力して…、それでもなかなか上手く術を扱えない…

ナルトは、卒業試験を落第してしまう。

当然、やる気も無くなり、座学にも集中できず…

「火影になる！」

ただ、口で言うだけでどうすれば良いか、全くわからなかった…

それでも、諦めきれず忍術の修行を続けていた。

実のところ、ナルトが忍術…、と言うよりチャクラの扱いが下手な事には理由があった。

内に封印された九尾の存在である。

チャクラを練る…、それは多分に感覚的なものだ。

生まれつき持っているチャクラを感じとり、必要な分だけ取り出して使う。

だが、ナルトは生まれつき持っているチャクラの他に、九尾のチャクラを持っている。

しかも、そのチャクラはナルトのチャクラに還元出来るように封印されていた。

通常の状態でも、極少量の九尾のチャクラがナルトのチャクラに混じってしまった。

それがナルトの感覚を狂わせ、チャクラの扱いをとてつもなく難しくしていた。

例えるなら、コップに水を汲むのにバケツを使っているようなものだ…

分身の術のように、必要なチャクラが少ないもの程ナルトにとっては、難しい術だった。

変化の術はまだ自分に掛けるものだから、何度も何度も修行して会

得した。

それでも、普通の人にとっては神業のようなチャクラコントロールなのだが…

影分身の術をたった数時間で会得したのは、影分身の術の必要なチャクラ量が多かったからだ。

バケツでバケツの水を満杯にするのだから、ナルトにとっては、普通の分身の術よりも、むしろ影分身の方が遥かに簡単だったのだ。

ナルトがアカデミーに入って3期目…

ナルトにとって、転機が訪れる。

ナルトは二度卒業試験に落ちた…

それでもめげずに火影を目指す。

同期の仲間にも恵まれた。

今期の仲間は、ナルトを落ちこぼれとして見ることはあっても、”

人じゃない何か”として見る者はいなかった。

授業をサボって一緒に叱られたり、一緒に遊んだり…

落ちこぼれと言う言葉に反発はしても、ナルトにとって今期の仲間という時は楽しかった。

(ナルト…良かった…)

ミナトも、ホツとする。

そして、卒業試験… またも落ちることになるナルトだったが、ミズキの話を信じて禁術の書を盗む。

そこで影分身を会得し、ナルトにとって救いの言葉をイルカから聞く。

その言葉は後のナルトにとって、いつまでも消えないかがり火となる…

(イルカ先生… 本当にありがとう…)

ミナトは、イルカの言葉に感謝の念が絶えなかった。

アカデミーを卒業し、第七班として正式に忍者として活動を始めるナルト。

その後、波の国の任務や、中忍試験、木の葉崩し… 自来也との綱手捜索…

ナルトはその都度、諦めず努力を続けて強くなり、少しずつ里の人間に認められるようになっていった…

しかし、ナルトにとってまたも絶望が襲う。

ナルトが一番認めてもらいたかった相手…

うちはサスケが里を抜ける。

力及ばず、サスケの里抜けを許してしまうナルト。

「なんでだつてばよ… サスケ…」

(サスケ君… どうして…)

ミナトも、サスケが里を抜けた理由が理解できなかった。

サスケは、波の国で命懸けでナルトを救った…

クールなふりをしているが、とても情に厚い人間に思えた。

だが、サスケはナルトの制止を振り切り、大蛇丸の元へと向かってしまった…

ナルトは暁から身を守るため、またサスケを取り戻すため、正式に自来也の弟子となる。

二年半、里を出て修行を続けたナルトは大きく成長した。

そしてナルトにとって、その二年半は家族の温もりを感じた宝物になった。

(自来也先生…)

自来也に複雑な思いを抱くミナト…

ナルトに家族の温もりを与えてくれたことに感謝はするが、同時に嫉妬もしてしまう。

本当なら、ナルトにその温もりを与えてやるのは自分やクシナのハズだったのに…

どうしようもないことだと理解しながらも、思わずにはいられなかった…

ナルトが木の葉に帰ってから、ナルトが関わる事件はどんどん大きくなっていった…

風影になった我愛羅… その我愛羅が暁に誘拐される。

我愛羅奪還任務…

サスケを取り戻すために、大蛇丸の元へ向かうナルト…

だが、サスケは想像以上に強くなっており、ナルトは自分の弱さを痛感する。

その後、サスケに追い付くため、更なる修行をして風遁螺旋手裏剣を会得し、暁の一人を仕留める。

そして仙術をものにするが、暁のペインによつて木の葉は壊滅的な被害を受ける。

ペインとの戦いで、封印術に仕込んだミナトとの邂逅を果たすナルト。

この頃のナルトは、ミナトを父と認め……火影の息子だからと、それまでの苦勞を許していた。

そして、ペインの正体である兄弟子……長門を説得し、なんとか里の人間の命だけは救われた。

ビーとの修行で、九尾のチャクラをコントロールする術を学ぶナルト。

その過程で、クシナとも再会するナルト。

(クシナ……ありがとう……)

ナルトが憎しみに飲まれそうになったとき……

クシナがナルトを助けた。

ナルトは望まれて生まれた……それを知れただけでも、ナルトにとっては救いだっただけ……

そして、第4次忍界大戦が始まる。

仮面の男がオビトだと知ったミナトは、大きく動揺する。

オビトの糾弾には、心を抉られるようだった。

それでも折れず……諦めず……戦うナルトに勇気付けられる。

そして、ナルトは六道仙人に力を託され、世界を救い……友も、救った。

その後、ナルトはヒナタと結ばれ、二人の子供も生まれた。

そして、子供の頃からの夢だった火影となる。

火影として、忙しい毎日に子供……特に息子のボルトとは、ギクシヤクした関係になってしまう。

ナルトは子供の頃から家族がいなかったために、家族との接し方が

上手くなかった。

それでも、ボルトの中忍試験での事件をきっかけに、関係を修復するナルト。

ナルトは、火影として…そして父親として、それから一生懸命に生きていた。

(ナルト…良かった…本当に…)

ミナトは、ナルトの幸せな結末を思い描いていた。

そして、その事件は起こる…

(嘘だ…嘘だ…嘘だ…嘘だ…嘘だ…嘘だ…)

目の前に地獄が広がっていた…

愛する妻と…娘が死に、家は燃え、そして…

(あ…ああ…うわああああああ!!!)

『どうだった…ナルトの過去は…』

気が付くと、そこに九喇嘛がいた。

ミナトは、知らない内に膝を突き、両目からは止まることの無い涙が溢れ、息は荒くなっていた…

「これが…ナルトの結末…」

独り言のようにごちるミナト。

『そうだ…そしてその結末を引き起こした原因を作ったのは…ワシであり…ミナト…お前だ…』

「!?」

九喇嘛の指摘に、改めて自分の業の深さを思い知らされるミナト。

「まあ…九喇嘛の言葉はともかく…これで俺の過去は知ってもらったってばよ…」

だが肝心のナルトは、特に怒りも憎しみも感じない冷静な声で、淡々と話を続ける。

「ああ…よくわかったよ…こんなんじや…僕を憎むのは当然だ…僕が君に九尾を封印したせいで…」

「やっぱり…わかってねえってばよ…」

「え？」

「俺は、何も俺を人柱力にしたこと…それ自体を憎んでる訳じや

ねえつてばよ。」

ナルトの言葉を理解できないミナト。

そんなミナトを見て、ナルトは一つ嘆息すると、自分の思いを口にする。

「確かに、俺の結末はあんたが俺を人柱力にしたことが原因だ。だけど俺にとつて苦しかったのは、俺自身のことより、とぼっちりで殺されたヒナタやヒマワリ…。それにボルトを独りにしちまった事…。が…。それは、俺が守れなかったのが悪いつてばよ…。」

「俺があんたを憎むとすれば…。それは…。あんたが親であることよりも火影であることを選んだ…。その一点だけだつてばよ…。」
「え?。」

「未来で…。二人の子供に恵まれて…。俺も親になった…。そんな時に思ったんだ…。親が子供を戦いの道具にする…。それだけはあつちやいけねえんだつて…。」

「な!? 僕はそんなつもりは…。」

ナルトの言葉を慌てて否定しようとするミナトだったが、ナルトがその言葉を遮り、話を続ける。

「あの時…。あんたは、俺に九喇嘛の半身を封印した…。あんたは知っていたよな? 人柱力がどんな扱いを受けてきたか…。」
「……………」

「ましてや…。封印が解かれて九尾が里で暴れた…。犠牲者も多く出た…。そんな事が起これば、里の人間がどう思うか…。それまで以上に扱いが酷くなるのはわかるだろ?。」

「あの時、あんたにはもう一つ選択肢があつた。俺に封印した九喇嘛…。それを死にかけてた母ちゃんに封印して、二人とも死鬼封尽に括られる。もちろん、そうした方が良かったつて言ってる訳じゃねえつてばよ?。」

「ただ、あんたはそれを選ばなかった…。何故だ?。」

「それは、ナルトがこの力をコントロールしてくれると信じたから…。この力がいずれ必要だと思つたから…。」

ミナトの言葉を聞いたナルトの目に冷たい色が浮かぶ。

「信じる… か？随分と無責任な言葉だと思わないか？四代目… あの時… 何もわからねえ赤子の俺の… 何をあんたは信じたんだってばよ…」

「それは… 僕とクシナの子だから…」

「子供に苦難を背負わせようとした親が言う台詞じゃあねえってばよ… それは…」

「……………」

「誤魔化すなよ？四代目… 確かにその考えは少しはあったんだろうが… あんたがあの時一番に考えていたのは違うだろ？」

「な、何を誤魔化すって言うんだい？」

ミナトはナルトが何を言おうとしているのかわからなかった… いや… わからないフリをした。

「この里から人柱力がなくなるのは、里にとって大きな損失だ… だからあんたは考えた… 自分の子供に人柱力になってもらおうと…」

「火影として、里の全体の利益を考えなきゃならないあんたは… 親として子供の幸せを願うよりも、里の幸せを優先した… それが… 何よりも許せねえんだってばよ…」

「ナルト… オレは…」

そんなことを考えていた訳ではない… そう言いたかったが、何故かそれを言葉にする事が出来なかった。

「俺は、あんたを父親と呼ぶことは… もう二度と無いってばよ… ヒナタとヒマワリを死なせて、ボルトには俺と同じ孤独を味合わせる事になっちまった… それは俺のせいだが… それでもその原因を作ったのは… やっぱり… 親としてよりも… 火影としての立場を選んだあんただから…」

ナルトの言葉に、ミナトはどうとう膝を崩し泣き崩れてしまった。

「ナルト… ごめん… 本当にごめんよ…」

泣き崩れるミナトにナルトは話しかける。

「四代目… もう良いんだ… あんたは確かに間違ってたばかりだった… でもだからって、あんたに悪意があったなんて思ってる訳でも

ねえんだってばよ……」

「ナルト…… オレは……」

「俺はもう…… 親が必要な子供じゃねえんだ…… 俺は俺の夢のために、今を精一杯生きるつもりだ…… だから、あんたは安心して休んでくれてばよ……」

ナルトの声には、既に憎悪も嫌悪も感じられなかった。

ただただ…… 透明な声音で話しかけるナルト……

ナルトはただ、ミナトに知って欲しかっただけだった。

憎しみ…… それは確かに無いわけではない。

だがそれよりも、あの時の選択…… それは親として正当化されるべきものではないのだと。

あの選択は、ナルトのためではなく里の為であったのだと、気付いて欲しかった……

「オレに…… 出来ることはもう…… 無いのかい？」

ミナトが、せめて何かナルトの役に立ちたいと声をかける。

「一つだけある。このタイミングで、わざわざ会いに来た理由…… 九喇嘛の半身を返してやってくればよ……」

「…… わかったよ…… ナルト……」

ナルトは木の葉の敵となるかもしれない……

本来なら渡すべきではないのだろう……

しかし、ミナトにはナルトの願いを聞く以外の選択肢は無かった。過去に間違ってしまったからこそ、今度こそ親として……

例えナルトにそう見てもらえないとしても……

自分の中の九喇嘛を解放するミナト。

九喇嘛は、この世界での自分を完全に取り戻した。

「…… ありがとな…… (父ちゃん)」

「ナルト……」

ナルトが自分を父と呼んだように聞こえた。

それだけで、ミナトは満足だった。

その瞬間、ミナトの身体が俄に発光する。

未練の解消されたミナトは、穢土転生から解放されようとしてい

た。

魂が空に浮き上がるのを感じるミナト…

「クシナ： オレたちのナルトは…とても強い子に育っていたよ…失敗ばかりしてたオレなんかとは…比べられないくらいに。」

『そうね…ずっと見てたから…知ってるってばね…』

ふと気が付くと、そこにクシナがいた。

「クシナ… やつと会えた…ここにいたんだね。」

ミナトは、死鬼封尽で魂を封じられ…二度とクシナに会うことは出来ないと言っていた…

だが、今…死鬼封尽から解放され、穢土転生からも解放された。

ようやく、クシナの元に帰ってこれたのだ。

『お帰りなさい…ミナト…』

「ただいま…クシナ…」

二人は、ナルトの方を見る。

『私たちは、もうあの子を抱き締めてあげる事が出来ないってばね…だからせめて…見守ってあげましょう？あの子が作る未来を…』

「そうだね…見守って行こう…二人で…」

ミナトは、ようやく心安らげる場所に辿り着くことが出来たのだ。た。

六道仙人再び・・・

(さよなら・・・父ちゃん・・・あの世で母ちゃんと幸せにな・・・)

ミナトを見送ったナルト・・・正面切つて父親とは言えなかった・・・それははじめ・・・ミナトの選択の結果死なせる事になった前世でのヒナタとヒマワリ・・・

二人の事を思えば、どうしてもミナトを父と言うわけにはいかなかった。

だから、心の中でだけそう呼んだ・・・届かないとわかっていても・・・

そのナルトに九喇嘛が声を掛ける。

『感傷に浸つてる暇は無えぞ？ナルト・・・ここは外とは時間の経過が違うが、それでもゼロじゃ無えんだ。さつさと他の尾獣とのリンクを始めるぞ・・・』

九喇嘛の言葉に気分を入れ換えるナルト・・・

『行けそうか？九喇嘛。』

『当たり前だ・・・この世界のワシの半身と同化したことで、予想通り感知力が格段に上がった。仮に、魔像に捕らわれた尾獣がいたとしても、その強制力を超えられる。』

『わかった・・・じゃあ・・・始めてくれつてばよ。九喇嘛。』

『任せろ！』

九喇嘛は、手を合わせて目を瞑る・・・

そうすることで、他の尾獣たちの探知をしているのだ。

『よし・・・全ての尾獣の位置は把握した・・・尾獣空間を開くぞ・・・準備はいいか？ナルト・・・』

『頼む。』

瞬間・・・辺りの景色が変わる。

そして、ナルトを中心に全ての尾獣が囲んでいた。

『はは・・・久しぶりだな・・・皆。』

久しぶりに集った尾獣達を懐かしそうに見つめるナルト。

『久しぶり・・・じゃねえだろナルト・・・勝手に死にやがって・・・』

孫悟空が悪態を付きながらも、笑った。

「心配かけちまったみたいだな…孫…」

『ふん…』

照れ隠しなのか、そっぽを向く孫悟空。

「今のところ…暁に捕らわれているヤツはいるのか？」

ナルトの問いかけに、穆王が答える。

『今のところは…私だけです。』

「そうか…」

既に、捕らわれてしまっている尾獣がいることに心を痛めるナルト。

『心配するな…ナルト…今回のリンクで魔像の場所はわかった。

魔像の強制力を超えた今のワシなら、近くまで行けば、穆王のチャクラとリンク出来る。後は、綱引きの要領で引っ張れば助け出せる。』

「本当か！九喇嘛。」

九喇嘛の言葉に安堵するナルト。

『さて、ナルト君…時間も無いことですし、用件を済ませてしまいましょう。』

又旅が、言った。

『今回は時間が無いからって、ウタカタ達には、遠慮してもらったんだしな。』

犀犬も、同調する。

『ヤグラは、もう死んじゃったけどね…』

磯撫が言った。

あまり、悲壮感が無いのはそれなりに納得の行く往生をしたのかも知れない。

『ナルト…俺たちのチャクラを再びお前に預ける。』

牛鬼が、ナルトに向かって手を差し出した。

そこに、重明が手を乗せる。さらに…犀犬が…穆王が…孫悟空が、磯撫、又旅、そして…

『俺様のチャクラは一度やってるが…まあ、ついでだ…』
最後に守鶴が手を乗せた。

重ねられた手に触れるナルト。

その手に全ての尾獣からチャクラが流れ込む。

その瞬間、又も場所が変わった…

「待っておったぞ… アシユラの転生者… うずまきナルト…」

「ん？あんたは… 六道の大じいちゃん…」

そこに、いたのは六道仙人… ハゴロモだった。

「なんで…」

「再び、全ての尾獣達との絆を結んだ事で、ワシとの間に繋がりが出来たのだ。」

「そっか… さつき皆からチャクラを貰ったから…」

「そう言えば、折角会えたんだから、礼を言わねえとな。大じいちゃん… 俺を助けてくれてありがとうだってばよ…」

ナルトは、前世でハゴロモに助けられたことを思い出して、礼を言う。

「礼は不要だ… なにせ… ワシは厳密にはお前を助けたワシとは別の存在なのでな…」

「え？… どう見ても六道の大じいちゃんじゃないか？」

ハゴロモの言葉を理解できないナルト…

「お前の世界のワシが、お前をこの世界に送った瞬間、この世界はお前が辿った世界とは別の世界となったのだ…」

「つまり… どう言う事だってばよ？」

「お前がこの世界に来た事で、本来生きているハズの無い人間が生きていたり、生きていたハズの人間が死んだりしたじやろう？」

「それは… 俺が歴史を変えたって事じゃねえのか？」

「それは違うな… 歴史を変えたと言うなら、何故お前は変えた事実を覚えている？」

「？」

ナルトにはハゴロモの説明が全く理解できない。

「うーむ… お前に分かりやすく言うのは難しいが… 本当に歴史を変えたのなら、変えた事実を覚えている人間がいてはおかしくは無いか？… 変える前の歴史が無かった事になるのだから、変えた事実

も無くなるハズなのだからな…」

「歴史とは… 大きな木の枝の様なものだ… きっかけによって枝分かれするな。お前がこの時代に現れた事で、そこから新しい枝が生まれた。それが、この世界じゃ。」

「なるほど… そう言うことか…」

ガーデニングが趣味のナルトは、枝に例えられた事で、ようやく理解した。

「つまり、大じいちゃんも他の尾獣たちと同じように、記憶をこの世界に送ったんだな？」

「そう言うことじゃ… 記憶はあるが、それは今のワシが助けた訳ではない… だから礼は不要だと言ったのじゃ。」

「まあ、大じいちゃんがそれで良いって言うなら、俺は良いけど… それで… 何のために出てきたんだってばよ？」

ナルトが改めて、用件を尋ねる。

「うむ… この世界に来た事で、未来でワシが授けたワシの力は無くなってしまっただろう？」

「ああ…」

「お前に、再び託そうと思っただけ… 何しろこの世界では、母上が復活する可能性はまだあるから。お前が信用出来ることは、未来の記憶を得たワシも理解しておる。だから早めに渡しておこうと考えたのじゃ… こうして、尾獣達との絆を取り戻した様だしの…」

ナルトは、考えた…

確かに、六道の力は欲しい…

これからの為にも、力はあつて困ることは決して無いのだから… だが、前世では陽… 日の力をナルトに… 陰… 月の力をサスケに分けて渡していた…

そして、今のサスケに力を託すのは不安があつた…

「お前の考えている事は、わかっておる。インドラの転生者にこの力を分けて渡すのを心配しておるのだろうか？ 何しろ、腕を無くす程の大喧嘩をした訳だし…」

「いや… それはお互い納得してるから良いんだってばよ。ただ…

今のサスケは復讐に駆られてる…。そんなサスケに力を与えると、ろくなことにならない気がしてな…。」

実際、一度は木の葉を消そうとまで考えていたのだ…。

その力があれば、すぐに実行していたに違いない。

「ならば、今回はお主人一人に陰陽両方の力を渡せば良いのではないか？」

六道仙人の提案に少し考えたナルトは、

「なあ…。大じいちゃん…。その力は俺かサスケにしか託すことは出来ねえのかな？」

思い付いたことがあり、ハゴロモに尋ねた。

「む？そんなことは無い…。が…。まあ素養は必要かの…。それにもともと、この力はインドラかアシユラ…。二人の転生者に、渡すように調整されておるから、託したとしてもお前達のように直ぐに使いこなす事は出来んじやろうて…。」

「俺たちで無くても託せるんだな？」

ハゴロモの言葉に、念を入れて確認するナルト。

「うむ…。そうじゃの…。」

「だったら…。」

ナルトは、サスケでは無く、別の人物を陰の力を託す相手として提案してみる事にした。

その者の名は…。

ヒナタ

ナルトがハゴロモとの邂逅を果たしていた頃…

サスケを追跡する命を受けた分身ナルト、ヒナタ、シカマル、サクラの四人…

「ナルト君… こっちにも追っ手が来てるみたい。」

白眼で、追跡者の存在を確認したヒナタがナルトに報告する。

「ああ… 結構な数だつてばよ…」

ナルトも仙人モードで探知をしていた為、特に驚きはない。

「どうするの？ナルト…」

サクラが不安そうにナルトに聞いた。

「……………」

ナルトは暫し考える。

サスケを探知するために、自分が残るわけにはいかない。

かといって、サクラはまだ力不足…

ヒナタには九喇嘛の力を渡しているとは言え、敵の力が不明な以上、不安が残る。

シカマルは、足止めには向いているが、決定力が無かった。

前世においては、シカマルが残り危ないところをアスマに救われたとの事だったが、今回も同じ様に助けられるとは限らない…

(どうする… 向こうは我愛羅が上手くやってくれろと信じて、全員で当たるか?)

ナルトが考えていると…

「俺が残る…」

シカマルが、自分から残る事を提案した。

「シカマル?」

シカマルの目は、普段のシカマルからは考えられない強い意思を持っていた。

「わかった。頼むってばよ。」

その目をみたナルトは、何も聞かずシカマルに任せることにした。

「その代わり約束してくれってばよ… 絶対に生き残るって…」

だが、これだけはどうしても言っておきたかった。

「ああ…こんな所で死ぬ気はねえよ…生き恥を晒してでも生き残ってやる…」

ナルトの目を見て、強く誓うシカマル。

ナルトは、ヒナタとサクラに頷くとシカマルを残して先に進んだ。

「ナルト…本当に良かったの？」

サクラが不安そうな声で、ナルトに聞いた。

「ああ…きつと…これが最善の手だってばよ。(シカマルには、今日木の葉崩しがあることを伝えてあった。きつと何か対策を取ってハズだってばよ…信じてるからな…シカマル…)」

シカマルを信じ、先に進むナルト達…

と、その時ヒナタに異変が起こる。

「あ…」

ヒナタの意識が、急に無くなったのだ。

「ヒナタ！」

慌てて抱き抱えるナルト。

「一体何があったの？」

サクラも心配そうに見る。

「!?…これは…」

ヒナタから、六道の力を感じたナルト…

「ヒナタは、大丈夫だ…じきに目を覚ますってばよ。」

「本当に大丈夫なの？」

サクラは更に尋ねる。

「大丈夫だってばよ…それよりも、早くサスケに追い付かねえと…ヒナタは、このまま抱き抱えて先に進む…。時間稼ぎをしてくれてシカマルの為に、俺達は前に進まなきゃならねえってばよ…」

その言葉に、現状を思い出したサクラは無言で頷いた。

一方、その頃ヒナタの意識はハゴロモの元にあった。

「ここは…ナルト君やサクラさんはどこ？」

突然景色が代わり、ナルトもサクラも姿が見えなくなったことに混乱するヒナタ。

「落ち着け、ヒナタよ……ここはお主の精神世界だ。」

「誰？何故、私の名前を……」

突然話しかけられ、警戒しながらその人物を探るヒナタ。

「ふむ……この状況での質問としては的確ではあるが……まずはワシの話を聞いてもらう。ワシの名はハゴロモ……お主達に分かりやすく言うなら、六道仙人と呼ばれているものだ。」

その名に聞き覚えがあったヒナタは、驚きながら確認する。

「六道仙人!?それって……未来でナルト君を助けて、この時代に送ってくれたって言う、忍の開祖の六道仙人ですか?」

「ほう……ナルトから話を聞いているようだな……それなら話は早い。ワシは、その六道仙人で間違いない。」

「そうですか……でも、そんな方が私に何の用があつて呼んだのですか?」

ここに自分を呼んだのは、目の前の六道仙人で間違いないようだ。

だが、それなら何故自分を呼んだのか……理由が解らなかつた。

「うむ……ナルトと違って話が早くて助かるのお。まず確認だが、ナルトからワシの事をどこまで聞いておる?」

「えっと……確か第4次忍界大戦の時に、うちはマダラに対抗する為に、ナルト君とサスケ君に力を貸してくれた忍の開祖で、その目的は心を無くしてしまい世界の破壊者になりかねない、カグヤ……自分の母親を封印してもらった……って……」

ヒナタは、ナルトから聞いていた話を思い出しながら、ハゴロモに答える。

「ふむ……まあ概ね合つてはおるな……それに関しては後で説明するとして、お主を呼んだ理由だが……ナルトから推薦されたのだ……この時代で……ワシの力を託すに足る人物として……お主をな……」

「ナルト君が?それって、私が六道仙人の力を受け継ぐって事ですよね……その……サスケ君じゃなくて、私で大丈夫なんでしょうか……」

ナルトの事は信じているが、それでも自分がそんな大きな力を扱えるだろうか……不安になるヒナタ。

「それを確かめる為に、こうして会いに来たのだ。もちろん、『適正』を

平静を取り戻したハゴロモは、ヒナタの質問に答えた。

「お主の適正は驚くほどに高い。或いはナルトやサスケを超えるかも知れぬ程にな…。」

「え!？」

その評価に今度はヒナタが驚いた。

「もちろん、ナルト達のように直ぐにこの力を使いこなす事は出来まい… そう言う意味ではあの二人より適正は低いのだが…。」

「それなら、一体…。」

「お主はな… ワシの弟… ハムラのチャクラを色濃く受け継いでいるようだ…。」

「六道仙人様の… 弟… ですか?」

「弟のハムラは、ワシの輪廻眼と対をなす、転生眼を開眼させた者じゃ… お主が生まれ持つ白眼… それにワシの力を授ければ… 或いはお主も、転生眼を得るかも知れぬな…。」

「ワシが授ける力… それはナルト達に授けてもそのまま使えるようになるだけだが… お主はそれを変化し別の力へと昇華させることが出来るかも知れぬ… そう言う意味で、お主はあの二人を超える適正があるとも言える…。」

「私が…。」

ハゴロモの言葉に呆然とするヒナタ。

「さて… お主の適正は充分過ぎる位だとわかった… 後は、お主次第じゃ… ワシの力を受け継ぐ意思はあるかの?」

ハゴロモが、ヒナタに改めて問う。

「私は…。」

言葉に詰まりそうになるヒナタ…

それでも…

(私はナルト君と、同じ歩幅で歩きたい… ナルト君を支えたい… だから…)

「はい… 六道仙人様の力… 私に授けて下さい。」

ナルトのため… そして自分の為に、受け継ぐ覚悟を決めた。

その目を見たハゴロモは、フツと笑う。

「そうか… 陰陽道において、お主にこれから託す陰の力とは月を表す。そしてナルトに託すのは陽の力… これは太陽を表す… 知っておるか？月の輝きは、太陽の光を受けて輝いているのだと…」

「ヒナタ… 日向ひなた… か… まさにお主は月の力を受けるに相応しい名をもっておるな… ナルトと言う太陽の光に照らされ輝く月… そして太陽も休む時は必要じやろう…」

「ヒナタよ… ナルトは、これからも命懸けでお主を守るだろう… あやつはそう言う男だ… お主はそんなナルトを支え、癒してやって欲しい。お主らが笑って暮らせる世界… それがこの世界にとって、幸せになると願っている。」

ハゴロモはそう言って、ヒナタに力を託した。

「はい。ナルト君は、私が支えていきます。六道仙人様… どうか見ていて下さい。」

ヒナタはそう言ってハゴロモに誓いをたてると、意識を現実へと戻すのだった。

それぞれの戦い

追っ手を足止めするために残ったシカマル。

シカマルは、わざと足跡を残し枝を折ることで痕跡を残し、追っ手に追われる様に仕向けた上で、別方向に移動した。

「さあて… なんとか時間稼ぎをしねえとな…」

（未来のオレは生き残ったみてえだが、今回も必ず生き残れるかはわからねえ… 今出来る最善手を取って時間を稼ぐしかねえ…）

シカマルは、陽動の為に移動しながらも自身に有利な場所へと巧みに敵を誘導する。

身を隠すシカマル…

そこに音の忍が8名姿を表す。

その内の一人が、そこにあつた足跡を見て、ニヤリと笑う。

（今だー）

見事にシカマルの策にかかる音忍たちに、別方向から影しぼりの術をかけるシカマル。

「!?… これは…」

突然動けなくなった音忍たちは、驚きの声をあげる。

「わりいが、お前らには俺の時間稼ぎに付き合っつて貰うぜ？」

姿を見せたシカマルに対し、音忍たちはしかしそれほど焦っているように見えなかった。

「なんだ、まだガキじゃねえか… こんなのに全員捕まっちゃうとは…」

「これが噂に聞く、木の葉の影しぼりの術か。」

それどころか、シカマルを子供だと嘲笑し、雑談を始める音忍たち。

（1… 2… 3… 4… … 8人か… 一人足りねえ… こいつらの余裕の理由はそれか？）

事前に敵の人数をヒナタに聞いていたシカマルは、もう一人いるはずだと辺りを探る。

だが、感知タイプでは無い自分には、気配を消して機を窺う敵を見つけることはできない。

(だったら...))

シカマルは、足に巻き付けた手裏剣ホルダーから手裏剣を... 腰のカバンからクナイを何本か取りだし、影しぼりの術で拘束している音忍に投擲した。

その手裏剣やクナイは、投擲された別の手裏剣によつて落とされる。

だが、シカマルに特に落胆した様子はない。

先程の攻撃は、隠れている9人目を探し出す為のもの。

(あそこか...)

投擲された手裏剣から9人目の隠れている位置を割り出したシカマル...

だが、テマリとの試合で消耗しているシカマルは、チャクラが残り少ない。

(それでも... 諦める訳にはいかねえ。アイツと約束したんだ... 例えチャクラが残り少なくても... 最後まで足掻いてやるぜ...)

シカマルは、覚悟を決めて特攻を仕掛けようとした。一人でも多く倒す... そのつもりでクナイを構える。

「俺たちに攻撃を仕掛けた瞬間、お前の人生の終わりだ。」
わかっている... 特攻を仕掛けた瞬間9人目が自分の首を取るだろうことは...

それでも、いつまでも影しぼりの術で止めておくことは出来ない以上、シカマルの選択肢は限られていた。

「行くぜ...」

シカマルが、一步踏み出そうとしたその瞬間...
「ようやく追い付いた...」

シカマルの担当上忍... 猿飛アスマだった。

「アスマ... なんで...」

突然のアスマの登場に驚くシカマル。

そんなシカマルを尻目に次々と敵を殺して行くアスマ。

敵の全滅を確認したシカマルは、ホッと安堵のため息をついた。

(ふう... なんとか生き延びたな... 約束... 守ったぜ?... ナル

ト……)

一方、我愛羅たちは、担当上忍のバキの命により、木の葉から撤退しようとしていた。

それを追いかけていたサスケが、ついに追い付く。

「逃がしや、しねえよ……」

それを見た我愛羅が一步前に入る。

「テマリ……カंकクロウ……お前達は先に行け……ここは俺が引き受ける。」

それは、自分達を心配しての発言だとカंकクロウ達はすぐに気付いた。

木の葉に来て以来、我愛羅が変わったのは感じていた……

それまでの我愛羅は、自分以外に関心が無かった……

唯一、戦闘で自分を満足させられるだけの強者にのみ……殺す対象として関心を示す……それだけだった。

それは肉親である自分達でもそうだ……多少は他の人間よりは興味を持っていた……特にテマリの言うことはそれなりに守ってくれていた事からもそれは伺える……

だが、カंकクロウの言うことはまるで聞こうとはしない。

カंकクロウが、自分に恐怖していることを知っていたからだ。

そんな我愛羅が、木の葉に来てから他者に関心を持つようになった……

いや、他者との繋がりを持つようになったのだ……

テマリもカंकクロウも、突然の変化に驚いた……

だが、一緒に中忍試験を受けている内に、自然とその変化を受け入れていた。

ようやく、普通の兄妹として接する事が出来たのだ……

だから……

「いや……ここは俺が残るじゃん？」

カंकクロウが我愛羅を止めて、自分が残る事を告げる。

「カंकクロウ……しかし……」

不安そうな我愛羅。

それを見たカンクロウは苦笑し、

「正直に言う…俺はお前が怖かった…あの化物の姿のお前を見てからずっと…いつか俺が殺されるんじゃないかって…そう思った。お前と同じ班にならないといけないと知った時は、本気で嫌だった…」

「……………」

「でも、お前は木の葉に来て変わったじゃん？俺らの事を心配したり、或いは守ろうとしたり…そんなお前を見てたら、お前を怖がってた自分が恥ずかしいと思った…俺はお前の兄貴なのにな…」

「カンクロウ…」

「たまには、兄貴らしくカツコつけさせて欲しいじゃん？だから我愛羅はテマリを守ってくれ？」

カンクロウの独白と頼みを聞いた我愛羅は、頷いた。

「わかった…死ぬなよ？カンクロウ…」

「当たり前じゃん…」

そして後ろを振り向いた我愛羅は、テマリと共に先を進んだ。

「待て！」

サスケが我愛羅を追いかけようとする…

「お前の相手は俺じゃん？」

だが、その進路をカンクロウが塞ぐ。

「ちっ！」

だが、そこに更なる第三者が声がかかる。

「いや、お前の相手はこっちだ…」

それはシノだった。

シノはサスケに我愛羅を追うように言って、カンクロウと戦いを始めるのだった。

内容は、コミック版と同じなので割愛…

…俺の出番っ！…（byシノ）

「待て…」

そしてサスケはと言うと、我愛羅達に追い付いていた。

「てめえら砂が、何を企んでいるのか知らねえが…お前は俺が止め

る…」

サスケの宣言を受けた我愛羅は、

「テマリ… 下がっている…」

サスケと戦う事を決めた。

「我愛羅… しかし…」

サスケと戦うことに否定的なテマリ…

今は、サスケに構わず逃げに徹するべきなのではと考えていたのだ。

「カンクロウと約束した… お前を守ると…」

「我愛羅…」

カンクロウとの約束を果たすためにサスケと戦う… そう言いきった我愛羅に泣きそうになるテマリ…

なぜ、もっと早く我愛羅と姉として仲良くしてやれなかったのか…

テマリは後悔していた。

「来い… うちがサスケ。」

「行くぞ…」

二人の戦いが始まった…

(守鶴…)

『わかってるぜ…』

我愛羅は、守鶴の力を借りて砂の化身と化す。

それは、小型の守鶴を象った鎧を着ているような姿だった。

全身を砂の鎧で覆った我愛羅…

しかし、そんな重いもので全身を覆っている状態だというのにスピードはむしろ増していた。

「くっ…」

サスケはなんとか、攻撃をかわしているが、次第に追い詰められていく…

「こうなったら…」

最後の賭けとでも言うように、千鳥を作りカウンターを狙うサスケだったが…

「そ… そんな…」

その突きが我愛羅に当たる寸前、砂の鎧から突然出てきた砂の腕に止められていた…

「俺の勝ちだ…」

「ぐはっ！」

我愛羅の砂の尾に叩きつけられ意識を失うサスケ。

我愛羅がサスケに止めを刺そうとした、その時…

顔を蹴られて、吹き飛ぶ我愛羅。

「わりいな… 我愛羅… ここからは… 俺が相手だつてばよ…」

分身ナルト達が追い付いた。

既に目を覚ましていたヒナタ、サクラもいる。

「サスケ君」

サクラは、サスケを心配してサスケの元に向かった。

気絶してるだけなのを確認し安堵するサクラ。

「我愛羅… 敵の応援が来た以上… 私も戦うよ。」

テマリは、我愛羅にそう言った。

並び立つ二人。

だが、ナルトにもパートナーがいる。

「いえ… 貴方の相手は私です…」

ヒナタがナルトの隣に立ち、言った。

あのハゴロモとの邂逅からヒナタは既に目を覚まし、現実に復帰していた。

「テマリ… お前は、あのくの一の方を頼む。だが油断はするなよ。」

「我愛羅… わかった…」

我愛羅の頼みを聞き、ヒナタと対峙するテマリ…

そしてナルトと対峙する我愛羅…

「さて… 分身とは言え手加減はせんで… ナルト…」

「確かにこの状態じゃ、力比べでは敵わねえかもしれないけどな… こっちは潜ってきた修羅場が違うんだつてばよ…」

激突する両者…

そして、ヒナタとテマリの戦い…

「私の相手はあんたか… 確か… 日向ネジと予選で戦った、くのーだな？」

ヒナタに見覚えがあつたテマリが確認する。

「日向ヒナタです…」

「そうか… でも… あんたじゃ、あたしには敵わないよ？」

「やってみないと、わかりませんよ？」

ヒナタは、笑いながら答える。

それは、今の自分の力に自信があつたからだ。

「フン… なら… さつさと片付けるとするさー」

二人の戦いが始まった。

戦いが始まるとすぐに、テマリは大扇子を使い突風を巻き起こす。

それによつて舞い上がった粉塵で身を隠しながら、距離を取るテマリ…

ヒナタは攻撃の手段が接近戦に限られているのに対し、テマリは中遠距離をメインに接近戦もこなす忍だ…

一度、距離を取られたヒナタは苦戦する… かに見られたが…

「な!？」

突然、消えたヒナタ… そして、ヒナタは別の場所に移動していたのだ。

驚くテマリ。

「どういうことだい… あれはもしかして… 噂に聞く飛雷神の術つてやつか！」

四代目火影が得意としていた、時空間忍術… それは、他里にまで恐れられていた…

テマリは、その術に当たりを付けるが、もちろんそれは誤りだ…

ハゴロモから、陰の力を授かったヒナタ。

その力を受けた輪廻眼は、自身の見た物や生き物の場所を入れ換える力を持っている。

ヒナタは、まだ輪廻眼を開眼するに至つてはいないが、自分の見た物と自分を入れ換える事だけは出来た。

そして、その術は白眼と言う広範囲に… そしてほぼ360度に近

い視界を持つヒナタとの相性がとてつもなく良かった。

まるで、瞬間移動をするように場所を変えるヒナタに、的を絞れないテマリ…

「くっ…これじゃ、攻撃を当てられない…」

と、その時、目の前にヒナタが現れた…

「ちいー」

テマリは、勘で後ろに飛ぶ事で事なきを得ていた。

だが、冷や汗が止まらない。

距離を取っても、一瞬で縮められてしまう…

これでは対策の取り様が無い。

焦るテマリ。

しかし、ここでヒナタに誤算があった…

ヒナタは、まだハゴロモの陰の力を完全に把握したわけではない…

故に完全に使いこなすことが出来ていないのだが、更に、その術がどれだけのチャクラを使うのかも把握出来ていなかった…

ヒナタは、うかれていたのだ…

(この力があれば、ナルト君と一緒に戦える… 足手まといにならずに… ナルト君を守る事ができる…)

慢心し、瞳術に頼りきった戦い方をしたヒナタ…

そして、限界が訪れる…

「あれ？」

突然身体が動かなくなった…

チャクラを使いすぎたのだ…

テマリは、動きを止めたヒナタに、好機と見てクナイを投げた。

その攻撃を、呆然と見つめるヒナタ…

(そんな… 私… ここまでなの?)

あまりにも呆気ない終わり…

折角ナルトと相愛になれたのに…

これから、ナルトと共に歩めるはずだったのに…

ナルトを支えると、約束したのに…

「ナルト君…」

思わず目を瞑るヒナタ…

だが、いつまで経ってもクナイが自分に届くことは無かった…

目を開けるヒナタ… そこにいたのは…

「待たせて悪かったな… ヒナタ…」

クナイを驚掴み、ヒナタを守る様に立つ… 本体のナルトがそこに

いたのだった。

変わる歴史…

ナルトがヒナタの危機を救うところから、時間は少し遡り…

場所は大蛇丸たちの所に戻る。

大蛇丸は、ヒルゼンと戦いながらもナルトの方を気にかけていた。というのも、ミナトと拳を合わせてから数分…動きを見せなかったからだ…

だからと言って、試しにクナイを投げつけてみたが、それは九尾のチャクラがナルトを守るように防いでしまい、手が出せないでいた。(何をしているのかしら… 四代目に会う理由があるって話だったけど、動きが無いのは面白く無いわね…)

と、その時…

ミナトの身体が光輝く…

「な!？」

その様子に、穢土転生から魂が解放され、あの世へと旅立とうとしているのだと理解した。

慌てて拘束しようと試みたが、それは失敗に終わってしまう。

四代目の身体が崩れ、中から穢土転生に使った器の遺体が出てくる。

「やられたわね…まさか、浄化されるなんて…最初から縛っておけば良かったかしら…」

「おお…ナルトめ…やりおったか…」

一方のヒルゼンは、ミナトを解放したナルトを称賛する。

「おい!猿飛…しっかり戦闘に集中しろ!」

と、そこにヒルゼンによって口寄せされた猿魔の叱咤が飛ぶ。

「わかっておるわい。」

再び、戦闘に集中するヒルゼン。

柱間、扉間との戦闘に没頭する。

「…おかしいわね… 四代目の浄化に成功したというのに、ナルト君が動かない…」

だが、大蛇丸の方はナルトが気になって仕方ない様だった。

「…少し、仕掛けてみようかしら…」

これまでは、クナイを投げたり、術を使って様子を見てきたが、ナルトが一向に目を開けずに棒立ちしていることに、逆に不安を感じた大蛇丸は、接近戦にうつて出る事にした。

ヒルゼンとの戦いで使っていた草薙の剣…

それを構えた大蛇丸は、ナルトに向かって駆け出した。

「いかん！」

それを見たヒルゼンが止めに入ろうとする…

しかし…

「くっ！」

間に割って入った柱間に進路を塞がれてしまう。

「ナルト君…目を覚まさないなら…これで終わりよ！」

例え、九尾のチャクラが迎撃してきても、大蛇丸自らが接近戦に出ればかわして攻撃に移る自信があった。

だが、予想に反して九尾のチャクラに反応は無い。

訝しく思う大蛇丸だったが、そのまま草薙の剣の届く所まで接近した。

大蛇丸が草薙の剣を、ナルトの頭目掛けて降り下ろす…

「な!？」

だが、その攻撃がナルトに当たることは無かった…

いつの間にか目を開けていたナルト…

その手に、これもまたいつの間にか持っていた黒い棒に止められていたのだ…

いや…止められたのも一瞬…その黒い棒に触れた矢先、草薙の剣が触れた先から削り折られた。

「ナルト君…貴方一体…」

呆然とする大蛇丸…

大蛇丸が見たナルトは、先程の九尾チャクラモードとは、また少し変化していた。

顔の部分まで覆っていた九尾のチャクラ…今は顔は覆っていない

い。

だが、有するチャクラの量、質は格段に跳ね上がっていた…。そして、何よりも目を引くのは後ろに背負った黒い玉…

ナルトが手に持つ棒と同じ物の様に見える…

草薙の剣すら折る程の力を持つそれに、恐れを抱く大蛇丸。

そんな大蛇丸にナルトが口を開いた。

「大蛇丸… 感謝するってばよ… お陰で四代目に封印されていた九喇嘛の半身を取り戻す事ができた…」

「…なるほど… それが貴方の目的だったって訳ね… てつきり、自分を人柱力にした父親に恨み言でも言うのかと思っていたのだけど…」

「まあ、それについては… 結局言っちゃまったけどな… さて…」

大蛇丸との会話を止めたナルト…

「じゃあ、ここからは… 俺もそっちの戦いに加わらせて貰うってばよ？」

「私に協力… する訳じゃ無いわよね… やっぱり…」

ナルトの力を、間近で感じてしまった大蛇丸は、とても敵う気がしなかった。一応、聞いてみるが…

「当然だってばよ？ 何しろ今の俺は… 木の葉の忍だからな…」

ナルトの言葉は無情…

「四代目に会えたのは私のお陰でなんだけど…」

「ああ… だから…」

そこで一旦切ったナルト…

「… だから？」

大蛇丸が聞き返す。

「命だけは助けてやるってばよ？」

ナルトはそう言うと、大蛇丸を通り過ぎヒルゼンの元へと向かう。「じいちゃん！後は俺に任せてくれってばよ！」

「ナルトか！しかし… 先代達は穢土転生によって攻撃しても再生してしま… 術者の大蛇丸を倒さねば…」

だが、ヒルゼンは柱間たちの相手より大蛇丸を倒すのが先だと主張

する。

「まあ…見てろって。」

しかしナルトは、自信を窺わせる声でヒルゼンの言葉を否定する。

そして、後ろに背負った求道玉を操作すると、柱間たちの四肢に向かつて飛ばした。

「!？」

求道玉に触れた箇所は簡単に吹き飛ぶ…

そして、何故か再生することが出来なかった…

動けない二人に、ナルトが陽の紋様を持つ右手で触れる。

すると穢土転生の呪縛は解かれ、柱間たちの魂は昇天していった。残ったのは穢土転生の為に使われた器の遺体のみである。

「ナルト…お主…一体何をしおった…」

二人の先代を止めるには、己の命を賭けて死鬼封尽をするしかない…

そんな悲痛な決意をしていたヒルゼンだけに、その呆気ない結末に呆然としてしまう。

「上手く説明は出来ねえからな…まあ、今の俺にはそれが出来る…ただそれだけだっただよ…」

「……………」

正直に言うつもりが無いのか、それとも本当に説明が出来ないのか…判断に困るヒルゼンだったが、今の状況で深く考える余裕もない。

「さて…大蛇丸よ…お主の負けじゃな…」

大蛇丸に向かって、敗北を告げるヒルゼン。

「……………ええ…認めるしか無いでしょうね…ですが…私は貴方に敗けた訳ではありませんよ？猿飛先生…そのナルト君に敗けたんです。」

「確かにの…じゃが、お主の敗北に変わりはあるまい？そして…これで、命の終わりだ…」

手に持った如意棒を構えるヒルゼン。

だが、それをナルトが止める。

「わりいけど、じいちゃん…大蛇丸は見逃して貰うてばよ？」
「なんじゃと？」

ナルトの言葉に驚くヒルゼン。

「何故じゃ…大蛇丸は木の葉に侵略した者…助ける訳にはいかん！既に犠牲者も出とるのだからな…」

ヒルゼンが、理由を尋ねる。

「こいつには、四代目に会わせて貰った借りがある…それに…」
「それに？」

「大蛇丸も言つてたろ？勝ったのは俺であつて、三代目…あんたじゃねえつてばよ…」

「むう…」

痛い所を突かれて、唸るヒルゼン。

それでも…

「それでも火影として、ソヤツを見逃す事は出来ん…」

そこは、どうしても譲れなかった…

「ハア…なら、俺の契約…願いを叶えるつてのを行使しても良い…」

「むっ…」

「それも、拒否するつて言うなら、このあと俺は大蛇丸に付いても良いんだぜ？じいちゃん…」

ナルトの最後通告に、

「ハア…仕方あるまい…」

渋々了承するヒルゼン。

それを聞いたナルトは、大蛇丸に向き直り、

「さて、大蛇丸…これで、借りは返したつてばよ？これで貸し借りは無しだ…あまりろくでもない事を企むなら…次は…容赦しねえつてばよ…」

そう言つて、大蛇丸に釘を指すのだった…

「え…ええ…わかったわ…」

なんとか、頷いた大蛇丸は多由也達を連れて、その場を離脱する。暗部が後を追おうとするが、ヒルゼンがそれを止める。

見逃す約束をした上、どのみち暗部達では返り討ちに会うのがオチだったからだ。

「ふう… なんとか乗り切ったの。ナルトよ… 助太刀感謝するぞい。」

ヒルゼンがナルトに感謝の言葉を伝える。

「いや… まだ終わってねえってばよ…」

だが、ナルトはその言葉を否定する。

何故なら、我愛羅の方はまだ決着が着いていないからだ。

「三代目… ここはもう大丈夫だな？」

「あ、ああ…」

「俺は、ヒナタ達の応援に向かうってばよ…」

「今から向かっても間に合わんじやろ…」

ヒルゼンの言葉にニヤリと笑うナルト…

「俺は、四代目… 黄色い閃光の息子だってばよ？」

「まさか！」

ナルトの言葉に驚くヒルゼン。

「四代目とは、少しやり方が違うけどな…」

未来で… ゲンマの小隊から飛雷神の術を教わっていたナルト…

だが、マーキングを施す… と言う事が上手く出来なかったナルトは、影分身のチャクラを探知して跳ぶと言う、独自のやり方で飛雷神の術を習得した。

今、向こうには自分の影分身がいる…

「じゃ… 行ってくるってばよ…」

そうして、ナルトは消えた。

それを見届けたヒルゼンは…

「フウ… ナルトのおかげで、命拾いしたわい… やはり… 木の葉にナルトは必要じゃ… なんとかしてもナルトを繋ぎ止めねばの…」

ナルトの重要性を再確認し、ナルトを繋ぎ止める為の策を思案するのだった。

そして、飛雷神の術で跳んだナルト…

着いてすぐ見えたのは、動けなくなっているヒナタ…

そして、ヒナタにクナイを投げようとするテマリの姿だった。

「ヒナタ！」

全速力で駆けるナルト。

間一髪……ヒナタとクナイの間に割って入り、クナイを掴む事に成功した。

「待たせて悪かったな……ヒナタ……」

「ナルト……君……」

ナルトを見て、涙を流すヒナタ……

それを見たナルトは、

（間に合った……今度は守れた……良かった……本当に良かったってばよ……）

心の底から安堵するのだった。

ヒナタVSテマリ

ヒナタを助けることに成功したナルトは、ヒナタを抱えて一旦距離を取り、影分身でテマリを牽制する。

「ごめんね… ナルト君… 私… また、ナルト君の… 足手まといに… なっちゃった…」

ヒナタはナルトの胸にすがり、泣きながら謝り続けた。

「今度こそ、ナルト君と一緒に戦えるって… ナルト君の隣にいられるって… そう… 思ってたのに… 私は…」

ヒナタはハゴロモから陰の力を授かった…

その力で、ようやくナルトの隣に立てる… そう思っていた。

しかし、結局ナルトに助けられてしまった…

自分は、いつまで立ってもナルトの背中を追うことしか出来ない… 支えることも出来ない…

一度考えてしまうと、悲観的な考えが止まらなくなってしまう…

ナルトは、そんなヒナタを強く抱き締めた。

そして、自分の思いを伝える。

「ヒナタ… お前は俺の心を守ってくれたってばよ…」
「心…」

未だ泣き続けるヒナタだったが、ナルトの言葉を聞き返す。

「この世界に来て… 俺は、何をどうして良いかわからなくなっていた… 木の葉の連中の目には、殺意を覚えたし、三代目のじいちゃんがそれを容認してるのも恨んだ… あのままなら… きつと… 俺は、復讐に心を支配されて壊れていたと思う…」

「……………」

「そんな時… ヒナタが俺に道を指し示してくれたんだってばよ… ヒナタがいてくれたから、俺は、壊れずに済んだ…」

「力なんて持つてなくなつて、ヒナタは俺のパートナーだ。だから… そんなに自分を責める必要は無いってばよ…」

ナルトの言葉を聞き、ようやく涙を止めたヒナタ。

「ナルト君…ごめんね…そして、ありがとう…（大好きだよ…）」

ナルトの言葉を受け入れたヒナタだったが、

「でも…やっぱり私は、忍としてもナルト君の隣に立ちたい。」

自分の今の思いを口にする。

その言葉に頷いたナルトは、ある提案をした。

「わかった…ならテマリの手前はヒナタに任せるってばよ。」

「え!？」

ナルトの提案に驚くヒナタ。

「でも、今の私はチャクラが枯渇しかけていてマトモに動く事も出来ないんだよ?」

ヒナタは、自身の状況を伝える。

だが、ナルトは当然理解していた。

「ヒナタ…お前には事前に九喇嘛のチャクラを渡していたら?」

「う、うん…」

「そのチャクラを、自分で感じて練ってみるってばよ…」

「わかった…」

ナルトの言う通り、自分の中の九尾のチャクラを探るヒナタ。

一度、忍に襲撃された時に感じた力だけに、探せると思った…

何よりも、ナルトの言葉だからこそ疑う余地は無かった…

(これだわ…)

九尾のチャクラを感じたヒナタは、チャクラを練り始める。

ポコ…ポコ…

すると、点穴からチャクラが溢れ、身体を覆い始める。

それは、ナルトが前世において第四次忍界大戦の折り、忍連合にチャクラを渡した時と同じ現象であった。

むろん、ナルトがその気になればナルトの意思で目の前の現象を作り出すことは出来る。

しかし、それではヒナタの願いは叶わない…

—忍としても…ナルト君の隣に立ちたい—

ヒナタの思いを叶えるには、ヒナタ自身が、自分の意思でこの力を

コントロールする必要があった。

「これ… 凄い… 身体から力が溢れてくるみたい…」

「ヒナタ… 頑張れよ？」

「ナルト君… うん… 行ってきます。」

ナルトに託された戦い…

ヒナタは、気を引き締めて、テマリの元へと向かった。

ナルトは、テマリの相手をしていた影分身を解く。

それと同時に、ヒナタがテマリの前に立ちふさがる。

「また、あんたか… さつきの戦いであたしらの決着は着いたと思うんだけどねえ…」

テマリの言葉に、

「そうですね… さつきの戦いは私の負けです… でも… 私は生きている… そして、今度は負けません…」

ヒナタは、自信に満ちた目をして、答える。

それは、先程の慢心した目とは明らかに違っていた。

「… 良いだろう… 今度こそ完膚無きまでに叩き潰してやるよ！」

テマリは気を引き締めながら、宣言する。

「行きますー！」

ヒナタが突っ込む…

「ちい… 『風遁 かまいたち！』」

テマリは先ほどと同様に術を使い、ヒナタから距離を取ろうとする。

ヒナタの瞳術によってかわされる事は織り込み済み。

それでも柔拳使いに接近戦を挑む事に比べれば、テマリに分があった。

予想通り、ヒナタは瞳術で移動してかわした。

本来、九尾の衣に守られたヒナタを傷付けるのは、容易では無いのだが、自分の力で戦いたいヒナタは、あくまでも自分の瞳術や体術を使いかわし続ける。

先程の戦いと違うのは、ヒナタが瞳術に頼りきった戦いをしていない所だ…

基本は体術でかわし、どうしても避けられないもののみ、瞳術を使い移動する。

「さっきも思ったけど… 一体… あんたは… なんなんだ… あんたの移動がまるで見えない… 何かの術か何かなのか？」

テマリは、少しずつ追い詰められているのを感じ、焦りの色を見せた。

「それを言う気はありません… そして… これで終わりです。」

ヒナタはテマリの身体を、自分の前にある石ころと入れ換えた。

ヒナタ自身… 気付いていなかったが、九尾の衣を纏ったヒナタの目は、輪廻眼となっていた。

通常では、今のヒナタにはまだ出来ない… 他者の身体を、自分の見たものに入れ換えること…

今のヒナタには、使用することが出来た…

そして、ヒナタは今なら使える… それだけは理解していたのだ。

「な!？」

突然目の前に現れたヒナタに驚くテマリ。

ヒナタが消えて目の前に現れる事は警戒していた…

だが、自分が移動させられる事など想定していなかったテマリは、硬直してしまう。

そして、柔拳使いであるヒナタの間合いに入ってしまった事に気付いた時には遅かった…

「しまったー！」

「私の勝ちです！」

ヒナタは、テマリの身体の一点を突く。

それは休止の点穴…

突かれた相手は強制的に、気絶させられてしまう…

相手を殺さず… 無力化させることが出来るため、ヒナタが真つ先に覚えた場所だ。何度も修練を重ね、その点穴を見切ることは100%の精度で出来るようになっていた。

休止の点穴をつかれたテマリは気を失ってしまった…

(ナルト君… 私… 勝ったよ！)

ヒナタは、心の底から喜んだ。
そして、最愛の男性の戦いを見守ろうと、その戦いに目を向けるの
だった。

人柱力VS人柱力

テマリとの戦いにヒナタを送り出したナルトは、我愛羅と対峙していた。

「ようやく本体のお出ましか…」

「俺の分身との戦いで、随分と消耗してるみてえだけど…大丈夫か？」

「当然だ…」

お互いに軽口を叩き合う二人…
そして…

「やるぞ… 守鶴…」

『おう… バカ狐に目にももの見せてやるぜい！』

「行くぞ… 九喇嘛…」

『ふん… まあ、相手は人柱力としてヒョッコの我愛羅と、尾獣で最弱の守鶴だ… せいぜい手加減するんだな？ナルト。』

互いに

内に住む尾獣に話しかける…

砂を纏い… 狸の様な姿となる我愛羅…

対してナルトは、九尾チャクラモードとなった。

仙術も… 六道の力も使わず、あくまでも対等な条件で我愛羅と戦うつもりなのだ。

「行くぞー！」

「来い！」

二人の戦いが始まった。

守鶴と和解し、今の状態になっても、冷静さを保つ事が出来るようになった我愛羅…

我愛羅は砂を巧みに使い、ナルトに攻撃を仕掛ける。

「よっ！ほっ！とりゃー！」

だが、それらはナルトによって難無く避けられてしまう。

「だったら…」

我愛羅は、避けられない広範囲の砂を直接ナルトにぶつけようとする

る。

「!?マズイってばよ...」

我愛羅の意図を察したナルトは、高速で我愛羅の元へと近付く。何故なら、砂を操る我愛羅とて、砂に生き埋めになれば助かりはしない。

我愛羅の術は、我愛羅のいる場所こそ最も安全な場所なのだ。

「速いー!」

ナルトの動きは、我愛羅が対戦したロック・リーを遥かに超えている。

守鶴が見せた記憶で、その速さは知ってはいたが、知っているのと実際に体感するのでは、雲泥の差があった。

「行くぞ!我愛羅... まずはこの攻撃に耐えて見せるってばよ...」

そう言ったナルトの右手には、既に術が発動していた...

『螺旋丸!!』

「くおっ!」

螺旋丸を腹部に受けて吹き飛ばす我愛羅...

我愛羅の身体は、何本もの木々を突き抜けてようやく止まる。

「くっ...これが螺旋丸か... 砂の鎧を纏ってなお、内部にこれほどの衝撃を与えるとはな...」

『大丈夫か?我愛羅...』

「ああ... 確かに予想以上のダメージを受けたが... まだ... 戦える...」

『へっ!上等だ... 今度はこっちの番だぜ...』

守鶴の激励を受けた我愛羅は、チャクラを練る。

そのままナルトに向かって猛スピードで突進した。

「正面から?いくらなんでも無謀だっばよ...」

真っ直ぐナルトに向かってきた我愛羅に、驚きを隠せないナルト。ナルトと我愛羅の自力の差は明白だ...

そんな相手に正面から来るとは思っていなかったのだ。

だが、当然我愛羅はそんなことは理解していた。

自身は囧...

本命は…

『多重砂手裏剣』

「!?」

ナルトの後ろに、大量の砂手裏剣が浮かんでいた。

一斉に襲いかかる砂の手裏剣。

「くっ！」

身構えるナルトだったが、その手裏剣は衣から飛び出した九本の尾によって全て弾かれてしまう。

『はっ！こんな策にひっかかるなんて情けねえぞナルト！』

それは九喇嘛が、チャクラを操作してナルトを守ったからだだった。

「言ってくれるな…」

憎まれ口を叩く九喇嘛に苦笑しつつも、我愛羅の作戦に舌を巻くナルト…

「なんなの…この二人…」

そんな戦いを見ていたサクラは、呆然と呟く…

ナルトの強さは知っていたが、我愛羅も下忍の域を遥かに超えた戦闘力を持っている…

そして、お互いそれを当然のものとして受け入れているように見えた…

そのまま、何度か小競り合いを続ける両者だったが…

「我愛羅…本気で来い…」

ナルトが、突然叫んだ。

「!?」

その意味を理解する我愛羅…

ナルトは、狸寝入りの術を使い…完全体の守鶴となる様に言っているのだ…

だが、我愛羅は戸惑っていた…

守鶴と和解しても、その力を現状使いこなせないと言った守鶴から断言されていた。

完全体になったとき、守鶴の意思に自分の憎悪が入り込み…以前のように暴走するのではないか…

気がついたら、ナルトや… テマリ… ここにいる全ての人間を殺してしまうのではないか…

それを心配していたのだ。

そんな我愛羅の心情を、ナルトは理解していた。

「俺を舐めるなよ？我愛羅…」

「ナルト？」

「お前が、全力で来ても俺の方が強えつてばよ… お前の全力… 必ず受け止めてやる… だから… 来い… 我愛羅。」

ナルトの言葉を聞いた我愛羅は…

「わかった…」

一言そう言うと、周りの砂を一気に取り込む…

そこに… 巨大な守鶴が姿を現した。

『狸寝入りの術』

強制的に眠る我愛羅。

守鶴の意識が表に出る。

我愛羅が危惧したような暴走は起こらなかった。

「何… あの化け物…」

サクラは、その姿に恐怖する。

「っ痛… ここは…」

と、その時サスケが目を覚ました。

「あ、サスケ君… 目を覚ましたのね？」

「サクラ？… ここは…!? そうだ… 俺はあの砂のやつと戦って… サクラ… アイツはどうなった？」

自分の状況を思い出したサスケは、我愛羅がどうなったか訊ねる。

サクラは、震える手である方向を指差す。

そこに目を向けたサスケは…

「な!?なんだ… あの化け物は…」

その巨大な身体を見て驚く。

「あれが、サスケ君の追っていた砂の忍よ？」

「バカな… あんなヤツに勝てるハズがない…」

その巨体に、戦意を失うサスケ…

しかしその目の先に、その化け物に対峙する人物がいた。

(ナルト?よせ... ナルト... いくらお前でも、あんなのに勝てるわけが無い...)

ナルトに逃げるように願うサスケ。

だが次の瞬間、その考えは吹き飛んでしまう。

「やるぞ... 九喇嘛!」

『おおー!』

ナルトは掌を合わせる...

すると次の瞬間ナルトの纏うチャクラの衣が、どんどん巨体化していく... やがて、そのチャクラは九本の尾を持った狐を型取る。

「さ... サスケ君... あれって... 教科書に載ってた... 木の葉を襲ったって言う九尾の妖狐... よね...」

サクラが震える声でサスケに聞いた。

「あ... ああ...」

サスケはその巨大な姿を見て唐突に理解した。

(ナルトが、木の葉の里の連中に疎まれていた理由はこれか!)

木の葉を襲った九尾は、封印された...

どこに... どうやって... 肝心な所が秘匿されていたが、ナルトという人間に封印されていたのだと...

(ナルトは、九尾の力を完全にコントロールしてやがる... アイツがあれほど強いのもこれなら領ける...)

サスケの目の前では、まるで怪獣対決の様相を呈した戦いが繰り広げられていた。

『風遁 練空弾』

巨大な風の礫が、ナルトを襲う。

ナルトは、後方に飛んでそれをかわした。

そして組み合う二体の獣...

今度はナルトが仕掛ける。

守鶴を、投げ飛ばしたのだ。

ドォーン!!!

そこは、木の葉の町の外れだった...

戦っている内に、森から出て町の方まで移動していたのだ。
いや… ナルトがそのように仕向けていた。

「な…なんだ…あの化け物は…」

突然現れた巨大な狸に驚く木の葉の住民たち…

只でさえ、木の葉崩しで大蛇丸が各地に口寄せした大蛇や音の忍と戦い疲弊していたのだ…

そこに、さらに巨大な化け物が姿を現した事に、戦意を失う。

だが、次の瞬間…その感情は恐怖に変わった。

かつて見た化け物が姿を現したのだ…

「あ、あれはまさか…九尾！」

「まさか…封印が解けたのか？」

「い…いやあああああああああああああ…」

「う、うわあああああああああああああ…」

パニックに陥る住民たち…

その時、起き上がった守鶴が口を開ける。

九尾もまた口を開けた。

『「尾獣玉！」』

お互いが放った尾獣玉は、しかし守鶴のものよりも、ナルトが使ったものの方が威力が大きいようで、少しずつ守鶴の方に押し込まれていった。

やがて…

『ぐおおおお…』

守鶴は、尾獣玉をもらにくらい、元いた森の方にまた、吹き飛んでいった。

守鶴を追って、町から離れていく九尾…

「た…助かった…」

「おい、誰か火影様に連絡しろ。化け狐が正体を現したって…」

「で、でもあの九尾…私たちを守ってくれたみたいよ？」

「何をバカな…あの九尾だぞ？」

「そ、そうだけど…」

「まあ…どちらにしても、九尾の封印が解けた事は報告しないと

な…」

その言葉に、とりあえず頷く一同だった。

一方、吹っ飛ばされた守鶴は…

『ぐ… バカ狐め… 相変わらざるのバカ力だぜ。』

『当然だ… アホ狸… お前とワシでは自力がまるで違うんだよ…』

九喇嘛が、守鶴を捕まえる。

それは尾獣化した姿ではなく、九喇嘛本来の姿。

『てめえ！バカ狐… ナルトはどうした…』

『悪いな… 守鶴… 俺たちの勝ちだつてばよ！』

守鶴の問い… それに答えたのは、我愛羅の本体の近くにいつの間にかいたナルトだった。

「起きやがれ！我愛羅…」

ナルトの拳骨が我愛羅の頭に突き刺さる…

「っ痛！」

その瞬間覚醒した我愛羅。

身体を保てなくなる守鶴…

「くっ…」

地面に着地した我愛羅… その首にはナルトの手に握られたクナイが突きつけられていた…

ナルトには、自分の砂の鎧を突破する術があるのだろう… そう考えた我愛羅は…

「俺の負けだな…」

素直に、負けを認めるのだった。

終結

「俺の負けだな…。」

素直に負けを認めた我愛羅…

それを確認したナルトは、我愛羅の首に向けていたクナイを納める。

「ナルト君…。」

その時、ナルトたちの元にテマリを背負ったヒナタが姿を見せた。

「テマリ!？」

全く動く気配を見せないテマリを心配する我愛羅。

「あ、大丈夫だよ？我愛羅君。休止の点穴を突いて気絶させたただけだから…。ただ…。今日一日は、目を覚まさないと思うけど。」

テマリを降ろしたヒナタは、慌てて、テマリの状態を説明する。

「そ…。そうなのか？…。すまない…。気を使わせたようだな…。それで…。」

「あ…。こうして話すのは初めてだよね…。」

「ああ…。どうやら、お前もナルトの事情を知る者のようだな…。」
「うん。」

頷くヒナタ。

「我愛羅には、改めて紹介しておく。この子は日向ヒナタ…。そして、俺の未来の嫁さんだ。」

そのヒナタの肩に手を乗せたナルトが、後を続ける。

「ナ、ナルト君…。」

その説明に真っ赤になって俯くヒナタ。

実際、この歳でそんな紹介をされたら恥ずかしいだろう…

だが、未来の記憶を見ている我愛羅は、特に気にした様子は無い。

せいぜい、そう言えば…。と思いつく程度だった。

「お前の計画に、この女は噛んでいるのか?。」

「勿論だってばよ。むしろ、俺にとってはヒナタの為の計画だからな。」

「そうか…。」

その時……

「我愛羅…… テマリ…… 大丈夫か！」

カンクロウが猛スピードで駆けつけると、我愛羅とテマリを庇うように後ろにやった。

「カンクロウ…… もう戦いは終わりだ…… テマリも気を失っているだけで無事だ。」

「え？そ、そうなのか？」

ナルトとヒナタを見るカンクロウ……

ナルト達から敵意は伝わって来なかった……

「フウ…… 無事で良かったじゃん……」

ようやく落ち着いたカンクロウ。

「カンクロウ…… テマリを背負ってくれ。」

「あ、ああ…… でも、そんな隙を見せたら、コイツらが襲ってくるかも知れないじゃん？」

まだ、ナルト達を信用していないカンクロウは、警戒するように言った。

「コイツらが、その気ならとづくに俺たちは死んでいるさ…… 俺はナルトに完敗したし、テマリにしても、いつでも殺すチャンスはあったのだからな……」

「まさか！」

てつきり、我愛羅が力を見せて場を収めたとばかり思っていたカンクロウは、盛大に驚いた。

我愛羅は、そんなカンクロウを華麗にスルーすると、ナルトに向き直り告げる。

「ナルト…… 俺たちは、一度砂に戻る。これからの事をカンクロウやテマリと相談してみるつもりだ。」

ナルトは、我愛羅の言葉に頷くと、

「わかった…… じっくり話して…… ちゃんと方針を決めたら、守鶴を通して連絡してくれ。今の俺なら、守鶴を通して会話ができるからな。」

そう言って、我愛羅の意思を尊重した。

「ああ…その時は頼む。カンクロウ…いつまで呆けている…行くぞ?」

「ちよつ…待つじゃん?これでも、俺…結構あちこちガタが来てるんだって…」

「急がねば、他の木の葉の連中が来るかも知れないんだ…もたもたしてる暇はない。ナルトは見逃してくれても、他の木の葉の連中が見逃してくれる保証など無いんだぞ?」

「わ、わかつてるじゃん…」

我愛羅の言葉に押され渋々頷くカンクロウはテマリを背負う。

それを見た我愛羅は、先に立って走り出した。

遠ざかる我愛羅たち…

「ナルト…」

それと、入れ替わるようにサクラと、サクラに肩を貸されながらサスケが近づいてくる。

「よお。サスケ…無事で良かったってばよ…」

「…まあ…」

ナルトの言葉に一瞬悔しそうな表情を見せるサスケ。

ゲンマに言われて我愛羅を追ったサスケ。

しかし、結局自分の力では我愛羅には敵わず、ナルトに全てを任せることになった…

いつまで経っても、自分はナルトには追い付けないのか…

これでは、イタチを超える事など…

そんな暗い感情がサスケを支配する。

だが、その考えを振り払うサスケ。

今は、他に聞くべきことがある…

「ナルト…お前は…お前の身体には、九尾が封印されているんだな?」

「…ああ…」

「ナルト…その…大丈夫なのよね?…ナルトは木の葉を襲ったりしないわよね?」

サクラは、震えている…

ナルトが… 正確にはナルトの中の九尾が恐ろしかったのだ。
あんな巨大な狐が、自分たちに牙を向けたら、一溜まりもないだろう事は、想像に難くない。

「サクラ… ナルトはそんな事しないだろ… やるならとつくにやってるハズだ。木の葉がナルトにしてきたことを思えば… な… これが理由だったんだな。」

「ああ… そうだってばよ…」

そして、ナルトは語り出す。

教科書には載らない… 木の葉隠れの里が秘匿した事件の全容を…

突如、現れた九尾…

しかし、それはもともと木の葉が所有していた尾獣であった。

その人柱力たるナルトの母… うずまきクシナは、出産の折り封印が弱まってしまう。

そこを突かれて、うちはマダラを名乗る仮面の男がクシナから九尾を解放… そして操り、里を襲わせた…

うずまきクシナの伴侶… つまり、ナルトの父親である四代目火影… 波風ミナトは、ナルトを庇い命を落とす寸前に、九尾を半分に分けその半分を生まれたばかりのナルトに封印した…

ヒナタは、六道仙人から全てを見せて貰っていたため、驚きこそ無いが悲しかった。

ナルトを命懸けで救いながらも、ナルトに過酷な運命を背負わせたミナト…

他にやり方は無かったのかと、どうしても思ってしまう。

サクラは、ナルトが四代目の息子であることに驚いたが、ナルトが生まれてすぐに両親を亡くしている事に今更ながらに気付き、涙を流す。

自分は、なんて心無い言葉をナルトに言ってきたのだろう… 後悔していた。

「… そこだけ聞くと、お前が疎まれる理由が無いように思えるんだが…」

サスケはナルトが迫害を受ける理由がイマイチ理解出来なかった…

今話を聞く限り、ナルトが迫害される理由が思い付かなかった…

むしろ里のために自らの身体を提供した、ある意味人身御供のような真似をしているのだ…

普通であれば、ナルトが称賛される事はあっても、迫害されるはずが無かった…

「そこは、俺にもわかんねえつてばよ… 憶測で良いなら… 一度封印が解けた事で、また封印が解けて自分達を襲うんじゃないかと、疑心暗鬼になったとか考えられる事はあるんだけど… 多分、里の上層部の方で俺と九喇嘛… 九尾を同一視するような情報を流してたんじゃねえかって思うんだつてばよ。なにしろ、里の人達は俺を見て化け物とか、化け狐とか言つてたからな…」

「な… なんでそんな事するのよ！」

ナルトの言葉に驚くサクラ…

「さあな… まあ、これも幾つか考えられる事はあるけども… 結局全て憶測だつてばよ… 重要なのは、里の人間が俺を疎んでるって事だけだ…」

「あ… でも、今回火影様を助けたんだし、里も救ったんだから、ナルトを見る目も変わるんじゃない？」

サクラは、楽観的にそう言うが、

「さて… どうだろうな…」

ナルトは、そう言つて試験場の方に顔を向ける。

「とりあえず戻るつてばよ… なんにしても任務の報告をしなきゃならねえし…」

「?… う、うん…」

いまいち、腑に落ちない顔をしながらも、言つてゐることは正論なので頷くサクラ…

ナルトは、ヒナタ、サクラ、サスケを伴つて試験場に向かった。

ザワ… ザワ… ザワ…

「試験場は、未だ騒然としていた…」

しかし…

「!?」

ナルトが試験場に入ると、静寂が辺りを支配する…

辺りを見渡すと、シカマルを発見するナルト。

アスマが、連れ帰っていたようだ…

「おお… よく戻ったのお… ナルト。」

そんな中、ヒルゼンがナルトを、歓迎した。

「じいちゃん… これで木の葉崩しは全て終結したってばよ。」

「おお… そうか… ナルト… よくやったのお。」

ヒルゼンはナルトを手放しに褒める。

「……………」

ナルトの反応は無かった。

ヒルゼンは、構わずに続ける。

次に、ヒルゼンは会場の全てに聞こえるように大声で、

「木の葉隠れの下忍… うずまきナルト… この大事件を収め、ワシを救出ならびに里を救った功績を称え、お前を表彰したいと思う。」

そう宣言するのだった。

『新たな歴史編』 式典

大蛇丸の木の葉崩しから、数日が経った。

ヒルゼンは、木の葉崩しの被害の報告書で埋まった机を見て溜め息をつきながら、今後の事について考えていた。

あの時、ナルトを表彰することを決めたヒルゼン。

それは、ナルトを木の葉に繋ぎ止める為に考えた策であった。

今回の木の葉崩しの阻止に際し、ナルトの活躍が多大な貢献をしていた事は周知の事実である。

火影たる自分の救出…

そして、砂の尾獣を止め、その戦いにおいて木の葉の人々を守った…

それは、その戦いを目撃した里人からの報告で明らかになっていく。

ナルトは、未来から逆行してきたのだ。

あの時、砂隠れの里が保有する尾獣が木の葉で暴れる事を知っていたのだろう。

火影を救い、里を救った…

まさに英雄と呼ぶに相応しい功績を残したのだ。

ヒルゼンは、この活躍を全ての木の葉の人々に伝え、ナルトへの悪感情を改善しようと考えた…

そのため、表彰は式典として後日行うこととした。

しかし、その後、木の葉崩しの予想以上の被害により、復興の為に予算決め等でもたつき、日取りを決められない内に行わなければ、インパクトを残せない。

ナルトの為に、出来るだけ早く実行する必要があった。

急ピッチで仕事を進め、そのおかげでようやく目処が立った。

一週間後に式典を行うことを決めたヒルゼン。

しかし、ナルトを表彰する事は、里の上役たちは最後まで反対していた。

ナルトを貶めてきたのは、里の上層部である。

もし、ナルトを表彰し…その事が明るみに出たら…

そうでなくとも、英雄となったナルトが、自分達に反旗を翻してきたら…

そうなれば、木の葉が内部分裂を起こしかねない。

そう主張してきたが、今回ばかりはヒルゼンは強硬だった。

今回の事件でナルトの重要性を再確認したヒルゼンは、里のために、なんとしてもナルトを木の葉に繋ぎ止めなければならないと改めて認識した。

何よりも、ヒルゼン自身…ナルトを救いたいと心から願っていた。

「思えば不憫な子じゃった…」

ヒルゼンは、当時の事を思い出していた。

木の葉を襲った九尾の妖狐…

ミナトは、命どころか己の魂すら糧としてナルトに九尾を封印した。

ヒルゼンは、これを公表しナルトを里の英雄として敬うよう通達するつもりだった。

これを止めたのは、ダンゾウを始め木の葉の上役たちだった。

「なぜじゃ！ナルトは生まれながらに両親を失い、その身体に九尾を封印させられた…里のためにその身体を人柱として使われたのだぞ？それは、称えられるべき事じゃ！」

「わからぬのか？ヒルゼン…今回の件で里の犠牲者はかなりの数に上る。遺族の九尾に対する憎しみは相当のものだ…」

「だからなんじゃ？」

声を荒げるヒルゼン。

「もし、ナルトに九尾が封印されている事が知られてみよ？遺族の中から復讐を考えて、ナルトを殺そうとする者が出てきても不思議では

ない。」

「むっ……」

「ましてや、人柱力が殺されたとき、中の尾獣の封印が解けて、再び暴れる可能性とてあるのだ……」

「ならば、どうしろと言おうのじゃ……」

「里の者たちには、ナルトは九尾の生まれ変わりだと、噂を流す。」

「なんじゃとー!」

ダンゾウの提案に驚くヒルゼン。

「四代目は、命を賭して九尾の力を封印し、赤子へと転生させた……木の葉はこれを保護し、監視することにした……とな……」

「それでは、ますますナルトに、憎しみが集まるではないか!」

「それが、狙いの一つだ。今回の件……本来ならワシら木の葉の上層部の落ち度を責められても仕方無い失態だった。九尾の封印を解かれた上に、多くの犠牲者を出した……しかし、ワシらは責められてはおらん……何故だかわかるか?」

「………。」

ヒルゼンには答えられなかった。

「それはな……全ての憎しみを九尾が背負ってくれたからよ……木の葉を存続させるためにも、ワシらの権威を失墜させる訳にはイカン。それはそのまま内戦に発展しかねない程の問題になりかねんからな……」

「しかし……ならばナルトはどうするのじゃ……ダンゾウ……お主が言った通り、木の葉にとって九尾は必要な抑止力……失うわけにはいかんのだぞ?」

ダンゾウの説明に、納得せざるを得ないヒルゼンだったが、ナルトの命は救わねばと、食い下がる。

「うむ……それはもう一つ情報を流せば良かろう……ナルトを害した場合、封印が解かれて九尾が再び里を襲うことになる……とな。こうすればナルトを襲うものは、そうは現れんだろうて……今回の憎しみは九尾に集め、九尾を守ることにもなる……そして、ワシらの権威を守り、里を守るためでもある……三代目……お主が情に厚いことは

重々理解しているが、今回は納得して貰おう…。」

「くっ！…それしか無いのか…。」

「実際には、ナルトにも護衛と監視は付ける。何かあればナルトを守るように指示は出す。それで、納得しろ…ヒルゼン。」

「……………わかった…。」

それから、ヒルゼンはナルトの事を出来るだけ気にかけて来た。

ミナトへの負い目…そしてナルト自身への負い目もあったが、何よりも里のために憎まれ役をさせねばならなくなった自分の、ナルトへの懺悔の念あった。

ナルトが木の葉で、過酷な目に遭っていることを知って心を痛めた…。

何も出来ない自分が歯痒かった…。

未来から、逆行してきたと言うナルトの話聞いたときは、心底絶望した。

挫けず、火影になったナルトを待っていたのは、自分が残した業による悲劇…。

ナルトの自分を見る目が恐ろしく冷たいのも、受け入れるしか無かった。

しかし、今回…ようやくナルトの環境を改善する機会が巡ってきたのだ。

・
・
・

「ようやくじゃ…ナルト…これでお前を救ってやれる…。」

ヒルゼンは、式典までに仕事を片付けなければと、再び机に向かうのだった。

そして一週間後…

式典には、多くの人間が集まった。

ただし、集まったのは事情をよく知らない一般人がほとんどである。

今回の事件を解決した立役者を表彰する…

その、情報だけで集まった者たちだった。

それは、ナルトを表彰すると発表しても、誰も集まらないだろうと考えたヒルゼンが敢えて、表彰する人間を伏せた為だ。

そして、式典は始まった。

今回の趣旨を説明し終えたヒルゼンは、改めてナルトを壇上へと招き、紹介する。

「今回…大蛇丸から木の葉を救った、我が里の下忍…うずまきナルトじゃ…」

ザワツ…!?

登壇したナルトを見た観衆は、一斉にざわめき出す。

ヒルゼンは、構わずに続ける。

「ナルト…お主は、今回の戦争で多大な活躍をしてのけた…ワシを救い、人々を救った…お主の活躍はまさに、英雄と呼ぶにふさわしいものじゃろう…よって、ここにお主を称え表彰するものとする。」

ヒルゼンの宣言…

しかし、そこに歓声が上がる事は無かった…

静寂が辺りを支配する中、

「ナルト…お主の活躍に対し、三代目火影の名の元に、お主を木の葉隠れの里の中忍に任命する…本当は上忍にしてやりたいのじゃが…上役の連中が納得せんでのお…代わりに他に褒美を取らそうと思う。何か願いはあるか？可能な範囲で叶えようと思う。」

「またも、ざわめきが大きくなる…」

そんな中、ナルトが口を開いた。

「じゃあ、一つ…俺を木の葉の里から抜けさせて欲しいってばよ…」

宣言

ナルトの宣言から少し前のこと…

ヒルゼンが、ナルトの功績を一つ一つ観衆に伝えるのを横目に見ながら、ナルトはシカマルの授けてくれた策について思い返していた…

(まさか、ここまで想定通りに事が進むなんてな… 本当… シカマルの頭の中はどうなってるんだってばよ…)

ナルトが、シカマルに自分の事を打ち明け、今後の行動について相談した時のこと…

「はあ… まあ、ここから出るなんて軽はずみな事を言っちゃまったのは俺だから、協力はするけどよ…」

「サンキュー… シカマル。」

「とりあえず、お前の経験した出来事をわかる範囲で、時系列に合わせて教えてくれ。」

「え？そりや良いけど… ただ、俺ってば… あまり昔のことは覚えてねえってばよ？」

「わかる範囲でいいって。何も、お前にそこまで求めてねえからよ…」

「…………… それはそれで傷つくってばよ…」

「いいから、早く教えろ…」

「りよ… 了解…」

ナルトは、所々九喇嘛に確認しながら、あつた出来事を話す。

オビトによる九尾暴走事件から始まり、アカデミー卒業の経緯、波の国での出来事、中忍試験、木の葉崩し、綱手搜索、そしてサスケの里抜け…

時々、シカマルが質問をするためそれだけで、一日を要した。

二日目も、ナルトの話は続く。

自来也に正式に弟子入した二年半に渡る修行…

暁の胎動… 風影となった我愛羅の誘拐… この救出任務。

サイを班に加えてのサスケの奪還任務。

アスマの死…

ペインによる木の葉襲撃。

ビーとの尾獣チャクラコントロールの為の修行。

そして、第四次忍界大戦。

六道仙人との邂逅。

カグヤを封印し、平和が訪れた。

トネリによるハナビ、ヒナタの誘拐や、モモシキの襲来など、その後世界を脅かすような事件は何度もあったが、ナルトたちは協力してこれを退ける。

そして…

「…改めて聞くと…とんでもなく濃い人生送ってるのな…お前…」

ナルトの説明を聞いて若干引き気味のシカマル。

「そんな濃い俺の補佐をしてくれたのがシカマルだったんだってだよ。」

ナルトは意に介さず反撃する。

「ハア…未来の俺は、なんでそんな面倒臭い事引き受けちまったんだろうな…」

当たり障りの無い人生を送ることが目標の、今のシカマルには考えられなかった…

「お前が良いヤツだからだろうな。今も、こうやって何だかんだと言いながらも協力してくれてる…」

ナルトは、当然の事のように言った。

「…真顔でそういう事を言うな。」

その言葉に照れるシカマル。

(きつと…お前がそういうヤツだから、未来の俺も協力しなくなっただろうな…)

どこか、納得するシカマルだった。

それから…

「……………」

改めて全てを聞き終えたシカマルは、暫くの間沈黙し、考える。そして目を開けた。

「どうだ？シカマル…。」

「まあ、待って。一応考えてみたけどよ…事は、お前らの将来に関わる重要な事だ。もう少し煮詰めてから説明する。」

シカマルは、そう言うのと立ち上がり帰っていった。

翌日…

「さて、昨日の続きだ。」

シカマルの言葉に頷くナルト。

「まず、お前の最初の目的は木の葉を抜けること…これは良いな？」
「ああ。」

「だが、里抜けってのはもちろん重罪だ。追いつ忍はもちろん、手配書も発行されて賞金稼ぎにも対応しなきゃならねえ。さらにだ…。」

「お前…って言うか人柱力ってのは木の葉の重要な戦力だ…当然、お前の里抜けは他のヤツよりも遥かにハードルが高い。」

「サスケが里抜けしても無事だったのは、大蛇丸の存在と音隠れの里が、巧妙に隠していたからだな。」

「……………」

シカマルの説明は、理路整然としている。

反論のしようもなく、沈黙するナルト。

しかし、シカマルはそれを踏まえた上で、ナルトが里を抜けるための道を用意していた。

「それでだ、お前が比較的に安全に里を抜けられるタイミングは二つある。一つは、サスケの里抜けに便乗すること…大蛇丸に力を見せれば、簡単に受け入れてくれそうだしな…恐らく一番安全な里抜けだろう。」

シカマルの提案にしかしナルトは、

「それは…あまりやりたくねえな…出来るなら今回は、サスケに里抜けさせたくねえんだってよ…。」

そう言っって首を振った。

(未来ではサスケは家族を省みずに、贖罪を続けてたし、サクラちゃんやサラダも寂しがってたしな...))

ナルトから否定を受けたシカマルだったが、それは予想できた。ナルトは底抜けのお人好しだ。

サスケを救いたいと考えるのは目に見えていた。

そんなお人好しにすら見捨てられる木の葉を憐れに思いながら、もう一つの案を話し始める。

「なら、もう一つ... 木の葉崩しを利用する。」

「それは？」

「お前はアカデミーでは、落ちこぼれで通ってる... 内外通してな。」

「ああ...」

「そんなお前がある日突然、火影様すら凌ぐ程の力を見せつける... さで... お前を迫害してきた里の人間たちはどう思うだろうな...」

「つまり、木の葉崩しで俺の全力を見せるってことか？」

「そうだ... 火影様すら殺した大蛇丸... これを退ける... それと、できれば同時に砂の尾獣との戦いも里の人間に目撃させたいんだが... 出来るか？」

「.....」

少し考えるナルト。九喇嘛とも相談して可能だと伝える。

「よし。それで... 木の葉崩しで活躍したお前を、火影様はどうするか... お前に聞いた火影様の性格を考えれば、これを機に里の人たちの... お前に対する感情を改善させようと、お前の功績をなんらかの手段で大々的に発表すると思う。一番簡単なのはみんなの前で表彰する事だな...」

「功績には褒美を与えるのが常識だ。そこで、褒美の代わりに宣言するんだ。」

ヒルゼンが、シカマルの予想通りに褒美を与えたいと言ってきた。

ナルトは、シカマルの言った通りにヒルゼンに向けて... いや木の葉に向けて宣言した。

「じゃあ、一つ... 俺を木の葉の里から抜けさせて欲しいってばよ...」

ナルトの予想外の言葉に固まるヒルゼン。

だが、すぐに再起動すると顔を赤くして怒鳴る。

「な、何を言っておる。こんな日出度い場で、そんな事を言うとは……イタズラが過ぎるぞ。ナルト。」

ヒルゼンが、これを否定することはナルトでも予想できた。

だから、シカマルに質問した。

「でも、そんなこととしても、じいちゃんは拒否するんじゃないか？」

しかし、シカマルは苦笑しながらそれを否定する。

「その時には、もう手遅れだな。」

――何故なら――

「三代目……里の連中の目を見てみるってばよ……」

「なんじゃと？」

言われるまま、木の葉の人々に目を向けるヒルゼンは、その目をみて絶句する。

恐怖、憎悪、猜疑心……ナルトを称賛する人間は、その場にはほとんどいなかった。

「な、何故じゃ……」

ヒルゼンが考えたように、ナルトを称賛する顔は見当たらない……

「俺が……力を見せたからだってばよ……」

「しかし、お前はその力で里を守ったではないか……」

「それが……木の葉がやって来たことの結果だってばよ。木の葉は俺を得体の知れない化け物として扱ってきただろ？」

「信用があるからこそ力を持っていても怖がられないんだ……例えばじいちゃんが、この力を持っていても誰も怖がったりしないだろうけどな……でも、俺の場合はそうじゃねえ。何しろ俺は『化け狐』だからな……」

「……ナルト……ワシは……」

ヒルゼンは、今更ながらにようやく、里の人間の感情を理解した。

強者であるが故に、力を持たぬ者たちの気持ちを理解できなかったのだ。

もう、何をしてもナルトに対する里の人間の感情が上向く事はな

い…

(上役たちは、理解しておったのだな… じゃからあれほど反対したのじゃろう…)

それを理解したヒルゼンは、

「少し… 時間をくれ… こんな事をワシ一人で決めることは出来ぬのでな…」

力なく、ナルトにそう言うのだった。

それを見たナルトは、もう一つ付け加える。

「それとじいちゃん… 契約の三つ目の願いで、日向ヒナタと一緒に連れていくから、それも伝えてくれってばよ…」

「なんじゃとー!」

それを聞き驚くヒルゼンだったが、未来で夫婦だったと言っていた事を思い出し、ヒナタが了承するならばと条件を付けた上で、それも含めて相談すると伝えた。

うやむやのまま式典は閉幕した。

ヒルゼンは緊急に上層部を招集して会議を開くことを決めたのだった。

緊急会議

「だから、あれほど止めたんじゃ！」

「この責任、どうとるつもりなんじゃ！ヒルゼン…。」

ヒルゼンが、緊急に木の葉の上層部を招集して開いた会議…

だが、その会議はヒルゼンを糾弾する席となっていた…

当然だろう…なにしろ今回、上役たちの制止を聞かずに式典を開いたヒルゼン。

その結果、ナルトは多くの人間がいる前で里を抜ける事を宣言する事になってしまった。

ヒルゼンは、その相談のため会議を開いたが、一向に話は進まない。

ヒルゼン自身、自分の撒いた種であるため、立場が弱く、今は糾弾を受け入れるしかなかった…

「ヒルゼンを責めるのはここまでにしよう。今は、早急にナルトについてどうするか決めねばならん。」

そんな中、今までヒルゼンを糾弾する他の上役たちを静観していた、ご意見番であるホムラが、口を開いた。

「しかし…。」

「三代目を責めた所でなんら状況は変わらん。それとも、お主に何か良い案でもあるのか？」

「それは…。」

流石にご意見番と称されるだけあり、その言葉は上役たちを黙らせる程に重かった。

「ただし…今回、ヒルゼンの失態が明らかなのも事実じゃ。ヒルゼンには追ってなにがしか責任は取ってもらう。今はこれで納得してもらおうか？」

「はい…。」

ヒルゼンにも責任を取らせるとの言葉で、ようやく落ち着く上役たちは会議を開始した。

進行役は、ご意見番のホムラだ。

「まず、ナルトの要求だが…ナルトが里を抜けること…これに関

しては要求を飲まざるをえないじやろう…。」

「な… なぜですか… ナルト… いや尾獣の力を持つ人柱力は他里に対する武力としての抑止力となつているのですよ？それを手放すなど… 正気とは思えません。」

当然、否定する者が現れる。

「ワシら上層部の人間にとつてはそうじやな… しかし、ワシらは木の葉の里の者たちにナルトを化け物とする噂を流してきた… 一般の者たちにとつて、ナルトは得体の知れない化け物なのだ…。」

「そしてマズイ事に、その木の葉の里の者たちにナルトの力が明るみになった。もはや里の者たちにとつてナルトは脅威以外の何者でもあるまい…。」

「……………」

ホムラの言葉に沈黙する上役。

「そんなナルトが自ら里を抜けてくれる… これを歓迎する者はいても、止めるものはほとんどおらんだろう… そんな中でワシら里の上層部がナルトの里抜けを認めなんたらどうなると思う？」

「住民が一斉蜂起してのクーデターに発展しかねん… それだけはなんとしても回避しなければならんのじや… わかるな？」

「…………… はい……………」

頭を垂れて頷く上役…

現状を一つ一つ説明され、ヒルゼンへの怒りから思考が鈍っていた上役も、現状がいかにマズイ状況なのかようやく理解する。

「ナルトの放逐は決定じや。ワシらが考えねばならんのは、その後じや。」

「後… と言うのは？」

「今回… 公式の式典と言うことで不特定多数の人間が集まつていた… つまり… 他里のスパイも当然あの場におつたことだろう。」

皆、その言葉を聞いて一斉に顔を青くする。

「そんな中でヒルゼンはナルトの活躍を発表した… 恐らく、ナルト⇨人柱力と勘付かれたじやろう… 五里に平等に振り分けられた人柱力がいなくなる… と言うことは、お主が言った通り、他里に対す

る抑止力を失うと言うこと… 同盟国との外交面… 貿易面… として依頼… 多くの面でかなりの不利益を被る覚悟をしておいた方が良いじやろう。」

「うむ… なるべく被害を最小限に留め置く必要がある。まずは、大蛇丸に唆されたとはいえ、実際に侵略してきた砂との同盟を強化すべきじやな…」

会議は、既にナルトの里抜け後の話し合いになり始めていた。

しかし、もう一つ決めなくてはならないことがある。

「その前に、ナルトの要求のもう一つの方はどうする？」

恐る恐るヒルゼンが口にする。

「？」

皆、何を言っているのかわからないと言った顔をした。

「日向ヒナタのことじゃ。」

言われてようやく思い出す。

「ああ… そのことか…」

「まあ、本人が納得しておるなら良いのではないか？」

「そうじやな… 白眼の秘密を探ると言うのならともかく、ただ嫁としてっただけなのだし… むろん、分家同様に呪印を施す必要はあるだろうが…」

「ナルトは、日向ヒナタを大切に思っているのだし、乱暴な事はせんじやろ。」

本来、木の葉にとって、日向の名家… 白眼を持つヒナタの優先度はそれなりに高い。

しかし、ナルトの目的が、白眼ではなくヒナタそのものにある以上、然程重要な事柄に思えないのだ。

当事者を除いて…

「な!? 上役方… その言い方はあんまりではありませんか！」

ヒナタの父であるヒアシである。

今回のナルトの要求が、ヒナタの事に絡むため、ヒアシも召集されていたのだ。

「しかし、お前も娘のヒナタには冷たく当たっていると聞いているぞ

？」

「しかり… 紅が挨拶に行つた折りも、どうなろうと知らんと言つたそうじゃないか。」

「それとこれとは違ひましょう… ナルトの厄介払いのために、ヒナタをやる… これではまるで生け贄ではありませんか！」

ヒアシは、食い下がる。

確かに才能が無く、妹のハナビにすら劣るヒナタを忍としては見限つていた。

しかし、だからと言つて娘としての愛情が無いわけでも無いのだ。辛く当たつていたのも、自らを奮奮させ強くなつて貰いたいとの考えから…

ようやく、ネジと和解したと言うのに、今度は娘がいなくなる…

日向家とは、やはり呪われた一族なのか…

ヒアシは、悲嘆にくれる。

「ヒアシよ…」

そんな中、ヒルゼンがヒアシに声をかける。

「ナルトには、ヒナタが了承するなら連れていって良いと言つてある。お主が説得し、ヒナタを留められるならば、ナルトが強引にヒナタを連れていくことは無いハズじゃ。」

「それは… 本当ですか？三代目…」

ヒルゼンの言葉に光明を見出したヒアシは、急ぎ家へと戻る事にした。

扉を出ていくヒアシを見送つた木の葉の上層部たちは、再び会議を再開する。

その会議は、夜遅くまで続けられるのだった。

そして、この日…

ナルトの里抜けのきつかけを作ってしまったヒルゼンは、責任を取つて火影を辞任する事になる。

また、次の火影の候補として自来也の名前が挙がるのであった。

父と娘と

足早に家に戻ったヒアシは、ヒナタを呼び出していた。

「お呼びでしょうか… 父上。」

そこにヒナタが現れた。相変わらず親しみの籠らない声音である。ナルトとの修行でのやりとりから、ヒナタとの関係は冷え込んでいた…

「うむ… 此度のナルトの宣言はお前の耳にも入っているよう…」

「はい。」

ヒアシの言葉に頷くヒナタ。

「ナルトは、里を抜けるに当たり、お前を連れて行く事を要求している… これについてお前はどうか考えているのか聞かせてくれ。」

「とても、嬉しく思っておりますが？」

特に悩むこともなく、答えるヒナタ。

当然だ… もうずっと前から決めていたのだから…

「な!? 正気かヒナタ。ナルトの言う通りにするという事は、お前も木の葉を抜けねばならんのだぞ？」

「それが何か? 別に構わないと思うのですが? 日向の跡目はハナビが継ぐのですし…」

「それとこれとは話が違う!」

自分の思いが伝わらない… その苛立ちから声を荒げるヒアシ。

だが、それではとても説得などできない…

ヒアシは、深呼吸をして心を落ち着かせると、ヒナタを諭そうと木の葉を出るデメリットを話し始めた。

「良いかヒナタ… 里を抜けるという事は、里の庇護を受ける事が出来ないということだ。白眼を持つお前は、他里の忍に只でさえ狙われやすい。これまで無事でいられたのは、お前が木の葉の庇護下にあっただけなのだぞ？」

「…………… 父上…………… それは、もしかして私を心配なさっているのですか？」

「なっ! ……」

ヒナタの痛烈な返しに思わず絶句するヒアシ……

だが、すぐ後に顔を真っ赤にして怒り出す。

「当たり前だ！子供を心配しない親がどこにいますと言うのだ！」

「確か父上は、紅先生が挨拶に来たとき、五つも年下のハナビにすら負ける出来損ないなど……この日向にはいらぬ……と仰っていたハズですか？」

「そ、それは……」

思わず言葉に詰まるヒアシ……

「父上にとって、私は日向の跡目になれるかどうか……それ以外興味が無かったのでしょうか？現に、それ以降私に干渉してきたのは、ナルト君と修行することを止めようとしたあの時だけ……それも私の為ではなく、日向の家の名に傷が付くという理由で……」

「……」

ヒアシは呆然としていた。

目の前のこの少女は本当にあのヒナタなのか……

ヒアシにとってヒナタとは、人の顔色ばかり気にし、優しすぎるが故に争いを好まず、臆病で、常に一歩下がって何かの影に隠れようとする……そんな人物だった。

それがどうだ……

目の前のヒナタは、自分の意思をはっきりと告げ、怒鳴る自分にも怯える様子はなく、それどころか皮肉まで言ってくる。

「確かに、父としてお前に辛く当たってきた事は認めよう……しかし聞いて欲しい。私は決してお前を愛していなかった訳ではないのだ。」

「……」

「さっきも言ったが、日向の者はその特異な力を持つが故に、常に外敵から狙われる。だから、自分を守る様、最低限の強さが必要なのだ……お前に辛く当たっていたのは、このまま弱いままではいずれ、お前が危険な目に遭うと考えての事……決して本心では無いのだ。」

ヒアシは、結局全てを話す事にした。

そうしなければ、娘との確執は決定的な物になる……そう感じたか

らだ。

「父上… 私も、父上が私を愛していなかったなんて言うつもりはありません。ですが… それよりも日向家の存続が何よりも優先だった… そう思っています。」

「なっ!? そんなことは…。」

「無いとでも? それなら、なぜ今の私を見て動揺されるのですか?」

ヒアシの言葉を遮り、ヒナタが強い口調で告げる。

「私の変化を… 成長を… 見ていなかったからじゃ無いんですか? 父上の中で… 私はハナビに負けたあの時のまま… 時間が止まっているではありませんか?」

「……………」

そんなことはない… ヒアシは、そう否定したかったが何故か言葉が出て来なかった。

「もう、何もありませんか? では失礼します。」

ヒナタが席を立とうとする…

「待ちなさい! ヒナタ。」

呼び止めるヒアシ。

もう言葉では止められない… だからヒアシは、

「そこまで言うのなら、私にお前の力を見せてみなさい。」

ヒナタに向かい、そう言った。

「……………」

「詳しくは話せんが、ナルトはお前以上に他里の忍から狙われる存在だ。生半可な実力ではナルトには着いていくことは叶わんだろう。」

ヒナタは、一度瞑目する。

そして目を開くと、

「わかりました… それで父上が納得すると言うのなら… 私の力… 覚悟を見てください。」

決意を込めた瞳でヒアシを見る。

「…………… 着いてきなさい…。」

ヒアシは、ヒナタの決意に何を思ったのか…

特に返すことは無く、ただそれだけを言うと言ったと稽古場へと向かった。

稽古場にて対峙する二人。

「さつきも言ったが、里を抜けた時から、ナルトは多くの忍に狙われるだろう。ナルトの力は知っているが… その時、お前が足枷となるのではないか？」

「そんなことは、父上に言われるまでも無くわかっています。その時… きつとナルト君は、命懸けで私を守ろうとすることも… 今の私が、ナルト君の足手まといであることも理解しています。それでも… ナルト君は私が必要だと言ってくれました…」

「だから、私は強くなりたい… ナルト君の隣で… 一緒に歩んで行きたいから… でも、今はその力が無い。ならせめて、自分の身を守る程度の力は付けたい。その思いで、これまで努力してきました。」

ヒナタの独白を静かに聞き入るヒアシ。

「ならば、かかってきなさいお前の決意を… 努力を… その力を… 私に見せてみなさい。」

互いに白眼を発動させて構える。

「行きますー！」

ヒナタが前に出る。

（確かに、私の力は上がっている… それでも、地力はまだ父上が遥かに上。正面からいけば返り討ちに合うだけ… だったら…）

ヒナタが、攻撃を繰り出す。

しかし、ヒアシはそれを簡単に受け流してしまう。

だが、ヒナタはそうなることを見越していた。

受け流され、しかしそのまま流れに乗って距離を取り、腰のホルスターから手裏剣を取り出し、ヒアシに向かって投擲した。

「むっ！」

この攻撃に驚くヒアシだったが、すんでの所で全て叩き伏せる。

「流石ですね… 父上…」

「お前こそ… まさか、手裏剣を使用してくるとはな… 以前のお前なら、これが訓練の体術勝負と考えて、体術一辺倒だっただろう。」

「忍者は裏の裏を読むべし… アカデミーで教わりました。」

「フ… アカデミーや下忍としての経験は、無駄になっっていなかった

ようだな…。」

互いに軽口を叩く二人…。」

「今度はこちらから行くぞ…。」 凌いでみよ…。」

「くっ！」

ヒアシの猛攻に防戦一方のヒナタ…。」

(大丈夫…。」 父上はまだ本気になってない…。」 チャンスは来る…。」)

既に布石は打ってある。後は虚を着く一瞬の隙を待つ。

「どうした！お前の力はその程度か！」

ヒアシがヒナタを挑発する。

だが、その行為がヒアシの攻撃の手を緩ませる。

(今っ！)

ヒナタは、その一瞬の隙に六道の入れ換えの力を発動する。

先程投擲し、打ち落とされた手裏剣…。」 それは今もヒアシの足元に

転がっていた。

「何っ！」

ヒアシの足元の手裏剣と自分を入れ換えたヒナタ…。」

突如目の前のヒナタ…。」 次の瞬間、自分の真横に現れる。

驚くヒアシ。

「これが、今の私の全力です！」

ヒナタは、ヒアシの点穴を突くべく抜き手を繰り出す。

その攻撃がヒアシに当たる、その瞬間…。」

それまでとは比べ物にならない早さで動いたヒアシに腕を掴まれ

る。

「あっ…。」

「勝負あったな…。」

ヒアシの無情な言葉がヒナタに突き刺さる…。」

精一杯やった…。」 それでも力不足という現実がヒナタを襲う…。」

唇を噛むヒナタ…。」 その端からは血が滲んでいた…。」

「はい…。」 私…。」

ヒナタが敗北を宣言しようとした、その時…。」

「私の負けだな…。」

ヒアシが自分の負けを認めた…

「えっ？でも…」

どう考えても今の勝負は自分の完敗だった。

「なんだ… わからぬのか？私は何も今の勝負で私を倒せ… などと言った覚えは無いぞ？」

—お前の力を見せてみよ—

「あっ…」

「うぬぼれるな… これでも私は日向の当主。まだまだ、お前やネジに負けるほど落ちぶれてはおらん。それでも… 今の一撃… 本気で動かねばやられていたのは私であっただろう… 強くなったなヒナタ…」

「父上…」

ヒアシがヒナタをほめる…

ヒナタは、知らず知らずの内に涙を流していた。

ヒアシが優しくヒナタに語りかけるのはどれくらいぶりだろう… 少なくともハナビに負けて以来初めてだった。

「私の目は節穴だったのかもしれないな… お前がここまで強くなるうとは… 自分を守るだけの強さ… 今のお前には十分あるだろう…」

「それじゃあ…」

「うむ… ナルトと一緒に里を抜ける事… 認めよう…」

ヒアシが認めてくれた… それがどうしようもなく嬉しい。

「ありがとう… 父上！」

ヒナタがヒアシに抱きつく。

「こ、こらー！止めなさい。まだ話は途中だ。」

久方ぶりの親子の会話… ヒアシとて満更でもない。それでも優先しなければならぬことがある。

「ヒナタ… 確かにお前は強くなった… それは私も認める… しかし、お前自身理解している様に、まだまだ力不足な事も事実… そこで… これからナルトが里を抜ける… その時までの間… 私が
お前を鍛える。」

「え？」

「どの道、ナルトが里を抜けるのはもう少し後だ…三代目は此度の責を取り、辞任されるだろう…その場合、次の火影が選出されねば、許可も出せぬだろうからな…それまでの間…お前を徹底的に鍛える。ナルトの足手まといでいたくは無いのだろうか？」

「はい！よろしくお願いします父上！」

ヒナタは、力強く頷いた。

その返事を満足気にうなづくヒアシ…

だが、もう一つ言わねばならぬ事がある。

「それと…近い内にナルトを連れてきなさい。お前を変えたナルトと、直接話をしてみたい…それに、娘を嫁にやるのだから、小言の一つ位言つてやらねばならぬしな…」

「ち…父上…」

顔を真っ赤にして沈黙するヒナタ。

「フ…ハッハッハ…」

それを見て笑うヒアシ…

ようやくヒナタとヒアシは、親子としての関係を取り戻すことが出来たのだ。

後日…ヒナタに連れられ日向家を訪れたナルトは、子供とは思えない落ち着いた雰囲気を感じ、ヒアシを前にして堂々とヒナタを嫁にくれと告げた。

その度胸をたいそう気に入ったヒアシは、二つ返事で了承するのだった。

それぞれを決意

ヒナタとヒアシが和解して翌日の話・・・

ヒナタは、ヒアシに許可を貰った事を報告しようとナルトの元へと向かっていた。

現在、ナルトはアパートに住んではない。

何故なら、ナルトの力を木の葉のほとんどの人間が、知ってしまったからだ。

ナルトに恐怖を抱いた木の葉の人々は、ナルトを見ればすぐに逃げ出してしまふ・・・

そんな状況では、買い物すら満足に行う事ができない・・・

ナルトは、やむを得ず死の森への立ち入り許可を取り、そこで生活することにした。

ここは、危険な生物こそいるが、食べ物には困らず、肝心の危険な生物も、ナルトが有する強大なチャクラを感じとり、自分から近付こうとする者などいなかった。

ナルトにとっては、それなりに過ごしやすい環境だったのだ。

ちなみに、ナルトの昇格の話は見送られることになった。

当然だろう。これから里を抜けると宣言している人間を昇格させるなど、常識的でありえない。

もちろん、ナルトも気にしていなかった。

ヒナタは、そのナルトに会うため死の森へと足を踏み入れていた。

普通なら、広大な死の森でナルトを探すのは難しいだろう。

しかし、ヒナタの歩みに迷いはない・・・

真つ直ぐにナルトのいる場所へと向かっていた・・・

それは、ナルトとヒナタが六道の力で繋がっているため・・・

二人はお互いのチャクラを感じとることが出来る・・・

まだ、サスケのように輪廻眼による時空間移動は行えないため、徒歩での移動ではあるが・・・

「ナルト君！」

「お！ヒナタか？」

ナルトは、ちようど修行を終えて、寝倉にしている洞窟へと向かっているところだった。

「お弁当持ってきたよ。」

「サンキュー、ヒナタ…。」

二人は、連れ立ってナルトの寝倉へと向かう。

そこで仲睦まじく、一緒にお弁当を食べながら、昨日の話をしていた。

「そっか… ヒアシさんが… 良かったな… ヒナタ…。」

「うん。これで、私はいつでもナルト君と一緒にに行けるよ?」

ヒナタは嬉しそうに話した。

「そうだな。ただ… 三代目が辞任したみたいでな… すぐに出るのは難しいみたいだつてばよ。」

「うん… お父さんも、そう言ってたよ。私はそれまでの間、お父さんに稽古を付けて貰うことになったんだ。」

「そっか… 頑張れよ… ヒナタ。」

(そもそも、お義父さんは結構家族想いな人だったからな… 色々誤解されがちだけど… 仲直り出来て良かったつてばよ。)

「……………」

「どうしたの?ナルト君…。」

突然黙りこんだナルトに、ヒナタが心配そうに声をかける。

「いや… 折角仲直り出来たのに、二人を俺の都合で離ればなれにしちまうって考えたら… な…。」

「… ナルト君が気にすることはないよ… 何も、二度と会えないつて決まった訳じゃないし… お父さんは、ちゃんと納得してくれたよ。それに…。」

「それに?」

「お父さん… ナルト君に会って話がしてみたいつて言ってくれたんだよ?」

ヒナタは笑いながら言った。

「そっか… わかった。俺はいつでも大丈夫だからヒアシさんの都合に合わせて、近い内に伺わせて貰うつて伝えつて貰えるか?」

「うん。」

話が一段落した所で…

ナルトは、外の方に視線を向ける。

「さて…そろそろ出てきたらどうだ？」

ビクツ…

「来ないなら…こっちから行くってばよっ」

ナルトが立ち上がるうとした時…

「わああああ…ち、違うわよ…敵じゃないから…私たちよナルト…」

出てきたのは、いのを始めナルトの同期の者たちだった。

ちなみに、サスケとサクラはいない。

ナルトの宣言時…その場と同じ班員としていた二人は、式典が終わるとすぐにナルトに詰め寄った。

ナルトは今の状況を説明し、既に木の葉に自分の居場所は無い事を伝えた。

それでも納得出来ないサスケは、ナルトに苛立ちをぶつけ、逃げるようにその場から立ち去ってしまう。

ナルトは、苦笑するとサクラにサスケの事を頼んだ。

サクラは、本当にどうにもならないのか…ナルトに聞いたかったが、それでも頼みを聞いて頷いた。

それ以来、二人には会っていない。まだ、式典からそれほど時間が経ったわけでもない。

サスケもサクラも、まだ己の感情に整理をつけられないのだろう。そんな事を考えていると、訪問者の一人…犬塚キバが突っ込んで来た。

「ナルトオー！てめえ…なんなんだ、あの宣言は…問い質そうとしても、お前はアパートにはいねえし、他のやつらも知らねえ。俺ら同期でお前を探してたら、ヒナタが一人来ねえと思ったら、いのが怪しいって騒ぎ出して、後を付ける事になって…」

「キバ…ちよつと落ち着けてばよ。」

興奮して捲し立てるキバを宥めつつ、イノに説明を求める。

「つまりね… あんたの宣言に、納得してなかった私たちは、あんたを探してた訳。サクラとサスケ君も誘ったんだけど、断られて他の同期で探してただけど…」

「ヒナタまで、断ってきてね… あのヒナタが断るなんておかしいと思ったのよ。そしたら、たまたま出掛けたヒナタを見つけてね… しかも行き先が死の森… これは怪しいと思った私たちは後を付けたって訳。」

いのの説明を聞き、次にシカマルを見ると…

「ま… 概ねその通りだな… 俺はいのに強引に連れ出されただけだけど…」

「なによーシカマル… あんただって、アカデミーではナルトとそれなりに仲良かったんだし、気になってたでしょ？」

二人のやり取りを聞きながら、改めて皆を見るナルト。

「取り敢えず… 皆俺の為に集まってくれたって事か… ありがとうな。」

「そんなことより、あの宣言はどういうことなのか説明しろナルト！」ナルトの感謝の言葉に、照れ隠しなのか大声で捲し立てるキバ…

「あ、あとヒナタとの関係も知りたいわね。」

便乗するようにいのも聞いた。

二人の仲睦まじい姿を目撃していたのだ。

それは気になるだろう。

ナルトは、逆行した事を除き全てを語った。

九尾の事件から今までの事を。

それを聞いた一同は、自分の故郷である木の葉の有り様に、憤りを感じた。

ナルトは、こんな目にあっても復讐ではなく、里から出ていく事を選んだ。

そんな人間を迫害してきた木の葉が、とても醜い場所に思えてしまう。

ナルトの話聞き… しばし沈黙がその場を支配する。
すると、キバが立ち上がり宣言した。

「俺は決めたぞナルト！」

「キバ？」

「俺は火影になる。それで、木の葉を変えてやる。誰もお前を差別しない……そんな里に……」

「キバ……」

キバの宣言…… それを受けた他の者たちも、自分の心を決めた。

「俺も…… 火影を目指す…… 何故なら自分の故郷がそんな醜いなど…… 納得いかないからだ……」

「シノ……」

「私も…… 火影を目指す…… ナルトがそんな目に遭ってきたなんて…… 私、知らなかった…… 同じ木の葉の人間として、そんなの許せない…… 私たちの誰かが火影になって、木の葉を変える。だから、それまで待つてなさいナルト。」

「いのまで……」

「僕は、火影にはなれないと思うから、皆のサポートをするよ。皆の誰かが火影になれば、きつとナルトの為になるよね。」

「チョウジ……」

残りはシカマルのみ……

「俺は……」

シカマルだけは、迷っていた。

ナルトの事をヒナタを除けば一番理解しているのはシカマルだ。木の葉を変える…… 確かにそれは必要な事だろう……

そのために自分達の誰かが火影になるのは有効な手とも言える。だが、それだけで全てを変えられるとは思えない……

「わりい…… 俺にはまだ決断できそうにねえわ…… 取り敢えずチョウジと同じように皆のサポートに回るわ……」

「皆…… 俺の為に…… 本当にありがとうな……」

全員の決意を聞いたナルトは、自分のために火影を目指すと言ってくれた仲間たちの言葉に、笑顔で感謝の言葉を述べた。とても綺麗な笑顔だった。

「良かったね…… ナルト君……」

自来也からの頼み

ナルトが同期たちとの交流を深めていた頃…

「エへへへ…」

一人の男が望遠鏡片手に、女風呂の覗きをしていた。もちろん、自来也である。

「まだ、そんなくだらんことをしとるのか… お前は…」

そんな自来也に、呆れた声がかかる。

「一応、取材ですからのお…」

その声に、特に驚いた様子もなく返し、後ろに振り返る自来也。

「ホムラのおっちゃんに、コハル先生か… ご意見番がこのワシに何の用かのお…」

「何の用だと？皆まで言わずとも分かっておるだろう…」
「……………」

「三代目が暴走して行った式典…そこでのナルトの宣言は聞いていたな？木の葉の民たちの反応や、今後の対応を考えて、木の葉はナルトの宣言を承認することに決めた…」

「お前も無論承知しているだろうが、ナルトは木の葉の人柱力だった。その事は木の葉の秘事として箝口令を敷いていたが、今回の件で恐らくそれは他里に伝わったと見て良い…」

「人柱力が里を抜ける…五里のパワーバランスから考えても、これからの木の葉の力は恐ろしい程に低下することになる。」

「三代目には此度の一件の責任を取って辞任して貰った。この状況で辞めるのも無責任な話ではあるが…こうでもせんと他の上役が納得せないのでな…」

コハルが後を引き継ぐ…

「今の状況…隣国のいずれかが、いつ大胆な行動に出るかも分からぬ。今や揉め事の種はそこら中に転がっておる。大蛇丸だけではない。」

それを受けてホムラが、

「いいか、一つ基本的な方針を言っておく…五代目火影は今すぐに

でも必要だ。」

そう言うと、コハルが今回の用件を告げる。

「そして、昨日火の国の大名と設けた緊急会議で、自来也……それがお前に決まった。」

「おあいにく様……ワシはそんな柄じゃ無いのお……」

ホムラ達の話聞いた自来也は、しかしこれを断る。

「これは決定事項だ。それに三忍と謳われたお主程の忍が柄でないと言うなら、他に誰がいると言うのだ。」

ホムラは、拒否する自来也に他に候補がないことをあげて説得する。

「三忍ならもう一人いるだろ……綱手のヤツが……」

ナルトから話を聞いていた自来也は知っている……本来の歴史では綱手が五代目になっていることを。

自来也の言葉に暫し考えるコハルだったが、

「……確かにあの子ならその器かも知れんが……その行方が皆目見当もつかん。」

現状、行方もわからない綱手を推すわけにはいかなかった。

「ワシが見つけて連れてくる。そうすりや問題は無いだろ？」

自来也はそう言ったが、

「しかし……」

ホムラは尚も食い下がろうとする……

「やる気の無いワシよりも、切れ者の綱手姫の方が火影に向いとる。」

「……」

自来也の言葉に、黙り込む二人……

お互いを見返しながら、どちらが里のためになるか考えていた。

「わかった。早急に考慮しよう。ただし、綱手搜索隊として三人の暗部をお前に付ける。」

結局ホムラが折れた。その代わりに暗部を付けることを提案するが、

「心配しなくても、逃げやしねーっての。見張り役は余計だのお……ただ、旅のお供に一人連れていきたいヤツがいる。」

自来也はこれを却下して、他の人物をお目付け役にしたいと提案した。

その人物の名前を告げたときのホムラとコハルは、驚き反対もしたが、綱手の説得に必要なだと言つて強引に認めさせた。

そして、自来也は今、その人物に会うため死の森へと足を踏み入れている。

目的の場所に着く自来也。

中を覗いてみると…

「はい。ナルト君…これも美味しいよ？」

「いつもありがとなヒナタ。」

「ううん…ナルト君にお弁当作ってくるの…私も凄く楽しいんだよ？だから気にしないで。それに、いくら食べ物に困らないつて言つても、こんな所で生活したら栄養が偏っちゃうよ…」

「そう言ってくれると嬉しいつてばよ…それでも…やっぱりありがとな…」

「うん。」

「ヒナタ…」

「ナルト君…」

二人の顔が近づく…

「何をやつとるかあ！」

堪らずに大声を出して突入する自来也…

「キャッ！」

「お？エロ仙人。久しぶりだつてばよ…」

自来也の突然の訪問に驚くヒナタと、少し驚きつつも、照れを隠すように挨拶をするナルト。

「ナルト…お前のお…お前のせいでワシが大変な目に遭つてるつて時に、お前は彼女とヨロシクやつてるつてえのは、どうなのかのお…」

自来也は、呑気そうなナルトを恨めしく思いながら、愚痴を言う。

「ん？エロ仙人…なんかあったのか？」

ナルトが聞くと、

「お前の宣言後、三代目が火影を辞任したのは知っているだろ？」

「ああ……」

頷くナルト。

「そのせいで、ワシが五代目にさせられそうになつとるんだのお……」
「ん？良い話じゃねえか…… エロ仙人が火影になれば、もう少し木の葉も変わると思うつてばよ？」

昇進の話だから良い話だと、どこか他人事のように言うナルト。

「何を言うか…… ワシにはやらなければならない事があるのだ。火影なんてしてる暇はないのお……」

「それって…… 大蛇丸の事か？」

自来也のやるべき事…… ナルトには心当たりがあった。

「……… 未来のワシは、そこまでお前に話したのかのお……」

「…… ああ、少しだけ…… 名前は聞かなかったけどな…… あの時はよく分からなかったけど…… 今ならそれが大蛇丸の事だったつてわかる。俺を弟子に取ったのも、多分サスケを取り戻そうと躍起になって俺の姿に…… 自分の姿を重ねてたんじゃないかって…… 今は思うんだつてばよ……」

ナルトは目を伏せながら答えた。

「……… まあ…… そうだ…… ワシは大蛇丸と決着を着けねばならん…… それに未来では、綱手のヤツが五代目になっておつたのだろお？」

「ん？確かにそうだけど…… この世界でどうなるかはわからねえつてばよ……」

ナルトに確認した自来也は頷くと、

「よし、ナルト…… お前はこれからワシの綱手搜索の任務に同行して貰うからのお……」

「はっ？なんで俺が……」

自来也の突然の言葉に驚くナルト……

「未来では、お前が綱手の説得に一役買ったのだろ？」

「いや、あの時は俺が諦めずに火影を目指し続けてたし、俺の努力を認めてくれたからこそだつてばよ？はじめて会った時なんて『火影なん

てクソだ』…とか言ってたし…今の俺に説得は無理だってばよ…」

「それでも、ワシ一人で行くよりは可能性が高い。だから頼む…ナルト。」

ナルトの拒否に食い下がろうと必死な自来也。

「嫌だって…」

それでも、拒否するナルト…

「師匠命令だ…」

「この世界じゃ師弟になつてないってばよ…」

「口寄せの契約書…貸してやったろのお…」

「ぐっ…」

そんな二人のやり取りを見ていたヒナタは、

「ナルト君…行つてきなよ？」

そう言った。

「ヒナタ？」

ナルトが自分を心配して、残ろうとしているのは理解していた。

ナルトにとって、自来也は大切な存在だ。

本当なら、無条件に手を貸してやりたいハズなのだ。

ナルトから言い出せないのなら、自分がナルトの背を押してやれば良い。

「ナルト君…ナルト君が自来也様と旅に出ている間…私は父上との修行を続ける。どの道、五代目が決まらないと、私たちの里抜けの話も進まないでしょ？」

「……………」

「私は大丈夫だから…ね？」

「ヒナタ…わかつたつてばよ…」

ヒナタの言葉に、ようやく腹を決めるナルト。

「嬢ちゃん…よくやった。よしナルト…善は急げだ。明日出発するからのお。」

「明日あ！」

急な話に驚くナルト。

「良いから…頼んだぞナルト。」

「へえーい…」

明らかにテンションの低い声で返事をし、去っていく自来也を見送るナルト。

「フフ…自来也様って…楽しい人だね。ナルト君…」

「…ああ…」

ナルトは、自来也とのやり取りを懐かしいと感じて、思わず笑みが溢れた。

「ナルト君…明日…出発前に家に寄ってくれるかな？腕によりをかけてお弁当作るね？」

「ありがとな…ヒナタ…」

今度こそ二人の影は一つになるのだった。

イタチとサスケ

自来也の頼みを聞いたナルトは今、歓楽街のある宿場町に来ていた。

自来也は、情報収集をすると言つて通りを歩いていた美女と何処かへ行つてしまった。

もちろん、前世と同じように幻術にかけていることを見破った上で、かかったフリをして敵をおびき寄せようとしているのだが……
宿屋の一室にて……

「ハア……このあと確か……イタチのヤツが来るんだよなあ……」

『イタチがどうかしたのか？ナルト……』

ナルトの呟きに九喇嘛が聞き返す。

「いや……イタチの真実を知つてるだけになんとか、助けてやりた
いって思つてな……」

『だが、イタチは木の葉でも最上級のお尋ね者だろう？木の葉を潰す
気なら、イタチの真実を暴露しちまえば簡単だろうが……』

「それは流石になあ……木の葉は正直どうでも良いけど、その後逆恨
みされそうだからなあ……」

『イタチを縛つてるダンゾウは死んだが、ヤツの罪状が消えたわけ
じゃ無え……ヤツを助けるとしたら、いっそのこと……』

「うん？九喇嘛……何か良い案があるのか？」

九喇嘛の提案を詳しく聴くナルト……

その内容を聞いたナルトは、それを採用することに決めた。

「さて……後は、実際にイタチ相手に実行出来るかだつてば……」
ナルトの覚悟が決まった時……

コンコン……

ドアをノックする音がした……

(来たか……)

扉へと近づくナルト……

コンコン……

再度扉がノックされる。

扉を開くと、予想通り…。そこにはうちはイタチがいた…

後ろには、イタチが所属する組織…。『暁』のメンバーの一人である
干柿鬼鮫もいる。

「しかし…。こんなお子さんにあの九尾がねえ…」

鬼鮫がナルトを見て言った。

「ナルト君…。一緒に来て貰おう…」

それには構わず、イタチが抑揚の無い声でナルトに声をかける。

「どこにだってばよう？」

ナルトが質問するが、

「部屋を出ようか…」

イタチはそれには答えず、ナルトに指示を出した。

「…………… まあ…。良いけどよ…」

ナルトは、イタチの要求通り部屋を出る。

「うーん…。イタチさん。チョロチョロされると面倒ですし…。足の

一本でもぶった斬っておいた方が…」

鬼鮫が、背中に背負った鮫肌に、手をかけてイタチに提案する。

提案と言うよりは、許可を求めたと言った感じに近いが…

「……………」

イタチは答えない。

その沈黙を肯定と受け取った鬼鮫がナルトに近づく…

その時…

「久しぶりだな…。サスケ…」

サスケがその場に現れた…

サスケは、カカシやガイ達がイタチや鬼鮫と遭遇戦をし、カカシが

ダウン…。ナルトが狙われていることを偶然知って、ナルトを探して

いたのだ…

「うちはイタチ…」

サスケが、溢れる感情を必死に抑えた…。まるで絞り出した声でそ

の名を呟く。

「おやおや、今日は珍しい日ですねえ…。二度も他の写輪眼が見れる
とは…」

サスケの目には既に写輪眼が発動していた…
カカシに続いて二度目… 鬼鮫はふぎけた拍子で呟く…
「あんたを殺す！」

サスケは憎しみの極まった声で、イタチに言い放つ。
鬼鮫が、サスケについてイタチに訊ねる。

自身の弟であることを告げるイタチ。

しかしうちは一族は、他ならぬイタチ自身の手によって、皆殺しにされたハズ… 鬼鮫がそれを問い質すと…

その言葉がトリガーになったのか、サスケは千鳥を発動する。

「あんたの言った通り… あんたを恨み、憎み… そして… あんたを殺す為だけに俺は… 生きてきた!!」

余りに強い感情故か、千鳥を制御仕切れずに、自身の手の皮膚を焼きながら… それでも今までで最高の威力を持った千鳥をイタチ目掛けて放とうと突っ込むサスケ…

だが、その千鳥はあっさりとイタチによってかわされ、手首を捕まれてしまう。

「この…」

抵抗するサスケ。

イタチはサスケの抵抗を無視すると、邪魔とばかりにサスケの手首を掴んでいた手に力を込め、骨を折ってしまう。

「ぐああああ…」

たまらずに膝を付くサスケ。

「さて… それじゃ… 私は続きをしますか。」

一方、鬼鮫は鮫肌を抜き放ちナルトに相対する。

ナルトは鬼鮫を一瞥すると、

「とりあえず… お前は邪魔だつてばよ…」

グサツ…

「はっ？」

次の瞬間、鬼鮫の胸をチャクラの腕が貫通していた…

「これは… 何… が…」

心臓を貫かれた鬼鮫は、そのまま倒れ絶命する…

「なにー！」

突然の出来事に、流石のイタチも驚愕の声を上げた。

ナルトは、六道仙人モードになると、そのまま求道玉を操作して鮫肌を跡形もなく削り消してしまった…

「ナルト君… 君は一体…」

呆然と呟くイタチ…

その時…

「遅いってばよ… エロ仙人…」

「スマンのお… ちいとばつかし、この娘の催眠を解くのに手間取つてのお… それから人前でその呼び方はやめろつての！」

自来也が姿を現した。

「そんな事より…」

「わかってるってえの… ナルトからワシを引き離す為に、女に催眠眼で幻術をかけるたあ、男の風上にもおけねえやり方だのお… 目当てはやはりナルトか？」

「… 道理でカカシさんも知っていたはずだ… なるほど… 情報源はあなたか…」

イタチは、カカシが自分達の所属する組織について知っていた理由に納得する。

「ナルト君を連れていくことが、我が組織“暁”から下された我々への至上命令… まあ、今は俺一人になってしまいましたかね…」

鬼鮫の遺体があった場所を見て呟くイタチ…

「ナルトは、やれんのお…」

「どうですかねえ…」

対峙する両者。

「ちようど良い… お前はワシが始末する…」

自来也が、そう宣言する。

「手え… 出すな… こいつを… 殺すのは… 俺だ…」

その時、サスケがヨロヨロと立ち上がり、自来也を制止する。

「今… お前などに興味は無い…」

イタチはそう言うと、サスケを蹴る。

その後も、サスケを痛め付けるイタチ…

もはや、自分ではまともに動けないサスケの首を持って壁に張り付けるように持ち上げるイタチ…

イタチが、サスケに月読を仕掛けようとした、その瞬間…
ドン！

横から衝撃を受けたイタチが吹き飛ぶ。

イタチから逃れたサスケは沈み込むように壁にもたれた…

「手え… 出す… な… ナルト…」

そう… イタチを吹き飛ばしたのはナルトだった。

それでも、その言葉を絞り出すサスケ。

「わりいけど… そう言う台詞は、自分で立ち上がってから言ってくれってばよ… もともとアイツの狙いはお前じゃなくて俺だ… 俺にも戦う権利はあるってばよ…」

「ふ… ぎ… ける… な…」

「聞く耳持たねえ…」

と、その時イタチが二人の元に舞い戻る。

「やってくれたな… ナルト君… 君の力は異常だ… 正直、ただの人柱力… それだけで片付けられるものではない… 組織のためにも… 本気で君を取りに行く…」

イタチはその気になっていた…

「やってみろ!?… エロ仙人… サスケを頼むってばよ…」

「ハア… 無理するなよ？」

「わかってるってばよ…」

自来也にサスケを託し、場所を移すように宿を飛び出すナルト。
イタチはそれを追った。

その場に残った二人…

「… たの… む… 俺を… イタチのもとに… 連れて行って… くれ…」

サスケはボロボロになりながら、自来也に懇願する。

「そうはいかんのお… ナルトに頼まれたんでな…」

「お願い… だ… 俺は… うちの… 最後の生き残りとして…」

アイツ…を…」

サスケは涙を流していた…普段は見せない弱々しい表情…

「ふう…仕方ないのお…行ったところでお前さんに出来ることなど何もないぞ？」

「それ…でも…」

「わかった…じゃあ、行くとするかのお…」

自来也は、移動用に大きめの蛙を口寄せすると、それにサスケを乗せて、自身も飛び乗る。

ナルト達の向かった方向へと向かう自来也。

やがて、ナルト達を発見する自来也。

発見した時、ちょうどイタチがナルトに幻術をかけた所だった。

棒立ちのナルトに迫るイタチ…その手にはクナイが握られている。

「ナルトオー！」

思わずサスケが叫ぶ…

グサツ…

だが…クナイで刺されたのは、ナルトではなくイタチの方だった…

サスケはその光景を、呆然と見るしかなかった…

うちはイタチ

時間は少し遡る…

ナルトは、宿場から移動していた…

それを追うイタチ。

少しすると、場所は宿場町から離れ、ある林のある場所に出た。

「ナルト君… もうこの辺で良いだろう？人混みからは、十分離れたはずだ…」

イタチが不意に声をかける。

その言葉に移動を止め、イタチに向き合うナルト。

「そうだな… っここならちようど良さそうだってばよ…」

「……………」

「……………」

対峙する両者…

「始める前に、一つ聞きたい… 君は一体何者だ？」

イタチがナルトを見ながら話しかける。

「お前が言っていた通り、九尾の人柱力だってばよ？」

それに答えるナルト。嘘は言っていないが、正解には程遠い答えだ…

「そういう意味で言った訳じゃないのは理解してるだろう？どれだけ強大な力を持つていようと、それを扱うのはその者自身… 例え君に天性の才能があったとしても、君が子供である以上、未熟な部分は必ずある…」

「だが… 君にはそれが見当たらない… まるで歴戦の勇士を思わせる風格さえ見える…」

「……………」

「もう一度聞く… ナルト君… 君は… 何者だ？」

全く眼を逸らす事なく、ナルトに問いかけるイタチ。

しばし沈黙したのち、ナルトが、フツと笑った。

「やっぱり、お前は凄えヤツだってばよ… 流石にサスケが憧れてただけあるな…」

これまで、ナルトと対峙したほとんどの敵は、ナルトの容姿を見て油断し、そこを突かれて負ける者がほとんどだった…

先ほどの鬼鮫もそうだ。イタチには幾分劣るだろうが、鬼鮫とて、暁のメンバー。

ああも、あつさり倒せたのは… 本人が言ったようにナルトを人柱力と言ってもただの下忍の子供… と侮っていたからだ。

しかし、イタチは違う。

もちろん、目の前で鬼鮫があつさり殺された事もあるのだろうが、それをマグレとは考えない。油断なく身構えている。

「良いだろう… 話してやるつてばよ… お前には聞く権利があるだろうしな… まあ、この話を信じるかどうか… それは、お前次第だけだな。」

そして、ナルトは語り始める。自らの事…

そして、自身の前世におけるイタチやサスケとの関わり… そして、その最後…

総てを聞き終えたイタチは、静かに考えていた…

確かに、俄には信じがたい話ではある…

六道仙人… 時空間忍術による時間逆行…

全て、伝説上の話だ…

だが、嘘というには余りにも話が生々しかった…

それに、ナルトの戦闘力はあまりにも高すぎる…

何よりも、自分の真実を知っていた…

「ナルト君… 仮にその話が本当だったとして… 君は俺に何を望んでいる?」

「どういう意味だつてばよ?」

「君の言うことが真実なら、君は今日ここで… 俺たちが君に接触することを知っていた事になる… そして、暁の目的が尾獣にある以上… 君にとつてもこの接触は危険な事だったはずだ…」

「……………」

「事前に知っていたなら、ルートを変えるなり、もつと早く出発するなり、接触を回避する方法もあった。だが、君はあえて俺たちと接触し

た…そして鬼鮫を邪魔と言つて殺し、俺をここに誘い込んだ…つまり、俺に用事があつたと見るのが正しいだろう…違うか？」

イタチの推測…その推測にナルトは、

「いや…合つてるつてばよ。」

肯定した。

「確かに俺はあんたに用があつた…」

ナルトは、単刀直入に告げる。

「イタチ…志村ダンゾウは死んだ…俺が殺した…」

「何！」

驚くイタチ…

「アイツは俺に枷をかけようと、俺の大事な人を誘拐しようとして画策したんだつてばよ。俺は木の葉への牽制の為に見せしめとして屋敷ごと、ヤツを消し飛ばした。屋敷にダンゾウがいるのはしつかり感知してたからな。ダンゾウは間違いなく死んだはずだつてばよ。」

「なん…だと…」

それを聞いてイタチは、固まってしまう。

「イタチ…あんたが、ダンゾウの指示で暁のスパイをやつてるのは知つてる…だが、アイツはもういない…だから…暁から抜けてくれねえか？それが俺の頼みだつてばよ…」

ナルトの頼みを聞いたイタチ…

「それは…出来ない…暁は木の葉の想像を超える組織だ…放つては置けない…」

しかし、その頼みを拒否するイタチ。

「暁は、俺が潰す…やつらの狙いが人柱力である以上、敵対するしか道が無いからな…長門たちには悪いけど…」

「それでも、俺は…」

イタチは、それでも決断できない。

だからナルトは、イタチの心を動かす言葉を口にする。

「イタチ…あんたがサスケの為に、その生涯をかけて願ったサスケの幸せは、あんたのせいで叶わないんだつてばよ…」

「どういう事だ？」

「サスケは結局、あんたの真実を知った…。その結果、木の葉転覆を目論み、テロリストとして、各国に指名手配された。第4次忍界大戦の後は、家族こそ出来たが…。罪の意識が消えなかったんだろうな…。ずっと贖罪の旅を続けてた…。本当は、家族と共に在りたかったハズだ…。それでも自分の過ちを償う…。そう言っただけでほとんど木の葉に帰ることは無かった…。」

「イタチ…。あんたにとって、サスケが何よりも大事だったのは解る…。だけど、未来のあんたが言っていたってばよ? 『自分は何もかも一人でやり過ぎた…。』って…。」

「……………だが、俺が暁から抜けたとしても、俺が木の葉で犯した罪が消える訳ではない。木の葉の根幹を揺るがす事件だ…。木の葉の上層部が、真実を公表するとも思えない…。俺やお前がそれを伝えたとしても、誰も信じないだろう? どうするつもりだ?」

ナルトから聞いた未来の自分の言葉…。そしてサスケの幸せ…。その事に心を動かされたイタチ。だが、懸念はまだある。

「そこでだ…。イタチ…。あんたにはここで死んでもらう…。」

ナルトは、そう言うのと六道仙人モードに再びなった。

「!？」

「そろそろサスケたちも来るみたいだ…。精々本気で抵抗してくれってばよ?」

「なるほど…。そういう事か…。だが、手加減はせんぞ? それでお前が俺に勝てるか…。だ。」

ナルトの言葉に何かを察したイタチ…

そう言うのと、写輪眼を発動させ構える。

「上等だっばよー!」

少しの間小競り合いをする両者。

(そろそろか…)

自来也とサスケの気配を感じたナルトは、イタチを見る。

すると、イタチの眼は万華鏡写輪眼になっていた。

『月読』

ビクンツ…

ナルトの動きが止まる。

イタチの特別な幻術『月読』によって、今ナルトは三日間…様々な手法で痛め付けられる悪夢を見ている。

「ナルト君…結局、何をするにも力がある…君が俺を助けようとしてくれたのは理解したが…俺に勝てないなら…結局ここまでだ…」

イタチは、クナイを構えナルトにゆつくりと近付いた。

「ナルトオー！」

その時、自来也に背負われたサスケが、その場に現れる。

その光景を見て叫ぶサスケ。

イタチのクナイがナルトに刺さる…その瞬間…

「わりいな…イタチ…俺に幻術は効かねえんだってばよ…」

ナルトの眩きと共に、ナルトのクナイがイタチを刺した…

倒れるイタチ。

サスケは、その光景を見て呆然としていた。

「殺ったのかのお？」

近付いてきたナルトに自来也が聞く。

「ああ…うちはイタチは、死んだ。」

『うちはイタチは死んだ。』

その言葉がサスケの脳裏を何度も叩く…

嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ…

「ふざけるなあ！ナルトオー！アイツは俺が…」

サスケはそれをようやく認識すると、今度は興奮し叫びだす。

「ハア…ハア…アイツは…俺が…」

「む！イカンのお…」

もともと、まともに動くことすら困難なサスケの身体…

興奮し、叫んで動こうとした為に傷が開いてしまっていた。

「サスケ…お前にはわりいが、お前の夢の一つはもう永遠に叶わなかってばよ。」

ナルトは、そんなサスケに残酷な現実を突きつける。

「ナルトオ！」

あまりの怒りに、サスケは千鳥を発動させ、ナルトを攻撃しようとしたが、もはや千鳥を使うだけのチャクラの無いサスケはそのまま気絶してしまふ。

「エロ仙人… サスケを宿に連れていってくれつか？今は、時間を置いた方が良くってばよ…」

「お前はとうするんかのお？」

「後始末… 俺が背負ったこの求道玉は、触れたあらゆる物を消すことが出来るんだってばよ… 大蛇丸に穢土転生で利用されたら可哀想だってばよ… コイツはもう十分苦しんだ。」

ナルトは悲しそうに答えた。

「わかった… ワシはサスケを連れて先に戻っておるからのお…」

自来也は、そう言うのと再びサスケを背負い飛び立った。

「さて…」

ナルトは、右手の掌をイタチの傷口にあてる。

すると、イタチの傷が塞がりやがて目を醒ますイタチ。

「これで… イタチ… お前は死んだ… なにしろ伝説の三忍の一人… 自来也が証言してくれるしな。」

「色々聞きたいことはあるが、一つ… 何故月読が効かなかった？あれは本来回避は不可能な幻術だ。かかった瞬間には時間も空間も俺が支配した場所で俺の設定した幻を見る事になる。例えすぐに解いたとしても、それは幻により精神に多大なダメージを負った後。それが何故…」

『それは、ワシが話してやろう。』

イタチの質問… それを聞いたナルトは、何故か口調が変わる。

『なにしろ、ナルトのヤツは説明が下手くそなんぞな…』

「… 九尾か？」

『ほお… すぐに気付くとはな… 流石だ…』

感心する九喇嘛。

『さて… お前の疑問だが… 簡単だ… ワシがナルトのチャクラを乱したからだ。お前がナルトに幻術をかけようとナルトのチャクラ

に干渉した瞬間……それに支配される前に消し飛ばした。』
「……………」

『その術が時間を無視出来たとしても、幻術である以上、お前のチャクラがナルトに干渉し、支配してからその効力は発揮される。ワシはその前の段階で止めたと言うことだ。』

「つまり、俺たち人柱力……尾獣と仲良くなった俺たちは……幻術使いには最悪の敵って事だっばよ?」

再び、ナルトが口を開く。

「なるほどな……」

九喇嘛の説明に納得するイタチ。

「まあ、とにかくこれで、お前は死んだ事になった。名前を変えて、別の人間として生きてくれっばよ。」

「サスケはどうなる?」

「サスケは暫くは立ち直れないだろうけど、今はそつとして置いた方が良いつてばよ。」

「わかった。サスケのことはお前に任せる……世話になったナルト。」

「そう思うなら、いずれ作る……俺の新しい里作りに協力してくれねえか?」

「新しい里?」

「もうすぐ、俺と……俺の大事な人……日向ヒナタは木の葉を抜ける。それに、他の人柱力にもコンタクトを取った。俺たちのように、居場所の無い人間を集めた新しい里を作りたいんだっばよ……」

ナルトは、これからの構想を語った。

「良いだろう……ほとぼりが冷めて少し経ったら、俺もそこに合流しよう。」

それを聞いたイタチは、ナルトの頼みを聞くことにした。

どちらにしても、すでにイタチ自身……自分の居場所が無いのだ。ナルトに協力することで、自分の居場所を作ることができる。

なにより……サスケの動向を見守れる可能性が高かった。

こうして、イタチもまた未来とは違う歴史の中、違う生き方をする

事になるのだった。

人柱力会議

イタチを助け、その協力を取り付けることに成功したナルト……そのナルトは、自来也の待つ宿屋へと向かっていた……

「ハア……気が重いつてばよ……」

ナルトは、渋い顔をしていた……

『イタチを助けられた割りには、随分と憂鬱そうだな？ナルト……』

九喇嘛が問いかける。

「そりゃあ……な……なにしろ宿にはサスケがいるだろ？イタチを助けるのに必要だったとしても、それをサスケに言うわけにもいかねえしなあ……絶対突つかかって来るってばよ……アイツ……」

『ああ……それはそうだな……なにしろ自分の仇を、他のヤツに奪われた格好だからな……恨まれるな……そりゃあ……』

九喇嘛が肯定する。

「だろ？ああ……行きたくねえつてばよ……」

そんなことを言いつつも、宿が見えてくる。

「おう……ナルト。戻ったかのお……」

自来也がナルトを出迎える。

「あれ？エロ仙人だけか？サスケはどうしたんだつてばよ？サスケならどんだけボロボロでも、俺に突つかかって来ると思って覚悟してたのに……」

ナルトが疑問を口にする。

「ああ……サスケのやつなら……ほれ……そこにいるのお……」
自来也がある方向を指差す。

その方向に顔を向けると……

「こ、こら……暴れるな……サスケ。傷口が開いてしまうぞ！」
「~~~~~」

ガイに見事に袈裟固めをかけられて動きを封じられたサスケがいた。

その強靱な腕に口元を塞がれ声さえ出せないサスケ……心なしか、顔色が悪くなって来ているように見える。

「あれ？ゲキマユ先生？（そう言えば、あの時ゲキマユ先生がエロ仙人を敵と勘違いして攻撃するって事があったってばよ…）」

「ああ… ガイのヤツは、サスケを追って来たんだそうだ。その過程で何を勘違いしたのか、サスケを背負ったワシを敵と勘違いして攻撃してきたのお… 罰としてサスケを拘束するように命じた…」

自来也に真相を聞いたナルト。

「おお… ナルト！心配したぞ。しかしまさか… あの『うちはイタチ』を仕留めるとはなあ…」

（空気を読め!!）

ナルトと自来也の心の声の一つになった。

だが、当のサスケから何の反応もない…

不思議に思い、サスケに注目すると…

「……………」

顔を赤紫にして泡を吹き気を失っていた。

「げ、ゲキマユ先生… 絞めすぎだってばよ… サスケが…」

「ガイ！腕を離せ… サスケが死んじゃう…」

「おっと… これはイカン。」

慌てて腕を離すガイ。

「勘弁してくれてばよ… ゲキマユ先生…」

「いやあ… スマンスマン。ワツハツハツハツハ…」

「笑ってごまかすな!!」

その後… 気を失ったサスケを（物凄く不安だが）ガイに任せ、木の葉に帰るように指示した自来也。

ガイは（重症の）サスケを背負いながら猛スピードで、木の葉へと爆走していった…

（し… 死ぬなよ… サスケ…）

その姿を見て静かに瞑目するナルトであった…

その夜…

ナルトは、自室にて休んでいた…

少なくとも、第三者が見ればそう見えるだろう…

しかし、実際には精神世界… 尾獣空間にて他の人柱力とコンタク

トを取っていた。

そして、現在生存している人柱力達が集った。

「みんな… 久しぶりだってばよ…」

ナルトが里抜けを宣言した次の日…

死の森へと住む場所を移したナルトは、そこで一度、今のよう
に人柱力を集めて、話をしていた。

自分の目的である自分達のような人柱力や、同じように迫害を受け
てきた者達を受け入れる居場所を作ること… そして、それに同調す
るかどうか…

次に集まるときまでに、決めてほしいと告げて、この時は解散と
なった。

この時、ヤグラとハン… 既に亡くなっていた二人もいたのだが、
ナルトの目的を聞き、既に生を終えた自分たちは、ここに残るべきで
はないと、自らの相棒である尾獣の未来をナルトに託し、あの世へと
旅立っていった。

「はつつあん。今回もビーのおっちゃん不参加か？」

集まった人柱力達… その中で唯一、キラー・ビーだけはいなかつ
た…

前回の集まりにおいては、牛鬼が敢えてビーを参加させなかった。

ナルトの目的を察していた牛鬼は、ビーがそれに賛成することは無
いだろう… そう考えていた… それどころか、ナルトの目的を知つ
たビーは、それを邪魔する可能性すらあったのだ…

なにしろ…

「ビーのヤツは、あれで雷影を慕っているからな… お前の目的は雷
影にとつて脅威になりかねんから… な…」

牛鬼が事情を説明する。

「そっか…」

「一応… お前がどうしても言うから未来での事と今のお前の目
的は軽く話した… ここに来ないのはビーなりの配慮なのさ… お
前達に協力は出来ないが、計画を聞かない事で、雷影への報告もしな

いってな…。」

「やつぱり、ビーのおっちゃんだな…。そういうところ…。良い人過ぎるってばよ…。」

ナルトは苦笑しながら、一人ごちた。

「ナルト…。そろそろ本題に入ろう…。」

そんな二人のやり取りに、我愛羅が割って入った。

「そうツス…。あつしも暇じゃ無いツスから、ちやつちやと始めましょう。ナルトさん。」

フウも後に続く。

「わかった。じゃあ、第二回人柱力会議を始めるとしてばよ。」

ナルトの号令で、会議は始まった。

「議題はわかっていると思うけど、俺の新しい里作りに参加してくれるかどうかだ。」

「俺は既に参加を決めている。それからテマリとカンクロウに話させてもらった…。構わないのだから？」

我愛羅が最初に話し始める。

「ああ。お前達が信用できるヤツなら話しても良いってばよ。ただし、合流した時に探らせて貰うけどな…。俺の九尾チャクラモードは人の悪意を感じとることが出来るから…。」

誰でも信用する…。今のナルトは、そんな事は出来なかった…。

あくまでも、第一にはヒナタを守ること…。その為なら全てを疑うつもりで始めなければならぬ…。

ナルトの言葉に頷く一同。

「さて、続きだが…。テマリが俺に同行することになった。」

「カンクロウは？」

「カンクロウは…。里に残ることを選んだ…。長兄として、不甲斐なさを感じたのだそうだ…。アイツは風影になって里を変えると言っていた…。」

「そっか…。もし本当に里が変わったら、上手く交流出来るといいな…。」

「ああ。その時の交渉役は俺に任せてもらおう。」

我愛羅は、柔らかく笑った…

信用できる人がいる… それは我愛羅にとって何よりも嬉しい事だった…

「ユギトはどうする？」

「私も協力させてもらう… お前達とは違って、里のために… だがな… 又旅から話は聞いている。今後、私を狙って暁が里を襲うと… 私はその時、暁に敗北して又旅を抜かれたのだそうだ… 里を守るためにも、私は里にいない方が良いのかもしれない… そう考えた。」

「……………」

「それに、私たちが集まっていれば互いにフォローし合える… 暁のような組織にも対抗出来るだろう？」

「そうだな。」

ユギトは、里の者達に慕われていた…

その生き様は、どこか前世のナルトに似ている。

幼少期… 迫害を受けながらも諦めずに努力し、尾獣をコントロール出来るようになった。

そんなユギトを里の者たちも、いつしか認めるようになっていた…

ユギトにとって、自分のせいで里が危険にさらされるのは我慢できないのだろう。

「ワシも協力しよう…」

老紫が口を開く。老紫は、孫悟空との会話を通して、いかに自分の視野が狭かったかを痛感した…

孫悟空を変えたナルトに興味を持ち、ナルトに協力することを決めた。

「俺も協力を決めた。ただし、ホタルも着いてくるがな。」

ウタカタは、未来の自分の姿… そして最後を見た。

そして思った… ホタルと共に… もっと生きたかった… と。

その思いが、ナルトに協力する決定的な決め手となった。

「あつしも協力するツス… あつしは里長のシブキ様に相談したんツ

スけど、結局あつしを守れなかった事を悔やんで、あつしをナルトさんに預けることにしたそうツス：。ただし、ナルトさんの里が軌道に乗ったら同盟を組んでほしいそうツス。」

ハイテンションにフウが言った。

「そうだな：。俺たちが集った里は、戦力において他に並ぶことの無い巨大な里になるだろう：。俺たちの力を悪用する気がないんなら、もちろん同盟を組むのはこちらからお願いしたいってばよ。」

ナルトが答える。

「当たり前ツス。シブキ様は『人と人が繋がれば、この世に争いは無くなる』っていつも言ってる人ツスから。」

フウが自信を持って答えた。

頷くナルトは、集まった人柱力たちを見渡した：。

そして、

「よし：。ビーのおっちゃんを除いて、現在生存している人柱力は、皆俺に協力してくれるって事でいいな？」

改めて確認する。

一同は、強く頷くのだった。

綱手

人柱力会議から、さらに数日が経過した。

ナルトと自来也は、綱手の情報を求め大きな街へと来ていた。

そこで、綱手が短冊街にいることを突き止めた自来也は、ナルトを伴い目的の場所へと向かっていた。

その道すがら…

「のお… ナルト?」

「ん?なんだってばよ。」

「綱手のヤツに会う前に、一つ聞いておきたいんだが…」

自来也は、そう言うのとナルトに聞いた。

「綱手のヤツは最初、火影就任を断ったと言っておったな?」

「ああ… 前にも言ったと思うけど… 『火影なんてクソだ。馬鹿以外やりやしない…』って言ってたからな…」

そのあまりの言動に頭を抱える自来也…

「綱手のヤツはそこまで言ったのか… それでよく火影を引き受けることになったのお…」

「あの時は、その言動にキレた俺が綱手のばあちゃんに喧嘩を売ったんだよなあ…」

「それはまた… 命知らずだのお…」

自来也は、綱手に喧嘩を売るという事を想像して冷や汗を流した…

「もちろん、当時の俺が敵うわけもないんだけど… ちようどエロ仙人から螺旋丸を教わっててな… 第二段階までは習得してて、それをぶつけようとしたんだってばよ… まあ、当たらないわデコピン食らうわ、散々だったけど…」

「で、その螺旋丸(未完成)を見た綱手の婆ちゃんと賭けをすることになったんだってばよ… 一週間でマスターすれば、ばあちゃんの首飾りを貰う… マスターできなければ有り金を渡す… って内容の賭けをさ…」

「…………… (綱手のやつがああ首飾りをのお…)」

自来也は、その話を聞いたときに思った。

綱手はその時既に、ナルトの何かに期待していたのだと。

「で、一週間後……大蛇丸も三代目に封印された腕をなんとかしてもらうために、ばあちゃんの所に来ていてな……戦闘になったんだってばよ……その戦闘で螺旋丸をマスターして賭けに勝ったんだけど……その後、理由はわかんねえけど……ばあちゃんも火影の就任を受けることにしたんだよな……」

「うむ……イマイチ要領を得んのお……（以前のナルトは火影を指し続けていたそうだから……或いは……）」

ナルトの話では、綱手の心変わりの理由まではわからなかったが、首飾りを賭けるという言葉から、おおよその理由を推察した自来也。

おそらく、以前のナルトにナワキやダン……二人の男を重ねていたのかもしれない……そう考えた。

しかし、今のナルトは火影など目指してはいない……それどころか里を抜けようとしている程だ……

（これは……思った以上に難易度が高そうだのお……）

どうやって綱手を説得するか……

少し憂鬱になる自来也だった。

そして、短冊街に到着した自来也たち。

ある居酒屋にて、偶然にも綱手に会うことに成功する。

「ふん……懐かしい顔だ……私に何か用事かい？」

自来也に会うなり、憎まれ口を叩く綱手。

「率直に言う……綱手……里からお前に、五代目火影就任の要請が出た。」

「!?」

自来也の言葉に驚く綱手とシズネ。

「お前があちこちで遊び呆けている間に、木の葉の情勢は大きく変わってのお……」

「大蛇丸が、木の葉に戦争を吹っ掛けたって話は、噂話程度には情報を仕入れている……だけどそれは失敗したそうじゃないか？」

綱手が言う。

「まさか… 木の葉崩しで三代目様が…」

シズネは最悪のシナリオを考える。

「いや… 三代目は元気なんだが…」

それを否定する自来也… しかし、その歯切れは、悪い…

「なんだ… 知ってることがあるなら、はつきり言いな！」

綱手か後を促す…

「ちと… その後の政治的判断に失敗してお… 責任を取って辞任したって訳だ…」

チラリとナルトを見てから言う自来也。

ナルトは、我関せず… 黙々と食事をしていた。

「猿飛先生は、何したってのさ？」

「それは… こんな場所では言えんのお… それで… 返答は？引き受けてくれるか？」

自来也の問いに少し考える綱手…

「どうなんだ？綱手…」

自来也が再度聞く。すると…

「あり得ないな… 断る。」

綱手は、そう言って拒否する。

(やっぱりな…)

ナルトは、予想通りの返答に静かに思っていた。

「どうしてもダメかのお？」

自来也は、なおも食い下がる。

「だから言ったろ？エロ仙人… 綱手のばあちゃんに頼むより、端からエロ仙人が火影をやった方が良いつてばよ…」

そんな自来也をからかうかの様に、ナルトが口を挟んだ。

「自来也… さっきから当然のようにお前の横にいるそのガキはなんだ？おまけに人をババア呼ばわりするとは… 失礼なガキだね…」

ナルトの言動にカチンと来た綱手が自来也に、訊ねる。

「… うずまきナルトだよ…」

(なるほど… コイツが九尾のガキか…)

それだけで、ナルトが木の葉の人柱力だと理解する綱手。

「自来也……この子は前の弟子と違って、口がとてつもなく悪い上に、顔まで悪いようだね。」

その悪口を聞き流しアクビをするナルト……

「おまけに態度も悪い……目上に対する礼儀を知らないガキだね……」
額に血管が浮き出るのを懸命に堪える綱手……

「四代目と比べられりや、誰だってキツイだろーよ……なんせアイツは忍としての器は歴代一だった。術の才に優れ、頭脳明晰……人望に満ち……ワシ並みに男前だったしのお……」

綱手の様子をハラハラしながら見守りつつ、そう言った自来也。

「だが、その四代目すらすぐに死んだ……里のために命まで賭けて……命は金とは違う……簡単に賭け捨てするのは、バカのことだ。」

四代目について、そう評価する綱手……

「それは違うってばよ……」

その評価を否定したのはナルト……

「確かに四代目は命を懸けて里を救った……けどあの時……九尾に攻撃されそうになった赤ん坊を、その身を盾にして守った……その行為は里のためでもないし、ましてや簡単に命を賭けた訳でもねえ……ただ家族を守りたい……それだけの強い思いが身体を突き動かしたんだ……家族のために命を賭けるのは……当たり前前事だ……決してバカにされる行動なんかじゃねえ……」

「お前……知ってるのか……あの時の事を……」

ナルトの言葉に、四代目がナルトの父親であることを、ナルト自身認識していることに気付いた綱手……

「知ってる……四代目が俺に九尾を封印したこともな……」

「………それでも……父親を擁護するのかい？」

「別に四代目を、擁護してる訳じゃねえってばよ……自分の子供を助けようと命を賭けた……その行動は決してバカにされるもんじゃねえって、そう言ってるだけさ……その後、里のために俺を人柱力にした事は、また別の事だってばよ……」

「まあ、四代目についてはともかく……私のじいさんも二代目も……戦乱の収拾を何よりも望んだみたいだけど……結局は夢半ばに里の

ために犬死にしたらだけ…」

当事者のナルトが割りきっている以上、四代目を引き合いに出すのは悪手と考えた綱手は、初代と二代目を引き合いに出す。

「変わったな…綱手…心でどう思ってきたのかは知らねーが、口にまで出すとはのお…」

「ふん…こう見えて五十代なんでね…歳月は人を変えるのよ…」

「火影なんてクソよ…バカ以外やりやしないわ…」

(本当に言いやがったのお…綱手のやつ…)

「もう良いだろ？エロ仙人…火影ってのは木の葉にとつての心の拠り所でなきゃならねえ…伝説の三忍ってネームバリューは良いけど、火影をクソだ…なんて言うヤツに任せるわけにはいかねえってばよ…」

呆れ口調で、続けるナルト。

「だいたい、綱手のばあちゃんはすぐにキレるし、面倒くさがりだし、口も悪いし、火影に向いてないってばよ…」

ブチッ

何かが切れる音がする…

「さっきから、随分となめた口を聞いてくれるね…ガキ…この私に向かつていい度胸じゃないか！表へ出な？」

綱手は、ナルトにそう言い放つと、外に出ていった。

「ナルト！お前何してくれるんかのお…」

焦る自来也…

「まあ、なっちまったものは仕方ないってばよ…」

ナルトは、苦笑いしながらそう言う外に向かった。

自来也は肩を落として、その後を追うのだった…

賭け

ナルトの挑発を受け、居酒屋を出る綱手。

「綱手様。いくらなんでも大人げないですよ?」

綱手の後を追いかけてきたシズネが、綱手を嗜める。

「ふん。わかっている。私とて本気で相手にするつもりはない。手加減はするさ。ただ...」

「ただ?」

「どうにも、あのガキの雰囲気気になる... 世間知らずのバカ...
と言うには落ち着きすぎている...」

「そうですか? 私にはわかりませんが...」

「そうか? まあ、そうは言っても下忍に変わりはあるまい。せいぜい、軽く揉んでやるさ...」

「やり過ぎないで下さいよ? 綱手様。」

「わかっていると云ったろ?」

綱手とシズネがそんな会話をしていた時...

店からナルトが出てくる。

遅れて自来也も現れた。

「ふん... 遅かったじゃないか... 怖じ気付いたのかと思つたよ。」

「わりいな... ばあちゃん... ちよつとエロ仙人に引き止められてな...」

「まあ、大方そんな所だとは思っていたけどな。」

対峙する両者...

「さて... これからお前にお灸を据えてやる訳だが... こう見えても、私は三忍の一人に数えられた事もある。下忍相手に本気も無いな...」

「.....」

「これ一本で十分だ。」

綱手はそう言うのと、右手の人差し指を挙げて見せる。

「それは構わねえけど、戦う前に一つ賭けをしないか? ばあちや

ん……」

綱手の挑発に乗ること無く、ナルトは何か賭けないかと提案する。「ほお？この私を相手に賭けを提案するとはね……。面白い……。ならば私が勝ったら、お前の有り金を全て戴くとしようかね。」

「つ……。綱手様……」

『賭け』の言葉に気分が乗った綱手は、そんな事を言ってきた。

その言葉を聞いて、呆れるシズネ。

下忍相手に、綱手が負けるハズが無いのに、有り金を置いていけなく、大人気無いにも程がある。

「さて……。ナルト……。あなたは私に何を賭けさせたいんだい？」

綱手の問いに対し、ナルトは少し考えて口を開く。

「そうだな……。一応、俺がここにいるのは、エロ仙人から綱手のばあちゃん火影就任の説得をするって事になってるんだってだよ……。だから……」

「俺が勝ったら、火影就任の打診……。受けて貰うってだよ……」
「……………」

ナルトの言葉に沈黙する綱手……

一方、自来也は納得する。

（上手いのお……。ナルトのヤツめ……。賭け好きの綱手に賭けを求めつつ、こつちの要求を突き付ける……。綱手からしたら、ナルトは所詮は下忍……。これで、乗らなけりや三忍の沽券に関わるしのお……）

「ふん……。お互いが賭ける物が不釣り合いだが……。まあ良いだろう……。私とお前との実力差を考えれば、丁度良いかも知れん……。良いだろう……。これで、賭けは成立だね。」

案の定……。綱手はナルトの提案を受ける。

「勝敗はどう決めるんだってだよ？」

ナルトが聞くと、

「そうだな……。お前をノックダウンすれば私の勝ち……。お前は……。私に一発でもクリーンヒットの攻撃を当てられればそれで勝ちで構わない……」

綱手は、勝敗のルールをそう定めた。

「良いんだな？それで本当に…」

ナルトが確認を求める。

「くどい…もし、お前が本当に私に勝てるなら、火影にでもなんでもなつてやろうじゃないか。」

大きく啖呵を切つた綱手。

「よし、じゃ…それで行くつてばよ。シズネのねえちゃん…悪いけど、審判と…開始の合図を頼むつてばよ。」

「え？ええ…それは構わないけど…本当に良いの？ナルト君…今ならまだ…」

急に話を振られたシズネが、心配そうにナルトに聞くが、ナルトは笑つて頷くだけだった。

シズネは、あまり乗り気ではないが、言われた通り両者の間にたった。

そして…

「えー…それでは、お互いに気を付けて…はじめ！」

開始の合図と共にナルトは六道仙人モードを発動する。

ただし、求道玉は背負っていない。

アレはあまりにも危険すぎるため、命の懸からないような戦いでは使えなかった…

一方、綱手はナルトの変化に驚く。

「な！なんだ…その姿は…」

「わりいな…ばあちゃん…秘密だつてばよ！」

綱手の問いには答えず、言い終わると同時に飛び出すナルト…

(速い!?)

そのスピードにまたも驚愕する綱手。

ナルトのスピードは、明らかに下忍のそれを遙かに凌駕していた…否…下忍どころか上忍すら超えている…

想定していたスピードを大きく凌駕して動くナルトに、その姿を見失ってしまう綱手…

綱手が気付いた時には、ナルトは既に自分の懐に迫っていた。

「ちっ！」

自らの勘を信じ、横に飛ぶ綱手。

それは長年の戦いの経験の成せる、正に神業と言っても良い回避だった。

ナルトの拳が空を切る…

着地した綱手… 今度はこちらの番… とばかりに、指先をナルトに向けるが、その時ナルトの背中から、チャクラで出来た腕が飛び出し、回避してまだ体勢の整っていない… 無防備な綱手に向かい攻撃を繰り返す…

「ぐっ…！」

なんとか、ガードするも勢いで吹き飛ばされる綱手…

着地したとき、目の前にナルトがいた。

「俺の勝ちだつてばよ… ばあちゃん…」

ナルトはそう言うと、拳を軽く綱手の腹に当てたのだった。

五代目火影誕生

綱手とナルトの勝負は、ナルトの勝ちで終わった…

ナルトに当てられた自身の腹部に手を当て、信じられないと言った表情でナルトを見る綱手…

確かに、油断はしていた。

子供とは思えない雰囲気を持ったナルトに、多少の警戒はしていたが、それでも所詮は下忍…

軽く揉んでやるつもりで始めた勝負だった…

しかし、つい先ほどナルトが見せたあの動き…

最大限警戒していたとして、どこまで反応出来たかどうか…

(…無理だな…全盛期の私ですらナルトの動きには付いていけないだろう…)

そう結論付けた綱手は、自来也を見る。

もともと、自来也が連れてきた少年なのだ。

人柱力と言うだけでは収まらない戦闘力について、何か知っているのでは無いかと考えたのだ。

その自来也は、驚愕していた…

ナルトから過去の事を聞いてはいた…

九尾と和解し、その力を自在にコントロール出来ることも聞いていた…

しかし…

(その力がこれほどの物とはのお…)

自来也は、ナルトと大蛇丸の戦いは見ていない。

木の葉崩しの折り、大蛇丸は各地に音隠れの里の部下や大蛇を口寄せして、木の葉の戦力を分散させていた。

自来也もまた、陽動と分かっているにしても、その騒動を解決するために飛び回っていたのだ…

故に、自来也がナルトの戦闘を見るのは、これが初めてだった。

「お前は一体…」

自来也の様子から、問い詰めても分からなそうだと考えた綱手は、

ナルトに直接聞く事にした。

「…………… そうだな…………… ばあちゃんには話しておいた方が良くもな…………… ただ……………」

綱手に問われたナルトは、そう言うのと周りを見る。

しかし……………

「こんな人目の付くところで話せる内容じゃねえんだよな……………」

綱手はナルトの言に尤もだと思った。

「なら、私の宿まで来い。あそこはそう言った密談も漏らさない上等な宿だからな。」

綱手が、自分の宿に誘う。

しかし、ナルトもふと思いつく。

「いや…………… それよりもっと機密性の高い場所があるってばよ。ばあちゃん…………… 俺を信用出来るか?」

「それはお前の話を聞いてからだ。」

「その為に、ばあちゃんに触れるのを許可して欲しいんだってばよ。」

「それは、必要な事なのか?」

「ああ……………」

綱手は、少しの間黙考する…………… そして……………

「…………… 良いだろう……………」

「綱手様!」

綱手の返答に驚くシズネ。

「ナルト君…………… それならまず、私に触れてください。あなたのやろうとしていることが安全だと証明して欲しいんです。」

シズネは、綱手のお付きとして無条件にそれを飲むわけにはいかなかった。

ましてや、ナルトがどんなことをするつもりかも解らない……………

「ん? まあ、俺は構わねえけど……………」

ナルトは、別段気にせず言うが、

「いらん。さっさと私に触れろ。」

綱手がそれを拒否する。

「綱手様!」

「大丈夫だ。」

綱手が強い口調で言う。

その言葉に渋渋引き下がるシズネ。

ならせめて、自分の手の届く所で…

そう考えたシズネは、二人に近づいた。

「ナルト…何をするつもりなんだ？」

自来也もまた、ナルトがこれから行おうとしていることに興味があつたのか近づいてくる。

「そう言えば、エロ仙人には話したただけだったな。折角だからエロ仙人にも見てもらおうか。」

ナルトはそう言うと、右手で自来也に…左手で綱手に触れる。

その時、ナルトから強烈なチャクラが二人に流れ込む。

「これは…」

「なんと巨大なチャクラだ…」

二人の身体に入り込んだチャクラ…

それは九尾のものだ。

「!?」

気が付くと、二人はナルトの精神世界に入り込んでいた。

「わりいな…二人とも…ここに招待するには九喇嘛のチャクラを内に宿していなきやならないんでな…」

突然変わった景色に驚く二人に、見知らぬ青年が声をかける。

「誰だ…お前は…」

綱手が警戒しながら質問する。

「うずまきナルトだってばよ…本来のな…」

その反応には馴れた物で

苦笑しながら告げるナルト。

「そうか…ここはお前の内面の世界だな？だからお前の姿は、青年となつているんだのお…」

ナルトから事情を説明されていた自来也は、すぐに察した。

「そう言うことだってばよ…」

「どういう事だい…説明しな…」

一人、事情を知らない綱手が焦れて説明を求め。

「ここに招待したのは… 外に情報が漏れないのと、説明に時間がかららないからなんだってばよ… 今から二人には、俺の記憶を見せる…」

「記憶だと？」

「そう… 俺が辿った前世の記憶だ…」

ナルトがそう言った瞬間、景色が変わる。

そして、綱手は知った。

うずまきナルトと言う人間の生涯を…

過酷な状況にも挫けず、人との繋がりを求め続けた…

その生きざまは、やがて世界まで救うことになった…

しかしその最後は、信じてきた木の葉の里の人間たちの裏切り…

ようやく得た家族を失った絶望…

里の人間に裏切られたことへの失望…

そして、世界を逆行するナルト…

「……………これが… お前の真実か？ナルト…」

あまりの悲惨な最後に、それしか言えない綱手…

話は聞いていたが、実際に見ると何も言えない自来也…

「… よくもまあ… 人間不信に陥らないもんだな… 私なら木の葉

を灰塵にしてやるところだ…」

綱手は呆れたようにそう言うが、

「いや… 流石に俺も少し考えを変えた… ついでだから、この世界

に来てからの事も見て貰うってばよ。」

そして、続きを見せられた二人…

「随分と暗躍しておるのお…」

ナルトがこの世界に来てからの事を見て冷や汗をかく自来也。

まさか、あの木の葉崩しの時に大蛇丸に契約を持ちかけていたと

は…

さらには、ダンゾウの殺害やイタチの説得…

「おい… 自来也… 私に火影就任の辞令が来たと言っていたが、お

前の方に来てるじゃないか…」

綱手は、ナルトと自来也の話を見て怒りだす…

「そ…それは…あれだ…ワシも色々忙しいからのお…」
後退りする自来也。

そんな自来也に、ナルトが助け船を出した。

「ばあちゃん…ばあちゃんの方が火影には向いてるってばよ…」

「お、おお…その通りだったの…なにしろ綱手は頭がキレるからのお…」

「しかしな…」

「ばあちゃん…ちよつと良いか？」

尚も食い下がる綱手に、ナルトが耳打ちをする。

それを聞いた綱手は、ニンマリと笑う。

「ほお…それは面白い。ナルト…流星は元七代目火影だ。考えることがエグい。」

「フッフッフ…そうでも無いってばよ…」

お互いに笑い合う二人…

その二人を見て、何か不吉な予感がする自来也だった…

「さて…最後に現実に戻る前に、二人に紹介したいヤツがいるんだってばよ。」

ナルトはそう言うと、後ろに目を向ける。

その視線の先にいたのは、九尾の妖狐…九喇嘛だった。

その巨大な身体と、計り知れないほど強大なチャクラに固まる二人。

『そう警戒するな…お前たちが、ナルトに敵対しないなら、ワシが何かすることはせん…』

九喇嘛の言葉にホツとする自来也たち…

「そうか…もちろんワシも綱手もナルトの敵ではない…」

「ああ…」

『ふん…ワシは言葉だけで信用する気はねえ…行動で示すんだな…』

「無論だ…しかし…こうして間近で見ると…でっかいのお…」
いち早く平静を取り戻した自来也が言う。

「大きさもだが、その力も強大過ぎる…。本当に…。ナルトが木の葉への復讐を志さなくて良かったと思うよ。」

改めて、そう思う綱手だった。

そうして、現実世界へと戻った二人…

シズネが急に黙り混んだ二人を心配して声をかけるが、問題が無いとわかると落ち着いた。

それから、一週間後…

木の葉に綱手が帰還した…

ここに、五代目火影が誕生するのだった。

木の葉に戻った綱手姫

時間は少し遡る…

ナルトが綱手の説得に成功し、一行は木の葉へと戻ってきた。
木の葉の門の前にて…

「やれやれ… まさか、こんな形でここに戻ってくることになるとはね…」

懐かしい木の葉の里を見て、一人嘆息する綱手…

「良いじゃないですか、綱手様。きっと木の葉の人達も喜んで迎えてくれますよ。」

シズネは、嬉しそうに綱手を励ます。

綱手の付き人として、綱手の火影就任はとても嬉しい事なのだ。

(どうだかね…)

シズネの言葉に、あまり樂觀的になれない綱手。

「さて… いつまでも、ここで、こうしておるわけにもイカン。中に入るとするかのお…」

自来也の言葉で中へと向かう一行。

「こ、これは自来也様。それに綱手様まで… おかえりなさい。」

門番の忍が、自来也たちに気付き敬礼する。

「お前は…」

その中にナルトがいることに、何かを言いたそうにする門番だったが、自来也が一睨みして黙らせる。

そうして、木の葉の里へと久しぶりに足を踏み入れた綱手。

一行は、そのままヒルゼンのいる火影室へと足を進めていた。

勿論、綱手の発見… そして火影就任の了承についての報告するためである。

現在は、まだヒルゼンが火影業務を行っていた。

火影を辞める事を公表したヒルゼンではあったが、後任が決まらな
い為辞めることが出来なかったのだ。

その道すがら…

ヒソヒソ… ヒソヒソ…

「……………」

ヒソヒソ… ヒソヒソ…

「……………」

一行を目撃した木の葉の人々は、その中にナルトを発見すると、近寄ることはせず遠巻きに見ては、小声で話していた。

「おい、ナルト… あいつらぶん殴ってもいいか？」

その露骨な視線にいい加減キレかけていた綱手は、ナルトに向かって言った。

「それは、止めた方が良いつてばよ。」

綱手の言葉に、苦笑しながら言うナルト。

「何故だ？」

「あれで怒ってたなら、木の葉の人間がほとんどいなくなっちまうつてばよ…」

「……………」

ナルトの記憶は見ていたが、改めて自分の目で見ると、ナルトの現状の酷さに何も言えなくなる綱手。

「ばあちゃんが気にすることじゃねえつてばよ…」

そんな綱手にナルトが気にするなど伝えるが、同じ木の葉の人間として… 何よりもこれから木の葉を率いる事になる次期火影として、ハイそうですか… 等と簡単に頷く訳にはいかなかった。

そんな綱手の心境をなんとなく理解しているナルトは、それ以上特に言うことはなく、一行はそのままヒルゼンの元へと向かった。

そうして火影室の前まで来たナルトたち。

中に入ろうとすると、ナルトが自来也に告げた。

「エロ仙人… わりいけど、俺はここまでだつてばよ。」

「む… 何故だ？ お前さんも今回の任務には携わっていたし、報告も一緒にするべきだと思っただがのお…」

「正直… じいちゃんとは顔を合わせ辛いんだつてばよ…」

ナルトの言葉に、納得する自来也。

確かに、ヒルゼンが火影を辞する事になったのは、ナルトの里抜け発言のせいだ。

(とは言え、あれは猿飛先生の自業自得だと思うがおお...)。

「わかった。報告はワシらのほうで済ませておく。」

「サンキュー、エロ仙人。それじゃあ、綱手のばあちゃんとシズネのねえちゃん、後は頼むってばよ。それから... エロ仙人... 強く生きろよ?。」

そう言っつて、ナルトはその場を後にした。

「ナルトのヤツ... 何を言っつておるんかのお?。」

ナルトの捨て台詞が気になる自来也...:

「まあ、良いだろ。それよりさっさと火影室に入るよ?。」

綱手が、入室を促す。

火影室に足を踏み入れる自来也たち。

「おお... 戻ったか自来也。首尾よく綱手を連れ戻す事が出来た様じゃな。」

入室した自来也たちを歓迎するヒルゼン。

「なに... ナルトのヤツが上手いこと綱手のヤツを説得してくれてのお。」

「アレを説得と言うのか?。」

綱手が自来也にツッコむ。

「プツ... 確かに説得とは言い辛いですけど、綱手様に言うことを聞かせるには、巧妙な手だったと思いますよ。」

シズネは、その時の事を思い出して吹き出す。

確かに賭けを持ち掛け、戦闘を行うことを『説得』とは言い辛いだろう。

それでも、綱手を口で普通に説得するよりも、ずっと良い手だった。

「そうか... ナルトがのう...」

ナルトの名前に、疲れた表情を見せるヒルゼン。

「... 三代目... ナルトの件は聞いた。そして、ここに来る途中、里の反応も見た。正直... 今更、木の葉にナルトを残すことは不可能だ。」

「... わかっておる。」

綱手の言葉に、やや遅れて返事をするヒルゼン。

「さて、綱手。自来也から聞いていると思うが、お前に五代目火影をやつて貰うことになった。了承してくれるな？」

ヒルゼンは気持ちを切り替えると、綱手に告げる。

「わかっている。五代目火影として私は戻ってきたのだからな。」

「ならば良い。早急に引き継ぎを済ませたい。明日、上役を集めて顔合わせを済ませよう。」

「わかった。その場には、シズネも連れていくが構わないな？」

ヒルゼンの提案に、条件を付ける綱手。

「何故じゃ？」

「シズネには引き続き、私の補佐をしてもらうつもりだからさ……」
「わかった。」

綱手の言葉に理解を示すヒルゼン。

「自来也……折角だ。お前も出ろ。」

と、綱手は今度は自来也を見ると、そう言った。

「な、何故ワシまで……」

慌てる自来也。

「もともと、最初に五代目火影を打診されたのはお前だろ？一応、顔くらい出しておけ。」

「ぐっ……わかった。」

正論であるが故に、頷かざるを得ない自来也だった。

翌日……

会議室には、ご意見番であるホムラたちを始め、木の葉の上役が集まっていた。

「さて……私が、今度五代目火影に就任する綱手だ。」

集まった上役たちに挨拶をする綱手。

自来也は、席には付かず壁にもたれ掛かつて、その様子を見ていた。

「うむ。綱手が五代目就任を了承してくれて、ホツとしたわい。」

上役の一人が言う。

その場を集った者たちも、異論は無いようだ。

「さて……私が火影を継いだからには、火影としてお前たちに、一言言っておくことがある……」

「なんじゃ?」

「今回の騒動…三代目が責任を取って終わったが…私から言わせれば木の葉全員の責任だ。」

「なんだと!」

思わず立ち上がる上役の一人。

「うずまきナルトが里を抜ける事になったのは誰のせいだ?」

「それは…三代目がワシらの制止を聞かず、あんな式典を開いたから…」

上役の言葉…

「違うだろ?…それは里を抜けるのに、ちょうど良いタイミングだっただけだ…」

しかし、綱手はそれをぼつさりと否定する。

「……………」

「ナルトが里を抜けるのは、抜けたいと思わせる程に、木の葉があの子を迫害してきたからだろ?」

「それは…」

綱手の言い分に、言葉を詰まらせる上役。

「そうだ…そしてそんな風潮を作り出したのは、あの子を九尾の生まれ変わりとして扱った、あんだ達木の葉の上層部だろ…」

「し、仕方なかったのだ。あの時は、里のため…そうする必要があった。」

綱手の糾弾に言い訳を始める上役達。

「ふん…その結果、木の葉から人柱力がいなくなるって訳か?」

「ぐ…」

「まあ、良い。結局責任は三代目が取った。私は、一言言っておきたかっただけさ。」

綱手の糾弾が終わりホッと一息する上役達。

「さて、私が火影になるに当たって、秘書を付ける。ここにいるシズネだ。」

綱手は、シズネを紹介した。

ようやく、五代目火影就任の議題内容に入った会議。

シズネの事は上役達も承知しているため、特に混乱は無い。
領く上役達。

「それから、私の相談役を一人指名したいのだが、構わないか？」
「誰を指名するのだ？」

ホムラが聞くと、綱手がニヤリと口角を挙げる。

その表情を見て、自来也は嫌な予感を覚えた。

（あの表情・・・見覚えがある・・・ナルトの精神世界で、ナルトに耳打ちされていたとき・・・）

「そこにいる自来也を指名したい。」

「なあ!？」

綱手は自来也を相談役に指名した。

驚いて、妙な声を上げる自来也。

「ほう・・・自来也をか。」

「そうだ。ナルトが木の葉を去る以上、木の葉の戦力は著しく低下したと他里に見られるだろう。だが、私と自来也・・・三忍のうち二人が木の葉に戻ったと発表すれば、他里への牽制にはなるはずだ。」

「うむ・・・確かにな。」

「そう言うわけだ。自来也。よろしく頼むぞ?」

イイ顔で自来也に、そう言った綱手。

周りの上役達も、その絶妙な手には感心していた。

「いやいや、よろしく頼むじゃねえのお。ワシにはやらなきやならぬ
い事があるんだ。そんな暇はねえつての。」

一人、自来也だけが反対していた。

だが、綱手は自来也の肩に手を置くと・・・

「自来也・・・私はお願ひしてる訳じゃない・・・五代目火影として命令
しているんだ・・・」

楽しそうに、そう言った。

「おうっふ・・・」

ガツクリと膝を付き、絶望する自来也。

そんな自来也に、綱手は優しい声で言った。

「自来也・・・書類仕事とか・・・面倒なことはお前に任せただぞ?」

「ぐっはっ」

完全に倒れこむ自来也。

「こ、こんな事なら… 最初からワシが火影を受けていれば良かったかのお…」

自来也は最後にそう呟くのだった。

日向の屋敷にて…

火影室の前で、自来也たちと別れたナルト。

そのナルトは、帰還の挨拶を兼ねて日向の屋敷に向かっていた。既にヒアシとの顔合わせは済ませており、ヒアシもナルトの事を入り込んでくれた。

その為、いつでも屋敷に入って構わないとお墨付きも貰っていたのだ。

「お邪魔します。」

「あなたは！」

日向家に足を踏み入れたナルト。

そのナルトを待っていたのはハナビとの遭遇であった。

「……………何かご用ですか？」

ハナビの表情は固かった…。その表情のまま、挨拶も無く用件を聞くハナビに、苦笑するナルト。

前回の訪問時、もちろんヒナタの実妹であるハナビとも顔を合わせている。

しかし、前世では良好な関係を築いていた義妹のハナビも、この世界では初対面…

ましてや、ハナビからすれば、大好きな姉を木の葉から連れ去ろうとする憎い相手である。

この頃のハナビとヒナタは、決して良好な関係では無かった。

憧れていた姉を負かしてしまったハナビ…

その結果、父はヒナタを見捨てハナビもまた、跡目を継ぐために厳しい稽古を積んでいた。

年下の自分が、姉を負かしてしまった負い目…

跡目を継ぐことになってしまったプレッシャー…

そして、父の期待に応えようとする責任感…

全てが、ハナビからヒナタを遠ざける要因となっていた…

しかし、ハナビは決してヒナタを嫌いになつたわけではない…

確かに直接試合をしたときに、ヒナタへの失望はあった。

それでも、昔は憧れ、目標として来た姉なのだ。
嫌いになれるハズなど無い。

その姉を、木の葉から連れ去ろうとする目の前の少年…
ハナビは、その少年が浮かべている苦笑に苛立つ。

「……………もう一度聞きます…何をしに来たのですか？」

「そりゃあ、もちろんヒナタに会いに来たんだってばよ。」

「生憎ですが、姉は父との稽古で忙しいんです。貴方と会う時間はありません。」

そう…ヒナタは今忙しい。

数週間前、ヒアシと和解したヒナタは現在、ヒアシ自らが指導をし
て日向流を極めようとしていた。

その稽古を間近で見たハナビは戦慄した。

自分が父と稽古していた時…当然厳しい稽古だった。

日向の跡目として恥じぬ様にと、過酷な修行を行ってきた自負も
あった。

しかし、ヒアシとヒナタの修行はハナビのものとは別種である。
実戦を想定し、一歩間違えれば死ぬ可能性すらありえる組手…

倒れるまで続けられる八卦の型取り稽古…

ハナビは一度、二人を止めようとした…

しかし、ヒアシは勿論…ヒナタも辞めようとはしなかった。

「ナルト君の隣に立つ為に…私はもっと強くないといけない
の…」

ヒナタは、そう言って稽古を再開してしまった。

その時の事を思い出し、思わず唇を噛むハナビ。

「わかった。じゃあ挨拶だけさせて貰うってばよ。」

ナルトは、ハナビの言葉に頷いて言う。

「……………何故なんですか？」

そんなナルトに、ハナビが押し殺した声で言った。

「ん？」

「何故…姉様が、あなたなんかを好きになっただんですか？」

「……………」

「以前、私はあなたを街で見掛けた事があります。その時のあなたは、街のお面屋に罵倒されました。『疫病神』…と。その時、私の侍女のナツが貴方には関わるなど言いました…」
「……………」

ハナビの言葉を黙って聞いているナルト…

「その通りでした… あなたに関わったせいで、姉様は木の葉から出て行くことになってしまった… 何故… 姉様はあなたなんかを…」

一度、爆発してしまった感情は、止めることが出来ない…

ハナビは、自身の思いを吐き出す…

そんなハナビに対し、ナルトが静かに口を開く。

「…………… そうだな… 俺はヒナタじゃ無いから、その問いには答えられない…」
「……………」

「ハナビが言うように、俺と恋人になったことで、ヒナタが危険になったのは確かだつてばよ… だからこそ木の葉にはいさせられない。ここには俺を憎む連中が多くいるからな…」

「やっぱり… だったら姉様の為に別れてくれれば良いじゃないですか。これじゃあ、姉様が不幸すぎます。」

ナルトの言葉に、激昂するハナビ。

「それは違うつてばよ。」

だが、ナルトはそれを否定する。

「ヒナタは決して不幸にはさせない。」

「何故… そんなことが言えるんですか？」

ハナビが聞く。

すると、ナルトはニツと笑い、

「俺が、ヒナタを幸せにするからだつてばよ。」

そう断言した。

その言葉に唾然とするハナビ。

「あなたは… 何故、そんなことを言い切れるんですか… 姉様は故郷を追われるんですよ？ 家族とも別れなければならぬ… あなた

のせいで・・・それなのにどうして・・・」

大声で叫ぶハナビ。

その時、ハナビに声をかける人物がいた・・・

「そこまでだよ。ハナビ・・・」

「!?姉様・・・」

ヒナタだった。

そこにはヒアシもいる。

玄関先で、大声で話していれば当然目立つ。

「ナルト君・・・帰ってきたんだね・・・おかえりなさい。」

ヒナタはまず、ナルトに挨拶をした。

「・・・ただいま。」

ヒナタの挨拶に、答えるナルト。

その表情には苦笑が浮かんでいた。

「ナルト・・・帰ってきたと言うことは、首尾よく綱手様に会えたのだな。」

ヒアシが聞く。

「はい。今は火影室で三代目に報告をしていると思います。」

「そうか・・・取り敢えずあがりなさい。」

ヒアシが言うが、

「いえ。今日は挨拶だけで帰ります。」

しかしナルトは、やんわりとその誘いを断る。

「ナルト君・・・ごめんね?」

「良いってばよ。」

「ハナビの事は、任せてくれる?」

「ああ。頼むってばよ。俺も・・・未来の義妹に憎まれていたく無いしな・・・」

「それじゃあ、失礼します。」

「うむ・・・すまん。また明日、来てくれ。」

「はい。」

ナルトは、日向家を後にする。

「父上・・・今日はこのまま稽古を終えても構いませんか?」

その後姿を見届けたヒナタが、ヒアシに聞いた。

「うむ… ハナビの説得はお前にしかできない。」

ヒアシはすぐに頷くと、邪魔にならぬようにと、自室へと戻っていった。

「……………」

ヒナタと二人きりになったハナビは、ばつの悪そうな顔をしていた。

「ねえ… ハナビ…」

「私は… 間違ったことは言っていない。」

ヒナタがハナビに声をかけると、それに被せるようにハナビが言った。

「だってそうでしょ？あの人と関わったせいで、姉様は木の葉を出ていかなきゃならなくなったんだよ？それに家族とも離ればなれになって…」

「…………… ねえ… ハナビ… 確かに、木の葉を出ることになったし、父上やハナビとなかなか会えなくなる… それは確かだよ？でもね… 私は不幸なんかじゃないよ？」

「どうして？」

ハナビが聞くと、ヒナタはとても幸せそうな顔で、

「だって… 大好きな人と一緒にいられるんだもん… 私は今… 凄く幸せなんだ。」

そう言った。

「なんで、姉様はあの人を好きになったの？」

ハナビは、どうしても知りたかった。

ハナビの問いに口を開くヒナタ。

「…………… それはね、ナルト君が人に勇気を与えてくれる人だからだよ。」

「勇気？」

「ハナビも知ってるよね？昔の私は引っ込み思案で、自分に自信がなくて、争いも嫌いだった…」

頷くハナビ。

「勿論、私だってそんな自分が嫌いだった…。そんなある日、ナルト君が一人で修行する姿を見掛けたんだ…。」

「……………」

「ナルト君は、アカデミーでは落ちこぼれで手裏剣術もなかなか上達しなかったわ…。皆、そんなナルト君をバカにした…。でも、私はそんなナルト君に共感した…。私も日向の落ちこぼれ…。きつとこの人も同じだ…。そう思ってた…。」

「でもね…。ナルト君はそこで諦めたりしなかった。一人で…。いつも遅くなるまで修行して…。そんなナルト君を見ていたら、自分も変わるんじゃないかって…。こんな私でも変わるんじゃないかって…。そう思えたの…。」

「……………」

「私にとってナルト君は、私に勇気を…。光をくれる人…。太陽みたいな人なの…。」

「だから、私はナルト君が大好きなのよ。」

ヒナタは、ハナビの目をしっかりと見つめて断言した。

「姉様は…。今…。本当に幸せなの?」

ハナビは、それでももう一度訊ねる。

「幸せだよ。」

―俺がヒナタを、幸せにする―

その時、ハナビは先程ナルトが言ったことを思い出していた。

(…口先だけじゃ無いんですね…。ナルトさん…)

「姉様…。明日…。あの人が来たら、もう一度話してみるよ…。今度はちゃんと…。」

ハナビはそう言った。

「うん。」

ヒナタは、その言葉に満足し頷くのだった。

次の日、姉の事を含めしつかりとナルトと話をしたハナビはいつものまにか、ナルトと打ち解けていた。

それどころか、前日の事が嘘のようにナルトになつくようになっていた。

その様はとても仲睦まじく、ちよつとだけヤキモチを焼くヒナタであつた。

暴走

時間は少し戻る。

ハナビの事をヒナタに任せたナルトは、一人、現在ねぐらにしている死の森の祠へと戻ってきた。

「ハア… 疲れたってばよ…」

ハナビと仲良くなれていないことから、精神的に疲弊していたナルト。

その時、そのナルトに声をかける人物がいた。

「ようやく戻ってきやがったか… ナルト…」

そこにいた人物… それはサスケであった。

「なんだサスケか… 怪我はもう良いのか？」

サスケの顔を見たナルトは、目を細めてそう言った。

「ふん… そんなもの… もともと大した怪我でも無いんだ。とつくに完治してるさ。」

サスケはそう言うが、未だに包帯も取れておらず、とても完調には見えない。

何よりも…

「そうか？ お前の事だから、治療の途中で病院を抜け出したんじゃねえかと思ってたんだけどな。しかも、その身体でいつ帰ってくるかもわからねえ俺を、こんな場所でわざわざ張っていた… と…」

ナルトの言葉にビクリツと身体を震わせるサスケ…

「そ、そんなことはどうでも良い… ナルト… 俺は、てめえを殺さなきゃならねえ！」

その言葉を証明するかのようにサスケの目は、殺意にまみれていた。

「ほお… 一応聞いておくけど… なんでだってばよ？」

「てめえはイタチを殺した…」

「うちはイタチは、うちは一族を皆殺しにした張本人だろ？ ソイツを殺して感謝こそされても、恨まれる理由は無えってばよ？」

「アイツは… イタチは… 俺が殺さなきゃならなかったんだ… う

ちは一族の最後の生き残りとして…。その為に、アイツは俺を生かしたんだからな。それをてめえは…。」

ナルトの言い様に激昂するサスケ。

だが、ナルトはサスケの言い分にむしろ呆れた顔をする。

「アホらしい…。」

「なんだと!」

「あの時…。そもそもイタチの目的は俺であって、お前じゃ無かっただろ?」

「違う!俺は生かされたんだ…。イタチへの復讐者として…。」

「はっ!そんなの、お前の思い込みに過ぎねえだろ?」

「なんだと?」

「考えても見ろ?お前はイタチより遥かに劣る…。年齢の問題じゃねえってばよ?…。同じ年齢の時を比較してもだ…。イタチは俺らの年齢の時には、既に暗部に入る程の力を持っていたらしいじゃねえか。そんなお前に、イタチが何を期待するってんだ?復讐者として選ばれた?バカらしい…。お前がイタチを殺せるハズがねえってばよ…。」

「ナルトオ!」

あまりにも辛辣なナルトの言葉に、我慢が出来なくなったサスケが掴みかかる。

しかし、その攻撃はあっさりとかわされた挙げ句、逆に地面に引き倒されて腕の関節を極められてしまう。

「ぐあっ!」

「お前が生かされたのが、イタチが自身を殺して貰うため?違う。イタチがお前を生かしたのは、お前を愛していたからだ…。」

サスケを拘束しながら、言い放つナルト。

「な…。に…。」

「イタチがうちは一族を皆殺しにした理由はな…。うちは一族が木の葉の里でクーデターを起こすつもりだったからだ…。」

「う…。そ…。だ!」

「イタチは、うちは一族である事よりも、木の葉の忍である事を選ん

だ…それでも…お前だけは殺せなかった…家族として…両親はクーデターの首謀者…見逃すことは出来ない…だからせめて弟のお前だけでも生きていて欲しかった。」

「うそだ！」

「愛する弟に、憎まれてでも生きていて欲しかった…それがうちはイタチの人生だった。」

「嘘だあ!!!」

その瞬間…ナルトに関節を極められていた腕に千鳥を発動させたサスケ。

ナルトは、すんでの所で極めていた関節を離して距離を取る。

「てめえの言った事なんて、全部デタラメだ。」

「ナルト…てめえを殺す。」

サスケは再び千鳥を発動させる。

「……………」

だが、ナルトは構えすらしない。

そのナルトの態度に益々苛立つサスケ。

「うおおおおおおおお。」

そして、サスケはついに動き出す。

真つ直ぐにナルト目掛けて突っ込むサスケ。

そのスピードは、イタチに使った時のソレを上回っていた。

ナルトは棒立ちのまま反応しない…

いや…反応出来ないのだ…サスケはそう思った。

そしてサスケの千鳥がナルト目掛けて向かう。

殺った！

サスケが思った瞬間…

サスケは突然横から衝撃を受け、吹き飛ばされる。

「ぐっ…なにが…」

なんとか立ち上がりナルトを見ると、そこには一本のチャクラの腕が生えていた。

「九尾の力か…」

「……………サスケ…今のお前は俺が相手をするまでも無いってば

よ。九喇嘛の尾の一本とでも遊んでいろ…」

ナルトの宣言と共に、チャクラの腕がサスケに向かって伸びる。

その腕は、サスケの動きを正確に捉えていた。

どこまでも追ってくる腕…

『火遁 豪火球の術！』

術で攻撃しても効果はない…

「くっ… だったら…」

サスケは起爆札を持ち、腕に張り付けた。

ドオオオオオオオン!!!

けたたましい音と共に爆発が起こる。

「どうだ！」

もうもうと立ち込める煙… その煙が晴れると、そこにはまるで変わった様子の無い腕がそこにあつた。

顔がひきつるサスケ。

そのサスケに向かって腕が突っ込んできた。

サスケは後ろに跳び、かわそうとするが、ついに捕まってしまう。

「さて… 終わりだな… サスケ…」

「ちつくしやう…」

「まあ… なんだ… イタチを殺すっていうお前の夢を潰したのは俺だけど… まさかもう一つの夢も潰す事になるなんてな…」

「もう一つの夢だと？」

「ん？イタチを見て忘れちゃったのか？お前の夢はもう一つあったら？一族の再興って夢が…」

ナルトの言葉に、ハツとするサスケ…

「お前は、この世界に残った最後の『うちは』。お前が死ねば、うちは一族は滅亡だってばよ。」

一瞬、ナルトが何を言っているのかサスケは理解できなかった…

キョトンとするサスケの表情を見たナルトは笑う。

「まさか、お前… 俺を殺すつもりだったのに、自分は殺されないとでも思ってたのか？」

サツと顔から血が引いていくサスケ。

強さとは・・・

時間はまた、遡る。

サクラは、サスケが病院を抜け出してからずっと、サスケを探していた・・・

そして、今日・・・偶然ナルトの帰還を知ったサクラは、ナルトにサスケを探してもらおうと、ナルトの元に来ていたのだ。

そこでサクラが目にしたのは、ナルトに逆恨みし、ナルトを殺そうとするサスケの姿・・・

だが、ナルトとサスケでは実力に差がありすぎる。

ナルトがサスケを制して、終わりだろう・・・サクラは、そう考えた。しかし、現実は甘くない・・・

そう・・・サスケはナルトを殺そうとしたのだ・・・

殺されたって文句が言える立場ではない。

笑って許す・・・なんて、本来そうあるわけが無い。

サクラは、自分の楽観的な考えに後悔していた・・・

そして、ナルトがサスケに何かの術を当てようとする。

それはきつと、サスケの命を奪うほどの威力があるのだろうか。

気が付いた時・・・サクラは、思わず叫んでいた。

「やめてええええええええええええ！」

「!?」

サクラの悲鳴が辺りに木霊した。

ナルトの螺旋丸がサスケの鼻先数センチで止まる。

「・・・・・・・・ 俺ってば一体何を・・・」

ナルトはこの時、正気を失っていた。

何度言葉を尽くしても、サスケは復讐に生きようとする・・・

そして今、その対象は自分だった。

ナルト自身、こうなることは予想していた。

しかし、実際に憎しみの籠った目で見られ、命を奪わんとナルトを執拗に攻撃するサスケの姿に、前世での自身の・・・そして愛する家族の最後がフラッシュバックする・・・

いつしか、サスケの姿は自分を… 何よりも家族を奪った男たちの姿にだぶって見えるようになっていた。

敵は排除しなければならぬ。敵を生かしておけば、いつかヒナタを巻き込みヒナタを、殺してしまうかもしれない…

それだけは、絶対にさせない…

ナルトにとって、サスケはもはや「敵」という認識しか無くなっていた…

敵を排除する… 無感情に、ただ目の前の敵を殺そうとしたその時、サクラの悲痛な叫びがナルトを正気に戻したのだ。

正気に戻ったナルトは、愕然としていた。

（まさかサスケを殺そうとしちまうなんて… ハハ… 俺ってば… 情けねえな… いつまでも過去を引きずって…）

「くっ… はあ… はあ… はあ…」

ナルトの拘束が一瞬緩んだ隙に、なんとか脱出したサスケ。

その身体は死の恐怖に震えていた…

スツとサスケを視線で追うナルト…

特に意識したわけでは無いが、それはサスケにとって、恐怖だった。

これまで、ただ復讐のためだけに生きてきたサスケは、その結果自分が死んでも構わないと思っていた…

しかし、ナルトの指摘によって自分が最後の『うちは』であり、自分の命にはうちはの再興がかかっていることによく気付いたサスケは、生への執着が生まれていた…

生きたい… 生への渴望からナルトに恐怖するサスケ…

その目を見たナルトは苦笑する。

（こうなったら、この状況を利用してみるってばよ…）

一歩前に進むナルト。

サスケは、その分後ずさる。

その時、サスケとナルトの間に立ちふさがる者がいた。

サクラである。

「止めて、ナルト。お願いサスケ君を殺さないで。」

サクラはサスケを抱き、背中を向ける。

「お願いナルト……確かにサスケ君はあなたを殺そうとした……それは許される事じゃ無いのかも知れない……それでも……お願い……サスケ君を殺さないで……」

「サクラ？」

サスケは未だ震えが止まらずにいた。

ただ、呆然としながら自分を守ろうとしてくれていたサクラの名前を呼ぶ。

「ナルト……サスケ君の代わりに私を殺してくれても良い……だからお願い……それでサスケ君を許して……」

「な!？」

サクラの言葉に驚くサスケ。

「ダメだ。サクラ……ナルト、お前を殺そうとしたのは俺だろ。サクラは関係ない!!殺すなら俺を殺せ!」

さつきまで、ナルトに怯えていたサスケだったが、サクラが自分の命を身代わりにするように提案した時、その恐怖は一辺に吹き飛んでいた。

あるのは、サクラを守ろうとする意思。

サスケは震えを止め、サクラの前にその身をさらす。

「ダメよ。サスケ君。ナルト……殺すなら私を……」

だが、そのサスケをサクラが止める。

「いい加減にしろ……サクラ……これは俺の問題だ。お前は関係ないだろ。」

「関係あるわよ。だって……」

サクラは、怒鳴った。関係ないはずがない。

「だって……私はサスケ君が好きだから!!!……大好きな人には生きていて欲しいの……」

「!？」

突然の告白に、驚くサスケ。自分を助ける為についた嘘なのではと疑うサスケ。

だが、サクラの表情を見て、そんな感情は無くなっていた。

サクラは、泣いていた……その涙はとても偽りの物とは思えなかつ

た……そしてその言葉も……

「何でだ？」

「え？」

「何で……こんな俺なんかの事を……」

サスケには、どうしても自分が誰かに好意を向けられるような人間だとは思えなかった。

いつも仏頂面で、皮肉屋……

誰かに誘われても、拒否して常に一人だった……

イタチを殺す為に他の全てを犠牲にしてきた……

当然、同じ班になったサクラにも、それほど友好的に接した覚えはない……

それなのに、どうして……

そんなサスケに、サクラが口を開いた。

「最初は、ただのミーハーだったと思う……サスケ君はアカデミーのトップで、顔も格好良いし、他の同級生より大人びていて、クールで……アカデミーのほとんどのくの一は、貴方に憧れていたから……」

「……」

「でも、同じ班になって……いろんな任務を一緒にこなして……サスケ君も悩んだり、苦しんだり……私と同じ……普通の人なんだって気付いた……その時に、憧れが恋に変わったんだと思う。」

「サスケ君が、何か重いものを背負ってるのは分かった……それを果たせず……自分に焦りを覚えていたのも……私は、そんなサスケ君を見て、サスケ君の力になりたいと思った……だからナルトに修行を付けてもらった……今の私の望みは、サスケ君を助けることなの……だから……」

サクラの独白を聞いたサスケは、瞠目する。

「ありがとう……サクラ……こんな俺を好きになってくれて……こんなに……俺に対して真っ直ぐ感情をぶつけてきたのは、多分……お前が初めてだと思う。」

「サスケ君……」

「本当なら、ここで返事をするべきなんだろうけど……今までそんな

こと……考えてもこなかったから……どう答えたら良いかわからない……でも……少なくとも俺はお前に死んでほしくない……それは確かだ……だから……俺を殺してくれ……ナルト……」

サスケは、ナルトに頼む。

「お？おお……二人とも、俺のこと忘れたのかと思ってたつてばよ……」

突然の告白タイムに、居心地悪そうにしていたナルトは、突然声をかけられて焦りながら答える。

「サスケ君!」

「サクラ……返事をする事が出来なくて……済まない。」
謝るサスケ。

「サスケ君、ダメ……お願い……私を置いていかないで……」

懇願するサクラには返事をせず、ナルトに近付いていくサスケ。

「ナルト……済まなかった……」

イタチへの復讐心が薄れたサスケは、素直にナルトに謝罪する……

「覚悟は良いか？サスケ。」

「ああ……」

「サスケ君!!!」

ナルトは拳を振り上げると、サスケの頭を思いきり叩いた。

「ぐあつ……」

「じゃ、これでチャラにしといてやるつてばよ……サスケ……」

頭を押さえるサスケにナルトが告げた。

「ナルト?」

サクラは、呆然とその様を見ている。

「さっきまでのサスケなら、もしかしたら俺は本当にお前を殺したかも知しんねえ……でも今のお前は、殺す必要が無いと思った……それだけだつてばよ……」

「どういう事だ?」

「お前はもう、復讐に生きる男じゃ無いだろ?」

サクラを見ながら、ナルトは言った。

「え?」

「お前の心が今も復讐に囚われてるなら、サクラちゃんを身代わりにしても次の機会を待つだろ？でも、お前はサクラちゃんを守ろうと自分の身をさらした…サスケ…今でも俺に復讐したいか？」

「いや…冷静に考えれば、ただの逆恨みだって分かった…」

「だったら、もう俺たちが争う必要なんて無いだろ？」

「でも、俺はお前を殺そうとした…」

サスケは、不安だった。

「それは、もう良いってばよ…俺がお前を殺そうとしたのは、未来でヒナタや家族の害になるかも考えたからだってばよ…」

「お前の命を狙った事は良いのか？」

「別になんともなつて無いだろ？」

「うっ…」

自分の力はナルトの脅威になり得ていない…

そう指摘されたサスケは思わず呻く。

「それに…」

ナルトはサクラを見る。

つられてサスケもサクラを見た。

「お前を殺したら、今度はサクラちゃんが復讐に来そうだしな。」

笑いながら言うナルト。

「ちよつと、それどういう意味よ…でも…本当にありがとうナルト。」

落ち着いたサクラが、改めてナルトに礼を言う。

「二人とも…今日はもう遅い。帰った方が良いってばよ。」

「ああ…」

「うん。」

ナルトは、そう言うサスケに向き直り告げる。

「サスケ…今のお前なら…イタチの強さに迫れるかも知れねえってばよ…」

「え？」

「復讐に生きてきたお前にはわからねえだろうけどな…人は、自分の大事な者を守ろうとする時にこそ、その強さを発揮するんだってば

よ。」

「……………」

「確かに、復讐心も強くなろうとするきっかけにはなるってばよ？でもそれで得られる強さなんて、自分を支える物にはなりはしねえんだってばよ……」

ナルトは言葉を続ける。

「俺に恐怖したお前の……その震えを止めたのはなんだった？どうして、俺の前にまた出ることが出来た？もう一度……良く考えてみるんだな？」

ナルトの言葉に思うことがあったサスケは、素直に頷いた。

ナルトの見守る中、二人は町へと戻って行くのだった。

さよなら木の葉 前編

綱手が木の葉に帰還し、正式に五代目火影となつて一月が経過した。

ようやく引き継ぎも終わり、五代目火影である綱手を中心とした新体制が出来上がる。

その綱手は今、ナルトの元を訪れていた。

「綱手のばあちゃん！久しぶりだつてばよ。」

「元氣そうで何よりだな。ナルト。」

ナルトの姿を認めた綱手は、笑顔で挨拶をする。

だが、すぐにその表情は呆れに変わる。

「しかし…なんだ…一応、ここは木の葉の国有地なんだが…まるでお前の私有地みたいだな…」

ナルトがこの祠に移り住んで数カ月…

そこは、ナルトが住みやすいようにリフォームが施されていた…

ナルトの同期達を中心に、家具を持ち寄りそこは今や、ナルトの同期たちの溜まり場となっていた。

「まあ、町にはいられないんだし、大目に見てくればよ。ばあちゃん。」

「まあ、時間を貰ったのはこっちだからな…ある程度は大目に見てやるが…ここは演習でも使うからな…出ていく時には、片付けておけよ？」

「つてことは、とうとう決まったんだな？」

綱手の言葉に、その日が決まったのだと察したナルト。

「うむ。私が今日ここに来たのは、それを伝える為だ。引き継ぎやら、体制を整えるのやらで時間を食ったが、ようやくお前の里抜けの日程が決まった…」

「……………そうか…」

綱手からその事を聞いたナルト…しかし、ナルトはうかない顔をしている。

「うん？嬉しく無いのか？」

綱手が思わず聞くと、ナルトは途方に暮れたような顔で、

「どうかな？俺自身…よくわかってないんだってばよ…例え、どれ程蔑まれても…やっぱり木の葉は俺の故郷だったから…」

と、答えた。

その答えに、綱手は少し険しい顔を見ると、

「ナルト…今はお前もまだ木の葉の一員だ。だから火影として、私からお前にアドバイスを贈る。自分で決めた事なら迷わず進め…例えその先に後悔が待っていても、自分で決めた事なら、少なくとも納得はできる。反対に中途半端な感情で、その選択をやめるならその先には後悔しか残らん。だから進め。それがお前の…ヒナタの幸せに繋がると信じて…な。」

ナルトは綱手の言葉を神秘的な面持ちで聞くと、

「…五代目火影の言葉…しっかりと胸に刻んだってばよ。」
しっかりと告げるのだった。

「さて…ヒナタはここにはいないのか？ナルト。」

話を切り替えた綱手がナルトに聞いた。

「ヒナタなら、家でヒアシさんと修行してると思うけど？」

「ちっ！ここにヒナタがいれば面倒が無いのに…」

ナルトの返答に悪態を吐く綱手。

「ヒナタに何か用だったのか？ばあちゃん。」

「何を言っている。今回の件は、お前とヒナタ両方に関わる問題だろ？お前に言って終わりって訳にはいかないだろ。」

「あ！そうだったってばよ…」

「全く…そんなんで良く七代目火影としてやっていけたね…」

「相談役が優秀だったからな…」

「奈良のガキか…」

綱手はシカマルの事を思い出していた。

確かに、シカマルの頭脳は父のシカクに劣らず優秀だ。経験が無い分、今はシカクに比べて未熟だが、経験を積みばシカクに匹敵…或いはそれを超える忍になるだろう。

先の成長を楽しみにしたい所だが、シカマルはナルトの事情を知っており、里を抜ける策を授けた張本人でもある。

シカマル自身が、木の葉に失望している可能性は十分にあった。(シカマルについては、少し注意しておいた方が良いかもしれんな…ナルトに続いて里を抜けると、言い出しかねん…)

綱手は、今後のシカマルの動向に注意しようとの心の中で決める。

それから、綱手とナルトは日向家へと移動する。

綱手の側近であるシズネや、一部の暗部も当然

着いてきていたが、彼らは外で待機である。

「これは五代目様…それにナルトも…当家に何か御用でしょうか。」

綱手とナルトの姿を認めたヒアシが出迎える。

「うむ。薄々気付いていると思うが…例の件が正式に承認された。そこで、私自ら辞令を伝えようと出向いたのだ。ヒナタはいるか？」

綱手が用件を伝えると、ヒアシも神妙に頷く。

「わかりました。しかし、ヒナタは今修行で気を失っておりまして…少しお時間を頂きたいのですが？」

「構わん…ここで待たせて貰おう。」

「ありがとうございます。」

「ヒアシさん。ヒナタは大丈夫なのか？」

ナルトが心配して聞くと、

「チャクラの使いすぎで倒れただけだ。小一時間もすれば目が覚めるだろう。」

ヒアシは心配無いと答えた。

「そう言えば、ばあちゃんの方は、時間…大丈夫なのか？」

七代目火影として働いてきたナルトは、火影がどれ程多忙な立場か理解できていた。

疑問に思い聞くと、綱手はニヤリと悪い笑い方をすると、

「心配するな。遅くなれば遅くなったで自来也がなんとかするさ。ハッハッハッ…」

「アッハッハッハッハ…(強く生きてくれればよ…エロ仙

人……)」

綱手の答えに、かつての師に向かって冷や汗を流しながら、合掌するナルトであった。

それから少し経って……ヒナタが目覚めました。

目を覚ましたヒナタは、ヒアシから事情を聞くと急ぎ身支度を整え、二人の待つ居間へと向かった。

「お待たせしました……五代目様。」

「良い。もともと、急に来たのはこちらなのだからな。」

綱手は気にしていないと告げる。そして、周りを見る。

そこに、綱手、ナルト、ヒアシ、ヒナタ、ハナビが集っていた。

全員が揃っていることを確かめると

「さて、さっさと本題に入るとするか。」

ヒナタとナルトに目を向ける。

そして……

「日向ヒナタ……本日より一週間の後……うずまきナルトの要望に従い、うずまきナルトと共に木の葉を抜けて貰う……良いな？」

「はい……」

ヒナタは神妙な面持ちで頷いた。

「……姉様……」

ハナビは、寂しそうな顔をする。

そんなハナビを気遣い、手を握るヒナタ。

「ヒアシ……お前には、娘を木の葉から追放する形になってしまうが、承諾してくれ。」

「五代目……既に私は娘との話し合いを済ませています。確かに、なかなか会えなくはなるでしょうが……いずれ、誰かの元へと嫁にければ、同じことです。ナルトは、私が見込んだ男……ナルトになら娘を託せる……ナルトなら娘を幸せにしてくれる……私はそう判断しました。だから、私の事はお気になさらず……」

ヒアシは気負った様子もなく淡々と告げる。

「すまん。」

綱手はもう一度謝罪する。

「さて… 用件は以上だ。積もる話もあるだろう… 私は退散する
しよう。それからナルト…」

「うん？」

「一週間以内に、お前のねぐらの荷物をかたしておくように…」

「ぐはっ…」

綱手の去り際の言葉に、思わず膝を突くナルト。

その姿は、綱手に相談役を命令された自来也の姿に、とても良く似
ていたのだった。

さよなら木の葉 後編 (H31. 4. 5加筆修正)

ナルトとヒナタが、里を抜ける辞令を受けて一週間が経過した。そして、とうとうナルトとヒナタが、木の葉を抜ける日を迎えることになる。

木の葉の里の門には、ナルトやヒナタを慕って集まったものたちが、その別れを惜しみ集まっていた。

「ナルト…俺は必ず火影になる。そして木の葉を変えて見せる…だからその時は…もう一度木の葉を訪れてくれ…」

ナルトに向かってネジが宣言する。

「ああ…その時はきつと…友として酒を交わそう。頼んだってばよ？ネジ。」

ナルトはネジの宣言に頷き返答し、握手を交わす。

「いや。火影になるのは俺だー。ちよつ…聞けて、二人とも…」その二人の会話に、キバが割って入る。

「なんだ…こっちは冗談に付き合ってる程、暇じゃ無いんだ。」

ネジが、鬱陶しそうに答える。

「つまり、私たちもあなたと同じように火影を目指して、ナルトの差別を無くそうと考えたって事。私たちの中で誰かが火影になれば、きつと木の葉を変えられると思うわ。つまり私たちは同じ目標を持った同志って事ね。」

キバに代わり、いのが説明する。

「火影になっただけで、木の葉が変わると思ってるのか？」

ネジが呆れた様に言う。

「ん？そりゃ、火影になれば思ったとおりにルールを作れるんだから、ナルトを差別するやつは罰する…とか作ったら良いんじゃないやねえか？」

キバが楽観的に言うが、

「そんな訳が無いだろ…そんな法律を作ってみろ？たちまち木の葉でクーデターが起きるぞ？」

「じゃあどうしたら良いんだよ。」

「簡単に解決するなら、今こんな状況にはなっていない…。少しずつ、住民たちの意識を変えるようにするしか無いさ…。こういう事はな…。」

ネジが言う。キバ以外のメンバーはその意見に神妙に頷いた。

「しかし、俺たちが火影を目指す事は、悪いことではない…。何故なら俺たちの中から火影に選ばれば、少なくともその方針を打ち出す事ができる…。足りない所は、なれなかったメンバーがフォローすれば良い。」

シノが、答える。

「そういう事だな…。まあ、俺は今のところ火影を目指す気はねえけどな…。」

シカマルが面倒そうに言う。

「お前たちの言い分はわかった。まあ、競う相手がいるのは俺にとっても悪くは無いかもしれん。」

ネジはキバたちの提案を受け入れる事にする。

「じゃあ、これからはネジも私たちの同志ね。」

「ライバルだ!」

いのの言葉にキバが反発する。

それを見て笑う一同。

「じゃあ、皆…。元気でな。」

笑いが収まると、ナルトは同期のメンバーやネジに挨拶した。

「あ、ナルト…。これ…。餞別に持って行ってよ。」

別れ際、チョウジが両手に抱えた大量のポテチを差し出してきた。最後までマイペースなチョウジに、苦笑しつつナルトはそれらを受け取った。

皆は少し寂しそうに、しかし笑ってナルトを送り出した。

次にナルトは日向の人間に挨拶をする。

そこにはヒナタがおり、ハナビやヒアシとの別れを惜しんでいた。

「ナルト君。」

近づくナルトに気付いたヒナタがナルトの名前を呼ぶ。

「ヒナタ。そろそろ…。」

「うん…」

ナルトはヒナタに、そろそろ別れを告げる様に言った。

「父上… 私は…」

「ヒナタ… ナルトの言うことを良く聞き、支え… そして助けなさい。それがお前が選んだ道なのだから…」

ヒナタがなにも言えずにいると、ヒアシが先に声をかける。

「はい…」

震える声で返事をするヒナタ。

「別れは既に済ませた… しかしこれが今生の別れになるわけではない… 必ずまた会いに来なさい。」

「はい。」

ヒアシの言葉に、大きく頷くヒナタ。

ヒアシはナルトを見ると、

「ナルト… ヒナタを頼む。色々未熟な娘だが、きっと君の支えとなってくれるはずだ。」

ナルトにヒナタの事を頼む。

「必ずヒナタを幸せにしてみせます。」

「ふっ… お前には敬語は似合わないな… だが… よろしく頼むぞ。」
ナルトの宣言を軽く茶化すヒアシ。しかし、その目は真剣だった。

ヒアシの言葉にナルトはしっかりと頷いた。

「ナルトさん。必ずまた会いに来てくださいね。約束です。」

ハナビは、その小さな指を差し出す。

「ああ… その時はまた遊ぼうな。」

ナルトは笑って指切りを交わした。

日向家と別れ、次にナルトとヒナタは大人たちに、挨拶をする。

そこにはカカシや紅と言った担当上忍、自来也や綱手がいた。

「ナルト… 守ってやれなくて済まない…」

カカシが悔しそうに告げる。

かつての自分の師の忘れ形見… 何故もつと注意して見ておかなかったのか…

気付いた時には既に手遅れだった…

(俺はいつもそうだ… 気付いた時には遅すぎる…)

カカシは自責の念にかられる。

「カカシ先生… カカシ先生が悔やむ必要は無いってばよ。これは俺が決めた事だからな。」

ナルトはそんなカカシに笑いながら言った。

「その代わり、カカシ先生は俺が抜けた七班の二人を頼むってばよ。」

「… ああ。」

ナルトから頼まれたカカシは、せめてその頼み事を全力でやりきろうと決意する。

「まさか、ヒナタに先を越されるとはね… でも… これからは里の恩恵は無いんだからね… 十分注意していくのよ？」

紅は、ヒナタに恋人が出来た事を少し羨ましそうにしながらも、アドバイスを贈る。

「はい。」

ヒナタはしっかりと頷いた。

「ナルト… 木の葉は任せな。私たちがしっかりと守っていく。」

「ナルト… しっかりとのお。だが… ワシを嵌めた事はずっと根に持つからのお… 覚えて… ぎゃーっ」

自来也は、綱手に尻を掴まれて最後まで言うことは出来なかった。

「五代目… 木の葉の事… よろしく頼むってばよ。それからエロ仙人は、ばあちゃんに押し付けようとしてたんだから、自業自得だっただよ。」

ナルトはそう言うと、別れの挨拶を告げて離れる。

「ナルト兄ちゃん… 本当に行つちやうのかコレ。」

木の葉丸が、ナルトに声をかける。

そこにはモエギたちもいた。

「木の葉丸… 三代目のじいちゃんの事はすまなかった… 俺のせいでじいちゃんが火影を辞めることになっちゃって…」

「それは良いんだコレ。じいしが火影をやめたことで、俺に、修行をつける時間を取ってくれるようになったし… でも…」

「でもっ。」

「ナルト兄ちゃんは、これで良かったのかコレ？じじいは最近ナルト兄ちゃんに謝る言葉ばかり言ってるぞコレ。」

木の葉丸からヒルゼンの現状を知るナルト：

「そうだな……三代目を恨んでなかったって言ったら嘘になる……」
「やっぱり……」

ナルトの言葉に落ち込む木の葉丸：身内が、自分の尊敬する人に恨まれる……それは木の葉丸にとっては悲しい事だった……

しかし、ナルトの話には続きがあった。

「けどな……三代目のじいちゃんにも立場があった……決してじいちゃんが進んで、俺を迫害しようとしていた訳じゃないってことは理解してるってばよ。」

「じゃあ……」

「ただ、俺が許す……と言ってもじいちゃんが自分を責めることを辞めなければ意味がないんだってばよ……だから……木の葉丸……じいちゃんに伝言を頼みたいんだ。」

ナルトはそこで、言葉を切ると木の葉丸を見て言う。

『木の葉丸を立派な忍に育てて欲しい』……そうしたら許すつてな。」
「兄ちゃん……うん。必ず伝えるぞコレ。」

木の葉丸たちと別れたナルト。

最後にサスケとサクラが挨拶に来た。

「ナルト……色々と済まなかった……」

サスケは、あれ以来憑き物が落ちたかのように素直になった。

ただし、逆恨みからナルトを殺めようとしたことは、サスケにとって未だに凝りとなっており、事あるごとに謝ってくる。

「もう良いってばよ。それよりも、サクラちゃんの事……よろしくな……俺はもう、お前らを守ってやれないからな……」

「ああ……それと……お前に言われたこと……しっかりと考えてみる。俺にとって大事な物がなんなのか……そして、今度会うときは……もつと強くなって見せる。」

「私も……ナルトやヒナタに負けないように……しっかりと修行をして強くなるから。また必ず会いましょう？二人とも……」

その場を集った仲間たち……ナルトはもう一度見渡す。
そして少しガツカリする……ナルトにとって、とても大事な人がそこにはいなかった……

そんなナルトの心情をヒナタも理解していた。

落ち込むナルトにヒナタが声をかけようとして何かに気付いた。

「ナルト君！あそこ……」

ヒナタが指差す方向……その木の上にイルカがいた。

イルカは、他の仲間たちと違い生徒を預かるアカデミーの講師だ……

立場上、危険とされているナルトに近寄る事が出来なかったのだ……

それでも、イルカはナルトの門出を祝うため駆けつけた。

例え近くまで行けずとも……せめて見届けてやりたい……

(ナルト……俺たちの別れは既に済ませているだろ？……俺はお前の選択を応援するよ……あの時誓ったように……)

イルカは、その時の事を思い返す。

・
・
・

イルカは、ナルトが正式に里を抜ける辞令を受けた翌日……忙しい時間の中、会いに来ていた。

「ナルト……とうとう決まったんだな。」

「ああ、イルカ先生には……本当に感謝してるってばよ。」

「何言ってるんだ……俺なんか……何もお前にしてやれない……」

イルカは、自分の弱さに不甲斐なさを感じる。

そんなイルカに、ナルトはフツと笑うと、

「前にも言ったろ？イルカ先生は俺の心を救ってくれた……俺が今、こうして笑っているのは、イルカ先生のお陰なんだってばよ。だからイルカ先生は、そのままが良い……そのままのイルカ先生でいてくれ。」

「ナルトオ……」

ナルトの言葉に、涙を浮かべるイルカ。

そして、少ししてイルカが落ち着いた頃…

「ナルト… もうすぐ俺たちはお別れだ… 何か、贈り物でも… っ
て考えたんだけど… なかなか思い付かなくてな…」

イルカは照れながらそう言うのと、自分の額当てを外し、

「だから… コイツと一緒に連れて行ってやってくれないか…」

そう言っつて、ナルトに自分の額当てを差し出す。

「イルカ先生？」

「ほら… 里を抜けることになったら、お前のしてる額当ては、里に返却しなきゃならないだろ？」

確かにイルカの言う通りだ。勝手に里を抜けるのとは違い、今回は里の同意の元で里を抜ける。

そうである以上、木の葉から支給された装備品は、返却しなければならない。

何よりも、その里の一員である事を示す木の葉の額当てはその筆頭だろう。

木の葉を抜けた人間が、木の葉の額当てをして犯罪でも犯せば、それはそのまま里の評判にも響いてくるのだから…

数日後には、回収班が来るハズだ。

「その代わりについて訳じや無いけど… 俺の… この額当てをお前にやる。俺の代わりに、一緒に連れていってくれ。」

イルカは、そう言っつてナルトに額当てを手渡した。

「イルカ先生…」

ナルトは、手渡されたイルカの額当てから、イルカの包み込んでくれるような、暖かい心を感じた。

思わず、涙がこみあげる。

「ナルト… 前にも言っただけど… 改めて誓うよ。俺は、お前がどんな決断を下したとしても、それを応援する。俺は、一緒には行ってやれないけど… きつと… いつか… また会おうな。」

「イルカ先生ええ…！」

「ナルト…！」

二人は泣きながら、抱き締めあった。

・
・
・

その時の事を思い出し、苦笑するイルカ。

イルカは、今まさに、木の葉から去ろうとしているナルトをみる。
イルカはただ頷いた。

ナルトは、それだけで笑みを浮かべる…

(ありがとう…イルカ先生…俺…頑張るよ…)

ナルトも頷き返す。

ヒナタを伴い、とうとう門を出るナルト。

ナルトは最後にもう一度振り返り、木の葉を一望する。

そして、自ら故郷に別れを告げた。

「さよなら…木の葉の里…」

合流

ナルトとヒナタが木の葉から出て、一月が経った。

ナルトたちは今、のんびりと観光をしながらあちこちを旅していた。

資金は、木の葉からの違約金がある為まだまだ余裕があった。

尾獣を内に秘めたナルトと、白眼と言う特異な血継限界を持つヒナタ…

木の葉の守りを失った二人は、各里にとって格好の獲物であり、すぐにでも襲撃があるかに思えたが、その旅路は至って平穏であった。拠点を持たず、数日で移動をしようとするナルトたちを捕捉するのは、なかなか難しく各里とも、連絡を取っている内に逃がしてしまっていた。

もつとも、ナルトやヒナタを所詮は子供と侮っていた事も要因にはあるのだが…

ともかく、ナルトとヒナタは平和な日常を満喫していた。

そして、現在いる宿場町…

ナルトはヒナタと共に町中を歩いていた。

「気付いてるか？ヒナタ…」

「うん… 宿屋からずっと尾けられてるね…」

ナルトたちは、現在尾行を受けていた。

「人数は解るか？」

仙人モードやチャクラモードを発動すれば感知も正確に出来るナルトだったが、仙人モードは動きながらではなれず、チャクラモードは目立つ…

平時の状態では、感知に関してはヒナタの方が上な為、ナルトはヒナタに聞いた。

ヒナタは、既に白眼を発動し尾行者を把握していた。

「二人だね。大人の男性… と私たち位の子供…」

「うーむ… こうもあからさまに気配を出してる所を見ると… 大した敵じゃないのか… それともわざと気付かせようとしているの

か…」

ナルトが考えていると、

「あ、でも大した敵じゃないって言うのは考え辛いかも…二人ともかなり強力なチャクラを持つてる…それこそ上忍クラス並みかも…」

ヒナタが補足する。

「うーん…相手の動きが読めないってばよ…ちよつと誘い出してみるか…」

ナルトはそう言うと、ヒナタを伴い町外れに向かい歩き出した。そして、気が無くなった頃…

「この辺で良いだろ…さて…そろそろ出てきたらどうだ？」

ナルトが大声で尾行者に向かって叫ぶ…すると、急に辺りに霧が立ち込める。

そして目視がほとんど不可能な程に霧が辺りを覆った頃、ナルト目掛けて尾行者の二人が襲い掛かった。

一人は身の丈を超える大剣をナルト目掛けて降り下ろす。

『八卦空掌！』

その大剣の横っ面目掛けてヒナタが空掌を放つ。

その衝撃で狙いがそれた大剣は、ナルトの身体から半歩程ズレた地面を抉る。

それと同時にナルトの蹴りが、降り下ろした男の身体に当たり…かけたがその蹴りは、もう一人の少年が作り出した氷の盾によって防がれる。

ナルトは、氷の盾を蹴った反動を利用して、距離を取る。

「ナルト君！」

ヒナタがナルトの横に並んだ。

「…挨拶はこの辺で良いだろ？」

その時、ナルトが襲撃者に向かって声をかけた。

「腕は鈍ってねえようだな…ナルト…」

「あれから一年も経ってませんしね…」

霧が晴れていき、襲撃者たちの姿があらわになる。

その二人は波の国で戦い、のちに協力を約束した再不斬と白であった。

「お久しぶりですね、ナルト君。」

「全く… 相変わらず憎たらしい面だな… ナルト。」

二人がそれぞれ、らしい挨拶をする。

「ハハ… 久しぶりだつてばよ。二人とも。元気だったか？」

ナルトは、再不斬の憎まれ口はスルーして白と会話を続ける。

「はい。ナルト君も相変わらずのようですね。噂は聞いています。とうとう、木の葉を抜けた…と。」

「しかも、上層部に認めさせた上で抜けるとはな… 上手くやったもんだ…」

「まあ、こつちには先の事件を知ってるって有利な状況があつたしな…」

ナルトは、挨拶もそこそこに本題に入る。

「それで？二人とも、まさか偶然ここに来たって訳じゃねえんだろ？」

白は一度再不斬を見て頷くと、話し始めた。

「もちろんです。実は、僕たちはあれからも幾つか依頼をこなしていたんですが、そこである噂話を聞いたんです。」

「木の葉の少年が、ある大きな功績を挙げ、表彰式で里抜けを願ったつて… 僕たちはすぐに君の事だと気づきました。これは以前あなたが提案した事の始まりなんだと直感した僕たちは、あなたの手助けをするためにここにやって来たって訳です。」

「まあ、俺たちの居場所を作るつてんだ… 他人に全てを任せるなんて、俺のガラじゃねえしな…」

白の説明に、再不斬が付け足す。

「今度はこつちから良いですか？」

白はそう言うとヒナタの方を見て、

「この子は誰ですか？」

ヒナタについて質問する。

「お前のコレか？」

再不斬は、ナルトをからかおうとして、小指を立ててニヤケながら

指摘する。

「その通りだつてばよ。こいつは日向ヒナタ。俺の一番大切な人だつてばよ。」

しかしナルトは照れる事もせず、当たり前前の様に答えた為、肩透かしを喰らった再不斬は、仕方なく話を続ける。

『日向』って事は、ソイツは白眼の使い手か？道理である霧の中で正確に動けた訳だ…。まあ、お前が見初める程のヤツなら強くて当然か…。」

再不斬は先程の戦闘を思い出し、言った。

「それは違つてばよ…。」

しかし、ナルトは再不斬の言葉を否定する。

「ああ!？」

思わず威嚇するように睨む再不斬。

「俺がヒナタを好きになつたのは、ヒナタが強かつたからじゃねえつてばよ。俺にとってはヒナタが、強くても弱くても…子供でも大人でも…全然関係無えんだ。ただ、ヒナタがヒナタであれば、俺が惚れるには十分だ…。」

「ちつ…クセエ台詞をぬけぬけと…ベタ惚れじゃねえか…。」

再不斬が呆れた様に言う。

「当然だろ?。」

ナルトは、この言葉にも当然のこの様に答えた。

それから、四人は改めて自己紹介をする。

「そう言えば、ここに来る途中、木の葉の噂を聞いたんだが…。」

再不斬が、その途中で木の葉の話題を口にする。

「ん?なんかあつたのか?。」

ナルトが聴くと、白が答える。

「なんでも、木の葉の重要な戦力が抜けた事が他里につつ抜けになつてるとかで、他里が結構強引に木の葉への依頼を横取りしてるらしいですよ?木の葉も強く言えないみたいで、少しずつですが、住民の暮らしにも影響してきてるそうです。」

「ああ…なるほどな。」

ナルトは、予想していたのか特に驚いた様子は無かった。

「まあ、木の葉の事は、木の葉に任せるとして、折角合流してくれたんだし、これからの事について話をしようってばよ。」

ナルトは、そう言うのと今後の目的と手段について説明を始めるのだった。

急展 (H31. 4. 5 加筆修正)

それから更に数カ月が経過した。

その間に、他の人柱力の数名がナルトのもとに集まっていた。

真っ先に合流したのはフウ。

彼女は、その性格から滝隠れの里長に全てを話していた。

全てを聞いた里長は、フウの言葉を信じ、ナルトと敵対するよりも親交を深める方が里にとって、利となると判断した。

また、同じ人柱力としてフウにとってもナルトの元にいた方が良いだろうとの考えもあった。

里長は、フウの里抜けを認める条件としてナルトと直の面談を要求した。

ナルトはこれを了承し、フウの里と非公式ながら協力し合う事を約束するのだった。

次に合流したのは老紫。

彼は、元々尾獣の力の修行の為、各地を転々としていた。

尾獣の力がある程度コントロール出来る様になってからは、岩隠れでもそれなりに信用されるようになったが、ナルトの前世を知り、それが今の自分にも起こり得る事だと考えた老紫は、そのまま里を抜ける事を決意した。

ナルトは、老紫の胸の内を聞くと静かに頷いた。

老紫は、ナルトやフウと違い抜け忍として岩隠れから追われる立場になるが、ナルトは特に何も言わず、老紫を受け入れた。

ユギト、ウタカタは、もう少し時間が掛かると連絡が入っている。

そして、今、ナルトたちは我愛羅と合流するために、とある場所に向かっていた。

木の葉崩しの後、ナルトと別れた我愛羅は、砂隠れの里から抜ける事を決めていた。

その事を兄姉たちにだけは伝えようと、テマリとカンクロウに告げる我愛羅。

当然、二人とも最初は反対した。

しかし、木の葉にて劇的に成長し、安定した我愛羅。

その変化をもたらしたナルトの元へ向かいたいと言う弟の、最初で最後のわがまま…

そして、砂隠れでの我愛羅の扱いを考え、我愛羅の幸せの為にこれを受け入れるのだった。

しかし、弟を一人抜けさせる事に抵抗があつた二人は、話し合いの末、テマリが我愛羅に着いていくことにした。

そしてカンクロウは、一人里に残る事を決意する。

これまで、兄として我愛羅に何一つしてやれなかつた事… それどころか我愛羅を化け物と恐れていた事を、カンクロウは気に病んでいた…

我愛羅の為、自分が出れることをずっと考えていたカンクロウは、自らが里に残ることで、里を抜けることになる我愛羅たちの風評を和らげようと考えたのだ。

もちろん、三人の姉弟の内二人が里を抜けるのだ…

残ることになるカンクロウへの里の心証は相当に悪くなるだろう。

もしかしたら、心無い迫害を受けることになるかもしれない…

当然、話し合いの中でテマリは三人とも抜けた方が良いのではないかと考えていた。

そして、それをカンクロウに提案もした。

しかし、カンクロウはそれらを考えた上で、自ら残る事を選んだ。

全ては、これまで向き合つてこなかつた弟のため…

カンクロウに迷いはなかつた。

結局、カンクロウを残し砂隠れの里を抜けた我愛羅とテマリ。

その二人と、これから落ち合う事になっていた。

待ち合わせ場所へと向かうナルトたち。

後、十分も歩けば到着するといった距離に差し掛かった時…

「ナルト君…何か様子が変だよ？」

真っ先にヒナタが気付いた。

前方…ナルト達が向かっている方向に煙が上がっていた。

「フウ！悪いけど、上空から探ってみてくれっか？」

ナルトがフウに指示する。

「了解ッス！」

フウは二つ返事でOKすると、羽を出して飛び上がる。

ナルトも念のため、仙人モードで辺りを探る。

数分後、フウが偵察から戻ってきた。

「どうも、戦闘があったみたいッスね。あちこちにクレーターが出来るッス。」

「!?…急ぐつてばよ！」

フウから報告を聞いたナルトは、皆の返事も待たずに飛び出した。

そして、待ち合わせ場所に到着すると、そこはフウが言った通り、かなり大きな戦闘があったと思われる跡があちらこちらに見られた。

「我愛羅！どこだ！返事をしてくれつてばよ！」

ナルトは大声で我愛羅の名前を呼んだ。

しかし、返事はない。

「ナルト君！」

と、そこにヒナタたちも合流してきた。

手分けをして探すと、ヒナタが気を失ったテマリを発見した。

テマリは毒を受けて危険な状態だったが、ナルトが右手でテマリの身体に触れ、テマリの身体の中にあつた毒のみを分解して、助けることに成功した。

これは、六道の『陽』の力によるものである。

「……は……」

程なく、テマリが意識を取り戻した。

「テマリ。俺が分かるか？」

ナルトがテマリに声をかける。

「あ……ああ……」

まだ意識がはつきりしない中、答えるテマリ。

「一体、ここで何があつたんだつてばよ？それに我愛羅はどうしたんだ？」

「!?我愛羅…我愛羅はいないのか？」

ナルトが聞くと、思い出したかのように辺りを探し出すテマリ。

しかし、そこに我愛羅の姿は見当たらない。

「俺たちが見つけたのはお前だけだつてばよ。何があつたのか聞かせてくれねえか？」

もう一度、ナルトが質問すると、落ち着いたテマリが話し出した。待ち合わせ場所に、一足早く着いた二人は、そこで二人組の忍の待ち伏せにあつた。

その二人の内、一人はカンクロウ以上の傀儡師であり、一人は爆発系統の術を使う忍…。どちらも恐ろしく腕のたつ忍だったが、我愛羅は砂を巧みに使い善戦していた。

しかし、テマリが傀儡師の毒を受けてしまい、助ける代わりに我愛羅は自ら敵の手に落ちた。

テマリが覚えているのはここまでだった。

「頼む！ナルト。我愛羅を…。弟を助けてやってくれ。私にできることならなんでもやる。だから…」

「我愛羅は、ようやく自分の夢を見つけたんだ…。カンクロウもそんな我愛羅をサポートするために里に残った…。このままじゃカンクロウに顔向けできない…。頼む！」

テマリは必死な顔でナルトに助けを求めた。

「安心しろ。テマリ。我愛羅は、必ず助け出す。」

ナルトは、強い口調でそういった。

「その二人には、心当たりがあるつてばよ。おそらく『暁』と呼ばれる組織のメンバー。奴らは、俺たち人柱力を狙ってるんだつてばよ。それで、俺たちから尾獣を抜き出し、その力を得ようとしている。」

ナルトは、そう言うのと周りの皆を見た。

「少し早いけど、計画を前倒しにするつてばよ。暁と決着を付ける。我愛羅を助けて、奴らを壊滅させる。」

「それなら、ついでにその暁つて組織の拠点を頂くつてのはどうだ？」

再不斬が提案する。

「確かに、人数も多くなつて来てますし、拠点は必要ですね。」

白も再不斬の案に同意した。

「人柱力の敵つて事はあつしたちを殺そうとしてるつてことツスよ

ね。そんな奴ら退治してやるツス。」

フウは息巻いていた。

「ワシらに敵対したことを後悔させてやろうぞ。」

老紫が宣言する。

「ナルト… それに皆… 弟をどうか頼む…」

テマリは、頭を下げた。

「奴らが、尾獣を人柱力から抜くには、かなり時間がかかるらしい。それでも、動くなら早い方が良いつてばよ。拠点の位置は既に把握している。これから乗り込むぞ。」

ナルトは、そう言うとかバンからあるものを取り出す。

それは、イルカに手渡された額当て…

（イルカ先生… これから俺たちは戦いに赴く… だから見守ってくれつてばよ。）

心の中で、イルカにそう言ったナルトは、その額当てを付けるのだった。

暁のアジトへ…

我愛羅を助けるため、ナルトたちは暁のアジトを目指し、移動していた。

場所は、既に把握している。

ナルトは魔像の中に囚われた穆王を感知することで方向や距離を探り、ある程度の目星を付けていたのだ。

いずれは、暁とも事を構えることになるのは覚悟していた。

暁の目的のために、尾獣は必要不可欠な力だ。

表のリーダーである長門…そして裏のリーダーであるオビト…

どちらも、手段こそ違うが必要なものは同じ…

そして、今回は二人を説得することは無理だろう事も理解していた。

平和のために、自ら世界に痛みを与える事を決めている長門…

対してナルトは、ヒナタの為なら世界を敵に回しても構わないと考えている。

個の善よりも、全のための善を考えている長門と、全よりも個…その幸せを優先すると誓っているナルトでは、その考えがまるで違う。

そして、オビト…

オビトは、最愛の女性であるリンのいる世界を望んでいた…

今ある現実の世界を否定して、幻の世界を求める…

それは、今のナルトには否定できない想いである。

今いる世界は現実の世界とは言え、ナルトにとっては、自分が生きた世界を捨てて来たようなものだ。

例えそれが、自分の意思によるもので無かったとしても、今の世界を精一杯生きると決めたナルトは、そう考えていた。

そんな自分が、オビトの願いを否定することは出来ない。

だからと言ってオビトのために、犠牲になるつもりもない。

(長門やオビトには悪いけど、抵抗させて貰うつてばよ。この世界を生きる『うずまきナルト』として…何よりもヒナタのためにも

な……)

ナルトが改めて決意を固めた時、フウがナルトに話しかけてきた。

「ナルト……」

「ん？」

その声は、普段のフウでは考えられないほど暗かった。

「どうしたんだ？フウ。」

心配になったナルトが聞き返す。

「あつしらって……なんなんツスカね……」

「どういう意味だつてばよ？」

「重明から過去の話を見せて貰ったツス……あつしを殺したやつらは、平和のためだつて言つてたツス……」

「……………」

老紫も、思うことがあつたのか静かに聞いていた。

「あつしら人柱力は、なんのためにこの世界に生まれてきたんツスカね……里のために生け贄みたいにされて……肝心の里の人たちに感謝されたりしない。里長は良くしてくれてたし友達もいたけど、里の人たちと会うことは制限されてた……」

「ナルトや我愛羅はあつしよりも、酷かったつて聞いているツス。そんな皆と合流して幸せに暮らそうつて決めて……なのに今度は世界のために死ねつて……」

「あつしらは……生きてちゃいけないんツスカ？幸せになつちやいけないんツスカ？あつしらは……なんなんツスカ……」

いつも元気なフウ……しかし、我愛羅が拐われ、自分の生そのものに疑問を感じたが為に、その瞳は弱々しくなっていた。

フウの問いに、皆答えられない。

この場を集った者たちは、ほとんどが似たような苦しみを味わってきていたから……

しかし、その中で二人……ナルトとヒナタだけはその問いの答えを持っていた。

「フウ……じゃあ、聞くけど……お前は世界のために死ねつて言われたら死ぬのか？」

ナルトが聞いた。

「それは…」

フウは答えられない。

「世界の平和なんて、お前の… いや… 俺たちの生を否定する理由にはならねえってばよ。」

「フウは、友達をたくさん作りたいてって言ったよね？」

ヒナタが後を引き継ぐ…

「平和な世界を作る手段って一つじゃないと思う。滝隠れの里の長の理想って、とても素敵なことだって私も思う… でも、そのためにも貴方は生きてそれを伝えていかないといけない… そうでしょ？」

「ヒナタ…」

「自分の生に自信が持てないなら、俺達が認める。俺たちはお前に生きていてほしいってばよ。」

「私たちは、これから一緒に生活していこうと決めた家族だよ。」

「フウ… 俺たち人柱力は、人柱力である前に人間だ。傷つけられたら痛えし、悲しい事があれば涙だつて流す。楽しいときには笑うし、嬉しいときには喜ぶ… だから俺たちは生きてていいんだってばよ！」

「ハハ… そうっすよね。らしくなかつたっす。よし、いっちょやってやるっすよ！」

ナルトやヒナタの言葉に勇気つけられたフウは、元氣を取り戻し、気合いの入った返事をした。

そんなフウの様子に、周りの人間も雰囲気や和らげる。

いつのまにか、フウは一行のムードメーカーになっていた様だ。

「よし！ 暁を潰して、我愛羅を助ける。皆… 気合いを入れて行くってばよ！」

ナルトの号令に、皆一斉に返事をするのだった。

それから、数時間… とうとう暁のアジトに辿り着いた。

「これからメンバーを振り分ける。まず、俺とヒナタ、再不斬と白の四人で一小隊を作る。それから老紫をリーダーにフウとテマリで三人一組を組んでくれ。老紫の隊は我愛羅の救出を目的に動いてもら

うってばよ。ただし、相手の傀儡師は毒を扱う。尾獣チャクラを常に身体に纏って傷を受けないように気を付けてくれ。テマリには、俺の九尾チャクラを渡しておく。」

ナルトの指示に頷く三人。

「俺たちの班は、その他の曉メンバーの牽制だ。ただ……こつちにも厄介なのがいる。」

ナルトから曉メンバーの特徴を聞いた一同は、その厄介さに冷や汗を掻きつつ頷くのだった。

我愛羅救出と、曉制圧作戦が始まろうとしていた。

救出作戦！

ナルト達が、曉襲撃作戦を話し合っていた頃……

曉のメンバーたちは、我愛羅から尾獣を引き剥がす術を行っていた。

「ちっ…… 時間のかかる……」

メンバーの一人、サソリが苛立ちの混じった声音で呟く。

「仕方あるまい。この術は本来、曉のメンバー全員で行うものだ…… イタチと鬼鮫が倒され、メンバーが欠けている以上、通常よりも時間がかかってしまうのは避けられん……」

長門が嗜めるように言うと、その言葉に異を唱える人物がいた。

「その事だけど、オイラは未だに信じられないんだよな…… うん。」

デイダラである。

「どういう意味だ？」

「チャクラのデカさと馬鹿力だけの鬼鮫の旦那ならともかく、イタチの旦那が…… 例え相手が人柱力や三忍が相手とは言え、むぎむぎと殺られるとは思えないってことだ。うん。」

「……………」

「確かに…… イタチは例え子供が相手であっても油断するようなタイプの人間ではない。それ所か、より万全を期して任務に当たる人物だからな。」

角都が同意する。

「だが、現実に奴らは帰ってこない。」

「だから、イタチの旦那は最初から木の葉のスパイで、イタチが鬼鮫を殺して、そのまま木の葉にトンズラしたんじゃないかって言ってるの。木の葉の方で死んだことにしとけば、足は付かないし……」

「考えられんこともないが、イタチ程の男をスパイのために、使い潰すとも思えんが……」

「どちらにしろ、ここにいない事実は変わらない。それにイタチと鬼鮫が戻らなかつた段階で拠点も移している。ヤツから漏れる情報など、たかが知れている。」

長門がメンバーにそう言った時…

ドオオオオオオオン!!!

大きな爆発音と共に、地面が揺れた。

「!?これは…どこからかの襲撃か?」

「ほら… やっぱりオイラの言った通りじゃん。イタチのヤツがオイラたちの情報を買ったんだ。うん。」

「有り得んな。その時点で拠点を移している。しかも、元々幾つかあった拠点とは別に、新しく購入したばかりの土地だ。」

「デイダラ、サソリ… 悪いが外を見てきてくれ。拠点を移したばかりで、トラップを施せなかったのが痛いな…」

長門の指示で、動く二人。

「我愛羅を返せ!!!」

外に出た二人が見たのは、一人の少年。

ナルトだった。

「なんだ?ただのガキじゃないか。うん…。あの我愛羅ってヤツの弟分か何かが助けに来たのか?」

デイダラが呟く。

「それは無いな。」

サソリがその言葉を否定する。

「何でだ?」

「あの額当ては木の葉のものだ。それに一尾の人柱力は、自分の故郷である砂隠れの里ですら、忌み嫌われていた… 救いに来るとは考えられん。」

「だったら…」

「木の葉の人柱力は、里を抜けたそうだ。大蛇丸の木の葉崩しの折りに、遭遇して共感していたとしたら…」

「嫌われもの同士の傷の嘗め合いってことか?... うん。つまりコイツは…」

「ああ… 九尾の人柱力だ。」

サソリの言葉を証明するように、巨大なチャクラを纏うナルト。

「てめえら… 我愛羅はどこだ!」

「教えてやんねえ。」

デイダラがからかうように告げると、ナルトが一気に間合いを詰めて襲いかかる。

デイダラが迎撃をしようと起爆粘土を出す、それより早くサソリの尾がナルトを攻撃した。

「くっ！」

間一髪、攻撃を避けるナルト。

ナルトは、勝てないと悟ったのか、少しづつ逃げるように、アジトから離れていく。

「獲物が向こうから来たんだ。逃がすかつての！」

それを追って、デイダラとサソリは少しづつアジトから離れていった…。そう…。ナルトの分身体を追って…

「どうやら、上手く行ったみたいだっばよ…。」

「そうですね。欲を言えば、もう一組位出てきて欲しかった所ですが…。」

「いや…。充分だっばよ。白も、頭良いんだな！」

アジトに突入する前に、白が敵の戦力を分散させる為に、自分と再不斬が陽動に回ることを提案した。

しかし、ナルトはその役目を自分の影分身にやらせることを思い付く。

暁の目的である、人柱力の一人である自分の方が目立つ。そして、影分身ならやられても問題ない。囷役には最適だった。

「奴等が分身に気づく前に、一気に突入するっばよ。」

「「「おう！」」」

そして、魔像の前に辿り着くナルトたち。

「!?」

「誰だ！お前たちは…。」

ナルトと、ヒナタ、白と再不斬を見て、問いただす弥彦の姿をした長門。

「我愛羅の仲間だっばよ。返してもらおうぜ？我愛羅を。」

その瞬間、角都と飛段が飛び出す。

その二人は、再不斬と白が押さえる。

予め、ナルトから九尾のチャクラを渡されていた二人は、互角の戦いを見せる。

「……………」

次に飛び出してきたのは、弥彦を含む六体のペイン。

ナルトは影分身を出して、これに応戦。

小南も参戦し、ヒナタが相手を務めた。

さらに、見かねたトビ（オビト）とゼツも加わり、乱戦となった。

そこに、救出班のテマリ、フウ、老紫が突入し我愛羅を奪還した。

「我愛羅…大丈夫か… 我愛羅！」

テマリが心配そうに声をかける。

「!?…ここは…」

我愛羅はすぐに目を覚ました。我愛羅の尾獣チャクラの三割程を吸い込んだ所で術が中断された為、今回は命に影響が無かった。

「我愛羅！良かった。」

思わず、我愛羅を抱き締めるテマリ。

その温もりに、ようやく意識を完全に取り戻した我愛羅。

「テマリ!? 無事だったんだな。」

最後に我愛羅が見たのは毒を受け、倒れていたテマリ。しかし、目の前のテマリはどうやら毒の影響は無いようだ。

ほっと安堵のため息を吐く我愛羅。

「ああ。ナルトたちに助けられた。我愛羅… あんたもナルトたちに助けられたんだ。後で礼を言いなよ?」

「ナルト?」

思いがけない名前を聞いた我愛羅。

「二人とも、話は後じゃ。ここは戦場。気を引きしめよ。」

老紫が我愛羅とテマリを窘める。

「戦場?」

未だに状況が呑み込めない我愛羅に、テマリがかいつまんで説明する。

「なるほど… 手間をかけたようだ。感謝する。」

「礼は後ツス。それより…」

フウが何かに気づく。

「ああ… こつちにも来たようだ…」

「やっぱり陽動だったか… うん。」

「嘗めた真似をしてくれたもんだ。しかも、せつかく捕らえた一尾のガキが逃げちまつてる…」

ナルトの分身を追いかけていたデイダラとサソリが、分身に気づき、引き返してきたのだ。

ここに、人柱力vs暁の戦いが始まろうとしていた。

ナルト一行VS暁

我愛羅を救出することに成功した、老紫率いる救出班。それに気付いたナルトは、ヒナタや再不斬たち、陽動班に合図を送る。

戦いを中断し、我愛羅たちの元に来るナルト一行。

暁のメンバーもまた、仕切り直しとばかりにペインの元に来まった。

睨み合う両者…

と、ナルトが一人前になる。

「戦う前に、一応聞きたい… 人柱力… って言うか… 尾獣から手を引く気は無いか？ そうすりゃあ、無駄な争いをしなくて済む。」

ナルトはペイン… いや、長門に向かって話す。

「… それは出来んな。お前たちの中にある尾獣は、これからの世界の… 平和の為に必要なものだ。」

長門は、当然これを拒否する。

「だから、俺たちに世界のために死ねって言うのか？」

「そうだ。世界のために死んでもらう。」

長門の返答に、ナルトは一度目を閉じる。

そして開くと、

「お断りだつてばよ！」

大声で宣言した。

ザワつく暁のメンバーと、安堵するナルトの仲間たち。

「たかだか数人の命で、世界の多くの人が救えるんだぞ？ そうわがままを言うな。」

長門に代わり、トビ（オビト）がそう言った。

「わがままっ！」

その言葉に、ナルトが目細める。

「生きたいと願う事の、どこがわがままなんだつてばよ…」

ナルトは話ながら一歩、また一歩と前になる。

「…………… それが、世界の平和のためなのだ…」

長門が、ナルトの迫力に気圧されながらも、ペインを通じて言った。「世界の平和？お前らのやり方じゃあ、例え世界が平和になっても、俺達は幸せになれねえってばよ…。」

「さっきも言った。お前らと世界の人々…どちらを優先するか…考えるまでも無いだろ…。」

オビトが、また答える。

「だから死ぬ？幸せを望むことを止めろ？そう言うのか？」

ナルトはそこで、一度歩みを止める。顔は少し俯き、体は小刻みに震えていた。そして…

「ふざけるなよ？」

ナルトの声は、決して大きくは無かった。

眩きにも等しい声量であったが、その声はその場の全員に届いた。

「俺達は、里や世界のための生け贄じゃねえってばよ。例え世界中の人間が俺たちの死を望もうと、俺達は生きてみせる。例え世界中の人が敵になったとしても、そんなの関係ねえってばよ。」

六道仙人モードになりながら、はつきりと告げるナルト。

その圧力に、暁のメンバーたちは無意識に一步下がった。

その時…

「ああ…その通りだナルト！」

ふいに声がかかる。その場に集ったナルトの仲間ではない。その声は…

「ウタカター！」

ウタカタだった。さらに…

「虫の知らせって言うのはあるようね。たまたま任務で出ていたら、胸騒ぎを感じて又旅に聞いてみたらこんなことになってるなんてね。」

ユギトもそこにいた。さらに…

「暁倒すは雲にも利益♪ブラザー兄のためにもなるZ E！」

『こう言ってるが、ビーもお前に協力出来ない事を内心苦しく思ってたんだぜ？』

牛鬼がビーの本心を暴露する。

「ビーのおっちゃん!! それにはつつあんも。」

この世界に来て、初めてキラール・ビーに会ったナルトは喜ぶ。

三人とも、何かしら胸騒ぎを感じて尾獣を通して集まったのだ。

尾獣空間で知り合い、志を共にしたこの世界の人柱力たちは、精神的に繋がりが生まれているのかもしれない。

我愛羅の危機に何かを感じ、そして今この時、この場所に… 仲間のために集う…

ナルトは改めて思う。

「俺達は化け物でも、ましてや兵器でも無え… 俺達は人間だ。そして、人間としてこの世界を生き抜いて、幸せを掴んで見せるってばよ！」

「!!!」

その言葉を機に、動き出すナルトたち。

「戯れ言を！」

迎え撃つ暁。

「まずは厄介なのから片づけるってばよ！」

ナルトは、風遁螺旋手裏剣を作り投げる。

向かうのは角都。

「!? 何かヤバイ！」

その術に脅威を感じた角都は、避けようと上に飛んだ。

「大人しく食らうとくッス！」

だが、その角都の上にフウがいた。

フウは、角都に向かって尾獣のチャクラ腕を出し殴り付ける。

「ぐっ！」

ガードする角都だったが、吹き飛ばされる。

そして飛ばされた先には、ナルトが投げた螺旋手裏剣が迫っていた。

「しまった！」

螺旋手裏剣が、角都を襲う。

「ぎゃあああああああああ…」

複数の心臓を持ち、また他人の心臓を奪うことで不死となっていた

角都だったが、一瞬でその全ての心臓を消費されては一溜まりもなかった。

一方、角都和コンビを組んでいた飛段は、白と再不斬、そして老紫と戦っていた。

急造とは言え、三対一の状況では、「呪術・死司憑血」を発動する隙もなかなかなく、自身の不死の特性を持って戦う以外には無かった。しかし、それも長くは続かない。

『秘技 氷遁…：永久氷壁！』

「ぐ！動けねえ…！」

これは白のオリジナルの拘束術。

白のチャクラが続く限り溶けることも抜けることも出来ない氷で相手の動きを封じる技だ。

本来はこの技で動きを封じ、再不斬がとどめを刺すといった戦法で使われる技だが、相手が不死ではそれも意味がない。

それでも、この技を使ったのは…

「ナルト君からもらった九尾のチャクラは凄まじいですね。数時間はあなたを止めておけるでしょう。」

ナルトは、前世でシカマルに飛段を倒した方法を聞いていた。

そして、その末路も…

落とし穴に落とされ、動きを封じられた飛段は、身体も潰されてなお元気良く、様子を見に来たシカマルを罵倒していた。

しかし、一月もしない内に干からび、息を引き取っていた。

この事から、シカマルは飛段の弱点を見抜いていた。

「貴方の不死性は外傷や病気に限つてのもの。栄養を取らなければ、その身体を維持出来ない所は、ボク達と何も変わらない。戦いが終わるまで、貴方はボクが止めます。そしてその後は別の方法で拘束させてもらいます。食事や水を与えなければ貴方は容易に殺せます。」

白は、確かに相手を殺すことを躊躇うほど、心根の優しい人間だが、人を殺すことに快樂を得るような快樂殺人者にまで、優しくする人間ではない。

白の中では、飛段と言う男はナルトから聞かされた段階で、許され

ざる者と認識されていたのだった。

「よし、お前はそのままソイツの拘束を頼む。その間の護衛は俺がする。」

名乗りを挙げたのはウタカタだった。

後から合流した三人は暁の情報を持っていない。

その中でも、一番戦闘経験の乏しいウタカタは、自らが足手まといにならないために、自分の役割を白の護衛のみに集中することにしたようだ。

「頼みます。再不斬さんはナルト君の援護に行ってください。」

「フーン！おい小僧！自分から名乗り出たんだ。しっかり白を守れよ。」

「小僧じゃない。ウタカタだ。」

憎まれ口を叩きつつ、ナルトの方へ向かう再不斬。

なんだかんだと、ウタカタに白を任せようだ。

そしてデイダラとサソリはと言うと、老紫、我愛羅、テマリに苦戦していた。

一度は、テマリをだしにして我愛羅を屈服させた二人だったが、テマリはナルトから渡されたチャクラの衣で身体を覆っており、千本程度では傷を付けることは出来ず、テマリの攻撃や速さも上がっており、テマリはもはや足手まといとはなりえない。

テマリは、前回我愛羅の足枷になってしまった自分を責めた。

だから、今度は我愛羅の役に立ってみせる…とやる気に満ちていた。

そして、我愛羅はテマリを人質にされたこと、そしてようやく和解できた守鶴を抜かれそうになったこと、それらに心の底から怒っていた。

そんな二人を老獪な老紫がコントロールし、自らも攻撃に加わる…

デイダラやサソリの力を持ってしても、なお押されていた。

そして…

「バカな…」

サソリの本体を貫く砂の刃…

「借りは返したぞ?」

「サソリの旦那!? くっ… こうなったら自爆して…」

デイダラが自爆を決意するが…

「させると思うか? 『溶遁 魔具魔溜まり!』」

突然、デイダラの両手、そして口をマグマで出来た球体が出現し覆う。

「がっ!」

「お前の技は、その掌にある『口』を起点に発動するのだろうか? ならばその掌を封じてしまえば良い…」

念のため、本来の口も封じたのは老紫の観察眼の賜物だろう。

そして、それが正解でもある。

全ての『口』を封じられたデイダラは、なす術もない…

デイダラとサソリは、老紫達によって倒された。

残るは、ペインを率いる長門、小南、オビトとゼツのみとなった…

暁壊滅

「お前たちは… いや… お前は一体なんなんだ…」
ナルトと対峙していたオビトが呟く。

暁と言う組織の人間は、一人一人がS級の指名手配を受ける程の実力を持った忍だ。

だからこそ、五里も簡単には手を出せずにした。

それがどうだ… 半刻と経たない内に、メンバーの半数が倒されてしまった。

オビトは、その基点となっているのが、目の前にいるナルトであるとなんとなく理解出来た。

「俺はうずまきナルト… 『九尾の人柱力』だってばよ。」

ナルトは当然のように答えた。

「お前には、他の人柱力の連中には無い何かを感じる。そして、何よりも… お前はこちらの事情を知りすぎているように思える…」

「流石だな… うちはおビト…」
「!?」

「そうだな… 俺は… 未来から逆行して来たうずまきナルトだってばよ… この答えで満足か？」

ナルトの答えを聞いたオビトは、その仮面をゆっくりと外す。

「なるほどな… 俺の正体を知り、目的を知り、そして子供とは思えない戦闘力… そう言うことか… つまり、俺たちの計画は未来で成功し、お前はそれを止めるために時を渡って来た訳だ…」

オビトは、ナルトの答えに納得し、しかし見当外れの答えを出した。

「いや、未来で… お前の計画も… 背後にいるマダラの計画も潰したさ。俺が時を渡ったのは、もつと個人的な理由だってばよ。そして、こうして今、お前たちと対峙することになったのは、ただの成り行きだ。お前たちが俺たち人柱力を狙っているから敵対した… ただ、それだけだってばよ。」

「成り行きだと！」

ただ、それだけのために何年も時間を費やして進めてきた計画が瓦

解しようとしているということに、オビトは激昂する。

「そうだ。最初に言ったよな？俺たちから手を引けと…俺たちは、降りかかる火の粉を払ってるにすぎねえ。正直、お前の気持ちは理解できるし、共感も出来る。俺もお前と同じ立場なら、お前の目的を支持してたと思う…だけど、お前の目的に尾獣の力が必要で、その為に俺たちを狙う以上…俺はお前を殺す！」

ナルトは淡々と告げる。

「ふざけるな！こっちこそ、貴様らを捕獲して尾獣を捕える。」

既に六道仙人モードになっているナルトは、そのまま、オビトに向かって突っ込んだ。

「速い…だが…」

オビトは、ナルトの予想以上の速さに一瞬面食らったが、かわせないと悟ると自らの万華鏡写輪眼の能力を使い、ナルトの体ごとすり抜けさせた。

そして、すり抜けさせたナルトに攻撃を仕掛けようと元の空間に戻ったその時…

「がはっ！」

自身の胸に激痛を感じ、膝を着く。

見ると、自分の胸部に拳大の穴が空いていた…

「どう…いう…ことだ…」

確かにナルトの攻撃はすり抜けたはず…

「お前の能力は、未来でカカシ先生が見破ってたんだってばよ…さつき…俺がお前に突っ込んで行ったとき、俺はわざとお前にすり抜けさせた…そして、背中の求道玉を一つ、お前の心臓付近に留まらせておいたんだ…この求道玉は、触れたあらゆるものを削り取る力を持っている…後はお前が別空間に避難させていた本体の身体が戻ってくれば、それでお前は終わりだ…」

ナルトは悲しそうな顔をして、オビトに話す。

「カカシ…だ…と…」

「オビト…リンって人とあの世で仲良くしてくれればよ…」

「リン…カカシ…先生…」

心臓を失ったオビトは、そのまま息を引き取った…

「バカな！」

その様子を目の当たりにしたゼツは、地面を潜り離脱を図る。

「逃がすかー！」

ナルトの分身が、ゼツを追う。ゼツこそ、暁やマダラ… オビトの悲劇の引き金になった張本人… 逃がす訳にはいかない…

ナルトは、螺旋丸を作り出し地面に潜ったゼツめがけてぶつける。

「ぎゃあああああああああ！」

「……………」

手応えはあった。しかし、地面を潜ったゼツの死体は発見しようがない…

ナルトは一抹の不安を抱えつつも、他の戦いに加わるべく辺りを見回した。

一方、ペインとはビー、ナルトの分身が戦っていた。

「なかなか強い… でも俺たちの方がもつと強い…」

「ビーのおっちゃん… こいつらの中に本物はいねえ。まずは復活させるやつから叩くつてばよ。」

「こいつらについてはナルトの方が詳しい… 俺はナルトの指示に従うZE！」

ニヒルな笑みを浮かべ、ナルトの指示に従い、着実にペインを減らしていくビーと分身ナルト。

そして最後のペイン… 弥彦の姿をしたペインを倒す。

「長門！」

小南が、焦る。

その小南は、ヒナタとユギトが対峙していた。

「あなたは人柱力ではない… あなたがこの戦いに参加する理由はないハズ…」

小南は、ヒナタが人柱力で無いことをすぐに理解した。

それは、ヒナタが九尾のチャクラを纏っていたことから、窺える。

九尾の人柱力は、うずまきナルトである以上、目の前のヒナタは、ナルトからチャクラを与えられているに過ぎない。

それでも、この少女の力は暁の水準から言っても侮れない。

九尾の力で底上げされているからなのか、その力は、今や上忍の中でも上のクラスに位置するレベルに達していた。

それでも、年齢から来る未熟さから、隙を見出だして反撃しようとするが、ヒナタのフォローに回ったユギトがそれをさせない。

そんな中で、トビは倒されペインも全てやられてしまった。

なんとか、ヒナタを退かせようと先の台詞を言っではみたが、

「理由ならあります。あなた達が、ナルト君を狙うからです。ナルト君は私の大切な人です。その人の命を狙うなら… 例え神様とだつて戦ってみせます。」

「……………!!!」

決意を込めたヒナタの言葉に、強い衝撃を受ける小南。

弥彦や長門の願い… 世界の平和の為に世界を敵に廻しても構わなかった… その為なら自分達の命を賭けるつもりだった。

でも、目の前の少女はどうだ… 世界よりもたった一人の愛する人の為に戦う…

何故だか、小南には目の前の少女がとても眩しく見えた…

弥彦が殺されてから、長門も小南もがむしやらに生きてきた。

世界のため… 弥彦の理想を実現しようと…

でも、本当は違った。ただ弥彦の死に意味を持たせたかっただけだった。

弥彦は無駄死にしたんじゃない。

世界の為に、平和の為に死んだんだ… そう思いたかった…

平和の為と言いながら、本当は弥彦の為に戦ってきた事に今更ながらに気付いた小南は、今、自分に残っている大切な、もう一人の幼なじみを助けたいと強く感じた…

「降参するわ… その代わり、虫の良いお願いかもしれないけど、長門を助けてほしい…」

「小南…何を言っている。」

ペインを操る長門が、驚き声を挙げる。

「わかってるでしょ？長門… 私たちはこの子たちに勝てない…」

そう、既にペインのほとんどは無力化され、残るは弥彦の身体を持つメインのペインのみ…

「だとしても、俺は最後まで戦う。弥彦から受け継いだ願いを叶えるために！」

「いい加減にしろ！長門。」

その言葉にナルトが吠える。

「お前のことは、前世の時に聞いた。俺とお前が同じ師を持つ兄弟子なこと…」

「なに？まさか…」

「そうだ…俺の師は自来也だ。」

「自来也先生…」

長門は、かつての師を思い、その名前を自然と口に出した。

「長門… お願いよ。私はもう、これ以上大切な人を失いたくない…」

小南は、涙を流していた…

「それでも…俺は…」

迷う長門…最後の一人になっても戦うつもりだった…

全ては世界の平和の為に…弥彦がやり残した事を受け継ぎ、その意思の元に戦ってきたのだから…

しかし、小南の涙を見た瞬間、その決意が鈍る。

「長門… 弥彦ってヤツのことは、俺にはわからねえ。でも、弥彦ってやつが世界を平和にしたかった理由なら、俺でもわかるってばよ。」

「弥彦ってやつは、自分の仲間が、慕ってくれる人々が笑って幸せに暮らせる世界を作るために、平和を求めたハズだ。確かに、そこには自分達のような人間をこれ以上増やしたくないって正義感もあっただろうけどな。でも、一番はそれじゃない。世界を平和にする…それは、弥彦が自分の願いを叶える為のただの手段だってばよ。」

「……………」

長門は思い出す…弥彦は自分の夢を語るとき、とても楽しそうだった。

平和になったら、三人でこんな事がしたい。あんなことがしたい。

それは、平和の先にあるもの……世界を平和にしてゴールではない。

しかし、その夢が叶えられることはなかった。

信じた人間の裏切りによって……

（そうか……俺は……弥彦を奪ったこの世界に復讐をしたかっただけなんだな……弥彦の願いを言い訳にして……）

「長門……もう止めましょう。弥彦はきつと……貴方がその身を削って作る平和なんて望んでいない。」

「そうだな……そうだった……弥彦は……アイツは仲間を何よりも大事にする良いヤツだった。俺は、ただ世界に復讐をしたかった……その為に小南を巻き込んだんだ。」

「ナルト……小南の命を保証してくれるなら、降伏をしよう。」

小南の涙ながらの説得、そして自分の本心を知った長門は、降伏をし、ナルトもこれを受け入れた。

そして、二人はこれからナルトが作る里に協力することとなる。

長門の体調に関しては、栄養を取ることと、ナルトの右手に宿った陽の力で一先ずの延命には成功した……が、いずれイタチとともに、綱手に見て貰う必要があるだろう。

その後……ナルトたちは、魔像に封印されていた尾獣を集まった全員で綱引きして引つ張りだすことに成功。

器の無い尾獣たちは、一先ずナルトの中に九喇嘛とは別に部屋を作り、入ることになる。

その後、ビー、ユギト、ウタカタは、ナルトたちと別れ里に戻る。

ユギトとウタカタは、半年後に合流する約束をした。

ビーは、出来る範囲で協力することだけは宣言した。

暁のアジトは、そのままナルト達が管理することになり、また、暁が貯めていた資金も里作りのために使うことになった。

こうして、ナルトの新しい里作りの土台が整ったのである。

木の葉の現状

ナルトが木の葉を抜けてから三年が経過した。
シカマルは今、街を巡回している。

(三年間で、随分と寂れたもんだな。：)

シカマルは、辺りを見回しながら改めて思う。

ナルトが抜けた影響は、木の葉に計り知れないダメージを与えていた。

抑止力として、五大隠れ里には人柱力がいた。

そのバランスの中、質の良い忍びを育てていた木の葉は、他里に比べて多くの仕事舞い込んでいた。

しかし、抑止力たる人柱力が抜けたことで他の人柱力のいる里に、依頼を強引に横取りされるようになっていたのだ。

しかし、それを咎める事は出来ない。

万が一戦争になった場合、戦略級の兵器とも言える尾獣を里にけしかけられた場合、例えどこかの戦場で勝利したところで木の葉の負けなのだ…

ナルトが抜けて一年もすると、忍びたちの仕事は激減し、木の葉に店舗を構えていた商人も一人、また一人と木の葉から撤退していった。

さらに、半年もすると雲隠れ以外の人柱力が全員出奔し、今や忍世界は雲隠れの一強国時代へと移っていった。

木の葉、砂、霧、岩の四国は、雲隠れのあぶれた仕事を取り合う状況となっている。

シカマルは、街の様子を見て廻っている。

今や、木の葉の忍は三分の一が職を失い、或いは転職し、或いは職を求めて他里に逃げ、或いは犯罪に手を染めている…

そんな中、こうして見回りの仕事を貰っているだけ、シカマルはマシな方だろう…

いや…シカマルだけではない。ナルトの同期たちや、ネジたち…あの時夢を語った者たちは、こんな現状でも、腐らず努力し一

歩一步夢に向かって進んでいた。

そんな中一人、シカマルだけはあの時から答えを出せないまま、過ごしていた。

ナルトに好感を持つものが火影に着く…。それだけではこの里は変わらないだろう…。

現に、今の火影…。綱手はナルトに対して好意的だ。

それでも、里は変わらない。

むしろ、ナルトがいなくなったことで酷くなっているように思える。

「はあ…。いつまでこの不況は続くんだろうな…。」

「綱手様に代わってから、木の葉は仕事が無くなる一方だ。」

「綱手様には、火影は早かったんじゃないか？」

「何言ってるんだ。ミナト様はもつと若かつたろ…。」

「俺、思うんだけどよ…。うずまきナルトがいなくなったのが始まりだと思うんだ…。」

「ああ？あの化け物がいなくなったからだったのか？」

「だってそうだろ？ナルト…。と言うか九尾がいたから、他里も強引に仕事を横取りするようなことが出来なかった訳だし…。」

「ふざけるな。あの化け物がいなくなって良かったと言ってたのはお前だろ！」

「そんなこと言ってるねえ！」

（今の状況もナルトのせい…。か…。そもそもナルトが木の葉を見限ったのは誰のせいだつてえの…。）

シカマルは街の人間たちの話を呆れながら聞いていた。

「俺は…。どうしたら良いんだろうな…。ナルト…。」

シカマルは迷い続ける。

一方、街の住人たちに噂をされていた五代目火影、綱手は今日も上役たちの詰問を受けていた。

「綱手…。いつまでこのような状況を容認しているつもりだ。」

「しかり…。このような状況にならないために、お前を火影として推したと言うに。」

「木の葉は今や衰退の一途を辿っておる。」

「商人たちも逃げ出しておるそうじゃないか……」

嫌味たらしく、現状を刻々と語る上役たち……

しかし、生憎綱手は黙って言われっぱなしでいられるような、大人しい性格はしていない。

「はっ！私や自来也の存在は、他里が積極的に木の葉に攻めてくる事への抑止にならなってるだろうが。それ以上の役割を期待されても困るね。私たちは人柱力じゃないんだ。」

今は、綱手の補佐役を務める自来也も続く。

「だいたい、その人柱力であるナルトが里を見捨てる原因を作ったのは、お主ら上役たちだったと記憶しておるのだがのお……」

「そ、それは……当時の状況を考えれば仕方がなかったのだ。」

「それに、そもそもその提案をしたのはダンゾウで、ワシらではない。」

上役たちが言い訳をし始める。

「結局、賛成したのなら同罪だ。」

しかし、綱手は相手にせず、そう言って切って捨てる。

「だいたい、お主らはナルトに何かしてやった事はあるのか？ナルトは何も知らぬ赤子だった。そんなナルトを生け贄のように、里の憎悪の対象にしておいて、そのまま言うのはどうなのかのお……ワシが知る限り、ナルトをケアしようとしておったのは三代目くらいのもんだと記憶しておるがお……」

「ちやんと、生きていくのに十分な予算は出していた。」

「アカデミーにも通わせてやっただろ。」

上役たちが主張する。

「それは、木の葉としての方針だろ。貴方たち自身のナルトへの対応を聞いているのだ……」

綱手は、何もわかっていない上役たちに苛立たしそうに言った。

「……………」

案の定、誰もが口を閉ざす。

「要するにお主らは、ナルトが何も知らぬのを良いことに、見て見ぬふりをしていた訳だ……事情を知るものたちだけでも、ナルトに優しく

接しておれば、状況も変わっていたかもしれないお…。」

「いずれにしろ、ナルトはもうここにはいない。今出来る最善を尽くすしかあるまい。」

相談役のホームラが、そう結論を出す。

(そんなことは言われんでもわかってる。全く無駄な会議だ…。)

綱手は、イライラしながら言葉を飲み込んだ。

ここのところ、上役たちとの会議はいつもこうだ。

ただ現状を嘆き、綱手を詰り、わかっている結論をだして終わり。

これを会議と呼べるのか甚だ疑問だ。

(ナルトのヤツは、今頃どうしてるのかねえ。)

現状の原因の何割かは、確かにナルトにもあるため、一言言っただりたいと思う綱手だった。

そんな折、世界を動かすニュースが飛び込む。

うずまきナルトを中心として集まった忍組織が、新しく里を立ち上げたのだ。

その名は『光の里』…

従来、忍たちの里は隠れ里と呼ばれ○隠れの里と、付けるのが習わしだ。

しかし、ナルトたちはそれを真つ向から否定する。

それは、ナルトたちの意思の現れ。

自分達は、隠れたりしない。

”光の中を堂々と、人として生きる”という…

この発表を受け、五大国の大名と五影による緊急の会合が開かれた。

この新しい里を受け入れるかどうか…

各国の思惑も交差しながら会議は二日間に及んだ。

結論は、受け入れるしかなかった。

ナルトたちにその気があるかは別にして、その力は無視できるものでは無く、また下手についた結果、国が滅ぶことにもなりかねない…

それほどの力を有していることは、誰もが理解していた。

光の里を容認しつつ、様子を見る。

それが、五大国を中心とした世界のスタンスとなった。

そして、この新たな里の立ち上げの情報を得たシカマルは決意する。

「火影様：： 願いがあります。俺を木の葉から抜けさせてください。ナルトの元へ行きたいんです。」

いつになく真剣な顔をして綱手に、自分の思いを語るシカマル：： その願いを聞いた綱手は、ため息をつきながら言った。

「いつか、こんな日が来るだろうと思ってたよ：： お前は、ナルトの真実を知っている。そして、ナルトが迫害を受けているところを自分の目で見てきた：： お前が今の木の葉にどんな感情を持っているか：： 理解はできる。」

「じゃあ：：」

綱手の言葉に、願いを聞き入れて貰えるのかと浮き足立つシカマル。

「そうだな。お前の願いを聞き入れても良い。ただし、条件が二つある。一つは、一年間私の元で補佐の仕事を学ぶ事だ。」

それは、シカマルにとって願ってもない事だった。

「そして、もう一つ：：」

それは、木の葉の利益に関する事だった。

当然だ。ただで将来有望な忍を他里に送る真似は出来ない。

綱手のもう一つの条件を聞いたシカマルは、難しそうな顔をしつつ、しかししっかりと頷くのだった

ナルトの元へ

シカマルが、木の葉を抜ける願いを綱手に伝えてから一年が経過した。

その一年間、綱手の補佐として自来也とシズネにみっちり鍛えられたシカマルは、約束通り、木の葉を抜ける運びとなった。

そして今日、シカマルは木の葉を抜ける…

「綱手様…色々とお世話になりました。」

シカマルが最後の挨拶を告げる。

「シカマル、お前には出来る限りの補佐の仕事を教えた。向こうでナルトをしっかりと補佐してやれ。」

綱手がシカマルに言う。

「はい。」

頷くシカマル。

「それから、お前に頼んだ最後の任務…必ず果たせ…それがお前を木の葉から出す条件なのだからな。」

綱手はもう一度確認する。

「わかっています。」

シカマルは、再度頷いた。

その返事に満足した綱手は下がる。

シカマルに別れを告げたい者たちの為だ。

「シカマル…どうしても行っちゃうの？」

チョウジは、涙ぐみながら言った。

「すまねえな…チョウジ…これでも悩み抜いて決めた結論なんだ。」

シカマルとて、チョウジと別れるのは辛い。

幼少期からの友人であり、最も信頼する戦友…

「チョウジ…俺は俺に出来ることをする。お前はお前に出来ることでのいや、他の同期の奴らを助けてやってくれ。」

チョウジの肩に手を置いて、シカマルが言った。

「僕に出来るかな…」

不安そうなチョウジ…

「大丈夫だ… お前は凄え忍だつてえ事は、俺が一番知ってるんだ…
一つだけ… お前に足りないとしたら、自信… それだけだ。」
「自信…」

「お前は俺なんかよりずっと凄え忍になれる。」

チョウジの目を見て、しつかりと告げるシカマル。

「うん… 僕… 頑張るよ。」

シカマルの言葉に勇気付けられたチョウジは、強く頷いた。

「あーあ… シカマルには私が火影になった時、補佐になつて欲し
かったのに…」

いのが、言う。

「悪いな… いの。」

「まあ、いいわ… ナルトのこと… 頼んだわよ… シカマル。」

いのは、サバサバとしていた。

いのはミーハーだが、相手の気持ちを思いやることの出来る女性
だ。

そして、切り替えも早い。シカマルがナルトの補佐をするなら、そ
れはそれで良いことだと考えていた。

「いの… 火影になるのは大変だが、木の葉のナルトへの意識を変え
るのはもつと厳しいぞ？」

「わかってる… 私もあれから色々調べたし、今の里の状況も理解し
てるつもりよ…」

ナルトのために里を変える。その為に火影を目指す…

あの時誓った気持ちに嘘はない…

今も目指す目標としてはいるが、それがどれだけ困難な事か…

あの時の自分達は子供だった…

それでも…

「それでもシカマルが言ったように、私たちは私たちが出来ることを
やっていくしかないのよ… 最初から諦めて何もしないより、少しで
も変える努力をしないとね…」

「いの… そうだな…」

いのは、変わった…

もしかしたら、自分達の中で一番成長したのかも知れない。

相変わらず、恋愛脳でイケメンに弱いところはありますが、理想と現実に折り合いを付けて、できることをしようと努力している。

シカマルの予想では、ネジが自分達の中で最も火影に近いと考えていたが、もしかしたらいのが本当に火影になるかも知れない…

シカマルは、そう感じた。

ちなみに、他の同期たちはこの場にはいなかった。

綱手がこの件に関して箝口令を敷いたのだ。

ナルトの同期たちは、それぞれ優秀な忍に育ってきている。

しかし、ナルトの件で木の葉に含む感情を持っている者たちでもある。

今のところ、彼らは火影になり木の葉を変えることを目標にしているが、いつシカマルのように里を抜けようとするかも知からない。

その為、同じ班員のいのとチョウジを除き、今日シカマルが木の葉を抜けることは知らされていなかった。

最後に、シカクがシカマルに声をかけた。

他の親族たちはいない…

シカマルの母は最後までシカマルが里を抜けるのに反対していた。見送りには来なかった。

シカクは、シカマルに話す。

「シカマル… 男が決めたことだ… 今更お前を止めはしない… 母さんの事は、俺に任せておけ。その代わり、1つ言わせてくれ。」

「お前はナルトの話を聞いて、木の葉の負の面を見すぎた… だがな… 決して木の葉はそれだけじゃない… 木の葉の皆は、木の葉を… 家族を守るために命を懸けて戦うことも出来るんだ… それだけは忘れないでくれ…」

「そんなことはわかってるさ… けどな親父… そんな木の葉だからこそ、尚更許せねえんだ… なんでその優しさをナルトには向けられないんだ？ 同じ木の葉の仲間だろ？ あいつは何も… 憎まれるよ。うなことは何もしてねえじゃねえか… 親父は知ってたんだろ？ ナ

ルトの境遇もナルトに対する迫害も…」

「……………ああ…」

シカクは当然知っていた…知っていて何もしなかった。

当時の上役たちの決定だ。シカクたちが内心反対したとしても決定が覆る事はない。

せめて、自分の子供たちには色眼鏡で見ることをしてしないよう教育する事が、せめてもの抵抗だった。

「すまねえ…親父たちの立場は理解してるつもりだ…」

少し感情的になってしまった事を反省するシカマル。

「いや、良い。ナルトのフォローが出来なかったって意味じゃ、俺も同罪だからな。」

その結果、自分の息子を里抜けさせることになってしまった…

後悔するシカク。

「親父…そんな湿気た面するなよ。別に今生の別れになる訳じゃねえ…」

「そうだな…」

「ああ、そうだ。最後に言っておきたい事があるんだけどよ。」

「うん？」

「親父の秘蔵コレクションの隠し場所…母ちゃんにバレてるぞ？」

それは、シカクにとって死刑宣告にも似た言葉だった…

「…本当に？」

顔色を青くしながら聞き返すシカクに笑いながら頷くシカマル。

「じゃあ、元気でな親父。」

がつくりと四つん這いになって落ち込むシカクに声をかけながらシカマルは旅立った。

ちなみに、その後シカクは自来也が慰めたそうな…

・
・
・

それから一月後…のんびりと観光をしながら目的の光の里へとやって来たシカマル。

「止まれ…ここに何の用だ？小僧！」

門番をしていたのは再不斬。

シカマルが忍…それもそれなりの実力者だと瞬時に見抜いた再不斬は警戒しながら用件を聞く。

「うずまきナルトに会いに来た。」

強烈な殺気を浴びながら、それでもしつかりと告げるシカマル。

「そいつは、ここの長の名前だ…簡単に会わせる訳にはいかねえなあ…」

人斬り包丁を構えながら言う再不斬に、

「奈良シカマルが来たと伝えてくれ。そうすればわかる。」

そう言ったシカマル。

自分の殺気を受けて尚、構える様子さえ見せないシカマルに、感心した再不斬は、

「良いだろう…ここで少し待て…」

そう言っつて、もう一人の門番をしていたウタカタに目で合図を送る。

ウタカタは頷くと里の中へと入っていった。

ナルトに伝えに言ったのだろう。

それから数分…

「ナルトの許可は取った…入って良いぞ？ナルトの元へ案内する。」

ウタカタの案内のもと、里の中へと入るシカマル…

そこは里と呼ぶには、かなり小規模だった…

当然だ。人口は数百人程度なのだから。

元は暁のアジトだった場所…そこに集められた資金を使い改修しながら広げていった土地。

任務をこなし、資金を使い、少しずつ広げていつているが、まだまだその程度だ。

そこに集まったのは、ほとんどが事情があり、他に居場所を無くしてしまった者たちだった。

里の中を案内されながら、ナルトのいる執務室に到着するシカマル。

中に入ると…

「よお、久しぶりだつてばよシカマル。」

そこに、ナルトはいた。

成長し、体格が大きくなっていたが、纏っている雰囲気も、シカマルに向ける笑顔も変わっていない。

「長？」

と、そこにナルトの側に控えた女性がナルトを窺める。

「と…悪い悪い。つい懐かしくつてな。それじゃ改めて…よく来てくれたつてばよ…木の葉の使者どの。俺がこの光の里の長の、うずまきナルトだ。」

今更ながらに、取り繕い対外的な対応をするナルト。

シカマルを木の葉の使者と考えているようだ。

「ああ…ナルト…俺は木の葉の使者としてここに来たんじゃ無えんだ。」

勘違いされているため、言いくそうにシカマルが話す。

「?じゃあ、何をしに来たんだつてばよ？」

「俺を…この里の忍として入れて貰いたい。」

ナルトの質問に、率直に答えるシカマル。

「なんだつて？」

予想外の言葉に固まるナルト。

「木の葉は抜けてきた。俺はここで、お前の補佐として働きてえんだ。」

「抜けてきたつて…大丈夫だったのか？」

思わず立ち上がるナルト。

「ああ…綱手様からちゃんと許可は頂いたさ。」

「よく、ばあちゃんか認めたなあ…今の木の葉の状況は、俺たちも把握してるとつてばよ。はつきり言つてシカマルみたいな優秀な人材を外に放出する余裕なんて無いだろ？」

「一応、条件はあるけどな。」

綱手から許可が出るとの答えに、尚も驚きながら続けるナルト。

「ナルト君…いえ…長…彼をこの里に受け入れるなら…」

「ああ… そうだな。」

ナルトの言葉を遮り、また先程の女性がナルトに意見する。その言葉に頷くナルト。

「シカマル… お前の事は信用してるが、一応規則なんだから… この里のメンバーになるなら少し面接をさせて貰うってばよ。」

言いながら、ナルトは九尾モードになる。

ナルトが女性に頷く。

「どうやら、この女性はナルトの補佐をしているようだ。」

「それでは、こちらから質問をします… 正直に答えてください。」

女性からの質問は普通の面接と変わらなかった。

何故、この里に入りたいのか…

特技、趣味、この里で何をしたいか…

その質問に答えるシカマル。

面接が終わる。

「さて、シカマル… 結果を伝えるってばよ。」

九尾モードを解き、ナルトが厳かに言った…

「採用！」

「って軽いだろ！」

思わずツツコミを入れるシカマル。

「ふふ… 心配いりませんよ。さっきの面接の時、ナルト君が九尾のチャクラを纏っていたでしょう？あの状態だと、ナルト君は人の悪意を感じとる事が出来るんですよ。僕からの質問の時、あなたにやましいことがあれば、ナルト君は直ぐに気付いてました。改めて… シカマル君… 僕は白と言います。今はナルト君の秘書のようなものをやらせてもらっています。よろしくお願いします。」

シカマルは白と握手を交わした。

「ナルト… お前、こんな美人の秘書なんて付けて、ヒナタにヤキモチ焼かれたりしないのか？」

シカマルが笑いながらナルトをからかおうと声をかける。

「あ… 僕は男ですよ？勘違いしないで下さい。」

ナルトが、なにか言う前に間髪入れずに白が答える。

「え？」

その言葉にシカマルは固まった…

シカマルが硬直から復帰したころ…

「そう言えばシカマル。木の葉を抜けるのに綱手のばあちゃんが出した条件ってなんなんだ？」

思い出したかのようにナルトが聞いた。

「ああ、それなんだけどな…」

言いにくそうにシカマルが頭をかく。

やがて意を決し、

「ナルト… 綱手様と会談を開いて貰いたい。」

シカマルが木の葉を抜ける条件… それはナルトに綱手との会談を取り付けることだった。

補佐就任

「ナルト… 綱手様と会談を開いて貰いたい。」

シカマルが木の葉を抜ける条件… それはナルトに綱手との会談を取り付けることだった。

「おう。良いってばよ。」

シカマルの言葉を受けたナルトは、あっさりと了承の返事をした。

「つて、軽すぎだろ！」

思わずツツコむシカマル。

「ははは。何驚いてるんだってばよ。綱手のばあちゃんと話し合いの場を作れば良いんだろ？御安いでござってばよ。」

ナルトは笑いながら答える。

「ハア… あのなナルト。里のトップ同士の会談となれば、里の方針にも影響を与える重大な話し合いになる。ましてや相手はお前を迫害した木の葉のトップだ… 普通は警戒するもんだろ…」

シカマルはナルトの楽観的な態度に頭痛を覚えながら、説明する。

「ナルト君。シカマル君をからかうのは、その辺にしませんか？話が先に進みません。」

白がナルトを窘める。シカマルが里の一員になったことで、すでにナルトへの態度は、身内に見せるものとなっていた。

「元々、近いうちに五大国の隠れ里… つまり五影と会談を設ける予定だったんですよ。」

白が、ナルトがシカマルの要請をあっさりと受け入れた理由を説明する。

「うちの里もだいぶ安定してきたしな。依頼のリピーターも増えてるし、そろそろ他の里と交渉する時期だったんだってばよ。」

ナルトが後を引き継ぐ。

「近い内に、五影をこの里に招待する手紙を出すつもりだ。綱手のばあちゃんには、他の影を招待する日の一週間前に来てもらおう。そこで個別の会談を設けるってことでどうだ？」

「さすがに、木の葉にナルト君を向かわせる程、僕たちは木の葉を信用

してはいませんよ。」

「俺を恨んでる連中も多いだろうしな…。」

ナルトが寂しそうに呟いた。

「…ああ。木の葉の連中は、今の不況がお前のせいだと考えているからな。そもそも、自分達が木の葉からお前を追い出したようなものにな。自分達の行動を省みず、悪いことは他人のせいにして…いつまでもそんなだから俺は…。」

(木の葉を見限ったんだ…。)

シカマルとて、自分の故郷に思い入れはあった。

同期の友人たちが、必死に木の葉を変えようと頑張っている姿も見てきた。

ましてや、恩師や家族もいるのだ。そう簡単に木の葉を抜けようなどと考えた訳ではない。

シカマルの苦悩を理解したナルトは、フツと笑うとシカマルに声をかけた。

「まあ、とにかく綱手ばあちゃんとの会談は受ける。それでシカマルは正式にこの光の里の一員だつてばよ。ガンガンこき使つてやるから覚悟しておけつてばよ。」

「おいっ！こき使うの前提かよ。俺が面倒くさがりなの知ってるだろ。」

ナルトの言葉に抗議の声をあげるシカマル。

その顔は笑っていた。ナルトが重い空気を変えようと言い出したのを理解したのだろう。

「そんな余裕がうちにあるわけ無いつてばよ。何しろ、うちは新興の里なんだ。有能な人材を遊ばせておくわけ無いだろ。」

「ぐっ…。」

「ふふ…と言うわけで貴方にはナルト君の補佐をしてもらいます。」

白がシカマルに言った。

「???…あんたがナルトの補佐をしてるんじゃないのか?」

少なくとも、シカマルにはそう見えた。

白は有能な補佐だと感じていた。

「僕は、ナルト君の正式な補佐ではないですよ。暫定的にナルト君の補佐の仕事もしていますが、本来は再不斬さんの部下です。」

「言ったろ？うちは人材不足だって。特に、うちは戦闘に特化したよ
うなのばっかだな。白やシカマルみたいに文官も出来るような忍は
少ない。」

「要するに脳筋の武闘派集団ですね。まあトップがナルト君ですか
ら。」

「おいっ！」

白の辛辣な評価に抗議するナルト。

「と言うわけで、ナルト君の補佐はシカマル君にお願いします。もち
ろん、引き継ぎはしっかりやるので安心してください。」

ナルトの抗議を華麗にスルーして白が続ける。

「そりゃあ良いけどよ。新参者の俺がそんな地位に付いて、この里
の連中は面白く無いんじゃないか？」

シカマルの不安は最もだ。

「この里の人達は、ほとんどが他に居場所を無くした人達です。ナル
ト君に感謝こそしても、恨むような人はいませんよ。ナルト君の決定
には素直に従います。」

しかし、白は笑ってそれを否定する。

「だけどな。新興の里なら当然、それを探ろうと各国からスパイが
潜り込んでるハズだ。そいつらが扇動したら、あつという間に内戦に
なっちまうぞ？」

「この里にスパイはいませんよ。貴方もさつき受けた面接。あれはこ
の里のメンバーになるにあたって、必ず受けて貰うものです。さつき
も言いましたが、九尾モードになったナルト君は、相手の悪意を感じ
取る事が出来ます。嘘を付けば、当然後ろめたさを感じます。仮に貴
方が木の葉のスパイとしてここにやって来ても、あの面接で貴方の悪
意を感じ取ったナルト君が不採用にしましたよ。」

白の説明に一度は納得するシカマルだったが、

「それでもだ。後から里に反感を覚える場合もあるハズだ。」

「勿論、それは考えられますが。さつきも言いましたがこの里の人

達は、ナルト君に感謝しています。ちよつとやさつとの事で里に反旗を翻すことはありませんよ。まあ、この里の特殊性と言うべきものかも知れませんが…」

シカマルは、ようやく納得した。

この白と言う人物は、かなり頭が良い…

白との会話を通じて、目の前の人物をそう評価したシカマル。

元より、この里についてあまり知らない自分だ…

白が言うならきつとそうなのだろうと思つたのだ。

「さて。話は纏まつたな。じゃあうちの里の幹部を紹介するつてばよ。」

シカマルが白と会話をしている間に尾獣空間を通じて、他の人柱力に連絡を入れていたナルト。

執務室に幹部が集まつていた。

経理を統括しているヒナタ。

「し、シカマル君！どうしてここへ?!」

シカマルを見て驚くが、これからナルトの補佐に就くと知ると、笑いながら握手を交わした。

ヒナタの補佐をしているのはテマリだ。

シカマルに対しては、今のところ含む所はない。

中忍試験で少し見た程度だ。

本来の歴史では既に惹かれ合つていた両者だが、まだこの世界ではお互い知り合いの知り合い程度の認識だった。

営業面を統括しているユギト。

彼女はナルトの前世と同じように逆境にめげず、里の信頼を勝ち取つた者だ。人当たりも良く、幾つもの依頼を勝ち取つていた。

ユギトの補佐をしているのはフウ。

彼女は、人懐っこく快活であり、ユギトとはまた違ったアプローチで依頼を得ていた。

戦闘隊長の再不斬。

戦争が起きれば、部隊を預かることになっているが、生憎とこの里

に仕掛けようとする者がいないため、出番がない。

シカマルの補佐就任に驚きつつも、自分の殺気に反応しながらも、悠然としていた態度を気に入っていた為、特に何も言うことは無かった。

再不斬の補佐に白。

今のところ平和なため、ナルトの補佐も兼任していた。

当然忙しく、シカマルが来て、一番ありがたかったのは彼かも知れない。

守備隊長に老紫。

里で最も年が上の彼は戦闘経験が最も豊富なため、有事の際には彼が里を守る要となる。

その補佐として我愛羅。

彼の能力は、守る時にこそその真価を發揮する。

戦闘経験の豊富な老紫の指示のもと、その力を振るえば、里の守りは磐石と言えるだろう。

そして警備隊長のウタカタ。

真面目な彼は、補佐で弟子のホタルと共に犯罪を取り締まる部署に所属している。

「で、里長をやらせてもらってるのが俺。うずまきナルト。以上。説明終わり！」

「ってちよつと待て。再不斬ってのとウタカタだったか？確か門番をやってたよな。戦闘隊長と警備隊長って…」

そんな人間がなぜ門番なんぞやってるのか…

「そんなの決まってるだろ…暇だからだ。」

再不斬が当然の如く答える。

今のところ、任務外で忙しいのは事務や営業と言った部門。

平和なこの里では、再不斬たちの活躍の場は無い。有事の際ならともかく、任務も無ければ暇なのだ…

「有能な人材を遊ばせておく余裕は無いんじゃないや無かったのか？」

呆れたようにシカマルが言った。

「事務方の方はな…」

嘆息してナルトが答える。

「ま、これからよろしくなシカマル。」

ナルトが笑って言った。

「ああー」

気持ち切り替えて頷くシカマル。

その晩・・・

シカマルに用意された部屋で荷物の整理をしていたシカマルはリュックからあるものを取り出した。

それはアスマがシカマルに渡した餞別だった。

あの日・・・シカマルの旅立ちの日にアスマは現れなかった。

しかし、数日前にひよつこりと顔を出して挨拶に来ていたのだ。

「もうすぐこの里を出ていくんだってな・・・シカマル・・・」

「ああ・・・」

「餞別代わりと言っちゃあなんだが・・・コレを持っていけ・・・」

そう言って差し出してきたのは将棋の盤と駒。

それは、シカマルが良くアスマと勝負しているときに使っていたものだった。

「自分の子供と遊んだら良いじゃねえか。」

この時、アスマと紅との間に子供が出来ていた。木の葉を辞める自分は受け取れない・・・そう思った。

「良いんだよ・・・その時は、また新しいものを用意するさ・・・コレはお前が持っていけ・・・」

「アスマ・・・」

「まあ・・・その・・・なんだ・・・今更、俺が何か言っても仕方ない。だが一つだけ・・・お前の師としてアドバイスを贈ろうと思う。」

そのあと、アスマは言いにくそうにしながらも、口を開いた。

「……………」

「お前はお前が信じた道を突き進め。迷うのも良い。立ち止まるのも悪くない。だが後戻りだけはするな・・・そこには後悔しかないからな・・・」

かつては、里のやり方に反発し、守護忍十二士にまでなった男。彼

が何を思いその言葉を贈ったのかシカマルにはわからなかった。

それでも、アスマがアスマなりにシカマルを気遣っているのだけは理解できた。

「元気でな……」

アスマはそれだけ言うと、後ろを向き去っていった……

その後ろ姿を思い返しながら……

「ああ……わかっているよアスマ……俺は俺のやりたいようにやるだけさ……」

シカマルは、思い返したアスマの言葉に返事をするように、自分の思いを口にするのだった。

予期せぬ再会

シカマルが、ナルトの補佐役に就任して3ヶ月が経過した。

その間に、白とシカマルで五影を呼ぶにあたっての計画を練り、いよいよその日を迎える事となる。

まずはシカマルとの約束通り、他の影たちに先んじて火影である綱手が到着した。

シカマルがナルトの補佐になって最初の任務が、光の里の使者として、木の葉に返答をすることだった。

自身がナルトの補佐になったことも含めて、シカマルから報告を受けた綱手は、すぐにスケジュールの調整に入った。

そして自来也と、護衛としてゲンマの小隊を伴って光の里を訪れた綱手。

ちなみに、シズネは木の葉にて留守を預かっている為、メンバーにはいない。

「よお… ナルト。随分とでかくなったな。」

綱手がナルトを見ると、開口一番親しげに話しかける。

「おい… 綱つ… 五代目… 一応ここには公式な会談として訪れたのだ。態度を改めてほしいのお… ナルト殿… 今回はこちらの要望を受けて頂き誠にありがとうございます。」

綱手の態度を窺めつつ、補佐役の自来也が丁寧に挨拶をする。

「アツハツハツハツハー… なんだよエロ仙人… その話し方… 気持ち悪いってばよ…」

そんな自来也の話し方がツボにハマったのか、笑い転げるナルト。

「だからエロ仙人じゃねえってえのお」

自来也は、すかさず反論する。その顔はどこか楽しそうだった。

「イーヒツヒツヒツ… グハツ」

尚も笑い転げるナルトに、白が氷遁で作ったハンマーをシカマルに渡す。

シカマルは無言でそのハンマーをナルトの脳天に叩きつけた。

悶絶するナルト。

「すみません火影様、自来也様。うちのバカ長が失礼を…」
シカマルが低姿勢で謝罪した。

「いやいや、うちの綱手も誉められた態度では無かったからのお。お互い様だ。しかし… お前さんも就任そうそう苦労しとるのお…」

自来也は、シカマルの苦労に同情していた。

奔放な綱手は、里の上役と良く揉めるため、必然と自来也が間に入り、場の緩衝役を務めることになった。

気苦労の多い自来也は、同じく奔放なナルトに手を焼かされていそうなシカマルに共感したのだった。

「たくっ良いじゃねえか。今は他の影たちはいねえし、俺とばあちやんの仲なら問題ねえってばよ…」

頭を擦りながら、ナルトはぶつぶつと文句を言う。

「そうだぞ、自来也。堅苦しい挨拶をすれば良いと言うわけでもなからう。」

綱手も、ナルトに賛成のようだ。

「二はあ…」

そんな二人に補佐役のものたちは大きくため息を付いた。

因みに、ゲンマの小隊は綱手が思いの外ナルトと親しげなことに啞然として見ていた。

「さて。冗談はさておき… ナルト殿。此度は木の葉との会談を受け入れて頂き、感謝している。」

綱手が真面目の顔で言った。

「いや… 火影殿。こちらも木の葉との話し合いはしたいと思ってたんだってばよ。それに個人的に火影殿に頼みたい事もあったしな。」

ナルトもそれに応じる。

「おまえら… 出来るなら最初からやれってえの…」

自来也がツツコミを入れるが、二人ともスルーするのだった。

そして場所を会議室に移し、ナルトと綱手の会談は始まった。

それはナルトと綱手の他は、シカマルと白、自来也のみが参加してのものとなった。

ゲンマたちも、綱手の護衛のため中に入ることを主張したが、綱手

が頑として受け入れず、仕方なく外で待機している。

「さて…まどろっこしいのは面倒だから単刀直入に言わせて貰う。ナルト。光の里と木の葉とで同盟を結んで貰いたい。」

「おう。良いってばよ。」

綱手は、あつさりと本題に入る。

ここに来たのは、光の里との同盟を結ぶため。

木の葉の衰退の原因は、人柱力の喪失。

そこから唯一、人柱力の残っている雲隠れの里に強引に仕事を奪われることになっていた。

しかし、人柱力という強力な力を持つ雲隠れに戦争をふっかける訳にもいかず、ズルズルとここまで来てしまった。

木の葉が生き残るには、もはや恥を忍んでも自分たちが追い出したナルトに助けを求める以外には無かった。

事ここに至って、ようやく上役たちもその事を認め、今回の会談に漕ぎ着けたのだ。

しかし…

流石の綱手も、ナルトがこうもあつさりと承諾するとは考えておらず、ポカーンとした顔をした。

「ナルト…いくらなんでも考え無さすぎだ…もう少し悩むとか、持ち帰って相談するとかあるだろう…」

呆れながら言う綱手に対し、ナルトは笑いながら、

「いや、今回の会談の目的はこっちでも予想してたんだってばよ。既に話し合いは済んでるんだ。もちろん、条件は付けさせて貰うけどな。」

あつさりと承諾した理由を話した。

「ふむ…条件付きか。まあ当然だのお。と言うか、何も無しで受け入れる方が疑われるか…」

自来也も頷いた。

そして、光の里から出された条件…

木の葉からの出資金の支払い。

医療忍者の派遣と指導。

「それから、綱手のばあちゃんに見て貰いたいやつらがいるんだ。そいつらの治療をもつて同盟の条件とさせて貰いたい。」

ナルトは、そう言つて口を結ぶ。

綱手は、光の里からの条件について考えた。

元々、同盟とは言え、光の里にとって落ち目の木の葉と同盟を、結ぶメリットはあまり無い。

規模こそ小さいが、この里は過剰なほどの戦力を抱え、規模が小さいからこそ、然程大きな資金を必要としていない。また滝隠れのように、幾つかの隠れ里とは既に交流をしているため、物資にも問題が無い。

つまり、木の葉がいかに光の里と同盟を結びたいと言つても、木の葉と同盟を結ぶメリットを示さなければ、断られる可能性が高かった。

その辺は、木の葉でも話し合いが済んでおり、出資金については、想定範囲内だった。

医療忍者の派遣に関しては、持ち帰つて議論する必要があるだろうが、今や木の葉には失業者が溢れている。

ナルトに対して、含むものを持っていない人物で無ければならぬため、探すのには苦労するかも知れないが、これも、恐らく通るだろうと考えた。

ならば、最後の条件…

「ふむ… わかった。取り敢えず私に見て欲しいとか言う奴等の元に案内して貰おうか。」

「ん？良いのか？さつき言われた事をそのまま返すようだけど、今すぐに結論を出さなくても良いってばよ？そりゃあ、早ければこっちは助かるけど…」

ナルトが言うが、綱手は、

「必要ない。この条件は私が必ず通すさ。」

そう言つて笑つた。

(苦労するのはワシだというのに…)

また上役たちから文句を言われることを想像した自来也は、一つた

め息を吐くのだった。

綱手の了承の言葉にナルトは頷くと、綱手と自来也をある場所へと案内した。

そこにいたのは、痩せ細りボロボロとなっている長門と、それを介護する小南…

「長門、小南!」

二人に気付いた自来也は、直ぐに駆け寄った。

「先生…」

「二人とも…スマン…スマンのお…ワシがずっとお前たちに付いていてやれば…中途半端に教えたせいで弥彦を死なせてしまった…ワシは師として失格だ…」

二人の事をナルトの前世を見て知っていた自来也は、責任を感じていた。

暁壊滅の情報を知った時は、二人ともナルトたちに殺されているものと考えていた。

しかし二人は生きていた。自来也は喜びのあまり、泣きながら二人を抱き締めた。

「先生…俺は…」

一方、長門や小南もうしろめたさを感じていた。

かつての教え子が犯罪集団を立ち上げたのだ。

それを知った師はどんな思いだったか…

自分たちはもはや、自来也に顔向け出来ない…そう考えていた…それでも…

自分たちの生存を喜び、涙を流しながら抱き締めってくれる師の温もりに、嬉しさを感じていた。

「先生…ごめんなさい…そして…ありがとう…」

二人の口からは自然とその言葉が出るのだった。

自来也が落ち着き、綱手が長門の診察を開始した。

その結果…

「長期に渡り、限界を超えてチャクラを使いすぎていたのが原因だな…いわば栄養失調のように身体のチャクラが枯渇している。」

ペイン六道として、常に六体の死体を操り続けていた長門……世界を正すと言う目的のため、無理が祟っていたのだ。

そのせいで本来、使えば時間によって回復するチャクラを、消費量が上回った状態で身体が慣れてしまい、何もしていなくてもチャクラが身体から出ていってしまう体質となっていた。

暁壊滅後は、静かに暮らしていた為多少の改善は見られていたが、それも少しの延命に過ぎない。

「じゃあ、どうしたら良いんだってばよ?」

「点滴のようにチャクラを与え続けて、少しずつ身体を慣らしていくしかないな。一気にチャクラを与えても、結局身体が過剰分を有害と判断して抜いてしまうだろうし……」

「私が長門にチャクラを渡します。」

小南が立候補する。しかし、それに綱手は首を振る。

「言っただろう? 少しずつ……しかし常にチャクラを与え続けなきゃならない……幾らお前が元暁のメンバーとは言えチャクラが持たない。」

「うーん……あ……じゃあこう言うのはどうだってばよ……」

何か方法は無いか……考えていたナルトは思い付いた方法を口にする。

「ほお……そんな事が出来るなら、上手く行くかも知れんな……」

ナルトの提案した方法……それは九喇嘛のチャクラの受け渡しのアレンジ版。

少量ずつ身体に行き渡らせるように調整しつつ、九喇嘛のチャクラを長門の体内に留める。

かなり難しい作業だが、今のナルトなら行える事だった。

「今後、戦闘さえ行わなければいずれ元のように生活できるようになるだろう。」

「長門……良かった。」

綱手の太鼓判に小南は、泣きながら長門に抱きつくのだった。

「サンキュー、ばあちゃん。やつぱりばあちゃんは世界一の医療忍者だってばよ。」

「当たり前だろう?」

ナルトの言葉に、笑いながら答える綱手。

「さて、ばあちゃん…あと一人…見て貰いたいヤツがいる。ただし、こいつのことは極秘で頼むってばよ。」

ナルトは次の瞬間、いつになく真剣な顔をして、綱手にそう言った。「わかった。案内しな。」

ナルトの表情に何かを感じた綱手は、何も言わずに頷く。

そうして案内された場所で会った患者を診察し、改善方法も提示した綱手は、他の影たちが来るまでの間、のんびりと光の里で過ごすのだった。

忍連合誕生

光の里に綱手が訪問してから、一週間が経過した。

今日この日、五影がこの場に集い、会談を開くこととなっている。最初に現れたのは風影。彼は里を訪れると、ナルトへの挨拶もそこそこに、我愛羅とテマリの元へと向かった。

そう……この世界の今の風影とは、カンクロウその人である。

彼は、里を抜けた我愛羅とテマリの事で後ろ指を差されていたが、それでもめげずに努力を重ねていた。

そんなカンクロウの姿勢に人々も評価を改め、風影となった今ではカンクロウに絶大な信頼を寄せている。

次に訪れたのは、水影。水影はヤグラの後を継いだメイが未だ健在である。

メイは、ナルトへ丁寧に挨拶をすると、綱手の元へと向かった。同じくノ一の影として話があったのかも知れない。

次に土影のオオノキが現れ、最後に雷影のエーが訪れる。雷影の隣にはビーの姿もあった。

彼らは、ナルトに含むものが満載だと言わんばかりに不機嫌そうな態度で形式上の挨拶のみを交わした。ビーもまた雷影に合わせてか何も口にはしなかった。

場所を移して会議室。

「さて……まずは俺の呼び掛けに応じてくれて感謝するってばよ。本来ならここでうちの幹部たち……人柱力を全員紹介したい所なんだが……生憎何人かは任務で外に出払っていてな……勘弁して欲しいってばよ……」

ナルトの言葉に

「ふん……そんな言葉はいらん。ワシもそう暇では無いのでな。用件を手短に言え。」

エーが言うと、オオノキもそれに続く。

「ワシも出来れば、主の顔など見たくも無かったのじゃぜ。なにせ、うちの里から人柱力を奪われたのじゃからの。それでも現状を打破す

るにはこの会談は必要じゃ… 仕方なく来てやったんじゃぜ…」

嫌味を隠そうともせず、告げるオオノキ。

「土影、雷影… いい加減にしないか。ここは嫌味を言う為の場所では無い。」

たまらず綱手が窘める。

「ふん… 木の葉の綱手姫か… お主も大変だのお… 木の葉は最も衰退が激しい… 藁にもすがると言った所か？自分たちで追い出した人柱力が長を務める里に尻尾をふるとはの。」

オオノキの辛辣な言葉は止まらない。

「お二人とも、その辺で止めたらどうですか？雷影殿も言ったように、我々としてそう暇では無いのです。まずはナルト殿の話の聞こうじやないですか。」

メイは、綱手を助ける… というよりも話を先に進めるために言った。

「ふん…」

「そうじゃな…」

エーとオオノキは、揃って口を噤む。

その間、カンクロウは黙りを決め込んでいた。

まだ影になって、間もないカンクロウに老獪な他の影たちを制止するだけの発言力が無いことは、自覚していたからだ。

全ての影たちがナルトを見る。

ナルトは、エーやオオノキの嫌味に気分を害した様子もなかった。

「さて。んじや、雷影殿の要望でもあるし、今回の会談の目的を伝えるってばよ？」

そう言っただけでナルトは一同を見渡す。

皆がナルトの言葉の続きを待つ。

「うちの里と同盟を結ぶ気は無いか？」

「なんじやと？」

ナルトの言葉を信じられないように、聞き返したのはオオノキ。

「主は、ふざけておるのか？ワシらの里から人柱力を奪ってにおいて、何を戯言を…」

「そうだな。うちの里からも一人奪われておる。だと言うのに協力を求めるなど…。厚かましいにも程があると思わんか？」

エーもまた、オオノキに続いた。

「あら…。頭の固い年寄りだめね…。うちは願ったり叶ったりね。もちろんタダでは無いんでしようが…。条件次第では、同盟を組むのもやぶさかでは無いわ。何しろうちはどこかの里に仕事を取られて四苦八苦してますし。」

「水影…。貴様！」

同盟に賛成したメイをエーが睨む。

「うちも、同盟に賛成させてもらおう。」

綱手が後続く。すでに同盟の約束を取り付けていることは、秘密にして。

「我が砂隠れも同じく、同盟に賛同するジャン。」

カンクロウも続いた。

「主ら…。」

五影のうち…。三人が光の里との同盟に賛同した。

オオノキの顔には焦りが見える。

もともと、五大国のうち人柱力を擁する雲隠れのある雷の国以外は、現在経済的に劣勢を強いられている。

その理由は、人柱力の巨大な力を背景に雷の国が強引に仕事を受注しているからなのだが、今回、光の里と同盟を取り付けた場合、雷の国は今までのように強引に仕事を取る事は出来ない。

となれば、雷の国の仕事が正規の量に戻り、残りを他の国で取り合いになる。しかしその場合、今度は光の里の力を背景に他の三国が強引に仕事を分け合うことになりかねない…

土の国だけが衰退することになるだろう…

オオノキは一つ息を吐く…。そして…

「この手は出来れば使いたく無かったのじゃが…。」

いかにも残念そうに言ったオオノキは、エーに目配らせをする。

エーはそれに頷くと、

「さて、小僧…。突然だがこの里はうちと岩隠れの里の精鋭に包囲さ

れておる。」

「なっ… どういう事ですか！雷影殿… 土影殿…」

「いくらなんでも国際条約に反するジャン…」

メイとカンクロウが慌てて声を荒げる。

「国際条約と言うがな若造… もともとこの里は他里の忍を奪って立ち上げられたものじゃぜ… 力を背景に里の立ち上げを飲まざるを得なかったが…」

オオノキがカンクロウに言う…

「驕ったな小僧… お前たち人柱力… いや尾獣の力は破壊に特化したもの… だからこそワシらはその力を恐れていた。しかし、それはその力がワシらの里に向けられてこそ…」

エーがオオノキの言葉引き継ぎ、ナルトに向けて言い放つ。

「ワシと雷影は此度の会談の話が来たとき… 内々に密約を交わした… 会談の内容次第ではワシらの力で里を制圧すると言うものじゃぜ… 雲隠れに借りを作るのは癪だが、仕方あるまい。」

「この里の中では尾獣化も出来まい？自分の里を破壊することになるからの。」

「さて、ナルト… それに他の影たちも… 里の長として、賢明な判断をする事じゃぜ…」

他の影たちにしても、ここで殺される訳にはいかない。

タダでさえ、現在の里は雲隠れを除き不安定なのだ… ここで里のトップが急にいなくなってしまうては、里の混乱は避けられない… どころか崩壊しかねない。それだけは避けなければならない影たちは動くことが出来なかった。

「主には死んでもらう… 残った人柱力はワシの里と雲隠れで分け合うことになるが… この際仕方あるまいて…」

オオノキが言ったところで、会談室に静寂が包まれる。

この間、ナルトは一言も発していなかった。

いや… ナルトだけではない。この里に刃を向けられているのだ。本来なら光の里のものがたちが抗議を口にしても言はず…

しかし、この部屋にいる誰も抗議の声を挙げることは無かった。

その時、ナルトが口を開いた。

「うちには優秀な相談役が二人いてな… その二人が俺を補佐してくれて随分と助かってるんだってばよ。」

突然、この状況と関係の無いことを話し始めたナルト。

「何を言っておる？」

エーが苛立ちを込めてナルトに言った。

「二人とも、とんでもなく頭が良くてな… 正直、俺には考えも付かないような計画を立ててくれるんだってばよ。」

「だからどうしたと言うんじゃぜ…」

「計画には当然、失敗したときや状況によって、幾つかの変更案も用意してくれるんだってばよ。で、今回の同盟の件は、最初からいた補佐役の計画を、もう一人が修正して考えてな… 考えられる限りの対処法も検討してもらった… つまり…」

ナルトはそこで言葉を切ると、エーとオオノキを見据える。

「この状況は、二人が既に予想していたって事だってばよ。」

「!?!」

冷や汗をかく二人。

「だからどうした。既にこの里は包囲しておる。後手に回った貴様らに出来ることなどないわい。」

嫌な予感を感じつつも、現在の状況から強気を崩さないエー。

「任務に出てる人柱力がいるって言ったよな… ソイツらは今、どこでどうしてると思うってばよ？」

ナルトの言葉に、ゾツとするエーとオオノキ。

「ま… き… か…」

「今の俺たちは全員が尾獣化できる。尾獣玉も何発も撃てるってばよ。雷影殿の言う通り、俺らは破壊に特化してる…」

「里を人質にとった… と言うことか…」

「いや、先にこちらを制圧してしまえば手出し出来まいて…」

二人の言葉を嘲笑うように、ナルトが言う。

「俺たち人柱力は互いの精神世界を通して会話が出来るんだってばよ。」

ナルトの言葉にエーは確認の為、一緒に来ていたビーに顔を向ける。

ビーはナルトの言葉を肯定するように、首を縦に振った。

苦々しい顔をする二人。

「俺はもう、誰かを無条件で信じる程お人好しじゃねえってばよ。考えてみりや、尾獣が憎しみの塊になったのも、俺たち人間のせいだしな。そんな人間が相手なんだ…まずは相手に話し合いに応じるだけの状況を作る。『忍が尊重するのは行動と力』だったよな？雷影殿…」

「むっ…」

確かにエーの信条はそうだ。しかしナルトにそれを言った覚えは無い。

なぜナルトが知っているのか…しかしそれを考える余裕はエーには無かった…

「さて、雷影殿、土影殿。どうするってばよ？このまま、うちに攻め込んでみるか？自分の里の消滅をかけて…」

「ぐっ…」

もはや、二人に為す術は無かった…

「何が望みじゃぜ。」

力無く頭をたれながら、オオノキがナルトの要望を聞いた。

「言つたる？話し合いをするって。うちと同盟を結ぶ気はないか？」

「支配…ではないのか？」

「ここまでの事をやったのだ。どれ程の事を要求されるか…皮肉を込めて口にするオオノキ。」

「まずは座ってくれ…話はそれからだってばよ。」

ナルトの言葉に全員が座り直し、改めて話し合いが始まった。

ナルトが同盟にあたって付けた条件は大きく言えば以下の二つだ。

一つ、同盟国は光の里に対し出資金を支払う。

代わりに、光の里は戦力を貸し出す。

二つ、同盟国は互いに争いを仕掛ける事を禁じる。

この禁を破った国は、光の里と他の同盟国の戦力を以て戦う。

その他細かいものは、各隠れ里によつて条件は異なるが、大まかにはそう言う内容だった。

「~~~~~!」

その内容に唾然とするエー。

「これでは戦争を起こすことも出来んな… ナルト… 主は一体何を望んでおる…」

オオノキがナルトに聞いた。

「ん？そんなの決まってるってばよ…」

『家族の幸せだ。』

あまりにあまりな解答に、大口を開けて呆けるエーとオオノキ。

家族が安全に、幸せに過ごすためには戦争はあつてはならないものだ。

だから戦争を無くす。今のナルトにとっては世界を平和にする事は、ただの手段でしかない。

全てはヒナタと、生まれてくる子供たちの為…

既に内容を聞いていた綱手は、大いに笑った。

カンクロウやメイも小さく吹き出す。

結局、ナルトの真意を疑おうにも、エーとオオノキも同盟に参加せざるを得なかった。

その発表は世界を巡り、1年後、ほとんどの隠れ里がこの同盟に参加することになり、ここに巨大な忍連合が誕生したのだった。

兄弟

忍連合が誕生してから、三ヶ月が経過した。

ナルト：…いや光の里の真意を疑っていた、エーやオオノキだったが、自身の里の安全には代えられないと矛を納め、里に戻り状況を見定める事にした。

一時的ではあるが、世界は平穏な時を迎えていた。

そしてその日、光の里に再び綱手が訪れていた。

「よお、ナルト。来てやったぞ。」

「なんだ、ばあちゃん…また来たのか？」

呆れながら返事をするナルト。

「そう言うな。向こうでは上役のクソどもがネチネチと文句言うわ、下からも突き上げを食らうわ居心地が悪いのだ。少し位羽目を外しに来ても良からう。」

この三ヶ月の間に、綱手がこの里を訪れるのは二度目だ。

火影と言う地位に就いている綱手は、決して暇では無い。

その忙しい中、往復で一週間は掛かるだろうこの里に何度も訪れるのは、大変だろう。

そこまで木の葉の雰囲気は悪いのか…

ナルトがそんな事を考えていると、綱手が今回の訪問の目的を告げる。

「まあ、今回はちゃんと目的があって訪れたのだ。お前が以前約束した医療忍者の件だ。」

「ああ。もう編成が済んだのか？」

ナルトが打診していたのは、光の里での医療忍者を増やすこと。

その為に、木の葉の同盟の条件として、医療忍者の派遣を入れていた。

とは言え、木の葉でのナルトの評価を考えれば、派遣できる医療忍者もなかなか集まらないだろうと考えていた。

予想より早く編成が出来たことに、驚くナルト。

「と言うより、もう連れてきている。扉の前で待機中さ。」

「はっ!!」

綱手の言葉は、さらにその上を行っていた。

「い……いやいや、いくら何でも早すぎるってばよ。こっちは何の準備もしてねえし……なんで先に連絡くれなかったんだってばよ。」

ナルトがもつともな意見を述べる。

すると綱手は、

「勘違いするな。今日連れてきたのはその代表さ。どっちにしても、里に受け入れるには例の面接をするんだろ？まずは代表だけを連れてきたって訳さ。残り10名を派遣予定だが、その編成自体は済んでいる。一応、お前への心証は確認済みだ。」

「そうか……まあ、それでも先に連絡が欲しかったけど……わかったってばよ。じゃあ取り敢えずその代表者を連れてきてくれるか？」
「二人とも、入ってきな。」

ナルトの許可を得た綱手は頷くと、扉の外にいる二人に声をかける。

入ってきた人物を見て、更に驚くナルト。

「サクラちゃん！それに、サスケも……」

そう……その二人とはサスケとサクラだった。

「ヤッホー、ナルト。久しぶりね！」

「……………久しぶりだな。ナルト。」

予想外の人物の登場に、固まるナルト。

「アツハツハツハツ。驚いたろ。だから連絡しなかったのさ。サクラは私の直弟子だ。ここでの医療忍者の代表になる。サスケはその護衛だな。二人ともここに派遣となる。よろしく頼むぞ。」

ナルトの予想通りの反応に笑いながら説明する綱手。

「ち、ちよつと失礼するってばよ。」

ナルトは焦りつつ、綱手を誘って外に出る。

「なに考えてるんだってばよ！ばあちゃん。サクラちゃんはともかく、ここにサスケを連れてくるなんて。」

小声で綱手に抗議するナルト。

「なんだ。私の説明を聞いてなかったのか？サスケはサクラの護衛

だ。」

あくまでも冷静な綱手に、

「そうじゃねえってばよ。ここにはアイツがいるんだぞ?」

ナルトは自分が焦っている理由を伝える。

「だからこそだ。ナルト… お前もこのままで良いと思っっている訳ではあるまい。」

綱手は強い口調で言った。

「そ… それは…」

その言葉にナルトは動揺する。

「サスケにとつても、そしてアイツにとつても… いつまでもこの事から逃げていては、いつかまた、すれ違いから新たな悲劇を生むことになりかねん。」

「だけど…」

それでも悩むナルト。しかし綱手は言った。

「ナルト… サスケを信じてやれ…」

「え?」

「サスケとて、いつまでも子供のままではない。今のサスケなら受け止められる。そう思ったから連れてきたのだ。」

「…………… わかったってばよ。」

綱手に説得され、ナルトは執務室に戻った。

「悪いな。二人とも。ちよつと予想外の事に驚いちゃまってな。」

ナルトは二人を待たせた事を謝罪した。

「う、うん。」

「ふん。」

「変わって無いな… 二人とも…」

二人の対応に、懐かしさから笑みを浮かべるナルト。

「ちよつと… 変わってないこと無いでしょ?こんなに女らしくなつたじゃない… って、ナルトは随分大きくなったわね…」

変わって無いと言う言葉に不満の声を上げるサクラ。

「ははは… わりいってばよ。サクラちゃん…」

頭を掻きながらそう言ったナルトは、サスケに、顔を向ける。

「サスケ…」

「ナルト…」

ナルトの意識が自分に向けられている…。それを感じたサスケはナルトの眼を見据える。

そして…

「サクラともども…。これから世話になる…。よろしくな…」

サスケがそんな挨拶をした。

「ぶ…。あっはっはっはっ…」

ナルトは笑いだした。

「ち、ちよつとナルト。サスケ君が挨拶したのに笑うなんて失礼じゃない。」

サクラが抗議を上げる。

「……………」

笑われる理由に自覚があるのか、サスケは不満そうな顔をしながらも、何も言わない。

「すまねえな…。サスケ。まさか、正面からおれに挨拶するとは思わなくてよ…。（確かに信じてみても良いのかもしれないねえな。ばあちゃん…）」

ナルトはサスケに改めて向き直ると、

「サスケ…。今のお前の夢はなんだ？」

と聞いた。

「なんだ？突然…」

「教えてくれ…」

ナルトの目は真剣だった。茶化すつもりはない…。それを感じ取ったサスケは、

「……………今の俺の夢は…。サクラを…。幸せにすることだ…」

サスケはしつかりと言い切った。

ナルトが里を抜けてから少しして、二人は付き合い始めた。

サスケは、その付き合いを通して安らぎと、深い愛情を知った。一族の復興のためではない…

春野サクラと言う女性を幸せにしたい…。ただそれだけ…

サスケの答えを聞いたナルトは決意する。綱手を見て頷くと、二人に声をかけた。

「二人とも。まず挨拶の前に、会って貰いたい人物がいる。」

そう言つて、立ち上がると執務室を出る。

綱手も後に続く。

「???」

二人は、頭に疑問符を浮かべながらナルトのあとを追つた。

そこは、一軒の小ぢんまりとした家屋だった。

「ここに。二人。つて言うかサスケに会つて欲しい人物がいる。」

そう言つてナルトは、扉を開ける。

「……………ナルトか？今日はどうした？」

その人物は、ナルトに、声をかける。

「兄。さん。」

驚愕の声を上げるサスケ。それもそのハズ……

そこにいたのは、サスケが復讐のために追い求め、しかしナルトに殺されてしまったハズの人物……

「その声……まさかサスケか？」

うちはイタチであった。

イタチは、眼を何かの術の掛けられた布で覆っていた。

「ナルト……なぜサスケを連れてきた。」

サスケにとつて、自分は既に死んだ人間……なぜ、わざわざ苦しませる様なことをするのか……

イタチは、ナルトに抗議の声を上げる。

「どういう事だ。ナルト！何故兄さんがここにいる。兄さんは、お前が殺したハズだ！」

驚きのあまり、声を荒げるサスケ。

「実は、あの時イタチは生きてたんだつてばよ。まあ、一時的に仮死状態にはしたけどな。」

そう言つて、イタチが社会的に死んだあの時の事を語るナルト。

サスケは改めて、兄を見る。

「兄さん……その布は？」

眼を覆う布に何かを感じたサスケは、イタチに聞いた。

「少し前、私はナルトの打診でイタチを看たんだが……あのままだと、イタチは後数年の命だった……」

「そ、そんな……どうして……」

綱手の言葉に驚きの声を上げるサクラ。

「写輪眼の使いすぎさ……カカシを見ればわかると思うが、写輪眼つてのは身体への負担がデカイ。うちは一族は、写輪眼に適した身体ではあるが……それでも負担がゼロになるわけではない。」

「だから戦闘時以外で写輪眼を使うのは避けるべきなんだが……コイツは、あの同族殺しの事件からずっと写輪眼を使い続けていた……追いつ忍の追跡をかわすため、そしてダンゾウの指示で暁のスパイをして……休まる時間も無かったのだから……」

「……」

「その結果、自分の寿命をすり減らしていったのさ。その布には写輪眼を封じる印を施している。寿命をすり減らしている要因の目を封じ、安静にすることで、まあ、10年位は延命できるだろうさ……それ以上は経過を観てみないとなんとも言えないね……」

ナルトの力でも、イタチのすり減った寿命を戻すことは出来ない……

綱手の診察で延命をすることは出来たが、未だ予断を許す状態では無かった。

「……」 五代目…… サクラ…… ナルト…… すまないが、兄さんと、二人だけにしてくれないか？」

「でも……」

サクラは不安な声を出した。

「頼むよ…… サクラ……」

悲しそうな顔をしてサクラに言ったサスケ。

サクラは頷くと、外に出た。

ナルトと綱手も後に続く。

「……」

しばし、沈黙が支配する。

「フツ…： 不様だろ？俺は両親を…： 友を…： 一族をこの手にかけてから、それでもこうして生き恥をさらしている…。」

イタチが沈黙を破り、自嘲気味に口を開いた。

「…： 確かに…： 父を母を…： 一族を殺したあんだ…： 当然の報いと言えるな…。」

サスケが答える。

「フツ…： それも今日までだな。今の俺は何も見えん…： 音や気配で戦闘も出来ない訳ではないが…： それでも限界はあるだろう…： 今ならおれを殺せるかも知れんぞ？サスケ…。」

イタチの挑発…： それを受けてサスケは一度目を瞑る。

そして…

「確かに…： 俺はあんたを憎み…： あんたを殺すために生きてきた…。」

「なら殺すが良い。」

サスケの言葉を受け入れるイタチ。

「以前まではな…。」

しかし、サスケの言葉には続きがあった。

「ナルトから、あんたの事情も…： うちのは真相も聞いた。その後俺なりに調べて、それが事実だったとわかった。」

「確かにあんたのやったことは、今でも許せない。でも…： 俺だっていつまでも子供のままだじゃない…： こんな俺にも、大切な人が出来た…： 今なら…： 今の俺なら…： 兄さんの気持ちも理解出来るんだ…： だから…。」

サスケは泣いていた…： 泣きながら話し続けるサスケ…：

「俺を生かしてくれて…： ありがとう…： 生きていてくれて…： 良かった…： た…。」

「!？」

イタチは、我慢してきた。ずっと…： 一人で何もかもを背負い…： 愛するものを守るために愛するものの命を手にかけて…：

恨まれても良い…： サスケに生きていて欲しかった。

それでも…

ありがとう…

サスケから言われた、たった一言の言葉…

その言葉にイタチは救われた…

イタチの頬を一筋の涙が伝う。

サスケはイタチの胸に飛び込んでいた。

本来の歴史では、すれ違ったまま殺し合いをすることになってし

まった兄弟…しかし今、この瞬間、その運命は変わるのだった。

予兆

サスケとサクラが光の里に来て、一週間が経過した。

今日は綱手が木の葉に帰る事になっている。

ナルトとヒナタ、シカマル、それにサスケとサクラが見送りに訪れていた。

「サクラ… 増員が来るまでは、しばらくお前一人で指導しなければならん。大変だとは思うが頼むぞ？」

「はい、師匠。」

サクラに声をかけた綱手。

さすがに、今回の訪問の目的は忘れていなかったようだ。

この一週間、綱手はのんびりと過ごしていた。

綱手からしてみれば、この里に来るのは自分の骨休めに来ている様なものだ。

他里の長との会談と称して、堂々とこの里に来て、特に会談らしい会談もしていない。

せいぜいイタチと長門の診察をしている位だ。

木の葉では、上役との軋轢や里人の対応などストレスばかり溜まる。

気楽に過ごせるこの里を気に入っていた。

唯一賭け場が無いのが不満だが…

「サスケ… 必要無いとは思いますが、サクラの護衛はしっかり頼むぞ？」

「ああ… 任せてくれ…」

次にサスケに声をかける。

サスケは相変わらず、ぶっきらぼうに答える。とても、自里のトツプに話す話し方では無いが、綱手は気にしない。

名残惜しいと感じながらも、最後にナルトの方を向いた綱手は、

「また近いうちに来させて貰うぞ。」

そう言っつて、ナルトに笑いかける。

「そりゃあ構わないけど… 大丈夫なのか？ 火影の仕事は… あんまり、エロ仙人に負担かけるなよ？」

ナルトは呆れながら答えた。若干自来也に同情しながら…

「何を言う…出来るヤツが出来る事をする。それで良いじゃないか。だいたいあのバカを、相談役にする案を出したのはお前だろ…」
「うっ…いや…でも…もう少し労ってやってくれればよ…
それに…」

「それに?なんだ?」

「長門や小南もエロ仙人が来るのを待ってるだろうからな…」
「……………」

自来也はあの時以来、この里を訪れていない。
仕事が忙しいためだ。

もともと、木の葉と言う大きな里の幹部としての仕事があり、綱手が色々と押し付ける上に、上役との調整役まで行っている。

今や自来也は、前世の火影だった頃のナルトに匹敵する程の忙しさであった。

「まあ、考えておく。」

少しだけ、自分の行動を改めようと考える綱手であった…

しかし、次の瞬間真剣な顔をする。

そして…

「ナルト…出来るだけ、この里の土地を拡張しておいてくれないか?」

「はっ?突然なんだってばよ…」

綱手の突然の頼み事に困惑するナルト。

「これは火影としてでは無く、私個人の頼みだ。」

「だから、どうしてだってばよ…」

尚も言い募る綱手に、ナルトは益々困惑する。

綱手は言うかどうか一瞬悩んだが、やがて口を開く。

「恐らく、近い将来…木の葉隠れの里は崩壊する。」

「「「はっ!」」」

綱手からもたらされた爆弾発言に思わずその場の誰もが固まってしまった。

「っ、綱手様…木の葉が崩壊するってどういう事ですか?」

最も早く復帰したヒナタが、綱手に詰め寄った。

木の葉には自分の家族もいる。心配になって当然だ。

「私が何度も説得して、上役になんとか納得させて成立させた、今回の光の里との同盟……それを良く思っていない連中がいるのさ……」

忌々しそうに話す綱手。

「そうか……そういうことか……」

シカマルは綱手の言葉で理解した。

「シカマル……お前何か知ってるのか？」

ナルトがシカマルに、訪ねる。

「……俺は木の葉の連中を見限ってここに来た。それは言ったよな？」

「ああ……」

「お前が抜けてからの木の葉を、俺はずっと見てきた。あいつらは……特に一般の人間や下忍、それに中忍の一部のやつらはダメだ……何もかも……悪いことは全部お前のせいにして、現実を見てねえ。自分達でそれを変えようともしねえ……そして、悪いことに、そんなやつらが大勢を占める……」

「……………」

「そんな状況で綱手様が、お前が治めている光の里と同盟を結んだ……」

「でも、今の木の葉の状況を改善するには必要なことですよ？」

サクラが思わず口を挟む。

「言っただろう？あいつらは現実が見えてないって。理屈じゃなく感情で考えてるのさ……」

かつてのナルトは、過酷な運命に逆らい……そのひたむきな行動が木の葉の人々の心を変えていった。

しかし、今生のナルトは進んで木の葉を変えようとはしていない。ナルトに偏見を持ち恨み固まった心のままだ。

「そういうことだ。はつきり言おう……今の木の葉に……おじいさまが残した『火の意思』は存在しない。」

はつきりと断言する綱手。その顔は苦渋に歪んでいた。

綱手とて、故郷に思い入れはあった。

火影をクソだ……などと言っていた当時の綱手でさえ、木の葉の忍を辞めたりはしなかった。

当然だ。

祖父が目指し、亡き恋人や弟が命懸けで守ったものなのだから……しかし、ナルトの前世を見たからこそ、今の木の葉に愛着を持ってない。

今の木の葉は、亡き祖父が残り、ダンやナワキ……自らが愛したもののたちが愛した木の葉では断じて無い。

「私なりに、木の葉のためにとやって来たが……それすら否定されたんだ……愛想も尽きるさ……ただ……皆が皆、愚かな訳ではない。そうなった時……彼らを受け入れる場所が必要なのだ。」

綱手の言葉を受けたナルトは悩む……

「……うちの強みは少数であることだつてばよ？万が一……流通が止められても自分たちは生活出来るだけの生産性を持っている……だからこそ大国であつても俺達を無視出来ない……まあ、これは白からの受け売りだけど……それをわかっていて言ってるのか？ばあちゃん……」

そう……光の里は五大国の隠里とは規模がまるで違う。しかし保有する力は強大だ。

こう言う場合、他国は相手への流通を止めることで相手を干上らせる手段にでる。

しかし光の里の場合、自里で生産しているもので生活が賄える程規模が小さい。

その手段すら封じられているのだ。

力でも、絡め手でも手が出せない……だからこそエーやオオノキも同盟にしぶしぶながら同意せざるを得なかったのだ。

その里に、木の葉の一部とは言え、人々を受け入れるのはリスクが大きい……

「わかっている。それでも私はお前に頼むしか無いのだ……その時はどうか民たちを受け入れてくれ。頼む……ナルト。」

綱手は頭を下げた。傲慢で不遜とも言える綱手がナルトに頭を下げるほどに追い詰められているのか…。ナルトは綱手に同情すら覚えなかった。

「わかった。頭を上げてくれ…。ばあちゃん。出来るだけの努力はするってばよ。どれだけ出来るか分からねえけど…。」

ナルトは綱手の頼みを引き受けた。

「恩に着るよナルト。」

「どちらにしても、向こうにはヒナタの家族やシカマルの家族もいるしな。まあ、ばあちゃんの予想が外れてくれるのが一番だけど…。」

頼みを引き受けて貰えて、ほっとした綱手は、迎えに来ていたゲンマの小队の飛雷神の術で帰っていった…。

「ナルト君…。父様やハナビは大丈夫かな…。」

「大丈夫だってばよ。何しろ日向は木の葉にて最強…。だろ?」

心配そうなヒナタに、ナルトは肩に手を置いて慰めるのだった…。

それから1年後…。綱手の予想は現実の物となる。

木の葉にてクーデターが起きたのだ。

それを主導した人物は…。志村ダンゾウであった…。

クーデター

「木の葉の里でクーデターだって!？」

それは、何度目になるかの光の里の拡張計画を話し合っていた時の事だった。

任務で外に出ていた、再不斬と白がもたらした情報に驚くナルト。以前から綱手が予測していた事ではあったが、実際にこうして起こってしまうと、やはりその驚きは大きいものがあつた。

「はい。数日前、木の葉にて里人の一斉蜂起によるクーデターが起きました。」

「ばあちゃんや、エロ仙人たちは無事なのか？」

「綱手様は、既にこの情報を入手していたようで、クーデターが起こる直前に、自分の賛同者や支援者を連れて脱出したそうです。更に、このクーデターに加担せず綱手様に付く者を募つて、この里に向けて移動中のようです。その数は木の葉の、実に10分の1程とか……」

「……そうか……」

「ここに来るまで、忍の足なら一週間ほどで到着しますが、一般人もいますからね。一月はかかると思います……それでどうしますか？」

「ん？」

「うちの里として、彼らを受け入れるかどうかです。」

白の問いに対して、

「もちろん、そのつもりだ。その為に、土地を大きくしてたんだしな……まあ、例の面接は受けて貰うつもりだけどな。」

ナルトは頷いた。

「わかりました。数が多いのでここで一人一人面接はできませんから、外に受け付け場所を設置しましょう。」

「ああ、それなら、複数設置してくれ。ナルトの影分身を使えば、一度に何人も出来るしな。」

シカマルが、白の提案に自分の案を付け足す。

「老紫……悪いけど、フウと一緒にばあちゃんの所に行つて護衛を頼みたい。」

「承知した。」

「了解ッス！」

ナルトの指示で二人が出ていく。

「ああ、それからナルト君……クーデターを仕掛けた首謀者ですが……志村ダンゾウと言うそうです。」

ガタツ……

白からもたらされた新たな情報に、ナルトは思わず立ち上がっていた。

その表情には、驚愕が見て取れた。

「確かなのか？」

「自分の目で確かめた訳ではありませんから、そこはなんとも……」

「……わかった。二人とも任務ご苦労様。今日は休んでくれてばよ。今回の会議はここまでだ。これから忙しくなると思うけど、皆頼むってばよ。」

ナルトは再不斬たちを労うと、会議を終わらせる。

「シカマルは、悪いけど一緒に来てくれ。」

「ん？どこへだ？」

「多分、この里で最もダンゾウについて詳しいヤツの所だつてばよ。」
「わかった。」

ナルトの言葉で行き先を理解したシカマルは頷くと、ナルトと共に会議室を出た。

・
・
・
「邪魔するってばよ。」

ナルトが向かったのは、うちはイタチの所だった。

ダンゾウと繋がりを持っていたイタチなら、何か知っている可能性があると考えたのだ。

「!？」

中に入ったナルトは、思わず息を呑む。そこにはイタチの他、サスケとサクラもいたのだ。

イタチの診察を綱手から引き継いだサクラは、定期的にイタチの元を訪れていた。

当然、護衛役のサスケも一緒だ。

「どうかしたのか？ナルト…。」

イタチがナルトに声を掛ける。

サスケにとつて、ダンゾウは両親や一族の真の敵であり、兄に残酷な運命を背負わせた張本人でもある。

サスケがいる前で、ダンゾウが生存していることを説明するべきかどうか…迷うナルトだったが、どうせいずれは、サスケに伝わるだろうと考え、ならばここで話してしまうことにした。

「実は…。」

ナルトはイタチに話し始める。木の葉の状況…そしてダンゾウのこと。

「綱手様は大丈夫なの？ナルト。」

サクラは、綱手のことを心配していた。

「ああ…それは大丈夫だってばよ。今はもう木の葉を出てこつちに向かってるそうさ。」

「そんなことよりも、ダンゾウってヤツが生きてるのは本当か…。」

当然、サスケはダンゾウの情報に食いついた。

「わからねえ。確かに俺はダンゾウを殺したはずだ。ダンゾウのチャクラを感知した上で屋敷ごと、吹き飛ばしたからな。例え、飛雷神の術が使えたとしても、あの状況で飛べたとは考えられない。だからここに来たんだってばよ。イタチ…お前、なにか知らないか？」

ナルトからあらましを聞いたイタチは考え込んだ…そして、少しの間を開けた後、おもむろに口を開く。

「一つだけ、その状況を覆す事の出来る術がある。名を『イザナギ』と言う…聞いたことあるか？」

「…それは、どんな術なんだ？」

「写輪眼の瞳術の中でも、究極に位置する術だ。自分に幻術を掛け、現実と夢を繋げ、あったことを無かったことにし、無かったことをあった事にする事が出来る。」

「なっ!？」

「そんなの反則技じゃない。」

「そんな術が…。」

イザナギの効果に驚くサスケたち。

「???つまり… どう言う事だつてばよ?」

ナルトは理解する事が出来なかったようだ。

「ハア… お前に分かりやすく言えば、今回のダンゾウの件を例にするなら、ヤツはイザナギつて術を使い、お前の攻撃で死んだと言う現実を、無かつたことにしたつて事だ。」

シカマルが、面倒そうに説明した。

「な!?!そんなの反則だつてばよ。」

「だから、皆驚いたんでしょ…。」

サクラがツッコミを入れた。

「もちろんリスクはある。術の発動に大きくチャクラを消費する上、書き換えられる時間も個人差がある…。そしてそれは僅かな時間だ。更に使用限界まで使ってしまったその写輪眼は、二度と光を見ることは出来ない…。」

イタチは、イザナギのリスクを説明した。

「けど、兄さん…。ダンゾウつてヤツはうちの人間じゃないだろ? そのイザナギが写輪眼を使つて行われる術である以上、ダンゾウにはイザナギは使えないんじゃないか?」

サスケが疑問を口にする。

「いや…。ダンゾウは入手経路こそ不明だが写輪眼を持っている…。右目と右腕に…。特にその右腕には実に10個もの写輪眼を宿している。」

「な!?!」

驚き固まるサスケ…。

「うちはシン…。」

その時ナルトが呟いた。

「ん?何か知っているのかナルト。」

「以前、ある事件で敵対した相手なんだが、そいつは、身体の至る所に

写輪眼が埋め込まれていた…。なんでも大蛇丸の実験体の一人で、大蛇丸を裏切って逃走していたらしいんだが…。ダンゾウの右腕はそこから切り取ったものらしい…。」

「うわぁ…。」

全身に目があると言う人物を想像し、気持ち悪そうにするサクラを尻目に話は続く。

「だが、そのイザナギってのの効果がどんだけ凄くても、それが術である以上…。チャクラを練り、印を結ばなけりや発動出来ないんじゃないか？ナルトの話だと、そんな暇も無く消し飛ばされたように思うんだが…。」

シカマルの疑問…。

「確かにその通りだ。しかし、あのダンゾウという男を甘く見ない事だ。ヤツは恐ろしく狡猾で冷徹だ。何かをするにしても必ず保険を掛ける…。そういう男だ。」

「つまり、ヒナタの誘拐に失敗した時から、俺が報復に来るのをダンゾウは予測していた…。何らかの方法で俺のチャクラを感知してそのイザナギを発動して生き延びた…。ってことなのか？」

「確証は無いがな…。ヤツならあり得る…。という事だ。ついでに言えば、その後姿を消していたのは、機会を窺っていたのだと思う。自分の戦力を増やし、木の葉を自分のものにするために…。」

「そのダンゾウってヤツ…。物凄く陰険なヤツね。」

サクラの感想に対し、

「勘違いして貰いたくないが、ダンゾウは何も私利私欲で木の葉を欲している訳ではない。あの男の行動は全て…。徹頭徹尾『木の葉のため』という言葉に集約される。」

イタチは、ダンゾウをそう称した。さらに続くイタチの言葉…。

「ダンゾウが木の葉を手に入れようとするのも、木の葉のために、自身が火影となり木の葉を繁栄させたいと考えているからだ。現在の火影である綱手様が木の葉を繁栄させていたなら、ダンゾウは大人しくしていただろう。」

「……………」
だが、そうはならなかった。ナルトが抜けた事で木の葉

が衰退していった……だからヤツはクーデターを起こしたんだな？」
シカマルが念を押すように聞いた。

「そういう事だ……木の葉の栄光のためならダンゾウはなんだってやる……ナルト……決して油断するなよ？」

「ああ……」

イタチの言葉に、ナルトは神妙に頷くのがだった。

それから、一月後……綱手が率いた木の葉の難民たちが光の里にやってきた。

「すまん。ナルト……やはりこういう事になった。悪いが今日から世話になる。」

綱手が連れてきた人々の中には、自来也やシズネのような側近たちの他にも、イルカやカカシと言ったナルトのかつての恩師たち……そしてネジたちや、ナルトの同期のものたち……その家族……一般人ではナルトが懇意にしていた一楽を営むテウチ一家もいた。

そして……

「姉さま！」

会うなりヒナタの胸に飛び込んで来たのは、ハナビだった。

「ハナビ……良かった……無事で……」

ヒナタはハナビを抱き締めると、無事を喜んだ。

「ナルト……すまないがハナビ共々宜しく頼む……」

「いえ……無事で良かったです。ヒナタも随分心配してましたから……」

ヒアシはナルトと挨拶を交わしていた。

「お前がこうして、新たな里を作ってくれていて助かった。」

「それにしても、良く木の葉から出られましたね。日向は木の葉のエンジニア一族ですし、上役達が許さなかったんじゃないですか？」

「ふん……クーデター等を起こすような連中に付くなどあり得ん……我々日向は綱手様に尽くすと言い切ってやったわ……もつとも……」

全ての日向の者たちがここに来たわけではないがな……」

祖先や戦友たちが眠る場所……そして、自分達が住んでいる所を捨てられなかったものたち……

そして、ナルトに憎しみを抱くものたち……

彼らは、木の葉に留まった。

ヒアシも、強制する気は無かった。それぞれがそれぞれの判断をしたのだ……

「……………」

「まあ、残った者たちのことは、彼らが考えるべき物だ。とにかくナルトよ……これから頼んだぞ。」

「はい。」

ナルト達がそんなやり取りをしている時……

「おいっ！なんで俺が入れねえんだ！」

受け付けの一つでトラブルがあった。

「お前が俺に対して、憎しみを抱いているからだっつてばよ。」

その男の面接を担当していたナルトの分身体の一体は、ナルトに対する思いを尋ねた時、男から僅かに憎しみを感じていた。

当然、その男を受け入れる事は出来ない。

それを伝えた時、男は激昂した。

「なっ！そ、そんなことは無い……行く場所を失った俺たちを受け入れてくれるんだ……感謝してるさ……」

「悪いが誤魔化しはきかねえっつてばよ。この状態の俺は人の悪意を感じ取れるからな。」

「そんなの信じられるか！」

「別に信じる必要は無えっつてばよ。お前が信じようと信じまいと、お前を受け入れる事が出来ない事に変わりは無いからな……」

「ぐっ……」

ナルトの言葉に何も言えなくなる男……

改めて考えれば、その通りなのだ。こちらは受け入れて貰う側……そしてナルトへの憎悪も当たっていた……

男は、九尾事件の折りに両親を殺されていた。

その生まれ変わりと噂されていたナルトに憎しみを持っていたのだ。

男は力無く肩を下げる。

「わかった…俺の事は良い…けどせめて、家族だけでも受け入れてくれないか？頼む…」

男には嫁と娘がいた。既に二人は面接を通っている…

せめて家族だけでも安心して生活させてやりたい。その思いから、必死に頼み込んだ。その為なら、憎い相手であつても頭を下げることを辞さない。

「わかった。」

「本当か！」

「ただし、条件がある。」

「条件？」

「この里の中心部から一番離れた場所に住んで貰う…そして…お前もそこで一緒に生活するんだってばよ。」

「え？」

ナルトの言葉がよほど意外だったのか、男は一瞬呆けてしまう。

「家族が離れ離れになるのは悲しいだろう？家族のためにそこまで出来るんだ…自分の感情で馬鹿な真似はしないって信じてるってばよ。」

「あ…ありがとう…本当にありがとう。」

男からナルトへの憎しみは消えていた。

こうして幾つかのトラブルはあつたが、木の葉からの移住者…そのほとんどを受け入れる事が出来た。

しかし、シカマルは難しい顔をしていた。

「どうしたんだ、シカマル？」

「いや…親父とも話してたんだが…今回木の葉は、多くの戦力を手放す事になったろ？ダンゾウもこうなることは予想出来てたハズだ…アイツの狙いが読めなくてな…」

「そうだな…ダンゾウの目的は木の葉の繁栄…何かを仕掛けてくるのは間違い無いだろう…」

シカマルとの会話で胸騒ぎを感じるナルトだった。

束の間の平穏

木の葉でクーデターが勃発して、早くも半年が経過した。

木の葉でも、まずは政権の安定が急務なようで、特に国際的に何かを仕掛けてくるといふ様子は見られなかった。

光の里にとつても、木の葉からの難民の受け入れにより、それなりのトラブルがあった。

綱手からそれとなく諭され、事前に準備していてもなお、自身の里の人数よりも遥かに多い難民の受け入れだ。スムーズに進む方がおかしいだろう。

それも、一月もすると収まった。

もともと難民たちは綱手を慕って集まった者たちなのだ。綱手が入ること、光の里の民たちとのトラブルは減っていった。

そして、ナルトとヒナタはと言うと。街を散策していた。

今日の仕事は休みだ。

前世で、ボルトやヒマワリ。そしてヒナタ。あれだけ欲していた家族に対して、火影としての責務、その忙しさを理由に寂しい思いをさせてしまった。その教訓から、この里では、例え長であっても休日、他の皆も同じように必ず設けるようにしている。

幸い、この里は木の葉と違い、然程大きくは無い。木の葉の難民たちがいるとは言え、綱手と協力する事で、休日はしっかりと取れていた。

その休日は、ヒナタとの修行や里の視察に充てている。

今日の修行のノルマは終えて、今は二人で里の中を見て回っていた。

未だに修行を続けているのは、情勢が不安定と言うのもあるが、それ以上にカグヤの復活を警戒しているからだ。

魔像。十尾の脱け殻は、暁を壊滅させた時に地中に埋めた上、老紫の作った口寄せ封じの札を周りに張り、悪用されないように里で厳重に管理している。

尾獣は全て、人柱力と共に在る。それでも油断は出来ない。...

この世界は既に、前世の世界とは乖離した歴史を歩み始めている。前世と違う世界である以上、これからもカグヤの復活が絶対に無いとは言いきれないのだ。

ヒナタも、木の葉を出た時と比べ物にならないほどの力を付けている。

それでも、世の中に絶対などという言葉はない。

前世で… 自身が治め、平和なハズの木の葉でさえ、あんな事が起こったのだ… 油断は出来なかった。

「ナルト君?どうかしたの?」

急に暗い表情を見せたナルトに気付いたヒナタが声をかける。

「い、いや… 何でも無いってばよ…」

慌てて誤魔化すナルト。しかしその内心は…

(あれから何年も経ったっていうのに… 忘れられないもんだな…

ヒナタ… ヒマワリ… ボルト…)

前世で守れなかった最愛の家族… そしてたった一人… 残ってしまった息子…

今でも、時々こうして思い出してしまう… あのヒナタたちは、ちゃんと天国に行けたのか… ただ一人… 生き残ったボルトはどうしているのか…

(俺がもつと… しつかりと家族を見ていれば…)

そして、思い出した時は決まって後悔が襲ってくる…

そして、そんな時… 決まって慰めてくれるのが…

「大丈夫だよ… ナルト君。私はここにいる。貴方の隣にずっといるから…」

ヒナタは、ナルトの頭を抱えると自分の胸に抱き、そう言いながらナルトを安心させようとする。

ただし…

「… ありがとな… ヒナタ… 俺は大丈夫だ。それより… 皆が俺たちを見てるってばよ?」

「えっ!? キャア!!」

そう… 今回は場所が悪かった…

里の中を見回ってたのだ。当然周りには里の人間たちがいた。

ヒナタは、慌ててナルトを放すと顔を真っ赤にして俯いてしまう。

「相変わらず初々しいですね。長。」

「私もいつか、ナルト様のような素敵なお人を恋人にしたいわ。」

「仲が良くて羨ましいねえ。」

しかし、周りの人間たちがナルトとヒナタに向ける感情は、好意……微笑ましいものを見たといった感じだ。

それも当然、ナルトとヒナタは里の有名な人である。

なにしろ、里の発起人とその思い人であり、最古参の二人。

そして、この里を作った理由がヒナタと安心して暮らして行ける場所を作りたかったからと、ナルト自らが公言しているのだ。

普通なら依怙贖身と取られるような事だが、里の者たちから不満は出ない。

それはナルトがどれだけヒナタを大事にしているか、何度も目撃していること。

そして、そのお陰でこの里が出来たこと。

結果的には、自分たちも安心して生活できる場所になったのだ。不満など出ようはずが無い。

「ハハハ……でも、本当……ありがとな……ヒナタ。お前がこうして、俺の隣で笑ってくれているから、俺はこうして今も生きていられるんだ……」

そう……九喇嘛によって強制的に逆行させられたナルトは目標を見失っていた。

あのままなら、自暴自棄になり既にその命を手放していただろう……

「ナルト君……」

「ヒナタ……」

結局、周りそっちのけで自分たちの世界に入ってしまう二人だった。

この里では良くある事。その空気を察知した周りの人間たちは既に退散していた。

二人が現実に戻ったのは、実に5分と言う時間が過ぎた頃だった。正氣に戻った(笑)…。二人は、散策を続ける。

途中で、カカシとイルカに遭遇した。

「イルカ先生… それにカカシ先生も… こんなところで何やってるんだってばよ?」

「ん?なんだナルトか… 俺はもう先生じゃ無いよ?」

カカシが、だらけながら言う。

「良いんだってばよ。俺にとっては先生なんだから。」

ナルトは笑いながら返した。

「なに、イルカ先生とナルトについて話してたのさ… この里は良い所だ。まさか、こんな里を教え子が作るなんて… ってな。」

「そう言ってくれると、俺としても嬉しいってばよ。それより… 今更だけど、カカシ先生は木の葉を出て良かったのか?」

ナルトは、ちょうど良いとばかりに、カカシに聞いた。

カカシが木の葉を、何よりも大事にしていたのは知っている。

彼の父や師が… 親友が… 最愛の人が、そして仲間たちが… 命を懸けて守った里なのだから…

「… そりゃ、もちろん悩んださ… でもな… 俺はダンゾウのやり口は認めたく無かった… 前に言ったよな… 『忍の世界でルールを守れない奴はクズだ… しかし仲間を大事にしない奴は、それ以上のクズだ』って… 俺が守りたかったものがなんなのか… もう一度考えた時… 木の葉と言う『場所』ではなく… 木の葉の『仲間たち』それに、託してくれた『想い』だ… そう思ったのさ…」

「… カカシ先生…」

「ん?」

ナルトはカカシの言葉を受けて、オビトの事を話すべきかと一瞬迷う… しかし、カカシにとってオビトは彼を庇い、英雄として死んだ親友…

ならば、このまま知らない方が良いだろうと思った。

知らない方が幸せな事もある…

「いや… 何でも無いってばよ…」

だから、ナルトは何も言わないことにした。

「二人はデートか？」

今度はイルカが、ナルトたちに声をかける。

「ま、そんなような物だつてばよ。」

「里の視察も兼ねてますけど、休日の日課みたいなものです。」

二人はあつさりと答える。

「ナルト・・・お前は今、幸せか？」

イルカは、これだけは聞いておきたかった。

里を出て数年・・・これだけの里を一から作ったのだ。

苦労もあつたらう。笑つてすまされない事も勿論あつたと思う。

その価値が、今本当にあるのか・・・

「ああ。勿論だつてばよ。」

その問いに対し、ナルトはとびきりの笑顔で答えた。

「・・・そうか。（良かったな。ナルト。）」

ナルトの笑顔に、あの時送り出したのは、間違いではなかったと、改めてイルカは思うのだった。

イルカたちと別れた二人は、里の散策を続ける。

途中で、同期のメンバーたちや、ガイ班のメンバー、それにヒアシやハナビとも会い、世間話をした。

そして・・・

「ふふっ・・・」

「ん？どうしたんだ？ヒナタ。」

突然笑い出したヒナタに、ナルトは不思議そうに尋ねた。

「なんだか、昔の事を思い出しちゃつて・・・昔の私は、ナルト君に声をかけるのも恥ずかしくて出来なかった・・・それが生まれ育った里を捨てて・・・ナルト君と新しい里を作る事になって・・・始めは十人位しかいなかったのに・・・今ではこんなに大勢の人がこの里に住んでる・・・皆、笑顔で過ごしてくれてる・・・弱虫だった私が、こんな大きな事に関わるなんて・・・そう思ったら、可笑しくつて・・・」

「・・・ヒナタは弱虫なんかじゃねえつてばよ。ただ・・・優しすぎたんだ・・・人を傷付ける事に戸惑う・・・忍としては弱点だった。でも

な…」

「俺はヒナタのその優しさに救われたんだってばよ。」

「ナルト君…」

「今更だけど… ありがとうな… ここまで俺に付いてきてくれて。」

「そんなの当たり前だよ。それに、これからもずっと一緒にいるからね？」

いつまでも… こんな平和な時間が続けば良い…

二人はそう思った。

しかし…

その平和な日々は、唐突に終わりを告げる。

木の葉が光の里に対し、宣戦布告をしたのだった。

開戦

「……………来たか……………」

木の葉からの宣戦布告から数週間後……………」

ダンゾウの率いる兵団が、光の里に集結していた。

「あれは!?……………ちっ……………やっぱ……………生きてたってばよ……………」

その兵団を見たナルトは、苦々しい表情をして呟いた。

敵の戦力……………その大部分を占めるのは、白ゼツの兵団……………」

ならば、当然……………」

(やっと、借りを返す時が来た……………)

ダンゾウの隣に、ゼツの姿を捉える。

ナルトたちによる暁殲滅の折り、黒ゼツはダメージを負いながらも、逃走に成功していた。

そして、身体を回復した後、潜伏していたダンゾウに接触し、協力関係を持ちかけていたのだ。

ゼツが用いる戦力である白ゼツ兵団。彼らの戦力は、ダンゾウにとっても喉から手が出るほどに欲しいものだった。

しかし、暁の元メンバーである以上、完全に信用はしておらず、せいぜい利用してやるという体ではあるが……………それはお互い様でもある。

ゼツの目的は、あくまで母であるカグヤの復活。

正面からではナルトたちには敵わない。ならば、ダンゾウによる戦争を利用するつもりなのだ。

さらに、もう一人……………そこに協力者が加わる。

「それに、あれは穢土転生で甦ったやつらだのお……………」

敵の兵団……………その一部には穢土転生によって甦ったと思われる忍が混ざっていた。

それを復活させた人物は……………」

(やられっぱなしは、私の性に合わないのよねえ……………ナルト君……………)

そう、大蛇丸であった。自らが計画し、実行した木の葉崩し……………ナルトにその計画を狂わされ、それは失敗に終わった……………」

その時に、ナルトに釘を刺されてはいたが、それを大人しく遵守するようなタイプの人間ではない。

今の大蛇丸の興味は、自分を打ち負かしたナルトに注がれており、元々協力関係のあったダンゾウの蜂起に合わせ、今回の戦いに参加したのだった。

そして、大蛇丸によって甦った者たちの中には、うちはマダラの姿もあった。

さらには、歴代の影たちの姿もある。

「大蛇丸め… またも死者を冒瀆するとは…」

ヒルゼンは、彼らの姿に大蛇丸を睨む。

そして… 恐らくはナルトに対する効果を期待してか、ミナトとクシナ… ナルトの両親の姿も見られた。

（… … 別れは、あの時に済ませた。父ちゃん、母ちゃん… 悪いけど、すぐに送り返させて貰うってばよ…）

「ナルト君… 私と一緒に…」

ナルトの心境を理解したヒナタは、ナルトの手を握りながら言った。

「ああ… 頼むな。ヒナタ…」

ヒナタの言葉を受けて、自分でも気付かない内に強張っていた表情を緩ませ、ナルトは微笑みながら答えた。

そして、暁の元メンバーたち。

彼らは、暁壊滅の折り、穢土転生に利用されないようにと、ナルトが球道玉を使い、その遺体を完全に消滅させていたのだが、大蛇丸は暁にいた時代に、既に彼らの遺伝子サンプルを入手していた為、この戦いに利用されたのだった。

その他にも、過去の強者たち…

ゼツと、白ゼツ兵団、大蛇丸とカブトによる穢土転生による忍たち…

ダンゾウの戦力は強大なものとなっていた。

そして、この里を包囲している戦力は、その中でも一部だった… 残りは…

『こちら、雲隠れの雷影じゃ…。現在、謎の集団の襲撃を受けておる…。スマンが、そちらへの援軍の到着は遅れる。』

『岩隠れのオオノキじゃぜ…。こっちも同じくじゃ…。』

『霧隠れの水影よ…。私たちのところにも、気味の悪い連中が来てるわ…。』

『砂隠れの方も同じくじゃん…。』

同盟国から通信が入って来る。

木の葉の亡命者たちを受け入れた時、その中に、未来で科学忍具の創造と言う大発明をした天才科学者のカタスケがいたことに気付いたナルトは、彼を重用した。

豊富な資金を提供し、通信機の開発を優先するように指示する。

カタスケは、この短期間に実用に耐える通信機の開発に成功したのだ。

そして、ほんの数機ではあるがそれは製作され、同盟国の長に配られる事になった。

最初は同盟に懐疑的な雰囲気を持っていた、エーやオオノキだったが、この数年…。拍子抜けな程に平和な世の中…。そして、光の里で見る人々の笑顔…。彼らは元々故郷を同じくする者ではない。

それでも手を取り合い、助け合う姿に、もはや裏切り、裏切られる事が当たり前だった自分たちの時代とは違うのだと、理解した。

その結果、現在は積極的に忍連合に協力している。

そんな中での、木の葉からの光の里への宣戦布告…

当然、各同盟国も光の里に援軍を送るべく、出兵していた。

そして、それはダンゾウにも予測出来ていたこと…

その援軍を止めるために、白ゼツ兵団の一部、そして穢土転生の兵の一部を足止めの為に、各里に派遣していたのだ。

『わかった。その白ゼツの兵団は、こっちの忍に化ける能力を持つてる…。十分に注意してくれ…。それから、穢土転生の兵はチャクラ切れを起こさない上に、身体を傷付けても、直ぐに再生しちゃうんだってばよ。術者がこっちにいる以上、そっちでは倒すんじゃなく、動きを封じる事を優先して戦ってくれ。』

ナルトは、自分の知る情報を各里長に伝える。

『わかった。ナルトよ……死ぬなよ。お主が死ねば同盟に大きな影響があるんじゃないぜ?』

『わかっているつてばよ。そっちも気をつけてな。』

オオノキから最後にそう締めくくりの言葉を残し、彼らの通信は終わった。

「にしても、敵さんの戦力に木の葉の忍がほとんどいないのが気になるな……まあ、知り合いとの戦闘にならずに済むのはありがたいって言えばありがたいんだが……」

シカマルはダンゾウの戦力を測っていた。

その中に、木の葉の忍はほとんどいなかった。

「木の葉に残ったのは、あの不況の折りに仕事にあぶれた……こう言ってはなんだが、あまり有能では無い忍がほとんどだ……そもそも有能な忍なら、ダンゾウが率いる木の葉に先が無いと考えるだろうか。そんな連中を戦場に連れてきても、戦力にならない所か味方の足を引っ張る事にもなりかねん……ダンゾウは恐らくそう考えたのだろう。」

シカクが、シカマルの疑問に対して推測した答えを出した。

「確かに、伏兵が紛れてるような感じは無いつてばよ。」

仙人モードで辺りを感じていたナルトだったが、特に伏兵のチャクラを感知することは出来なかった。

「だとすると……木の葉の連中は、里で留守番か?」

自分達の未来を左右する戦に参加すらないとは……呆れるシカマル。

「まあ、そう言うな……彼らとて上から命令を受けているのだろう。」

シカクは、一応木の葉の人間としてフォローを入れた。

たとえば、袂を分かったとは言え、かつては同じ木の葉の仲間だ。

あまり、悪し様に言われるのを良しとは思えなかったようだ。

その後……

互いの代表者が前に出る。

「うずまきナルト……以下人柱力たちに告げる。大人しく、こちらに

捕まるならば、光の里への攻撃を取り止めようではないか…」

ダンゾウは、静かに告げた。

「それに素直に従うと思うのか？」

ナルトの返答を受けたダンゾウはニヤリと笑う。

「いや？言ってみただけだ。お前たちを降し、世界に我々の力を知らしめる。そして木の葉こそが世界を統べるものとなるのだ。」

「そうはさせねえ…。今世界は、ようやく仲間と手を取り合い、協力出来る世界になりつつあるんだ…。それを邪魔はさせねえつてばよ…。」

お互いの主張をしつつ、互いの陣地に戻る。

「戦闘は避けられないって事で良いんだよな？」

「ああ…。」

ナルトはシカマルに頷くと、自身の仲間たちを見る。

そして、ナルトは口を開いた。

「皆…聞いてくれ…。ダンゾウの目的は俺たち人柱力…。その中にいる尾獣だ…。」

「どうやってコントロールするつもりなのか…。その手段はわからない…。ただ、本当ならこの戦いに、皆は巻き込まれただけだ。」

「皆が、この戦いに参加する必要は無いのかもしれない…。それでも…。」

「どうか、皆の力を貸して欲しい。人柱力も…。里も…。生まれも関係無い…。どんな人間とだって、手を取り合い…。支え合って生きていけるって所を、世界に見せてやりたいんだつてばよ。だから…。」

「それ以上は、必要無えのお…。」

ナルトの演説…。最後に頭を下げて協力を願うハズだったナルトを、自来也の言葉が止める。

「そうだ。俺たちは巻き込まれたんじゃない。自分の意思でここにいるんだ。」

誰かが声を挙げた。

「ナルト様は、俺たちに居場所をくれた。だったら今度は俺たちが、助ける番だ。」

光の里の人々が次々に賛同する。

「フフツ… 我々とて、木の葉から脱出して、住む場所を提供して貰ったのだ。借りは返さねばな…」

綱手は、元木の葉の忍たちに向かって言った。

その場を集った者たち全てが、ナルトに協力することを誇りに感じている。

「たく… バカ正直に敵の狙いを話す必要なんて無いってのに…」

シカマルは、ナルトの演説に苦笑いを浮かべた。

「だが、そんなバカだからこそ… 皆ナルトを慕っているのだろうか？ お前も含めてな…」

シカクがシカマルに言う。

「……………」

凶星を指されたのか、無言になるシカマル。

「ありがとう… 皆… 最後に… 俺から皆に伝える言葉は一つだ。」

仲間たちの言葉を受けたナルトは、感謝しながらも締めくり言葉を口にする。

かつて… 五影たちから送られた言葉… 今は自分が彼らに送るべきだろう…

ナルトは大きく息を吸う。

そして…

「勝つぞ!!!」

大声で叫んだ。

「!!!」

その言葉に応える様に、歓声が上がった。

戦いが始まる…

アイツは俺が・・・

「「「「おおおおおおお!!!」」」」

戦いが始まった。

互いの戦力が激突する。

「ナルトよ・・・大蛇丸はワシに任せてくれ。アヤツを殺せなかったワシの甘さ・・・今度こそ断ち切ってみせる。」

ヒルゼンが自身の決意を告げる。

火影を退陣し、綱手の補佐が一段落したヒルゼンは、木の葉丸の相手をする傍ら、自身の修行をしていた。

木の葉崩しの折りに、自分の力不足を痛感していたのだ。

大蛇丸は、老いを原因としていたが、老いたなら、老いたなりの戦いをすれば良いだけの事・・・

確かに身体能力は落ちている。身体のうちこちに老いによるガタが来ている。

それは認めよう。だが、それなら最小限の労力で最大の結果を出せる戦い方を見つければ良い。

自分はプロフェッサーとまで呼ばれた男・・・

使える術は多岐に渡る。戦い方の幅は、膨大だ・・・

(若い頃が全盛期など、誰が決めた!)

ヒルゼンは、今の自分が若い頃に負けていないと確信していた。

しかし、逸るヒルゼンに待ったをかける人物がいた。

「待ってくれ。三代目・・・大蛇丸の事は、ワシに任せてもらいてえのお・・・」

自来也だった。それも当然だ。彼はその生涯の多くを、大蛇丸を止めるために費やしていたのだ。

彼は、忍の・・・術を覚える才能では大蛇丸程高くない。

それでも、五行封印を簡単に解除し、時には禁術を扱う程に長けるようになった・・・全ては大蛇丸を止める為に・・・

かつて同じ班に所属し、ライバルとして・・・自身の目標として大蛇丸はいた・・・

前世のナルトとサスケの関係…それが自来也と大蛇丸の關係に近い。

ナルトが悪に堕ちかけたサスケを最後まで諦めなかったように、自来也もまた大蛇丸を止めることを諦めていなかった。

「それは、ならぬ…自来也よ…ワシはかつての師として、弟子の不始末を正さねばならぬ。」

「だが、三代目は大蛇丸を殺すつもりなのだろう？ワシは、あんたにそんなことをさせたくは無いのだ…アヤツを止める…それはかつての宿敵（とも）であるワシの役目だ…」

互いに譲らない両者…

「じいちゃん…今回はエロ仙人に譲ってやってくれ…じいちゃん
は木の葉崩しの時に、一度チャンスはあったんだから。」

仕方なくナルトが助け船を出した。

ナルトには、自来也の気持ちが痛いほど理解出来る。

「アヤツを逃がしたのは、ナルト…お前じやろうが…」

木の葉崩しの折り、ナルトは大蛇丸を見逃した…

その事に文句を言うヒルゼンだったが、

「俺が来るまでに仕留められなかったんだから、チャンスを不意に失ったって意味じゃ一緒だろ？」

「ぐっ…」

あの時、劣勢に追い込まれていたのは、確か…

何も言えなくなってしまう。

「大蛇丸の事だから、今回も先代の火影たちを護衛に回してると思う。
じいちゃんは、エロ仙人が大蛇丸との戦いに集中できるように、協力してやってってくれてばよ。」

「…仕方ないか…お主はワシらの総大将じゃからな…その命令…拝命するぞ。」

気持ちを切り替えたヒルゼンは、自来也と共に大蛇丸を目指す。

「ナルト…俺はダンゾウを狙う。文句は無いな…」

今度は、サスケがナルトに言った。

「ダメだ…」

間髪入れずにナルトがそれを拒否する。

「なっ!?何でだ… アイツは一族の仇だ。そして俺たち兄弟にあんな運命を背負わせた張本人なんだぞ。」

断られると思っていなかったサスケは、驚きナルトに食って掛かる。

「お前じゃ、ダンゾウには勝てねえってばよ。三代目のじいちゃんからダンゾウの力は聞いた。戦闘力は三代目と良い勝負だったらしい。その上、アイツにはイザナギがある。今のお前に、ダンゾウを何度も殺す実力は無えってばよ…」

ナルトはサスケに現実を突きつける。

今のサスケの実力はわからないが、少なくとも前世の… 第4次忍界大戦時にも及ばないだろうと見ている。

あの頃のサスケは、三忍の大蛇丸に師事し、多くの戦闘技能を身に付けていた。

イタチと同じ黒い炎を操り、スサノオまで使いこなして見せた。

最も、その時… サスケはイタチの眼を移植していたが為に使えていたという事までは、ナルトも知らなかったが…

実際、今のサスケは万華鏡写輪眼は使えない。

それは、万華鏡を得る条件… 大事な人を殺す… 或いはその覚悟を持つ… その経験が無いからだ。

無論、カカシの元で修行を続けていた。

天才と言われる才能があるサスケだ。当然、通常の写輪眼しかない今のサスケでも、その実力は相当に高い。

ダンゾウに比肩するだけの力はあるだろう…

しかし、それもイザナギと言う術を持つダンゾウが相手では足りない。

自分の死すら超越する術を持つダンゾウを殺すには、互角では足りないのだ。

ダンゾウを圧倒し、術の効力が切れるまで何度でも殺す… それが出来なければ、ダンゾウに勝つことは出来ない。

「くっ… それでも俺は…」

悔しがるサスケ…

「なら、俺がサポートに入ろう…」

そのサスケに助け船を出したのは…

「な！イタチ… どうしてここに… お前と長門は、里での待機を命じていただろ！」

そう、サスケの兄であるイタチだった…

イタチと長門は、戦いに参加できる身体ではない。

綱手の診療で、持ち直しては来たが、そもそもあのままでは、数年と保たずに死んでいた。

今でも、安静が必要な身に変わりはない。

イタチに至っては、その眼を封じる必要があつたほどだ。

しかし…

「ナルト… 口でどれだけ言っても、コイツは勝手にダンゾウの元に向かう… 誰に似たのか相当の頑固者だからな…」

「そんなことより、兄さん… 俺のサポートをするって… 兄さんは戦える身体じゃ無いだろ。」

イタチの軽口には付き合わず、サスケが慌てたように反論する。

そう… 今もまだ、イタチは眼を特別な術法を刻んだ包帯で覆っている。それは写輪眼を封じるもの。

イタチは、過酷な半生に自らの意思で写輪眼のオンオフが出来なくなっていた。

それが、イタチの身体を蝕み、その寿命を極端に減らしていた。

その解決策が、眼そのものの封印。

まだ、若いと言っても良い年齢のイタチだ。

そのまま安静にしてさえいれば、自然治癒力によって失った寿命を少しでも回復できる。

しかし…

「ふっ… ここで負ければ、どのみち生きてはいられん… それに…」

イタチはフツと笑うと、眼を覆っていた包帯に手を掛けた。

「ヤツに借りがあるのは俺も一緒だ！」

イタチがその眼を開く。その強烈な眼光…

その決意を込めた瞳に、サスケはイタチを止めるのは不可能だと感じた。

何よりも、ダンゾウを自分の手で倒したい。その気持ちは理解できた。

二人の会話を聞いたナルトは二人を止める事は諦めた。代わりに、「わかった…なら、ダンゾウは二人に任せる…正し、約束してくれ…絶対に死なないって。」

ナルトは、それを言うのが精一杯だった。

「ああ…約束は守る。必ず生きて戻る。サスケと共に…」

イタチは、すぐに頷いた。

「サスケ、お前もだぞ？お前が死んだらサクラちゃんが悲しむってばよ？」

「ああ、わかってるさ。俺は…俺たちは生きて帰る。」

サスケも決意を改たにする。刺し違えても…

イタチが参戦をすると言い出す前は、そう考えていた。

しかし、今は違う。尊敬する兄と、一族の仇をとる。

そして愛する人の元に帰る。

(イタチの参戦は、正解なのかも知れないな。)

そんなサスケを見たナルトは、そう考えた。

「行くぞ、サスケ。」

「ああ。必ずアイツに報いを受けさせてやる。」

二人は、ダンゾウの元へと向かった。

「サスケ君…」

サクラは、そんな二人を心配そうに見送る。

「呆けている場合では無いぞ、サクラ。私たちには私たちの役目がある。」

既に百豪の印を解放している綱手がサクラを叱咤する。

「はい、綱手様。」

綱手の言葉を受けたサクラも百豪の印を解放した。

「良いかサクラ。これから二人でカツユを口寄せする。そして、我らの足場を立てているだけで回復する回復エリアとするのだ。敵はこちらよりも人数が多い上に、痛覚もない…。不死身の兵团だ。我らの力がこの戦いの鍵を握ると思え！」

「はい！」

既に戦いは始まっている。白ゼツの兵团にしろ、穢土転生体にしろ、倒すのは普通の忍よりも大きな労力がある。

こちらにも、怪我を自動で治せるほどのイカサマレベルの能力があつて初めて対等と呼べる。

戦力において、勝つていても死なない兵团は厄介だった…

苦々しい顔をしながら、綱手は戦況を見守る。

その内の一つを気にかけてながら…

(死ぬなよ…。自来也…。帰ってきたら…。格好つけなくしてやる…。今度こそ…)。

カカシが率いている部隊の所でも戦いが始まっていた。

「ふう…。死なないつてのは…。面倒だねえ…」

白ゼツたちを既に何十人と動けなくしながら、ぼやく。

「ぐあ…」

そんな時、カカシの部隊の一人が敵に攻撃を受けた。

「大丈夫か！」

「はい…。でもアイツ…。強い…。隊長…。気をつけて下さい。」

「ああ…。お前の相手は俺だ…」

敵は穢土転生体…。服装から見て元暁のメンバーだろう…

カカシは全力で戦う必要があると感じ、額宛を上げる。

しかし、その相手の顔に驚愕した。

「お、お前は…」

カカシとは逆の眼に写輪眼を持った男…

記憶にあるその少年を大人にすれば、こんな感じか…

「オビト…。なのか…」

「久しぶりだな…。カカシ…」

男が口を開いた。

二人の因縁が交錯する…

彼女からのメッセージ

ハア……ハア……ハア……ハア……ハア……

息切れがする……自分の心臓の音がやけに大きく感じられる……

周りの喧騒が嘘の様に静かだった……

カカシが、目の前の男と対峙してから、まるで世界がその男と二人だけになったように、そして時が止まって感じられた……

「オビト……なのか……」

カカシは、震える唇からかろうじてその言葉を発した。

「ああ……久しぶりだな……カカシ……」

男は、カカシの言葉を肯定するかのように返事を返す。

「……いや……そんなハズは無い。オビトは……アイツはあの時……俺を庇って死んだ……穢土転生って術は、そいつが死んだ時の姿でこの世界に口寄せされる……だからお前がオビトであるハズが無いんだ……」

カカシは、自らそれを否定する。

いや……自分に言い聞かせようとしての発言だった。

「くくくく……否定したいのはわかるが……わかっているハズだ……お前には……いや……お前だからこそわかるハズだ……『写輪眼のカカシ』……お前がそう呼ばれるようになった、その眼……そいつが俺を俺と認めているだろう?」

カカシは左目を押さえる。まるで目の前の人物の視覚と繋がったかのように、自分を見る相手の感覚を捉える……

「じゃあ……本当に……」

「俺は、あの時……うちはマダラに助け出されていたのさ……」

「だったらなんで、木の葉に戻って来なかったんだ。お前が死んだと思っただけ悲しんだと思ってる!」

たまたまらずにカカシは叫んだ。

「……助かった……と言っても、俺の半身が岩の下敷きになった事は変わらない。マダラの技術をもってしても、俺が動けるようになるに

は時間がかかったのさ……そして、ある程度動けるようになったとき……俺は地獄を見ることになった……俺が最も信頼していた友が……最も愛した女性を手に掛けた場面……」

「なっ!?……オビト……お前は……」

「ああ……あの時俺は……お前たちの近くにいた……お前たちの危機をあるヤツに聞いた俺は、お前たちを助けるために、現場へと向かった……そこで見たのはお前がリンを殺す所……その時に、俺は世界を見限った……」

「それで暁に入ったのか……」

オビトが纏う服は、暁のもの……当然カカシも気づいていた。

「と言うよりも、作ったのが俺でありマダラだ……俺たちの目的は、この世との完全なる決別……世界そのものに幻術をかける事……リンを見殺しにしたお前……そして死んでしまったリン……こんな世界に未練は無かった。例え幻の世界でも良い。いや……リンの生きる幻の世界こそが俺にとつての真の世界だ……」

「違う……そんなのは逃げだ。自分の都合の良い世界……都合の良いリン……それこそ偽物の証明じゃないか……お前は……リンの意思や心まで否定するつもりか……」

カカシはオビトの考えを否定する。

「ふっ……そうだな。その時は実際にそうするつもりだった……だが結局俺は……その目的を果たせずに殺された……あの九尾のガキにな……」

「お前は……俺やナルトを恨んでるのか？」

「はははっ……そうだな……そんな時もあった。けどな……今の俺はそんな気は無い。」

「なに？」

「俺を口寄せしたヤツが未熟なヤツで助かった……術の縛りが弱い……」

この軍における穢土転生部隊は大蛇丸とカブトで分担して口寄せされていた。

暁の担当は、カブト。

前の世界と違い、大蛇丸が健在なこの世界では、あの時の様に自分の身体を作り替えてはいない。

そのせいか術の縛りが弱く、口寄せした魂の自我を封印する事は出来なかったようだ。

流星に反乱を起こす様なことは無いが、かといって戦闘マシンのように、ただ戦うだけの人形でも無かった。

「カカシ…俺はあのガキに殺された後、本当に会いたかった人に、あの世で再会することができたんだ。彼女はずっと…俺とカカシを見てくれていたんだ…再会して、そりやあもう説教をされたけどな…お前と似たような事を言われたよ…そんな都合の良い自分を作って満足なのかってな…」

「!?…それはまさか…」

「俺は、別にお前らに復讐する気なんか無いさ…お前に、アイツの…リンからの言葉を伝える為にこうしてここにいます。」

「リンから!?!」

オビトの言葉に驚くカカシ。

すると目の前のオビトがリンの姿を形作る。

『カカシ…』

「リン…」

恐らく幻術の類いだろう。しかしカカシは幻術を解こうとはしなかった。

今のオビトからは殺気を感じない。

何よりも自分の親友を信じたかった。

『カカシ…ゴメンね…私の命を背負わせてしまった…貴方がどれだけ苦しんできたか…どれだけ後悔してきたか…あの世からずっと見てた。本当にごめんなさい。そして、いつまでも私の事を思ってくれてありがとう。』

「リン…俺は…」

『でも、そろそろ…貴方の幸せを見つけても良い頃だよ?私が貴方の手に自らかかったのは、貴方を不幸にするためじゃない。貴方に生きていて欲しかった…生きて幸せになって欲しかったからなんだ』

よ?』

「……………」

『私はもう… 貴方の傍にはいられない… だから貴方の幸せを願うことしか出来ない。でももし、貴方が幸せになれない理由が私に引け目を感じているせいなら… それを取り除きたい。』

『カカシ… 貴方が自分を許せなくても… 私が貴方を許します。だからどうか… 幸せになって下さい。忘れろなんて言わない… 貴方はそんな器用な生き方が出来ないのはわかったから。貴方が幸せになることが、私の願いだと知って欲しいの。』

「!?」

『カカシ… いつまでも貴方を見守ってるわ。それから… 来世では… きつと、一緒に幸せになりましょう?』

幻のリンはそう言うと、笑みを浮かべながら消えていった。

「リン… ああ… わかったよ… それが君の望みなら… 俺は…」

カカシは、うつむいていた。その肩は心なし震えている。

「忍者が、簡単に涙を見せるな… カカシ。」

オビトがカカシに言う。それは自分が昔カカシに言われたセリフだった。

「フツ… 俺は泣いてないさ。この左眼はお前の物だろう?」

涙を流しているのは左眼からだけだった。

「ははっ… そうかもな。俺は愚か者の泣き虫だ。だが、お前は違う。リンの思い… 無駄にするなよ?」

「ああ…」

「これで、俺の役目は終わりだ。カカシ… 俺に引導を渡してくれ… それできつと、成仏できる。」

オビトは、目を瞑る。

「任せろ…」

カカシは、雷切を発動した。

二人の身体が交錯する。

「なあ… カカシ… あの世でリンと二人… お前を見守ってるからな… 必ず幸せになれよ。」

「ああ… きつと… 俺が死んだら… 沢山… 話そう…」

「だからって、あんまり早く来るなよ？」

「わかってるさ。」

「さらばだ… カカシ…」

オビトは、それを最後に成仏していった。

穢土転生で作られた身体は、その魂が抜けると同時に崩れていく。

(オビト… リン… ありがとう… そして、これからの俺を… 見守ってくれ。)

カカシは、決意を新たに戦場へと戻っていった。

自来也VS大蛇丸

所変わって、戦場のある場所では激しい戦いが繰り広げられていた。

ドオオオオン！

「くっ！」

土煙の中から出てきたのは自来也。

「ふふふ… 自来也… 貴方ももう年ね… 随分と、動きが衰えて見えるわ…」

余裕の笑みを浮かべながら自来也を追って出てくる大蛇丸。

「余計なお世話だつてえの。」

軽口を叩く自来也は、すぐに真面目な顔をする。

「大蛇丸… お前がダンゾウなんぞに降ろうとはのお… 思っても見なかったぞ。大蛇丸ともあろうものが、落ちたもんだのお。」

そう言つて大蛇丸を挑発する。

「あら、私はダンゾウの配下になつたつもりは無いわよ？彼と私の関係は、あくまでも協力者。この戦いで協力する見返りに、私はサスケ君を貰う事になつてるのよ…」

「まだ、諦めておらんかったのか…」

「誰かさんのせいで、手に入れそびれてたからね。ついでに今回のことは、その誰かさんへの意趣返しも兼ねてるのよ？」

「全く執念深い事だのお…」

大蛇丸の言葉に半ば呆れ顔の自来也。

「私は貴方と違って、向上心が強いのだよ。今より上へ… いずれはこの世のあらゆる術を使いこなす。その為にも、写輪眼は是非手に入れておきたいのだよ。」

「お前さんののは、向上心とは言わん。ただの欲望だのお。自分の欲を満たそうと他人に迷惑をかける… そこいらのガキと変わらん。」

「ふふ… 私を子供扱いする気？よりにもよって貴方が… いつまで子供の様な理想を語り、成長しないのはあなたでしよう？いつまでも私が改心するなんてバカな夢を見て…」

「はっ！確かにワシはバカだった。だが理想は捨てんよ。それにおお…ワシはある男の人生を見てわかった…バカはバカでも、大馬鹿なら…バカを貫き通せば、道理など跡形も無く粉碎できるってのお…」

(そうだろう？ナルトよ…)

自来也は、ナルトの前世の記憶を見た。

特に、ナルトとサスケの関係はまるで自分と大蛇丸の関係のようであり、かなり興味を持って見ていた。

例え才能にどれだけの差があろうとも決して認めなかった…

そして、サスケが里を抜け敵となっても、連れ帰ることを…何度サスケ自身に突き放されても諦めなかった。

最後には、互いの片腕を犠牲にしつつも、和解し、認めあった。

そのナルトの師が自分であることが誇らしかった。

そして…

(ワシも大馬鹿になってみせる。お前の前世での生き方…あれこそ、ワシにとつての理想の体現…)

「ならば、ワシも負けてはおられんからのお!!」

自来也が自身の決意を口にした。

「私を説得したかったら、あくまでも力で来なさい。とは言え、老いて術にも動きにもキレが無くなってきてる貴方にそれが出来るとは思わないけどね。三代目もそう。木の葉崩しの時…彼と対した私は失望したわ…彼の全盛期を知っているだけにね…そして、自分の考えが間違っていないことも確信したわ。」

「そいつは、早合点が過ぎるのお。確かにあの時、三代目の実力は衰えていた。だがそれは、老いによるものと言うよりも、一線から退いていたからだ。火影として木の葉全体の運営に関わってきた三代目に、身体を鍛える時間も無いしのお。だが…お前は三代目を…猿飛先生を見くびり過ぎだ…」

ドオオオオン!!!

自来也が言った時…二人の間を何かが高速で吹き飛んでくる。「な!?!」

それは、初代と二代目火影…

それを追って現れたのは…

「ん！なんじゃ… 自来也よ… まだ決着を付けておらんんだか… あまり時間がかかる様ならワシが代わるぞ？」

多少の傷はあるが、まだまだ余裕そうな三代目火影… ヒルゼンであつた。

あまりのことに驚き硬直する大蛇丸。

（どういうことなの… 確かに木の葉崩しの時も、二人を相手に互角に戦つてはいたけど、あの時よりも穢土転生の術の制御は上がつてゐる。今の二人は全盛期にそれなりに近い力を持っているのよ？それがどうしてこうも一方的に…）

「勘弁してくれ。三代目。コイツとの決着は、ワシが付ける。」

苦笑いを浮かべながら、ヒルゼンに言う自来也。

「ならば、さつきと決着を付けるんじゃないや。いつまでも待つてやるほどワシもお人好しではないぞい。」

そう言うと、ヒルゼンは柱間と扉間を追つて飛び去つていった。

「何故…」

呆然と呟く大蛇丸。

「さつきも言つたろうのお… お前は猿飛先生を見くびり過ぎだと。あの人は木の葉崩しで己の力不足を痛感した。そして火影を辞めて時間が取れたあの人は己を鍛え直したのだ。」

「老人がいくら鍛えた所で…」

「確かに身体のキレや、体力などは、全盛期には比べるまでも無えのお。だが、猿飛先生はプロフェッサーと謳われた忍だ。多くの術を使いこなし、あらゆる戦場から生還してきた… 今の動きが全盛期に及ばないなら、今の動きのまま全盛期を超える戦い方を身につければ良い… ただそれだけのこと…」

「そんなに都合良く行くハズがないわ！」

ヒルゼンの考えを否定する大蛇丸。当然だ。老いとは能力の低下を意味する。それを覆すことは出来ないと考えているからこそ、他人の身体を乗っ取つて若さを保つて来たのだから。

「確かに限界はあるだろうがおお… 少なくとも猿飛先生の限界は『今』では無いのだろうのお。そしてそれは、ワシにも言えることー！」
「くっ！三代目はともかく、さっきまでの戦いで貴方の力はわかってるわ。貴方に私は倒せない。」

大蛇丸が否定する。

その言葉を受けた自来也はニヤリと笑う。

そして…

「それは、どうかのおお…」

「な!？」

自来也の姿に驚愕する大蛇丸。

自来也の目の周りには仙人の証である隈取り… そして、若干カエルのように顔が変化していた。

「仙人モード！バカな… オマエは妙木山のカエルと融合しなければ仙人モードを上手く扱えないハズ。」

仙人モードは『動くな』が基本である。

しかし動かなくては戦闘は出来ない。

その為、フカサクとシマ… 妙木山の二大仙蝦蟇の二人と融合し、『動くな』を行う者と戦闘を行う者… その役割を分担して初めて実戦で使える術となる。

しかし…

「オマエは普通に動いていた… 一体何をした。」

驚きのあまり、声を荒くする大蛇丸。

「なに… これもある男の戦いを見て教わったやり方のお… 悪いが種明かしは無しだ。さあ… 戦いを再開するかのお。」

そう… それは、ナルトがかつて編み出したやり方…

影分身に自然エネルギーを集めさせ、分身を解くことで仙人モードとなる。

ナルトと違うのは、自来也は自然エネルギーの扱いはナルト程上手く無いが、術の扱いはナルトよりも上手い点。

それゆえに、ストックしている分身の人数もナルトよりもかなり多かった。

「確かにフカサク様達の助力を得られれば楽だろうが… それじゃあ、お前さんは納得せんだろうからのお。大蛇丸よ… お前はワシが直々に叩き直してやる！」

戦いの流れは一気に自来也へと傾いた。

仙人モードで、知覚能力も身体能力も、更には術の威力すら一気に上がった自来也。

自力では、大蛇丸にやや分があるとは言え、そこまで一方的な差があるわけではない。

こうなると大蛇丸は、仙人モードの弱点である制限時間を突くしかないが、自来也は仙人モードが切れても、すぐにストックしている影分身を解くことで還元し、仙人モードを維持し続けた。

そして…

「終わりだ… 大蛇丸…」

自来也は右手に螺旋丸を作る。

「くっ!!!何故… 何故私が自来也なんか…」

「お前は、術にばかり傾倒し、忍の本質を理解しなかった。だからワシに負けたのだ。忍者とは文字通り『忍び耐える者』の事だ。」

自来也はそう言うと、螺旋丸を大蛇丸に叩きつけた。

「ぐおおおおおっ！」

「いくら、脱皮できるといっても、内部にダメージを与える螺旋丸をその中心に食らえばすぐには復活出来まい？この勝負はワシの勝ちだ。」

自来也はそう言うと大蛇丸を見下ろした。

大蛇丸は仰向けに倒れ動けない…

何を考えているのか、その顔からは窺い知ることが出来ない。

しかし…

「くくくくく… あっはっはっはっ… そうね… 私の負けだわ…」

突然笑い出した大蛇丸…

その顔は、どこか吹っ切れたように見える。

そして、自らの敗北を口にした。

「私を説得するなら力で示せ…… そう言ったのは、他ならぬ私だもの…… 潔く認めるわ……」

「そうか…… ならばもう良いだろう？ 術を探求したい。それはわかる。だが、仲間を裏切つてまでそれを探求したところで、お前さんの手元には何も残らんよ。」

「……………」

「大蛇丸…… 今さらワシらの元に戻ってこいとは言わん。お前にも立場があるからな。だが、せめてワシらに迷惑をかけるのは辞めてくれ。ワシも猿飛先生も…… お前を手にかけたいとは思つておらんのだからな。」

「ええ…… わかったわ…… 負けたのは事実だしね。この場は貴方の言葉に従うわ。」

大蛇丸はそう言うと、ヨロヨロと立ち上がると、カブトを呼び寄せる。

「カブト…… これより、私たちは忍連合に協力する。文句はあるかしら？」

「いえ、ありません。」

大蛇丸の表情に、何を思ったかわからないが、カブトは柔らかな笑みを浮かべた。

カブトは、自分の存在価値を求めて大蛇丸についていた。

しかし、大蛇丸に対し、敬愛の心が無かったわけでもない。

前史においては、大蛇丸がサスケに討たれてなお、大蛇丸を様付けで呼んでいた事からもその事は伺える。

あるいは、大蛇丸の心変わりにも真つ先に気付いたのかもしれない。

「穢土転生を解くのは後、まずは白ゼツを片付けるわ。」

「了解しました。大蛇丸様。」

自来也の活躍により、戦場の流れがまた変わろうとしていた。

ダンゾウの切り札

一方、ダンゾウの元へと向かったサスケとイタチは、今まさにダンゾウと対峙していた。

「ダンゾウ……もう逃げられないぞ……一族の仇……覚悟しろ。」

サスケが感情を押し殺した声でダンゾウに言った。

「……………」

しかし、ダンゾウはちらりとサスケを見るも、何も言うことは無くイタチに視線を向ける。

「イタチ……まさかお前が生きていようとはな……どうだ？もう一度、ワシの為に働く気は無いか？」

ダンゾウは、サスケを無視してイタチにだけ語りかける。

「てめえ……ふざけるな！俺を人質にして兄さんを利用し、一族を皆殺しにさせた挙げ句、この上まだ兄さんを利用するつもりか!!!」

「サスケ……落ち着け。ヤツの口車に乗るな。ここは戦場だ。冷静さを忘れ、闇雲に戦いを挑めば、そこに待つのは死だ。」

激昂するサスケを、あくまでも静かな口調で窘めるイタチ。

「残念だ……お前は任務の為ならば、己の心を偽れる忍の中の忍だと思っておったのだがな……イタチよ……ワシ程お前を評価している者もおらんかったのだぞ？」

失望の表情をして、ダンゾウは言った。

「先に契約を破ったのはお前だ……ダンゾウ。大蛇丸の木の葉崩しの折り、お前は大蛇丸と内密に密談を交わしていた。ヤツの狙いがサスケであることを知っていて、お前はヤツを手引きしたな？」

しかし、イタチはそもそも、ダンゾウが先に裏切ったことを指摘する。

「必要があつたのだ。その代わりにヤツに必要以上の襲撃を控えてもらい、木の葉が衰退することの無いように交渉したのだ。三代目が仮に大蛇丸に殺される事になっても、その後ワシ自らが木の葉を率いて復興するつもりだった。」

イタチの言葉に反論するダンゾウ。

「俺にとっては木の葉よりも弟が大事だ。両親を…親友を…一族を自分の手にかけてでも守った命…今更奪われてなるものか…」

イタチは己の心の声を言葉にした。

「兄さん…」

両親を…一族を殺された恨みは無くなった訳ではない。

しかし、兄にうちはの者たちへの愛情が無かったとも思えない。

それでも、兄は己の心を殺して自分の手を汚してでも自分を守ってくれた…

サスケは、イタチの心からの声に感謝の念を覚えた。

「イタチよ…お前の弟に、それほどの価値があると言うのか？戦場でありながら己の私怨を優先して行動する…忍としての能力もお前とは比べるまでもない…」

ダンゾウは、哀れみを持った目をイタチに向けた。

「忍として…か…我が里の長は良く口になっている言葉がある…『俺たち忍は、忍である前に一人の人間だ』とな…。俺がサスケを大事に思っている事は、忍としての価値ではない。うちはイタチと言う一人の人間にとって、うちはサスケと言う人間の価値は、何にも勝ると言っているのだ。」

「…以上、何を言っても無駄か…仕方あるまい…ワシとしてもお前の力は惜しいが…ここで葬るしか無いか。」

ダンゾウは、全ての写輪眼を解放した。

印を結び、イザナギの準備に入る。

「やってみろ。」

「兄さん、俺も…」

ダンゾウの前にうちはの兄弟が並び立つ。

「行くぞ!!!」

・

戦いは、一方的だった。

元々、ダンゾウの戦闘能力は良いところ今のサスケとそう変わらな

い。

この上、イタチの相手等出来るハズも無かった。

イザナギが無ければ、とうの昔に殺されていただろう。

そして、その肝心のイザナギも…

「これで、お前の腕に移植された写輪眼は全て閉じた。もはやお前に勝ち目はない。投降しろ。ダンゾウ。」

既にそのシステムを解明され、時間制限も見破られた。

最後の眼が閉じ、ダンゾウに勝ち目は無くなった…

そう判断したイタチは、投降するように持ちかけた。

「兄さん!?こいつは俺の手で殺させてくれ。」

投降を呼び掛けるイタチに驚くサスケは、自分の願望を口にする。

「ダメだ。こいつは、今の木の葉の責任者。そして宣戦布告をした張本人。処分は、忍連合によって決まる。」

「でも…」

「こいつを殺せば、木の葉に残った何も知らない者たちに被害が及ぶ事にもなるんだ。我慢しろ。」

責任者は責任を取るためにある。ならばその責任者が死んでしまえば?

当然、残った者たちの中で、責任を負うものを決めねばならない。

生け捕りにできるなら、それに越したことはないのだ。

「くっ!」

それを理解したサスケは悔しそうに歯噛みする。

「ふっ… どのみち死は免れんさ… ダンゾウ、お前の行ってきた罪… 白日のもとにさらけ出した上で汚名を受けたまま死ぬんだな…」

ある意味、ここで死ぬよりもダンゾウにとっては苦痛であろう…

イタチは、それを思い笑った。

「…………… もう、勝ったつもりか? ワシを殺した所で、戦争は終わらん。ワシの兵団は不死… お前たちに勝ち目は無い…」

「そう思うなら周りを見るんだな。ダンゾウ」

「なに?」

ダンゾウが周りを見渡すと、穢土転生の部隊が反旗を翻し、白ゼツの兵団を襲っていた。

その中には、マダラの姿も見られた。

カブトとは違いマダラの危険性を理解していた大蛇丸は、自分が操作可能なレベルまで再現度を落とすし、マダラを穢土転生していた。

勿論、印を教える等間違ってもあり得ない。

「大蛇丸め…裏切ったのか…」

呆然とその光景を見つめるダンゾウ。

「ダンゾウ…もうお前に勝ち目はない…大人しく投降しろ…」

イタチは再度投降を呼び掛けた。

「予想外の展開だね…ダンゾウ…もう、切り札を出すしか無いんじゃない？」

と、その時、ダンゾウの隣にゼツが現れた。

「……………致し方あるまい…出来ればこの手は使いたく無かったが…」

ダンゾウは少し悩むようにしながらも、決断する。

「何をする気か知らんが、やらせると思っているのか？」

イタチはサスケと目配せをすると、ダンゾウを止めようと駆ける。

「そうはさせないよ…」

しかし、それをゼツが白ゼツたちを向かわせて止める。

『口寄せの術！』

ボンツ!!!

ダンゾウの口寄せの術により辺りを煙が覆う。

その煙が晴れた時、そこにあったのは…

「な!?なんでアレが、口寄せされるんだってばよ…」

ダンゾウが口寄せしたものに驚き焦るナルト…

それは、光の里の奥深くに封印されていた十尾の脱け殻…外道魔像であった。

「ふむ…大蛇丸に移植させた初代様の細胞と、うちはシンの腕…理論上は可能だったとは言え…アレを口寄せできるか、賭けに近かったが…どうやら上手く行ったようだな…」

ダンゾウは、その結果に安堵した。

「どういう事だ… アレは口寄せ封じの札を貼っていたし、監視もしていたハズだ…」

我愛羅も呆然として呟く。

「何… お前たちの元に送ったスパイがやってくれたのよ。」

「バカな… この里に悪意を持つものは入れないハズ…」

ダンゾウの言葉を反論するようにシカマルが言った。

「確かに骨が折れたぞ… 貴様らの里に入るには、ナルトに悪意を感じされる訳にはいかない。普通のスパイではどうやっても潜り込む事は出来ぬ… 良く考えたシステムだ… だが… 何事にも穴がある…」

「何!？」

「要はナルトに悪意が無ければ良いの难道？ ワシに協力することが『ナルトの為になる』と言う幻術を掛けたのだ… この右目の写輪眼でな…」

ダンゾウが真相を明かす。

「そうか… その眼… それはシスイの…」

イタチは状況を察した。

「そう… 最強幻術『別天神』… この術は普通の術とは違う… 何しろ術にかかっている事に本人さえも気づくこと無く、己の意思で行動しているのだからな… これは例えナルトの力でも気付けない…」

ダンゾウは得意満面と言った表情で語った。

「はっ… 上機嫌な所悪いがな… その魔像は空っぽだ… 確かに口寄せ召喚されたのには驚いたが、それでどうするつもりだってばよ…」

しかし、魔像の中身が空であることは、誰よりもナルト自身が知っている。余裕を崩す事無くダンゾウに事実を告げた。

「その程度の事は、ワシとてわかっておる… その為の準備も当然しておるわ…」

ダンゾウはさらに口寄せで、金銀兄弟の忍具を呼び寄せた。

これらは、戦争の前の段階で大蛇丸に穢土転生された兄弟から取り

上げていたものだ。

「この忍具には九尾のチャクラが宿っている。これを魔像に吸わせる。」

「その程度で、十尾が復活するかよ……十尾の復活には、一尾から九尾の尾獣を全て魔像に納めなきゃならねえんだ……今更どうにもならねえってばよ。」

「それは違うな……確かに尾獣のチャクラは必要だ……しかし、元を正せば尾獣とはチャクラの塊に過ぎぬ。ならば足りぬチャクラを他で代用してやれば良い。」

「そんなこと出来るかよ。尾獣たちのチャクラの強さは、お前も知ってるだろ。」

ナルトは、ダンゾウの言葉を否定しながらも、焦りの口調が見え始めた。

ダンゾウの自信がどこから来るのか……

何をするつもりなのかもわからない……それもまた不安を掻き立てる。

「確かに人と尾獣のチャクラを比べればそのチャクラ量は数万……あるいは数十万倍違うだろう……しかし……ならば人のチャクラを数十万人分用意すれば良い。木の葉の里には未だそれだけの数の人々が住んでおる。」

「な!?!」

「魔像を呼び寄せ、九尾のチャクラを吸わせる……そこに数十万人分のチャクラを入れれば、十尾は復活する。」

「お前は……自分の里の人間を犠牲にする気か!!」

「フツ……そんな事はせん。里の者たちには、命の危険にならない所で吸い上げを止めるよう調整しておる……それでも危険な事に変わりはないからな……出来ればこの手は使いたく無かったが……ここまで来ては致し方無い……さあ、木の葉の民たちよ……ワシを信じ、ワシに付いてきてくれた愛すべき民たちよ……明日の木の葉の繁栄のため……ワシに力を貸してくれ!!」

その瞬間、木の葉を巨大な術式が覆った。

黒ゼツの策謀

ダンゾウは、ゼツと出会った時の事を思い出していた。

それは、ナルトに屋敷を吹き飛ばされ、潜伏中の時だった。

ゼツは、ナルトたちによつて暁を滅ぼされた後、なんとか自分だけは逃げ出すことに成功していた。

偶然、ダンゾウの潜伏場所に現れたゼツは、ダメージを負った身体を癒すため、自分の持つ情報を対価に、ダンゾウに保護を求めたのだ。

その後、ナルトを倒すという共通の目的のために二人は協力する事となった。

ダンゾウにとっては、ナルト率いる人柱力の集団は、木の葉にとって脅威以外の何者でも無い。

ましてや、ナルトは木の葉に恨みを持っているハズなのだ。いつ、ナルトが木の葉に仕掛けてくるかも知れない。

この後に及んでもまだ、ダンゾウは自身が木の葉の火影となり、木の葉を繁栄させるといふ夢を諦めてはいなかった。

幸い、ゼツもナルトに恨みがあるらしい。自身のいる組織を壊滅させられたのだから当然の事だろう。

この男を利用して、ナルトと言う木の葉の憂いを断つ。

その功を利用して、他の里に先んじる。

ダンゾウの方針は決まった。

それから、情報を集めつつ木の葉の上層部への不満を利用してクーデターに成功したダンゾウは、念願の火影となった。

しかし、その強引なクーデターのおかげで、里の主力たちは、綱手に付いていつてしまった。

綱手がナルトと懇意なのは知っていたが、まさか、あつさりと光の里に保護を求めるのは計算外だった。

それは、ダンゾウと他の者たちの木の葉への思い入れの差から起こったものだった。

ダンゾウにとつては、木の葉こそ優先されるべきものだが、他の者にとつては、故郷としての思い入れはあつても家族や友人、自分の命

に優先されるものではない。

長く火影として里に尽力してきたヒルゼンすら、孫の木の葉丸の為に、木の葉から離れていった。

内心、苦々しく感じるダンゾウであったが、直ぐに気持ちを切り替えると、光の里侵攻に向けて準備を開始する。

大蛇丸との協力を取り付けたダンゾウは、更に白ゼツの兵団の戦力を確かめる。

木の葉の忍は、今回ほとんどは留守番だ。

正直、今木の葉に残っている忍は、そのほとんどが戦力としては微妙な者たちだ。

上層部の情報に踊らされ、自ら見た物を信じない様な者たちなので、それらも当然と言える。

命令には忠実に従ってくれるだろうが、何かあれば直ぐに裏切る可能性を持った者たち。

それが、今の木の葉の民たちに対するダンゾウの評価だった。

しかし、ダンゾウはそれでも今の木の葉の民たちを愛している。

自分を支持して付いてきてくれているのだ。

そして何よりも、ダンゾウを火影とする木の葉の住人なのだ。

例え、今は役立たずでもここから成長してくればそれで良い…

その思いから、戦場に連れていくのは控えた。

「戦力が足りないかも知れないよ?」

そんなダンゾウの決断に異を唱えたのはゼツ。

交換条件として持ちかけられたのが十尾復活のため、木の葉の人間のチャクラを吸い上げ、魔像に流す術式を里に施すと言うもの。

ダンゾウ自身、今回の戦争は賭けに近い事を理解していた。

勝てば夢の実現を目指せるが、負ければ全てを失う。

綱手たちが敵に回ったことで、状況は益々厳しい。

仕方なく、これを了承するダンゾウ。

尾獣たちの祖、十尾の力がどれ程の物かはわからないが、少なくとも現在の尾獣一匹二匹よりは強いはず。

ダンゾウは、木の葉の民たちの命に関わらない範囲でという条件を

付けて、里に術式を施す事に同意した。

・

その術式を今、ダンゾウは解放した。

木の葉の里を巨大な術式が包み込む。

「これは…ダンゾウ様が言っていた術式か…」

「向こうは、苦戦してるんだな。」

「ダンゾウ様は、あの化け物が作った里を倒そうと頑張つて下さっているんだ。俺たちも力を貸すぞ。」

侵攻前、事前に術について話を聞いていた木の葉の人間たちは、自分たちの力が戦争の勝敗を決める力になることに誇りを抱いていた。

ナルトという憎悪の対象が、自分で里を興し、幸せに暮らしているのは許せなかった。

そのナルトを倒すと言うのだ。喜んで力を貸そう。

木の葉の人間たちの心は、そのほとんどが一つに纏まっていた。

奇しくも、ダンゾウたち上層部がナルトを化け物とすることで、里を纏めるという計画がここで役に立っていたのだ。

舞台は、戦場に戻る。

術式を発動させたダンゾウ。

魔像にチャクラが集まっていく。

(木の葉の民たちよ…力を貸してくれ…)

その光景を黙って見ているダンゾウ。

「くくくくくく…あつはつはつはつ…」

その時、ダンゾウの隣に立っていたゼツが、堪えきれないと言った風に腹を抱えて笑い出した。

「何がおかしいのだ？ゼツよ…」

「そりゃあ、勿論…君の道化つぷりが可笑しくてさ…ダンゾウ…本当にありがとう。君のおかげで、僕の本当の目的が果たせるよ。」

「本当の目的…だと？」

「そうだよ？君は僕の目的をナルトへの復讐と考えていたみたいだけ

ど、それは過程に過ぎなかったのさ。」

ゼツの物言いに、不安を感じたダンゾウ。

「さて、ここまで踊ってくれた君に、良いものを見せてあげよう。」

そう言って取り出したのは一つの水晶玉。

「これは遠見の水晶。」

そう… かつてヒルゼンが良くナルトを監視するのに使っていたものだ。

「さてさて… 今の木の葉の里は、どうなっているのかな？」

ニヤニヤと笑いながら、言うゼツ…

そこに移っていた光景… それは…

木の葉に存在する全ての生き物が絶えていた。

人がいない… 動物もいない… 植物も枯れていた…

木の葉だった形跡は、建物と顔岩… そして、その人間が着ていたと思われる服だけが地面に落ちていた…

「バカな… あの術式で命までは取らないと約束したではないか…」

呆然としながら、ゼツに言うダンゾウ。

「そんなの嘘に決まってるじゃないか… 君が僕を利用しようとしたように、僕も君を利用してただけさ。」

「だが、あの術式はワシも調べた。確かにあの術式には、人の命を留める程度で吸収を止める様ストッパーがかかっていた。」

他人を信用しないダンゾウは、当然自分でも確認はしていた。

「うん。木の葉を発つ時までではそうだったよ？でも、僕には優秀な手駒がいるのを忘れたかい？」

「まさか…」

「そう… 木の葉の防衛の為に残してきた白ゼツたちに、術式のストッパー部分を消すように指示していたんだ。十尾を復活させるには、木の葉の人間の身体ごとチャクラに変換させるくらいでない、とても足りないだろうからね… ところで…」

ゼツは、そこで一旦言葉を止める。そしてダンゾウの顔を見て嫌らしく笑うと、

「自分の手で、木の葉を終わらせた気分はどうか？志村ダンゾウ？」

「あ… ああ… あああああああ… 違う… ワシは… 木の葉を… ワシは… ワシが…」

知らされた現実には、ダンゾウは膝を付き、焦点の定まらない目で否定の言葉をぶつぶつと呟いた。

ピシッ…

その時、全てのチャクラの吸収が終わった魔像に罅が入る…

そして、そこから巨大な樹が表れた。

「これはこれは… まさか十尾を通り越して、いきなり最終形態の神樹になるとはね… 予想以上にチャクラが集まったのかな… さて…」

黒ゼツは、一人言の様に呟くと、未だにぶつぶつと呟いているダンゾウを見ると、自分の身体を捨ててダンゾウに取りついた。

「ぐおっ…」

ダンゾウは抵抗する気も起きないのか、為す術なく同化されてしまう。

「マダラを使った計画は、ナルトのせいで邪魔されちゃったけど、結果的にはもつと操りやすい道化が手に入ったし、目的も果たせたから良かったかな。」

「黒ゼツ… てめえ。」

ナルトがダンゾウの身体を覆った黒ゼツを睨む。

「さて、母さん復活前にもう一仕事しないとね。」

黒ゼツが呟く。

「きやあああ…」

すると、後ろから悲鳴が聞こえた。

「ヒナタ!!」

その悲鳴はヒナタのものだった。

気を失ったヒナタを抱えて男が黒ゼツの前に表れた。

「黒ゼツ様… ヒナタを連れてまいりました。」

「ヒアシさん… どうして…」

そう、それはヒナタの実父であるヒアシであった。

「何を言う。ダンゾウ様や黒ゼツ様の命令に従うのはお前たちの為な

ののだぞ。」

ヒアシは当然のことという風に言った。まるで疑問を感じていない。

「まさか…。」

「さつきダンゾウが説明してたね。『別天神』で協力員を作ったつて… 紹介するよ。僕たちの協力員の『日向ヒアシ』だ。彼にはダンゾウと僕の指示に従うようにと術をかけてあったのさ。その一つが日向ヒナタの捕獲。前の戦いで気付いたけど、君たち… ハゴロモの力を継いでいるね？」

暁殲滅の折り、ナルトたちの戦いを見た黒ゼツは、確信していた。

「それは…。」

「わざわざ力を二つに分けるなんて非効率な事をするのは理解できないけど、僕としては助かったよ。おかげでこうして片割れを簡単に捕えられたんだからね。君たちの内どちらかさえ殺せば、母さんを阻む者はもういない。この女の子も、流石にハゴロモの力を継ぐだけあって強いけど、実の父親のヒアシ相手には油断したみたいだね。」

「くっ…。」

ヒナタを人質にとられ、動きを封じられるナルト。

そんな、ナルトを尻目に黒ゼツは、不思議な形の刀を取り出した。

「これは、魂喰いと呼ばれる刀だね。これで傷つけられた人間は、その魂をも傷つけられる。魂の傷は癒される事はなく、やがてその人間の魂はあの世に行くことも出来ず消滅する。魂が無くなれば穢土転生も使えないよね。」

そして、気を失ったヒナタを見る黒ゼツ…

「まさか…。」

「僕の計画を潰してくれたお礼だよ。君の大事な人は、僕自身が殺して上げよう…。」

「や、やめろおおおおおおお…」

グサツ…

黒ゼツは戸惑う事なく魂喰いをヒナタの身体に向かって突き刺した…

破滅の魔獣

「ゼツ… よくやったわ… と言いたい所だけど… このチャクラ… どうやら正規のやり方で妾が甦った訳ではないようね…」

復活してすぐ自身のチャクラがおかしな事に気付いたカグヤ。

「うん… ごめんね母さん… 尾獣のチャクラは手に入れるのが難しく… 人間たちのチャクラで代用したんだ…」

「成る程… どうりでチャクラが濁ってる… 薄汚い人間どものチャクラのせいなのね… やはり、チャクラは妾一人に集めるべきものだわ…」

黒ゼツの話聞いたカグヤ… 尾獣のチャクラの純粋なエネルギーに比べて、人のチャクラに濁りを感じたようだ。

改めて、チャクラは自分一人の物だと確信するカグヤ。

その時…

『こんな世界… 消えちまえ…』

感情を無くしたハズのカグヤをして、ゾツとする程に暗く… 怨嗟に満ちた言葉が辺りを支配した。

思わず振り返るカグヤ…

そこにいたのは、一人の青年…

白眼で探ると、ハゴロモの力の片割れを感じた。

「黒ゼツ… あの子はなに？」

「ああ、彼は九尾をその身に宿した人間さ… 見ての通り、ハゴロモの力を受け継いでる。僕の計画を悉く潰されてね… さつき、意趣返しに、彼の恋人を殺したんだ… その子もハゴロモの力の半分を宿したから、もう母さんを阻む者はいないよ？」

自身の足元に倒れている女性を見て、黒ゼツの説明を理解するカグヤ。

しかし、一つだけ気になる事がある…

カグヤは、ナルトを見て恐れを抱いた…

本当に、もう自分を脅かす存在はいないのか？

警戒するカグヤ。

一方、ナルトは虚無感に苛まれていた。

(何故だ… 何故俺は大事な人を守れない… どうして繰り返すしま
うんだってばよ… 何度も… 何度も… 何度も…)

魂喰いで付けられた傷は、癒える事はなく、いずれはその魂を消滅
させる。

もう、ヒナタの笑顔を見ることは永遠に出来ない…

ヒナタを黒ゼツの刀が突き刺した光景を見たナルトは、精神世界で
自分を責め続けていた…

そして…

(ああ… そうか… こんなくだらな世界があるからいけない
だ。家族と幸せに暮らす… そんな当たり前の幸せすら認めてくれ
ない世界なんていらねえ…)

「こんな世界… 消えちまえ…」

ナルトの口から無意識に溢れた言葉…

それは世界の破滅を願うものだった。

『ナルト… 正気に戻れ… お前はそんな事… 望んでねえハズだろ
！』

そんなナルトを九喇嘛が懸命に説得しようと試みる。
しかし…

『くっ… ナルトの憎悪が… ワシを侵食している…』

ナルトの精神世界… 破滅を願うナルトの心が精神世界そのもの
を憎悪で埋めていく。

『ぐっ… ナ… ル… ト…』

闇が九喇嘛を覆い、やがて九喇嘛の声は聞こえなくなった。

更に、ナルトの中にいた磯撫と穆王も既に闇に取り込まれていた。
そして…

ナルトの怨嗟の言葉と同時に、ナルトを憎悪のチャクラが覆う。

その姿は前史において、憎しみに捕らわれたナルトが九尾の力を発
現させた時の物に似ていた。

「ナルト！」

その様子を、他の人柱力たちが心配そうに見守る。

「グルルルルアアアアアアアア!!!」

ナルトから発せられた言葉はもはや、人の物ではなかった。

ナルトから生えた九尾が突然伸びる。

その目標は他の人柱力たち…

「ぐあっ!!」

ナルトから生えた尾は、とてつもない速さを持って人柱力たちに迫ると、その身体を捕らえた。

「これは…力が…尾獣の力がナルトに吸いとられているのか…」

我愛羅は、自分の身体から守鶴の力が抜き取られて行くのを感じていた。

『くっ…マズイぜ…このまま全てのチャクラを奪われたら、我愛羅が死んじまう。』

守鶴は、なんとか我愛羅を死なせまいと必死に抵抗していた。

それは他の人柱力と尾獣たちにとつても同じだった。

皆がなんとか抵抗を試みていた。

しかし、ナルトから発せられる力は尋常な物ではない。

『クソ…もうダメだ…』

尾獣たちが諦めかけたその時…

「ググッ…くっ…皆…逃げ…グルアアアアア！」

一瞬、ナルトから発せられる力が弱まる。

その隙を付いて、なんとかナルトとの接続を切り離れた我愛羅たち。

九割九分、その力を取られたがなんとか、生きながらえた。

一方、人柱力たちとの接続を切り離されたナルトだったが、全ての尾獣…そのほとんどどの力を吸収した事に変わりはなく、さらにはナルトと九尾の前世の力が加わったからなのか、その力は十尾を遥かに超えるものだった。

ナルトを覆うチャクラに変化が生まれる。

闇は深く、濃くなり、漆黒の色合いを強くする。

ナルトから生えた尾は十本となり、その手からは鋭い爪が延びていた。

犬歯は鋭く長くなり、その尋常ではない破壊に特化した力から、正に『破滅の魔獣』と呼ぶべき姿へ変貌していた。

その瞳が、カグヤを捉える。

「ヒッ！」

ナルトの視線に射竦められたカグヤは、思わず小さな悲鳴をあげる。

恐怖……かつてチャクラの実を食し、その身にチャクラを宿し、乱世を治めたカグヤ。

兔の女神と称され信仰の対象となり、またある時は鬼として恐れられた。

そんな自分が久しく感じることの無かった恐怖を、ただ目を合わせられただけで感じた。

目の前のモノは、ただ九頭の尾獣の力を合わせただけの存在ではない。

ましてや十尾とも違う。

得体の知れない別のモノだと強く感じた。

「グルルルル……」

ナルトが戦闘体勢を取った。見ているのはカグヤと同化した黒ゼツ……

ヒナタを殺された恨みを、理性を失ってもなお覚えていいるのかも知れない。

「ガッ！」

地面を蹴り、カグヤに迫るナルト。

「ヒッ！」

あまりの迫力から、カグヤは迎撃を考える事すらせず、異空間に逃げ出した。

「フウ……」

異空間に逃げ込み、安堵のタメ息を吐くカグヤ。

「母さん……何故逃げたんだい？あんなヤツ……さっさと殺しちゃえ

ば良いじゃないか…。」

黒ゼツは何もわかっていない…。」

その能天気な発言にカグヤは苛立ちを覚えた。

「お前は、アレがなんなのかわかっているのか？」

「ん？そうだね。アレはうずまきナルトと言つて、ハゴロモの片方の力を継いだ人間で、尾獣どもを束ねる力を持っている…。つて所かな。でも、問題ないでしょ？例えアレが十尾に匹敵する力を持ったとしても、それを超える力を持つ母さんの敵じゃないさ。」

「違う…。アレはそんな生易しいモノではない…。十尾を超えるチャクラ…。その全てを破壊の力にのみ費やした存在…。全てを破壊する破滅の魔獣だ…。」

ピシッ

カグヤが断言したその時、異空間の空に罅が生まれる。

「なにが？」

「まさか…。」

突然の現象に驚く黒ゼツと、心当たりがあるのか、固まるカグヤ。

ピシッ…。ピシッ

異空間に生まれた亀裂が大きくなっていく。

そして…。

バリリンッ

異空間に穴が空いた。そこから侵入してきたのは…。

「ガアアアアアアアッ!!!」

ナルトだった。

「なっ…。どうやってここに…。ここは母さんが生み出した異空間…。母さんが作った穴から侵入するならまだしも、自分で穴を開けて入ってくるなんて不可能だ。」

「だから言ったのよ…。アレはそんな生易しいモノではないと…。恐らく向こうとこの異空間にある次元の壁そのものを破壊したのね…。」

黒ゼツの言葉に、険しい表情を浮かべて答えるカグヤ。

「グルッ!？」

カグヤ：… と言うよりも黒ゼツを発見したナルトは、その目を細める。

「くっ…」

別空間へと逃げ込もうとするカグヤだったが、ナルトの身体から延びたチャクラ腕に身体を掴まれた。

ギリギリと身体を締め付けられ苦悶の表情を浮かべるカグヤ。

「母さん！」

苦しそうな母の顔を心配そうに見る黒ゼツ。

「調子に乗るな！」

掴まれた腕からなんとか手だけを相手に向けたカグヤ。

『共殺の灰骨』

カグヤの掌から棒状の骨が発射された。

この骨に当たったが最後：… 身体を灰にされ、消滅する。

ナルトは、自分を締め上げる為に動いていない。

これに当たれば、いかにナルトと言えども助からない…

内心ほくそ笑んで自分の勝利を確信するカグヤだったが…

「なっ!？」

確かに骨はナルトに当たった。が、その効力が発揮される前に骨は跡形もなく消滅してしまった。

「どういう事…」

呆然と呟くカグヤ：… いや、本当はわかっていた。

ナルトを覆うチャクラの衣：… それもまた破壊に特化しているのだと。

自分の発射した骨がああチャクラの衣に触れた瞬間に破壊されたのだ。

冷や汗をかきつつ、全身にチャクラをみなぎらせて、なんとか拘束から脱出したカグヤは、なりふり構わず逃げに徹する。

空間を渡り、距離を取るカグヤだったが、それを見たナルトは、口を開けると巨大な求道玉を作り出した。

「まさか… 妾をこの空間ごと消すつもりか…」

カグヤは、ナルトの意図を察した。

別空間へ逃げなくては…

カグヤが他の異空間へ逃げようとしたその時…

求道玉が発射された…

「あ… ああ… ああああああ…」

迫る求道玉に為す術なく包まれたカグヤ…

ズドオオオオオオオオオン…

「ここは…」

いつの間にか、黒ゼツは元の空間に戻っていた。

「母さんは?」

母のチャクラを感じない…

どうやら、自分だけを逃がしてくれたらしい。

「仕方ない… 次の母さん復活まで、また隠れて暗躍するまでだ…」

自分の寿命は永遠に等しい。器を一から用意するのは時間がかかるが、なんとかなるだろう…

また最初から計画をやり直すのは業腹だが仕方ない。

黒ゼツは、すぐに未来へと気持ちを切り替えた。

しかし…

ガッ

「ナルト!?!」

いつの間に側にいたのか、ナルトが黒ゼツを掴む。

「は、放せ。僕には、使命があるんだ。こんな所で終わる訳には。」

「グルルルル… ガアアアアアアア!!!」

ナルトの力によるものか、黒ゼツの身体が端から消滅していく。

「ひい… 嫌だ… 死にたくない… 死にたくない…」

それに気付いた黒ゼツは、初めて本当の恐怖を味わう。

死にたくないと思えば、ハゴロモの時代から暗躍してきた存在とは思えないほど哀れだった。

「母… さん…」

そして、その言葉を最後に黒ゼツはこの世から永遠に消滅したのだった。

「グルアアアアア… グルアアアアアア!」

ナルトの雄叫びが辺りに木霊する。
ヒナタの仇を取って尚、ナルトが元に戻る様子は見られない。
その雄叫びは、どこか物悲しく感じられるのだった。

ナルトを止めろ！ 前編

時間は少し遡る。

異空間へ逃げたカグヤ達を追ってナルトが消えた頃…

「ヒナタ… しっかりして…」

「クソツ！傷口が塞がらん… あの黒ゼツってやつ言う通りなのか？」

サクラと綱手により、ヒナタの懸命な治療が行われていた。

そして、ダンゾウに操られたヒアシは、他の忍たちによって取り押さえられている。

「ヒアシさんへの指示がどの程度かわからん… このまま放置するわけにはいかないな…」

イタチは、一匹のカラスを口寄せした。

そして取り押さえられ、もがいているヒアシに向かわせる。

そのカラスが、ヒアシの目を覗く。

『別天神』

カラスの目に仕込まれていた『うちはシスイ』の目の力が発動した。

「お前にかげられた全ての幻術を打ち消せー

「別天神による幻術を打ち破るには、同じ別天神を使うしかない…

（許せ… シスイ… 木の葉を守るために使うよう託された目だが、今ここで使わせてもらった。）」

「私は何を…」

イタチの別天神によって、その効果が打ち消されたヒアシは、呆然と眩く。

別天神によって操作されていた記憶が甦ってくる

「あ… ああ… 私は… なんて事を… ヒナタ！」
甦った記憶。

ダンゾウに操られ魔像の封印を解いた。そして、この戦争中には黒ゼツに操られ、ヒナタを不意打ちで気絶させた。

その結果ヒナタは…

自分が操られ、行った行為の結果に、うちひしがれそうになるのを

懸命にこらえ、ヒナタのもとへと向かうヒアシ。

「綱手様！ヒナタは…」

「傷が塞がらん…。あの黒ゼツってヤツの言う通り、魂そのものに傷がつけられているのかも知れん…。その影響が肉体にも影響しているのだとしたら…。私たちでは手の施しようがない…」

綱手は苦しそうに答える。

「そんな…。っ!?!…。ヒナタ…。私のせいだ…」

思わず膝を付くヒアシ…。その顔は後悔に歪んでいた。

自分の目標を見つけ、幸せそうだったヒナタ…

まだまだこれからだというのに…

ヒアシの目からは、いつの間にか涙が溢れていた。

「グオオオオオオオオ！」

その時、ナルトがこの空間に戻ってきた。

ナルトは、黒ゼツを捕まえるとその身体を少しずつ消滅させていく。

「嫌だ…。死にたくない…。死にたくない…」

黒ゼツは、死の恐怖から恐慌状態にあった。

そして…

完全に消滅する黒ゼツ。

敵の大将であるダンゾウと黒ゼツの死により、この戦争は忍連合の勝ち…

本来はそうなるのだが…

「グルアアアアアアア!!!」

ナルトは、元に戻る事なくいつそう唸り声を上げる。

そのナルトが大きな求道玉を作りだし、近くの山に向かって発射した。

ドオオオオオオオン!!!!

一瞬にして山が消滅してしまった。

その後も、近くの湖や森…。辺りの景色を悉く消し飛ばすナルト。

「な…。なんでナルトは元に戻らないんだ…」

サスケが独り言のように呟く…

「……………ナルトがああなる前…ナルトが発した言葉を覚えているか？」

イタチはすぐに察したようだ…

「こんな世界…消えちまえー」

「あのナルトにとつて、この世界そのものが憎悪の対象なのだろう…もはやこの世の全てを破壊するまで止まることはないだろう…」

「そんな…」

イタチの言葉に、苦しそうな顔をするサスケ。

「いや…まだだ…ナルトは…アイツはまだ完全に憎しみに支配されてしまった訳ではない。」

イタチの言葉に反論するように、立ち上がったのは我愛羅。

「何故そう言える？お前たちもアイツの言葉は聞いていたハズだ。何よりも、お前たちの力を奪ったのは、あのナルトだろうか？」

イタチは、しかし冷静に事実を告げる。

「俺たちが生きている。それが証拠だ。お前が言うように、あの時ナルトは俺たちから尾獣チャクラを奪った…俺たち人柱力は尾獣を抜かれれば死ぬ…だがアイツは、完全に尾獣チャクラを奪うことをしなかった…アイツは…ナルトはまだ、あの憎悪の中で抵抗しているのだ。」

我愛羅は、イタチを真っ直ぐに見ながら言った。

「何よりも、ナルトは周りの山や湖を消し飛ばしてるが、俺たちを標的にしていない。まあ、こちらから攻撃すれば別なんだろうがな…」

ウタカタが、後を引き継ぐ。

「だったら、私たちがするべき事は決まっている…ナルトを取り戻す！」

ユギトが続く。

「ナルトは言ってたツス。自分達は、人柱力だろうと忍だろうと、その前に人間だって。」

フーが言った。

「ナルトは、今、破壊の獣と化している。アイツがワシたちに道を示してくれたように今度は…」

老紫が言葉を引き継ぎ、

「オレたちがナルトを助ける番だZEE！」

最後にビーが言った。

「遅くなつて済まぬ。忍連合……ここに集結じゃぜ。」

発言したのはオオノキ。

いつの間にか、他里の忍が集まっていた。

黒ゼツが倒れ、コントロールを失った白ゼツの部隊を退けて、この戦場にたどり着いたのだ。

「どうやら、想定とは違う状況になっているようね。」

戦場の様子を見たメイは、暴れるナルトに目を止め呟いた。

「ふん……戦争で予想外の事が起きるなど、珍しくも無いわい。」

エーは相変わらず憎まれ口を叩く……が……

「だが、今はナルトを止める手立てを考えるべきだな。」

ナルトを止めると言う事には賛同していた。

「なかなか、難しそうじゃん……」

ナルトの巨大なチャクラに冷や汗をカククロウだったが、他の影たちには反対はしない。

「兄さん……俺もアイツを止めたい……」

皆の意見を聞いたサスケも、自分の意思を告げた。

「俺は、ずっと兄さんを憎んできた……そんな俺を変えてくれたのはアイツなんだ。憎しみに囚われた姿がどれだけ哀れなのか、今のナルトを見ると良くわかる……今度は、俺があいつを助けてやる番なんだ。」

イタチの目をしっかりと見つめ、自らの意見を口にするサスケ。

「ふっ……今のナルトを止めるのは、生半可な力では足りないぞ？」

頑固な所は誰に似たのか……イタチは苦笑しながらも、サスケに頷いた。

「意見は纏まったな。ナルトを取り戻す……行くぞ！皆の者。」

エーが、ナルトの代わりにこの場を集った仲間たちに号令を掛けるのだった。

ナルトを止めろ！ 後編

ナルトを中心にして作られた忍連合が、今、ナルトを救う為にナルトに対する。

今まで、人間には見向きもしなかった魔獣と化したナルトだったが、流石に自分に向かってくるものたちには反応した。

「グルルルル…」

無造作に振るわれた腕… たったそれだけの動作で、巨大な衝撃波が起こる…

「くっ！なんて威力だ…」

ナルトの力に戦慄を覚えるサスケ。

「あのナルトは、十尾としての能力… その全てを破壊に特化させているんだ。まともに当たればあつという間に戦闘不能だぞ。」

イタチはそんな弟にアドバイスする。

その時、ナルトの姿が消えた…

そう思った時には、既にサスケの前に現れていた。

(速い！)

ナルトの攻撃を自身の持つ刀で受けようとするサスケだったが、

「受けるな… かわせ！」

イタチの咄嗟の言葉で後ろに飛びかわす。

先程までサスケがいた場所には、大きなクレーターが生まれていた。

イタチの言葉を受けずに、あのまま受けていたら、刀ごと砕かれていただろう。

思わずゾツとするサスケ。

尚もサスケを攻撃しようとするナルトだったが、その間を砂が遮る。

「尾獣だけが俺たちの力ではない。ナルト… 今度は我らが相手だ。」
颯爽と立つ我愛羅たち人柱力。

我愛羅たちのお陰でひとごち付いたサスケだったが、その顔は悔しさに歪んでいた。

先程の攻防でわかってしまったのだ。

今の自分ではナルトの足止めすら、ままならないと…

「畜生… なんでだ… なんで俺は、これほどまでに弱い…」

「サスケ… お前はナルトを助けたいのだから？もう諦めるのか？」

サスケの独り言を聞いたイタチが問いかける。

「ああ… 助けたいさ… でも現実には何も出来ない… アイツが苦しんでいるってのに… 俺は何もしてやれない…」

自分の不甲斐なさに、拳を握りしめるサスケ。

あまりにも強く握りしめた為、その手からは血が滲み出ていた…

「サスケ… 今のお前の力を飛躍的に上げる方法が一つだけある。」

「え？」

イタチの言葉を思わず聞き返すサスケ。

「俺の… 目を… お前にやる。」

「な!？」

イタチの提案に、思わず固まるサスケ。

「俺達うちは一族の写輪眼には通常のものよりも遥かに強力な上のステージがある。それが万華鏡写輪眼。シスイの別天神や、ダンゾウのイザナギ… 俺の瞳術… 月読や天照は、この万華鏡写輪眼によるものだが、この万華鏡写輪眼の開眼には、一つ大きな要因がある… それは自分の大切な人の命をその手にかけること…」

「そんな…」

「お前の場合はサクラになるのだろうが… ナルトを止める為とは言え、それはナルト自身が望んでいないハズだ。だから裏道を使う。」

「裏道…」

「そう… 既に万華鏡に開眼している俺の眼をお前に移植する。」

「でも、そんな事したら兄さんが…」

「ふっ… どの道この戦いが終わればまた封印しなければならぬい… 今までと変わらないさ…」

「だったら、俺の眼を兄さんに…」

「それは何かの時の為にとっておけ… 言っただろ？俺にはもう必要の無いものだ…」

少し前の事…

イタチの目を貰う覚悟を決めたサスケは、サクラの元を訪れていた。

サクラに事情を説明したサスケ…

最初は拒否するサクラだったが、二人が納得していることを察し、その場で移植を行った。

「サスケ… あのナルトに対抗するには、写輪眼の瞳術の中でも、攻撃に特化した『スサノオ』しか無い。」

眼を失ったイタチだったが、サスケの後を正確に追いながら術の説明を行う。

「お前は万華鏡写輪眼には慣れていない。お前は術の発動と維持… 操作に専念しろ。術の制御やサポートは俺がやる。」

そう… イタチはそのためにサスケと共に戦場に向かうのだ。

眼を失ったとて、自分にはまだやれることがある。

サスケは万華鏡写輪眼を手に入れたばかり…

制御は愚か、発動も覚束ないだろう。

そのサポートの為に自分はいる。

「行くぞ兄さん… 『スサノオ』」

二人をチャクラが包み込む。サスケの力とイタチの制御力… スサノオは、初めての発動でありながら、完全体だった。

そのスサノオを使い、ナルトの攻撃を止めるサスケ。

「ぐっ…」

予想以上の衝撃に、思わずうめき声をあげるサスケ。

「いかにスサノオとて、あの力にはそう何度も対抗はできん。できるだけ受け流す様に攻撃を受けろ。」

「わかった。」

イタチがサスケに指示を飛ばす。

「サスケ君… 五秒で良い… ナルトの足を止めてくれないか？」

その時、下から声がかかる… それは四代目火影… ミナトだっ

た。

ナルトが破壊の化身と化した時、一縷の望みをかけて、ミナトとクシナの制御を止めた大蛇丸。

ミナトたちは、自分達の息子が世界を破壊しようとしている姿に心を痛めていた。

しかし、ナルトを止める為に集った忍たちの戦いに勇気つけられて、自分達のなすべき事を決める。

「ミナト… 例え私たちがあの子にとって親失格なのだとしても、私たちがあの子を息子として愛してる事に変わりは無いつてばね。子供の過ちを正すのは、親の役目よ?」

「そうだね… クシナ…」

ミナトは、クシナの言葉に頷いた。

「クシナ… 九尾のように、あのナルトを封印の鎖で縛る事はできるかい?」

「難しいってばね。九尾でさえ止めるのは命懸けだった。目の前のナルトはその九尾を遥かに超える力を持っている… 私一人の力じや一瞬、動けなくするだけで精一杯よ… それに、封印の鎖をナルトに使うのにしても、あの速さじゃ無理… せめて少しの間ナルトを足止めしてもらえないと…」

クシナは、苦しそうに答えた。

「わかった。そっちは俺がなんとかする… クシナは術の準備を…」
ミナトはクシナから言われた条件を満たすべく、伝心の術が使えら山中一族に接触し、これを他の忍たちに伝えた。

足りないチャクラは、皆で補えば良い…

あとは、ナルトの足を止めれば…

その役をミナトから託されたサスケ。

「五秒か… あのナルトを相手にするには厳しいな…」

イタチは冷静に言った。

「それでも… やるしか無いんだ…」

「グルルルル!?!」

ナルトの足を止めようと、自分から攻撃を仕掛けるサスケ。

スサノオの力は強大だが、それでもナルトの脅威にすらなり得ない……

だが、何故かその攻撃をかわすナルト。

それは、ナルトのどこかでまだサスケに対するライバル心が残っていたからかも知れない。

「グオオオオオオオオ!!!」

スサノオに対抗すべく、自らの纏うチャクラを巨大化させるナルト。

真つ向からサスケと打ち合うつもりなのだ。

「予想外だが、これならいける。五秒……死ぬ気で耐えて見せる……打ってこいナルトオ！」

気迫で耐えるサスケ。

そしてクシナの術が完成する。

巨大な鎖がナルトを縛る。

「巨大化したのは失敗だつてばね。お陰で目標がわかりやすい。皆……お願い私にチャクラを……」

クシナにチャクラを集める忍たち。

ナルトは、その鎖を断ち斬ろうともがくが、流石にクシナの封印……それも忍連合が総出で強化した鎖はなかなか破れない。

「今よ、皆……ナルトに呼び掛けて……ナルトを正気に戻すつてばね。」

クシナの号令で、ナルトに呼び掛ける仲間たち……

「ナルト……帰ってこい。」

「お前に復讐は似合わねえ。」

「俺達に人としての生き方を示してくれたのはお前だろ！」

多くの仲間たちが、ナルトに呼び掛ける。

ナルトなら戻れる……そう信じて……

しかし……

ビキツ……バキツ

「ぐっ……強すぎる……皆のチャクラを集めても足りないの？」

クシナは、なんとか鎖を維持しようと踏ん張るが……

バキイン……

鎖が跡形もなく碎け散る。

「グオオオオオオオオ!!!」

サスケもチャクラを使い果たし、もはやスサノオを使う力は残っていない。

「畜生……結局俺達にはナルトを救えないのか……俺達の戦いは……無駄だったのか……」

サスケが諦めの言葉を口にした。

その時……

「そんな事無いよ……サスケ君や、皆の戦いは無駄なんかじゃない……皆が時間を稼いでくれたお陰で、私はこうしてここに立っている。後は、私が引き受けます!」

死んだハズのヒナタが、そこに立っていた。

魂の融合

時間は再び巻き戻る。

サスケがイタチの目を移植する為に、サクラたちの元に戻って来た時の事……

「サクラ…… ヒナタの事は私に任せて、サスケ達の事を頼む。移植が終わったら、お前はそのままサスケたちのサポートに回れ。」

イタチから説明を聞いた綱手は、ヒナタの治療をし続けているサクラに命令する。

「ですが師匠！」

サクラはイタチの提案にも驚いたが、それよりも自分がこの場を離れる事に抵抗があった。

綱手と自分の二人がかりの治療でさえ、ヒナタは一向に回復する兆しが見えないのだ。

自分が離れてしまえば、一気に傷口が広がり、もう助からないのではないか…… そんな不安があった。

サクラは、ヒナタがナルトを救い出せるこの世界で、唯一の存在だと考えている。

何しろ、ナルトがああなったのはヒナタが傷つけられたからなのだから。

「この傷は普通ではない。二人だろうが三人だろうが、回復役を増やした所で状況は変わらないだろう……」

「……………」

サクラが何を躊躇しているか、正確に把握している綱手はサクラを諭す為に、敢えて厳しい現状を伝えた。

「その通りじゃ……」

と、その時ふいに別の声がかかる。

「誰だ！」

サスケがその人物を警戒する。

「ワシは大筒木ハゴロモ…… お主達に分かりやすく言えば六道仙人と申す。」

「なに！六道仙人だと!!」

あまりにもビックネームな為、疑わしい視線を向けるサスケ。

「まあ、ワシの事は良い。今はナルトじゃ… サクラとやら… ここはワシに任せて、うちのは兄弟の手助けをしてやってくれ。」

しかし、そんなサスケには目もくれず、サクラに指示をするハゴロモ。

サクラも、やはり突然の六道仙人の登場に戸惑い綱手の顔を見る。

しかし、綱手は何も言うこと無く、ただ頷いた。

「!?」

それは、綱手がこの人物を六道仙人と認めていると言うこと…

何故、疑いすらしないのか… しかし、この師匠の事… 意味の無いことはしないだろう… と考えたサクラは、綱手に頷き返すと、目の移植手術を始めた。

「やれやれ… もう少し早く出てきて頂けると助かったんだがね…」

綱手は、ナルトの記憶を見た時に六道仙人も見ている。

そして、この人物から感じる巨大な存在感。

だから確信していた。この人物が六道仙人なのだ。

世界を創造したと言われる人物… 彼ならヒナタを助けられると考えた。

とは言え、もう少し早く登場してくれたなら、そもそもこんな事にはならなかったと、皮肉も交えて口にした。

「すまん… ワシがこの世に出てくるには条件があるので… そんな事よりも、今はヒナタをどうにかせねば…」

「治せるのか？」

「ワシには無理じゃな…」

「貴方でもか!？」

綱手は、六道仙人ですら治せないと言う事に絶望を覚える。

「うむ… あの魂喰いの一撃によってヒナタの魂は傷を負ってしまった… 魂の傷は肉体にも影響を与え、いくら回復しようが魂の傷が癒えぬ限り、すぐに肉体の傷も開いてしまう。」

「つまり、魂そのものを癒す必要があるの… ということか？」

ハゴロモの説明を、瞬時に理解する綱手。

「そうじゃ…しかし、魂と言うものは他人がどうにか出来る物では無いのじゃ。」

「だが、貴方なら出来るのでは無いのか？世界を創造したと言われる力を持つ貴方なら…。」

綱手の言葉に、しかし、ハゴロモは首を振る。

「言ったであろう？魂を他人にどうにかする事は出来ぬと…ワシに出来るとすれば、魂の欠損部に、ワシが新たに創造した魂を融合させ補うと言う事じゃが…果たして、それは『日向ヒナタ』と言えるかの？」

「それは…。」

「魂とは、己を己たらしめる根元の物…別の魂と融合してしまえば、それは別人になってしまっじやろう…。」

確かに、六道仙人の言う通りだろう…仮に自分の魂に新たに創造された…それこそ赤ん坊のように無垢な魂が融合したら…それはもう自分ではない…別の人間だ…

「では、もはやヒナタを助ける事は出来ないのか？」

もはや、ヒナタを救う手立ては無いのか…

綱手が悲嘆にくれる中、ハゴロモは言った。

「早とちりするでない…『ワシでは』無理と言ったのじゃ。」

「どういう事だ…何か方法があるのか!？」

ハゴロモの言葉に、詰め寄る綱手。

「なに…この者の身体にはな、二人のヒナタの魂が存在しているのだ。」

「なに!?どういう事だ…。」

「お主も、ナルトの事情は知っておろう？この世界とは違う歴史でナルトに起こったこと…その世界のワシはナルトを過去に送るために九喇嘛と協力して時渡りの術を使った。しかし、もともとあの術は肉体ごと過去に送るもの…魂のみを送る為のものでは無いため、どのような副作用があるかはわからなかった。」

ハゴロモの説明は続く。

「術が発動した時、その場にいたナルトの縁者の魂……つまり『うずまきヒナタ』『うずまきヒマワリ』もまた、ナルトに引きずられるように、この世界にやってきておったのだ……」

そう……ナルトを過去に送るために開いた時空の穴……しかし、本来肉体ごと過去へ送るはずだった時空の穴は、ナルトと九喇嘛の魂を送っても閉じる事なく、その場で死んでいたヒナタとヒマワリの魂を吸い込んでいたのだ。

「ならば、何故ヒナタは記憶をもっていなかった？」

綱手は当然の疑問を口にする。ナルトは前世の記憶を有している。

この世界にまだ誕生していないヒマワリはともかく、すでにいたヒナタは何故記憶を持っていなかったのか……

「うむ。それはのう……ナルトの魂はこっちに來てすぐにこの世界のナルトと融合したのに対して、ヒナタは融合しておらんかったからじゃ。理由はわからぬがな……しかし、それが今回は幸いした。この世界のヒナタと、あの世界のヒナタ……同じ魂である以上、この二つが融合すればヒナタの傷ついた魂は補完され、回復するじやろう……」

「成る程……それで二つの魂がヒナタの中にあるのか……ではすぐに融合をお願いする。」

ハゴロモの説明に納得した綱手は、ヒナタの魂の融合を願うが、

「まあ、待つのはじゃ……今二人の魂は互いに向き合っておる。お互いに意識を持っておる以上、こちらが勝手に融合は出来ぬのでな。」

ハゴロモは、いまヒナタの精神世界で二人のヒナタが向き直っているのを視ていた。

「そうか……」

確かに、いくら自分自身とは言え互いに辿ってきた経緯が違うのだ……勝手に融合などされたくは無いだろう。

「ワシらは、二人のヒナタが結論を出すまで、ヒナタの身体を維持するのが役割じゃ。」

「わかった。」

ハゴロモの言葉……それは自分の得意分野であり存在意義でもある。

先ほどまでの絶望的な状況とは違い、助かる見込みが出来たのだ。
綱手は気合いを入れてヒナタの回復を再開した。

(サスケ：… それにこの場に集った全ての忍たち：… ヒナタが回復するまで：… ナルトの事を頼んだぞ：…)

綱手は、ナルトを止める為に奮闘する忍たちに祈った：…

(ふ：… この私が他人に祈るなんてね：… 長生きはするもんだ：…)
思わず苦笑する綱手。

ほんの少し前：… 火影になる前は誰も信じていなかったのに：…

ナルトに出会って自分もまた変わったのだと、実感した綱手。

「グオオオオオオオ!!!」

気付くと、クシナの封印の鎖がナルトに巻き付いていた。

その鎖を全忍連合がチャクラを送り強化していた。

ナルトを助けようと、皆が声をかける。

皆がナルトに元に戻ることを願っている。

しかし：…

バギイツ：…

無情にも鎖は引きちぎられた：…

皆が諦めかけたその時：… ヒナタの目が動いた：…

ナルトを救う、最も重要な人物が目を覚ましたのだった。

二人のヒナタ

ヒナタはどこか夢を見ている様な… 不思議な気分だった。

自分は今どうなっているのだろう…

上も下も右も左も何もわからない…

自分の感覚すらあやふな状態だった…

ふいに誰かの存在が感じられる。

誰かが、自分に声をかけている…

「…て…して…目を覚まして…」

!?

一気に意識が鮮明になるヒナタ。

「ここは…!?!」

「ようやく目を覚ましたね?」

呆然と呟くヒナタに、先ほど声をかけてきた人物が優しい口調で尋ねた。

その人物を見るヒナタ。しかし、相変わらず周りは闇に閉ざされ、その人物の顔さえわからない。声から察するに女性のようだ。

「はい…えっと…ここはどこですか? 私はどうなったんですか?」

ナルト君は?」

その時、先ほどまで戦争状態であったことを思い出したヒナタは、慌てて自分が置かれている状況を把握しようと、目の前の人物に問い質した。

「慌てないで?ここは、貴方の精神世界よ?まずは、自分の意識を内に…そうすれば私の姿も見えるはず。」

精神世界…それはヒナタにとってそれほど珍しいものではない。

ナルトの尾獣空間やハゴロモとの邂逅…

既に何度か経験しているヒナタは、言われた通り内に意識を向ける。

ここは自分の心の世界…

すると、闇に包まれていた景色が明るくなる。

広く、白い空間…それがヒナタの世界だった。

「貴女は!？」

ふと、目の前の人物に目を向けると、その姿に驚くヒナタ。あまりにも自分にそっくりだった。

いや…今の自分よりも、かなり年上だろうか…

髪は肩程の長さで揃えられ、落ち着いた雰囲気纏っている。

そうだ…自分はこの姿の女性を、見たことがある…

ハゴロモに頼んで見せてもらった、ナルトの前世の記憶…

そこで見た…

「貴女はまさか…」

「そう…私は貴女…いえ…正確に言うならナルト君の前世の世界で、ナルト君と一緒になった『うずまきヒナタ』って言った方が正しいのかな？」

ヒナタの予想を肯定するように、目の前の人物…うずまきヒナタは頷いた。

「やっぱり…でも、なぜ貴女がこの世界にいるの？」

ナルトの記憶では、この世界にやってきているのはナルトと九喇嘛のみのハズである。

他の尾獣たちも記憶を持っているが、アレはあくまでハゴロモが記憶の一部を送っただけで、魂ごとこっちに来たナルトたちとは違う。

しかし、目の前のうずまきヒナタは、その世界から来たのだと言う。

「それは私にもわからないの…私が気が付いた時には、既にこの世界にいたから…あの時…私が死んだあの時から、ここに来るまでの経緯を私は知らないの。」

「そう…」

「それよりも、まずは貴女の質問に答えないといけないね…」

うずまきヒナタはそう言うと、ヒナタの置かれた状況を語りだした。

操られたヒアシに、捕らえられたこと…

黒ゼツによって、自分が魂ごと死にかけているということ。

自分の手を見ると、存在が消えかかっているように、薄くなってきた。

これが魂を傷つけられたと言うことかと、何処か他人事のように考えるヒナタ。

自分が死にかけていると言うのに、恐怖は感じない……
むしろ、感じるのは悔しさ。

前世のナルトが味わった喪失感……

二度とそんな目に遭わせたくない……

その思いで研鑽を続けて来たと言うのに……

結局、また同じ思いをさせてしまった……

ナルトが自分を守ってくれるように、自分がナルトの心を守ると誓ったのに……

悔しさから、思わず下を向くヒナタ。

「貴女の気持ちは良くわかるけど、今の状況はもつと深刻なのよ？」

うずまきヒナタは、ヒナタの気持ちを理解しつつも、更に続ける。

そう……ナルトの今の状況を……

「そんな!？」

その話を聞いたヒナタは、思わず膝を付く。

今のナルトの心境を考えると、涙が止まらなかった。

いや……いつまでも泣いている訳にはいかない。

ヒナタは立ち上がる。

その瞳には強い意思が宿っていた。

「どうするつもりなの？」

うずまきヒナタが声をかける。

「ナルト君の元へ……ナルト君を助けます。」

ヒナタは迷わずに答えた。

「言っただでしょ？今の貴女は魂を傷つけられ、それが原因で死にかけているの……ナルト君を助けるどころか、自分の存在すら危ういんだよ……」

「それでも、なんとかします。私が死ぬと言うのなら、それこそ魂になっても……私と言う存在が消える最後の瞬間まで……私はナルト君を支える為に行動します。」

ヒナタの言葉を聞いたうずまきヒナタは、複雑な表情を浮かべた。

「一つだけ、手がないことも無いわ。」

「え？」

「私と一つになるの。私と貴女は同じ存在… 傷つけられ、損傷した『貴女』の魂に『私』と言う魂を融合して補修するの。そうすれば助かるハズ。」

解決策を聞いたヒナタはにわかに目を輝かす。

「ただし…。」

しかし、うずまきヒナタの話には続きがあった。

「私と貴女は同じ存在ではあるけれど、辿ってきた歴史は違うわ。」

その通りだ。ナルトがこの世界に干渉したことで、この世界はナルトの前史とは大きく異なる歴史を辿っている。

うずまきヒナタは、ずっと木の葉の忍であったし、ナルトと結婚して子供も二人授かっている。

対して自分とは言えば、ナルトと共に木の葉を抜けて新たな里を作った。ナルトとは、恋人ではあるがまだ結婚はしていないし、子供も当然いない。

何よりも、今、ナルトを残して消滅しようとしている。

「私と融合した時、傷付き、弱った魂の貴女がどうなるか… 私にはわからない。私と貴女の記憶を持った新たな私になるのか… それとも完全な魂を持つ私に取り込まれて貴女が消えるのか… それでも貴女は融合を望むの？」

例え、ナルトを助ける事が出来ても、今のヒナタではいられない…

そして、助けたナルトがその後に愛してくれるのも自分ではないかも知れない…

うずまきヒナタの問いに、しかし

ヒナタは、少しも迷いを見せず…

「構いません。」

そう答えた。

その答えを聞いたうずまきヒナタは、またも複雑な表情を浮かべ、「貴女は強いね… 同じ『ヒナタ』のハズなのに… どうしてこうも違うんだらう…。」

そう言った。

「私は、ナルト君を助けたい。その可能性があるなら、どんなことでもする…。そう誓ったの。」

「… 敵わないなあ…。本当に…」

「え？」

うずまきヒナタは泣いていた。

「本当はね…。もつと…。ずっと前に、私の魂はこの世界に来てたの。」

「……………」

「ごめんなさい…。ナルト君がこの世界に来た時、すぐにこの世界のナルト君と融合したように…。その時に融合していれば、こんな危険な事になってはいなかったかも知れない…」

そう言つて、うずまきヒナタは、これまでの事について語りだした。

「私がこの世界に来たのは、多分…。ナルト君や九喇嘛より少し後だったと思う…。私がそれを認識したのは、丁度ナルト君が貴女に自分の境遇を話していた所だった。」

「……………」

うずまきヒナタの話は続く。

「二目見てすぐにわかったよ。ナルト君がどれ程傷ついているか…。どれ程自分を責めているか…。私は直ぐに貴女と融合してナルト君を癒してあげたい…。そう思った…。あの頃の私は、ナルト君を眺める事しか出来ない弱虫だったから…。そして、貴女はナルト君が愛した私ではないから…。そう思っていた…。でも…」

「私の予想を覆して、貴女は一步前に踏み込んだ…。昔の私に出来なかった事を貴女はして見せた…。貴女のお陰でナルト君は立ち直ってくれた…。貴女には感謝してるよ？でも…。それと同時に思ってしまったの…。」

「何故、貴女は前に踏み込めたのだろう…。何故ナルト君を慰めるのが私では無いのだろうか…。何故ナルト君は、貴女を愛したのだろうか…。」

「気が付いたら、私は貴女に…。この世界の自分に嫉妬していた…。」

「私の醜い心が、貴女との融合を拒んでしまった……その結果、またナルト君を苦しめることになってしまった……本当にごめんなさい……」

自分の思いを告げたくずまきヒナタは、最後の謝罪の言葉を口にす
る。

その表情にははつきりと後悔の念が窺えた。

ヒナタはうずまきヒナタの言葉を聞くと、ゆっくりと首を横に振
る。

「謝る必要なんてないよ……貴女は私……私も貴女も同じ『ヒナタ』だ
よ……私が一歩踏み込んだのもナルト君のお陰……貴女と私ではナ
ルト君と心を通わせるのが早かったか遅かったか……ただそれだけ
だよ？」

ヒナタは、うずまきヒナタを慰めるように、優しく語りかける。

「それに、ナルト君が私を求めてくれたのは、貴女がいたからだよ？
ずっとナルト君を見てきたからわかる……ナルト君は、今でも貴女
や……子供たちの事を大切に思ってるって……」

「……………」

「ねえ……もう一人の私……私が消えたら……ナルト君の事をお願い
します。きつと、あの人は悲しむだろうけど……私は幸せでしたって
伝えて？」

ヒナタの言葉に、うずまきヒナタは涙を流しながら、それを否定す
る。

「貴女は消させない……貴女も私だもの……きつと、今なら大丈夫だ
よ……私たちは一つになるの……貴女も私も……ナルト君への思い
は一緒……その思いを中心に融合すれば、決して消えたりなんかしな
い。いえ……貴女は消させない……ナルト君のためにも。」

「そうだね……一緒に助けましょう……ナルト君を……」

「ええ……私たちが救いましょう……ナルト君を……」

二人の思いが重なる。

そして……

ヒナタは立ち上がった……

ヒナタとヒナタ：… 二人の想いと記憶を受け継いだ：… 本当の意味で、この世界のナルトと共にある存在として：… ヒナタは覚醒する。

（ナルト君は必ず助けて見せる：… 見ていて：… 二人とも：… 私と私）
目を開いたヒナタの瞳は、薄青く輝いていた。

想いを力に…

「ヒナタよ…目を覚ましたか。」

立ち上がったヒナタに、ハゴロモが声をかける。

「はい。ハゴロモ様。」

「今の状況は理解しておるな？」

「はい。わかっています。ナルト君は、必ず救ってみせます。」

ハゴロモの目を見て、そう断言するヒナタ。

「その眼?!…そうか…ついに覚醒したか。」

ヒナタの眼を見たハゴロモは、驚き、そして笑みを浮かべた。

ヒナタの眼は薄青く輝いていた…

それは『転生眼』の証…

有史以来、発現できたのは、ハゴロモの弟である大筒木ハムラ一人だった。

前史においては、トネリが発現させているが、この歴史上においては、トネリたちの侵攻ははまだ起こってはいなかった…

「はい。私はハムラの血族。前世では『白眼の姫』なんて呼ばれ方もされました。何よりもあの月で、ハムラ様の意識と会話もしています。彼は、この地上を消してはならないと訴えていました。」

「そうか…ハムラのヤツがお…」

ハゴロモは、弟の名前を懐かしそうに口にする。

「その『転生眼』の使い方はわかっているのか？」

「はい…ハムラ様の転生眼と同じ力かは、わかりませんが、私の転生眼の力は把握しています。そして、その力こそがナルト君を救う切り札になると思います。」

これまででない…自信を持ったヒナタの言葉にハゴロモは一つ頷くと、

「そうか…ではヒナタよ…ナルトの事を頼んだぞ。」

そうやって姿を消した。

もともと、この世界に出てくるのはハゴロモにとっても困難なことだった。

特定の条件を満たした時、初めてこの世界に降臨できる。
そして、その力をヒナタの回復に全て費やしていたのだ。
全ては、ヒナタならばナルトを救えると信じて…

「はい。必ず。」

ハゴロモから思いを託されたヒナタは、しっかりと頷くと、意識を戦場に移す。そこではナルトを救おうと、懸命にナルトの仲間たちが戦っていた…

しかし…

「畜生… 結局俺達にはナルトを救えないのか… 俺達の戦いは… 無駄だったのか…」

ナルトを救うことは叶わず、絶望がその場を支配する。

サスケが諦めの言葉を口にしたその時…

「そんな事無いよ… サスケ君や、皆の戦いは無駄なんかじゃない… 皆が時間を稼いでくれたお陰で、私はこうしてここに立っている。後は… 私が引き受けます！」

ヒナタの透き通った声が、戦場に響いた。

「ヒナタ！目を覚ましたのね？」

サクラが真っ先に声をかける。

「うん。ごめんなさい… サクラさん。でもここからは私がやりま
す。」

「無理だ… いくらお前でも、あのナルトを止めることは出来ない… 折角生き返ったのに無駄死にするだけだ。」

片膝を付いたサスケがヒナタを止める。

「大丈夫… 皆が繋いでくれたこの時間… 決して無駄にはしま
せん。」

しかし、ヒナタはサスケの言葉を真っ向から否定すると、未だ暴走を続けるナルトを見上げる。

(ナルト君… 今助けるからね…)

ヒナタは心の中でそう誓うと、転生眼の力を解放する。

「なっ!?!」

その姿は、九尾チャクラを纏ったナルトの姿に少し似ていた。

転生眼と同じ… 薄青く輝くチャクラの衣を纏ったヒナタ。

「な、なんだ… あの力は…」

初めて見るヒナタの力に驚くサスケ。

「アレはまさか… 我が日向に伝わる伝説の転生眼…」

ヒアシは、日向の当主としてその存在を知っていた。

「皆さん… 力を貸してください。」

その時… ヒナタがその場に集った忍たちに話しかける。

その言葉に、互いの顔を見合わせる忍たち。

「力を貸せと言われても… なあ…」

「ああ… 俺たちのチャクラは、さつきほとんど使い切っちゃまった…」

「今さら、俺たちに来ることなんて…」

困惑する忍たち… いや… その場は既に絶望に包まれていた。

ここに集う忍連合が総力を結集しても、ナルトを止めることは出来なかったのだ。

今さら一人増えた所で、どうなるものでもない…

もはや諦めるしかない… そんな空気に場は包まれていた。

「皆さんに貸して欲しいのはチャクラでも、ましてや状況を覆す忍術でもありません。」

ヒナタは懸命に語りかける。

「なら、何をすれば良いってんだ！」

自暴自棄した忍の一人が怒鳴る。

「心を… ナルト君を助けたいと強く願う想いを…」

「想い？」

「平和を願う皆の祈りを…」

「祈り…」

「皆さんの心を束ね力に変える… それが私の転生眼の力… だからどうか… 力を貸してください。ナルト君を助けるために…」

ヒナタは再度呼び掛ける…

忍たちは、動揺していた。

想いを力に変える… そんなことを言われても、そんな力聞いたこ

とも無い。

今さら足掻いたところで…

ダメ元でも協力すべきでは…

迷う忍たち…

そんな中一人の男が立ち上がった。

「俺はやるぞー！ どうせ、このままなら世界は終わりだ… だったら自分のやれる事をやる。それにナルトには恩がある… アイツは世界の破滅を望むようなヤツじゃないんだ。こんな俺でも、アイツの役に立てるなら本望だ。」

それは、木の葉から光の里に亡命してきた男だった。

ナルトへの憎しみから、一度は里に入ることを断られながらも、家族の絆を信じたナルトに受け入れられた男。

彼はその後、光の里を見て心を入れ換えた。

憎しみの目で見えてきたナルトを、改めて冷静な目を見た時… 自分の視野の狭さを恥じた。

ナルトはナルト… あの時、木の葉で暴れた九尾とは別の存在だと素直に受け入れられた。

その九尾にしても、あの時別の忍によって操られていたことも知った。

上からの情報を鵜呑みにして、何も知らない子供を迫害したことに、心底後悔していた。

だから、この戦争に志願したのだ。

彼はそれほど、戦闘力が高いわけではない。

それでも、出来ることがあると補給係を担当していた。

そんな彼が真っ先に立ち上がった。

自分たちよりも遥かに弱い存在の彼が真っ先に立ち上がったのだ。

他の忍たちも寝ている訳にはいかない。

何よりも、ここに集った忍たちはナルトの生き様を尊敬していた。

いわれの無い迫害を受けて、それでも復讐をするのではなく、救える人達を救い、自分たちが人として、自分らしく生きられる場所を作った。

時にはその力で持って、その存在を誇示してきたが、それは忍であれば当然の事。

それでも、その力を悪用して他里を侵略するような事はしなかった。

その力は、世の安定のため。

そして、それは全て家族を幸せにしたいと言う、ささやかな…しかし人として当然の思いからの行動。

誰もがその思いには共感する。

「ナルト」

「ナルト」

「ナルト」

「ナルト」

「ナルト」

「ナルト」

「ナルト…」

その場の全ての人間が、ナルトに元に戻って欲しいと願った。

その場の全ての人間が、世の中が平和であることを祈った。

その思いが…ヒナタの中に流れ込んでくる。

ヒナタの纏った衣がどんどん大きくなっていった。

今や、その大きさはスサノオに対抗して巨大化したナルトとほぼ同じ大きさだ。

さらに、纏った衣…その背中から大きな翼が広げられる。

その姿は、全てを慈しみ、その愛で包み込む…女神のような神々しき放っていた。

「ありがとうございます。皆…皆の思い…確かに受け取りました。」

ヒナタはナルトを正面から見つめる。

「グルルルルルルルル…」

ナルトは、ヒナタの力が自分に限りなく近い事を本能で察した様子で、迂闊に攻める様なことはせず、唸りをあげて威嚇する。

「ナルト君…待ってて…皆の思いが貴方を救います。」

破滅の魔獣と慈愛の女神が相対した。

世界を越える絆

対峙するナルトとヒナタを…

本来、愛し合う二人…しかし、今やナルトは世界を破滅させようとする魔獣…

そしてヒナタは、そのナルトを止めようとナルトの前に立ち塞がる。

「グルルルルルルル…」

ナルトは臨戦態勢を取った。

(まずはナルト君の動きを止めないと…)

ヒナタはナルトの足を止めようと一歩踏み出す…

「ガアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

より前にナルトが動き出した。

「!?」

一気に詰め寄るナルト。その腕がヒナタを殴り付ける。

「くっ!?」

ヒナタはなんとかその攻撃を防ぐが、ナルトの攻撃は止まらない。

ナルトの纏うチャクラの衣…その尾が腕に変化し全方位からヒナタに迫る。

『八卦掌回天!』

それらを回天を使って弾くヒナタ。

自身が纏うのチャクラの形は翼を持つ女性型…自分の意思の通りに動く…転生眼に開眼したとは言え、もともとは白眼であったその瞳の特性は変わっていない。

当然、自らが修めた技も使えるのだ。

しかし、状況はヒナタにとって不利な展開だった。

そもそも、自分は転生眼に開眼したばかり…

使い方は理解しても、それを使いこなすレベルには達していない。

対して、ナルトは人柱力として研鑽を続けていた。

そして、今は本能のままに動き回る。

なんとかナルトの攻撃を防御することには成功している為、ナルト

の動きに対応は出来ているが、ナルトの動きを止めると言う自分の目的のために動く事が出来ない。

このままでは、遠からず自分の方が先にスタミナ切れを起こしてしまふ……

と、その時ふいにナルトの動きが鈍った。

見ると、ナルトの身体を鎖が縛りつけていた。

「息子の未来の嫁が頑張ってるんだもの……私も母親として負けてられないってばね。」

それは、クシナの封印の鎖。

ヒナタの動きから、ナルトの動きを止めようとしている事を察したクシナは、再び封印の鎖を発動したのだ。

幾ら壊土転生体で無限のチャクラを持っているとは言え、それは自然にチャクラが回復していくだけ……

先ほどありったけのチャクラを使ったクシナは、未だ完全にチャクラが回復した訳ではない。

それでも、ミナトに協力してもらいナルトの足を止められないまでも動きを鈍らせる程の鎖を発現させた。

無理やり術を発動させたのだ……クシナと……クシナをサポートするミナトの身体はあちこちに罅が入っていった。

限界を超えて術を発動した反動が来ているのだろう。

それでも二人の表情には笑顔が見られた。

それはヒナタと言う『希望』を見れたから……

ヒナタを失った絶望により、世界そのものを憎み、破滅の魔獣と化したナルト。

そのナルトには、自分たちの声は届かなかった。

当然だ……自分たちはナルトに親らしいことを何一つすることが出来なかつたのだから……

しかし、自分たちだけでなく仲間や恩師……友人たちの言葉すら届かない……

また、息子を救ってやれない……

二人にとってそれは許しがたい事実……

悔しさに歯噛みし、しかしどうしようもない現実に諦めかけたその時…

息子が愛して止まない、日向ヒナタが立ち上がった。彼女こそ、ナルトを救える唯一の存在だ。

自分たちの行動は無駄ではなかった。

自分たちにとって、日向ヒナタは希望なのだ。

息子を幸せにしてやりたい…

しかし、現実には自分たちは死んでしまっているため手を差し伸べることが出来ない。

激動の前世を過ごし、そんな中で掴み取った幸せ…

そして、この世界で心が折れかけていたナルトを支え、また幸せを与えた…

そのどちらにもヒナタが関わっている。

きっと今のナルトも、ヒナタなら救ってくれる。

ならば、自分たちはそのヒナタのサポートをしよう。

それこそが、今自分たちがここにいる意味だと信じて…

いや… ヒナタを希望とするのはクシナやミナトだけではなかった。

今や、この場にいる全ての人間がそう感じていた。

先ほどと違いクシナの鎖は、ナルトを拘束するだけの力はない…

ならば…

「チャクラを使いきった俺たちにだって…」

「まだ出来ることがある。」

「例え術が使えなくとも…」

「物理的に鎖を引っ張る事くらいなら…」

その場集った忍たちは、まるで綱引きをするかのように、クシナが作った鎖を握り、ナルトを止めようと協力して引っ張った。

(私は一人じゃない… こんなにも大勢の人がナルトは君を助けようと動いてくれる…)

その光景を見たヒナタは涙を流した。

(そうだ… この力は私だけの物じゃないんだもの… 皆の願い

が……祈りが……心が宿った力……)

「だから……絶対に負けない!!!」

ヒナタは一気に間合いを詰めると、ナルトを抱き締めた。

そして……纏った翼を広げる。

「今こそ皆の心の力を……」

その翼は人々のねがいそのものだった。

大きな翼は、破滅の魔獣と化したナルトを抱擁するように包み込む。

「グオオオオオオオ!!!」

翼の包容から逃れようと暴れるナルト。

しかし、鎖の縛りとヒナタによりそれは敵わない。

「おい……見ろ。」

ネジが異変に気付いた。

「ナルトを覆うチャクラが……」

「憎悪に包まれた衣が……」

他の人間も気づき出した。

ヒナタの翼に包まれたナルト……

そのナルトの纏うチャクラの衣が、まるで天に浄化されていくように、ヒナタの翼に宿った一つ一つの願いと一緒に光の粒子となって登っていく……

だんだんと、ナルトの纏うチャクラが小さく薄くなっていった。

それに比例するように、ヒナタの翼も薄く小さくなっていく。

「やったー!」

「これなら。」

「頑張ってヒナタ。」

今までにないナルトの変化に手応えを感じる忍たち……

しかし……

(っ!?!……足りない……)

ヒナタは焦っていた……

(ナルト君を助かるにはほんの少し……あとほんの少しだけ……力が足りない……)

自分の翼に与えられた人々の願い……
その力を持ってナルトの憎しみのチャクラを消していった。
しかし、ナルトを完全に戻すには、翼の力がわずかに足りていない
とヒナタは感じていた。

(どうしたら良いの……)

ヒナタの表情は苦しそうに歪んでいた。

そうしている間にも、自分の翼はどんどん小さくなっている。

ナルトの方も小さくなつて来ているが、このままでは、自分の翼の
方が先に消えてしまうだろう。

(ナルト君はいつも私を助けてくれた……なのにどうして私はいつも
ナルト君を助ける事が出来ないの……)

思い出されるのはこれまでのナルトとの思い出。

しかし、いつだって自分はナルトに助けられる方……

或いは、迷惑をかけてばかり……

前世の最後では、ナルトや娘の命を道連れにしてしまった。

今度こそは…… そう思つて立ち上がったのに、まだ力が足りな
い……

(お願い…… ほんの少し…… 後もう少しだけ…… 私に力を…… 誰でも
いい…… ナルト君を助ける力を……)

ヒナタは、懸命に願った。

自分の願いは翼の力にはなり得ない。

自分は、それを纏めてナルトに流し込む事しか出来ないのだ。

だから、ナルトを思う他の誰かの心が必要だ。

ふいに自分の肩に手を置かれた気がした。

『大丈夫…… 俺が行くつてば……』

「え!？」

それは懐かしい声…… しかし、あり得ない声……

「ボルト……」

その人物の名を…… 思わず呟くヒナタ。

ふいに感じた肩の温もりはもう感じない。

しかし、ヒナタは笑みを浮かべた。

(父さんをよろしくね・・・ボルト・・・)

ヒナタは信じた。例え世界が変わっても・・・自分たち家族の絆は繋がっているのだと・・・

その昔・・・モモシキに連れ去られたナルトを助けに向かったボルトを送り出すときと同じように、自分はボルトを信じる・・・

・
・
・

ここは、ナルトの精神世界。

辺りはまるで廃墟のように荒廃していた。

そこは前史において、ナルトの家があった場所。

そして、ナルトとヒナタ・・・ヒマワリの最後の場所でもあった。

その中でナルトは力なく横たわっていた。

ナルトは憎しみに包まれた後、この中で無限に湧き出る敵(憎しみ)と戦い続けていた。

最初こそ抵抗していたが、敵はどんどん増えていき、やがて押しきれだし、そして倒れるように気を失ったのだ。

ナルトが気を失ったことで、敵は姿を消した。

あくまでもナルトの身体を支配することが敵の目的であった。

当然だ。その敵自体、ナルトの憎しみの感情が作り出した物なのだ。

ナルトの意識を完全に殺してしまえば、憎しみから生まれたその者たちもまた消えてしまう。

だから、ナルトが再び立ち上がるまで、包囲するだけで良かった。

「グルッ!?!」

変化は突然現れた。

憎しみから生まれた彼らが、どんどんと消えていったのだ。

と、その時更なる変化・・・いや乱入者が現れた。

その人物は、初め薄く揺らぎまるでそこにいないかのように気配すら無かった。

しかし、どんどんとその姿は鮮明になっていく。

そして、その人物はナルトに近づくと…

『起きろ！クソ親父!!』

「へぶっ！」

ナルトを思い切り踏みつけた…

瞬く間に覚醒するナルト…

「ボルト… その起こし方は止めろとアレほど…」

言い掛けて止まる…

自分は今なんと言った？

ボルト？そんなハズはない…

ボルトはあの世界に、ただ一人残してきてしまった…

自分はこの世界に来てしまったし、ヒナタもヒマワリも死んでしまった…

恐る恐る見ると、自分が知るボルトよりも大きくなっていた。

顔に大きな傷を持ち、右目に転生眼のような眼を持っていた。

しかし、面影がある…

「ボルト… なのか？」

呆然と呟くナルト。

ボルトはニツと笑う。

「何やってんだってばさ… 父ちゃん。」

「ボルト… 俺は…」

残してしまった負い目からか、目を伏せるナルト。

すると、ボルトが近づきナルトの胸に拳を当てた。

「俺は憎しみになんて負けなかったぜ？父ちゃんは、そんな俺の父ちゃんだろ？しっかりしてくれってばさ…」

「ボルトッ！」

目の前ボルトが幻かどうか… それはナルトにもわからない…
それでも、目の前の息子が愛おしい。

ナルトはボルトを抱き締め涙を流した。

「父ちゃん… 俺たちは憎しみの感情に流されやすい… 人間だから

な… 大事なものを傷つけられたら怒るのも当然だってばさ…」

「ああ…」

「でも俺たちは『忍者』でもある… 堪え忍ぶ者… それが忍者だろ？」

「ああ…」

「俺の父ちゃんは、忍の中でも火影にまで上り詰めた忍の中の忍なんだ。俺を… 皆を失望させんなってばさ…」

「そうだな！」

ボルトの言葉の一つ一つがナルトに活力を与える。

「母ちゃんも、外で父ちゃんを助けようと必死に頑張ってくれてる。」

「ヒナタが!？」

だとすると、ヒナタは生きている…

ナルトは、歓喜した。

「ミナトじいちゃんや、クシナばあちゃんも… それにサスケのおっちゃんたちや仲間の人達も一緒に頑張って頑張ってるんだ。」

「父ちゃんたちも…」

「だから、さっさとこんな所から出なきゃなんねえだろ？」

「ああ… そうだな！」

ナルトは再び立ち上がる。

「父ちゃん… 母ちゃんの力で周りの敵は大分減った… 敵の中心にいる巨大な化け物さえ倒せば、戻れるってばさ。」

ボルトが指し示す先には十尾に似た何か… 巨大な生き物がいた。さっきまで、一人で孤独に戦い続けていたナルト…

しかし今は一人じゃない。

外ではヒナタやミナトたちが…

そしてここにはボルトがいる…

「よし… いっちょ、俺たち親子の力ってやつを…」

ナルトは掌に拳を打ち付ける。

「見せてやるってばよ(さ)！」

二人が同時に動き出す。

それを迎え撃つ敵たち。

しかしナルトとボルトのコンビは、かつてのサスケとナルトのコンビを彷彿させるかのように息があっていた。

ゆっくりと前のめりに倒れていくナルト。

しかし、そのナルトが地面に倒れる前にヒナタがナルトを抱き締めた。

「おかえりなさい…。」

「ただいま…。」

二人の抱擁する姿を見た一同は、戦いの終わりを感じ、爆発するよう雄叫びを上げるのだった。

未来へ

木の葉隠れの里との戦争は、忍連合の勝利で幕を閉じた。

戦争が終結してすぐ、大蛇丸は穢土転生の解除を条件に、自分たちを見逃すよう交渉した。

忍たちも、ほとんど消耗しておりやむ無く五影はこれを了承した。

解除の間際、ナルトはミナトとクシナの二人に近付き、

「父ちゃん…母ちゃん…俺を助けるために力を尽くしてくれてありがとうがとな…」

照れ臭そうに、そう言ったナルト。

二人は、自分たちを『親』と言ってくれたナルトの言葉に涙を流しながら、自分たちがナルトを助ける力になれたことを実感し、ヒナタにナルトを託すと静かにあの世へと帰っていった。

”いつまでもナルトを見守っている”と言葉を残して…

その後、ヒナタから、今のヒナタが前世のヒナタの魂と融合したことを説明されたナルトは、泣きながらヒナタを抱き締めると、守れなかったことを何度も謝った。

ヒナタも、ナルトは悪くないとナルトが落ち着くまでずっと、ナルトを宥め続けるのだった。

・
・
・

一月後…

カカシを中心に、木の葉への帰還を希望する者たちが、光の里の門に集結していた。

「本当に行くのか？カカシ先生…このままこの里に残ってくれても良いんだってばよ？」

ナルトは、居候な身分を気にしているのではないかと考え、カカシにそう言ったが、

「いや…俺は別にこの里に迷惑をかけたくないからとか、そんな理

由で帰るわけじゃないんだ。」

「え？」

「今や木の葉隠れの里は、俺たちの様に……あの時、他の里に亡命した人間達を除いて全滅した……」

「……………」

黒ゼツの策謀……それにより木の葉に残った人間たちは、その魂ごと魔像への生け贄となった。

ナルト自身は、木の葉に残った者達に思い入れは無い……

彼らは、最後まで上の人間による情報操作の結果である『ナルトⅡ化け物』を信じ、ナルトを憎み続けてきた者達だ。

もちろん、中には何も知らないだろう、その者たちの子供もいるが、親が悪く言う者に好感が持てるはずも無い。

いずれ敵になる可能性を考えれば、この結果はナルトにとってはそれほど悲嘆すべき事ではなかった。

とは言え、一つの里の人間が全滅した……

そして、それはカカシを始め、自分の仲間たちの故郷であり、自分にとっては生まれた場所でもある。

見限り、里を抜けたナルトではあったが、木の葉と言う故郷を思えば、複雑な心境だった。

「お前にとって木の葉は、あまり良い思い出は無いんだろうな。」

カカシの話は続く。

「……………」

「だが、それでも俺にとっては、木の葉は大事な場所なんだ。父さんやリンが命を懸けて守り、オビトが俺に託してくれたな……その里が消滅の危機にあつて、じつとしてる訳にはいかないんだ。」

「そっか……」

カカシの話を聞いたナルトは笑ってカカシに頷いた。

「お前には感謝してるよ。お前が俺たちを受け入れてくれたから、俺たちは生き延びることができた。木の葉の里をやり直す機会を得られたんだ。」

「お互い様だつてばよ。この間の戦争では、木の葉の亡命者たちにも

助けられた。何より憎しみに囚われた俺を呼び覚ますのに協力してくれたんだしな。」

「ふっ… そうかも知れないな… だが、俺はお前に感謝してるよ…。」

「気持ちを受け取って置くってばよ。」

二人は握手を交わした。

次にネジがナルトの元を訪れる。

「ナルト… 俺も木の葉に戻ろうと思う。」

「なんでだ？」

「俺はお前との約束を忘れてはいない。火影になって木の葉を変え… 幸い過去の風習に囚われた者たちは、先の戦いで皆消えた。なからは俺が火影になり、新しい木の葉を作る。」

ネジは、ナルトの目をしっかりと見ながら断言した。

「… ヒアシさんやハナビは、こっちに残るんだぞ？」

ヒアシは、そのまま光の里に残る事を決めていた。当然ハナビも残る。

「構わない。これは俺の誇りの問題だからな。」

「そうか… じゃ、期待してるってばよ。」

ナルトはニカツと笑うとネジと拳を合わせた。

「ネジよ… 私からも言うことがある。」

その時、ヒアシが前に進み出る。

ヒアシはネジの額に手を当て、話す。

「もはや、我らに分家も宗家も無い。お前は木の葉の日向として、皆を引っ張り支えてくれ。」

「ヒアシ様…。」

「叔父さんで良い。お前に呪印はもはや必要あるまい。」

ヒアシはそう言うと、ネジの額に刻まれた呪印を消した。

「ネジ… お前が火影になれることを祈っている。」

「はい。」

ヒアシの激励にネジはしっかりと頷いた。

サスケは光の里に残ることを希望した。

敬愛する兄がいるのだ…是非もない…

サスケが残るのなら、当然サクラも残る事になる。

他にも、犬塚家や奈良家、山中家や秋道家のような旧家を中心に、木の葉へ戻ることを決めた者達…

しかし、そこにヒルゼンはいなかった。

「良いのか？じいちゃん。」

ナルトは見送る側のヒルゼンに声をかける。

「何がじゃ？」

「カカシ先生の言ったことは、むしろじいちゃんの方が当て嵌まるんじゃないか？歴代の火影の中でも、最も長く火影として里を治めて来たんだ。それこそ、身を削る思いで、里のために頑張って来たんだろ？木の葉への想いは、一番強いと思うんだけど…」

ナルトの言葉にヒルゼンは頷きながら、

「良いんじゃないよ…確かにお主の言う通り…木の葉への想いは強い…じゃが…ワシは、ダンゾウのやり方を一部肯定してきた者じゃ…先代たちも含め、これまでの木の葉は、仲間の為に命を懸けられる素晴らしい者たちの集まりではあったが、その癖、里の為、何も知らぬ赤子に罪を背負わせることを良しとしてきた…」

「ワシらのように、旧き悪しき風習に慣れた者達はこれからの新しき木の葉には必要無い。これからはお主らのように若い者たちの力こそが重要なんじゃない…この里に来て…その在り方を見てそう思ったんじゃない…」

「…でも、木の葉丸も行っちゃまうんだぞ？」

そう、ヒルゼンの孫である木の葉丸もまた、木の葉への帰還のメンバーに入っていた。

「何…木の葉丸ももう一人前の忍じゃ…あやつが自分で決めた事に口出しする気は無い。気掛かりだった大蛇丸の事も自来也に託したし、余生はここで静かに暮らすとするわい。」

「…わかった…じいちゃんがそう言うなら、俺はもう何も言わないうてばよ。」

ナルトは笑いながら頷いた。

二人のやり取りを見ていた綱手は、カカシに近づくと、

「三代目はああ言ったが、いきなり全てを若いヤツラに任せる程薄情でも無い。当面は私と自来也が暫定の代表をやってやるさ。火の国の大名連中も文句は言わんだろう。ただし… 私たちはあくまでも『当面』の代表だ。新しい木の葉の里… その火影にはカカシ… お前がなるんだ。」

そう言ってカカシの肩をたたく。

「… わかっています。」

カカシは、少し引きながらも頷いた。

「よし、期限は一年… みっちりしごいてやるから、覚悟しな？」

「ハハハ… お手柔らかにお願いします…。」

良い笑顔でカカシに笑いかける綱手に、今度こそ冷や汗をかくカカシだった。

「さて、そろそろ行くかね。」

「そうですね。」

綱手の言葉に同意するカカシ。

しかし、綱手は予想外の言葉を口にする。

「何を言ってる… お前が号令をかけるんだよ。」

「は？」

「この帰還者の集まりはお前を中心に始まったんだろ？なら号令もお前が掛けるんだ。まあ、未来の予行演習だとも思えば良い。」

「うっ… わかりました。」

覚悟を決めたカカシは、集まった者達に向かい合う。

「皆… 俺の呼び掛けによく集まってくれた。これから、俺たちは木の葉に戻る… せっかく慣れたこの里を出て、敢えて苦難の道を進む事になるが… 俺は故郷を放っておく事は出来ない。家族が… 仲間達が命を懸けて守ってきたあの場所を… もう一度作り直したいんだ。だから力を貸して欲しい。」

「」「」「おおおおおおおおおおおおお」「」「」

カカシの言葉に歓声が起きる。

「では、出発する。」

そうしてカカシたちは木の葉へと戻っていった。

「寂しくなるね…。」

ヒナタがナルトの隣に立って声をかけた。

「そんな事ないさ… 皆それぞれの道を歩み始めた… でも、それは決して二度と会えないって事じゃ無い。なにせ、前世で死んだ俺たちがこうして再会できた… あの世界のボルトは、世界を越えて俺たちを助けに来てくれた… それを思えば、同じ世界の皆に会いに行くのなんて、簡単だつてばよ。」

ナルトはヒナタの肩を抱くと、自分の方に抱き寄せる。

「ふふ… そうだね。それに、寂しがってる暇なんて無いか… 早くヒマワリやボルトを産んであげなきゃいけないし…。」

「そうだな… 懸案だった黒ゼツやカグヤの件は片付いた。トネリの方は、ヒナタが正式に転生眼を継いだ事でなんとかなると思う。モモシキ達の件は、弱点さえ知ってればそれほど苦戦する相手じゃない。だから…。」

「だから？」

ヒナタはナルトの言葉を待つ。

「結婚しよう。ヒナタ。」

「はい。」

ヒナタは幸せそうに頷いた。

逆行したナルトの物語 完

十数年後…

新生木の葉隠れの里は、予定通りカカシが火影となり、目覚ましい発展を遂げた。

その背景には、光の里で開発された科学忍具が大きく貢献していた。

現在は、すでにカカシは引退し、日向ネジがナルトとの約束を果たし二代目火影として新生した木の葉を率いている。

ネジは同じ班のテンテンと結婚した。

ちなみに、その結婚式に出席したナルトは、号泣していた。

その理由が、前世で死んでしまい結婚することが出来なかったネジの幸せな姿を見た為か、はたまた前世で唯一…同期の中で独り身だったテンテンの晴れ姿に涙した為か…

それはナルトの中の秘密である。

他の里との友好関係も続いており、砂を除き影の世代交代があった他の里でも、それは変わらない。

光の里では、未だナルトが長をやっている。

ナルトは、前世と同じように二人の子宝に恵まれた。

かつての木の葉のように、発展著しい光の里もまた、繁栄とともにナルトの仕事量は加速度的に増えていったが、家族優先のナルトは、次代を育てると言う名目のもと、自分の仕事を次代の里長候補に割り振ることで、かつての過ちを回避していた。

子供や妻…そして自分の誕生日には必ず帰るし、家族サービスの為に仕事を休むこともしばしば見られた。

そして、今日は家族でピクニックに出掛けていた。

「ほら、ボルト早く準備しないと…置いてくよっ…」
「待ってくれよ。ヒマワリ姉ちゃん…」

あの後、ヒナタと、結婚したナルト。

しかし、最初に生まれたのは女の子だった。

その時、ボルトが生まれてくるものと思ひ込んでいたナルトとヒナ

夕は、大いに焦った。

もう、この世界でボルトに会うことは出来ないのではないか…そう考えた二人だったが、悲しむ二人にハゴロモが無理して現れて、説明してくれた。

前世のヒマワリの魂は、ヒナタの中で眠っていた…

その魂の影響を受け、先にヒマワリが生まれたのだと。

物心着く頃には、ヒマワリも前世の記憶を取り戻した。

この世界のこと…前世のこと…そしてボルトのこと…

ナルトとヒナタは、ヒマワリに全てを話した。

お兄ちゃん子だったヒマワリは、二度とボルトに会えない事を悲しんだ。

しかし、ボルトが憎しみにも負けず、前世の世界を生き抜き、それどころか、世界を越えてナルトとヒナタの危機を救ったと聞き、悲しそうにしながらも、どこか誇らしげに、ボルトを応援することにした。そして、数年後…ナルトとヒナタの間に二人目の子供が生まれる。

今度は男の子だった。

三人はこの子がボルトであると確信した。

その後、ヒマワリは弟のボルトをとても可愛がった。

前世で、自分をとても大切にしてくれたいたボルト。

自分の為にナルトに怒ってくれたこともあった。

ならば、今度は自分がこの弟を守る。

ヒマワリは使命感に燃えていた。

そして現在…

目的地の野原に到着したナルト一家。

「うわぁ。キレイ。お母さん、ボルト早く行こう。」

辺り一面花で咲き乱れた野原に感動したヒマワリは、荷物を下ろしているナルトを尻目に、ヒナタとボルトを伴って駆け出した。

その様子を苦笑して、見送るナルト。

しかし、内心は幸せで一杯だった。

家族が、笑顔で過ごしていける…

それこそ、ナルトが求めた世界だからだ。

「なあ… 九喇嘛。」

ふいにナルトは九喇嘛に話しかけた。

『なんだ』

「ありがとな… 俺をこの世界に連れてきてくれて…」

『へっ… なんだ… 藪から棒に…』

「正直、初めはこの世界に連れてこられた事を恨んでた… なんてあのまま死なせてくれなかったのかってな…」

『……………』

「でも、この世界のヒナタに励まされて… 新しい目標も出来た… あの世界では救えなかった人達を救うことも出来た… 逆に犠牲になっちまった人達もいたけれど… 今はこうしてまた… 家族を得る事が出来た… 俺は今幸せだと実感してるんだってばよ… それも、お前があの時、俺をこの世界に連れてきてくれたおかげだ… だから… ありがとう…」

ナルトは素直な気持ちで口にする。

『止める止める。気色悪い… ワシはただあんな結末に納得がいかなかったただけだ。』

しかし九喇嘛は、照れ隠しからか憎まれ口を叩いて、それを制した。

「それでも… ありがとう…」

『けっ…』

尚も礼を告げるナルトに、九喇嘛はそう言って寝てしまった。

苦笑するナルト。

爽やかな風が吹き抜ける。

自分の目の前では、ヒナタ、ヒマワリ、ボルトの三人が楽しそうに遊んでいる。

その姿を眺めながら、ナルトはあの世界のボルトに想いを馳せる。

あの戦いの後、ボルトがこの世界に姿を表す事は無かった。

「アイツは今も、あの世界で戦い続けているのかな…」

ナルトは独り言のように呟いた。

「なあ… ボルト… お前の事だ… どんなに苦しい状況でも歯を食

いしばって、耐えてるのかも知れねえな…。」

「でも、何でかな… 心配はしてねえんだってばよ…。あの時… お前に助けられたとき… お前の強さを実感したからかな…。」

「お前は、俺なんかよりずっと強い…。だから安心してられるんだ…。」

「そう言やあ、いつだったか…。サスケのヤツが言ってたっけな…。お前は俺やサスケを超える存在になるって。俺の息子を自分が鍛えるんだからなって…。自信満々に言ってるやがったっけ…。」

「ボルト…。俺はこの世界で、生きて行く。母さんやヒマワリ…。それにこの世界のボルトと手を携えて…。」

「だから、お前はそっちで頑張れ。例え世界が変わっても…。父ちゃんはお前の幸せをいつまでも願ってるからな。」

ナルトは最後にそう言うと、天に拳を突き出した。

遠い…。かの世界で…。ボルトが拳を合わせてくれる…。そんな気がした。

(父ちゃん…。俺は頑張ってるってばさ…)

「!?」

ふと、声が聞こえた。

ナルトの拳に何かが触れた気がした…。

しかし、誰もいない…。

だが、ナルトは笑みを浮かべた。

きつとボルトに届いている…。そう感じた。

「お父さん…。いつまで荷解きしてるの…。お父さんも早く来てよ。」

「父ちゃん…。早く来てくれってばさ。」

「あなた…。子供達が待ってるよ?」

三人の言葉を聞いたナルトは、急いで作業を終わらせると、

「ああ…。今、行くってばよ!」

笑顔で愛する家族の元へと向かうのだった。

完